山田孝雄著

日本文法學概論

株式會社 寶文館

本書は余が東北帝國大學に職を奉じたりし際に講述せしものの草案に多少の修訂を加へたるものなり。この著の目的は余が現に抱懷する日本文法の學理の概括をなすにあり。されば舊著日本文法論等に既に論ぜしものにして再び詳論するを要せずと感じたるものはその要をとりたるのみにて詳論せざるものもあり。然れども事の順序として說かざるを得ざるものは重複せる所も存す。而して舊著に於いて未だ論及せざりし點、及び說きて詳かならざりし點、並びに多少なりとも改むべき點等はすべてこの論に於いて稍委しく論じたり。それらの點につきて一二をいはゞ形容詞に就きて複語尾につきて、助詞「は」につきて、位格ことに主格述格につき

て、及び汎く句論に於いては頗る改め加へたる所あり、而して、語の排列の原理及び最後の省略の條につきては特に注意を請ふべき點少からずとす。

昭和十一年三月二十九日

山田孝雄

日本文法學概論目次

第一章　文法學とは何か……一
第二章　文法學の研究の對象と文法學の部門……一八
第三章　一の語とは何ぞや……二六
第四章　語の性質の研究の態度……四六
第五章　語の類別……七六
第六章　體言概說……九七
第七章　名詞……一〇六
第八章　代名詞……一一九
第九章　數詞……一三六
第十章　用言概說……一四三
第十一章　形容詞……二〇七

第十二章　動　詞……二三四
第十三章　存在詞……二七〇
第十四章　複語尾……二九一
第十五章　複語尾各説……三一六
第十六章　副　詞……三六七
第十七章　助詞概説……三九四
第十八章　格助詞……四〇五
第十九章　副助詞……四三八
第二十章　係助詞……四七二
第二十一章　終助詞……五〇八
第二十二章　間投助詞……五一七
第二十三章　接續助詞……五三一
第二十四章　語の運用の研究序説……五四六
第二十五章　語の轉成……五五三

第二十六章　接辭……五七一
第二十七章　合成語……五九三
第二十八章　合體語……六二六
第二十九章　語の轉用……六三四
第三十章　語の位格概說……六六三
第三十一章　呼格……六七一
第三十二章　述格……六七七
第三十三章　主格……六八八
第三十四章　賓格……六九八
第三十五章　補格……七二七
第三十六章　客語と受身使役……七四三
第三十七章　連體格……七五三
第三十八章　修飾格……七七三
第三十九章　體言の用法……七九七

第四十章　用言の用法……八一七
第四十一章　副詞の用法……八八六
第四十二章　句論の序說……八八七
第四十三章　句……九〇七
第四十四章　句の類別……九二四
第四十五章　喚體の句……九三六
第四十六章　述體の句……九六三
第四十七章　喚體の句と述體の句との交涉……九八三
第四十八章　句の複雜なる構成……九九五
第四十九章　句中に於ける語の排列……一〇一九
第五十章　句の運用序說……一〇五〇
第五十一章　單文……一〇五五
第五十二章　複文序說……一〇六〇
第五十三章　重文……一〇六九

第五十四章　合　文……………………一〇八〇
第五十五章　有屬文……………………一〇八九
第五十六章　引用の語句………………一〇九九
第五十七章　複雑なる文と文法學の極限……一一〇五
第五十八章　未開展の句と略體の文……一一一五

日本文法學概論

山田孝雄著

第一章　文法學とは何か

言語は人が思想を發表し、他に傳ふる方法として、その思想を聲音にてあらはしたるものなり。されば、言語の內容は思想にして、言語の外相は聲音なりといふを得べく、思想も聲音も言語にとりて必要缺くべからざる條件にして、思想を離れては言語なく、聲音を外にして言語なきこと勿論なれど、思想か聲音かの一方のみにては言語といふことを得ず。されば、思想卽ち言語にあらざると共に聲音卽ち言語にもあらざるなり。思想と聲音との相待ちて生じたるもの卽ち言語にして、それらを分解して思想のみをとり、聲音のみをとらば、これ既に言語そのものにはあらざるなり。

言語は人間の思想をあらはしたるものといふことはなほ少しく說明を要す。言語は元來思想の發表交換の要具にして、その思想といふ方面よりいへば、その言語の主たる個人の思想を發表したりといふには相違なきことなれど、その思想を寓せられてある言語は個人の勝手の產物にあらず。即ちその言語の主たる人が共同生活を營める民族の間に行はれてある言語を用ゐてはじめて思想交換の目的を達しうべきものなり。かくの如く言語は社會內に發達したるものなることは小兒が言語を覺ゆる事實を見ても、又國語が民族により異なる事實を見ても知らるべし。即ち言語は個人的のものにあらずして一種の社會的現象なりといふことを先づ認めざるべからず。

次に言語には合理的の部分ももとより存すれども、不合理の部分もまた少からず存することを知らざるべからず。たとへば「ウサギウマ」(驢馬)といふ如き語、「赤い白墨」といふ如き語の行はれて、いふ者もきく者も之を怪まざるもの多々存す。これらを見れば、言語は論理的哲學的にあらざる部分の少からざるを見る。かくの如き非論理的の言語の存する所以は一面は、それが社會的所產にして個人の意見にて任意に變更し得ざる點にも存すといふべきが、言語が時間性を帶ぶることによりてこれらの矛盾非論理的事實の存在する所以を理解しうべし。言語が時間

性を帶ぶる所以は種々の事情によりてこれを明かにしうべし。先づ言語の內容をなす所の思想といふものはその進展の過程が時間的のものなるを見る時に、その思想を發表したる言語が、時間的のものなることを考ふべし。次には言語の外相をなす聲音も亦時間的繼續を本質とするものにしてこれを受けて生ずる聽覺も亦時間的なるものなり。かく言語そのものゝ內容外相共に時間的なるが、それと共に、その言語といふものが世に存するは、その言語が或る人がこれを使用する前に既に社會的に成立してありてそれを後の人がこれを使用すといふことによりてはじめて言語たる實をあらはすものなれば、この點に於いても著しく時間性のものなりといふこと明かなり。或はこゝに新にある言語を用ゐはじめたる時にはそれには過去といふものなければ、時間的のものにあらざるが如しといへども、しかも一旦これを使用しはじめたる後に、これが眞に言語としての生命を有するはその後に於いて使用せらるゝが爲なり。こゝに於いても時間的の性質を離るゝものにあらず。而してこの場合にはその言語が社會的のものといふ性質をあらはすものなるが、こゝに言語の有する時間的性質と社會的性質とは相表裏するものたることを考ふべし。

かくの如く言語が有する時間的性質と社會的性質とが相待つて、こゝに言語の

變遷發達を促す原因となるなり。從來は言語をば論理學的哲學的に取扱はむとしたる學者なきにあらず、又自然科學的に取扱はむとしたる學者もありき。これは言語の內容たる思想の方面のみを見れば、論理學的哲學的に取扱ふべき點も存すべきは否定すべからぬ事なり。又言語の外相たる聲音の方面のみを見れば、自然科學的に取扱ふべき點も存すべきは否定すべからずといへども、それは言語の本體そのものにつきての事にあらずして思想又は聲音の一面に拘泥するものなれば論理的哲學的若くは自然科學的にのみこれを說かむとするは謬見なること明かなりとす。

言語は實に社會の所產にしてその發達變遷の跡を見れば、實に歷史的なること明かなり。卽ち社會的の性と時間的の性との間に變遷を起す原因を有する歷史的の產物なりといふべきものなるが、ことに文化を有する民族の言語はその文化の史的發展と深き關係を保ちつゝ變遷し來れるものたりと認めらるゝものなりとす。

さて言語といふものは思想が聲音といふ外相をかりて發表せられたるものなる點に於いては世界中その趣を一にすといへども、もとこれ社會的歷史的の產物なるが故に、各國必ずしも揆を一にせず。言語がかく多樣になれる理由は一々あ

ぐるを得べきにあらざるべしといへども、しかもその原因は言語そのものゝ本質に存すといふべし。先づ、言語の外相たる聲音は如何といふに、これは種族的に又地方的に發聲機關の操縱の慣習を異にすることあるが爲に、その慣習の相違に相應じて各特色ある聲音とその組織體とを有することゝなり、從つてその聲音を材料として構造せる言語は種族又は地方により特異の外相を呈するに至る。又言語の內容たる思想に於いても種族によつて往々その概念の構成法又は思想の運用法を異にし、從つてその言語の構造、組織又それらの運用の方法を異にすることあるによりてこれ亦必ずしも一樣ならず。加之、言語は上述の如く社會的歷史的のものなれば、もと同一の言語なりとも、その地方又は社會を異にする時は各特異の經路をとりて發達變遷をなすべきものなれば、相當の年月を經過したる後には各特殊の相を呈するに至るを常とす。かのエスペラントの如き人工的の語にても、常にその統一に努力するにあらずば早晚國々によつて異なる相を呈すべきは睹易き事理なりとす。この故に國民又は民族によつてその用ゐる言語に差異を生ずるに至るなり。言語がかく各國必ずしも一ならざるによつてそれらを區別して名づくる必要生ず。これ日本語、支那語、英語などといふ名目の生ずる所以なり。かくて國語といふ名目起る。國語とは國民が自國の言語を呼ぶ名稱にして

我等は日本語をさして國語といふなり。

言語は聲音を以て外相とするものなれど、聲音は一時的のものにして刹那に消えさり、これを永久的に、はた有形的に保存することと困難なるものとす。この故に聲音又は言語をば特別の符號を以て目に見るべく有形的に記し留むる方法按出せられたり。この目的の爲に供せらるゝ特別の符號を文字といふ。然るにここに今や蓄音器の發明ありてその聲音を保存することを得るに至りたれば、文字の必要なきかといふに然らず。蓄音器と文字との間には著しき性質の相違ありて決してこれを同一視すること能はざるものなり。蓄音器は要するに音響といふ自然現象の復現をなすものにして從つて聲音の保存をなしうべしといへども、これを以て思想を交換する要具とすることは事實上不可能なるのみならず、假にこれを以て思想を交換しうべしといふとも極めて迂遠なるものなりとす。文字の特色は第一は視覺的なる點にあり。かくて、ある場合には聲音よりも迅速に思想を傳達しうべく、又聲音よりも確實に、これを通達しうべく、しかも永久的のものなりとす。即ち文字は言語の視覺的記號にして思想の發表交換の要具たる點に於いて聲音以外に別に一の領域を有するものなり。この文字といふものは苟も文化の存する國には必ず存在する現象となれり。

文字には言語そのものを直接に代表する性質のものと言語の外相たる聲音を代表する性質のものとの二大別あり。甲を義字といひ、乙を音字といふ。而してその音字は西洋の學者によつて最も進歩せる文字と目せらるゝ所のものなり。然るに或る國語に於いてその言語の要素として用ゐらるゝ音韻の數は限定せられてあるものにして、それぞれ大體の型を定めて多少の異同はこのいづれかの型に收めて、これを精密に區別してあらはすことなし。かくてこれらの聲音をうつすに用ゐるものこれ卽ち各國民の用ゐる實用文字なり。元來音字はその約束を精細にせば、聲音の委細を精密に寫し出すこと不可能にはあらねど、かくては極めて繁雜にして實用に適せざるなり。この故に、その國語の音韻組織に照して、大體の型を定めて多少の異同はそのいづれかの型に收めたるものにして、これを精密にあらはしたるものにあらず。これ實用文字の實用文字たる本質に適したる重要なる性質をよく實現したるものなり。かの聲音學者の案出したる表音記號の如きは精細なるには相違なけれども實用に適するものにあらず、又その音字は如何字として製せしものにもあらざるなり。この故に實用文字としての音字は如何に精密なりといふとも、それが、實用文字たる限りその文字は聲音のあらゆる現象を精細にうつし出したるものにあらざるは明かなり。卽ち實用上の文字は音字

たりといふとも聲音の區別變化をありのまゝ委しくあらはすやうにつくられてあるものにあらざることを十分に知らざるべからず。

文字は言語を目に視るべく記したる符號たるものなること上述の如くなるがこれも亦言語の本來の目的卽ち思想の發表、交換の要具たることを離れざるものなれば、社會的歷史的の產物にして、國民又は民族によつて差違を生ずるに至ることあるものなり。それらの差違の起る原因は又その國の言語の性質、聲音の性質の差違、又その國の文化史上の經路等にあるものなるが、これらは言語學文字學の論ずべき所なるが故に今詳論せず。

文字によりて言語を記載せるものを文章といふ。言語、文字が、國により民族によりて差違あるによつてそれらの文字を以て、それらの言語を記載せる文章も亦各國必ずしも一ならず。これによりてそれらを區別して名づくる必要生ず。これ日本文、漢文、英文などいふ名稱の起れる所以なり。かくて又國文といふ名稱起る。國文とは國民が自國の文章を呼ぶ名稱にして、我等は日本文をさして國文といふなり。

言語と文章とは元來同じかるべきものゝ如くに考へらるれども、實地につきて檢すれば必ずしも然らず。抑々言語は聲音を外相とするものなるが、その聲音は

自由に操縦するを得るが故に、放任すれば、容易に變易せらるべき性質ありて、その聲音にてあらはす言語も亦時と共に變遷自在にありうべき性質を有すといふべし。文字はその實際に於いて聲音に嚴密に吻合せぬものなること既にいひたる如きものなれば、それらの文字にて記載したるものは如何に實際の言語に近づかしむべく努力すとも嚴密の意義にては口頭の言語と一致せぬこと少からず。ことに、文字は形ありて一旦成形せる以上は人爲的に改めざる限り、變化を呈することなし。されば、これを要素としたる文章は又固定的にして時と共に變遷することなきものなりとす。こゝに於いて聲音そのものを外相とする口頭のまゝの言語と、文章に用ゐらるゝ言語との二の區別を生ず。この口頭の言語をば口語といひ、文章に用ゐる言語をば文語といふ。

上述の如く口語は時につれて多少變遷しつゝ行くものにしてその變遷は自然的に行はる。然るに文語として一定の形をとれば、そは固定的にして變遷することと能はず。この故に口語と文語とは勢差違を生ずるに至る。一は流體の如く、一は固體の如し。これを全然一致せしむるが如きことは聲音と文字との關係を說く際にいへる如くにして理論上なしうべきものにもあらざると共に、事實上なしうるものにもあらざるなり。世に言文一致といふことを主張する人あれど、嚴密

なる意味にてのそれらの一致は實現しうることにあらざるはいふまでもなし。よし假に極端なる一致が一時實現せらるとしても、そは實は其の瞬時に止まるべきものにして、やがて直ちにその記載法は固定し、一方の口語は流轉し行くべき運命にあるものなり。而してかくの如き極端なる言文の一致は實用的には決して實現せらるべくもあらざるのみならず、又實際實現したるものなし。これ文字そのものゝ性質と聲音そのものゝ性質との根本的の差違に基づくものなりとす。されど、文語と口語との法格の甚しき差違は國民をして國語の操縱の上に困難を感ぜしむる點なきにあらざれば、兩者をなるべく接近せしめむとするは必ずしも不可なるにあらざるのみならず、なし得べくば之を近づかしむるを可とす。されど、これを以て純然たる言文の一致の行はるべきが如くに考ふるは一種の迷妄といふべし。現在行はるゝ口語體の文と稱せらるゝものゝ如きも亦一種の文語にして決して口語そのまゝの書き寫しにはあらざるものなりとす。

言語が社會的歷史的のものなることは既に述べたる所なるが、その變遷發達は徐々に行はれて、或る一時を限りて見れば、殆ど動くことなきさまに見ゆれど、實は生々活動一日も止まぬものといふべし。この變遷も歷史なき野蠻人にありてはそれを討究すること殆ど不可能なるさまに見ゆれど、苟も文化を有する國民にあ

りては、その史的變遷のあとをたどりて以て過去より現在にわたれる經過を知るを得べし。この故に言語を研究するにはその歴史的發達如何といふことも亦忘るべからざる重要事項なりとす。而してその文語なるものは、その國の文化の所産にして、同時にその國文化の寶庫たるものなれば苟も文化を尊重するものにとりては最も貴重すべき資材たりとす。

現今文語と稱せらるゝものゝ實體如何といふにそのさす所殆ど一定せず。或は文語を以て古語の如くに說くものあり。然れども今日の文語はおのづから今の文語にして古代に未だかつてこのまゝの有樣のもの存せざりしなり。又その語法の如きも平安朝時代の文法によるといふ人あれど必らずしも然らず。さて現代の文語と目すべきものは、大體書籍雜誌等に於ける論說の如きもの、又所謂口語體以外の雜錄類又詔勅法令に用ゐらるゝ文章の如きものをさすと知るべし。この現代の文章は鎌倉時代以來變遷し來れる和漢混淆體の文章にして、この現代の文章は一方に於いて、漢籍の訓讀によりて傳へられたる言語及び語法を著しく、加味したるものなりとす。この故に現今の文語にはそれらの要素を有すると共に現代に至りて起れる新現象卽ち近頃の外國譯語の感染と、明治以來の新しき風潮とによりて釀成せられたるものを加味したるものなれば必ずしも古法に則ると

はいふべからざるものなりとす。

現代の口語は如何なるものなるかといふに、これに明かなる答を與ふるは頗る困難なる問題なりとす。卽ちこれを文字通りに考ふれば、その本體はこれなりといふ事の容易にいはれぬものなり。そは何故ぞといふに、我が國には方言の差違頗る著しくして、鹿兒島邊の人と靑森邊の人とが方言を互に用ゐて談話をなさば恐くは意思の交換は行はるまじと思はるゝばかりなり。これは極端なる場合なるが、少くとも東京を中心とする語と京阪を中心とする語との二の大なる區別あるは事實なり。なほその上に九州の大部分及びその他從來交通の不自由なりし地方には文語の法則に一致する如き點も多少殘り存せり。この故に現代の日本人の用ゐてある言語すべてを一々具體的に之を論ぜむとするには甚だ大なる努力を要することにして、しかもそれは、今遽に何人もなしとぐるを得ざる大事件なりとす。

かくの如く多岐に分れたる方言に對して、日本の口語なりと目すべき實體ありや否や。これに對して個々の方言のみ實存するものにして、それら方言の總計以外に國語と名づくべきものなしと論ずるものあり。これらの論者は一を知つて未だ二を知らざるものなり。これらの論者の論法に從ふ時は日本人の個々のみ

ありて、その以外に日本人といふものなしといふ結論に到達すべし。これ恰も野蠻人が、甲の馬乙の馬といふことを知り得て馬といふ概念を有せざるにも似たり。堂々たる文化を有する國の學者にしてかゝる僻論を吐きて得々たるものあるは奇怪なりといふべし。吾人は個々の馬の知識を有すると共に一般的に馬といふ概念を有する如くに、個々の方言の存するを認むると共に日本國語の本體と認むべき共通語といふものゝ概念的に存するを認むることは明かなる事實なり。この共通語は、個々の方言の總和にもあらず、又一の方言にもあらずして、即ち全國共通に行はるべき性質を有していづれの方言にも屬せざる多少概念的性質を帶ぶる語にして、それが教育の普及と文化の發達とによつて生ずべき筈のものなり。今これを共通語といふ。從來かくの如きを標準語といひたれど、標準語といふ語はもと Standard language の譯にして言語を異にする異民族の集合國家に於いて政治的にその國家の議會、法令などに用ゐる標準的の語をさすものにして今いふ如き方言に對しての共通語をさすに用ゐるは不當なりとす。さて上述の如くなれば、現代の口語の共通語としては何處にてか用ゐる語を基として識者が卑俗にあらず、又偏したるものにもあらずと認むるものをとらざるべからざる事なるが、それも亦容易に定め難き大問題なり。されど、大體は東京の中流の教育ある社會

に用ゐる語を標準とすることになれるやうなり。然るに東京語も亦一種の方言なれば、卑俗なる語も少からず、又發音の訛も存す。この故に中流の教育ある社會の語を標準とすといふ事唱へられてあるなり。さればとてこれらがその共通語なりとさしていふ事は甚だ困難なることなり。この故に、先づ教科書書籍雜誌などに人々が相當のものと認めて書けるものゝうちより我等の正しと認めたるものをとるより外に方法なきなり。しかもそれらは實は眞の口語にあらずしてなほ一種の文語たるものなるが、文法の研究對象にはそれらをとることとこれ止むを得ざる點なりとす。

言語その物の本體又は現象につきて一般的に研究する學科を言語學といひ、特殊の國語につきて研究する學科を國語學といひ、二者密接の關係ありといへども、各範圍を異にし一を以て他に代ふること能はざるなり。

言語の研究に關聯して考へらるべきは思想の研究、聲音の研究、文字の研究等にしてこれらの研究と言語の研究との關係を十分に考へおかざるべからず。これらの研究は言語の研究に關聯する所甚だ密接なれど、そは言語の研究その事にはあらずして、それら思想の研究、聲音の研究、文字の研究の外に言語の研究の存すべきはおのづから明らかなりといふべし。言語の研究はかく思想の研究、聲音の研

究、文字の研究と同じものにあらずといへども、その間に密接なる關聯あるを忘るべからず。思想の研究には心理學論理學等あり。又社會學、文化史、思想史の如きものにありては皆言語の思想的方面を闡明する點少からずして言語の研究に相應の援助を與ふるものたるべし。聲音の研究には生理學の一部、物理學の一部聲音學等あり。更に進みては音樂上の學理あり。これらの學問は言語の研究には大なる關係あるものなり。されどこれらの研究は直ちに言語の研究の代理をなすものにあらず。文字の研究は言語の研究の一分派といふを得べきものなれど、又おのづから別なる一科にして言語自體の研究とは別のものなりとす。然れども漢字と假名とを併せ用ゐる本邦にありてこの研究はまた重要なる一科なりといふべし。

國語學は國語全般にわたりて研究するものなれば、その範圍また汎し。第一には音韻の研究あり。これは國語の音韻の要素及びそれらにて言語を構成し、文句を組織する事項の研究にして發音法朗讀法の如きも亦皆これに屬す。次には記載の方法の研究あり。即ち文字及び、文章記載法の研究にして所謂假名遣、送假名句讀法亦これが範圍に屬す。次には個々の語の研究にしてこれは個々の言語の起源變遷發達各語の關係等をも研究する部門なり。次には文法學にしてこれは

語の性質運用等を研究する部門なり。

文法學は如何なる學問なるか。從來往々これを以て文章の誤を正す爲の學問なりと考へたるが如し。もとより文法學を知るときはその知識を應用して文章の誤を正しうべしといへども、こはその直接の目的にあらず。文法學の本質は記述的の學問にして國語の間に存する理法を探究し、之を說明するに止まるものにして、正不正の規範を論じ美醜の標準を論ずるを目的とするものにあらざるなり。凡そ言語は既にもいへる如く歴史的展開をなすものなれば、これを研究するにその史的展開の迹をたどりて研究するをうべし。西洋に起れる言語學は主としてこの史的研究の結果に基づくものにして隨つて言語の研究は史的研究をなせば十分なるものにして文法の研究の如きは學問にはあらずとまで誤解せる學者近頃までわが國には存せしなり。言語の研究に歴史的の研究の必要にしてそれが相當の學問的價値ある事は勿論なれども、しかも歴史的研究が言語の研究の全體にはあらざるなり。たとへば歴史的研究を施す時にはある語或は言語組織のある成分の成長發展をみてこれを明かにすることは得べきなれど、その國語の全體の組織は如何にしても見られぬ筈なり。この國語の全體の組織はその國語をば一時靜止的地位にあるものと見て、その横斷面を見る態度をとりて觀察せずば見

られぬものなり。從來の言語學者が言語の史的研究のみを言語學唯一の研究方法として文法學は學問にあらずとやうに云ひたれど、それは恰も法制史の研究が法の研究の本體にして組織的の法學なるものは學問にあらずといふが如き論なり。世に豈にかゝる不合理の事あらんや。抑もかゝる社會の事相に對する學問にはいつも縱斷的に見る歷史の研究と橫斷面的に見る組織の研究との二方面の存する筈なり。今文法學はこの橫斷的に見る組織の研究たるなり。卽ちこれはある國語につきて靜的に見て同時に關係的に存する言語材料とそれら材料が相關し相依りて組織する體系の研究なりとす。

かゝる見地に立ちて、はじめて文法といふ事も考へ得べきなり。然らば文法とは如何なるものかといふに、これは既にもいへる如く、ある國語の內部の組織といふ事にして、卽ちその國語に同時に共存し且つ一定の體系をつくる所の諸の言語材料の間に存する所の一定の關係及び組織の法則といふことなり。この事實はその內面にはたらく思想ありてこれを操縱するものなれば、これを簡單にいへば、國語を思想に應じて運用する一般的の法則なりといふをうべし。この法則はある一の語につきて存する個別的の慣例をいふにあらずして一般的の概括的法則をさせるものなり。さてその運用の根基はいづれにあるかといふに、これ實に思

想に存す。即ち思想を基として、その思想に適應すべく國語を運用する法則即ち文法たるなり。されど思想の法は直ちに文法とはなるべからず。即ち文法は思想の法その者にあらざるは明白なりといへども思想なくして文法といふものは存すべからざるなり。かくの如く思想を全く離れては文法を講究すること能はざるものなれども、思想は直ちに言語にあらざるが故に思想のみを研究しつくしたりとも文法を研究せりとはいふを得ざるなり。

上述の如き文法を研究する學問即ち文法學たるなり。文法の背景となれる思想には個人心理學的の部分もあり、論理學的の部分もあり、民族心理學的の部分もあり、又社會學的の部分、歴史的の部分もありといふべし。されば、それらの學問が文法學の研究に大なる援助を與ふることもあれど、又文法學がそれらの學問にも援助を與ふることもあるなり。而してこの文法研究といふことが一の獨立學科にして他の思想的學科と密接の關係を有しつゝ、しかもそれらの一部にあらざることは、それらの學科に對して援けつ援けられつの關係にあるを見ても知らるべし。

第二章　文法學の研究の對象と文法學の部門

文法學の研究の直接の對象は言語にあり。こは極めて明白なるが如くにして、しかも往々輕視せられ易し。これを輕視する時は往々文法學をして思想の研究の如きさまを呈せしめ或は一種の論理學の如く或は一種の哲學の如くならしむる弊を生ず。既にもいへる如く、人の言語を用ゐる目的は思想をあらはすにあるは勿論なるが、思想を研究の直接對象とせば、これ即ち思想の學問にして言語の學問にあらざるを如何にせむ。この故に文法學は必ず言語を以て直接の研究材料とし、これを通じてはじめて思想なり聲音なりに觸るゝこともあるべきなり。この故に思想上二に分解せらるべきものにても言語上一ならば、そは一として取扱ふべく、思想上にては一なりとも言語上にて二以上に分たるゝものならば、そは文法上二以上のものとして取扱ふべきものなりとす。くれぐれも言語といふ現象を直接の研究對象とすべきことを常に念頭におくを要す。

次に更に一歩を進めて考ふべきことは文法研究の直接の對象は言語にありといふ、その研究の基礎とすべきは言語の如何なる部分なるかといふことなり。これにつきては普通には單語を以て研究の基礎とすといはるゝがしかも近時は往往文法研究の唯一の具體的單位は文なりと主張せるものありて、これらの論者は世に語といふものは後に文より抽出したるものなりと說くなり。この說は頗る

勢力あるやうになれりと見ゆ。この二様の見解はいづれを正しとすべきか。先づこれを決せざるべからざるなり。今これを論ぜむに、たとへばこゝに「犬」といふ語「川」といふ語ありとせよ。これは通常何人も一の語なりといふに躊躇せざる筈のものなり。然るに、こゝに思ひもよらぬ所に突然犬が目前に突進し來りたりとせば、大抵の人は「犬々」と叫ぶなるべし。「犬」といふ語は一の語たるに相違なけれどこの場合に於いてはたゞの語としてあげたるにあらずして、ある思想を發表する爲に叫びたるものたるは明かなり。而してかゝる場合に叫びたるその「犬」といふ語は一の文たりといふべきなり。或は又盲人が知らずして川に臨み將に陷らむとするを見たる者が突嗟に警告を與へむが爲に「川々」と叫ぶが如きも亦然り。かくの如く同じ「犬」「川」といふ語にしてこれを語なりといふべき場合と文なりと見るべき場合とあるを知る。然らば、この差別は何によりて起るものなるかといふに實にそれらを思想の發表に用ゐる材料として見るか、思想の發表その事として取扱ふかによる區別なるは明かなり。即ち語といふは思想の發表の材料として見ての名目にして、文といふは思想の發表その事としての名目なり。この事を更に語を換へて見れば、思想の發表その事と、その發表に用ゐらるゝ材料との關係を示すものといふべし。即ちこゝに材料なくば、依りて以て思想の發表といふ事を行

ひうべくもあらざるものなると同時に、そのこれを使用するといふことなくば、材料といふ觀念は生ぜざるなり。即ちこれは實は同一物をば、その見地の差異よりして二樣に見たるに止まれるものなり。即ち一方は分解的の見地よりして材料として見たるもの、一方は總合的の見地よりして思想の發表として見たるものなりとす。かくの如くなれば、文としての場合に於いてはその材料たる語の性質個數などいふことは當面の問題となるべきものにあらずして、それが文と認めらるるか否かは、人間の思想の發表がその裏面に目的として存するか否かといふことによりて決定せらる。即ち同じく

犬　川

といふ語が、たゞ「犬」「川」といふ觀念をあらはすものに見られてあるか、若くは之を以てある思想をあらはす目的の爲に用ゐられてあるかによりて一の語とも見られ一の文とも見らる。かく文と見らるゝものには必ず內面に思想の複雜なる作用ありてそれが之を動したる結果なるべきはいふをまたず。さればたゞ

犬々　川々

といふ時も

犬來れり。　この犬はかあいらし。

こゝに川あり。この川は見事なり。

などといふ時もいづれも一の文たりといふを得べし。然るに、一旦こゝにその思想の統合を解きてその材料たるものに注意を向くる時は

犬　川

の如きは各一の語なりと見られ

この　犬　は　かあいらし

の如きは數個の語よりなるものと見らるゝに至る。即ち吾人がそれらを一の語なりと認むるはそれをば思想發表の材料として分解的靜止的に、解剖學的に見たる爲にして、この場合には、その語を以て或る觀念或る概念をあらはすものとして取扱ふものなりとす。語といふ概念と文といふ概念とはかくの如き差別より生じたるものなり。然るに、世には或は、語と文との間に幾つもの段階ありて劃然と區別をなし得ざるものゝ如くにいへるものあり。これは蓋し單語より漸次に發達して文となれりといふことか、若くは文より漸次に分解して單語に到達せりといふことかの二樣のいづれかの見解によれるものなるべきが、これらは言語文章が歷史的に發達し來れりといふことを悪しく心得て、語と文を發達より生じたる區別なりと考へたるものなるべきか。もとより歷史的に見れば、文と語との兩概

念を區別せざりし時代はありしならむ。されど、それとてもこの兩概念をその時代に區別することを知らざりきといふに止まりて、この區別は事實上必ず存したりしことは明かなり。然れども、今若し、前述の如き語と文との差別は段階的の區別によるものなりといふことを固執するものあらむか。これらの論者に第一に問ふべきは單語たる「犬」と一の文たる「犬」との間に如何なる段階ありて、語より文にうつり行き、若くは文より語にうつり行きたるかといふ事なり。かく問はば、誰人も決して滿足に答へ得べからざる筈なり。卽ち上の說の如きは語と文との根本的精神に到達せぬより生じたる迷誤なりといはざるべからず。語と文との相違は決して發展的の段階によりて生じたる差別にあらずして觀察點の差より生じたる區別たるなり。卽ちこれは言語といふ一物の表裏兩面にすぎざるものにして、人間の言語の初發の時より、いつもこの二方面の觀念は與へらるべき性質を有したりしは疑ふべからず。表と裏とが相待的概念として同時に考へらるべきものにして表より漸次に發達して裏を生じ、若くは裏より發展して表を生じたりといふべからぬが如く、語と文との間に發展的の段階などの存すべきものにあらざるなり。

以上に述べたる語と文との關係はやがて文法學に二の大なる部門を分つべき

原因をなすなり。上にもいへる如く人間が言語を用ゐる目的は思想をあらはすにあるは勿論なるが、その思想を發表する材料として語を見たる場合とその材料たる語を用ゐて目的たる思想をあらはす方法を見たる場合との二の區別あるべきなり。即ち一方は分析を主としたる研究にして一方は總合を主としたる研究なり。抑も一切の學問に通じて研究法に分析的研究と總合的研究との二大別あり。分析的研究の主とする所は對象の比較にあり。比較とは多くの物の間に存する一致及び差異を確定する所以なり。總合的研究の主とする所は關係にあり。關係とは多くの物の相依り相保つ狀態なり。分析的研究に於いてはその對象の本性を發揮し得べし。然れども之を以て研究の目的達し了れりとはいふべからず。如何なる對象といふとも分析のみにては未だそれらの關係を明瞭に認識し得ざるなり。こゝに於いて分析の後には總合來らざるべからず。分析のみありて總合なき時はその研究散漫にして之を統一運用する所以を知らざるなり。しかも分析なくしては眞の總合は起らざるなり。總合の前には必ず分析なかるべからず、分析の後には必ず總合なかるべからず。二者相待ちてはじめて研究完しといふべし。文法學にありてはその分析的研究を語の論といひ、その總合的研究を句の論といふ。しかしてその語の論にも句の論にもその內部に於いて亦分析

的總合的の二方法相待ちて存すべきものなりとす。しかるに今語の論を分析的研究を主とするものといひ、句の論を總合的研究を主とするものといへるは、その研究の根本的態度よりいふものなりとす。

語をば思想をあらはす材料として見たる立脚地よりして語そのものをば研究するを語論の態度とす。これは思想をあらはす方法といふことを第二の問題として暫く考へずしてこれを個々の語に切り離して考ふる事を主としてさせるなり。かく語個々につきて研究することが語論の主義なれば、これは分析的研究たること明かなり。されど語の研究の內部にも亦分析的方面と總合的方面とあり。卽ち先づそれら個々の比較をなして、その差異又は一致の點を見て分類を施しなどして本性の研究をすることを基礎的研究とすべきものなるが、それより進んで、更にそれらの語の有する作用卽ち如何なることに用ゐらるべき性質を有するかをも研究せざるべからず。この本性の研究は分析的にして作用の研究は總合的なりとす。されど大局より見て語論は分析的研究たるものなりとす。

語論にて研究せられたる語を材料として如何に思想を發表するかの見地より研究するを句論の態度とす。これは語その者の性質用法といふことは既定の事實として、それより一步進んで人間の思想と語との交涉を研究するものにして大

局より見て總合的の研究なりとす。されど、それにもなほ、その思想をあらはす方法の言語的の單位卽ち句といふものは如何なるものなるかといふ基礎的の研究を施して、その句といふものゝ本性を明かにする分析的の態度をとる方面と、その句が如何樣に用ゐられて思想をあらはすかを研究する總合的の態度をとる方面との二方面なかるべからざるなり。而してこの最後の總合的研究に至りて文法學の最終の地位に到達したるものとす。

第三章　一の語とは何ぞや

語といふ觀念は上の如く思想をあらはす材料として分解を施す方面より生じたるものなるが、その分解の極たるもの卽ち語の單位如何といふことが次の問題として生じ來るべし。實に語の單位といふものは文法研究の一切の基礎となるものなり。これは吾人が一つ一つの語と考ふるものをさすものなるが、その一つ一つの語とは何ぞやといふ問題に對してはこれに答ふることは容易のことにあらず。從來これを單語といひ、それを說明して「箇々の語」などいへるが、かくの如きはたゞ語をかへていへるに止まり、說明とは見るべからず。われらの要求する所はその箇々の語とは何ぞやといふことの說明なり。

語は聲音を外相とするものなれば、一の語といふものも、聲音の一個又は二個以上の結合より成るものと考ふることを得べし。この聲音の一個又は二個以上の結合といふことの嚴密なる說明は聲音學の掌る所以なれば、こゝにいはざることとせむが、今それらに關することとなしにいへば、その聲音の幾つかによりて一の語たることを示すものなるは明白の事なり。されど、その聲音の一個又は二個以上の結合が、一の語と認めらるゝ所は單にそが聲音として、取扱はるゝが爲にあらずして、實に、その內面に或る思想、或る觀念を含めりと考へらるゝによるなり。この故に吾人は聲音のみを考へて、その某々の數の音が、一の語をなすものなりといふ如き說明はなし得ざるなり。たとへば一の音を以てなる語あり。「は」(葉、齒)「め」(芽、目)「ひ」(樋、火)の如きこれなり。二音三音以上甚しきは十音以上もありて一の語たるものあり。例へば、「はな」(花)「ふくろ」(袋)「にはとり」(鷄)「ほかけぶね」(帆掛船)「みやましきみ」(深山樒)「うらじろやうらくつつじ」(木の名)「かぶしきがふしぐわいしや」(株式合資會社)「りうぐうのおとひめのもとゆひのきりはづし」(大葉藻「アマモ」の別名)の如きこれなり。これらを以て考ふるに或る語は若干の音の結合より成るといふを得れど、音の數を以て一の語たるものを說明することは不可能なりと知らる。或は又音の一連續體を以て一の語と認むといふ事をも得る如くなれど、その音の一連續體といふ

ものは何を意味するかを考ふる時にそれらは、もと一の語たることの定まりて後に生じたる結果なれば、これを以てしても一の語といふ事を定義することの不可能なるをさとるべし。

この故に吾人は言語の外相たる音を直接の對象として一の語なりや否やを判定すること能はざるなり。勿論一の語たる上には音の一個、又は數個の連續ありて、他の語との間には音の連續なしなどいふ現象、或は、揚音の存在又はその數などの現象によりて一の語と、二以上の語との限界を示しうることあるべし。されど、これは一の語といふことの定まりての上の事にして、これらを以て一の語といふことを定むる主たる原理とはなすことを得ざるなり。されど我らは現に一の語といふものを認むるなり。この一の語といふものは何ぞといふに、これ思想に源を有することは明からなるが、思想卽ち言語にあらざるが故に、一の語といふものは必ずしも思想のある單位をあらはしたるものともいふを得ざるなり。こゝに於いて吾人の研究は頗る複雜なる岐路に立てりといふべし。

吾人が、一の觀念を一の語にてあらはすこと多きは言ふまでもなき所なるが、事實を顧みれば一の觀念が必ずしも一の語にてあらはされてあらぬなり。たとへば「梅の花」「川の水」などは物としては一の物として明かに一の觀念なれど、吾人の言

語は、各三の語の結合によりこれをあらはせり。かく一の觀念を二三の語によりてあらはすことは國語が抽象的に發達すればするほど多くなるものなるが、かくなるにつれて思想の單位と言語の單位とが、背馳することますます多くなるべきは自然の數にして免るべからず。

かくの如くなれば、語の單位といふものは音の數又は思想の單位といふこととは別のものにして二者の外に言語そのもの丶單位の存するものたるべきは今や疑ふべからざるなり。かく考へて後、吾人ははじめて語の單位とは何ぞやといふ問題に觸る丶を得べし。

今吾人が語の單位を知らむとする前に單位といふ概念を明確になしおくべき必要あり。單位とは分解を施すことを前提としたる觀念にしてその分解の極限の地位をさすものなり。即ち最早分解を施すを得ざる極度に達したるものにして、その上に分解を施す時はその物の本性又は作用を滅却すべき點に來れる終極の地位をさせり。されば語の單位といふものも、その分解の極度に達し、その上に分解を施す時は語としての本性又は作用を滅却するに至るべき地位に在るものといふべきなり。

こ丶に於いて吾人の考ふべきことば、その語としての本性又は作用如何といふ

くことなり。この事を考ふるによりて、吾人はその分解の極限を立つることを得べく、極限立ちてはじめてその單位にまで、分解することを得べきなり。

抑も語の本來の目的は談話文章を組織するにあるものなれば、一の語と稱せらるゝ以上それらの間にはたとひ觀念又は用法上の差異ありとてもそは姑く措いて論ぜず、必ず談話文章を構成する直接の材料としての個體たるものならざるべからず。この場合に於いてそれらの間の觀念の上又は用法の上の差異の存することあるは事實上否定すべからぬものなりとす。しかも、この觀念の上又は用法の上に差異あればこそ、それらが相依りて種々の談話文章を組織しうるなれ。若しすべての語が觀念の上、用法の上に差異なくして同一のものならば、われらは複雜なる思想を自由に發表すること能はざるべく、觀念上の差ある語、用法上の差ある語を多樣に有することによりて種々雜多の思想をば自由に發表しうるものなることを忘るべからず。さてかく觀念上用法上種々雜多に異なれども、それらが談話文章を構成する材料としては同一の水平線上に立ち、對等の位地を保ちつゝ一定の規則により、相互に平衡を保つ要素たるものにあらずば、これを一の語と稱すべからぬなり。卽ちこれを簡單にいはゞ、それらは綜合的にいはゞ談話文章の構成の材料としてそれらが直接に相互に相依り相保つべき關係に立つものにし

てこれを分解的に見れば、その談話文章の構成の第一次の分解によりて生じたる要素たり。而して、それより以上に分解を施しうとしてもその分解の結果生じたるものが、談話文章を構成するに直接に用ゐらるゝものたることを得ざるに至らば、吾人はこれらをば一の語とは認むること能はざるものなりとす。即ち談話文章を構成する第一次的の要素たることを失はざることを以て分解の極限とすべく、その極限に達したるものを以て一の語と認むべきものなり。而して普通に單語と認めらるゝものはいづれもこの地位に到達したるものなり。然れども多くの間には往々この性質の容易に認め難きものも多少存す。この故にそれらにつきては明確なる認識をなしおくべき必要あれば次下にこれを論ぜむ。

思想にては單位たるものなれども、これが語として分解することを得るものなるときにはそは一の語とはいふを得ざるべし。例へば「梅の花」「川の水」といへば各一の物にして思想上各一の觀念なること明なり。されど言語上より見れば、「梅」又は「川」と「の」と「花又は水」との三に各分解せらるべきものなれば「梅の花」「川の水」は各一の物にして、隨つて思想上には一個なれど、言語としてはいづれも三の語の叢りといふべきものなりとす。さてかく語の叢りといふことを考ふるにつけても、一の語といふこととの明かにならぬ以上、語の叢りといふことも亦明かにせられざるべ

きなり。こゝに吾人は立ちかへりて、再び一の語といふものは如何なるものなるかを論ぜざるべからず。

思想上にては二に分解せらるゝものにても、そが言語といふ形に於いて一なる場合にはそは二の語にあらずして一の語たるものなり。例へば「この梅の花は白し」といへる場合の「白し」といふ語には思想上よりいへば、物體の屬性なる光學的の一の觀念と人間の精神の判定を下す作用とを含めり。この屬性の觀念と判定の作用とは心理學上より見ても論理學上より見ても各一の單位なり。而してこれらを言語に分解して明示せるものは、國語にて「白色なりといふ場合、又英語に be white といふ場合などにて知るべし。然るに「白し」といふ場合にては一語にて二者を併せ示せり。而してこの「白し」といふ語は思想上二單位の結合より成れるは明かなれど、これを屬性と判定の作用との二者に分解することは全く不可能にして言語上より見れば一個なりといふべきものなり。この故に「白し」といふ語は思想上、二の別なるものを一にしてあらはしたるものなれど一の語なりといはざるを得ざるものなり。

以上說く所の如くなれば一の語といふには、思想上の單位と言語上の單位とが一致したる場合のものは論を要せざることなれど、その他の場合にては思想が言

語といふものゝ形に拘束せられたる場合に限るものなり。

上來說く所の如く、一の語と稱するものは談話文章の構成材料としては分解の極に達したる單位のものをさすものなるが、それの內部の構成を顧みれば、更に分解を施しうべきもの往々あり。これらの詳細は文法學の直接に關係すべきものにあらねど、又それに關聯して說明を下すべき點もあればそれらの關係を生ずべき點につきて少しく說く所あらむとす。

一の語といふうちにも、その內部の組織を檢すれば、構造の單純なるものあり。複雜なるものあり。「ひと」「うま」「あか」「くろし」「かへる」「見る」「しづか」「ほのか」の如きは吾人はその構造の單純なるものと認め「ひとびと」「うさぎうま」あかぐろし」「かへりみる」「しづしづ」「ほのぼの」の如きは吾人はその構造の單純ならぬものと認む。然るにその構造の單純なると複雜なるとの區別は、如何にして認め、如何にしてこれを說明せむかといふに、その認知說明は一見容易なるが如くにして、實は然らず。たとへば「ひとびと」の如きは「人」といふ語二の重なれるもの「うさぎうま」の如きは「うさぎ」といふ語と「うま」といふ語との合成なるが如く「かへりみる」は「かへり」と「みる」との合成なるが如きはその認知も說明もさまで困難ならぬものゝ如く見ゆれど、「あかぐろし」は「あかし」と「くろし」との合成といふを得ず、「しづしづ」は「しづか」の二つ重なれる

ものゝ「ほのぼの」は「ほのか」の二つ重なれるものといふを得ず。随つてその認知と説明も「ひとびと」乃至「かへりみる」の如くに容易にあらざるなり。こゝに於いて吾人は先づ構造の單純なる語につき、その組立方を一往見ざるべからず。

吾人がその構造の單純なりと考ふる語を更に小さく分ちて考ふるとき、その語の意義の基礎たる部分と認むるものあり。これを語根といふ。「ほのか」の「ほの」の如きこれなり。語根は同様の意義を有する多くの語の共通の基礎となることあり。たとへば上のほの」が「あけぼの」「ほのめく」「ほのか」「ぼのぼの」に共通せる如きこれなり。さて語根といふものは何等かの觀念をあらはせるには相違なけれども、これは文章談話の構成に對して直接の構成要素となるものにあらざれば總合的の見地よりして一の語とは認むべからずして、一の語の內部の成分たるに止まれりと認むべきものなり。即ちこれは一の語を理論上より分析したるものにして、實地上の運用上にはこれが存在を認めざるものなり。即ち理論抽象の結果、その存在を認むるにすぎざるものなり。然れども、その組織の極めて簡單なる語にありてはそれを分解して、語根とその他の部分とに分つこと能はざるものあり。たとへば「ひ」(日)「き」(木)「と」(戸)の如きものこれなり。かくの如き場合にはその語根そのまゝにて一の語をなすと考ふべきものなり。

用ゐる場合の差異につれて語の形態に變化を惹き起す性質の語にありては、その變化せる各の形に於いて變化することなき共通の部分をその語の語幹といふ。たとへば「さかず」「さきたり」「さく」「さけば」といふ如き場合にその花の開く作用をいふ意義は共通なるが、語の上にても「さ」といふ形が共通せり。この共通せる「さ」即ちこれが、語幹なりといふなり。嚴密にいへば、この場合の語幹は「さ」にあらずして次の如く

sak-azu　　sak-itari　　sak-u　　sak-eba

「sak」にあるものの如くなれど、今通俗の見地によりて「さ」にありとせり。語幹はかく變形を起す基礎となる部分をいふものにして語の性質によりては、文法上重要なる役目を演ずることあり。從來多くは語幹をも語根といへり。されど語根は語幹よりも一層根本的のものにして、語幹を更に分解して語根を析出するを得べき筈のものなり。但し、組織の簡單なる語にありては語幹にして同時に語根たることなきにあらず。然れども理論上よりは區別を立てゝ考へざるべからず。

一の語の組織を分解する時、吾人はその語根の外に語根よりも更に意義の稀薄なる副成分を有するを見ることあり。この副成分を接辭といふ。「ほのか」の「か」「ほのめく」の「めく」の如きは接辭の一例なり。接辭は語根に附屬して一の語を構成す

るのみならず、ある語幹又はある語に附屬して、その合體せるものを以て新に一の語を構成することあり。「しづか」「あきらか」の「か」「さやめく」「春めく」の「めく」の如きこれなり。接辭は上の如く、それぞれの意義作用を有するものなれども、そは一の語の内部の成分にして、談話文章の構成の第一次的の要素たるものにあらざるなり。國語の接辭にはその語根語幹等の頭に加へらるゝものと、末に加へらるゝものとの二種あり。その頭に加へらるゝものは「いゆきはばかる」の「い」「たやすし」の「た」「を篠」の「を」「み心」の「み」の如きものにしてこれを接頭辭といふ。その末に加へらるゝものは上にいへる「か」「めく」の外「たかやか」の「やか」「きよげ」の「げ」「うまさ」の「さ」「人らし」の「らし」「へだてがまし」の「がまし」「人めかす」の「めかす」「りこうぶる」の「ぶる」等の如きものにしてこれを接尾辭といふ。(接頭辭、接尾辭を接頭語、接尾語といふこと普通なれど、語の内部の成分なるものを語といふことは紛れ易きが故に辭といふ文字を用ゐて名づけたり。)

以上の語根、語幹、接辭等の概念を明かにして後、吾人ははじめて一の語の組織の單純なるか複雜なるかの區別を明かに認めうべきなり。今吾人はその語の組織が一の語根よりなれるものなるときはこれを單純なる組織の語と認めて、二以上の語根よりなれるものなるときはこれを複雜なる組織の語と認む。この場合に

ありては接辭の有無はその語の單純なると複雜なるとの區別には關係なきものとす。たとへば「ほのか」「ほのめく」の如きは「ほの」といふ語根に「か」「めく」といふ接辭の加はりてなれるものなるが、吾人はなほこれを單純なる組織の語とするものなり。されど「ほのぐらし」「ほの見ゆ」の如きに至りては吾人は「ほの」といふ語根と「くらし」「見ゆ」といふ語との合成よりなるものと認め「ほのぼの」「しづしづ」の如きは語根を二つ重ねたるものと認むるによりていづれも複雜なる組織を有すと認むるなり。

前節にあげたる諸例はその複雜なりと認めたるものにても、これを分解して二の語とすること能はざるものなり。この故に一の語といふものは、これを分解して二の語となすことを得ざるものなりやといふに、必ずしも然らず。吾人が一の語と現に認むるものにして、しかも、之を分解して二三の語に還元するを得べきものあり。たとへば、

ひとびと　　　　ひと＋ひと
うさぎうま　　　うさぎ＋うま
かへりみる　　　かへり＋みる

の如きは一の語なりと考ふれども、なほ同時にその組織は下に示す如きものなりと意識するなり。この分解せられたる場合の「ひと」「うさぎ」「うま」「かへり」「みる」をば

吾人は同時に一の語なりと認むるものなり。しかるにそれと同時に、それらの結合體をも一の語なりと意識す。こゝに於いてこの「ひとびと」「うさぎうま」「かへりみる」は一語なりや二語なりやといふ問題を生ず。惟ふに前述の如く吾人が一の語なりと認むるものを思想操縱上臨時に組み合せて新に一の觀念をあらはすが如き現象は國語にては頻繁に起ることとなるのみならず、又かゝる現象ありてこそ國語の操縱も自在に行はるゝなれ。されば、こゝにこれらの文法上の位置を考慮しおくことは必要なる事なり。

今吾人は「ひとびと」「うさぎうま」「かへりみる」の如きは、その構成組織を顧みるときに二の語より成るを認む。かく認むる理由はそれに對して更に分析を施したる結果の各分子たるものが、本來談話文章の第一次の構成要素として用ゐらるべき性質のものたりといふことに基づくものなり。卽ち分析的の見地より見たる時に一の語といひうべき語二つが合成して一の語の姿と資格とを有せるものなりといふべきは明らかなりとす。然るに一旦總合的の見地よりいへば、文章談話の構成の直接の要素となるものは「ひとびと」「うさぎうま」「かへりみる」といふ成形したる語にして、それを分析したる「ひと」「びと」等の各が、これを用ゐたる談話文章の構成上の單位たりとは認むるを得ざるなり。こゝに於いて吾人が一の語と認むるも

のにつきては二重の見地ありとせざるべからず。即ち分析的見地にのみ專らつく時は

ひと　うさぎ　うま　かへる　みる

の如きものゝみ一の語と見るべきものにして

ひとびと　うさぎうま　かへりみる

の如きは二の語と見ざるべからざるに至る。然るに、その總合的の見地に即して文章談話の構成要素として見るときは

ひとびと　うさぎうま　かへりみる

の如きものも一の語として取扱はざるべからざるものなりとす。かく二樣に見らるゝものをば如何に處置せば文法學上妥當なる解決を得べきか。こゝに於いて一の語と認むるものをば、その組織によりて單純なるものと複雜なるものとの二種に分ちて考ふるを要するに至る。即ち一は分析的の見地よりしてその極に達したるものにしてこれを單語と名づくべし。上の「ひと」「うさぎ」「うま」「かへる」「みる」の如きこれなり。一は分析的の見地よりしては更に幾つかの單語に分解せらるべき組織を有するものなれど、語句の用法上より見れば、それが一の語として取扱はれ、その上の分析を保留せざるべからざるものなり。これを合成語と名づく。

上の「ひとびと」「うさぎうま」「かへりみる」の如きこれなり。これらの合成語は語の用法上より見れば一の語の資格を有し、それが內部の分析を認むべからぬものにして、句論に於いては全く單語と同等の取扱を受くべきものなりとす。

要するに一の語といふべきものには單語及び合成語の二樣ありとす。而して從來は一の語といふべきを單語といひたることあれど、一の語といふべきものは上の如く合成語をも含むものなれば、單語といふことゝ一の語といふことゝは同じ觀念にあらざるを知るべし。而して單語と合成語とは用法上同じく一の語なれど、その內部の組織を分析的に見れば組織の單純なると組織の複雜なるとの差によりて區別ありといふべし。されど、單語の內部の組織を見れば、それにも複雜なる組織をなせるものあれば、それらと合成語との差別も亦考へられざるべからず。その區別の要點はこれを分解したる場合にその各がなほ一の語と認めらるゝか否かにあり。若し、その分解の結果生じたる各が一の語とすることを得ざるものならば、これを單語といふべく、その分解の結果あらはれたる各がなほ一以上の語なりと認めらるゝものなるときは合成語といふを妨げざるなり。

然るにこゝに合成語につきてなほ多少の疑義あり。その一は次の如く、

あかぐろし―(赤＋黑し)

あをがへる—（青十蛙）

同じく一の語なるが、これを分解すれば、一の形容詞の語幹と一の語との二と見るを得べきものあり。これらは單語とすべきかといふことなり。

これにつきては吾人は語幹を一の語の如く取扱ふべきか否かを決定してそれによりてこれを解決するを得べし。語幹の如何なる取扱を文法上受くべきかは單純なる理論上の問題にあらず、その國語の實際に於いての事情によるべきものなるが、わが國語にありては上の「あか」の如き形容詞の語幹は事實上一の語としての取扱を受くることあるは

おもしろの春雨や。

あなおもしろ。

の如き例にて見るべし。而して上の「あか」「あを」の如きは形容詞の語幹にして、實際上かくの如き形は形容詞の語幹のみに限るものなれば、吾人はなほこれを一の語と同等に取扱ふを妥當なりとす。從つて「あかぐろし」「あをがへる」の如きも亦合成語と認めて不都合なきものなりとす。次には又形容詞の語幹二よりなる

ちかぢか　　とほあさ

の如き語が、單語として取扱はるべきか、合成語として取扱はるべきかといふこと

なり。これは上に既に語幹を一の語として取扱ふ以上はなほ合成語と見做すを穩當なりとするはいふまでもなきことなり。

合成語が實用上には一語にしてこれを構成上より見て二語以上より成ると認むるは分析的見地より施したる研究の結果たるものなるはいふをまたず。而してこれらが一語たることは發音上に於いて二の語と異なる取扱をなすことあるにても知らるべきが、それら合成語は往々原單語の音に多少の變形を加ふることあり。たとへば上來示したる例にしていへば

ひとびと
あをがへる
あかぐろし

の如きこれなり。これらの下なる單語は「びと」「がへる」「ぐろし」といふ形を呈すれど、本來はいづれも「ひと」「かへる」「くろし」といふ語なり。即ちこゝに合成語となる爲に音の變形の成れるものにして、そのまゝこれを分離したるままにては原の單語の形にはならざるもの往々存するなり。又

あまがさ
さかだる

の如き語も一種の合成語にして上なる語は元來「あめ」「さけ」なるが、かく合成語をなす爲に音の變形を起したるものなり。それらの音の變形は一の語の構造の內部に行はるゝ現象にして、これによりてそれらが、一の語として成立せることを外相の上に明かにあらはせる一種の表徵と見るべきものなり。即ちこれらによりても合成語は文法上一の語にして二語以上として取扱はるべきものにあらざるを見るべし。若しこれらを文法上二以上の語として取扱ふときは吾人は

「びと」「がへる」「ぐろし」「あま」(雨)「さか」(酒)

といふ如きをも一の語として取扱はざるを得ざるに至らむ。然れどもかくの如きものは談話文章の構成の第一次的の要素即ち直接の材料たるものにはあらねば文法上、一の語として取扱ふを得ざるものたりとす。

又意義上より見れば、二の語の結合より成れりと考へらるゝものにして、しかも外相の上にては融合して一體となり、これを二に分解すること能はざる語あり。たとへば

よかり(よくあり)　あしかり(あしくあり)　さけり(さきあり)　よめり(よみあり)

なり(にあり)　たり(とあり)

の如きこれなり。これらはその源を尋ぬれば、各その下に示す如き二語の複合な

ることは理論上認められれども、若しこれをもとの二語に還元せむとしても、形の上には如何ともすべからぬものなり。即ち形體は一個となりはてて、また分解して二語となすことを得ざるものなり。かくの如きものは文法上通常認めて一語として取扱ふ慣例になりてあり。然るにそれらと同様の成立のものにして、しかも吾人が通常認めて一の語として取扱ふことなきものあり。たとへば

いづれをかしるとおもはむ三輪の山ありとしあるは杉にざりける(ゾアリケル)
(拾遺雑　貫之)

サテハ山門ニ聞ユル僉議者ゴサムナレ(ニコソアルナレ)
(延慶本平家、一本、九十一ウ)

の「ざりける」「ごさんなれ」の如きこれなり。これらは下記の如き多くの語の融合より成立せしものたるには相違なけれど、吾人は之を一の語として取扱ふことなく二語の臨時に合體せるものと認む。而してこれらはその融合の度合如何によりて區別する外に標準も無きものなるが、今假りにかくの如きを融合語といひ他を合體語といひて區別す。この區別はその融合語と名づくるものは形に於いて融合せるのみならず、意義に於いても相合して一の語としての取扱を受くべき民族的認識を生じたるものにして、合體語と名づくるものは二語が合體して形體上分

つべからぬさまを呈することは融合語と同じさまなれど、意義よりいへば、個々別別のものとして認識せられ、たゞ、形體上、二語の形が合一したりといふに止まるものにして一の語としての認識の行はれてはあらぬものと認むるによる。以上の如く同じく二以上の語が相合して分つべからざる、一體の形をなせるに、何故に、一方は一語として取扱ひ、一方は一語として取扱はぬかといふに、これはまさしく、言語が史的に變遷することゝ、文法學が靜止的横斷的態度の研究たることとの交渉によりて生じたる現象の一なり。その故は言語の變遷は漸次にしかもたえず行はるゝものなるに、これを一時期を限りて横斷的に、見れば、多くの現象のうちにはその變遷發達の中間狀態のまゝに觀察の視界に入り來ることとなしとせず。今の「ざりける」「ごさんなれ」の如き卽ちこれなり。これらは形に於いて一體となり居れど、意識の上は二語三語として活躍し一語と認めらるゝことなきものなり。然るに「なり」「たり」「さけり」「あしかり」の如きは形の上に於いても意識の上に於いても一の語として取扱はるゝことになりたれば、これを融合語と名づけて、合體語とは別の取扱をなすに至れるなり。

最後に論ずべきは、上にいへる「梅の花」「川の水」の如き語の叢りなり。これらは既にいへる如く思想上には一のものをさせるものなれど、言語上は各三つの語の集

團にして、合成語とは文法上の取扱を全く異にするものなりとす。これらは思想上一のものなりといへども、語としては一の語としての文法上の資格を有するものにあらねば、語の性質上の研究の範圍に在るものにあらず。然れども實用上にはなほその一團を以て一と見做すを便とすることあるによりて語の用法の研究にありてはこれを度外視することなくしてこれらに注意を加ふること少からず。今これらを名づけて連語といふ。而して句の論に至りてはじめてそれらの一團としての取扱を論ずべきものなりとす。

第四章　語の性質の研究の態度

こゝに吾人は語の性質の研究に着手せむとするにあたりて先づ決定しておくべきはその研究對象なり。一の語として見ゆるものは前章にいへる如く、單語あり、合成語あり、融合語あり、合體語あり。以上の四者共にその性質を明かにせずばあるべからざるは論なきことなるが、これらを同時に研究するときは論點多岐にわたりて、容易に歸結を見出し得ざるに至らむ惧あり。この故にそれらのうち最も基礎的なる單語をとりて、之を研究の發程とすべきなり。而して、從來の文法學者も亦一致して單語をその研究の基點とせるに似たり。然れども何が故に單語

を基點すべきかを論定せず、又その論ずる場合を見るに、單語と稱しながら單語ならぬものをも同じ地平線上のものとして取扱へり。されば、最初に其の對象の範圍を明かにしおくことは、論究の態度、主義を明確にする上に於いても必要なることなりとす。

吾人のこの研究に於いては成形せる單語をその最初の出發點とし、その內部には立ち入るを要せざるものなるが、單語より以上の合成語、はた融合語、合體語をば如何にすべきかゞ、實際上の問題として現はれ來るなり。卽ちこれら合成語、融合語、合體語にまで論及すべきか如何といふことはこの部門に於ける研究の態度と關係あることは明かなり。この研究はその對象の靜止的態度を熟視するにあり。一般に文法の研究はその對象を靜止的に見て取扱ふものなるが、そのうちにもこの基礎的の研究は最も靜的に研究を施すべきを要する根本的部分なれば、合成語又その他の如く、單語を合して成れりといふことの端的に認めらるゝものゝ如きは、姑く問題外におき、その合成の元體たる單語に對して直面する態度をとるを必要とすべきなり。而してそれら單語につきての根本的研究の終りたる後にそれら單語を基として如何に合成語等が組織せらるゝかを論ずる事とせむ方論究上の混雜を防ぐに便なりとす。この故にこの研究に於いて合成語、合體語の取

扱は後に論ずることゝして、單語の性質論の明かにならぬ以上は論及せざることとせり。次に融合語は如何といふに、これも理論上これを分解せばもとより二以上の單語を得べき道理なれど、その形の上にはこれを分解するを得ざるのみならず、意識的にも一なりと認むるを普通とするが故にこれは便宜上單語を論ずるついでにその性質に論及することゝすべし。

單語の性質はそれを大局より見て分類をなすことよりはじまる。その分類の標準として立てたる型は現今にありては多くは

名詞　代名詞　數詞　形容詞　動詞　助動詞　副詞　接續詞　感動詞
助詞

の十種とするものなり。今若し、これらの分類にして當を得たるものならば、吾人は直ちに之を繼承して不可なき道理なり。しかも、學術の研究をなす以上はそのまゝ繼承するにしても、それが道理ありや否やを確めずして盲從することを得ざるなり。今これらの名目を通覽するに助詞を除く外はすべて西洋文典の名目に似たるものなれば、名目のみを見れば、西洋の文法と一致するが如くなれど、實質は頗る相違せり。何が故にかゝる現象の存するかといふに、これらはもと西洋文法の說明に用ゐたる譯語より起れるものにして、それを借り用ゐたるものなるが、內

容はもとより日本語なれば實質は頗る相違せる處あり。こゝに吾人は語の性質の考察に先だちて、これらの型を用ゐて說明することの適當なりや否やを一考するを要す。

わが國語に於ける單語分類の沿革を按ずるに、二の大なる潮流あるを認む。一は本邦の學者の創意に出づるものにして、その著しき學者は富士谷成章、鈴木朗、富樫廣蔭の三人なりとす。一は西洋文典を輸入してこれを模倣せるものにしてその最初の試みをなしたるものは鶴峯戊申なりとす。これにより後田中義廉、中根淑等を經て大槻文彥氏に至りて折衷の極致を示せり。今これらの諸氏の說に見てその當れりや否やを考察せむと欲す。

古來或は體言といひ、用言といひ、弖爾乎波といふ名目を立てゝ多少說をなせるものなきにあらざりしかど、唯局部につきての論にすぎずして國語を一括してこれを一の原理より分類せしものにはあらざりき。そのこれあるは實に富士谷成章にはじまりしなり。富士谷氏の說は「あゆひ抄」(安永三年)「かざし抄」(明和二年)の二書にあり。氏は國語の單語を

名(ナ)　裝(ヨソヒ)　かざし　あゆひ

の四種に分てり。その「名」は今の體言にあたり「裝」は今の用言に相當し「かざし」は「か

ざし抄」に詳說する所なるが、それを今の文典にあつれば、代名詞、副詞、接續詞、感動詞又接頭辭を含めり。「あゆひ」も「あゆひ抄」の詳說する所なるが、これは所謂助動詞、助詞及び接尾辭を含めり。富士谷氏の名と裝とは更めていふまでもなく體用二言に該當するものなるが、その「かざし」と「あゆひ」との分類に至りては他の諸家の未だかつていはざりし卓見なりとす。この上に冠せらるゝ性質の語と下に踐まるゝ性質の語との區別は國語の單語の上に存する本原的の性質に基づくものとしてこれを分類の原理とせるは實に富士谷氏の見識の卓拔なるによる。これを獨逸語の nach といふ語が前置詞といふ名をもちながら時として名詞の後に用ゐられ、英獨語等の副詞が、動詞の前にも後にも用ゐらるゝが如きに比すれば、國語にては語の性質とその語の位置とは不可離の狀態にあるを見るなり。この故に大局より見てこの四種の分類は國語の本性に一致したるものなりといふを得べきなり。されどその學說の後繼者なく十分に研鑽彫琢を施さるゝことなくして止みしは惜むべきことなりとす。

富士谷氏が死したる安永八年より後四十五年にして鈴木朗の言語四種論(文政七年)出づ。鈴木氏は富士谷氏に次ぎて單語を分類したる學者なり。その說は語を

體の詞
形状(アリカタ)の詞
作用(シワザ)の詞
テニヲハ

の四種に分つべしとするものなり。而してその體の詞は今の體言に相當し、形狀の詞と作用の詞との二者は合して今の用言に相當するものなるが、その「テニヲハ」といへるものは、世の所謂「テニヲハ」のみならず、今の所謂代名詞、副詞、感動詞の如きものを含み、更に進みては用言の語尾をも含むものとせり。氏の分類は體言とその相對的部分たる用言とを對立せしめずして、第二次の分類たる形狀作用の二詞を體言に對立せしめたるなど、一貫の條理なきのみならず、富士谷氏の「かざし」「あゆひ」の二類としたるものをば混一して「テニヲハ」といふ一類とせるなど、徹底せる分類といふべからざるなり。

鈴木朗の後に東條義門あり。鈴木の說にあきたらずとしてその著玉の緒繰分に於いて一切の單語を體用の二に分たむと主張せり。而してその外に語辭といふものありて、體言用言を連ね助けて、その運用を自在にすといひ、さてその語辭は又體言のうちにありといへり。その說く所は矛盾して一貫の條理を缺く。義門

は活用語の研究には大なる功績を立てたれど、分類學の上にては見るに足るべき成績を示さず。

東條義門と殆ど同時にしてその説をうけて之を合理的に組織せむと企てたるものを富樫廣蔭とす。氏はその著詞の玉橋(弘化三年)に於いて、一切の單語を分類して

言(コト)　詞(コトバ)　辭(テニヲハ)

とすることを主張せり。その「言」とは今の名詞(代名詞も含めりと見ゆる點あり)これなり。その「詞」とは今の用言これなり。その「辭」とは今の所謂助動詞と助詞とを含めり。かく「辭」を體用二言に對立して三に分類することによりて義門の體用二言を主張しながら、その語辭の處理に窮したりし缺點を補ふことを得たり。されど、富士谷氏の「かざし」と名づけしものの最大部分は、いづこにも歸着すべき點なきなり。この外なほ仔細に檢すれば、氏の説幾多の缺陷を有すれど、今その批評をなさず。

富樫氏の説は明治時代に入りて所謂舊派の國語學者の間に洽く行はれたり。

堀秀成はその語學階梯に於いて

言　詞　辭

の名稱を用ゐしが、權田直助はその著語學自在に於いて

體言　用言　助辭

の名稱を用ゐたり。されどこれらは富樫氏の說と同じく單語中の重要なる部分をあげたるに止まり、一切を一貫して分類したりといふことを得ざるなり。

かく本邦人が、獨特の思索を以て單語の分類を企てし際にあたりて、外國文典の名目をかりて國語を律せむとする企て行はれたり。そのはじめは實に鶴峯戊申の語學新書(天保四年)にあり。鶴峯の企ては和蘭文典を模範としたるものにして文化年中に藤林泰介の著したる和蘭語法解といふ書と大體に於いて一致し、ただ「數言」の名を省きたるにあり。これ氏が「蘭に十品、四格あり、云々戊申語名を正して諸家を折衷し論定して九品九格とす」といへる所以なり。この九品とは氏が單語分類の型にして

實體言(キコトバ)　虛體言(ツキコトバ)　代名言(カヘコトバ)
連體言(ツヅキコトバ)　活用言(ハタラキコトバ)　形容言(サスコトバ)
接續言(ツヅケコトバ)　指示言(サシコトバ)　感動言(ナゲキコトバ)

これなり。今その各品を今の名目にあてゝ考ふるに第一の實體言は名詞に該當し、第三の代名言は今の代名詞に大體該當し、第四の連體言は動詞の連體形にして

名詞につゞけるものをさし、第五の活用言は動詞の述格に立てる場合をさし、第七の接續言といふは所謂接續詞と接續の用をなせる助詞とを含み、第八の指示言は所謂「てにをは」の類にして、第九の感動言は所謂感動詞に相當す。而して第二の虚體言とは西洋文典の形容詞 adjective を直譯したるものにしてその例には今日いふ形容詞、動詞の連體形を主とし、合成語としての一部及び連語をも含めり。又第六の形容言といへるは西洋文典の副詞を直譯したるものとして、これにも今の所謂副詞の外、形容詞の連用形並に副詞の性質を有する助詞等をも含めたり。これを以て考ふるに鶴峯の企ては國語の實際にはあてはまらぬこと頗る多くして失敗に終りたりといふべきなり。然れど、國語の研究の上に大なる刺戟を與へ、その名目の如きは永く後世に影響を與へたり。即ち今の文典にいふ

代名詞　形容詞　接續詞　感動詞

の如きは、その言を詞と改め、なほ實質の上に變更あること（形容詞の如き）あるものあれど、しかも國語學史上、また輕視すべからざることなりとす。

鶴峯の企は失敗に終りたりといへども、西洋文典を模倣せむとする企はやむことなかりき。明治七年に至りて田中義廉小學日本文典といふものを著はす。その單語分類の目を見るに

名詞　形容詞　代名詞　動詞
副詞　接續詞　感詞

の七種とせり。この分類の名目と數とは鶴峯氏のと頗る異なるが如く見ゆれど、その系統に屬することは疑ふべからず。即ち鶴峯の言といへるをすべて詞と改めたる外、その形容詞といへるは、鶴峯氏の形容といへる名目をとりて鶴峯の虛體言といへるものにかへたるものなることは實質の殆ど同じきにて知られたり。次にその連體言、指示言の目を省き、活用言を改めて動詞と名づけ、形容言といへるものを副詞と改めたるものなりとす。氏のこの企ても亦後世に永く影響を與へ、今の文典の術語の名目はこゝに殆ど確定的となれりとす。然れども氏の品詞の內容は決して國語の本性に適合せりとはいふべからず。たとへば氏の所謂形容詞とは西洋文典直譯の形容詞にして「暖ノ春」「大ナル家」等の如く體言の修飾限定をなせるものの一切をさせり。かくの如きは國語の法格として認容し得べきものにあらず。かくて氏は又一方に於いて、吾人の今いふ形容詞の連用形を以て副詞とし、連體形を以て形容詞とし、終止形につきてはその何と名づくべきかをいはざるなり。而してかの「テ　ニ　ヲ　ハ」の如きは各品詞の附屬物として分散すべきものとなれるなり。以上はその最も大なる缺陷をあげたるものなるが、氏の企ても亦明か

に失敗に歸し、たゞ氏のつくりたる名目のみは後世に傳はれるなり。

田中氏の著に次ぎてあらはれたるは中根淑の日本文典なり。(明治九年)この書にては單語を

名詞　代名詞　形容詞　動詞

副詞　後詞　接續詞　感歎詞

に分ち、所謂八品詞の數に合せたり。このうち後詞といふ名目は田中氏が、その接續詞の第一種としたるものに名づけしものなるが、こゝに至りて一の品類としたるものにして大略今の所謂助詞に該當せり。この點は田中氏より一歩を進めたりといふを得べし。されどその形容詞に至りては田中氏と大差なく、今の所謂形容詞の各活用形を分解して、連用形を副詞とし、連體形を形容詞とし、終止形を以て動詞としたるは、終止形の存在を認めたる點は田中氏より進めりとすとも、これも國語の法格には一致せぬものにしてこれ亦失敗せるものといふべきなり。

以上鶴峯戊申より中根淑に至るまで、西洋文典を漫然國語の上に加へむとする企てはいづれも失敗せりといひながらも徐々に進歩してこゝにその難關はいづれに存するかを明かに示すに至れり。その難關と見らるゝものは何ぞといふに、國語の本性に基づき「くしき」活用の語を一の語類と立てむとすれば、西洋文典の型

には決してあてはまらぬことゝ「テニヲハ」を一の語類と立つるときには一方に隙を生ずると共に他方に贅物を生ずることゝを知れり。然れどもこの西洋文典の模倣は終に殆ど完成せられたり。これを大槻文彥の說とす。

大槻文彥の說は古來本邦に發達せし分類法と西洋文典によりて傳へられたる分類法とを巧みに綜合折衷したるものにして、まさに本邦の語學史上に一時期を劃せり。その著は先づ語法指南として世に出で、次いで廣日本文典として說明せられたり。その單語分類の目を見るに

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞　接續詞

弖爾乎波　感動詞

の九目あり。而してその形容詞といふものは鶴峯氏以後の西洋流の形容詞にあらずして、まさしく古來本邦の學者間に發達せし分類の形狀言といふものに該當す。かくて又「弖爾乎波」の一類を立てたるは余が上にいへる難關をすべて解決したるが如くに見ゆ。然れども、深く考ふるに、その動詞、形容詞は古來の形狀言、作用言に同じく、名詞また體言に同じく、弖爾乎波も古のまゝなりとせば、氏の分類としてはその本邦古來の分類になかりし代名詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞を設定せしことは、これ西洋流の分類を折衷せられし結果と見るべきものなりといふべきも

のなるが、その事果して當を得たりや否やは十分に考慮せざるべからず。これらのうち代名詞は姑くおきて論せず。その他の點につきては既に日本文法論に論じたる所なれば、今煩はしきを避けて簡單に一言せんに、たゞ他の品詞は相互間の關係及び語形の一致、用法の類似より分類彙集せるに副詞、接續詞、感動詞の三者は主として意義上より設定せしに止まりて、文法上の說明としてはなほ他に存すべきを考へしむるものなり。而して西洋文典に於いて一の品詞と立つることなき助動詞を一類とせるに至りてはその責任全く氏に存すといふべきなり。

こゝに吾人は立かへりてかの西洋文典にいふ八品詞といふものゝ本體を考察せむと欲す。元來品詞の區分は文法學者が研究の爲に設けたるものにして、言語に固有せるものにあらず。今日にても八品詞とする人あり、九品詞とする人あり。これらはその區別が便宜上のものなることの證據なり。又その歷史をみればその區分は漸次に進步したるものにして文法學の始まりし時より直ちに今日の如くに整ひしものにあらざるなり。

今西洋に於ける文法學の源を尋ぬれば、希臘時代に溯るを得べし。希臘にては Homer の文集研究の必要上文法學の基礎を築かれたるものなるが、その文典上の用語の案出せられ範疇の區別せられたるは「プラトン」「アリストテレス」等の哲學者

の手によりはじまり、ついで「ストア」學派の學者によりて文法學の進步を促され、遂に所謂八品詞の名目を生ずるに至れり。而してその組織的の文法學は實に西暦紀元前二世紀の人「ヂオニシウス、ツラックス」(Dionysius Thrax)にはじまるものなるを知る。この人は埃及のアレキサンドリヤの名高き文法學者(哲學者)「アリスタアカス」(Aristarchus)の門人中の主たる人物なり。この人は希臘語の文法の最初の組織的なる文典をかけり。この人の文典によりて八品詞といふこと確定的のものとなれり。その八品詞とは

noun 名　詞　τὸ ὄνομα（オノマ）
verb 動　詞　τὸ ῥῆμα（レーマ）
participle 分詞　μετοχή（メトッヘ）
article 冠詞　τὸ ἄρθρον（アルトロン）
pronoun 代名詞　ἡ ἀντωνυμία（アントーヌミア）
preposition 前置詞　ἡ πρόθεσις（プロテシス）
adverb 副詞　τὸ ἐπίρρημα（エピルレーマ）
conjunction 接續詞　ὁ σύνδεσμος（スンデスモス）

にして、これは希臘語としては當然存すべき事項と知られたり。

「ツラックス」の文典成りてより八個といふ數は品詞の區分に必要なる神秘なる數の如く思惟せられしが、それが實に羅甸語に適用せらるゝに及び多少の變化を來せり。卽ち分詞は動詞に屬せしめられ、冠詞は羅甸語に之を缺くが故にその名稱の必要なし。こゝに八個中二個の空位を生じければ、羅馬の學者は之を充さんとし「オノマ」を

名詞 Substantive

形容詞 Adjective

の二に分ちてその一位を充せり。この區分は論理的には價値あれども、羅甸語の名詞と形容詞とは同一の變化に從ふものなれば、實用上殆ど必要なき分類なりと認めらる。今一の空位は副詞中より

間投詞 Interjection

を分ち之によりて塡めたり。この間投詞は一の品詞とすべき價値なきものなり。しかるにかくの如く强ひて八の數に充たしめむとせしは八品詞といふことの神聖視せられし爲なるべし。羅甸文典の八品詞は實にかくの如くにして成立せしものなり。而して歐洲にては近世まで羅甸語が雅言として標準語たりしものなれば、その八品詞は卽ち文法の型の確定的のものと思惟せられて今日に至れるな

り。

以上說く所の如くなれば、今の文法學上、世人が動すべからざるもの丶如くに思ふ品詞の區分も決して絕對的のものにあらざるを知ると共に、西洋の文法學ははじめは哲學者の手によりて開拓せられたるものなれば、哲學的の影響を蒙れるもの少からず。又之が爲に無用の事を規定せるにあらずやと思はるるものもなきにあらず。彼れの文法に傚ひて國語の法則を研究せむとするものは深くこれを思ふべきなり。

今日の八品詞又は九品詞を主張する論者は果して事實を十分に體認して後、國語の品詞を定めしかといふに、恐らくは然らずして漫にあてたりといふ如き弊あるものと思はるゝなり。ことにかの助動詞といふものは彼には動詞の特別の場合にして一の品類にあらぬものを本邦の學者がこれを一の品類としたるものなれば、その責任は全く本邦の學者に在るものなるが、それの當否は後に述ぶべし。次には西洋文典に前置詞といふものあれど、本邦の語にはなきを以て模倣するを得ず。さて今日の品詞の名目にて西洋文典のと異なるものは一の助詞なり。これはかの前置詞のかはりに設けたる名目にして、從來助辭といひしを他の例に合せて「詞」としたるまでのものなり。前置詞といふもの我には全くなく、わが助詞と

いふものは彼には全くなし。卽ち互にその空間を補ふものといひて可なり。この助詞には從來「てにをは」といひたるもの大略之に當れり。之をば「後詞」(中根淑)「後置詞」(里見義)「關係詞」(チャムバレン)などいひたる人もありたれど、助詞といへるが、最も穩かにして今人多く之を用ゐる。

以上說く所の如くなれば、これらは必ずしも盲從すべきものにあらずして、吾人はこゝに吾人のとるべき類別法を獨立の見地より研究すべき自由を確保し得たりとすべきが、こゝにそれに先だちて西洋文典流の類別が、本邦語に適するか否かを吾人の自由の立場より觀察せむとす。

英獨語の名詞は事物の概念をあらはすものとしてはなほわが所謂名詞の如くなれど、それらは同時に他の語に對しての位格(Case)をあらはし、數性の區別をも有す。國語にてはかゝる性質なく位格をあらはさむには所謂弖爾乎波を用ゐざるべからず。こゝに於いて「テニヲハ」の一部を名詞の格なりとする說出で來れり。然れどもその說の非なることは旣に廣日本文典別記に說ける所なり。抑も西洋諸國語の位格といふものが、名詞に存するはこれかれらの語の性質に基づくものなり。彼れは人も知る如く所謂屈曲を有する語にして(屈曲とは一觀念語の語形の一部を其の用法上の小變化をあらはす爲に變化せしむるものをいふなり)これ

あるが爲に活動語(Inflectional language)と稱せらるゝなり。卽ちかれらの名詞にありては語形の一部を變化せしめて種々なる關係を表示する性質を有するなり。吾人の弖爾乎波は名詞の語形内の一部分にあらずして、形式的ながらも一の語と認めらるゝものなり。弖爾乎波に類似するかれらの品詞を求めば、まさに前置詞なるべし。かれ既に前置詞を以て一の語と認めたる以上、かれの見地と同じ位置に立てるものは必ずテニヲハをも一の品詞と見るをうべし。これかれの見地よりしての正當なる見解にして決して便宜的のものにあらざるなり。この場合にありては西洋諸國語の名詞と國語の名詞との間に重要なる差別あるを發見すべきなり。何ぞや。彼れは所謂事物の觀念をあらはすと同時にその事物觀念が他の語に對する關係をも示すものなるに、吾人の國語にては關係をあらはすには特別の語が外にありて、名詞は單に事物の觀念を裸體的にあらはすのみに止まることこれなり。

前節說く所によりて直に發すべき疑問は我が名詞が他に對する關係をば如何にしてあらはすべきかといふことこれなり。こゝに吾人は「テニヲハ」の研究にうつるべし。彼れらの前置詞はある他の語を助けてそれと他の語との關係を示しつゝそれらを觀念上結合する職能を有するものにして、その助けらるゝ語の前に

置かるゝを普通とするが故に前置詞と呼ばるゝものなるが、それとても往々その助くべき詞の後に置かるゝものあることは誰人も知れる所なり。わが所謂テニヲハに在りて其の助けむとする詞の前にあらずして必ず後にあり。これ其の異なる處なり。其の名詞の後に屬して他の語との關係を示す場合に其の後に來り得べき語は名詞なるあり、形容詞なるあり、動詞なるあり。その點に於いてはかの前置詞に酷似す。又英語は格に於いて印歐語系中尤も少きものにして僅に三あるのみ。この英語を以て他の格の數多き語を直譯せむには其の不足の格は前置詞を以て示さゞるべからず。この點に於いても亦酷似せることを知るべし。然れどもそは唯我がテニヲハの一部、廣日本文典の所謂第一類のテニヲハに過ぎざるなり。以上いへる所はテニヲハの一部分のみのことなるが、これのみによりても前置詞といふ名目は到底國語に適用すべからざるを知るべし。

わが「テニヲハ」に聯關して考ふべきは所謂接續詞なり。抑も西洋の接續詞といふものはそれらの文典によりて見れば、文と文との結合をなすものと語と語との結合をなすものとの二種ありとせり。而してかれの接續詞といふものはたゞ思想觀念上の連絡を助くるのみならず、その形體上一連續體たることをも同時にあらはすものなることに注意せざるべからず。我が國語學者の接續詞といふ事を

いひ出でたるも全く西洋文典のをうつしたるものなれば、吾人はかれらの意義にていふ接續詞が果して國語に存在するか否かを精査せざるべからず。

かくて本邦從來の諸家が、等しく一致して文を接續すと稱する接續詞の例を見るに

一、山を越え、又水を渉る。

二、書を讀み、且字を記す。

三、春になりぬ。されどなほ冬の心ちす。

四、諸車通行止。但し空車は此限にあらず。

の如き例の「又」「且」「されど」「但し」の類をさせり。これらは一見上下二文を接續したる結合要素の如く見ゆれど、よく見れば、その然らざるを知るべし。三、四の二例は上文と下文とは語の形體上又陳述の方法の上に於いて一の連續をなせりやと見るに決して然らず。上文は上文にて意義完結し、陳述の方法も語の形體上も亦完結せり。こゝに「されど」「但し」は二文の意義上の關係をば示せど、形體上二文を結合して一體とすべき勢力を有せざるを見るべし。一、二の二例にては上下二文は形體上陳述の方法上共に連續して一體となれるものなれば、この「又」「且」こそかれの接續詞に該當すべけれと思ふ人もあるべし。しかれども、そは英語漢文等の接續詞を

直譯したるまゝの語を以て國語の接續詞となす頗る不健全なる思想を有せるものゝ言にして毫末もとるに足らず。見よ、かの接續詞と稱せらるゝ「又」「且」を除きて

山を越え、水を渉る。

書を讀み、字を記す。

とする時に各それぞれ上下二文に分れて各特立する否か。實にこれらの文の連接の能力は「越え」「讀み」といふ語形に存し、それによりて二文は一體となれるものなり。されば「又」「且」の有無は文の結合體なるか否かに干與することなきは明かなりといふべし。さればかゝる場合にはかれの接續詞に該當するものなしといふべく、この「又」「且」の如きはかれの副詞の一部分たる接續副詞に酷似するを見るべし。

以上の如くなれば、從來の文法家が接續詞と稱したるものは、實は西洋文法の接續詞とは性質全く異なるものなるを知る。然らば本邦の語にかく形體上二文を接續する能力を有する語全くなきかといふに必ずしも然らず。

人間は多少其の境遇に不滿なるにあらずば、努力せざるべし。

櫻の花開かば、我等は運動會を催すべし。

彼には善き心掛なきにしもあらざりしかど、力足らざりき。

恒星は自己の光を有すれども、遊星は他の光を受けて光る。

などいふ如き場合の「ば」「ど」「ども」の如き語はこれによりて上下二文を結合して意義上よりしても形體上よりしても一連續體たらしむる能力を有す。而してこれらの間に上にいへる所謂接續詞を加ふることも又なし得べし。然れども、若しこの「ど」「ども」「ば」を除かば二文は個々離れ離れになりて相互の間には意義の上にても形體の上にても一の連絡なくなるべし。これを以て見れば、この「ば」「ど」「ども」は即ち二文を意義上形體上相連續して一體となす能力を有するものなること明かなれば、これ即ちかれらの接續詞の本體に該當すといふべきなり。かく見れば、彼れの接續詞はわが文法家の所謂接續詞に相當するものにあらずしてわが「テニヲハ」の一部にこれに該當するものありと知るべきなり。

これを以て見れば、わが「テニヲハ」はかれの前置詞に該當すといふは、たゞ部分的のことにして「テニヲハ」中にはかれの接續詞に該當するものも存すること明かなるが故に、かれの前置詞、接續詞などといふ考を以てしてわが「テニヲハ」を律することを能はざるのみならず、わが「テニヲハ」は全く別の立脚地より考察せらるべきことを考ふべきなり。

次に考ふべきは感動詞なり。この感動詞の名目は Interjection の譯語なるが、その本義よりいへば、寧ろ間投詞といふをあたれりとす。この間投詞と目せらるゝ

ものは情意の發表たる意義の上よりのみいへば、從來のわが文法家の說けるものに相當するものなりといへども、西洋文典の文法家の所謂

眞正なる間投詞は或る語をも支配することなく、又或る他の詞にも從屬することなし。(ハイゼ)(支配は上に從屬は下に)

といへる說明によりて考ふれば、

あはれおもしろき月かな。

の如く一定の所屬ある語は間投詞といふことを得ざるものたりとす。又かれの間投詞と稱せらるゝ理由は、

文法上の關係なしに、或時は獨立にのみ、或る時は發端又は終末に、或る時は全文の個々の詞の間に常に表出の強めの爲に、ある感情を供せねばならぬ所に存す。

といへるにあるが、この說明に合するものありや否や。今普通に感動詞と稱せらるゝ

ああ　　あはれ　　あな　　いざ　　いで　　すはや

等を見るに、その意義よりいへば、かれの間投詞といふに一致するが如くなれども、これを用法上より見れば、いつも、他の語句の上にあるものにして、そが獨立に用ゐ

らるる如くに見ゆる場合にも、吾人は必ずこれが次に來るべき語句を豫示する感を有す。又そが句の末にある場合も往々見ゆれど、これ亦そが反轉法によれるものなることを考ふるものにして、その語句の中間に入るといふが如きは殆ど全くなしといひて可なり。然るに世には

　これにて何事をもいはばやと思へども、いざ。わが家へ。

といへる如き場合を以て語句の中間におかれたりと論ずるものあり。されど、この「いざ」はその意味よりいへば、下の「わが家へ」(「來給へ」を略せり)といふ語を誘導せるものにして、用法よりいへば「わが家へ」といふ句を限定せるものにして明かに副詞の性を有せり。これを文の中間に間投的に投入せるものと見る如きは、句そのものゝ本質を認め得ざるによるといふ批難を甘受せざるべからず。今の如き例は

　明日天氣ならば、恐らくは野田君來らむ。

　雨はいたく降れど、しかも友は訪ひ來れり。

といふ場合とその關係殆ど一途に出でたるものにして、いづれも二句を合して一文をなせるものゝ下の句の冒頭にありて、下の句を誘導限定せるものなり。若し上の「いざ」の例を以て間投的の語なりとせば、今の「恐らくは」「しかも」も亦間投的のものとすべきならむ。しかもかゝる事は常識に於いても首肯すべからず、況んや嚴

密なる學術の研究に於いてはとるべきものにあらざるなり。これらを以て見るに、この類の語は感動又は意志を發表するものなれど、性質用法よりいへば、間投詞にあらずして副詞の如く他の語句に冠して用ゐらるゝものなり。而して、既にいへる「かな」の如きものは感動を寓せられてある點はこれらと似たれど、性質と用法とを異にして、吾人の所謂「テニヲハ」の一部分なりとす。こゝに於いて吾人の「テニヲハ」といふものは西洋文典にいふ前置詞、接續詞のあるものに該當する以外にもなほ他の部分をも含むといふべきなり。

以上論ずる所によりて吾人は又西洋文典の直譯流の接續詞といふものが、副詞の性質を有するものにして、同じく感動詞といふものにも亦副詞に似たる性質を有するもののあるを見るべし。而して、西洋文典にいふ副詞を直譯してわが文法家また副詞といふものを設く。その詳細に至りては彼是全く一致する所あらずといへども、副詞といふ一類を立つることは略異論なきものなりとす。その詳細の如きは後に至りて論ずべし。

代名詞、數詞、動詞につきては今これを詳論せず。大體に於いてわれにも亦これを立つるに不都合なしといふに止め、詳細の論は後に讓るべきが、こゝに最後に論ずべきは形容詞なり。從來形容詞といふ語を以て英語の Adjective の譯語にあて

同時に又我が國語の所謂形狀言にあてたるを以て甚しき迷惑を初學者に與へたり。今西洋文典の說明に見るに、ハイゼの獨逸文典などの說明に從へば、西洋語の形容詞も根本は動詞と同じく賓位觀念として使用せらるべき本性ある屬性詞たるなり。而して、その動詞は附屬性の觀念をあらはすと同時に、陳述に於ける形式的能力を有するものなるに、その補缺部分たる形容詞はこの屬性觀念のみありて更に陳述の形式的能力を有することとなし。これ、かれにてかの形容詞と動詞との區別を立つる所の最大要點なりとす。われにありては如何。形容詞と稱せらるるものにてもかの屬性觀念と同時に陳述の能力卽ち統覺作用をもその一の語にてあらはす。この故に形容詞のまゝにて

この花は美し。

かの山は高し。

などいひて一の句を構成するを得るなり。かゝる陳述の能力を缺ける、かれの形容詞はかゝる場合に如何にするかといふに、英語にては to be 獨逸語にては sein を所謂鎖として用ゐ、形容詞とその鎖と二語にあらずば、その屬性を主格に對し結合して陳述し得ざるなり。これを以て見ればわが所謂形容詞とかれの形容詞との間に大差あることをさとるべし。

西洋文典の形容詞の本性的用法は單に名詞を修飾限定するにあるのみ。わが形容詞は動詞と形容詞との區別の生ずる觀念的要素の差を除きて考ふれば、動詞と大に異なる所あるにあらず。動詞に終止の三方法あれば、形容詞にもあり、動詞に接續の三方法あれば、形容詞にもあり。動詞に體言用言に連なる形あれば、形容詞にもこれあり。實に動詞と形容詞との差は主としてその屬性觀念の差に止まるといふべきなり。又西洋文典には動詞の一變體として分詞といふ目を設く。これは、動詞が形容詞に似たる用法即ち名詞の修飾限定をなす場合のものをさせるものなり。彼れにありては形容詞は名詞の修飾をなすを本性とするに對して動詞は陳述をなすを本性とするものとせる所なるに、動詞にしてなほ名詞の修飾限定をなすに用ゐらるゝことある場合を名づけたる現象なり。然るに我にありては動詞形容詞に各連體形ありていづれも名詞の修飾限定をせり。これ亦自然の事といふべし。思ふに分詞といふ名目は動詞は陳述をのみあらはし、形容詞は名詞の限定をのみなせるものとせる人爲的の說明を下せる後に生ずる矛盾を彌縫する名目たるに止まる。わが動詞も形容詞と共通して種々の場合に用ゐらるるものなれば、わが形容詞はかへりてかれの動詞と大差なきを見るべきなり。以上述べたる所によりて西洋文法によりて我國語を律せむとせば、如何なる點に矛

盾缺陷を生ずべきかを大略考ふるをうべきなり。

こゝに吾人は本邦獨特の發展になる語學說の分類が國語の本性に合するか否かを見むとす。先づ富士谷氏のは大體に於いて國語の性質に順應せることは既にいへる如くなるが、他の鈴木富樫二氏のには大なる缺陷矛盾あることこれ亦既に略說せる所なり。さて明治時代に入りては、上述の如く西洋文典模倣の名目を用ゐて八品九品を主張する人あると共に、他方には富樫氏の說を奉じて

體言　　用言　　助辭

の三別を主張し、而して往々かくの如く三大別あるは本邦語に特有なる現象にして外國語などの及ぶ所にあらずとせり。然れどもかく三に分類するを得るは何故に誇るべきなるか。吾人は未だその理由を聞き知らざるなり。而してかゝる三別は決して本邦語のみに止まらず、西洋語にても同じく施しうる處なるのみならず、羅甸語の文典などには既にいひ古したる所なるをや。今余が有するRevised Latin primerの品詞の條を見るに

I. Nouns (three kinds) (體言にあつべし)

Substantives

Adjectives

Pronouns

II. Verbs (通常動詞と譯すれど、實は用言にあたる)

III. Particles (four kinds) (小品詞と譯すれど、助辭にあつべし)

Adverbs

Prepositions

Conjunctions

Interjections

とあり。これまさしく三類八品に分ちたるなり。これを以て考へ見るにかの體言、用言、助辭の分類の何等本邦語特有の事情にあらざるのみならず、それが誇るに足るべき學理上の說明もまた未だきくことを得ず。さればこれらにつきて吾人は盲從するを得ざるなり。

こゝに吾人はかの體言、用言、助辭の三別法を以て國語を律することの當否を檢せむ。わが國語に助辭といふべき一類とその他の一切との間に重要なる差別あるべきは明かなることなり。又體言と用言との二も亦區別すべきは誰人も認むる所なるが、かく三類に別ちて能事了れりとすべきか。かの副詞接續詞などいはるゝものは果して助辭なりや。吾人はこれを助辭と同一なりとは認むるを得ざ

るなり。然らばこれを體言といふべきか、用言といふべきか。これらを用言ならずとすることは誰人も異議なきことならむが、これを體言とすることは如何。現に落合小中村二氏の中等教育日本文典にはこれを體言とせり。されど、吾人の目よりすれば、これらは副次的の語にして名詞などの如き主要なる用をなせる語と等しく見ることを得ざるなり。要するに、かの所謂副詞、接續詞等は一方に於いては助辭の一類とは性質を異にし、他方に於いては體用二言とも異なるものにしてそれらとは別の一類たることは明かなり。而してそれらの談話文章中に於ける位置を見るに、助辭の類は必ず他の語の下にのみあるに、この類は必ず他の語の上にのみありて決して下につくことなし。かくの如く性質用法全く異なるものを合せて一類とすることは道理上賛同しがたき事といふべし。

こゝに到りてはじめて吾人は從來のすべての分類法の拘束を離れて自由の見地よりして國語の本性に適せる分類を企つべき自由を完全に得たりといふべきなるが、最後にこの性質の研究の態度につきて一般的に論ずべき要點につきて一言する要あり。一般に性質の研究といふものは、主として靜止的位置にあるものとして、その對象に直面するものなるが、文法は實に一時、その國語の歴史を捨象して靜止的のものとして研究する學問なるが、うちにもこの性質の研究は根本的の

研究なれば、最も靜止的に見て施すべき研究なりとす。抑も言語は歷史的のものなれば、個々につきて歷史的の說明をなすは比較的に容易なれど、靜的關係を說くは一般に困難とせらる。然れども、この靜的研究を施さずしてはそれらの性質は眞に知らるべきものにあらざるなり。而してかく性質を研究する場合にはその靜止的狀態を抽象して研究し、一時的現象と見るべきものは姑く措いて論ぜず、又止むを得ざる場合の外はその動的狀態に眼を轉ずることなく、專ら固有的に存すと見ゆる性質及びその性質に基づく現象を觀察して研究すべきものなりとす。

第五章　語の類別

前章に論じたる如く、吾人は從來の諸說を離れて、別に語の類別を立つべき必要に迫られたるが、こゝにそれらの類別を如何にすべきかといふことを考ふるに先だちて決すべき問題あり。その第一は、類別を施すといふ事の意義なり。類別を施すといふことは結果よりいへばその對象を幾つかの集團に分つことをいふ事なるが、それが學術研究の結果生じたるものといふ以上は、それらはその性質上また作用上混同すべきものにあらずといふこと卽ちかく區別せずば道理に合せずといふ認識を基として分ちたる集團ならざるべからず。而してこの集團はそれ

らの對象中に存する差異性と類同性とに基づきて比較と概括との二作用を施したる結果にして、それらの對象に對して分別と類集との二方法が表裏して同時に施されたる結果なりとす。これを他の語にていへば、ある類同性ある集團と他の類同性ある集團との間に差異性を發見して、それによりて幾つかの集團を認めむとするなり。而して實際上に於いては輕微なる差違又は變化は姑く默過し、大勢につきて集團を立つることは恰も計算の實際に於いて奇零數を切りすて又は切り上げて大體數を以てその價値とするが如きこととの存するは止むを得ざるところなり。然れどもその分類の大局に於いては、必ず分釋の原理を立て論理學上の嚴密なる二分法に則りて進むべきものにして、その結果は幾つの集團となるにせよ。その分類の手續はその立てたる分釋の原理の有無によりての二分法を以て進行すべき筈のものなり。この手續を經たるものにあらずば、眞の分類をなしたりといふを得ざるなり。

次に問題とすべきは單語の類別を施すといふ事の意義なり。抑も單語を類別すとは如何なる事をいふかといふに、こは實に談話文章の構成要素たるものを同時的見地より區別して種類分を施さむとするをいふ。その同時的見地よりして區別を見出すとは如何なる事ぞといふに、これ實にその言語を靜止的狀態に在り

と假定して、その靜止的狀態のまゝに見出さるべき要素相互の同時共存の關係及びその關係の上に有する價値を見むとするものなるが、それら類別せられたる各集團は談話文章の構成要素たる以上、たとひ職能を異にすとも談話文章の構成に關しては對立の價値を有するものならざるべからず。之を他の語にていはば、それらは談話文章の構成に對しては對當の價値を以て對立し、しかも一定の規律に從つて相互に平衡を保つものならざるべからざる筈なり。されば、かくの如くにして分類し出されたる各集團は各談話文章の構成に對しては直接の要素としては對立の價値を有し、性質に於いては各異にして、その間に相侵すが如きこともなく、又それらだけにて談話文章の構成をなすに不十分なることもなきものたらざるべからざる筈なりとす。

以上の如く、單語の分類はそれら相互の共存關係及びその關係の上に有する價値の差によりて施さるべきものなること明かなるが、その共存關係といふことにつきてなほ一の考ふべき點あり。われらは談話文章の構成を同時的共存的に見てそれらの間に存する類同性差別性を見むといふが、その同時的共存的といふことの意義なり。それ言語は時間的線的の性質を有するものにして、その同時的共存的といふとも、有形の物體の同一空間に存する如き並列的のものにあらず。い

かなる談話文章も必ず線狀をなして一延長をなすに止まる。しかも實際の談話文章に於いてはその線も時間的にして同時に全體を認識しうるものにあらざるなり。この故にその同時的共存的といふ場合に於いても口頭の言語に於いては嚴密に同時的といふことを得ず。然れどもこれらを文字にて寫し出すときに於いてはじめて可視的線狀となすことを得べし。吾人が同時的共存的といふは口頭の語をもかくの如き狀態にありと假定しての研究なるが、その文字にかきあらはしたる時といへども、これは直線狀のものなれば、之を區別することは、いはゞ直線を幾つかに分つが如き關係に立つものと思惟せざるべからず。卽ちこれが區分は一線上にありて、ある點を中心としてあるひは前なり、あるひは後なりなど〻見るが如き見地よりして、見るべき性質の區別法を施すべきものなるを見る。而してかく區分せられたる要素はその性質に於いて、他の要素と直線的に重なりあふこともなく、又それらの要素を正當なる方式によりて直線狀に繼列する場合に何等の空隙なしに談話文章の構成を完全にはたしうるものたらざるべからざる筈なりとす。

以上述べたることは一般に單語といふもの〻區分をなす場合に行はるべき抽象的の見解にして、如何なる言語にも通じて考慮すべき研究の方法たりといふべ

きが、ある國語にはそれぞれ一定の性質又一定の慣例あれば、おのづからそれら國語に具有する特別の性質に基づきて如何なるものが、單語と認めらるべきかの實際問題を有す。即ち言語一般の通有性の外、この國語の特有性に基づきて、それら單語の性質を研究せざるべからず。當面の實地問題に即していへば、わが國語にも特有の性質慣例ありてその體系がそれらの單語を如何に取扱ふべきかを示すことあるべきは理の見易き所なり。若しこの事なくば、その研究は空想に止まるといふ非難ありても之を辯駁するを得ざるべし。或は又これと反對にわれらが國語の實際を顧みず、たゞ理想的體系を考ふることありとせよ。そは實地の言語に立脚せざるものなれば、これこそ眞に空想に止まるといはるべきものにして、言語の研究に於いて最も忌むべき邪道なりとす。而してかゝる弊はわが國語の研究に於いて既に西洋文典の直譯に多く現れたる所なり。以上說く如くなれば國語の單語の類別は國語がかく區別を施すべき狀態を呈すといふ事實の上に立てるものならざるべからざることを知るべし。

次に實際の問題としてその分類の標準を何處に求むべきかといふことなり。すべて語には意義あり。この故に意義を以て標準となして分類することを得べし。されど單に語の意義のみにて分類すとせば、その分類はその人の考へ方によ

りて如何樣にもなり、一定の標準なきことゝならむ。かくの如きは文法學の關係する所にあらず。又語には形の上に種々の差あるを見る。この語形の差違も亦語の區別をなす標準となしうる場合あり。されど單に語の形式のみを分類の標準とせば、そは機械的の分類たるに止まり、文法上無用の事なる場合少しとせず。この故に語の意義と形式とは分類をなす場合に無用なりといふにあらねど、それらには文法上の職能及び價値といふ嚴密なる制限を加へざるべからざるものなりとす。その故如何といふに、言語は意義と形式との二の楔子のみなれば、これらを緣とせずしては性質を考ふることを得ざるものなれど、最初にくれぐれも論じたる如く意義卽ち言語にもあらず、形卽ち言語にもあらずして、意義形式合一せる一體たる言語といふものに存する特種の性質を對象とすべきが、その特種の性質は卽ち文法上の職能及び價値に外ならず。而して吾人のこの研究の目的はもとより文法の研究にあるものなれば、これを離れてはもはやわれらの研究の範圍外に出でたるものなればなり。こゝに於いてその文法上の職能及び價値といふ標準はそれら意義形式の上に君臨して之を支配するものといふべきなり。

かくの如くなれば、文法上の職能及び價値といふことは文法學上主として顧みるべき點なりとす。されど、この文法上の職能のみを主として、他は顧みずして可

なりやといふに、然らず。若しかくする時はその論空理に走りて、國語の實地に適するか否かを顧みざる弊を生ず。この故に必ずその關係作用等に相當する、語の形式と意義との實地の狀態を顧みて、その當否を決せざるべからず。この故に文法上の職能及び價値と、それらに對應する意義の變化と形式の變化とが、如何なる狀態を呈するかといふことを以て標準としてはじめて分類を企つべきものたりとす。

文法上の職能といふことは種々の狀態あるべけれど、概括して語と語との相互の關係と談話文章を構成する作用關係との二に大別することを得べし。語と語との關係といふは或る語が他の語と形體上結合する場合ありとせば、如何なる語と相結合するか、又その結合する場合には相互に如何なる位置を占むるかといふ如き事、又これらの關係狀態がその語の意義と形式とに如何にあらはるゝかといふ如きことをいふなり。又文章構成上の作用關係といふは或は叙述をなすとか、叙述の主體客體となるとかの如き事にして、それらの作用關係が、その語の意義と形式との上に如何なる狀態を呈してこれらに對應するかといふことなり。たとへば語形に變化ありとして、それが文法上の職能の差異に基づく「一定」の變化なる場合には文法上その語に特有の一現象と認めらるべく、然らざる場合には之を文

法上の特有性質にあらずとすることなり。これを實地につきていはゞ、國語の用言の形式の變化が、文法上の用法の變化と、その語の他の語に對する關係とに對應して起るが如きはまさしく文法上の現象と目すべきものにして、これあるは、その用言の特性の一といふべきことの如きなり。以上述ぶる如くなれば、國語の實際につきて、それら談話文章の構成要素たるものゝ文法上の職能と之に對應する意義と形式との異同如何といふ點に着眼し、之を實地の標準としてはじめて單語の類別は行はるべきなり。然れども言語といふものは一定不動の死物にあらずして、生生活動一日も止まぬものなれば、一の品詞より他の品詞に轉じたるものも少からず、又現に轉じつゝありて二の品詞の中間に位するが如きものも或は無しとせざるべし。これらの事は歷史的の研究を施せば知らるゝものなるが、靜止的狀態としての研究に於いてはかゝる中間狀態を呈するものに對しては、たゞかゝる事ありといふに止めおかざるべからず。かゝる事情に在れば、分類を施す以上は多少の困難と衝突とは免る能はざるものなる事を豫め覺悟せざるべからず。而してこの事は口語と文語とを比較したる場合、その二者の法則の間にもまた上述の如き歷史的の變遷に基づく差異の存することも亦多少存すべきを覺知すべきものなりとす。

今、吾人は國語の單語を類別すべき順序となれり。一切の單語は之を同の方面より見ればそが單語たるに於いて一致す。然れども吾人は其の中に異を求めてこれを分類せざるべからず。かくて、これを獨立の觀念の有無によりて區別すれば、一定の明かなる具象的觀念を有し、その語一個にて場合によりて一の思想をあらはし得るものと然らざるものとあり。一は所謂觀念語にして他は獨立の具象的觀念を有せざるものなり。この一語にて一の思想をあらはすことの絕對的に不可能なるものはかの弖爾乎波の類にして專ら觀念語を助けてそれらにつきての關係を示すものなり。この關係を示す語と、それら關係語によりて助けらるる語との區別はかの具象的觀念を單獨に有するものと有せぬものとの區別に該當す。この故に、先づ單語を大別して觀念語と關係語との二とす。こゝに觀念語と目するものは所謂名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、感動詞なり。これらは皆何等かの觀念を代表し、時としては一語にて一の思想を發表し得べき性質を有するものなり。卽ち觀念語は或る觀念を明かに指定せるものにして、一定の關係に立ちて用ゐらるるものなり。その關係をあらはす語は極めて抽象のものにして所謂助詞と稱せらるゝものなるが、これは元來國語に於いて觀念語操縦の爲に生ずる種々の關係の範疇を抽象したるものが言語の形をとれるものなりとす。

この觀念語と關係語との區別はたゞ意義形態の上より來れるにあらずして、實に談話文章を構成する上に及ぼす職能作用の異同より來れるものなりとす。この場合の差別は三の點に於いて著しく認めらる。まづ觀念語はすべて時としてその一の語のみにても一の思想を發表し得る性質を有すれども、關係語にはその性質の無きことなり。たとへば「犬」と叫ぶ時に、それは「犬が來た、氣を附けよ」といふ如き意味の發表となり、又「來た」といへば、かねて豫期したりし人若くは物の出現したる場合などにその意味の發表となり、又「さあ」といへば、他人の注意を喚起して、そこにあらはれたる事をさとらしむる用をなす意味の發表をなすものにして、これらの場合の「犬」「來た」「さあ」といふは一の語にして、同時に一の思想をその一語にて發表したるものなり。而してその「犬」は體言「來た」は用言「さあ」は副詞たるなり。かくの如く觀念語は必要に應じて一の語を以て一の思想を發表し得る性質を有す。然るに關係語たる助詞にはこの性質全く缺如せり。觀念語と關係語たる助詞との區別はかくの如き文法上の重要なる特色の上に存するものにして、たゞ觀念が具象的に認めらるゝか否かといふ如き淺薄なる點に存するものにあらず。次には二者が助くるものと助けらるゝものとの關係に立ちてあることとなり。即ち一は他を助くるを職能とする性質のものにして、他はそれらに助けらるゝ性質のも

のにして、この差別はその本性上の差異に基づくものにして、論理上二者は判然と區別せらるべきものなりとす。而してこれを助くと助けらるとの關係より見れば、關係語たるものは、その文法上の重要性はその助けを受くべき性質のものよりも大なりといふべき程のものなりとす。かくてその助くるものと助けらるゝものとの差別に基づいてなほ他に一の重要なる特色あり。そは關係語たる助詞は必ずその助くる對者たる語の下について決して上には行かぬといふ語なり。以上の三者卽ち文法上の職能と語の助くるか助けらるゝかの關係と、上にあるか下にあるかの位置との三點よりして關係語たる助詞と觀念語とは明白に區別せらるべきものなり。

かくてこの觀念語を同一面より見れば皆一致する點あるものなれど、なほ進みてそれらの間に異の方面を認めて、之を論理學上に所謂自用語となるものと副用語となるものとの二者に區別すべきものなりと思ふ。この自用語副用語の名目は論理學に用ゐる術語なるを借りて說明に供したるなり。自用語といふは、それ自身に獨立して觀念をあらはすのみならず、談話文章を構成する骨子となり、陳述をなす場合の直接材料となる性質を有するものにして、所謂名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞等を總括したるものなり。副用語とは觀念をあらはすことを得るは自用

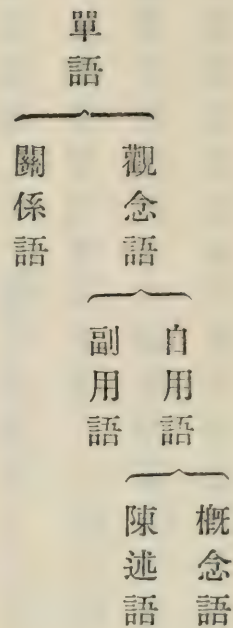
語に異ならざれど、談話文章を構成する直接の骨子となることなく、必ず他の觀念語、即ち自用語が之に先だちて存立してあることを條件としてそれに依りて存し、それによりてはじめて談話文章の構成の成分となるものたるなり。この副用語は意義よりいへば依存的のものにして、作用よりいひても副次的のものにして、獨立して談話文章の中心の骨子とはなり得ざる性質のものなり。この副用語たるものは、談話文章の構成について見れば、もとより第一次の構成要素たれども、その意義を他の觀念語と比較して見れば、副次的のものたる性質を有するに止まる。隨つて之を用ゐたる時には必ずそれらの依存する他の觀念語即ち自用語の先づ存在することを豫示とし、それを條件とするものなり。この種の語は所謂副詞、接續詞、感動詞と稱せらるゝ類のもの之にあたる。かくて自用語と副用語との關係は自立して談話文章の骨子となるものと、それら自用語をたよりとしてそれに對して副次的に用ゐらるゝものとの關係にして、これが區別は他にたよる性質のものと、それにたよらるゝ性質のものとの差別に基づくものにして、これ亦論理上二者は判然と區別ありと認むべきものなり。かくこの二者の區別は性質の上に存するに止まらずして、それらが用ゐらるゝ場合の位置は必ずそのたよりとする語の上にあるべきものなることは國語の副用語の上に存する嚴密なる法則たり。

かくの如く骨子たるものと、副次的のものとの區別、たよるものとたよらるゝものとの區別、副用語が用ゐらるゝ時には必ず自用語の上にあるべき用法上の區別、この三點に於いて明かに自用語と副用語とは文法上區分せらるべきものなりとす。かくて、副用語が自用語をたよりて存し、しかも必ずそれらの對者の上にあることは助詞が他の語を助け、しかも必ずその對者の下にあることゝ相對して明瞭なる相對的背反を示せることは著しきことなり。

かくて又同樣の理によりてこの自用語のうちにても區別を施すことを得べし。これらは同の方面より見れば、皆談話文章の組成の骨子たる點に於いて一致するものなるが、今これに分類を施さむが爲に異の方面を觀察せむとす。かくて顧みれば、談話文章は實にそれが資料たる概念と、その概念を結合統一する陳述の力とを要するものたること明かなり。こゝに於いてその自用語中につきて顧みるに、その資料たる概念を代表する語あり。今假りにこれを概念語といはむと欲す。これに屬するものは所謂體言にして名詞、代名詞、數詞等これに屬す。又その陳述の力の寓せられたる語あり。今假りにこれを陳述語といふ。これに屬するものは所謂用言にして、形容詞、動詞これに屬す。かくてこの概念語と陳述語との區別はたゞ意義のみの差にあらずして、一方よりいへば陳述をなす力を有せるものと

陳述の力を有せざるものとの差にして、論理上明白に區別せらるべく、一方よりいへば、陳述をなす時の材料に用ゐらるゝものと、その材料を用ゐて陳述をする職能を有するものとの差にして、これらの二者は文法上全く區別ありといふべし。

以上說く如く

- 單語
  - 觀念語
    - 自用語
      - 概念語
      - 陳述語
    - 副用語
  - 關係語

四の大なる區別が國語の單語に存すること明かなるが、この概念語、陳述語、副用語、關係語などの名目は人の耳目に馴れざるを以て、實用上には世上普通の名目を用ゐて概念語をば體言といひ、陳述語をば用言といひ、副用語をば副詞といひ、關係語をば助詞といふこととゝせむ。

余はこゝになほ他の方面よりして上の四に類別することの妥當なることを證すべし。抑も國語の特性の一は實にその語の性質によりて語の位置の本質的に一定せる點にあり。實に國語にありては語の種類によりてその語の用法上の位置に殆ど一定せる約束あるなり。先づかの關係語たる助詞と觀念語たる他の三

類との位置上の關係を見るに、關係語たる助詞は常に觀念語たる他の三者のいづれかに附屬し、又それらのいづれにも附屬し得る性質のものにして、しかも常にそれが助くる語の下にのみありて上に行くこと決してなし。次に副用語たる副詞と自用語たる他の二者との位置上の關係を見るに、副用語は必ずそれらの對手たる自用語の上にありて、決して下につくことなし。かく關係語は必ず下にのみつき、副用語は必ず上のみありといふ點はこれらの語の性質に基づく外形上の特徴にして富士谷成章の「かざし」「あゆひ」の命名の基づく所實にこゝに存するなり。この故にこの二者は體言、用言の二とは全く別なる部分として、しかも二者の間に相背反する點著しくて、全く別なるものとして、各特有の價値を有すること再び論ずるまでも無く明白なりとす。

槪念語と陳述語との關係は前二者よりも複雜なり。陳述語たる用言はその本性たる陳述をあらはすものとして使用せらるゝ時は必ず下位にありて槪念語の上にあることなし。かくてこの陳述語は陳述の力を有することを本質とすれども、それは多くの場合に於いて、陳述の材料に供せらるべき屬性をも伴ふものなり。かくの如く屬性を伴ひて陳述をなすことよりしてこの種の語は別に發達をなして、その屬性を以て槪念語を裝定する用法に立つことあり。かゝる時には又必ず

その對手たる語の上にありて下にあることとなし。かくて陳述語たる用言はその陳述のあらはし方の種々の場合又概念の裝定をなす場合等によりて語形の上に變化を起す。概念語に於いてはこの事全くなし。この點に於いて概念語たる體言と陳述語たる用言との區別を明確に認め得るなり。

吾人がこゝに體言用言といふ事をいへるが、この名目は從來の學者のいへるものと同じ。されど、この二種の區別は意義に於いて從來の說とは大に異なる點あり。吾人の體といひ用といふは論理學上の語にていはゞ、主として主位に立つを得るものと主として繫辭(Copula)に立つものとの區別に近し。されど、これにてもなほ盡さゞる點あり。この故に次になほ詳論すべし。

體言は概念をあらはす語なり。これらは吾人の格助詞に接して種々の關係を他の語に對してあらはすことを得べし。而してそは如何なるものが之になるかといふに、實に吾人が胸中に於いて一の概念として思惟するものは悉く皆體言たることを得るなり。それ吾人の胸中に、ある一の思想の活動するや混然たる狀態を呈するものなるが、一度思考を之に加へば、こゝに二の異なるものを生ず。即ち先づ實在と思惟するものを認め、又別にこれが屬性たるものを認む。この二は實際上決して分離せるものにはあらねど、吾人の思考の方便としてこれを分離せし

めたるものなり。從つて言語の上に於いて二樣の區別を生ず。こゝに實在といへるは必ずしも哲學上にいふ嚴密なる意義の實在にあらず。事實にあれ、空想にあれ、抽象的概念にあれ、具象的概念にあれ、人の思想に於いて實在なりと認めたるものゝ謂なり。正邪善惡美醜眞僞の判別は語學の關する所にあらず。吾人の體言は實にかゝる意義にての實在を代表する單語なり。この故に吾人が一の概念と認めたるものは何にてもあれ、言語として發表する時は直ちに體言としての取扱をなす。この故に用言にもせよ、助詞にもせよ、副詞にもせよ、はた外國語にもせよ、これを一の概念として取扱ふときは直ちに體言の資格を有するなり。吾人の體言と稱するものは實にかくの如し。

さきに體言は概念を代表する語なりといひ、又人の思想に實在なりと認めたるものは卽ち體言としてあらはすことを得る由をいへるが、これにはなほ委しく說明すべき點あり。今吾人が實在といふ語を用ゐるときには直ちにこれに對する屬性といふ概念を想起すべし。この屬性が言語として發表せられたる時にはこれは何の種類に屬すべきかといふことこれなり。凡そ屬性の言語によりて代表せらるゝものにつきて國語の實際を顧みるに三の狀態ありとす。一は副詞として發表せらるゝときと一は用言として發表せらるゝときと一は體言として發表

せらるゝときとあるなり。属性はその本來の性質としてある實在の概念の先づ存するにあらずば考へられざるものなるが、そが屬性としての本來の性質を發揮し全く實在に依りてはじめて用をなすべき副次的成分たる性質のまゝ言語としてあらはるゝときはこれ明かに副詞たるなり。たとへば「白げ」といふが如く、「遙か」といふが如きこれなり。次にその屬性は本來ある實在に依りて存すべき性質のものなれば、その屬性がそこに存すといふことの説明陳述をなす語としてあらはるゝことあり。かゝるときにはその屬性はたゞ屬性としてのみあらはさるゝにあらずして、それと共に説明陳述をなす精神の統一作用をも伴ひてあらはさるゝなり。これ即ち用言といはるゝものにして、これによりては吾人は單に屬性のみを認むることなく、同時に陳述説明の精神の作用のこれに混入してあるを認む。かく用言は屬性のみのあらはれたる單純なる語にあらざるを以てこれは別に論ぜざるべからず。第三には屬性を以て一の概念として取扱ふことなり。かく屬性を以て一の概念として取扱ふことは吾人の日常に起る所なるが、かく一の概念として取扱ふ以上これを言語にて發表せるものは一の體言として取扱はるべきはいふを待たざるなり。こゝに於いて哲學上にいふ程、嚴密ならざるものなれど、普通に屬性といふものが、吾人の國語にあらはるゝに副詞と用言と體言との三種

類に分れてあらはされ得るものなるを知るべし。かくしてその三種に分れてあらはるることは即ち一方に於いてこの三種が觀念語として共通する性質を有することゝ、他方に於いてこの三種の言語が性質及び作用の大に異なるものなることを證明せるものといふを得べし。さて副詞の事は既にいへれば、こゝには體言用言の差違をこの點よりして更に明かにすべし。

抑もかの實在と思惟するものとそれが有する屬性と思惟するものとを結合して、これを統一して思想に上すことはこれ實に人の精神の貴重なる作用にして思想の根本たる要素なり。今こゝに實在とそれの屬性とが相對立するものとせば、其の間の關係を統一し、異同を決定する作用なかるべからず。實在の觀念と屬性の觀念とありとても吾人の思想のこれを統一することなくば、唯片々たる觀念の累々たるのみにして一の思想を組織すること能はざるべし。この故にこれらを統一する精神の作用が、この實在と屬性との外に存在するは明かなり。こゝに於いて思想を嚴密なる意義にて分析せば、精神の統一作用と、それによりて統一せらるべき材料たる觀念との二者の相對して存するを知るべし。その材料たる觀念は更に分解して實在とその屬性とに分ち考ふるを得べく、こゝに實在、屬性、精神の統一作用の三者ありてはじめて一の思想の成立するを見る。而もその三者中統

一作用の思想上最も必要なることはこれを缺かば、思想は毫末も成立することは能はざるによりても明かなり。吾人が用言として一括したるものは多くの場合に於いて屬性觀念をも伴ひてあらはせりといへども、その本體は精神の統一作用をあらはせる點にあり。吾人のいふ用とは思想の運用の義にして用言とは人の思想の運營によりて生ずと認めらるゝ統覺作用の寓せられたる語の義なり。統覺作用の寓せられてある語卽ち用言たるものにして從來の說明の如くはたらき詞又は「はたらき」をあらはす語といふ如き意にはあらず。この用言には統覺作用と共に屬性觀念もあらはすことあれど、屬性觀念の存することはいはゞ用言としては偶然的現象にして用言の必然性としてこれが存在を認むべきにあらず。何となれば既にいひたる如く屬性觀念は副詞としても體言としてもあらはされ得るものなればなり。こゝに於いて用言の用言たるべき特徴は統覺の作用卽ち語をかへていはゞ、陳述の力の寓せられてある點にあり。この陳述の力の寓せられてありや否やの點が、かの體言と用言との區別をなすべき主眼點なりとす。かくて體言と用言とは必然的に區別せらるべき根本的の差別あること明かなりとす。

以上述ぶる所によりて體言、用言、副詞、助詞の四の區別は意義の上より見ても語の形の上より見ても語と語との關係の上より見ても、談話文章を構成する職能上

の關係の上より見てもいづれより見ても當然區別あること明かなり。しかしてこの四大別は談話文章を、線狀に區別せる部分として相侵すことなく、又それら四に分ちて空隙なきを見れば、この四大種に分類することは、國語の特性に基づきたる類別としては必要にしてしかも十分なりといふ條件に適合するものといふべきなり。

以上述ぶる所は單語の性質の分類にして單語以外の融合語、合成語等にありても、上の四類のいづれかの性質を有するものなれば、それらの性質を論ずる場合にはそれぞれ上の四類のいづれかの內に於いて之を攝して論ずべきものなり。又この分類によりて生じたるものは性質上の名目にして用法上の名目にあらねば、之を用法上の名目として用ゐることは研究上混亂を生ずるが故に注意するを要す。世にはたとへば副詞といふ如き名目をば性質の上にも、用法の上にも、句法の上にも同じやうに用ゐること少からず。かくの如きは不合理なることにして研究上不都合なる結果を導くべきおそれあるにより、吾人は性質上の名目は性質を論ずる際の必要に應ずるに止めて、用法上よりは又別に範疇を立て以て一見して性質上よりの名目なりや用法上よりの名目なりやを識別し易からしめむとせり。この事豫め注意を要す。

第六章　體言概說

體言は概念をあらはす語にして談話文章の骨子となるものなり。この體言といふことは本邦古來の分類に於いて用ゐ來れる名目なるが、これはある概念をあらはす語といふ意味にして活用せぬ語といふ意義を以て名づけたるものにあらず。しかしながら事實上活用せぬものなれば、或は初學者の爲にしばらく活用せぬ語といひてよきやうに思はるれど、活用せぬ語はすべて體言なりといふことを得ざるにより、いづこまでも體は本體又は主體の意義に說かざるべからず、元來體といふ語は用に對する語にして用は作用現象などの義、體はそれの基づく實體をさすものにして、支那の儒學特に宋學の盛に用ゐたる術語にして、それの基づく所は佛敎にて體相用の三を相待的に用ゐしにあるが如し。これらの體は英語にていふ Substance の義なり。語の分類上にては哲學にていふが如き嚴密の實體といふ程の意義はあらざれども、かの形のみを見て、語尾變化なき語の一名なりとする如きは當らざること勿論なり。

本邦にて語の性質を論ずるに用ゐたる體用といふ語は恐らくは連歌より出でしものならむ。連歌にてはその作歌上の必要よりして語の體用といふ事を深く

注意したり。然れども、その體用といひたるは今いふ體言用言とは同じきものにあらず。契沖に至りて體用といふことをいひて略今日の體言用言といふに似たる用ゐ方をなせり。しかしながら、それとても語の分類の名目とせしにはあらず。鈴木朗の言語四種論に用ゐたる體の詞といふ語は明かに余がいふ如き意に用ゐたり。然るに明治時代に入りての文法家は殆ど皆體言といふは語尾變化のなき語といふやうに單に形のみの說明に陷れり。この故に副詞接續詞甚だしきは感動詞までも體言なりといふ有様となれり。かくの如きは體言の意義を誤れるものにして沙汰の限りといふべきなり。

既に述べし如く體言は吾人がある實在と認めたる場合の事物を代表する語なり。これを他のいひ方にてあらはせば、概念の言語にあらはされたるものこれ體言なりといふを得べし。こゝに概念といへるは必ずしも論理學上にていふ如き嚴重の意義あるものにあらざるを知らざるべからず。かくて吾人の體言は嚴密に或る概念を代表するもあれば、直接にあらずして間接に或る概念を指示することあり。然れどもその究竟する所はとにかくに一の概念に止まるものなりとす。吾人の體言の意義右の如くなれば、宇宙の森羅萬象如何なる事物にてもあれ、吾人の意識に於いて、一の個體として認識せらるゝものは、之を一の語にてあらはす時

皆體言の資格を有す。かくして又用言にても、副詞にても、助詞にてもこれを吾人の思想の對象とする時にはこれを一の概念として取扱ふが故に、その場合は皆體言の資格を有することとなるべし。たとへば

花咲くの「咲く」は動詞なり。

といふ時「咲く」は體言の取扱を受く。又

梅の花といふ場合の「の」は助詞なり。

といふ場合に「の」は體言の取扱を受く。かくの如く何にても吾人がこれを思想の對象とする時にはそのまゝ體言の取扱を受くるを得るなり。かゝる現象は體言に於いてのみあらはるゝ現象なり。さてかく本來體言ならぬものも體言として取扱はるゝに至るものありとせば、その體言と然らぬものとを如何にして區別し得べきか。こゝに問題は體言の文法上の性質如何といふことに移らざるべからず。

體言の文法上の性質はその職能とその形體と他の種類の語との關係とにより て區別するを得べし。

體言の文法上の職能は或は思想の主體となり、客體となり又、他の種々の語に對して觀念を補充し又は修飾限定する用に供せらるべし。思想の主體となりたる

ものとは

花は咲きたり。

我は學べり。

五は十の半なり。

の「花」「我」「五」の如きをいふ。思想の客體となりたるものとは

これは花なり。

これを畫きたるはわれなり。

二と三との和は五なり。

の場合の「花」「われ」「五」の如きをいふ。他の種の語に對して概念を補充する用に供せらるゝものとは、

鶯は花に鳴く。

その事をわれに教へよ。

五に三を加へよ。

の場合の「花」「われ」「五」の如きをいふ。又他の語に對して修飾限定するものとは

花の繪

わが家

五の物

の場合の「花の」「わが」「五の」の如きこれなり。これらのうち修飾限定する用法は用言にも副詞にも共通する點あるものなれば、これらは體言の特質といふべからず。この說明その體言の資格の最も重要なる點は說明の主體に立ちうる點にあり。この說明の主體に立つことはこれ體言の本質的に有する特性にして他の種の語には本質として存せぬことなり。かくして用言、副詞、助詞などは、本性上、主體に立ち得べきものにあらざるなり。されば、體言の本質はこゝに存すといふべきなり。然らば、これを以て體言と他の種類の語との區別を明かに認めうべきか如何。

體言の本質は上述の如く、說明の主體となるべき點に存すること明かなり。然るに、體言ならぬ、用言、副詞、助詞も、これを說明の主體とせむ時には臨時に體言の取扱を受くること往々あることは既にいへる所なり。さてもかくの如くなる場合はもとより、それの用言、副詞、助詞の本質に基づくものにあらざるは明かなりといへども、しかも、かゝる現象のたとひ臨時の場合といへども既に存すること明かなる以上、これを以て、體言のみの特色といふには躊躇せざるべからず。かくの如くなる時は、終に體言とその他の語との區別を立つる特徵を求めうべからざるが如し。されど、なほ一步を進めて考ふれば體言には、なほ他の著しき特徵あり。そは

何ぞといふに、所謂呼掛の對者となることなり。たとへば、

花よ、咲け。
友よ、來れ。
君、これを知れるか。

の如き場合の「花よ」「友よ」「君」の如きものこれなり。これらは文法學上呼格と稱せらるゝ用法にして、これらの呼格に立つことを得るは體言のみの特色にして他の觀念語たる用言、副詞には無き所なり。況んや關係語たる助詞は全然かゝる事をなしうべきにあらず。されば、この呼格に立つことこそ眞に體言特有の現象にして吾人はこれを以てこれを他の種類の語と區別をなすべき第一の特徵とすべきものなりと思ふ。

體言の形體上の特徵は文法上の語形の變化なきことに存す。こゝに文法上の語形の變化といへるは文法上の職能の變化に對應して必然的に起るべき語形の變化をいふなり。體言も場合によりては音の變化なしとはいふべからず。「サケ」の「サカヤ」「スゲ」の「スガハラ」「ツメ」の「ツマサキ」「アメ」の「アマガサ」となるが如きこれなり。されど、これらの音變化は文法上の職能卽ち文の組織の上には關係なし。この故に體言には文法上の語法の變化なしとするなり。

體言が他の種類の語との關係に於いて有する特色と認むべきものは所謂格助詞を伴ひて他の語に對しての種々の關係をあらはす點にあり。格助詞といふは「ガ」「ノ」「ヲ」「ニ」「ト」「ヘ」「ヨリ」「カラ」(口語にてはこの外に「デ」あり)等なるが、これらは、體言に附屬して、それが、他の語に對する關係を明かにす。この關係的の地位を格とは名づくるなり。而してこの格助詞の接するは體言の特性にして如何なる語も體言の取扱を受くる時はこれらの助詞を伴ふことゝなるなり。されば外形上體言なることを明かにせむとせば、それが文法上の語形の變化なきことゝ、格助詞を附くることゝによるべきなり。

體言には種類を分つことありや如何。體言をば名詞、代名詞、數詞に分つこと現在普通に行はるゝところなるが、これは果して相當の根據ある事なりや。今これが考察にうつるべし。體言は概念をあらはすものなることは既にいひたる所なるが、その本體は概念をそのまゝ代表するにあるものなるべし。然るに、こゝに同じく體言と認められながらその概念のあらはし方に差異あるものを見る。こゝに於いて、これらの區別につきて考ふるにその語が、具體的に實質ある概念を直接にあらはすか、或は汎く形式的なる概念を以て間接にそれらをあらはすかにより て先づ二に大別するを得べし。一は內容の一定せる概念をあらはす語にして、こ

れを實質體言といふべく、一はその語の示す特定の意義の存するは勿論ながら、これに對する一定の實質のなきものにしてこれを形式體言といふべきなり。

實質體言は體言の本體たるものにして、所謂名詞と稱せらるゝものこれなり。これはある概念がその實質を直接に代表せる語なれば實質の異なるものには適用すべからざる性質を有するものなり。

人　馬　草　石　机　精神　鬼　學問

等皆これなり。これらはそのさす所の實體現に存するか、若くは存在すと思惟せられて、その實體一定して他の物に交換すること能はざる性質を有するものとす。

形式體言も亦一の概念をあらはすものなれば、それらには各一定の意義あり。而してその意義は互に相犯すべからぬものなりといへども、それが意義に對しての一定の實在は存せず、吾人の思想によりて或は甲をも乙をも丙をも丁をも思惟しうる或抽象的の形式を言語に發表したるものなり。この故にこれらは間接に實體をさすことありといへども、直接にそれに固着せる實體は存在せぬなり。

我　汝　彼　一　二　百

等これなり。この類の體言は又そのさす所の意義の差によりて主觀的のものと客觀的のものとの二に大別すべし。

主觀的の形式體言とは說話者自身の主觀と特別の關係を生じたる場合に於いて客觀その者を指示する場合の區別をあらはせるものなり。而してその各語に對して一定の實質なく、說話者の觀察又は思惟の態度如何によりて任意に或る實體をさすをうるものなり。即ち

我　汝　彼　此　其　誰　此處

等、これにして說話者はあらゆる實質に對してこれを用ゐるをうべく、しかもそれは說話者の思惟の態度によりて任意に補塡せらるべきものにしてその見地次第によりて樣々に變更せらるべきものなり。これ即ち世に所謂代名詞なり。

客觀的の形式體言は客觀その者の存在の形式即ち事物存在の形式を計量したる結果をあらはしたるものなり。これもその語に對應する固定的の實質は存在せざるものにして、如何なる事物にも應用せらるゝことと形式體言たる一般の通性を有す。しかるに、その數量といふものは客觀的に一定せるものにして主觀を以て任意に變更することと能はざるものとす。これ所謂數詞なりとす。かくてこの數詞が外形上たゞの名詞と異なる點は數量を示す一定の用法に存す。この事は下に別に述ぶることゝすべし。

第七章　名　詞

名詞とは名目の詞といふ意にして、事物の概念を直接に代表せる體言なり。この名詞の說明につきては一の注意すべきことあり。名詞は名をあらはすと說明することと往々行はるれど、誤解を招き易し。本邦にては普通に名又は名稱といへば多くは人名、地名、物名など所謂固有名詞に限らるゝ傾あり。されば、名目の詞といひたる方よかるべしと思ふ。

名詞は概念其の者を直接に代表したるものなるが故に其の概念は思想の對象として立ち得べく、從つて實在し又は思想的に實在するものなりと思惟する箇體的の觀念ならざるべからず。其の實在すと思惟せらるゝものは想像的のものにても理想的のものにても空想的のものにても事實的のものにても具體的にても抽象的にても形而下にても形而上にても、とにもかくにも、ある實在と思惟するものをあらはすものならば、これを名詞として取扱ふべきなり。この場合は眞僞善惡美醜等は一切關係なきものなりとす。

前章に他の類の語もそれを思想の對象として卽ち一の概念として取扱はるゝときは體言の資格を與へらるゝものなりといへるが、それらの場合の語の取扱は

形式體言には關係なきものにして實質體言たる名詞としての取扱を受くるものなりとす。

國語の名詞には種類を分つべき文法上の必要なきなり。今この事を少しく述べむ。先づ國語の名詞には地名人名等を特別に記すべき規定もなく、又さる規定を設くる必要もなし。かくて又英語などに於ける冠詞といふものなし。從つて名詞を普通名詞、固有名詞とか、集合名詞、物質名詞、抽象名詞などいふ種類に區別する必要なしとす。英語などの名詞には固有、普通、集合、物質、抽象等の區別をなす。而してこれらの語法にては固有名詞は通例冠詞をとらず、又これを書記する時は必頭を花文字 capital letter にて記すべき法なり。普通名詞及び集合名詞には冠詞を附するを通則とし、その意義によりて如何なる冠詞を附すべきかのそれぞれの法則あり。而して物質名詞、抽象名詞は通常冠詞を附せざるものとせり。さて又名詞はその種類の如何によりて性又數の上に一定の規則あるものも少からず。この故にかれらの文典にてはかくの如く區別して研究することは文法上必要なることとなり。されど我が國語には一切かくの如きことなし。もとより意義の上よりかくの如き事を區別して理解することは必ずしも妨げずといへども、そはただ意義の上に留まることにして、日本語の文法上その區別を立てざるべからざる

必要は全く存せざる所なり。

以上述べたる所は西洋文典に模倣せる種類分けの不必要なることをいへるものなるが、なほこの他にも或は有形名詞、無形名詞の二に別ち、或は具體名詞と抽象名詞とに分ち、或は又居名詞、略名詞等の名目を立つるものあり。或は合名詞、轉成名詞などの名目を立つるものあり。かく種々の名目を立てゝ區別をなすことは語の意義の研究又は語の成立の研究に多少の利益なしとはいふべからざれども、文法上には何の必要もなきものなれば、文法學上これらの區別を立つることは全く徒勞に屬すべきは明かなり。

國語の名詞には文法上の性の區別をなす必要なし。西洋文法にてはすべての名詞を性の區別にあてはめて、以て文法上の繁雜なる規定をなせり。即ち有生物は勿論草木土石山川よりはじめて天地の現象、無形の人事及び抽象概念に至るまで男女の兩性若くはなほその中間の性を與へてこれを區別せり。而してその男性女性の區別の如きは常識より見て頗る不合理と思はるゝもの少からず。例へば英語にて

太陽 sun　死 death　戰爭 war　は男性

月 moon　生 spring　平和 peace は女性

なるが如きこれなり。さて又一方獨逸語を顧みれば

太陽 die Sonne (女性)

月 der Mond (男性)

の如く英語と獨逸語と性の反對なるものあるのみならず、獨逸語にての性の不可思議の區別あるものをあぐれば、同じ女といふ語にして

die Frau 女、婦 女性

das Weib 女、妻 カカア 中性

の如きあり。又人間といふ語は男女いづれにも通ずるが故に中性なりやといふに

der Mensh 男性

なり。而して男は卽ちすべて男性たるべきに

der Mann 男 男性

die Schilwache 番兵 女性

das Männchen 小男 中性

の如きあり。又吾人に殆ど同樣なりと思はるゝ無性物にも

der Tisch 卓 男性

die Tier　戸　女性
das Fenster　窓　中性

の區別あり。又同じ乳にてもこれを分ちて三性とせる

der Milchbrei　乳漿　男性
die Milch　乳汁　女性
das Milchmutz　乳漿　中性

の如きあり。以上はもとより著しき例をあげたるものにして、自然の性の區別と文法上の性の區別とは大體一致する所あるは勿論なれど、又矛盾或は常識にて判別すべからぬ所頗る多し。而してその性の區別をなせる文法上の必要は奈邊にありやと考ふるに、もとより一にあらざるべきが、少くとも代名詞と關係を有する點を最も重要なりと考ふべし。卽ち男性の名詞に對しては男性の代名詞にて代表せしめ、女性の名詞に對しては女性の代名詞にて代表せしめ、中性の名詞に對しては中性の代名詞にて代表せしむるにあらずは文法上破格となるなり。この故にかれらの名詞の性の區別はかれらの文法上にては必要なる一事件にして漫然と區分したるものにあらず。なほいはゞ、英語などにては名詞にいふ性の區別は殆ど意義の上に止まれど、獨逸語などにては語形の變化の上にも多少關係あるの

みならず、代名詞は勿論冠詞、形容詞にも相當するものを用ゐて語形の變化をなす規定あるなり。なほいはゞ英語、獨逸語、羅甸、希臘の諸語は男女中の三性を區別すれど、佛蘭西語、丁抹、那威の語等は男女の二性に區別するに止まれり。而してその性の區別の數の多きは亞弗利加の野蠻人たるバンツーの語にして、實に十二以上二十一までの性の區別をなすといへり。されば文法上の性の區別の有無多少は言語の文野には何の關係なきものなるを知るべし。

わが國語の名詞にても性の區別をあらはさむとせば、性に關する名詞をその上に冠せしめて合成語となしてこれをあらはすを得べし。たとへば、

をうし　めまつ　をんどり　めんがひ

の如き類これなり。而して又別に名詞自身が本來性の一方をあらはせるものあり。

ちち　はは　あに　あね

夫　妻　をとこ　をとめ

などの如し。されどこれらは性に關する名詞といふべくして、名詞の文法上の性にあらず。文法上の性は上述の如くに事實上の性の名詞の上に更に與へられたる言語操縦上の區別なるものなり。然るに世には往々上例の如きを以て名詞の

性なりといふものあれど、これらは性に關する名詞といふべきものにして、名詞の文法上の性といふべきものにはあらず。この性に關する名詞と名詞の性といふことゝの區別はたとへば、缺乏の感情と感情の缺乏との如く、なほ卑近にいへば人なき家と家なき人といふが如く思想上明かに區別せらるべきものなるに從來の文法家は往々かゝる睹易き分別を混同して上例の如きものを名詞の性と說き去るものあり。若し又これが文法上の性なりと假定すとも、これが冠詞にも代名詞にも關係なく、其の他文法上一切何の必要もなきに區別を立てたりとて何の益あらむや。況んやそれが文法上の性にあらざるにおいてをや。

國語の名詞には文法上の數の區別をなすの必要なし。若しその特に多數なることを示さむとせば、その語を重ねて示すか、或は多數を示す接尾辭を添へざるべからず。世の文法學者又名詞の數といふことを說けり。これも西洋文典に心醉したる弊なり。たとへば英文法にていへば、それは單に、名詞が多數をあらはすか單數をあらはすかの意義上の區別をなすのみにあらずして、代名詞及び動詞に關係あるなり。卽ち單數の名詞は單數の代名詞にて代表せしめ、これを主格とする場合に述語たる動詞は單數形を用ゐ、複數の名詞は複數の代名詞にて代表せしめ、これを主格とする場合に述語たる動詞は複數の形を用ゐる規定なり。この故に

その數の區別もかれらの文法上必要なる事柄になりてあるなり。かくて又この名詞の數といふものは單數複數の二に止まれりやといふに、必ずしも然らず。梵語、古代の希臘語などには兩數(dual)といふもあり。たとへば梵語にては

devah (單數)

devāh (兩數)

devāḥ (複數)

とする如くそれらの語にては單兩複の三數に分ちてあり。かくてこれ亦文法上それぞれの規定あるなり。わが國の語法には全くこの事なきなり。この故に語の意義又は成立の研究などにはこれらの事必要なる場合もあらむとすとも、文法上には何等の必要なきこととなりとす。

國語の名詞には稱格を形式にあらはして區別することなし。ここに稱格といふは西洋文典の person の譯語にして、これを第一稱格 first person 第二稱格 second person 第三稱格 third person の三とす。第一稱格は說話をなす者自身をさし、第二稱格は說話を受くる對手をさし、第三稱格は說話の內にあらはるる一切の事物をさすなり。しかるに之を人稱とも譯するによりてこれを人に限るが如くに考へたる爲か、第三稱格に於いて從來甚しき誤をなせり。その委しきことは代名詞の

條に讓り、こゝには名詞に關して必要なる點のみをいふべし。この稱格といふものは、說話文章には必ず存する事柄にして、或る國語に在りて他の國語にはなしといふが如き性質のものにあらず。日常の談話にも存するはいふまでもなきが、それの文章として明かに認めらるゝは手紙なり。即ち手紙にてはその手紙を差出す本人は即ち第一稱格に立ち、手紙を受取るべき人は第二稱格に立ち、その手紙の中に說話の材料たる一切の事物は第三稱格に立てるものなり。この區別は手紙のみにあらず、演說などには盛に繰返さるゝものなるが、一切の文章にこの稱格の存せぬことは決してなきこととなりとす。西洋文典の所謂稱格は名詞以外代名詞、動詞等にも文法上一致せしむる必要ありてその硏究また必要なりとせらる。わが國語にはこの稱格をば文法上の形式にあらはして區別することなし。この故にその點より見れば、必要なき如くに見ゆるなり。然るにこゝに從來の文法硏究に殆ど全く捨ておかれたるさまに見えてしかも重要なる敬語あり。この敬語は稱格に對して極めて深き關係を有するものなれば次にこれを說くべし。

敬語が稱格に關聯するものなることは從來の學者のこれを說けるを見ず。然れどもこの敬語は己の事をいふ場合には謙りていひ、他人の事をいふ時には敬ひていふものなるのみならず、下に次々いふ如く實際稱格の如何によりて用ゐ方の

上に一定の法則あるなり。この事は余が首唱する所なるが、これは確かに國語の法則として成立ち、又必要なるものと思はるゝなり。

敬語は之を敬稱と謙稱との二に大別す。從來敬語を文法書中に說けるもの無きにあらねど、それらはたゞ意義の上のみにして文法上の位置を指定したるものは未だ見ざりし所なり。余が敬語をかく二大別するは單に意義の上よりいへるものにあらずして、實に稱格の差違に基づきてこれが區別の必然に存すべきものなるを主張するなり。

謙稱とは第一稱格に立てる者が自己をさし、又は自己に附屬するものをさして他に對して謙遜の意をあらはす敬語なり。なほこれにつきて說明を加へむに謙稱が謙遜する意をあらはすものなるはいふまでもなし。その文法上の地位は第一稱格が主格にある時に自身をさし、又は自身に附屬連關するものをさすに用ゐるものなり。かくいへば文法上の地位も明かになり、又その用ゐ方の當否なども明かに判斷するを得べきなり。今この種に屬する語の例を少しくあぐべし。

拙者　小生　迂生　手前

以上の如きは從來代名詞と稱せられたるものなり。然れどもこれを名詞といひて差支なきなり。謙稱の名詞として說明すれば、極めて明瞭なり。

愚父　拙母　愚弟　荊妻
やど　豚兒　せがれ
これらは己が身内をさしていふ謙稱語なり。
弊地　弊村　拙宅　弊店
これらは己が居る土地住所等をさしていふ謙稱語なり。
寸簡　拙筆　拙著　こしをれ
これらは己の書札筆蹟製作等をさしていふ謙稱語なり。
愚存　微衷　鄙見　寸懷
これらは己が心につきていふ謙稱語なり。
粗膳　粗飯　薄謝　寸志
これらは己が人に贈る物につきていふ謙稱語なり。以上たゞ主なる例をあげたるに止まる。これらにつきては名詞の意義のみならば、かくの如き區別をなす必要殆どなきが如くなれども、これが用法上動詞に關聯する點あることを考ふるときはこの區別は文法上なほ重要なることをさとるべし。
敬稱とは對者又は第三者をさし、又はそれらに附屬連關する者をさして尊敬の意をあらはすものにして、これを更に、對稱の敬稱と一般の敬稱との二に大別す。

第二稱格に立てる者をさし、又その第二稱格者に附屬連關するものをさす時に尊敬の意をあらはす語あり。これを對稱の敬稱といふ。從來謙語と敬語との區別をなせるものもその狹義の敬語中に更に區別すべきを唱へたるもの殆どなく況んやそれが文法上の位地を說けるもの全くなし。こゝに對稱の敬稱といへるものは第二稱格をさし、又は第二稱格者に對してそれに附屬關聯するものをさす場合に限るものなれば、一般の敬稱と區別あるは明かなるが、これが區別の特に著しきは候文に於ける場合なりとす。今これらの語の例を二三あぐべし。

貴兄　　貴女　　尊臺　　諸君　　方々

以上は對者をさして之を尊敬する意をあらはせる敬稱語なり。これらは從來代名詞と稱せられたるものなり。然れどもこれを名詞といひて差支なきのみならず、敬稱の名詞として說明すれば極めて明瞭なり。

尊大人　　北堂　　令兄　　令閨　　賢息　　令孃

これらは對者の身內をさしていへるものなり。

貴國　　錦地　　貴村　　尊宅　　貴館　　貴社

これらは對者の住める土地住所をさしていへるものなり。

貴札　　芳墨　　尊書　　玉詠　　高作　　貴著

これらは對者の手紙著作等をさしていへるものなり。

尊體　尊容　芳名　雷名

これらは對者の身體姓名等をさしていへるものなり。

尊慮　貴意　高見　貴說　芳情

これらは對者の心情をさしていへるものなるなり。以上對稱の敬稱は對者に對してのみ用ゐるものにして普通には一般の敬稱には流用せぬものなり。この故にこの區別は用法上必要なるものなりとす。

一般の敬稱は主として第三稱格に用ゐらるゝものにして、從來の文法書等にあげたる例のうち上の謙稱及び對稱の敬稱以外のすべての屬するものにして今一一例をあぐる必要を見ず。

この敬稱と對稱の敬稱との區別はその名詞の用法上の區別に於いて必要なるが、これは場合によりては對稱の敬稱に流用せらるゝことあり。さて又敬稱としては共通なるを以てこれを一括して敬稱とのみいふこともとより少からず。この一括したる敬稱は動詞の敬語と用法上の一致を要するものなれば、文法上これ亦重要なることを忘るべからず。

國語の名詞には文語と口語とによりて用ゐる單語に差あることあれど、文法上

は何等の差異なきものなりとす。

第八章　代名詞

代名詞とは名目をいふ代りに用ゐる詞の義にして、體言の一種なるが、概念そのものを直接にあらはさずして、たゞ其を間接にさすに用ゐらるゝものなり。

代名詞の定義は注意を要す。注意せざるときは名詞も亦事物をさしてその代りに用ゐるにあらずやといふ疑を起さしむ。これその説明の不可なるに基づくものにして、代名詞の意義は「名目をいふ代り」といふ點にあるを忘るべからず。この故に先づその名目を明かにいふ時はその詞は名詞なれども、その名目をいふ代りに用ゐるものは代名詞なりといふことを注意するを要す。即ち代名詞はその名目の明かならぬ場合又は全く名目のなきものにも假りに用ゐる如きこともあるものなり。元來代名詞といふ語は英語pronounの譯語にしてもと羅甸語のpronomen(for name)より出でたるものなりといふ。その語義は「名目(name)の代り」といふにあり。從來多くは名詞の代りとやうにいひたれど、さにあらず。名詞はその對象の名目(name)として用ゐられ、代名詞はその對象の名目(name)の代りに用ゐられ、兩者の契合點は對象そのものにありて、代名詞は名詞といふ品詞の代には決

してあらざるなり。この故に上にいへる如く名の明かならぬもの、名のなきものに對しても用ゐらるゝなり。

代名詞の性質は既に述べたる如く主觀的のものにして、そのさす實體は說話者の觀點の置き所又思惟のし方によりて任意に補塡せらるべきものなり。而して代名詞の代名詞たる特徵卽ち名詞と異なる點はこれがたゞ概念たるに止まらずして、その內容が主觀によりて如何樣にも變更せらるべき點にあり。たとへば甲といふ特定の人もそのさし方によりて第一稱格ともなり、第二稱格とも第三稱格ともなるなり。又第一稱格、第二稱格は何人がなりても差支なく、第三稱格に至りては人、事物、場所、方向等を種々にさし示すことを得べし。かく心のおき樣によりて種々にさしうる點は明かに普通の名詞と區別せらるべき特徵なり。これ初めに示せる定義に「さす」といふ語を用ゐて說明したる所以なり。この故に代名詞につきて吾等の考ふべき點はそのさせる對象（卽ち客觀）につきて考ふるよりも先第一にその主觀の有樣卽ちさし方如何といふことを考ふるを以て研究上の第一着眼點とすべきなり。この事卽ち前に主觀的なりといひし所以にして下の數詞と比較する時にその性質はいよいよ明かになるべし。

國語の代名詞と英語、獨逸語などの代名詞とは似たるものなり。然れども、わが

代名詞といふものとは範圍を異にするを以て全く同一の取扱をなすことを得ざるなり。先づわが代名詞にありてはこれをその指し方如何によりて反射指示と稱格指示との二類に分つべし。この類別はその指示のし方の性質によるものなるが、既にいひたる如く代名詞は指すといふことを第一義とするものなれば、その類別につきても亦さし方如何といふことを以て主點とせざるべからず。この點よりして先づこれを上の二類に分つ必要を見る。

反射指示といふは稱格の如何に關せずして專ら實體その者につきて指すものをいふ。即ち實體その者を絶對的に指示するものにして、多くは一旦あらはれたる體言につきてそれ自身をさすに用ゐらる。これに屬するものは「おのれ」の唯一つあるのみ。この「おのれ」といふ語は稱格に關係せぬものなるが故に、第一者に對しても第二者に對しても第三者に對してもそが指示として立ちうべく、隨つてその指示せる實體は必ずその處に明かに存在すべき筈のものなり。之を反射といふは、吾人と共者との思想上の關係は實體より出で又かへりて實體をさすこと恰も物影の反射するが如き性質を有するを以てなり。

上の「おのれ」に似たるものに「みづから」といふ語あり。これはまたこの「おのれ」と混同して考へらるゝことあれど、そは偶然の現象にして、これが本體は副詞たるな

り。この詞は「口づから」「手づから」「心づから」「足づから」などいふ詞と同じ構成によれる語にして下なる用言を支配するものなり。「おのれ」の上なる體言をさせると意義性質全く異なり。或は又「みづから」と意義の類似あるよりして「おのれ」を反對に副詞の類と誤認せられたる事もあれど、體言たる性質を有するは明かなり。

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれなきてや秋をしるらむ。（後撰集）

この「おのれ」は主格に立てるものにて體言たること疑ふべからざるなり。「みづから」といふ語には本性としてこの用法あることなし。

かくてこの「おのれ」は說話者の自體をさすが故に第一稱格に轉用せらるゝこと多し。而してこれは文語のみ用ゐられて口語には專ら稱格に轉用せられたるもののゝみ用ゐらると考へらる。なほ轉用の事は用法の條に說くべし。

稱格指示とは說話者の意向によりて稱格を區別せられたる指示によれるものをいふ。これに屬するものは上にいへる「おのれ」以外の代名詞一切なり。即ち「われ」「汝」「これ」「それ」「かれ」「たれ」「なに」「いづれ」「こゝ」「そこ」「かしこ」「いづこ」「こち」「そち」「あち」「いづち」の如きこれなり。

國語の代名詞には上の二種類のみありて、物主代名詞、形容代名詞、關係代名詞、疑問代名詞などの區別をなす必要なし。次下にその理由を述べむ。

英語などの代名詞には人稱代名詞、物主代名詞、形容代名詞、關係代名詞、疑問代名詞などの區別をなすによりて、國語の文法にもこれに準じて分類を企つるものなきにあらず。その人稱代名詞の事は後に委しく述ぶべきが、物主代名詞と形容代名詞とは國語にては「の」「が」等の助詞にて示さるゝ連體格の場合をさすに止まるものにして、疑問代名詞といふも下にいふ如く不定稱の代名詞の一の用法にすぎずして、代名詞の特別の種類にはあらざるなり。

關係代名詞と稱するものは國語には全くなきものにして、關係代名詞の有無は即ち世にいふ印歐語族とウラルアルタイ語族との差異の一大要點とせるものなりとす。印歐語族(Indo-european group)とは「アリアン」種族の語にして古きものにては梵語、古代の希臘語、羅甸語、近世の著しき語にては英語、佛語、獨逸語、伊太利語、西班牙語、葡萄牙語などこれなり。「ウラル、アルタイ」語族(Ural-altaic group)とはウラル山乃至アルタイ山脈地方の間に行はるゝ語の一團の義にして、大別してウラル語族アルタイ語族の二とし、又一括してチュラニアン語族(Turanian group)ともいふ。この語族は大略共通の特質あるを以て一類とせられてあれど、實は未だ儼然たる系統を有せるものにあらず。これに屬するものは歐羅巴にては芬蘭語、匈牙利語、亞細亞にては土耳古語、蒙古語、滿洲語、朝鮮語などなり。わが國語も亦この語族のう

ちにありとせらる。そのウラルアルタイ語族の特質として、從來言語學者のあぐるものは次の數項なり。

一、子音組織に於いて清音はじめに發達して、濁音はのちに發達したること。

二、文法上の形式は屈折を以て示すことなく、大抵語尾を以て示すこと。

三、文章に於いて主語第一に來り、述語最後に來り、限定詞は被限定詞の前にあること。

四、語根は決して變化することなく、形式上變化するものは語根に附したる形式なること。

五、關係代名詞の存在せぬこと。

右に示せるところによりて關係代名詞の國語に存せぬことの偶然の現象にあらずして、その根元の深き所に存するをさとるべし。

稱格指示とは所謂人稱代名詞に該當するものなるが、必ずしも西洋語の人稱代名詞と範圍を一にせず。しかして又その內の小區別に至りてはかれらの人稱代名詞よりも精細にすべき必要ありとす。吾人は先づ稱格指示の代名詞をその稱格によりて第一稱格、第二稱格、第三稱格の三種に分つべし。その稱格とは既にいへる如く說話者の關係的意向によりて區別せられたる指示の方法をいふものに

して、この三種を以て一切の事物を指示し得べきなりとす。
第一稱格は第一人稱又は自稱ともいふ。「われ」「余」の類これなり。第二稱格は第二人稱又は對稱ともいふ。「汝」の如きこれなり。第三稱格は第三人稱又他稱ともいふ。これには「彼」「誰」の如く專ら人をさすに用ゐるものあり。又「これ」「それ」の如く人にても事物にてもいづれをもさすをうるものあり。自稱と對稱とは人若くは人に擬せられたるものをさすに限れども、他稱は人にても事物にても場所にても方向にてもさし得るのみならず、さす事物の不明瞭なる場合にもそれをさしいふことをうるものなり。

代名詞を分類して三種とし、それを名づけて自稱、對稱、他稱とすることは今は殆ど全般に通じて用ゐらる。されど、そのさす所は少しく疑を挿むべき餘地あり。今それにつきて少しく述べむ。第一はこの三別を人にのみ用ゐることなり。もとこの三別は西洋文典の直譯より來れるものなるが、これを轉用して國語を說明せむとせし時に誤解ありて永く流弊を後に殘せるなり。この弊を殘したる原因は person を人稱と譯するによりて專ら人間をのみさすものと誤解せる點にあり。先づ第一人稱は說話をなす者自身をさし、第二人稱は說話を聽取する對者をさし、第三人稱は話題に上れる人をさすとせる、この第三人稱の說明を以て誤解の基と

す。第一人稱、第二人稱は必ず人なるべきことは自明の事にして、若し第二人稱に人ならぬものを置くときは、これ吾人の對話を聽き受くるに足るものと認めたるもの卽ち人格を擬し與へたるものに限るべきなり。然るに第三人稱は人に限らず、何にても話題に上るものゝすべてをさすを得べきなり。今、英語の例にていはば、第三人稱の代名詞には次の如き種類を含めり。(單數主格のみにつきていふ)

he　男性　單數　主格

she　女性　單數　主格

it　中性　單數　主格

而して性に三性あり、格に三格あり、數に單複の別ありて、かれらの第三人稱代名詞は頗る複雜なるものなり。今これをふと見たるのみにては何等の事なきが如くなれど、第一人稱、第二人稱には性の區別なきに、第三人稱にのみ性の區別のあるは何故ぞや。考ふべきことなりとす。かく第三人稱に性の三別ある所以はこれ卽ちあらゆる名詞を代表する所以を示すものなり。西洋の文法にては既に述べたる如くすべての名詞を性の區別にあてはめて文法上の煩雜なる規定をなせり。第三人稱の代名詞はこれらすべての名詞に對應するものにして男性の名詞に對應するものとしては男性の代名詞を用ゐ、女性の名詞に對應するものとしては女

性の代名詞を用ゐ、中性の名詞に對應するものとしては中性の代名詞を用ゐるが故にかく三性を區別する必要あるなり。而して既にいへる如く名詞に於いては有象無象あらゆるものに性の區別をあたふるが故に、これらに對應する代名詞をも person 即ち人稱と稱するに於いて少しも差支なく、寧ろかく稱せざるべからざる必要あるなり。しかるに譯語の面のみを辿る日本文法家はこの person 又は人稱といふ字面にのみ心を奪はれて、第三人稱は彼誰の二なりなどいふに至りては噴飯の至りといふべし。さて余が說明にては自稱對稱は人又は人に擬せられたるものに限れど、他稱は話題に上れるものならば、人、事物、有情、非情、有象、無象すべてをさすものとせり。これ國語の本性にも一致し、又西洋文典の眞相にも近づけるものなりとす。

かくて西洋の普通の代名詞即ち personal pronoun をば、當初稱格代名詞といふ如くに譯したりせば誤解も少かりしならむを人代名詞と譯したりしによりて、それに誤まられて第一稱格第二稱格の二類と第三稱格中の「彼」「誰」とを合せて一類とし、これを人代名詞といひ、第三稱格の「彼」「誰」以外のものを以て指示代名詞と稱したり。されども指示代名詞とは英語の demonstrative pronoun の譯語に用ゐるべきものたるは明かなり。然るに日本文法家の所謂指示代名詞は彼れの第三人稱代名詞

の大部分に該當するものなることは既に述べたる所なり。かくて從來の日本文法家の人代名詞、指示代名詞の如き區別は、たゞ意義によりて施したるまでの區別となりて文法上無益の徒勞たるが如く見ゆ。されどなほ深く考ふれば、上の如き區別をなす時は第三稱格の語は二類に分たるゝのみならず、それの人のみのものと第一、第二の稱格とのみが一類をなし、その一類とその他の第三稱格との間をば何を以て分類するかの文法學上の根據なきのみならず、かくの如くにして稱格の概念をも破壞し、矛盾に陷らしむるに至るべければ、かへりて有害なる結果をもたらすものといふべきなり。

抑も英語の指示代名詞とは

this（この）　these（これらの）

that（その）　those（それらの）

等の語にして、これらは形容代名詞 adjective pronoun と稱する人もありて形容詞の中にて說明せる人もあり。これは物主代名詞と同じやうに英語などにてはその形と用法との上より見て別に一類を立つる必要あるべけれども、われにありては「の」「が」にて示せる連體格の用法にあらはるゝ一の現象にすぎざるなり。日本文法家の人代名詞の不合理なることは、この「これ」「それ」等を指示代名詞とするの不都合

と連關してあるものなり。くれぐれも西洋文典の範疇を借用せむにはその眞相を十分に究めての後にすべきこととなり。

第一稱格卽ち自稱の代名詞として本來の國語たるものは「われ」なり。これは古よりある語にして古今に通ずといひてよかるべし。されど今の口語には用ゐず、しかも「われわれ」といふ形は口語にのみ用ゐて文章には用ゐず。この外に文章には「余」といふ漢語を用ゐ、又文章口語に通じて「僕」といふ漢語を用ゐる。この「僕」といふ語は本來名詞なるを代名詞に借用したるものなるが、これは支那に於いて既にしか用ゐたるを轉來したるものなるが如し。普通口語にては「わたくし」といふ語を用ゐる。これは公私の私にして本來名詞にして代名詞にはあらぬを今日の如く代名詞のやうに用ゐたるは室町時代よりなるが如し。かくてこの「わたくし」が略せられて「わたし」となりて用ゐらるゝが、これは江戸時代より生じたるものと思はる。この「わたし」が更に促りて「わし」「わつち」となれり。この外卑語に「おれ」といふものあり。これは元よりの代名詞なれど、もとは第二稱格なりしが、室町時代より今日の如く第一稱格に轉じたるものゝ如し。

第二稱格卽ち對稱の代名詞は「汝」なり。この「汝」といふ語は古よりありといへども、これが現代の文章に盛んに用ゐらるゝは漢文の訓讀によりて影響を與へられ

たる結果なるべし。而してこれは口語には用ゐることなし。この外「諸君」「諸子」などいふ漢語を借用せるあり。又「きみ」といふ名詞を轉用せるあり。この「諸君」「君」等は口語にも用ゐらるゝものなるが、口語にはこの外「あなた」「おまへ」の二を用ゐる。この二も亦本來第二稱格のものにあらず。「あなた」は第三稱格の方向の遠稱なるものを轉用したるものにして、稱格と同時に尊敬の意をあらはしたるものなり。「おまへ」はもと敬語なりしが漸くに變化して第二稱格となりたるものにして、これは今日にては目下（メシタ）のものをさすに用ゐるやうになれり。この語も江戸時代に既に用ゐてありしものにして、目下にはいはず、略ぼ同格にして少しく敬ふ意をあらはしてありしものなるが現今にては專ら目下に用ゐることゝなれり。

第三稱格即ち他稱の代名詞はそのさす事柄の定まれると定まらざるとによりて定稱と不定稱との二に分つ。定稱は「これ」「それ」「かれ」「あれ」等にして、不定稱は「たれ」「なに」「いづれ」等なり。

定稱の代名詞は又そのさし方によりて、近稱、中稱、遠稱の三に區別す。近稱とは「これ」「ここ」「こち」「こなた」の如きものをいひ、中稱とは、「それ」「そこ」「そち」「そなた」の如きをいひ、遠稱とは「あれ」「かれ」「あそこ」「かしこ」「あち」「あなた」「かなた」の如きをいふ。

定稱の代名詞をかく三種に分つことは國語文典の特別の現象なるが、これは明

瞭なることなれば、分類して可なり。この分類は單に意義上の分類に止まるが如くなれど、これを第一稱格、第二稱格に轉用する場合等にこの區別おのづからあらはるゝものなれば、多少文法上の要用ありとすべし。而してその近中遠の三の別は單に場所の上の意義のみに止まらぬを忘るべからず。卽ち人事物、場所、方向等につきて對者よりも說話者に空間的に若くは時間的に近きか、或は又精神的に親しきものは之を近稱にてあらはし、說話者よりも對者に近きか親しきの關係にあるものはこれを中稱にてあらはす。この場合には中稱といふ語は十分に適せりといふべからず。然れども姑く對者に關係なく說話者より觀れば近稱よりも遠きか疎きかして、しかも次の遠稱に比すれば、近きか若しくは親しきかの關係にあるものをもさすことあれば、これを中稱といふも妨なきに似たり。說話者對者のいづれにも近きか親しきかの關係を離れて指示するものを遠稱と稱す。この區別はこれを使用し試みて親疎の處に差異あるを實際に認めうべし。この定稱の代名詞は大體文語と同じものなるが、その方向をさすものには口語にては「こち」「そち」「あち」を「こつち」「そつち」「あつち」と入聲に呼び、又「ら」を添へて「こちら」「そちら」「あちら」といふことあり。

不定稱の代名詞は其のさす處の實體の確定し居らぬものなるが、そのうち人を

さすには「たれ」あり、口語には「どなた」あり。事物をさすには「いづれ」「なに」あり、口語には「どれ」あり。場所をさすには「いづこ」口語には「どこ」あり。方向をさすには「いづら」「いづち」「いづかた」口語には「どちら」「どなた」あり。而してそのさし方に種々あり。第一はこれと定むることなしにたゞ漠然と汎く指すものなり。その例

所詮「たれ」「たれ」もかけさせたまへ。（保　元）

「いづれも」「いづれも」かへりごとみえず。（源、末摘花）

津の國の「なに」はおもはず（古今集）

馬は「どれ」も皆勢こんでゐる。

第二は多數の對象のうちにて一を擇び出さむの下心ありてさすものなり。而してこれが反語に用ゐらるゝときは甚だ强き意にて一切の場合に通じたる汎稱となるなり。

君こふる涙にぬるゝわが袖と秋の紅葉と「いづれ」まされり。（後撰集）

「誰」にてもあれ、とく來れ。

「どれ」をとらうと勝手である。

「どつち」もまけずにしつかりやれ。

その反語となれる場合のものは

いきとしいけるもの「いづれ」か歌をよまざりける。（古今集）

咲く花はちくさながらにあだなれど「たれ」かは春をうらみはてたる。（古今集）

第三は實體の不明なる場合をいふもの。これは、たゞその不明なるをいふに止まるものなり。

「何」がおもしろいものか。

「いづれ」の人と名をだにしらず。

「何」の木か、おがくづか大そうにほつてゐました。

「だれ」か河上で笛を吹いてゐます。

第四はその實體の明かなると否とに關せず、すべて疑又は問をあらはすに用ゐるものなり。

花ちらす風のやどりを「たれ」か知る、われにをしへよ、ゆきてうらみむ。（古今集）

國は「どこ」名は「何」と申す。

「どちら」が多いか、くらべてみよう。

以上四種の用法いひもてゆけば一に落ち着くべし。されど又これを分ちて見る、

方惑ひ少かるべし。しかして余が、特に委しくこれを說明するはこれらを疑問代名詞とすることの可否を明かにせむが爲なり。

世にこの不定稱の代名詞を疑問代名詞とする人あれど、その意義は上の例にて見る如く、疑問をあらはすに止まらず、種々の意をあらはすものにして、疑問をあらはすことはその作用の一部分に止まれり。而して英語などにて疑問代名詞といふ一類を立つることは單に意義上よりのみ來れるものにあらずして、實に文法上の必要あるによる。卽ち疑問代名詞は句法の上に於いてその種類を立つることの必要なるのみならず、その位置に於いても特別の約束あるなり。我にありては疑問といふ意義の上よりする外それらの如き特別の法則といふものなし。それ故にこゝに疑問をあらはすといふ事を意義上より說明する外、特に一類を立つべき必要なきものなりとす。

國語の代名詞には性の區別なし。この事は名詞にいへると同じ理なり。英語などの代名詞には名詞の如く性の變形あり。而してその區別は名詞に於けるよりも一層緻密なりとす。されどわが代名詞には全くこの事なし。

國語の代名詞には、文法上の數といふものなし。わが代名詞にも名詞の場合の如く或は疊語を以てし、或は接辭を加へて多數を示すこと、たとへば

われわれ　これこれ
たれだれ　なになに
われら　汝ら　彼れら　これら　私ども

の如きものあり。されどその本來の形は單複の數に關係なきものにして特に多數なることを示す必要ある場合にのみこの形を使用するものなり。而してこれはたゞ意義上の差あるに止まり、文法上、それらの差別によりて何等取扱上の差を呈せざるものなれば、かくの如きを單數複數などといひて區別するものは、文法上よりいへば、畢竟無用の煩勞をなせりといふに止まるのみ。

國語の代名詞には文語と口語とによりて用ゐる語を異にすることあれども、文法上に於いて何等の差異なきものとす。

第九章　數詞

數詞とは數量をはかり又は順序を數ふるに用ゐる體言なり。この數詞を名詞と別の一類と立つるにつきては一言せざるべからざることあり。數詞が、單に數量の名目をあらはすに止まるものならば、そは名詞としておきて可なる筈なり。然るに、これを普通の名詞と一にせず、體言中別の一類と立つる所以は實に上にい

へる「はかり」又は「かぞふる」點にあり。數詞の性質は既に述べたる如く、客觀的の形式體言にして、そのあらはす所は客觀その者の存在の形式にあり。而してその存在の形式をかぞふといふとこれ即ち數詞の根本なり。この數ふといふ現象は勿論主觀の作用なれど、數へらるゝ基礎は客觀に存して主觀を以て任意に左右しうべきものにあらず。即ち一定の數には必ず一定の數詞をあてざるべからず。この點は如何なる人の主觀を以てしても、又如何に立場をかへても、その實際の數とそれの數詞のあらはす意義との相關狀態を變更すること能はざるなり。而してこの「はかり」又は「かぞふ」といふ思想上の作用が數詞の根柢をなすものなり。これ上に數量をあらはすといはずして「はかり」又は「かぞふ」といへる所以なり。これ即ち數詞の特徵の主眼にして、代名詞の「さす」といへるに相對する點あるなり。

數詞は上の如く單に數量の名目たるに止まらず、同時に「數へ」又は「量る」といふ作用をあらはすものなれば、到底普通の名詞と同一に說き去るべからざるなり。西洋文典などにては數詞を形容詞中の一類とし、又は獨立の品詞とするものあり。これその國語の性質上然るべき理由ありてなり。たとへば英語などの數詞は名詞よりも寧ろ形容詞に近きものなれば、これを形容詞中に說けるもの少からず。されど、普通の形容詞とは屈折の有無によりて文法上區分を與ふべき必要あり。

さりとて名詞にあらねば、これを一の品詞とするも說明上まさに然るべきことゝなす。吾が國語にありて單に數量の概念をあらはすのみならば、これ概念語の本體たる名詞として止むべきのみ。然るにその用例を見れば、普通の名詞とは異なる特別の用法あり。この特別の用法の存するはこれ卽ち「はかり」又は「かぞふ」といふ思想の作用の外形なりとす。

こゝに至りて余は、說明の方便として特に數詞の特別の用法を略述せざるべからず。數詞もそれが體言たる以上、體言一般に通ずる用法を以て律するを得べきは勿論なるが故にこれはいはず。その特別の用法としていふべきはそがよつて數量をあらさるべき名詞に關しての數量を示す方法なりとす。その方法はこれを五樣に分ちて說明することを得べし。

第一は直に名詞の上に冠せられて合成語をなすものにして、

ナポレオン一世は身を陸軍の一將校より起せり。

の如し。この場合の「一世」の「一」は順序を示し、「一將校」の「一」は數量を示せり。第二は連體語として名詞の上にあるものにして、

一の人の御有樣はさらなり。

これも一つの神業なり。

の如し。この場合の「一(イチ)の人」の「一(イチ)」は順序を示し「一つの神業」の「一つ」は數量を示せり。以上二の場合は名詞にも同様の現象の存するものなりとす。第三は第二と反對にその名詞をば連體語として數詞の上に置くものにして、

かゝる時に友の四五人も來らばうれしからむ。

兄弟の中の五人目なり。

の如し。この場合の「四五人」は數量を示し「五人目」は順序を示せり。さて第二第三は連體語の形式をとれるものにあらはれたる現象なりとす。以上說く所は順序をかぞふるものにも數量をあらはすものにも存する所なるが、以下のものは主として數量をあらはす場合にのみ用ゐらる。而してこれらはいづれも名詞の下にありてその數量を指示せるものなるが、その意義と關係との差によりて二樣に分たる。第四は名詞の下にありてそれが數量を示すものなり。

賣家五軒ありてこれを買はむとする人五人あり。

この場合にありてはその名詞が格助詞を伴ふべき格に立てる時にはその格助詞はその數詞の下につくるなり。

一間には檜五本を畫き、一間には鶴二十五羽を畫けり。

顧みれば、我等は長い間聖天子御一人に非常の御苦勞をお掛け申し上げまし

たのでございます。

狐五匹と雉子五羽とを獲たり。

この場合のものはその數詞は上の名詞に直屬するものにして相合して一團となりて、他に對して一語の如き關係に立てり。第五はその數詞が、用言の上にありて、その用言が、主格補格等に對して示す作用の數量上の關係を示すものなり。されば これらは

赤い木の實が。一つ落ちてゐた。

しつてゐるものは。一人もありませぬ。

鼠を。一匹とるのも容易でない。

この魚は。その魚より一尺長い。

の如く助詞ある場合はその助詞は直ちに數量を示さるべき名詞に附屬し、その下に數詞を置くものなれば、第四の場合と區別あるをさとるべし。然れども、その名詞の直下に助詞をつけぬ場合のものは、

梅の木一本あり。

人一人居らぬ。

の如くなりて、第四の場合の助詞のなきものと外形上區別しかぬるさまなり。さ

れど、これは、その數量を示す作用の上に差あり。この場合にはその「あり」「居らぬ」といふ語に對しての說明として數量を示したるものなれば、區別あること明かなりとす。かくの如くなれば數詞が數量をかぞへ、又ははかるといふ事の外形にあらはれたる特徵こゝに存するを知るべきなり。

數詞には事物の分量をはかる場合と、事物の順序をかぞふる場合との二樣あり。さてかく數詞に二樣の場合あるものなるが、多くはこの二の場合をば種類の區別として、數詞には數量をあらはすものと順序をかぞふるものとの二種ありとして說けり。然れども、そは用ゐる場合の差違にして、少くも國語にありては數詞としては一種のみなるなり。それは普通に數量をあらはすものといはるゝ語「ひとつ」「ふたつ」「みつ」などいふ場合にも「一（イチ）」「二（ニ）」「三（サン）」などいふ場合にも決して數量のみをあらはすに止まらずして、順序を示すに用ゐらるゝなり。たとへば、

明治二十三年十月三十日教育勅語を下したまふ。

の場合の「二十三」「十」「三十」の如きは數量をあらはすにあらずして、明かに順序を示せるものたるなり。又數量の不明なることをいふ場合、たとへば、「いくつ」といふ語をば順序をかぞふるに用ゐて「いくつめ」といひ、數量をはかるに用ゐて「いくつ」といふなり。この「いくつ」といふ語は順序にも數量にも用ゐらるゝものにして、用ゐる場

合の二樣あるに止まり、語としては一にして二種あるにあらず。但し「いくら」の如く數量のみに用ゐる語も存することとあり。この數量のみに用ゐる語はなほ後に論すべきが、今先づ上にいへる數量と順序との關係につきて論ぜんに、普通には數量を示すものを基本とし、順序を示すものを第二次的とせるが如し。然れども、こは數學に用ゐる數が數量を示すものを主とせるに馴れたるより來れる誤想なるべし。言語の發達の上より見、又數ふといふ點より考ふるに、數詞の起源はもと順序をかぞふるよりはじまれるものゝ如し。然れどもその數の漸く多くなるに隨ひて一々別の語を以て順序を立て數へつくすべきにあらぬによりて、ある數を一括する必要を生じ、こゝに分量をあらはす數詞を生じたるものなるべく、この分量をあらはす數詞の發達ありて、更に順序をかぞふることと一段と進み、且つ容易になれるなるべし。而して嚴密にいへば、「かぞふ」といふ語は順序の方に適し、分量の方は「はかる」といふ語にてその作用をあらはすべきものなるべし。かくて、それらの發達の十分に進みたる今日にては數量をあらはす方が數詞の大部分を占め、隨つて、それが數詞の本體なるかの如くに見ゆるに至りたれど、その本來の性質よりいへば、順序をかぞふる方が本體なるべきことは疑ふべからず。

順序をかぞふるには、數詞そのまゝを用ゐることもあれど、多くは「第一」「二番」「三號」

「五つ目」などの如く上又は下に順序を示す接辭を伴ふものなり。世には往々その順序をかぞふる數詞に必ず接辭を加ふべきものなるが如くいへるもあれど、その然らざることは既に例を示せる所なり。

數量をはかる數詞には一定の數量をいふものと不定の數量をいふものとあり。一定の數量をいふものは「一」「二」「五」「十」「百」「千」「萬」などいふ語にして、その數量は明かに示されたるものなり。不定の數量をあらはすものは「あまた」「すこし」の如き漠然と量をあらはすか、又は數量の不明なることをあらはす「いくつ」「いくら」の如きをいふ。これらには「かぞへ」又は「はかる」作用なきやうなれど、それはその數量の明かに示されてあらずといふのみにして、それらの意義及び用法上より見て、他の明確に數をあらはす數詞と同一の法則によれるのみならず、數量といふ以上はその數量の明不明にて區別を立つべきものにあらざることは代名詞に定稱不定稱の二種ある如き關係にあるなり。而してこれらの多くは數量の方に用ゐらるゝものなるが、「いくつ」などは順序をかぞふるに用ゐること既に述べたるところなり。

「だあす」の如く數量の集團を示せる語も亦數詞なり。「だあす」はその本たる英語などにては數詞の取扱をなさざることあるべしといふとも、國語にては數詞たり。この「だあす」は十二といふ數を一團としての名稱なれば名詞といふも可なるが如

くなれど、凡そ數詞といふものは「一」の外は皆數の集團をあらはせるものなるを見る。即ち「二」は「一」の二個集れる集團「五」は「一」の五個集まれる集團「十」は一の十個集まれる集團「二十」はその「十」の更に二個集まれる集團「百」は「十」の十個集まれる集團「二百」はその百の二個集まれる集團なり。されば「一」以外はいづれの數詞も數量をあらはすものは皆數の集團にあらざるはなし。これを以て見れば「だあす」も亦數の集團にして明かに數詞といふべきものなり。而してその用法また數詞として差支を見ざるものなり。

數詞が一定の事物の數に關するものなるを示さむには「一人」「二羽」「三匹」「四本」「五冊」等の如く接辭を添ふることあり。又百圓、十石、五斤、六尺等の如く一定の量の單位を示す名詞を下に附くることあり。かくの如き數詞をば具象的の數詞といふことあり。

第十章　用言概說

用言とは陳述の力の寓せられてある語にして多くの場合に事物の屬性を同時にあらはせり。用言は體言と相待ちて句の組立の骨子となるものにして、體言に對して何等かの說明をして陳述をなす要素なり。用言の定義を簡易にいへば、

事物の說明をなすに用ゐる單語なり。この說明をなすといふことはこれ人間の思想の統一作用といふことをうべし。この說明をなすといふことはこれ人間の思想の統一作用をあらはすことを主とし、又それと同時に事物の屬性觀念をもあらはしてあることをも含めるなり。

元來、この用言といふものは西洋の文法にいふ所の verb に該當するものなり。verb は普通に動詞と譯せり。かやうに verb に對して動詞といふ語を用ゐるといふことは必ずしも不當といふべからざれど、一方に於いて動詞といふ語をわが國の昔よりの術語にていふ所の作用言即ち今の普通の國語文法にていふ所の動詞といふものにあてはむる時に同じ動詞といふ語が、二樣に用ゐらるゝによりて二者の間にくひちがひを生ず。元來 verb は說明陳述する力を有してあることが、その本質なれば、わが國語にては所謂形容詞も陳述の力を有するものなるが故に、それが用言の一部にして同時にそれは verb にてあらざるべからざるなり。英語、獨逸語などの動詞(verb)と形容詞(adjective)との差は動詞には陳述の力含まれ、形容詞には陳述の力缺けたる所より區別せられてあるものなり。然るに、わが形容詞は動詞と同じく陳述の力含まれてあり。然るが故にわが所謂形容詞は彼の adjective とは全く性質を異にするものにして、verb ならざるべからざるものなり。か

かる次第なればverbは用言に該當するものにして、これを今いふ所の動詞とするは不十分といはざるべからず。隨つてわが所謂動詞は彼れのverbに當るといふことは全く不當といふべきにはあらねど、それは一面のみの眞にして、完全に一致するものと云ふことと能はざるものなり。かくてわが動詞、形容詞を合せたる用言といふものが彼れのverbに當るといふ事の實なるをさとるべきなり。かくて用言の用といふ語は說明陳述の用をなせるものといふことなるを知るべし。然るに用言には實際上、語尾の活用を有するが故に、用言といふは活用ある語なりと說く人往々見ゆ。これは本末をとり違へたる說明にして用言の用は本來活用をさすものにあらぬことは、たとへば契沖がその著和字正濫鈔の中に

> もろこしには見花、見月など、先用をいひて後に體をいふをこゝには花を見る月を見るとやうに先體よりいひ、しかゝくさまも天竺に似たれば云々

といひ、谷川士清は倭訓栞の大綱に於いて、

> 諸越には觀花聽笛など先用をいひて後に體をいふを此間には花をみる笛をきくとやうに體よりいひならへりといへり。西土にも先體後用なるもあり、我邦にも先體後用なるもまゝあり。

といへるなどを見て當初用ゐし詞の體用といふ語の本義をさとるべし。さて又

本邦にては用言に限りて語尾の活用あるが故に用言は活用を有する語なりといふやうに說くことは不都合なきが如くなれど、活用のあるといふことは陳述の用をなしてありといふこととは必然的に一致すべき理由あるものにあらず。そは外國語手近なるものにていへば獨逸語などにては名詞代名詞等にも語尾の變化多し。これは動詞の語尾變化と名を異にせるものなれど、(名詞のは declension. 動詞のは conjugation) 廣くいはゞ活用といひて差支なきものなり。されば、理論上活用ある語即ち用言なりとはいふを得ざるものなり。たゞわが國語には事實上、用言といふことゝ、活用を有する語といふことゝの二者が、事實上に於いて一致するを以て初學者に敎ふる場合に便宜上、さきにいひし如きいひ方をなしてもよき場合あるべし。しかれども、それとても「用言には活用あり」とはいふべけれど、「活用あるものは用言なり」とは決していふべきことにあらざるなり。

既にいへる如く用言には陳述の勢力と共に事物の屬性をあらはせるもの多し。この屬性は如何なるものなるかといふに、

白し　黑し　赤し　青し

の如く事物の色合をあらはせるあり。

長し　短し　重し　輕し　太し

細し　厚し　薄し　廣し　狹し

の如く物の分量をあらはせるあり。

よし　惡し　穢し　美し　甘し

辛し　貴し　賤し　鈍し　鋭し

の如く事物の性質をあらはせるあり。

讀む　養ふ　走る　愛する

の如く生物の動作をあらはせるものあり。

鳴る　流る　咲く　肥ゆ

の如く事物の作用を說明するものあり。

まく　まさる　すぐる　おとる　似る　死ぬ

などの如く事物の狀態をあらはすものあり。

かくの如く種々の屬性をあらはせるものなるが、この屬性をあらはすといふことは他の品詞にも存することは既に說きたる所なり。しかもなほ念の爲に一二をいはゞ同じ屬性ながら

あを　あかさ　あまみ

といふ時は名詞にして、

あをやか　　あからか　　あまさう

あをし　　あかし　　あまし

といふ時は副詞たり。而してそれが

といふ時は用言たるなり。しかも「あを」「あをやか」「あをし」の三者を通じて見るに「あを」といふ屬性は三者に共有せらるゝものなれば、屬性をあらはすことは用言のみの現象にあらず。或は又「遙か」といふ屬性觀念はこれを用言としていへば「はるけし」といふ語となり、副詞としていふ時は「はるか」といふ語となる。こゝに同じ屬性が用言にも副詞にも共通して存するのみならず「はるか」といふ副詞は屬性そのものを眞に屬性的の依存觀念としてあらはしたるものなるが故に、屬性としての本質的の語は寧ろ副詞なりといはざるべからず。されば屬性をあらはすことは用言の本質にあらざるものといはざるべからず。こゝに於いて考ふるに、用言の本質と認むべきものは屬性にあらずして、陳述の作用を有すといふ點にありといはざるべからず。かゝる理由によりて、「あり」「なし」の如くに殆ど屬性の考へられぬ用言も存するなり。これを以て考ふれば、この屬性をあらはすといふことは用言の絶對條件にあらざるを知るべし。

用言には屬性をあらはすもの多きこと上述の如くなれど、その用言の用言たる

特徴は實にその陳述の作用をあらはす點にあり。この作用は人間の思想の統一作用にして、論理學の語をかりていへば主位に立つ概念と賓位に立つ概念との異同を明かにしてこれを適當に結合する作用なり。凡そ人の思想を發表する機關として個々の概念の必要なることはいふを俟たざるところなれど、個々の概念のみ存してもこれらを統一判定する作用なくば、思想の完全なる結成となることなし。かく統一判定する作用を言語にあらはしたるもの即ち用言なり。この點より見れば、用言はすべての品詞中最も重要なるものにして談話文章の組立もこれが存在によりてはじめてその目的を達するを得べきものたり。而してその用言はその陳述の力と共に種々の屬性をあらはせるもの大多數を占むれどももとその屬性の存在は用言の特徴と目すべきものにあらざることは既に上に述べたる所なり。この故に用言特有の現象は實にこの陳述の力に存するを知るべし。されば、その屬性甚だ汎く、漠然として屬性の捉ふべきものなく、又は殆ど全く屬性の認むべからざる場合にても陳述の力といふ用言特有の現象を有するものは用言たる資格十分なりといはざるべからず。この見地より見て、

「す」は動作の形式のみをあらはして具體的の實質を考ふべからざるもの(英語doに似たり)。

「あり」は汎く事物の存在をあらはし、進みては口語の「である」の如くに單に陳述の力のみをあはすもの（英語の be に似たり）なれども用言たること明かなり。今一歩を進めて考ふるに、既に「す」「あり」及び「である」の「ある」が用言なりとすれば、「如し」は狀態の形式のみをあらはし、「なり」「たり」は陳述の形式のみをあらはすものなるが、いづれも意義の上よりは、陳述の力を有し、形の上よりは一の語たる以上用言たるに疑なき筈なり。この最後の「如し」「なり」「たり」は世の文法家は助動詞なりといへり。然れどもそは誤なることは後に委しく說くべきが、これらはいづれも用言の特徵に注意せざるに基づく弊なり。

上述の如く用言は人間の思想の統一作用を表示するものなるが、その作用の發現する場合は種々にして一樣ならず。こゝに於いてその種々の場合に應ぜむが爲に、用言の用ゐ方にも種々の現象を呈す。かくて又その用ゐ方の變化につれて語形をかふることあり。然れども其の語形の變化につれて變化するものは用言の運用の場合の異なるのみにして、其の根本の意義は更に變ずることなし。世に活用又は「はたらき」といへるは、この運用上に生ずる語形の變化をさせるものなる

が、吾人はその變化する作用をいふときにのみ活用又は「はたらき」といふ語を用ゐ、その活用又は「はたらき」によりて變化して生ずる語形をさして活用形と名づくることゝせり。而してこの活用の存することこれ用言の外形上の特徴と認めらるるものなり。

今一二例をあげてその活用の狀態を明かにせむ。たとへば「美し」といふ語にありては吾人は

花の色美し。

といひて斷定をなし、

美しき花

といひて花を限定し、

花美しく咲く。

といひて下なる用言につゞけ、

花美しければ、人之を賞す。

といふ如く「ば」「ども」などいふ助詞につゞけて次なる語句に接續せしむ。これらの場合には「美し」といふ語形に「き」「く」「けれ」といふ形を加へて活用を惹き起すものなるを見る。然るに「あり」といふ語にありては

公園はこゝにあり。

こゝにある公園。

公園はこゝにあれど屢々來り遊ぶ暇なし。

公園若しあらば遊びにゆかむ。

といふ如くその語形の下に更に他の形を加ふることなくしてその語尾なる音に母韻の變化を起さしめて以て活用の現象を呈せしむ。以上極めて概略なれど、吾人の用言に於ける活用といふ現象は、その語の末尾に起る音の變化の現象なること、その末尾に起る變化は種々の音を加ふるによりて起るもの又は末尾の音の母音の變化によるものなることを明かに知るを得べし。

用言の活用は上述の如く主として語尾に起るものなるが、多くの場合に於いてその活用に對して變化せぬ部分あり。この變化せぬ部分を語幹といふ。たとへば

「うつくし」　く　き　けれ

「たはむ」　れ　る　るる　るれ

「あ」　ら　り　る　れ

の「うつくし」「たはむ」「あ」は語幹にして「く、き、けれ」「れ、る、るる、るれ」「ら、り、る、れ」は活

用なりといふなり。然るに稀には語幹が一音にして同時に活用なりと考へられざるべからざるものあり。たとへば

(見)み　みる　みれ

(爲)せ　し　す　する　すれ

の如きこれなり。かゝる時には語幹が同時に活用として變化すと見ざるべからざるものなりとす。

この語幹といふものをば從來多くは語根といへり。されど語幹(stem)とは活用を起す基礎となる部分をいふものにして、詞の性質によりては文法上重要なる用法に立つものあり、又然らざるものもあり。語根(root)は語幹よりは一層根本的のものにして單語を理論上より分析したる結果抽象したるものにして實地の運用上には直接關係のなきものなり。勿論、その形の單純なる語にては語幹と語尾の活用との區別の出來ぬものある如くに、語幹にして同時に語根なるものも稀には存するなり。されどそれとても理論上は區別を立てゝ考へ見るべきものなりとす。

今なほ仔細に用言の活用の起り方を見るに、種々の狀態あり。一は語幹と活用との區別の見ゆるものにては語尾の音を種々に變更するものあり。

よし△　よく△　よき△　よけれ△
美し　美しく△　美しき△　美しけれ△

の如きこれなり。二には語尾の音に母音の變化を起すものあり。たとへば

ゆく○　ゆか○　ゆき○　ゆけ○
あり○　あら○　ある○　あれ○

の如きこれなり。三にはその母音の變化の外に「る」「れ」の音の添へらるゝものあり。たとへば

戯る○　戯れ○　　　戯るゝ△　戯るれ△
要す○　要せ○　要し○　要する△　要すれ△

の如きこれなり。次には語幹が一音にして活用との區別を形の上になすを得ざる用言にありてはその活用は語幹に母音の變化を起し、その上に更に「る」「れ」の音の加はるものあり。(四)たとへば、

(經)へ○　ふ○　ふる△　ふれ△
(寢)ね○　ぬ○　ぬる△　ぬれ△

の如きこれなり。第五は語幹のまゝにてかねて活用となり、それに「る」「れ」の音の加はるのみなるものあり。たとへば、

(着)　き。　きる△　きれ△
(蹴)　け。　ける△　けれ△

の如きこれなり。而して以上の第三以下のものはいづれも「る」「れ」の音の添加あるものにしてその母音の變化あるものにては必ずウ韻より「る」「れ」につゞくを常規とするなり。

用言の活用の起り方は上の五種にて盡きたり。今研究の便宜の爲に活用の種類分けをなさむとす。その種類分けはその活用の起り方を基礎としてその活用形式により區分をなさむとするものなるが、實地に分類するに當りては、語幹を第二におきその活用を主點として考へざるべからず。かくてその活用の形式を主として考へて上の起り方の五種を或は合せ或は分ちて、こゝに「くしき」活用「しくしき」活用、四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用、カ行三段活用、サ行三段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用の十一種とす。この名目は主として古來の習慣により、その實に適してさとり易きをとれるものなるが、その委しきは次々に詳述すべし。なほ以上の十一種は文語の用言につきていへるものなるが、口語につきてはおのづから異なる點あれば、それらは後に一括して述ぶるところあらむとす。

用言の活用の多くは五十音圖の一の行のうちにて變化するものなるに、こゝに特別の現象としてカ行サ行の二行相混じて活用するものあり。これ即ち「くしき」活用と稱へらるゝものなり。「くしき」活用とは

よく。　よし。　よき。　よけれ。
長く。　長し。　長き。　長けれ。

の類にして「く、し、き、けれ」の語尾を語幹に加ふるものをさす。「高し」「低し」「短し」「早し」「遲し」など多數の語これに屬す。これを「く、し、き」活用といひたるは便宜上その主要なるものをとりて名目としたるものなるが、事實上「けれ」は歴史的に見れば、後世の發達に屬するが故に「く、し、き」の三にてこの活用の名目とせるものかへりて都合よき點あり。「しく、しき」活用とは

美しく。　美し　美しき。　美しけれ。
惡しく。　惡し　惡しき。　惡しけれ。

の類にして「くしき」活用に似たれども「よし」に似たる場合に「美し」といふ語幹そのまま用ゐて下に「し」音をとることなき例なるを異なりとす。この故に語尾として加ふるは、「く、き、けれ」の三種に止まるものなれど、説明の便宜上わかりよきやうに從來語幹のうちの「し」音をもこれに加へて「しくしき」活用とよび來れり。「けれ」を唱へ

ぬは上の「くしき」活用の場合と同じ。これに屬する語は「うれし」「にぎはし」「かなし」「ひさし」「たのし」などあり。

この「くしき」活用「しくしき」活用は古く音雜活といひたることあり。(富樫廣蔭)これは二行にわたりて活用すること次下のすべての活用と異なるによりてなり。その後「久活、志久活」といひ或は「幾活、志幾活」といひ一定せず。これを今の如く名づくるは近頃の事なりとす。

五十音圖の各一行に亘りて活用するもの多きうち、その最も模型的なるは「ア」「イ」「ウ」「エ」の四の母韻にわたりて活用するものとす。これを四段活用と名づく。これに屬する詞は

行か。 行き。 行く。 行け。(カ行)
押さ。 押し。 押す。 押せ。(サ行)
待た。 待ち。 待つ。 待て。(タ行)
言は。 言ひ。 言ふ。 言へ。(ハ行)
讀ま。 讀み。 讀む。 讀め。(マ行)
取ら。 取り。 取る。 取れ。(ラ行)

等にしてすべての活用中所屬最も多きものなりとす。而してこれらは右の圖に

て見る如くア、イ、ウ、エ、の四段にわたりて活用するものなるが、それの活用する點は實際は母韻のみなること次の如くなれば、

(カ行)	yuk	a
(サ行)	os	i
(タ行)	mat	u
(ハ行)	ih	e
(マ行)	yom	
(ラ行)	tor	

そのうちに特に種類を立つる必要なきが如くなれど、國語にては假名にてかきあらせる如く、熟音にて變化するものなれば、その點より着目して、カ行四段サ行四段等と稱するなり。而して四段活用の語はカ行、サ行、タ行、ハ行、マ行、ラ行の六行に限り、他の四行にはなきものなりとす。

活用を命名して何段活用といふことは本居春庭の詞八衢よりはじまれり。而して八衢は實に本邦に於ける活用の組織的研究の嚆矢にして、その成績長く後世の模範となれるを以てその名稱も後世多少の變更を加へつゝもなほこれを踏襲せるなり。その段とは活用の變化によりて用ゐらるゝ五十音圖の横列をかぞへたるものにして活用の數をさせるものとはいふべからず。四段活用のみは上述の如く段も四、活用も四なれど、その他は段の數と活用の數と必ずしも一致せず。

而して以下說くものは「る」「れ」の二音の添はれるを四段と異なりとす。

四段活用に次ぎて多き種類の用言は「エ」「ウ」の二の母韻にわたりて活用し、その「ウ」の母韻のある音に更に「る」「れ」の二の音の加はりて活用をなすものなり。

(得)え○	う○	う○る△	う○れ△	(ア行)
受け○	うく○	うく○る△	うく○れ△	(カ行)
失せ○	うす○	うす○る△	うす○れ△	(サ行)
捨て○	すつ○	すつ○る△	すつ○れ△	(タ行)
寢ね○	いぬ○	いぬ○る△	いぬ○れ△	(ナ行)
(經)へ○	ふ○	ふ○る△	ふ○れ△	(ハ行)
褒め○	む○	ほむ○る△	ほむ○れ△	(マ行)
吠え○	ほゆ○	ほゆ○る△	ほゆ○れ△	(ヤ行)
戯れ○	たはむる○	たはむる○ゝ△	たはむる○れ△	(ラ行)
植ゑ○	うう○	うう○る△	うう○れ△	(ワ行)

の如く五十音圖のエウの二段にわたり、なほそのウ韻の音に「る」「れ」の加はりて活用を完くするものなるが、姑くその「る」「れ」を別として考へて「エ」「ウ」の二段をとりて四段に對せしめて名づくれば二段活用ともいふべきものなるが、しかも次に示す如く

「イ」「ウ」の二段にわたりて活用するものあるによりてこれを區別せむが爲にこれを下二段と名づくるなり。これもその眞に活用する點は「エ」「ウ」の母韻以下なること次の如くなれば、

(ア行)(得)○	e
(カ行) uk	u
(サ行) us	uru
(タ行) sut	ure
(ナ行) in	
(ハ行) h	
(マ行) hom	
(ヤ行) hoy	
(ラ行) taham	
(ワ行) uw	

別に種類を立つる必要なきが如くなれど、假名にてかきあらはせる如く、熟音にて變化するものなるにより、その變化の點より着目してア行下二段、カ行下二段等と稱す。而して下二段活用の語は五十音圖の十行にわたりて活用をなすなり。

下二段活用に對比して考ふべきものは上二段活用なり。これは五十音圖の「イ」「ウ」の二の母韻にわたりて活用し、その「ウ」の母韻ある音に「る」「れ」の添はりて活用するものなり。これに屬する詞は

起き。　おく。　おくる　おくれ　（カ行）

掘じ。　こず。　こず。る△　こず。れ△　（サ行）
朽ち。　くつ。　くつ。る△　くつ。れ△　（タ行）
銹び。　さぶ。　さぶ。る△　さぶ。れ△　（ハ行）
浴み。　あむ。　あむ。る△　あむ。れ△　（マ行）
老い。　おゆ。　おゆ。る△　おゆ。れ△　（ヤ行）
下り。　おる。　おる。ゝ△　おる。れ△　（ラ行）

等にしていづれも五十音圖の「イ、ウ」の二段にわたり、なほその「ウ」韻の音に「る」「れ」の加はりて活用を完くするものなり。而してこれは上述の下二段活用と甚だよく似たれども、彼は五十音圖の第三第四の二段に活用し、これは五十音圖の第二第三の二段に活用するを以てこの區別を明かにせむが爲に彼を下二段といひ、これを上二段と名づけたるものなり。この活用の名稱ははじめ「詞の八衢」には中二段といひしをば黑澤翁滿の「言靈のしるべ」に上二段と改めたるよりして世の通用する所となれるなり。この活用もその眞に變化する點は「イ、ウ」の韻以下たること次の如くなれば

(カ行) ok(起)		
(サ行) koz(掘)	i	
(タ行) kut(朽)	u	
(ハ行) sab(經)	uru	
(マ行) am(浴)	ure	
(ヤ行) oy(老)		
(ラ行) or(下)		

これも特にその内に種類を立つる必要なきが如くなれど、これも熟音にて活用するによりその點より着目してカ行上二段活用、サ行上二段活用等と稱す。而して上二段活用の語はカ行、サ行、タ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行の七行に亘りて存し、ア行、ナ行、ワ行の三行には存せざるなり。

一の音とそれに附屬する「る、れ」の音とによりて完成する活用あり。これは一段活用と名づくべきものなるが、これに「イ」韻の音を基とするものと「エ」韻の音を基とするものとの二種あるにより、その二者を區別し、前者を上一段活用といひ、後者を下一段活用といふ。上一段活用とは

(着)　き　きる　きれ　(カ行)
(似)　に　にる　にれ　(ナ行)
(乾)　ひ　ひる　ひれ　(ハ行)

（見）　み　　　みる　　みれ　　（マ行）
（射）　い　　　いる　　いれ　　（ヤ行）
（居）　ゐ　　　ゐる　　ゐれ　　（ワ行）

の如きものをいふ。これらは「き」「に」「ひ」「み」「い」「ゐ」の音を基礎とするものなるが、五十音圖にていへば、中央より上なる音のうち一段に活用するによりてかく名づくるなり。これも亦活用所屬の音によりて、カ行上一段、ナ行上一段等といふ。この上一段活用に屬する動詞は文語にてはその數甚だ少くして、活用する行は前述の如くカ行、ナ行、ハ行、マ行、ヤ行、ワ行の六行に限るものとす。次に下一段活用とは

（蹴）　け　　　ける　　けれ

といふ語にしてこれはエ韻の音に「る、れ」の加はれるものなるが、文語にてはこの一語のみを認むるに過ぎず。これをば他の例に準じてカ行下一段と稱ふべきが、一種、一活用、一語のものなりとす。この下一段活用は詞の八衢の當初には認められざりしものなるが故に當時は事實上、今の上一段のみを一段活用と認め、上下の區別をなすことなく名目も一段活用といひしなり。然るに、林圀雄の「詞の緒環」に上一段下一段といふ區別を立て「ける」の外にも三四の語を以て下一段とせり。その說全くは學界に認められざりしかども、下一段活用といふ名目はこれより起りて

長く後世に行はれたり。

「來」といふ語は活用ありて、五十音圖の「オ、イ、ウ」の三段とそのウ韻の音に「る、れ」を添へたるものにて活用を完了するものなり。

（來）　こ　き　く　くる　くれ

これは「來」の一語のみなるが、從來はこれをカ行變格といへり。されど、三段といふ方さす所明かなるによりて今かく名づけたり。而して三段なるにはサ行のもあるによりてカ行といふ語を冠してそれとの區別を明かにす。

「爲」といふ語も亦活用あり。これは五十音圖の「エ、イ、ウ」の三段とその「ス」音に「る」「れ」を添へたるものとにて活用を完うするものなり。

（爲）　せ　し　す　する　すれ

これは上のカ行三段と同じ樣に三段活用といふべきものなれど、所屬の行の異なるのみならず、活用の段にも相違あれば別の類とすべきものなりとす。よりてこれをサ行三段といひて一類と立つ。これも亦從來サ行變格活用といはれたるものなれども、三段といふ方具體的なればこの名を用ゐたり。この「す」といふ語は

與す　裏書す　要す　タッチす

等の如く名詞漢語外國語等につきてそれらを用言とするに用ゐらるゝものにし

て、その「す」の附屬せる用言は現時最も頻繁に用ゐらるゝが故に普通文法にては頗る重要なる地位を占むる語なりとす。

余が三段活用と稱するものは從來カ行變格、サ行變格といはれしものなること既に述べたる通りなるが、元來この二種の活用はその性質頗る相似て、助詞「なそ」に挾まるゝ場合及び複語尾「き、し、しか」に接する場合は共に他の用言と趣を異にす。この故にこの點に於いてこれを一括しておく方說明上甚だ便利なり。勿論變格と稱せらるゝはこの點によるものなれど、次にいふ變格はこれと異なる點の存するものなれば、とにかくにそれらとこれらとは區別しおくを便とす。而して次にいふ變格は四段活用の形を有しながら形及び用法の上にて普通の四段と異なるが故にそれを變格と稱するはかへりて辨別に便なれど、こゝにいへるものは形の上にては儼然たる三段活用にして、又これを三段活用と稱する方說明の上にも統一あり、又實質にも適合せるなり。加之未然形所屬の複語尾を伴ふ場合には四段と次にいふ變格とは一團をなして「る」「す」の如き單形を伴ひ、三段活用は二段活用一段活用と共に「らる」「さす」の如き複形を伴ふものなればかたがたこの三段を變格と稱して「死ぬ」「あり」と同一になす時は說明上甚だ手數かゝりてかへりて辨別にも記憶に困難なり。なほ又三段活用といふ名目は著者が今はじめてつけたるものに

あらずして著者の學統にては古よりこの名を用ゐたるなり。而して世に知られたる著書の上にてこれを三段活用と名づけしものは黒澤翁滿の「言靈のしるべ」をはじめとするものゝ如し。又これを上三段下三段と名づけたるものもあれど、各一行のみなれば、端的にカ行サ行の三段と稱する方明瞭なるによりこれを用ゐたるなり。

以上の外四段活用の如く四段に活用して、しかも特別の現象を呈するものあり。これを變格の活用といふ。これにまた二種あり。先づ「死ぬ」「往ぬ」といふ語は

（死 往）　な°　に°　ぬ°　ぬる°△　ぬれ°△　ね°

の活用をなすものなるが、これは「ア、イ、ウ、エ」の四韻に活用することは四段活用に似たれどそのウ韻なる「ぬ」の音に「る」「れ」の添はれる點は三段活用、二段活用、一段活用に似たり。かくて活用の數は六になれり。これ變格と稱する所以なるが、これに屬する語は「死ぬ」「往ぬ」の二語に止まれるを以て直ちにその所屬の行の名を冠してナ行變格活用と名づく。變格の他の一種は「あり」といふ語なり。これは

（有）　ら　り　る　れ

と活用するを以て普通の四段活用と何等の相違なきが如くに見ゆ。然るに、これを變格と稱する所以は實にその句の終りとして用ゐらるゝ形の差違にあり。即

ち四段活用にては、句の終りとして用ゐる普通の形には

行く　押す　待つ　問ふ

讀む　釣る

の如く「ウ」韻の音を用ゐるものなるに「あり」にありては

こゝに有り。

の如く「イ」韻の音を以てす。この故にこれを普通の四段活用と區別して變格とするなり。而してその活用の部分良行に屬するを以て直ちに良行變格と名づけて奈行變格と區別するなり。さてこゝに變格と稱するものは前に述べたる如く、奈行變格と良行變格との二種に限れり。この二種は共に一面よりいへば、四段活用の一種と見るべきものにして、しかも奈行變格は活用の形の上に、良行變格は活用の用法の上に尋常の四段と異なる點あるを以てこれを變格と稱せり。この二は委しくいへば四段活用の變態なるものといふべきなり。

四段活用、良行變格活用、上二段活用、下二段活用は活用の數各四あれど、上一段活用、下一段活用は活用の數三に止まり、加行左行の三段活用は活用の數五あり、奈行變格活用は活用の數六あり。これを以て用言の活用には段の數に異同あると共に活用の數も一定せぬものなりと知るべし。

この段といふは五十音圖の橫列をかぞへたるものにして、その段の數は語尾の音の變化を示したるものなり。然るに三段二段一段等はその段の外に「る、れ」の二音を添ふるによりて活用の實際の形の數はその名の示す段の數よりも多くなれるなり。この事は誤解を生じ易きによりてよく心得おくべきことなり。

以上述べたる所は文語の用言に存する活用の種類分けなるが、活用には古今の變遷ありて、その結果として口語の用言にありてはその活用の形式の上に頗る大なる相違あり。それらの事は、用言の各論に至りて文語と對比して說くべし。

用言には活用あるによりて一方より見れば、靜止的の形を見るを得ざるものといふを得べし。然れども吾人は某の用言をいふ場合に、ある一定の形を以てそれの本體として認むることを要求す。その形は普通に用言の本體と目せらるべきものなるが、吾人がその本體と認むるものは何ぞといふに單獨にて卽ちその用言一個のまゝにて文句の述語となり得るものを以てその根本の形式と認むるなり。卽ち用言を呼ぶにはその形を以てす。たとへば「讀む」といふ語は

讀ま　　讀み　　讀む　　讀め

の四活用あるうちにつきて「讀む」は

本を讀む

といふ形に用ゐらるゝものなれば、これをその根本の形卽ち用言としての性質上最も靜止に近き形としてこの用言をよぶに「讀む」といふ語といふなり。この形は普通の終止に用ゐらるゝものなれば、通常終止形とよべり。

用言の活用は上にいへる如くその種類によりて形式を異にするものなれど、その用ゐらるゝ場合は無規律なるものにあらず。これによりてすべての用言に通じて活用の方式を調整して硏究の便宜の爲に一定の型を定む。その一定の型を其の活用形といふ。而して上にいへる終止形も亦その活用形の一たるものとす。

活用形の基本の型をば終止形と名づくること旣にいひたる所なるが、この型は「くしき」活用「しくしき」活用にありては「し」音の所に存し、四段活用にありてはウ韻の音に存し、上下の二段活用、カ行サ行の三段活用、ナ行變格活用にありては同じく「ウ」韻の音にして「る、れ」の添加なき所に存す。又上下の一段活用にありては「る」音の添へられたる形に存し、ラ行變格にありては「イ」韻の音に存す。卽ち

くしき活用　善し。
しくしき活用　惡し。
四段活用　行く。
ナ行變格活用　死ぬ。

上二段活用　　起く。
下二段活用　　受く。
カ行三段活用　（來）く。
サ行三段活用　（爲）す。
上一段活用　　きる。
下一段活用　　ける。
ラ行變格活用　あり。

の形これなり。これらは終止をなす外、複語尾を分出することあり、又助詞につゞくることとある等種々の用をなすものなれど、そのうち最も普通なる用法の一をとりて名目としたるなり。しかも、用言に於いて終止する形には、

汝は往ね。
われこそ往ぬれ。
われぞ往ぬる。

の如く種々の場合あれば、そのいづれをも終止形といはゞいふをうべし。されどこゝにいふ所の終止形の義は他に何等の條件なしにその用言單獨に用ゐられてしかも、最も單純なる意味を以て終止として用ゐらるゝ形なりといふ義を以て名

づけたるなり。されば、これらの名目は一の便宜に止まれるものにして、その名目は或る動かぬ、しかも著しき點につきて名目を立てたるものなれども、それを廣汎の意にとるときは往々誤解を生ずることあり。さればこれらの名目そのものは約束的のものにして嚴密なる定義の如き意義ありと思ふべからず。さりとてその活用形には一定の用法ありて漫りに動かすことをうるものにあらざれば、名目の便宜的なりといふことに拘泥して、その性質用法も漫然たるものなりと誤解すべからず。この活用形は古き文法書には截斷言、終止言、終止段などいひしものなり。

用言の活用形の一として體言の上に冠してその體言の意義を修飾限定するに用ゐる形あり。この形を連體形といふ。この活用形は「くしき」活用「しくしき」活用にありては「き」の音に存し、四段活用、良行變格活用にありては「ウ」韻の音に存し、その他の活用にありては添加せられたる「る」音に存す。即ち

くしき活用　　善き。

しくしき活用　　惡しき。

四段活用　　行く。

ラ行變格活用　　有る。

ナ行變格活用　死ぬる
上二段活用　起くる
下二段活用　受くる
上一段活用　きる
下一段活用　ける
カ行三段活用　くる
サ行三段活用　する

の形これなり。これらも亦その用法は體言に冠するに止まらず、或は特別の終止として用ゐることあり、又體言に準ずる形として用ゐらるゝこと等ありて、連體の用をなすに止まらざるなり。されど、その多くの用法中最も普通にして最も目立ち、しかもわかりやすきは連體の用法なれば、とりて名目とせるものなり。而してこの形はある用言(卽ち四段、一段)にては終止形と同じ形なるものなり。されど用言一切に通じて見るとき、これを一の型と立つるを便とするによりてかく一の活用形と立てゝ、別とせるなり。この形も古くは連體言、連體段、續體段などいひしものなり。

用言の活用形の一として他の用言の上に冠してこれに連ね、相合して用ゐらる

る形あり。この形を連用形といふ。この形は「くしき」活用「しくしき」活用にありては「く」の音に存し、四段活用、上二段活用、上一段活用、カ行サ行の三段活用、ナ行、ラ行の變格活用にありては「イ」韻の音に存し、下二段活用、下一段活用にありてはエ韻の音に存す。即ち

くしき活用　善く。
しくしき活用　惡しく。
四段活用　行き。
上二段活用　起き。
下二段活用　受け。
上一段活用　(着)き。
下一段活用　(蹴)け。
カ行三段活用　(來)き。
サ行三段活用　(爲)し。
ナ行變格活用　死に。
ラ行變格活用　有り。

の形これなり。これらも亦その用法之に止まらず、語句を下に重ね、又は陳述を中

止し、又は複語尾を分出する場合等にも用ゐらるゝなり。然れどもその最も認め易き點はこの用法にあれば、これをとりて名目に用ゐたるものなり。この活用形も古き文法書にては連用言、連用段などいひしものなり。

用言の活用形の一として「ば」「ど」「ども」といふ助詞を下にふみて更に下の語句につゞけ既に存在せる事又は已に定まれる事を條件とする意を示す形あり。この形を已然形といふ。この形は「ば」と同時に「ど」「ども」に接するを得る形にして「くしき」活用「しくしき活用にては「けれ」の形に存し、四段活用、良行變格活用にありては「エ」韻の音に存し、その他にありては添加せられたる「れ」音に存す。即ち

くしき活用　善けれ
しくしき活用　美しけれ
四段活用　行け
上二段活用　起くれ
下二段活用　受くれ
上一段活用　着れ
下一段活用　蹴れ
カ行三段活用　くれ

サ行三段活用　　すれ△
ナ行變格活用　　死ぬれ△
ラ行變格活用　あれ。
の形これなり。この形は上に「こそ」といふ助詞ある時それに對しての結となりて終止することあるなるが、「ば」「ど」「ども」につゞくる形として說く方わかりやすればそれをとりて名目としたるものなり。その已然形といふは已に然る形といふ義なるが委しくは已然條件形といふべきを略せるなり。この形も古き文法書にては已然言、已然段、既然段などいひしものなり。

用言の活用形の一として「ば」といふ助詞を下にふみて更に下につゞけ、未だ定まらぬ事を條件とする意を示す形あり。この形を未然形といふ。この未然形といふ名目は委しくは未然條件形といふべきを略せるものにして已然形と相對せるものなり。而してその「ば」といふ助詞をふむ點は已然形と相似たれど、その意義は正反對なり。卽ち彼はその事の已に存在せるものにつきていへるに、これは未だ存在せざる事を假設して條件とせるなり。而してこれは「ば」には必ず接すれども「ど」「ども」といふ助詞につゞくこと全くなきなり。この形は「くしき」活用「しくしき」活用にありては「く」の音に存し四段活用、變格活用にありては「ア」韻の音に存し、上二段

活用上一段活用にありては「イ」韻の音に存し、下二段活用、下一段活用サ行三段活用にありては「エ」韻の音に存し、カ行三段活用にありては「オ」韻の音に存す。卽ち

くしき活用　善く。
しくしき活用　惡しく。
四段活用　行か。
上二段活用　起き。
下二段活用　受け。
上一段活用　(着)き。
下一段活用　(蹴)け。
カ行三段活用　(來)こ。
サ行三段活用　(爲)せ。
ナ行變格活用　死な。
ラ行變格活用　有ら。

の形これなり。この形は「美しく」「よく」の類を除きたる他の類の用言にては「ず」といふ打消の複語尾「む」といふ豫想の複語尾につゞくるを以て最もよく認めらるれども「くしき」活用「しくしき」活用にはこの事なきを以て「ば」につゞけて認むるを要す。

この形は古き文法書にては將然言、將然段、未然段などいひしものなり。

「くしき」活用「しくしき」活用以外の用言にありてはその活用形の一として命令、希求、許容、放任等の意を表はすに用ゐる形あり。この形を命令形といふ。この形は四段活用、下二段活用、下一段活用、サ行三段活用、變格活用にありては「エ」韻の音に存し、上二段活用、上一段活用にありては「イ」韻の音に存し、カ行三段活用にありては「オ」韻の音に存す。而して多くは「よ」といふ助詞を添へてその用を完くするものとす。

卽ち

四段活用　　行け。

上二段活用　起き。(よ)

下二段活用　受け。(よ)

上一段活用　(着)き。(よ)

下一段活用　(蹴)け。(よ)

カ行三段活用　(來)こ。(よ)

サ行三段活用　(爲)せ。(よ)

ナ行變格活用　死ね。

ラ行變格活用　有れ。

の形これなり。さてこの命令形といふは單に命令にのみ用ゐらるゝにあらず。既にいへる如く希求にも許容にも放任にも用ゐらるることあるものなり。たとへば

何はともあれ、急ぎこの事をせねばならぬ。

といふ場合の「あれ」は命令形なり。されど、その意は命令の意にあらずして「放任」の意をあらはせるものなり。又

多少の過失あるにせよ、それは今問題とすべきことにあらず。

といふ場合の「せよ」の如きも文法上命令形といふ名目を以てよぶべしといへどもその意義と用法は決して命令にあらずして、これは許容放任の意をあらはせるものなり。卽ちこの命令形といふ名目も亦その用のうちの著しきものによりて與へたる名目なり。この形も古き文法書にては希求言、希求段などいひしものなり。なほこの活用形につき注意すべきことは既にいひし如く「くしき」活用「しくしき」活用の語にはこの活用形の存在せぬことなり。

用言の活用形は上述の如く未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六を以て研究上の名目とするなり。而してこの六の活用形の名目はその用法のうち、著しくして、わかり易き一の現象をとりて名づけたるものにして、それがすべての用

法をあらはしたるものにあらざることを明確に知りおかざるべからざると共に、その名目の示す以外の用をなすことあるを忘るべからず。なほ又活用形は上の六種に分てりといへども活用の種類によりては一の形にて二以上の活用形として用ゐらるゝことあるなり。この六種を各別なる形にて有するものは奈行變格活用のみにして、他は一の形にて二種又は二種以上の用を兼ぬるものあるなり。されば活用形の六種の完全なる模型を得むと欲する時は必ず奈行變格活用の語につきて求むべきものなり。今奈行變格の語の活用形を一括して例示する時は次の如し。

徒らに死なばいかにくちをしからむ。（未然形）
かくてかれは彼の地にて死にうせたり。（連用形）
冬に至れば昆蟲は或は死に、或は蟄す。（連用形）
鄕里にて病に死ぬ。（終止形）
しぬる人あり、生るゝ人あり。（連體形）
義に臨みては死ぬるをもいとはず。（連體形）
我今御國の爲に死ぬれば、遺憾とする所更になし。（已然形）
命はかくて死ぬれども、名は千載も朽ちず。（已然形）

汝も日本男子なり潔く國の爲に戰場にて死ね。（命令形）

さて、活用形を六種と立てたることは實に、この奈行變格活用の語尾に六の異なる形の存するによりて之を模型として一般に通ずる標準を按出せしものなり。元來この活用形の研究は富士谷成章の裝圖に端を發し、鈴木朗の活語斷續譜によりて略形を定め、東條義門の活語指南によりて完成したるものにして、それは奈行變格活用の六種の活用形を變化の極限と見てこれを標準として立てたるものたり。この故に六の形をもたぬものは一の形にて二種三種の活用形をなすものと見做したるなり。この精神を理解してはじめて六種の活用形の存することをさとるべきなり。

用言の活用形の稱は古來或は段といひ、或は言といひ、格といひ、階といひ、法といて殆ど一定せざりしものなり。著者はこれを形といふ名目を以てすることゝせり。この術語は余が初めより用ゐしものにして近時の文典殆ど一致してこの形といふ術語を用ゐたり。さて活用形の命名は義門の研究をはじめとす。即ちその著に

將然言　連用言　截斷言　連體言　已然言　希求言

の六をあげて活用の研究に資したり。その後將然といふは打消の形をも出すべ

きによりて當らずとして富樫廣蔭の詞の玉橋に未然段といへるによりて後、これをとり、又黒川眞頼氏が截斷を終止といふべしと論ぜしによりて其の說に一定し、又希求は西洋文典の譯語の影響を受けて、いつしか命令と改まりたるなり。

活用形の上にも古今の變遷あり。終止形と連體形とは四段活用、一段活用に於ては古より同一なれども二段活用、三段活用に至りては終止形は「ウ」韻の音、連體形は「ウ」韻の音に「る」の加はりたるものにして別のものなりしが、平安朝の頃に餘情を含めていふ爲に連體形を以て終止の如くに用ゐる特別の用法起りぬ。たとへば

あやしきものかな御前にかゝる物をさしいれていぬる」とて　（空穗、國讓中）

海賊にやあらむちひさき船のとぶやうにてくる」などいふものあり。（源、玉鬘）

かくて待ける」と思ふにされてをかしければ、　（落窪、一）

の如し。かくてこれは當初餘情を含ましむる特別の場合なりしが、鎌倉時代頃より漸くこれが普通の現象の如くになり、それより後終に今日の口語の如く、連體形を以て終止とすること一般の現象となりては終止形といふ活用形が、殆ど全く不要のものとなりはて、連體形即ち終止たること一定の法則とはなりぬ。この故に口語につきていへば六の活用形を立つることを必要とせずして終止形を除きたる五の活用形にて足れりとすべきものとなれり。なほその委細は用言の各論に

口語の活用と共に說く所あるべし。

活用形の用法は多様なれども、これを大別すれば下に續くか、そこにて終るかの二の方式のみとなる。それ故に鈴木朗はそれを硏究して活語斷續譜を著したるなり。さてその終る場合は

一、終止形の普通の終止

二、命令形の終止

三、連體形の特別の終止

四、已然形の特別の終止

五、連用形の中止の語法をとりたる時

の五様あるなり。次に下につゞく場合をみれば、

一、未然形、連體形、已然形の接續助詞につゞくとき

二、連用形が句の述格として句を重ぬるとき

三、連用形が下の用言に重なりつゞくとき

四、連用形、連體形が體言に準ぜられて格助詞をとるとき

五、連體形が下の體言につゞくとき

の如く種々の狀態を呈するものなり。然もこれらの活用形は假令へば未然形に

ては

花を咲かす。花を咲かしむ。

花咲かず。　花咲かむ。

の如くその活用形の下に更に別の語尾を出すこと少からず。この「す」「しむ」「ず」「む」の如きものは如何なる性質と用法とを有するものなるか。明治以後の文典にはかくの如きものを助動詞と稱へ來れり。然れどもこれらは西洋語の助動詞と性質も用法も異にして、それを助動詞として一語として取扱ふこと能はざるものなれば、本書に於いてはこれを語尾の複雜に發達して生ぜるものと認め複語尾と稱へたり。その事につきてはなほ下に說くべきなり。

用言の分類は如何にすべきか。用言は通例動詞と形容詞との二に大別せらるゝものなるが、何によりてかく大別せらるゝか、又この二大別にて差支なきものなりや、これらの事は一往の研究を經るにあらずんば、學術上可否を論じうべきにあらざるなり。今若し、用言の上に吾人が分類を施さむと欲せばその分類は、その意義と性質と活用の差別との三者の上に矛盾衝突を來さゞる底のものならざるべからざるが、それよりも更に溯りて、抑も用言を類別する標準如何といふ根本的の問題あり。今これを考へ見むとす。

用言の分類は何を標準として施すべきものなるかと考ふるに、用言はその因子として屬性觀念と陳述の力とを有することは既に屢々述べたる所なるが、その陳述の力の存することは用言としての最も重要なる特質なれど、それは一切の用言の通有する所なれば、これのみに着眼しては分類を施すべき餘地なきものなりとす。されば用言の分類といふものはそれに伴ふ屬性の如何によりて分類を施すべきものならむことはいふまでもなきことなるべしと信ず。こゝに於いて吾人はその用言の屬性の有無又はその屬性が如何樣にあらはるゝかといふ如き點を基として、或る類別を考へ、而してそれらの類別がその意義と活用との區別の上に牴牾するものあるか否かを檢して、その分類の當否を決定すべきことゝなるなり。而してかくの如き見地に立ちたる時にかの動詞形容詞の區別は果して當を得たるものか否かを考へざるべからざるものなるが、これをわが文法學の歴史に顧み、又國語の特性に徴するに、直ちに從ふべからざる點あり。次にこの事を述べむ。

元來用言といふ術語は本邦の學者間に起りたるものにして、世界に類例なきものなり。その本邦の學者間にこの思想の生じたるは國語の特殊なる性質より來れるものなれば、これが類例を他の國語に求めて後決せむとせば、殆ど不可能の事に屬すべし。こゝに於いて吾人が主たる參考とすべきものは古來、本邦の學者の

間に行はれたる用言分類の歴史なりとす。

本邦に於いて用言の分類をはじめて施したるは富士谷成章なるが、氏は「裝」を「事」と「狀」との二に分ちたり。次には鈴木朗なるが、氏の言語四種論中には「作用の詞」「形狀の詞」の二種をあげたり。この書は用言のみを分類したるにあらねど、この二別を認めたる點は大略富士谷氏に似たり。富樫廣蔭は詞を「說動用詞」と「說容體詞」とに別ちたるが、その說動用詞は今普通にいふ動詞の基づく所にして、說容體詞は今の所謂形容詞の基づく所なり。かくの如くなれば、本邦古來の學者皆この二種に分つことをしたる如く見ゆれど、その分類の內容を仔細に見れば、必ずしも一定の姿ありといふを得ざるなり。先づ富士谷氏の事(ワザ)を更に二に分ちて、狹義の事(ワザ)と孔(アリナ)との二とせり。その狹義の「事」は「在り」以外の動詞をさし「アリナ」といふは「在り」といふ用言をさすなり。富士谷氏は又狀(サマ)を更に四に分ちて、芝狀(シ)、鋪狀(シキ)、在狀(アリ)、返狀(カヘシ)とせり。そのうちの「しさま」「しきさま」は「くしき活用」「しく、しき」活用をさせるなるが、在狀とは「遙かなり」の類をさせり。而して、その「在りな」と「在りさま」とはもと一なるが、實用上の差により二に分ちたるはいふをまたず。この「在り」は鈴木の分類には形狀の詞に入れてあり、富樫氏の分類には說動用詞に入れてあり。かくの如く、諸家名目は區々なれど內容は略一定の姿を呈せるがうちに、たゞ動搖して定まらざるは「あり」

の一類の所屬なりとす。

こゝに先づ問題となるべきものは古來その所屬の不定なる「あり」といふ用言なり。この用言を見るに、これ實に形容詞にも動詞にも似たる點あるなり。意義の上よりいへば、狀態をいふといひてもよきさまに考へられ、形の上よりいへば、イ韻の音にて終止する點は所謂形容詞と共通する點あり。これ即ち鈴木氏が「形狀の詞」に收めたる所以なるべし。又その活用の音變化の點より見れば、ラ行四段に活用し、又その活用形より複語尾を分出しうる點は所謂形容詞とは異にして、所謂動詞と共通の點あり。これ富樫氏の說動用詞の部類に收めたる所以なるべし。されば、以上の二說いはば、いづれも多少の根據なきことにはあらざるなり。然れども、之を一方に强ひて納るゝ時は又矛盾を生ず。これ富士谷氏が「孔」と「在狀」とを區別し、一方を「事」とし、一方を「狀」としたる所以なるべきが、しかも在り」は動作作用といふことをあらはす語にあらねば、富士谷の說にても今の所謂動詞の說明にても意義の上よりまた矛盾を生ず。されば、これまた決定的の分類にあらざるべし。ここに至りて、吾人は今それらのいづれに從ふべきか、はた或は如何に之を處置すべきかといふ實地の問題に逢着せり。

こゝに古來その所屬の不定なる「あり」といふ用言を見るに、これは動詞の一類に

あらぬことは明らかなり。然らば形容詞に入るべきかといふにこれ亦その理なし。「在り」は實に形容詞にも動詞にも屬すべきものにあらずして、二者に共通して兼ぬる點もあり、しかもその意義は屬性と名づくべきものをば全く有せずして、たゞ存在を示すのみのものなるが、用ゐ方によりては存在の意もなくなりて、たゞ陳述の力のみをあらはすに止まる場合もあるなり。しかもこの「あり」はその活用所謂動詞に似て亦一種特別の趣ありて、古來變格と呼ばれたるものなり。かゝれば、上述の種々の點よりしてこの「あり」を先づ他の用言と區別することゝせば、古來の難點を處理するを得べし。

かやうにして「あり」を他の用言と區別すべしとせば、その分釋の原理を何にとるべきか。惟ふにこの際にはその用言のあらはす屬性の觀念の如何を分釋の原理とすべきこと、既に述べたる所なるが、こゝにその屬性の意の具體的なるものと、極めて抽象にして殆ど屬性と名づくべきもののなきものとの區別を立つることを得べし。即ち「有り」は具體的の屬性の認められざるものなれば、これを形式用言と名づけ、具體的の屬性の認めらるゝ用言をば、實質用言と名づくるときは、吾人は古來の難問題たりし「あり」の處置に惑ふところなかるべきなり。

かくて考ふるに吾人は「あり」の外にも形式用言と認めて可なるもののあるを知る。

「如し」といふ語これなり。「如し」は形容詞としての意明かにして用言の用と活用とを有すれども、實質全く缺乏せり。この故にこれを使用するには形容に供する觀念を補充せざるべからず。この補充の觀念は屬性としての依存性の語にあらずして、儼然たる體言又は體言の資格を附與せられたるものに限れり。近來これを助動詞なりといふ說行はるれど、これは所謂動詞の意義を有せず、又動詞の活用を有せず。而して又他の動詞の補助をなすものにあらず。一の用言として形容詞たることは明かなるが、たゞ實質觀念の全く缺如せる點が、普通の形容詞と異にして、その點は「あり」が他の用言と異なる點と同樣の趣に立てるものなりとす。

「あり」「如し」の外になほ形式用言と名づけて可なるものあり。「す」これなり。この語は動作作用をあらはすことは明かなれど、如何なる動作作用をもあらはすものなれば、そのさす所極めて汎く一切の動作作用みなこの語にてあらはすべく實質殆どなしといひて可なり。さればこれ亦形式用言といひて可なるものなり。かくて形式用言と目すべきものは、上の「あり」「如し」「す」を代表的のものとするものなるが、しかも、その中にも「如し」は所謂形容詞の性を有し、「す」は所謂動詞の性を有するが故に、この二者は具體的の實質なしといへども、意義上偏向する處あるによりて姑く除きておかむ。「あり」に至りては純然として屬性を有せぬによりてこれは形式

用言の主體といふを得べし。かくてこの「あり」の結合體たる「なり」「たり」の如きも亦形式用言たるべく、それらの口語體なる「だ」及び「です」も亦形式用言たるものといふをうべし。

こゝに形式用言と實質用言との區別を明かにせば、次の如くいふを得む。實質用言とは陳述の力と共に何らかの具體的の屬性觀念の同時にあらはされたる用言にして、形式用言とは陳述の力を有することは勿論なるが、實質の甚しく缺乏してその示す屬性の意味甚だ稀薄にして、たゞその形式をいふに止まり、その最も抽象的なるものはたゞ存在をいふに止まり、進んでは單に陳述の力のみをあらはすに止まるものなり。

さてこゝに實質用言につきて論究すべき順序となれり。これは即ち世にいふ形容詞と動詞との中より古來難關とせる「あり」を除き去りたるものなれば、形容詞動詞の二に大別すべきことは何人も考へうべき事とす。この形容詞と動詞との區別の存することは一見明かなることなれど、之を明確に說き示すことは容易の事にはあらざるなり。從來の說明は多くは

動詞は動作をあらはす詞

形容詞は事物の有樣をあらはす詞

といふが如きものにして、少しく委しきものにても

形容詞とは長短、輕重、善惡、美醜の如き一切の性質を示す用言

動詞とは行爲若くは狀態を示す用言

といふ如き說明にて之を示し得たりと思惟せる如くなれど形容詞の示す屬性はなほ狀態といひても不可なきもの少からず。この故に、長短乃至美醜といふが如き具體的の內容を例示するにあらずば明かにし難き點あり。かくてこれらの實例に見ても「淋し」「賑はし」の如きは性質といふべきものにあらずして明かに狀態たるなり。しかるにこれらは形容詞たるにあらずや。この故に形容詞はその名目の示すが如く、寧ろ狀態を示す用言といふべきものなるが如し。かくの如く見るときは動詞は狀態を示す用言なりといふ定義は事實に該當せずといふべし。然らば、動詞は動作をあらはし、形容詞は狀態をあらはすといふことを以て區別せむとせば如何といふに、動詞たる「似る」「見ゆ」「成る」の如きは動作といふよりも寧ろ狀態に近きなり。さればかくの如き說明にては到底明かにこれらの區別を示すこと能はざるなり。余はこの二者の區別は上の如き說明を以てしては到底不可なるべきを信じ、百方研究の後日本文法論に之れを明かにし、又日本文法講義にも述べおきたるが、それらの要旨をなほ他の方面より見て說くべし。

こゝにいふ動詞と形容詞との區別は何を標準として分類すべきものなるか。先づその標準を明かにせざるべからず。この二者は既にいへる如く二者相合して實質用言の全部を充すものなれば、これ卽ち實質用言の特徵に分釋の原理を求めてこれを標準とせば可なる筈なり。實質用言は既にいへる如く、陳述の力と共に、各具體的の屬性觀念をも伴ひあらはせるものなるが、その陳述の力は用言としては最も大切なるものにはあれど、すべての用言に共通して存するものなれば、これは用言內部の區分を立つる標準にはなるべからざるものなり。然りとせばこの區分の標準はそれらの示す屬性觀念に求めざるべからざるは明かなる事なりとす。

かくて、これらのあらはす屬性觀念の上に區分の標準を求むべきこととなれるが、これにつきてもなほ考ふべき餘地存せり。たとへば、從來の說に性質又は狀態をあらはすといふ如きことを以て區別せむとしたれども、性質といひ狀態といふが如き名目を以て差別の標準とせむとせば、矛盾衝突の必ず生ずべきは既にいひし所の如し。されば、これらの場合には、一方は性質、一方は狀態といふが如きことにては區別を立て難き事明かにして、その區分の標準はそれらその狀態その性質といはるゝものを如何にあらはせるかといふ點に存すべきなり。たとへば

心甚だたのし。

といふ時に「たのし」は形容詞なることは何人も異議なき事ならむ。さて又

心甚だたのしむ。

といふ時に「たのしむ」は形容詞なりとは誰人も認むることなくして「たのしむ」は動詞なりといふ。こゝにこの「たのし」「たのしむ」の二につきて考ふるに、二の語の基なれる觀念は一なることと明かなり。卽ち精神の內に於いて滿足して積極的に快き感を有せる點は一なり。然るに、一方は形容詞、一方は動詞にしてこの二者を同じ性質の語とは何人も認むることなしといふ事も實際の事なり。若し「樂し」といふ語が性質をあらはすものといふならば、「樂しむ」は何をあらはすといふべきなるか。かくの如き例を一個あげたるのみにても形容詞動詞の差別の意義上の說明は下し得ざる筈なり。かやうに二者に相通じてある語の例を少しくあぐれば、

たかし	たかむ	
きよし	きよむ	
よわし	よわむ	よわる
つよし	つよむ	つよる
にぶし		にぶる

しろし——しろむ
あやふし——あやぶむ
あかし——あかむ　あからむ
くるし——くるしむ　くるしがる
さわがし——さわぐ
たのもし——たのむ

これらはその語尾が「し」といふ形をとれる場合に所謂形容詞と認められ、その他の場合は所謂動詞と認められ、各別個の種類の語なりと認むるものにして、この區別は世間すべての人の怪まざる所なるべし。然るに、それらのあらはせる屬性觀念の內容は同一のものにして、その一の屬性觀念が二者に共通せること明かなり。たとへば「白し」と「白む」「危し」と「危む」「よわし」と「よわる」「にぶし」と「にぶる」これらは、その屬性觀念に於いてはいづれも同一の性質又は狀態なるにあらずや。果して然らば、形容詞と動詞との間に同一の屬性の存すること少からずして、二者の區別は性質又は狀態といふ如き名目の差別によりては示しうべきものにあらざるを見る。即ちこれらは狀態といはゞいづれも狀態なり、性質といはゞ、いづれも性質なりといはざるべからず。それ故に性質をあらはすといひ、狀態をあらはすといふが如

き說明にては決して通用せざるなり。然らば動詞は動作をあらはすとして他と區別せむかといふに、

子、親に似る。

湯水になる。

の「似る」「なる」の如きものは動詞なれども、「にる」「なる」は動作にあらざる事は明かなり。又「さわぐ」「なげく」「いさむ」「うらむ」といふ語は所謂動詞たるとは誰人も異論なきものなるが、これらと同一の屬性觀念を有する「さわがし」「なげかし」「いさまし」「うらめし」といふ語は所謂形容詞たることはこれ亦誰人も異論あるまじきなり。卽ち動詞特有の屬性たるが如くに見ゆるものにても亦形容詞としてあらはるゝことを見るなり。而して以上の如き對比はその數少からずして、それらの形容詞と動詞との有する屬性觀念は外觀上多少の差異ありとすとも根本は同一のものたることは明かなり。かくの如くなればその屬性觀念の上に區分の標準を求むといふことはなほ一歩深く立ち入りて考へざるべからざることゝなるなり。

こゝにわれらは同一の屬性が時としては形容詞としてあらはれ、時としては動詞としてあらはるといふ事實の少からざるを見る。今、そが如何なるさまにてあらはるゝによりて、或は形容詞となり、或は動詞となるものなるかと考ふるに、こゝ

に柿の樹に赤き果實のつけるを見て、吾人は「この柿の實は赤しともいひ、又同じものを見てこの柿の實は赤らめり」ともいふことあらむ。その場合は同一の客觀界たる柿の實を見て、同一の人の同一の時にいひうべき語なり。而しその「赤し」は形容詞にして「赤らむ」は動詞なり。而して柿の實の「赤き」をいへる點は同じ。こゝに同一の屬性をば同一の客觀につきていふ時に或は形容詞となり或は動詞となるを見ればその區別は屬性の客觀的差別によりて區別したるものにあらざることを明かなり。かくの如く、同一の屬性觀念にして、そのあらはれ方によりて或は形容詞ともなり、或は動詞ともなるものなること明かなれば、こゝにわれらはその屬性が如何樣にあらはされたる時に形容詞となり、又動詞となるものなるかといふことに着眼せずしてはこの二者の區別をなし得ぬことは明白となれりといふべきなり。即ち、吾人の考ふべき點はその屬性の客觀界に於ける現象にそれらの區別を求むることの不可なりといふことゝ共に、その區別の標準はそれら同樣の屬性が吾人の心裡に如何なるものとして描寫せらるゝかといふ點に存すべしと考へらるゝ點なり。即ちこの區別の標準はその屬性の客觀としてあらはされたるものに求むべきにあらずして、その屬性が、その屬性の所有者たる事物の上に如何なる狀態に於いてあらはれたりと思惟するかの點にあるものゝ如し。若し然らず

とせば、吾人は全く客觀としての屬性にその區別を求むべきか、若くは全く主觀としての陳述にその區別を求むべきかの二途より外に考ふべき餘地を存せざるなり。然るに純然たる客觀としての屬性は吾人の用言とは關係なきものにして、それらは體言又は副詞としてあらはるべきものなり。而して又全く主觀としての陳述につきては既にいへる如く用言の內部に於ける分類の標準とはなしうべきものにあらざるを以てなり。

かく論究し來れば、吾人の求むる分釋の原理は結局その客觀たる屬性を吾人の主觀に於いて如何樣に取扱ふかといふことに存すといふべきことなるべし。これを他の語にていへば、それらの用言の示す屬性觀念がその事物に對して如何なる性質の屬性として吾人の心裡に描寫せられたるかといふ點に存するものといふべきこととこれなり。今この點よりして動詞、形容詞の區分の標準とすべき點を求むれば、實にそれらの屬性が時間的發作性のものとして吾人に思惟せられたるか、又は超時間的存續性のものとして、吾人に思惟せられたるかといふことにありといふを得べし。今、この區別を以て動詞、形容詞の區別にあてゝ試みるに、その屬性が時間的に變遷すべき發作性のものとしてあらはされたる場合には動詞となり、又その屬性が超時間に固定し、又は存續すべき性質のものとしてあらはされた

る場合には形容詞となるといふことを得るなり。而してこれらの精神を以て形容詞動詞の說明を下したるは著者の日本文法論をはじめとす。その後著者の明治四十年一月に發刊せし中等文法教科書別記にはその要點を歸結して

形容詞は固著的、超時間的の性質を說明し、
動詞は發作的、時間的の性質を說明す。

といひ置きたり。これより後、之を基礎として二者の區別を設ける學者往々見ゆ。吉岡鄉甫氏の「文語口語對照語法」の如きよくこれを示せり。そのうちに曰く

物事の移動し變化する屬性を表す用言を動詞といひます。言葉を換へて申しますれば、物事の流動的屬性を表はす用言を動詞といひます。
動詞が物事の移動し變化する屬性を表すに對して靜止し固定する屬性を表はすものを形容詞といひます。言を換へて申しますれば動詞が流動的屬性を表はすに對して固定的屬性を表はすものを形容詞と云ひます。

といへり。同氏の說の立場は余がいふ所と略一致す。然れどもこれらの說明にも多少の不備あり。それは如何といふに、屬性そのものに本來固定性、流動性のものもあれど、又同じ屬性の二樣にいひあらはさるゝものあるは既に述べたる所なり。この故にこれは既にもいへる如く屬性の客觀的の區別にはあらずして主觀

に於いての思ひなしの差別なり。卽ちその屬性をば流動性のものと思惟して描寫したる場合には動詞となり、その屬性をば固定性のものと思惟して描寫したる場合には形容詞となるものなりとす。この故に余が日本文法講義には

形容詞とは靜止的固定的に時間に關することなく心内に描かれたる事物の性質狀態を說明する用言なり。

動詞とは事物の性質狀態が推移的發作的の觀念として意識内に描かれたるものをあらはす用言なり。

といふ說明を下したるが、この「心内に描かれたる」「意識内に描かれたる」といふは同意義にしてそれが主觀的の思ひなしの差違に基づくものなりとす。而して著者はこれが不滅の眞理なることを確信するものなり。

以上說く如く、用言は理論上形式用言と實質用言とに分ち、その實質用言を更にその屬性を固定的超時間的のものとしてあらはせる實質用言とその屬性を流動的時間的のものとしてあらはせる實質用言との二に分つことを得るものなり。然れども本書は便宜上通俗の名目を用ゐ、且つ多少その理論上の區分の上に變更を試みて說明上便宜の方法をとらむと欲す。先づ上にいへる「如し」はその意義も性質も活用も大體普通の形容詞に似たれども、その屬性の實質の缺けたる點を異

なりとす。今これを特別の形容詞として形容詞の中に攝取し、時に應じ特種の點を說明する方說明の上に便宜なるべしと思ふを以て、これを形容詞の條中にて說く事とせむ。又「す」はその動作作用の具體的意義こそなけれ、動作作用を示すこと明かなれば、これを動詞の中に入るゝこと必ずしも不合理ならず。かくてその用法に至りては頗る廣汎なるものなれば、時に臨みて特別に說く必要あり。然れどもそれを一の範疇として立つるよりは動詞中に入れおく方、便なりとす。「あり」に至りてはその性質は動詞にも形容詞にも通ずる點あり、意義は形容詞に似、形は動詞に似たり。而して用法の廣きことと用言全般に影響するものなれば、之を特立せしめて說くことかへりて便益多し。この故に、これを一目と立つることゝせむ。

かくて形式用言中「あり」と「あり」の系統に屬するものとを一括して說くことゝし、その名目は便宜の爲に存在詞と名づくべし。次に實質用言にありては屬性を流動的、時間的のものと考へてあらはせる方のものを動詞と名づけ、その屬性を固定的超時間的のものと考へてあらはせる方のものを形容詞と名づけ、以て名目は通俗のものに從ひ、その意義は嚴密なる分類によるものなることゝせむ。而して、その分類をその活用の種類に照して考ふるに、存在詞は良行變格活用に限り、形容詞は「くしき」活用「しくしき」活用の二種に限られ、その他の活用に屬するものはすべて動

詞に屬せり。而して、その良行變格は動詞の如き活用を有して、活用形にては終止形のみは動詞と異にして形容詞に共通する點を有し「くしき」「しくしき」活用は動詞、存在詞の有する活用とは全然趣を異にするものにして、活用形の上にては他のすべてが命令形を有するに、これらは命令形を有せざる如き特徴を有す。即ちこゝにその意義と性質と活用の形の上に於いて上の三分類は矛盾衝突を呈することなきは明かなりとす。

さて上の如くするによりてこゝに「あり」を動詞形容詞と對立する一類と立つることゝなれり。こゝに於いて世上或は異論あるべきか。今少しくこれを論ぜむ。現今普通の說は一方は富樫氏以來の說に從ひたるものなるが、一方には西洋文典に從へば「あり」に該當する be (sein) が、verb の中にあり、その verb が動詞と譯せらるゝによりてこの分類は東西軌を一にするものゝ如く思へるものあるべし。然れどもかれの verb を動詞と譯し、その動詞が、今日のわが動詞と全く範圍を同じくすと思へるは確に一の迷誤たること既に述べたる所にて明かなるべし。抑もかれの verb といふものはその屬性の方面よりして一品詞と立てられたるにあらずして實に說明陳述の力を有する點よりして一類と立てられたるものにして、かれらの語にてはその陳述の力を有するものは實にこの一類に限られたるものなり。こ

の故にかれの verb といふ概念は國語にあつれば、寧ろ用言と譯するをまされりとすべきものなり。即ちかれの形容詞は陳述の力を缺くが爲に verb 即ち用言にあらず。陳述の力あるものは verb に限られたるものなりとす。然るにわが形容詞は用言としての陳述の力を有する點はまさしくかれの verb に該當するものなりとす。この故にわが文典にて用言の分類を施すはかれの文典に於いて動詞の分類をなすと同じ程度にてあるものと知るべし。かくいへば、然らば、be (sein) をかれらの文典にて普通の verb と區別を立てざるによりて我にも區別する必要なしといふ論あらば、吾人はさらば、同時に動詞、形容詞といふ區別をなす必要なしといふを得む。今わが用言に內譯たる小區別をなす以上、上の三者に分つとも事實上不都合なる點なし。況んや理論上は明かに區別あるに於いてをや。この故に西洋文典を楯にとりて吾人に抗議するものあらば、その人は西洋語の性質も國語の性質も十分に知らざることを暴露するに止まるなり。

從來助動詞と稱せられたるものにつきては吾人はこれを二分して一を形式用言とし、一を單語にあらずして用言の語尾の複雜に發達せるものとなすべきものと信ず。元來助動詞といへるものは英語の auxiliary verb の譯語よりとれるものなり。彼れらの助動詞といへるものは be, do, have, shall, will, may, can, ought,

mustなどなり。(このうちbeはわが「あり」にあたり、同時に「なり」「たり」「だ」「です」に當るものもあり。doは「す」にあたる。さてこれらは元來單語にして卽ち一種の動詞なるものにしてその用法上他の主要動詞を補助して、voice態(受身、働掛)tense時(過去、現在、未來)mood法(可能、條件等)form形(確實、繼續等)などの意を區分するものにして、わが所謂助動詞は意味と用法とは或る點より見れば彼の助動詞に似たりといへども、かれらの助動詞は元來一の單語なれば、意義上にて補助するのみにして形態上それら主要動詞に附着するものにあらず。而してそれらは形體上獨立するのみならず、語法により位置をかふることもあるなり。卽ちかれらの助動詞といへるは動詞にてありながら他の動詞の補助に用ゐらるゝ場合のものをいふなり。これらのうち、be, have, doなどは獨立の用言としても用ゐらるゝものなるがその時は助動詞とは稱せられざるなり。されば、かれらの助動詞といへるは單語としての動詞の用法上の名目なると共に、助動詞といふ一の品詞あるにあらざることを知らざるべからず。然るに、わが國の文法學者が、助動詞といふ一の品詞を立て、動詞と同格なる別の品詞としたることは奇怪の事といはざるべからず。

さて從來助動詞と稱せられたるものには、「如し」「なり」「たり」の如き一の語と目すべきものと「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「べし」「まじ」「ず」「たし」「き」「けり」「たり」「つ」「ぬ」「む」などの如く用言

の活用上の補助部分たるものとを混一して同樣に取扱ひたり。そのうち「如し」「なり」「たり」の類は一の語たること明かなるが、その用法特別なれば、これを補助性のものと見ることは考へ方によりては不可なきが如くなれど動詞の性質を有すといふことは不條理たるのみならず、これらを「す」「さす」「る」「らる」等と同一列のものといふ事は不可なり。この「如し」「なり」「たり」の類を助動詞と名づくる人が若しこれを他の補助としての用をなす動詞なりといふならば直ちに「ごとし」は動詞にあらずと反駁せざるべからず。先づこれら他の語を伴ひて陳述をなすものが陳述をなす時に、その陳述の方面よりいへば、それらの「如し」「なり」「たり」又口語の「だ」「です」の方が陳述の本體のやどる所にして「花の如し」「花なり」「花だ」「花です」などいふ如き場合の「花」の方寧ろ補充部分といふべきなり。今若し補助性の動詞といふ意味にて助動詞といふ名目を立てなば

かやうな事はいたしかねます。の「かぬ」(難)

し事をしさして眺めてゐる。の「さす」(中止)

又書簡文に用ゐる「仕る」「奉る」「候ふ」口語の「ます」などいふ語は性質上の單語なれど用法上、獨立することなく、必ず他の動詞の下につきて用ゐるものにして、かゝるものこそ助動詞の名にふさはしきものといふべきなれ。然るに、それらをば單なる動

詞と認めてある人が「如し」等を助動詞といふは不合理といはざるべからず。それ故に、余は上述の如くそれらをば、いづれも一の語と認めてそれ〲處置したるなり。さて、その他の「す」「さす」「しむ」「る」「らる」「む」「ず」「つ」「ぬ」などの如きものは動詞存在詞等につきて、西洋の助動詞に似たる用をなすとはいへども、これらはもとより獨立したる單語にはあらずして、用言の語尾の複雜に發達して生じたる場合のものなることを知らざるべからず。卽ちこれらは

牛馬を使役してその勞を助けしむ。

旗の青きは浪の和ぎたるを知らするなり。

これを拜するに涙おちきてとゞまらず。

貝はうち寄せられて砂の上にあり。

いざ浪と今日も戰はむ。

機敏にして忠節なる人なりき。

日影はやうやくわがもとに來りぬ。

名相同じからざれども事はすなはち一なり。

彼は殆完全に日本國民の理想を代表したり。

たゞ專念につとめ勵むべし。

たゞ人々の多きを以て誇るべからざるなり。

かばかりの事驚くにも當るまじ。

などの如くいづれも上の用言を離れては全く用をなすことなく、古くはこれらを活用の一部と見做したる學者あり。本居春庭の詞通路の如きもその一例なり。これ國語の性質上最も穩當の見解にして、一の單語とは見做すこと能はざるものなり。元來用言の語尾は吾人の研究上之を一の研究對象として語幹と切り放ちて論ずることあれど、用言の運用の必要上、分出するものにして、語幹の下に附着する部分と見らるゝとしても之を離すこと能はざるをその本性とするなり。これ語尾が助動詞等と同樣に取扱ふことを得ざる主眼點なりとす。今主題として論ずるものは用言の本來の活用を以て語幹の如く考へ、それより更に分出したるものにして、その本來の活用の下に附着する部分と見らるゝとしても之を切り離して一個獨立の語として取扱はるべき性質のものにあらず、又吾人の國語の實地操縱の上に於いても之を切り放して一の語として取扱ふもののなきなり。この故に吾人はこれを用言の語尾の複雜に發展分出したるものと認め、假に之を複語尾と名づけ、助動詞とは稱せず。

さてこれらは用言の語尾の複雜なるものなるを以て用言の活用と同時に說く

べき性質のものなれど、その各に又それ〳〵活用を具有して頗複雜なれば、これを用言の本幹たる語尾と同時に說くは混雜を來すを以て別に一括して說かむとす。

國語の用言には數の區別なし。國語の用言は上にいへる如く英語獨逸語などの動詞に似たるものなるが、彼等の動詞には單複の數の別をあらはし、I am, We are; I was, We were. の如く主語と動詞と數に於いて一致を保たしむべきを法則とすれどもわが用言にはこの區別なく、又必要もなきなり。

國語の用言に稱格を形式にあらはして區別することなし。英語などの動詞は人稱によりて語を異にし又は形式を異にす。I am, Thou art, He is; I have, Thou hast, He has; I love, Thou lovest, He loves. などの例を見て知るべし。わが國語にてはかく主格の人稱の差によりて動詞乃至一般の用言の差別あることなきなり。然れども國語にこれに似たるもの全くなきにあらず。世に敬語といへるものは實にこれに似たるものにして、卽ち既に名詞代名詞の條にいへる如く謙稱、敬稱の名詞を使用するに際してはこれに相應する用言を使用すべきなり。この名詞代名詞と用言との相照應すべき點はかの稱格の相應すべきに似たり。この故に敬語は稱格に似たる作用をなすといふべきなり。

用言の敬語も亦謙稱と敬稱とに分つ。用言に於ける謙稱は之をあらはす特別

の語たとへば「申す」「仕る」「候ふ」「侍り」等にてあらはすなり。而して謙稱は動詞にのみ存し形容詞存在詞には存せず。

用言に於ける敬稱は用言の各種に存するものなるが、之をあらはすに特別の語を以てするものあり。敬意の複語尾を以てあらはすあり、又敬意の接頭辭を加へてあらはすあり。そのうち形容詞にありてはその方式單純にしてたゞ

おん睦じくおはします。

おいたはしい事であります。

の如く、接頭辭を加へてこれをあらはすもののみなり。動詞存在詞にありては「遊ばす」「給ふ」「いまそかり」の如く特別の語を以てするものあり、「行かる」「行かせらる」「行かしめ給ふ」の如く複語尾をふみてあらはさるゝものあり。「お聞及び」「お出かけ」「おあり」などの如く、接頭辭を加へてあらはすことあり。なほそれらの事は用言各論に說くことあるべし。

第十一章　形容詞

茲に形容詞と稱するは舊來形狀言と稱せられ、又形容詞といはれたるものなり。然れども、これらのうちには形狀又は形容をあらはすにあらざるものも頗る多し。

たとへば「無し」「同じ」「等し」「欲し」「空し」「惜し」「全し」等は如何なることの形狀又は形容なるか、殆んど其の意を了すべからざるものなり。この故に形狀、形容、狀態などの意を以て形容詞の有する屬性を説明しうべきものにあらざることは前章に既に述べたるところなり。

現今用ゐる形容詞といふ語に二の源あり。一は形狀言といへるを呼びかへたるにて用言の一部とせるものなり。一は英語の adjective の譯語としての語を一の品詞としたるものにして、この方面の人の意見にては名詞を形容する詞なりといふ説明を用ゐて他を顧みざるなり。この見解はわが國語の性質には適當せぬ説明なり。この説明にては「この本」の「この」「坐せる人」の「坐せる」「活潑なる人」の「活潑なる」「黑色の犬」の「黑色の」などは等しく名詞を形容するが故にこれらの間には區別を立つることなきのみならず、混じていづれも形容詞の一類をなせりといはざるべからず。これは古來外國文典を國語にあてはめむとして失敗せし人々の實地に苦き經驗を嘗めし難點にして、かくの如き説によりて國語を論ずる時は國語の性質ます〳〵不明にならざるを得ず。この故にこれらの説は全然從ふことを得ざるものとす。

余輩がこゝに形容詞といへるものは内容も範圍も殆ど全く從來形狀言「あり」を

除くことは既にいへりといひたるものに相當す。即ち活用よりいへば「くしき」活用「しくしき」活用の詞を一括して一類としたるものなり。かく從來の部類をとれるは國語の性質上必然の現象に基づくものなるが、近來の名稱をとれるは、世の耳目に馴れたるによれる便宜の事情に止まれり。即ち近來慣用の名は襲ひたるものゝその意義は外國語の分類の adjective とは著しく異なるものにして、實に verb の性質を有するなることは既に述べたる所なり。

形容詞として一括したる種類の詞は活用に於いて「くしき」活用「しくしき」活用をなせるものなり。今これに屬する語の重なるものをあぐれば次の如し。

(色) 白し　黑し　赤し　青し

(味) 辛し　甘し　苦し　鹹し

(分量)多し　少し　太し　細し

重し　輕し　長し　短し

大きし　小さし

(形) 丸し

(空間)近し　遠し　高し　低し

深し　淺し　廣し　狹し

（時間）早し　遲し
（感覺）暖し　つめたし　あつし　さむし
（性質）よし　あし　清し　穢し
（有樣）急し　煩はし　睦し
（心意）惜し　悲し　うれし　くるし　欲し
この外「おなじ」「ひとし」「空し」「無し」などいふものあり。

形容詞はその活用の他の用言と著しく異なるのみならず、その示す屬性の意義性質も亦著しく他の用言と異なるものなり。抑もこれらの活用をなす詞の特徴は時間の制約に關せぬ點に存す。超時間的といはむも沒時間的といはむも共に第二義に墮せり。吾人はこれを適當に名狀すること能はずといへども少くも時間に關せず、時間の豫想を有せぬは事實なり。この故にこれらは皆時間的形式の外に卓立す。かくてこれらの詞のあらはす陳述はすべて沒時間的に發表せらる。今しひてこれを時間的形式にあてむか、現在といはむか、恒時といはむか、これ亦吾人は强ひて定むること能はずといへども、それら以外にこれらを過去の事實としてこれを回想し、未來の事實としてこれを否定推測豫想せむことは全くこの用言の關する所にあらざるなり。しかして又これらは空間に關しても亦多くは豫想

する所なきなり。たとへば「在り」といへば、時間空間に基礎を置くこと明かなるが、「無し」といへば、その時間空間までも否定せらるゝが如し。この「無し」の如きは極端の例なるが、その他の語に於いても場所につきては頗る無關心なるものにして多くは思想感覺の上の狀態を告ぐるものなりとす。かくの如く時間空間に關して所謂動詞と重大なる差異あり。これその區別せらるべき一大要點ならずや。これを以てかの所謂時の助動詞と稱せらるゝものゝ分出することのこの形容詞に存在せざることの根本理由を領會すべきにあらずや。次に又この形狀言といはれしものは其の屬性を意義の上より觀察すれば、事物の性質狀態を靜止的の場合として觀察し、それを內在的に說明するものなり。されば其の性質狀態は其の事物の存在する限り、又はその本性の變易せざる限り、若くはその條件の變化せざる限り、或はその事情の變動あらざる限りは、移動することなく固定せるものなりとの條件の下に思惟せられたる屬性の陳述なり。これ即ち一方より見れば超時間沒時間的なる理由にして、かの所謂相の助動詞(受身使役など)と稱せらるゝものゝこの用言より分出することなき本旨も亦こゝに存す。この故に「惜し」といひ「樂し」といふ時は其の屬性觀念は靜止的固定的のものとして心の內に描かれたるものなり。「惜む」といひ「樂しむ」といふ場合にはその屬性が活動的推移的のものとして

心の內に描かれたることをあらはせるものなり。吾人が形容詞といふ一類を用言中に立つるものは實にかゝる意義によりて動詞と對立するものなりと思惟せるによるものなり。この故に試みに形容詞の定義を下さむか、まさに

形容詞は事物の性質狀態が超時間的の靜止的觀念として、心の內に描かれたるをあらはせる實質用言なり。

といふべきものなりとす。これを稍々通俗的にいへば

形容詞とは事物の性質狀態が靜止又は固定せる屬性として、心の內に描かれたるものをあらはす用言なり。

ともいふを得べし。

形容詞のあらはす屬性は前述の如く超時間靜止的の觀念として心の內に描かれたるものなるが、なほ二三の例につきて說明せむ。

この山は高し。　　この海は深し。

注意　かくの如き場合にありては「山高し」「海深し」といふが如き例はなるべく避くるをよしとす。如何となれば、抽象的にいふ「山」又は「海」は「高し」「低し」又は「深し」「淺し」ともいはるべき本性なきなり。この故に何かこれを制限してその指す所を明かにすべき必要あり。然らずば抽象的の「山」又は「海」とも見らるべき

が故なり。

の「高し」「深し」はその山その海の狀態を靜止的觀念として心の內に描きたるものなり。

善き人　惡しきもの

の「善し」「惡し」は人又はものゝ性質を靜止的觀念として心の內に畫きたるものなり。

疾く走る馬　烈しく降る雨

の「疾く」「烈しく」は「走る」「降る」の事實のあらはす狀態を靜止的觀念として心の內に畫きたるものなり。これらは場合によりては活動し時間的經過を有すべき事物につきての陳述なるにもせよ。その形容詞は皆ある性質狀態の內在的、靜止的、超時間、沒時間的の觀念として心の內に描寫せられたるをあらはせるものなりとす。

こゝに俗人に往々投ぜらるゝ疑問あり。卽ち「在り」と「無し」とは相表裏する語なるに、一は動詞(吾人は存在詞とす)にして一は形容詞たること不合理ならずやといふことなり。かくの如きはもとより學問上の問題として價値なきものなれどもこゝに一往の說明を加へおくべし。先づ第一には「あり」と「無し」とを以て相表裏する語とすることの通俗的見解にすぎざるとを明かにしおくべし。抑も「有り」と嚴密に反對する思想は「あらず」といふ思想なり。卽ち「有り」の否定は「あらず」にして「無

し」にはあらず。「無し」を「有り」の否定とする時は「なくあり」の熟合してなれる「なかり」といふ語の如きは考ふること能はざるべし。かくてこの「なかり」といふ熟合語の存することはこれまことに「あり」といふ語の性質を語るものといふべきなり。「あり」は既にもいへる如くその用法廣汎にして動詞にも形容詞にも汎く交渉してそれらの基礎たるをうるものなるが故に「なかり」の如き形をも生じうるものなり。この故にこれを別の一種類と立つることを妥當なりとするものなるが、それを活用より見て「あり」と「なし」とは著しく性質を異にするものなり。卽ち一はラ行變格活用をなし、他は「くしき」活用をなして著しく異なるのみならず、その示す觀念の性質よりいへば、必然的にかくあらざるべからざるを示すものなり。卽ち「なし」は時間空間を絕したる觀念にして、これをわが形容詞としてあらはすことはその思想の本質より見てまことに至當の事といふべく、「あり」は時間空間を必ず豫想する觀念なればこれ「なし」と全く別なるものとすることは當然のことゝいふべきなるのみならず、かく區別を明かにして別種の語とする所にわが國語の哲理的根據の深きを見るに足るべきものにして「有り」と「無し」とが、別の種類の語として存することの何等の怪しむべき餘地なきものなりとす。

形容詞の活用には二の種類あり。一は「くしき」活用にして、他は「しくしき」活用な

り。この二種の區別の基づく所は語幹の形とその用法との差にあるなり。即ち「くしき」活用といふものは語幹に「し」の尾音なきものに起る現象にして、これに「く、し、き、けれ」の音を添へて活用を完くせしむるものなり。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
あか	く	く	し	き	けれ

「しくしき」活用といふものは語幹に「し」の尾音あるものに起る現象にしてその語幹は同時に終止形としても用ゐらるゝものなり。さればその活用の爲に添ふる音は「く、き、けれ」の三種に止まるものなり。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
樂し。	く	く	(樂し。)	き	けれ

右の如く終止形は語幹のまゝ用ゐて、それに更に「し」の音を加ふることなきものなり。かくの如く、語幹に「し」の尾音の存するか存せざるかによりて二種の活用の區別の生ぜるなり。さてその「しくしき」活用の「し」は活用にあらずして、實は語幹なれども、説明の便宜上これを活用の名目に加へて「くしき」の活用と區別することゝせるなり。

「しくしき」活用の「し」は本來語幹の尾音にして活用にあらぬものなるが、この類の

語は、理窟上よりいへば、終止形の場合に「くしき」活用と同じく語幹に語尾「し」を加へて「しし」といふべき道理なれども古代の語にかゝる形のあらはれたる實例を見ず。この故にその形式をば普通の場合と區別する爲に「しくしき」活用といふ名目を要するに至れるものなるが、院政時代頃よりは、往々その終止形を「しし」とするもの見ゆるなり。たとへば

洞照トイフ相人イフヤウ君ノ顏色アシヽヲソラクハ鬼神ノ爲ニヲカサレタル歟　（續古事談、五）

の如し。かくの如き例なほ多少あり。然れども、文語としては今に至るまでこれを認めたることなしとす。

形容詞の語幹に二種あること上に述べたる如し。これらの區別は接辭「さ」「み」「げ」等を添ふるときに明かに認めらる。その一種は

しろ　くろ　あか　あを
ほそ　ふと　なが　短か
あつ　うす　あま　から
おも　かろ　たか　ひく
ふか　あさ　つよ　よわ

よ　な

の如きものにして他の一種は

あやし　あたらし　いやし

いさまし　いみじ　いかめし

こひし　かなし　うれし

おそろし　なれなれし　ほし

あし

の如きものなり。これらの區別は接辭「み」「さ」「げ」等を下につくる時に明かに認めらる。この語幹の形は上にいへる「くしき」活用「しくしき」活用の區別をなすに必要なるのみならず、熟語をつくる際にもあらはるゝことあり。たとへば、

しろ馬　くろ馬　あつ總　うす色

たか山　あを山　よわ腰　ほそ川

うれし涙　おなじ人　むなし煙

おもしろがる　うれしがる

くらまぎれ　くるしまぎれ

の如きを見て知るべし。形容詞の語幹にはなほ特別の用法あり。そは用法の條

に說くべし。

形容詞はその活用形として、未然形、連用形、終止形、連體形、已然形の五あり。而して未然形と連用形とは同じく「く」といふ形を用ゐるなり。その各活用形の用例次の如し。

若分量あまり多くば之を減ぜむ。　（未然形）

（普通文には「くば」を「くんば」とすること多し。）

多くなくてかなはぬものは實用の材なり。　（連用形）

都會ははでやかなり、花やかなり、娛樂多し。　（終止形）

あまり多きを要せず。　（連體形）

これ人多ければ業もまた盛なるによるなり。　（已然形）

さて形容詞の活用につきて特質と目すべき點三あり。第一は命令形の存せぬことなり。これにつきては從來何の說明も無かりしやうに思はるゝが形容詞に命令形の存せずといふことは、これは偶然の現象にあらずして形容詞の本質より導かるゝ必然の事柄なり。そは何故かといふに、この命令形のあらはす態度は一方には命令希求の如くその屬性の發現を要求するものにして、他方には許容放任の如くその屬性の發現に無關係の態度をとることを示すものなれども、この二者に

共通する點はその屬性のやがては發現することを主眼とせり。卽ちそれらは現前にあらはれてはあらぬ現象をば將來の時に發現すべきことを要求し、若くはそれが發現するならむといふ豫想ありての思想に基づく語法なり。而して動詞、存在詞にこの活用形の存するは、それの意味に於いて、この要求又は豫想に對應しうるによるものあるによる。然るに、形容詞は靜止的固定的の屬性として考ふる時の語にして、その屬性の推移若くは變化などいふことの全く豫想せられぬ語なり。それ故に形容詞には本質的に命令形といふもの丶存在すべき理由無きものなりと知らる。卽ち形容詞に命令形のなきことは上述の如く、その根本的性質より生じたる必然の結果にして決して偶然の事にあらざるを知るべし。次に形容詞の活用の特徴の第二はいづれの活用形よりも複語尾を分出せしむることなき點なり。かく複語尾の分出のなき理由は既に述べたる所にて明かなれば再び說かず。次に形容詞の活用の特徵の第三はその未然形が、接續助詞「ば」につくのみならず「と」「とも」といふ接續助詞にもつゞきて、未然の戾續條件を示す點にあり。以上を活用形の上に於いて動詞と異なる點とす。

形容詞の活用に音便あり。音便とはその活用の本體はかはらねど言語操縦に際して、發音の便宜によりて臨時に音の變化することをいふ。形容詞の音便には

「イ」音便「ウ」音便の二種あり。その「イ」音便は連體形の「キ」を「イ」に化するものにして、その起源は平安朝の中期以前にあり。「ウ」音便は連用形の「ク」を「ウ」とするものにしてこれは「イ」音便よりも後れてあらはれたり。

口語に於ける形容詞は文語の形容詞と頗る趣を異にす。卽ち文語の形容詞の標準とするものは大體平安朝の語にあるものなるが、近世に至りて、一般の用言の現象として終止形亡び、連體形を終止にも用ゐることゝなり、その形容詞の連體形は主として音便の「い」を用ゐることゝなりたれば「し」の活用は亡び「く」と「い」と「けれ」との活用を用ゐることゝなれるなり。かくて終止形を失ひたれば、文語に於ける「くしき」活用「しくしき」活用の區別を起すべき條件こゝにうせて、形容詞の活用は一種とするを妥當なりといふべきに至れり。卽ちその活用は次の如くになれり。

語幹	未然形	連用形	連體形	已然形
樂し	く	く(う)	い	けれ

口語の形容詞の連體形「い」はもと「き」が音便によりてなれるものなるが、口語として專らその「い」を用ゐるが故に「い」卽ち活用といふを穩なりとすべし。かくて又その連用形は「く」といふを正しとするが、それと同時になほ音便にて「ウ」といふ事もあり。されば連用形としては「ク」「ウ」の二形ありともいふを得べし。そのうち「く」は關

東に多く、關西には「う」を用ゐること多しとす。而して又別に敬語の「ございます」などにつゞくる時は「う」を用ゐること多し。なほ口語の連體形は終止としても用ゐらるゝものなることは既に說きたる所なり。

形容詞には敬語として接辭「おん」「お」「おみ」等を冠して用ゐらるゝことあり。この時はすべて敬稱のみなり。さて普通文にありては形容詞の敬語は甚だ稀にしてその用ゐらるゝ場合には接辭「おん」を冠したるものに止まれり。一例をいはゞ、

笠置の城既に北條の兵に攻め破られ、後醍醐天皇は御いたはしくも賊軍の手に落ち給ひぬ。

御姉妹の御仲拜し奉るさへ御羨ましきまでに御睦じく、畏けれども、御姉宮はよろづに鷹揚の御性質にて溫柔玉の如く、御乙宮は御勝氣にて雄々しき御氣質を具へたまふと承る。

さりとても御いたはしの事や。

口語にありては「お」「おみ」を冠せしめて用ゐる。

その語の例次の如し。

おうつくしい　　お近い　　お早い

おめづらしい　　お羞しい

おみ大きい

これらは文語の敬語よりも多く用ゐらる。

「ごとし」は一種特別の形容詞にして事物をたとへて說明するものなり。これ既にいへる形式用言といひて可なるものなれど、便宜上形容詞の特別なるものとしてこゝに附說すべし。「ごとし」はかく特別なるものなれど、もとより一の語なるものにして、他の複語尾とは一に說くべきものにあらず。元來この語は「こと」といふ體言の轉化したる如く見ゆるものなるが、この用言は決して單獨に用ゐらるゝことなし。意義は甚だ漠たるものなれども、之に賓位觀念を補塡するときは明かに認むることを得るなり。卽ちその伴へる賓語を以て比喩の觀念核子となし、自己はその形式要素となり、二者一となりて普通の形容詞と殆ど同じき意義と性質とをあらはすものなり。然れども元來比喩的のものなることを忘るべからず。さればこの用言はその意をいへば、實に具體的の觀念を缺如せる形容詞ともいふべきものなるが故に「のやうに」「のやうだ」の意に俚譯すべきものなり。從來はこれを助動詞なりといへり。その助動詞といへることの意義の明言せられたるを知らねども、これは形容詞の性質を有して動詞の性を有せぬが故に動詞の類とするは不合理なり。而してその助動詞といへるものは多くは吾人の複語尾をさせるも

のなれど複語尾は單語にあらざるが故にその意味に於いての助動詞とはいふべからず。抑もこの語の普通の形容詞と異なる點はその觀念の補充を要する點の一に存するのみ。今その觀念の補充を要する點を見るに、

人も樹木の如く敎育によりて化成せらる。

咲きこぼれたる卯の花雪の如し。

塵の如き輕き物體を吸收す。

の如く助詞を介するもの多し。かくの如く助詞に媒介せらるゝ以上、これは少くとも助詞以上の品詞ならざるべからざるなり。これを用言の補助的部分たる複語尾と同一に說くは穩當ならざるなり。今若しかくの如く獨立に用ゐらるゝことなきが故に之を助動詞なりとせば、動詞にても「さす」(中止)「おほす」(果)「かぬ」(難)「そむ」(初)「あふ」(敢)などの如きはなほ所謂助動詞とすべきものなるべし。これらは「しさす」「しおほす」「こらへかぬ」「さきそむ」「取りあへず」の如く必ず他の動詞の連用形を受けてこれと一になりてはじめてその用と意とを完くするものなり。然れどもこれらを以て所謂助動詞とすることは在來なきなり。これらを助動詞とせざる以上はそれらよりも更に用法の獨立的なる「ごとし」を助動詞とすべき理由なきにあらずや。「ごとし」といふ語の活用形は次の如し。

語幹　未然形　連用形　終止形　連體形
ごと　(く)　く　し　き

かくの如くにして未然形は用ゐること稀に「けれ」といふ活用なく、從つて已然形なく「ごとけれ」などいふ形は全く存在せず。元來この語は奈良朝までは活動したること明かなるが、その以後はたゞ漢文の訓讀によりて傳へられたるものにして、今の普通文にこれが盛んに用ゐらるゝは實に漢文訓讀體の文の影響たるなり。而してその「けれ」といふ活用のなきことは不完全なる如く見ゆれど「これ明かに奈良朝以前の語法を忠實に守り來れる結果なりとす。「ごとし」の語幹は「ごと」なるが、これは今も博多など九州の方言に存し、古語には廣く用ゐられたり。

花のごと世の常ならば、すぐしてし昔は又もかへりきなまし。(古今、春下)
秋萩の色づきぬれば蟋蟀わがねぬごとやよるは悲しき。(古今、秋上)

第十二章　動詞

今茲に動詞と稱するは舊來の學說にては作用言といはれたるもの(「あり」を除く)又は西洋流の分類にて動詞といはれたるもの(これ亦「あり」を除く)なり。然れども

これらの詞のうちには動作又は作用をあらはすに止まらずして、狀態有様を表はすものあることは既にいひたり。抑も現今使用する動詞といふ觀念には二の源あり。一は上にいへる從來作用言といひたるものにして用言の一部分としたるものなり。一は西洋文典のverbの譯語を轉用したるものなり。而してそのはじめは二者の內容必ずしも一致せざりしものなるが、現今にては動詞といふ名目を用ゐて從來の作用言を以てその內容とせり。然れども西洋文典のverbの觀念を以て之に擬せむとするもの今なほ往々なきにあらず。しかも、このverbの觀念を以てせば吾人の形容詞も亦動詞とせざるべからざる點あることは既に述べたるところにて知らるべし。余はその名稱は現時の通用に從ひたれど、こゝに說く所は從來作用言といひたるものより「あり」を除きたるものにおなじ。

動詞を簡單の言にていへば、動作をあらはすものといふこと普通なれど、これにて通ぜざるところあることは既に述べたるところなり。今動詞のあらはせる意義の實際を顧みるに大別して三様ありとすべきなり。一は

讀む　養ふ　走る　愛す

の如く、目的ある動作をあらはすものなり。一は

鳴る　流る　咲く　肥ゆ

の如く自然の作用をあらはすものなり。一は

劣る　勝る　始まる　似る

の如く事物の有様をあらはすものなり。以上の如くなれば動詞の示す屬性を通俗的の見方にていふとしても一語にていひ盡さむとするは實際不可能の事なりとす。

動詞の活用はそのあらはるゝ形式多樣にして形容詞の如く簡單にあらずといへども、そが五十音圖にていへば一の行にて活用し（それにまま「る」「れ」を添へて作用の不足を補ふことある點はその補助部分として姑く別とす）二行に亙らざる點を以て特徴とすべし。卽ち語幹に加ふるに母音の變化を以て活用を起すといふ一定の形式存すといふべし。かくてその示す意義性質は形容詞と對比してはじめて明かに認めらるべきものなりとす。この故にこゝに動詞の意義性質を明かにせむが爲に形容詞と比較しつゝ論を進むべし。さてこの種の用言と形容詞との差は如何といふに、彼はその示せる狀態又は性質をば存續したる、又は固定したる靜止的の觀念としてこれを心内に描くに、これはその性質狀態をば一時の狀態又は一時發作したる動的の觀念としてあらはしたる詞なり。この故に吾人が簡單を欲して動詞は動作をあらはす詞なりといふ場合にありてもその動作といふ語

の內容は通常いふ動作にあらずして唯其の屬性が推移的傾向を有するものにして固定的のものとして考へられず、一時的發作的の性質狀態なることをいふなり。この故に存續的固定的なるものとしてその屬性を認めたる時にこれを用言としてあらはせば形容詞となり、推移的發作的なるものとしてその屬性を認めたる時にこれを用言としてあらはせばこゝに動詞となるものと知るべし。なほ他の方面よりこの二種の差をいはゞ、形容詞は超時間的にして時間の制約を離れたる如きものなるに、動詞は其の推移的發作的なる特性として著しく時間の制限を受け又空間に對しても形容詞よりは頗る緊密なる關係を有するものなり。これ亦その特質より自然に導かれたるものなりとす。

更に又他の點より見れば、動詞は動的觀念をあらはし、時間的狀態をあらはす處よりして用言本來の語尾のみにては不十分にして、其の作用を完全に果すこと能はざることあるよりして、複語尾又は再度の語尾とも稱すべきものを分出す。この性質は形容詞になきところなること既に說けるところなりとす。この複語尾又は再度の語尾と稱せらるべき性質のものゝ分出するは、この種の用言がその應用せらるべき範圍若くはその陳述せらるべき事情が、形容詞の場合よりも遙に複雜なるによる。さてかく複雜なる表現法の存する所以はこの用言のあらはす屬

性の本性が動的なるによりて變化の多種多樣なるを要するによるものなりとす。こゝに吾人が、動詞の定義を下さむとせば、まさに次の如くいふべきか。曰はく動詞とは事物の性質狀態が時間的の性質を有するものとして心の内に描かれたる觀念をあらはす用言なり。

これを稍々通俗的にいはゞ、

動詞とは事物の性質狀態の變化し移動する屬性として心の内に描かれたるものをあらはす用言

ともいふを得べし。今これを實例につきて釋すれば、

人行く。　犬走る。

の「行く」「走る」は「人」「犬」の動作を發作的の觀念とし、又或時間の内に行はるゝ事實として活動的のものと見たるなり。又

心動く。　花落つ。　春過ぐ。

の「動く」「落つ」「過ぐ」は「心」「花」「春」の發動的狀態を或時間の上に行はるゝ事實として活動的のものと見たるなり。又

彼の容貌は父に似る。　志成る。

の「似る」「成る」は「彼の容貌」「志」の狀態を發作的の觀念として現に存在する事實となれ

るとをあらはせるものにしてこれまた活動的のものと見たること明かなり。
而して、この最後の場合の如く動詞のあらはす觀念も一種の狀態といはゞいはるべきが、その狀態たるや、いづれも一時的發作的の事實として推移的性質を有するもの、或瞬間を吾人が捕へてあらはしたりと思惟するものなること明かなり。

從來の學者往々わが動詞をば性質上より分類せむことを企てたり。そのうち著しきは自他の分類なり。この分類は寧ろ意義上の分類といふべきものなるが、とにかくに自動詞他動詞の二種に分つべしとするものなり。さてこの自他の區別を企つるものにつきても亦二の系統あり。一は本邦の學者の創意に出でたるものにして一は西洋文典の模倣より來れるものなり。

本邦の學者の創意に出でたる自他の硏究とは本居春庭の「詞の通路」に强調せられしものにして彼は用言をば六段に分つべしといふなり。

第一段	おのづから然る みづから然する	カ下 にぐる	カ中 きこゆる
第二段	物を然する	サ四 にがす	カ四 きく
第三段	他に然する		サ下 きかする
第四段	他に然せさする	サ下 にがさする	サ下 きこえさする
第五段	おのづから然せらるる	ラ下 にげらるる	ラ下 きかるる
第六段	他に然せらるる	ッ下 にがさるる	ラ下 きかるる

かくの如く名目は七種ありて其の種類は六あり。かく差異を來せるは「おのづから然る」と「みづから然する」とは意義異にして實質一なりとせるが故なり。かくてその第三段以下は「す」「さす」「る」「らる」といふ複語尾の分出せる形にして純なる動詞の活用にあらず。されば、自他の區別は第一第二の二段にして、第一段が所謂自、第二段が所謂他なるものなりとす。通路の後之を祖述せる末書少からずといへども見るに足るものなし。そがうちに權田直助氏の語學自在の說稍々見るに足るべきか。その說は自他を分ちて七段とするなり。今その表を抽出せむ。

おのづから然る	みづから然する	物を然する	他に然する	他に然さする	おのづから然せらるる	他に然せらるる
加行四段		同下二段	令	令	被	被
のく	のく	のくる	のかする	のけさする	のかるる	のけらるる
	多行四段	佐行四段	令	令	被	被
	いづる	いだす	いでさする	いださする	いでらるる	いださるる
第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段	第七段

この七段はかの通路の第一段に二の名目ありたるを分ちて二段にせしが爲にして實際は大差なきものなりとす。而してこゝにても第四段以下は被令の複語尾の分出せるによれるものなれば、實質上の區別は第一第二第三の三段にありといふべし。

舊來の自他分類の說かくの如し。一見すればその分類は頗る精密なるが如し。然れども其の說く所果して一點の疑惑をも挿ましめざるものなるか。第一に問ふべきはこの六種若くは七種は如何なる順序を經て別れたるものなるかといふことなり。然れどもこれらの書にはその分釋の原理を示すことなし。この故に今其の名目の間に矛盾を有することなきか否かを檢して其の分類の妥當なるか否かを決せむ。先づ第一に「みづから然する」は二樣の義に解せらる。卽ち一方よりいへば、みづからのみの然することとなるべく、他方よりいへば、所謂「物を然する」も「他に然する」も皆みづから然するにあらずや。次に又「物を然する」「他に然する」の差別は如何。「物」と「他」とは異か同か。之を明かにせざる時は混亂する恐なきか。なほそれよりも根本の問題たるべき自他とは如何なる義か。自とは「おのづから然る」「おのづから然せらるゝ」の「おのづから」及び「みづから然する」の「みづから」の意なるか。他とは「他に然する」「他に然せさする」「他に然せらるゝ」の義なるか。然りとせば「物を然する」は自なるか他なるか、はた自他の外なるか。かくて自を以て「おのづから」「みづから」の義とせば、七名目みな自といひても不可なきにあらずや。又若し自他を單に「他に」といふ語の有無にあらずして自他が發動の主たる場合の區別とせば、次の如き分類となるべし。この場合に於いては「おのづから」の二種は自他以外

にあるものとなるべし。

自 { みづから然する / 物を然する / 他に然する / 他に然せさする }

他……他に然せらるゝ

かく分類を試むと雖もなほ決して自他の區別の合理的なりといふことの吾人に了解せられたりとは思惟せざるなり。とにかくに吾人はこの自他の六段七段につきては一定の理路をさぐるに困却せり。かく困却せしむる所以の一半はその複語尾の分出せる場合をも自他に混用して說きたるに存するものゝ如し。この故にその複語尾の分出せる部分を除き去る時はこゝに稍々明かにその眞相を捉ふるを得べきが如く見ゆるが果して如何。

今その「他に然する」と「他に然せさする」とを見るにひとしくこれ使役の相にして複語尾「す」「さす」を分出せる場合なり。この複語尾を去り本來の動詞を求むれば、

きかする　　のかする　　いでさする

は

きく　のく　いづる
となりて「みづから然する」詞となり、
　きこえさする
は
　きこゆる
となりて「おのづから然る」となり、
にがさする　のけさする　いださする
は
にがす　のくる　いだす
となりて「物を然する」詞となり、
にげらる丶　のかる丶　いでらる丶
は
にぐる　のく　いづる
となりて「みづから然する」詞となり、
にがさる丶　きかる丶　のけらる丶　いださる丶
は

にがす　きく　のくる　いだす

となりて「物を然する」詞となるなり。かくの如くなれば、これらの實際は、通路にては二段、語學自在にては三段にその本來の區別の存するものなるを豫想せざるべからず。さてかくの如しとして、かの二種三種の區別は果して論理上妥當なりや。はた文法學上適切なりや如何を檢せざるべからざるなり。

さてかく複語尾の分出せるものをきり離して考ふるときに、こゝに問題となるものは

おのづから然る

みづから然する

物を然する

の三に止まり、こゝに「他に云々」といふこと全くなしといふ奇觀あり。然るに詞の通路には

歌よむにもふみかくにも事をしるすにもよろづの事をわかち共さまをくはしくしらするなれば、もはら此自他の言葉の活をむねとこゝろうべきわざなり。

といひ、又

さて自他の詞六にわかれたれば今六段に次第して詞をほどこし一目に見わたし、こゝろえやすからむために圖をつくりさとしたるなり。といへり。さてかく、複語尾の分出を止むれば「他に云々」といふ標的なくなれば、ここに自他といへるは動詞の本幹の活用と複語尾の分出せるものとの對比をさすに似たりとも考へらる。されどさる研究は今、吾人の目的とする所にあらねば、又之を論ぜむには事長きに亘るべければ今これを論外におくことゝせば、これらの研究は果して何を吾人に敎へむとするものとすべきか。本邦舊來の自他論者は多くはかくの如き弊害に陷れるものなるが、吾人はかの第一段第二段第三段の區別よりして如何なる法則を學び得べきか。

おもふに舊來の自他論者の弊の第一は自他を必對偶あるべきものとせることなり。この故に其の自他の研究に關する常套語といふべきものは必ず「自他のわかるゝ格」「自他のわかるゝさま」などなり。かゝる思想を以て自他を研究するが故に、如何なる語にも一方に自あれば、必之に對する他を求めずはやまず。他あれば自を對せしめずはやまず。この故に自他の二方面を用言としての一觀念にもてるものにあらぬ「あふぐ」「あざむく」の類にまで對偶を求めて其れのなきに窮し複語尾の分出して所謂令被の意あるものを以てこれが一方の對者とするに至りしな

り。この故に權田氏の說などは通路の說に比して進步を來せるが如くなれど、自他の觀念の上に矛盾あるが故に到底正しき見解をうること能はざりしなり。よし又自他がそれらの說の如くわかるとして、たとへば權田の說に於いての第一段と第二段とが第三段に對する關係如何といふが如き難問存す。他をば「物を然する」といふものとしてこれに對する自は「おのづから然る」の方なりや「みづから然する」の方なりや。又兩者なりや。かくの如きは分類としても妥當なりと目すべきものにあらざるなり。況んやかく二段三段に分類してそれが果して合理的なりや。よし合理的ならずとしても文法學上何の必要ありや。よし又文法學上必要なしとしてもそれを吾人が如何にして文法學上認識しうべきか。たゞ思想上面白しといふが如きは文法學の關する所にあらざるなり。而してそれらの論者一もこれに答ふべき說明を下したるを見ず。

こゝに於いて文法上の問題として自他を說明せむとせる學者出でたり。これを落合直澄氏とす。その說に曰はく(詞考筆錄)

詞の自他を分つに一定の規則あるもあり、又然らざるものありてくだ〳〵し。されどがにをの助辭によりて分別する時はいと見やすきものなり。

が　此助辭を添ふべき詞は――自

を　此助辭を添ふべき詞は他　オノヅカラ然ル　ミヅカラ然スル
　他ヲ然スル　他ヲ然セサスル
に　此助辭を添ふべきは自他

と。こゝに於いては自他を明かに動詞の上に求めたるものとすべし。その「が」といへるは主格を示すものなれば、これは自他に共通するものにして「が」は自と限るべきものにあらぬは誰人も知る所なり。又「に」は自他に共通すと自らいへれば、これは問題の外なり。かくて結局「を」を加ふるを得べき動詞は他にして然らざるは自なりといふことに達すべきことなり。この見解は從來の自他論者に比すれば頗る切實にして一見殆ど疑ふべき餘地なきが如くに見ゆ。然れども必ずしも然らず。今次の如き文章ありとせむ。

余は本日朝鮮を退きたり。

夕立や家をめぐりて鶩なく。

の「退く」「めぐる」は語學自在の表によりていへば「おのづから然る」とせるものなるが吾人は寧ろみづから然する詞と思へり。いづれにしても自なることは一點の疑ひなき所なり。然るに、こゝには「を」といふ助詞を伴へるなり。而して、こはその動

詞の必然性より「を」伴へるものにして「を」は偶然に入れるものにあらざるなり。然らばこれを「他」といはざるべからざることゝなるべし。されど、落合氏とても、この「退く」「めぐる」を他なりといひうるものにあらず。かくて「を」を伴ふものはすべて他なりといふことは矛盾を生ずることゝなるなり。

以上論ずる如くなれば動詞の自他といふことは通俗的の便宜の爲にすといふ事ならば、もとより咎むべき事にあらずして論外におくべきが、一旦文法學上の問題とせむとせば、これを嚴密に考査せざるべからず。かくて嚴密に論ずるときは本邦學者の自他の研究は文法學上、何等の結論をも法則をも出すこと能はざりしものにして、要するに、一種の思想上の穿鑿に止まるものといふべきものにして、文法學上何等の法則をも見出しうべきものにあらざるなり。それらの不合理の點につきてはなほ幾多の論ずべきことあれど、今繁を厭ひて論ぜず。

西洋文法の模倣より來れる自他は多く自動詞他動詞の名目を以て行はる。これは transitive verb (他動詞) intransitive verb (自動詞)の譯語より來れるなり。これらの系統の學者の說明を廣日本文典より借り來らむか、

動詞ノ動作ノ獨リ自ラスル性質ナルモノヲ自動トイフ。例ヘバ「花飛ぶ」「鳥鳴く」ノ飛ぶ鳴くノ如シ。其ノ意ソノマヽニテ通ズ

動詞ノ動作ノ他ノ事物ヲ處分スル性質ナルモノヲ他動トイフ。例へバ「蠶は絲を吐く」「蜂は蜜を釀す」ノ吐く釀すノ如キ、唯「蠶は吐く」「蜂は釀す」トノミニテハ其ノ意更ニ通ゼズ必ズ其處分スベキ絲又ハ蜜ヲ要ス、コレヲ他動ノ動作ノ目的トイフ、目的ニハをヲ要ス

と、いひて區分せられたり。されど、それらの論は果してかの intransitive verb, transitive verb の別に該當するか、否か。第一に獨自するといふは如何なる義ぞ。單獨にて他に無關係にて完成せらるゝ動作の義か。しからば、それらの論者がいふ所の有對自動即ち廣日本文典にて

又自動ナレドモ其動作ノ係ルベキ標準ナケレバ意ヲ全ウセザルモノアリ。例へバ「鏡は壁に懸る」「顔は前に向ふ」ノ懸る向ふノ如キ、唯「鏡は懸る」「顔は向ふ」トノミイヒテハ其意未ダ通ゼズ必ズ「何にか懸る」「何方へか向ふ」ト問ハルベシ。然ルトキハ其ノ標準ヲ擧ゲテ「壁に」又ハ「前へ」ナド答ヘズバアルベカラズ、而シテ後ニ其意全シ、然レドモ懸る向ふノ動作ハ尙自ラスルナリ云々

といへる、その標準を有する自動といふものは自動の本性と矛盾せるものといふべし。この種の自動の本性はその例にて示す如く其の動作の係るべき標準なくば本義を完成すること難し。この故にその獨自するとは單獨にて完成せらると

いふ義にあらざるは明かなり。こゝに至りてはその自動の定義を自家にて破れるものなりといはざるべからず。然れどもかくの如き破綻は外國文法の名目を盲從的に國語にあてはめむとせば、おのづから起るべき缺陷にして、これらの論者の目的は實は本邦の語に必然的にこの區別をなすを要すと認めたるにあらずして、恐らくは西洋文法に自動詞他動詞の區別あれば、本邦の語にもこの區別を立つべしと思惟せし結果なるが如し。

西洋文典の自他の區別をばそれら論者の下せる定義の上より見て解決しうべからぬことと上述の如くなれば、吾人はその自動他動と別てる事實の上より見てその當否を檢すべし。先づ、これら論者の說を善意にとりて解すれば、その自動といへるものは實際に於いて他動の補缺部分たるものたりといふを得べし。この故にこれの論者の說明はとにあれ、先、他動を明かにしてこれより自動を觀察せずばあるべからず。さても他動といふ事のそれらの論者の說明は如何といふに他動とは他の事物を處分する性質なるものをいふといへり。この說明を正しとせば自動とは他の事物を處分せぬ性質なるものをいふといはざるべからず。しからずば、それらの論者の自動の說明と自動の實質との間に空隙を生ずべし。その空隙は卽ち上にいへる有對自動なるものなりとす。かくてその他動と他動ならぬ

ものとの區別を判定する文法上の標準は何かといふに、他動の部の說明にては「を」の有無なることを明言せれど、その「を」が有對自動の標準を示すことも既に明言せられてあれば「を」の有無によりて判定すること難しといふべし。こゝに於いて他動の目的なるものゝ有無によりて判定するより外に方途なかるべきことゝなる。しかも動作の目的とは如何。處分すべきものをいふか。さては處分するとは如何なる狀態をいふか。これも亦十分に明かならずといへども、吾人は姑くこの處分することとの有無を以て自動と他動との分るゝ所なりとして說を進めむに、この區別は何の文法上の必要あるか。又かく區別するは國語研究上便利なる點あるか。若し、何等の便利もなく、必要もなきものならば苦心してこれを區別すべき價値なきものといはざるべからず。例へば、上述の論者の自動他動の如くば、自動の說明の實質と合はぬ點あり、他動の本質の不明の點あり、その區別の標準の不分明の點あるを度外におきて考ふともなほ何等の文法上の効果を發見せざるなり。

こゝに於いてはかの論者の模範とする西洋文典の自他の區別は何によりて起れるか、又何の必要ありてこれを區別するかの根本に溯りて一考すべき必要ありとす。今先づ英語につきていはむか。かれらの動詞のintransitive, transitiveの區別の如きは、かれらの意義上の說明は實は第二の問題たるものにして、その言語の法

則上必然の要求に基づくものなり。卽ち英語などの動詞の自他の區別は本邦の學者の說ける、上の諸說の如き單なる意義の穿鑿によれるものにあらずしてその本旨は實に active voice（働き掛）と passive voice（受身）との轉換の成否を以て分釋の原理とせるものなり。卽ち自動詞と他動詞との區別はその動作のかゝる目的格（獨逸語にては第四格といふの語の存否にあり。この目的格の語を要するは他動詞にして、自動詞は絕對に目的格を要することなしとす。かくいはゞ、本邦の論者の他動は目的を要すといへると似たるを以て早計論者はこれ卽ち他動の自動と異なる主眼點なれば、それら廣日本文典流の說明は正鵠を得たるものといはむ。然れども、これ未だ一を知りて二を知らざるものなり。問題はこれより進みてはじめて解決に近づくべきなり。抑もかれらの文法の目的格の語といふものは、たゞ思想の穿鑿よりして名目を立てたるものにあらずして、實に文法上重要なる役目をなすものたるなり。卽ちこの目的格の語はこの他動詞が働き掛の時に目的格としてあらはるゝものにして、その他動詞が受身の語態に變ずるときはもとの目的格の語がその主格となるにあり。かくの如く目的格を有して働き掛と受身との二態をあらはしうべきこと、卽ち他動詞の特徵にして、自動詞にはこの目的格もなく、又働き掛、受身の二態の區別を有せざるものなりとす。これらの特徵を省み

ずして自動詞他動詞を論ずるが如きは、かれらの文法上何等の必要なき事に屬す。然るにわが國文法家の所謂自他の區別はこれらの問題には全く關係なく、又他の點に於いて文法上の必要ありやと見るに、これ亦その必要を設けることなし。然らばこれたゞ空想を弄するに止まれり。更に飜りてわが國語にありてはこの自他と働き掛受身の轉換との間に文法上の關係ありやと見るに更にその事なし。何となれば、所謂他動詞にてはいかにも働き掛と受身との轉換あれど、わが國語にては又所謂自動詞にも受身の態は成立するなり。

子母に抱かる。

生徒教師にほめらる。

の如き例は即ち他動詞の受身態なりといへども、

夫妻に病まる。

母子に泣かる。　　　　　　　　　　　（廣日本文典）

の例の如きは「病む」「泣く」共に自動詞なるなり。かくの如きことは西洋語には決して行はるゝことなき現象なり。又古今集の長歌に

今は野山し近ければ春は霞にたなびかれ夏は空蟬泣きくらし云々

とあるが如きはいよ〳〵西洋流に說くを得ざるなり。なほ又所謂他動詞を顧み

るに、西洋語の直譯流にいへば

動き掛	受身
一、獵夫野獸を射たり。	野獸は獵夫に射られたり。
二、樵夫が木を伐り倒したり。	木が樵夫に伐り倒されたり。
三、大工家を建つ。	家大工に建てらる。

の如く相對比すべき筈の如くなるが、國語にありて「一」の場合はなほいひうべきが如くなれど「二、三」の場合にありてその働き掛に對比する受身の態は用ゐられざるものなるは明かなり。かくの如くなれば、目的格の有無を以て假に自他を區別すべしとしてもその目的格は文法上何等の役目を有することなきは國語の實際なり。かくてその受身と働き掛との對比の有無を以て自他を區別せむとしてもわれには所謂自動詞にして受身の態をなすことあり。又所謂他動詞にして受身をなさぬことありて、その受身の主格も亦他動詞と必然の關係なきこと明かなりとす。かくの如き現象を以て見れば、西洋文典流の自動詞他動詞の説を以て國語にあてはめむとするは不可能の事といふべきなり。

以上述ぶる所を概括すれば、動詞の自他の研究といふことは本邦從來の研究にても西洋文典流の名目をあてはめむとしても結局文法上殆ど一の規律も立てら

れず、又何等の必要もなき事の如くに見ゆるに至れり。しかも作文修辭の上には自他の觀念の區別は全く不必要といふにもあらねば、何等かの方法によりてこれが區別を立つることを得ば多少の便宜はある事なるべし。然れども、そは上述の諸說の如きものにては到底不能なるのみならず又必要なきことゝいはざるべからず。余はなほこれにつきては下の客語の條にこれを少しく說くことあるべし。なほ自他を外にして動詞の性質を區別せむとする方法も多少なきにあらねど、未だ世の定說たるものにあらねば、今回はこれに論及せざるべし。

用言の活用十一種あるうち「くしき」活用「しくしき」活用の二種は形容詞に屬し、良行變格活用は存在詞にして、その他の八種は動詞に屬す。卽ち四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用、カ行三段活用、サ行三段活用、ナ行變格これなり。今こゝにいふ活用の種類は文語につきていへるものにして、口語には多少の異同あり。それらは後に說く事とすべし。

二種又は二種以上の動詞が語幹の形と意義とを同じうして終止形も亦同じきものあり。これらの動詞はもとより各別の動詞なれども、通俗的には二種又は二種以上に活用する動詞なりと稱す。それらのうち活用の異なるにつれて意義の異なるものあり同樣の意義にて二種以上に活用するものあり。

同樣の意義にて二樣に活用するもの丶例

うづむ（四・下二）　くるむ（四・下二）　みだる（四・下二）　わく（四・下二）

以上四段下二段共に他動詞

まなぶ（四・上二）

以上四段上二段共に他動詞

すたる（四・下二）　そる（逸）（四・下二）　もる（漏）（四・下二）

以上四段下二段共に自動詞

しのぶ（四・上二）

以上四段上二段共に自動詞

同樣の意義にて三樣に活用するもの丶例

もみづ（四・上二・下二）

以上四段下二段上二段共に自動詞

活用の異なるにつれて意義の異なる例

あく（四・下二）（自・他）　あからむ（四・下二）（自・他）　あふむく（四・下二）（自・他）

あらだつ（四・下二）（自・他）　いる　同上　いたむ　同上

うく（浮）（四・下二）（自・他）　うる（賣）　同上　うかむ　同上　うかぶ　同上

かがむ同上　かなふ同上　くぼむ同上
くろむ同上　くつろぐ同上　こむ同上
しづむ同上　しろむ同上　しわむ同上
すゝむ(進)同上　すぼむ同上　しりぞく同上
そふ同上　そむ同上　そむく同上　そろふ同上
たつ同上　たがふ同上　ちがふ同上　ちゞむ同上
ちかづく同上　つく(付)同上　つゞく同上
とゞく同上　なつく同上　ならぶ同上
のく同上　ひそむ同上　ひらむ同上　ふす同上
みつ同上　むく(向)同上　やむ同上　やすむ同上
ゆがむ同上

以上四段は自動詞下二段は他動詞

くじく四他下二自　くだく四他下二自　くびる四自下二他
さく(裂)同上　さばく同上　しをる同上　とく同上
ひしぐ同上　ひらく同上　ほどく同上
むく(剝)同上　もむ同上　やく同上　やぶる同上

わ　る　同　上

以上四段は他動詞下二段は自動詞

い　く　四自／下二他　上二　自　よ　く　四他／下二他　上二　自

を　る(折)　四自他／下二自

以上は三様の活用又は意義を有するものなり。

動詞の活用形には未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六種を具す。この六種の活用形を各別なる形にて具せるものは奈行變格活用のみにして、他は二又は三の活用形を一の形にてあらはせることは既に述べたるところなり。

さてこの六種の活用形のうち命令形のみは特に注意すべき現象あり。即ち四段活用及び變格にありてはその形のまゝにて命令の用をなせど、他の二段一段三段の各活用にありては現今にては必ず「よ」といふ助詞を添へてはじめて命令の用を完くするものなることなり。(古にありては必ずしも然らず。)それらの關係を示せば次の如し。

行け	來れ	四段活用
死ね		奈行變格
有れ		良行變格

起き	よ	上二段活用
受け	よ	下二段活用
着	よ	上一段活用
蹴	よ	下一段活用
來(コ)	よ	カ行三段活用
爲(セ)	よ	サ行三段活用

四段活用は動詞中所屬の語最も多きものにしてカ、サ、タ、ハ、マ、ラの六行に活用し、その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
行か(ば)	行き(給ふ)	行く	行く(人)	行け(バドモ)	行け

四段活用の語の命令形は「よ」を添へずして命令をなし得ること既に說ける所なるが、これに關して從來の文法書に、四段活用の命令形は「よ」助詞を添ふべからざるものにして、之を添ふるは破格なりといふ如き說明をなせるもの往々あり。然れどもそれは僻說なり。これらの文法家の典型とせる平安朝の語にも四段活用の命令形に「よ」を添へたるもの少からず。參考の爲に少しくあぐべし。

きこえまつれよ。（空穗、菊宴）

あひ思へたまへよ。（源、うつせみ）
ふみはよもみたまはじ詞にて申せよ。（大和）
物なんどたまへよ。（空穗、祭使）
よしみたまへよ。（狹衣、一）
せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ。（源、紅梅）
さらば年のうちにしたまへよ。（落窪、三）
そのおはする所にすゑ給へよ。（和泉、記）
藤の花はひまつはれよ、枝は折るとも。（古、春、下）
あはれとだにおぼしおけよ。（源、藤袴）
宮の御前に大とのごもれよ。（狹衣、三）
朝露の思はむ所に猶さらばおぼししれよ。（源、夕霧）
天皇我詔旨止良萬宣不勅命乎使人等聞給止倍與宣久……天皇我勅命乎聞食止倍與宣。（續後紀、十九、詔）

この故に四段活用の命令形は「よ」を添へずしてその用を完くすといふに止まり、これを添へても添へずしても差支なきものなりと知るべし。但し「よ」助詞を添ふればその意一層明かになることはいふまでもなし。

四段活用の語は口語にありても大差なきものなりとす。但し、その活用形の上には多少の差あり。それらの事は後に說くことゝすべし。さてこの口語の四段活用を五段活用と稱するものあり。文部省發行の口語法をその主たるものとす。これはその未然形に豫想の複語尾(「う」、文語の「む」の變化したるもの)のそはりたる「ゆかう」「おさう」といふ類が、發音上「ゆこう」「おそう」等と聞ゆるにより、その「こう」「そう」等といふを一の活用と立てむとするによるものなり。然れども、これはたゞ活用形と複語尾との結合せる際に起る連聲上の便宜によりたる特種の現象にすぎずして、文法上の形式の一とすべき者にあらず。

奈行變格活用は「死ぬ」「往ぬ」の二語これに屬し、六種の活用形を具備して、用言の活用形の標本たり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死な(バ)	死に(給ふ)	死ぬ	死ぬる(人)	死ぬれ(バドモ)	死ね

これの命令形もこのまゝ用をなすものなりとす。

「死ぬ」といふ語は文語には活用、上の如くに分るれども、口語にては「死ぬる」「死ぬれ」の二の活用形は滅びて連體形と終止形とは「ぬ」の一となり、已然形と命令形とは「ね」の一となれり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死な	死に	死ぬ	死ぬ	死ね	死ね

これを以てこの語は奈行四段活用といひてよくなれり。さて奈行變格活用に屬する二語のうち「往ぬ」といふ語は現今の口語にては關西地方の方言に存すれど、普通なりとはいひ難くなれり。而「死ぬ」は上にいへる如く普通の場合は四段といひて差支なくなれり。かくてかの「死ぬる」「死ぬれ」といふ形もその二者或は一は關西地方に現に行はれてあれば、奈行變格は現今の口語には全く亡びたりといふにはあらねど、普通語としては用ゐられぬ狀態となれり。今この奈行變格の「死ぬ」を四段活用と見なす時は口語の四段活用は奈行の一行を加へて七行に活用すといひつべきなり。

下二段活用は動詞中、四段活用に次ぎて所屬の語多きものにして、五十音圖の十行すべてにわたりて活用す。その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
受け(ズ)	受け(給ふ)	受く	受くる(人)	受くれ(バ、ドモ)	受け(よ)

かくて命令形は必ず「よ」助詞を伴ふべきものなりとす。

現在、文語にて、下一段活用として認められてあるものは「蹴る」といふ一語のみな

りとす。その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(蹴)け(バ)	け(給ふ)	ける	ける(人)	けれ(バ、ドモ)	け(よ)

これも亦命令形は必ず助詞「よ」を伴ふものとす。

文語にてもこの外「綜へる」「殕る」といふ語亦下一段活用なりといふ說なきにあらず。然れども、これらの用例は大略院政時代以上に溯ることなきを以て寧ろ、これらは口語の活用の萠芽と見る方穩かなりとす。なほ上にいふ「ける」とても奈良朝より平安朝初期までは下二段活用なりしなり。この下二段活用は「こゆ」「くう」などいひたりしなり。之を「ける」とせるは現存の文獻にては落窪物語をはじめとす。

蹴散此云倶穢簸邏羅簡須。　(書紀)

蹴鞠世間云末利古由。　(和名抄)

さと寄りて一足づつける。　(落窪)

文語の下二段活用は口語にては下一段活用となれり。而して文語の下一段活用はもとより口語にても下一段活用なり。かくて口語にては下一段活用は五十音圖の十行に亘りて存し、所屬の語は四段活用に次ぎて多きものとす。

下二段活用の語は現今の口語にては帝國の大部分に於いて下一段活用に變ぜ

り。故に普通語としては上の如くいふべきことゝなれり。但し、九州の略全部和歌山縣の在田日高二郡より熊野地方にかけては下二段活用現に用ゐられてあり。さればこれらの地方の人には必ず下一段活用として用ゐよと命ぜらるゝに至らば或は迷惑に感ぜらるべきなり。

上二段活用は所屬の動詞の數は下二段活用に次ぐものにしてカ行、サ行、タ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行の七行に活用し、その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起き(バ)	起き(給ふ)	起く	起くる(人)	起くれ(バ、ドモ)	起き(よ)

これも命令形には必ず「よ」助詞を添ふべきものなり。この上二段活用は上にいへる如くその所屬の語の數は下二段に次ぐといへども、下二段に比すれば遙かに少し。そのうちサ行上二段活用に屬するものは「掘ず」といふ語一のみなりとす。

現代の文語にて上一段活用たるものは語の數多からずして、カ行、ナ行、ハ行、マ行ヤ行、ワ行の六行に活用し、その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(着)き(バ)	き(給ふ)	きる	きる(人)	きれ(バ、ドモ)	き(よ)

かくてこれも命令形は必ず助詞「よ」を伴ふものとす。

文語にて上一段活用たる語を列擧すれば次の如し。

（加行）　着る

（奈行）　似る　煮る

（波行）　乾る　嚏る　簸る

（麻行）　見る　試みる　かんがみる　顧る　うしろみる

（也行）　射る　鑄る　沃る

（和行）　居る　率る　縢る　ひきゐる　用ゐる

文語の上二段の活用の語は口語にては上一段活用となれり。而して文語の上一段活用はもとより口語にても上一段活用たるなり。かくて口語にては上一段活用はカ行、サ行、タ行、ナ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行の九行にわたりて存し、その所屬の語は下一段活用に次ぐものなりとす。

上二段活用は現今の口語にては帝國の大部分にては上一段活用に變ぜること下二段活用の場合におなじ。但し、九州の東部及び和歌山縣の在田日高二郡より熊野地方にかけては上二段活用が口語に存せり。この故にこれ亦、現代の口語に全く亡びたりとはいふを得ざるものなりとす。

カ行三段活用の動詞は「來」の一語にしてその活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來)こ(バ)	き(給ふ)	く	くる(人)	くれ(バ、ドモ)	こ(よ)

これも亦命令形は助詞「よ」を添へて用を完くするものなり。

この「く」といふ動詞は文語にても口語にても同じく三段活用なれども、活用形の上に少しの差あり。即ち文語にては

小山田の露の中道ふみわけて人「く」とみしはかゝりなりけり。

の如く「く」を以て終止形とせるに、口語にては「く」といふ活用全くなくして「くる」を以て終止と連體とに使用す。これによりて文語の上に往々誤り用ゐることあり。注意を要す。

サ行三段活用の動詞は「爲(ス)」の一語にしてその活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
せ(バ)	し(給ふ)	す	する(人)	すれ(バ、ドモ)	せ(よ)

これも亦命令形は助詞「よ」を添へてはじめてその用を全くするものなりとす。

この「す」といふ動詞は名詞、漢語、外國語等を動詞とする力を有するものなり。即ちそれらを國語の動詞とするにはそれらにこの「す」を添ふるを普通とす。かくする時はそれらは皆國語の動詞として活動を起すものなり。而してかくの如くに

して成れる動詞は皆左行三段活用の動詞と稱するを得べく、それらを各一の動詞とするときは左行三段活用に屬する動詞はその數甚だ多きことゝなるべし。

名詞を動詞とするものとは

音す　心地す　罪す

蠢きす　欲りす

の如きをいひ、漢語を動詞とするものとは

研究す　分配す　奏上す　勉强す

依賴す　利す　要す　議す

論ず　案ず　觀ず

の如きをいひ、外國語を動詞とするものとは

庶幾は祝（プレス）する處多くして詛（ウオー）する處鮮からしめよ。

の如きをいふ。かくてかゝる場合の「ず」は「重んず」「輕んず」「論ず」「觀ず」「投ず」「誦ず」「命ず」「詠ず」の如くに濁音になることあり。この時には上にある語の尾音が「ン」なるか「若くは「イ」「ウ」の長呼音なるにあり。これ上の音の影響を受けて連濁音となれるによるなり。

左行三段活用に屬する語は「す」の一のみなり。從來の說にては「おはす」といふ語

も亦この活用に屬すといひたれど、これは四段と下二段との二様に活用せる語なるを混一して區別を立てざりしにより誤り認められしなり。今先從來の學者が左行變格といへるもの即ち左行三段活用と左行四段左行下二段との差異を明かにする爲に次に表をあぐべし。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
左三	おはせ	おはし	おはす	おはする	おはすれ	おはせ
四段	おはさ	おはし	おはす	おはす	おはせ	おはせ
下二	おはせ	おはせ	おはす	おはする	おはすれ	おはせ

上の表に見る如く、終止形と命令形とは三種の活用に共通する形なれば、これは論議の外とすべし。又左行三段と左行下二段とは連用形一のみの差なれば、吾人は連用形に「おはせ」といふ形ありといふことを證明せば、それが下二段活用なるものを證明しうべきことゝなるなり。今連用形が「せ」なる實例を示せば次の如し。

ゐておはせねとてなきてふせれば　（竹　取）

この「ね」は奈行變格活用と同じ形なる複語尾「ぬ」の命令形「ね」なれば、連用形所屬のものなること明かなり。

なたねのおほきさにておはせしを　（竹　取）

なおはせそ。（宇都保）

以上また然り。されど、これらは從來は左行變格の變格たる所以の特例なりと說明せしものなれば、暫く論外におくべし。

おはせ給ひたれど。（宇都保）

おはせたれど。（榮花）

この例に至りてはいかにしても下二段活用なることを認めざるべからざることゝなるべし。

かくて上に反對してこれが、下二段活用をなせるものにあらずと主張せむには、それらの論者は「おはせ」といふ連用形の存せぬことを立證せざるべからず。これ實に假にいふべくとも實現せらるべき事にあらざるは上の諸例にて明かなり。

次にこれが、左行四段なることを證せむには、未然形として「おはさ」といふ形あり、連體形として「おはす」といふ形あり、已然形として「おはせ」といふ形あることを證すべきなり。

未然形が「おはさ」なる例

おはさず。（大和）

おはさずなりなん。（源、乙女）

この二例は共に一本に「せず」とあれば、誤寫ならむといふ說あり。されど、そは臆斷にすぎず。

私の敵にてもおはさばこそ。（盛衰記）

おはさう人々に、、、、、きかせ奉らむ。（大鏡序）

この例に至りては明かに未然形なるものなりとす。又「おはさうず」といふ語甚だ多し。その例の一二をあぐ。

泣きおはさうず。（源、眞木柱）

あそびおはさうず。（源、末摘花）

などかう物ぐるほしうおはさうずらん。（狹衣四）

そらみゝきゝおはさうじて。（和泉物語）

ゐしたちてうどとりおはさうぜよや。（更科）

これらの「う」は皆「む」の音便なり。若しこれが、左行三段ならば「せう」となるべき筈なるに然らず。これ亦一の有力なる證なり。而してこの如き例枚擧に遑あらず。

連體形が「おはす」なる例

さむらひにおはす中將。（宇都保）

やかたといふものにもおはす。（枕草子）

これら亦連體形なるものなること明かなりとす。已然形の「おはせ」なる例證は未だ見出でねども、以上の例證にて四段活用なりしことも考へらるべし。今若し四段活用ならざりしことを論ぜむには、反對にそれらの活用形の存在せざりしことを立證せざるべからざる筈なりとす。されどそは何人にも不可能の事なるべきは明かなりとす。通俗的にいひて一の語にして二樣の活用を有するもの多きことは既に述べたる處なるが、これも實はそれらのたぐひといひつべきものなりとす。

以上より〳〵口語について述べ來りし所を綜合してこゝに口語の動詞につきて一括したる說明を下すべし。文語の奈行變格は口語にては四段活用に、文語の上二段活用は口語にては上一段活用に、文語の下二段活用は口語にては下一段活用となれるが故に、口語に於ける動詞の活用の種類は四段活用、上一段活用、下一段活用、カ行三段活用、サ行三段活用、の五種のみとなれり。

口語の動詞にありては一般に終止形を有せずして連體形を以て終止形に代用せり。この終止形の有無は近世語と古語との分るゝ要點の一なるものなるがカ行三段活用、サ行三段活用の如きはこの活用の有無を以て文語と口語との差異の主眼點とせり。さて又上二段活用、下二段活用を現に口語として用ゐる地方にあ

りてもその各二段活用の口語にはいづれも終止形なくして連體形を以てこれに代用せり。その他の四段、上下の一段にありては終止形と連體形とが古より一の形にてあらはせるものなれば、この點にては差異なきものなりとす。

されば、口語の動詞に於ける活用形は未然形、連用形、連體形、已然形、命令形の五種ありとすべきなり。しかるに、その已然形は口語にありては已然といふ確定せる意なくなりたゞ汎く條件を示すのみのものとなれり。この故に口語にありてはこの形は寧ろ條件形といふを可なりとする樣となれり。さて已然形が、かく汎く條件を示すことゝなれるによりて、口語にてはこの活用形にて未然の事をも條件としてあらはすことゝなれるが故に、未然形といふものゝ意も未然の條件を示すものと固定せしむることを得ざることゝなれり。しかるに動詞にありてはこの形より打消の複語尾「ぬ」「ない」を分出し、豫想の複語尾「う」「よう」を分出せしむるが故にこゝに未然形をば文字通りに未だ然らざることをいふ形にとりても差支なきことゝなれり。その他の活用形にありては文語と大差なしとす。

國語の動詞はその活用形にて種々の陳述をなすものなるが、それらのみにては、その屬性の表現の狀態、又は陳述の委曲なる點等をあらはし得ざることあるが故にさる時に、その活用形より更に複語尾を分出せしめて種々に說明陳述をなすも

のなり。かゝる場合の複語尾に該當するものは西洋文典にいふ所の時、態、法等の助動詞と稱せらるゝものなり。西洋の動詞にはそれら時、態、法等の區別を助動詞にて示す外になほ不定形 infinitive 分詞 participle 名動詞 gerund など稱する區別あり。かれらの動詞は此の如く複雜なるものなり。我國の動詞もその用法は複雜なるが故に學習上甚だ困難なるが如しといへども、之を說明するに必ずしも西洋文典の型によるを要せざるのみならず、語の性質異なるが故によるを得ざるなり。强ひてよらむとすれば大なる不合理を生ずるに至るのみならず、說明をなすにも困難にして同時に國語の眞性を發揮すること能はざるなり。今大體の比較を次に示すべし。

動詞の時と稱するものは所謂過去、現在、未來の區別をなすものと考へらるゝものなり。この區別はかれの文法には必要なるものなるべしといへども、わが文法にてはその過去又は未來といふべきものは複語尾によりて示すを得べきが故に動詞本幹の語尾の條には說くを要せず。なほこれには論ずべき點あれど、今これに言及せず。

動詞の態と稱するものは受身と働き掛との區別をいふ。國語の文法にありてはこれは或る種類の複語尾の分出するによりてあらはるゝ現象にして動詞本幹

の語尾の條には說くを要せず。

動詞の法と稱するものは直說法 indicative mood 可能法 potential mood 命令法 imperative mood の四あり。直說法は事實としてそのまゝ說明的に述ぶるものにして國語にていへば普通の終止形にて陳述をなせる形なり。接續法とは條件を覺束なき程度にてあらはすものにして國語にては用言の未然形に接續助詞「ば」を添へたるもの略〻之に似たり。これを接續法といふ譯をなせるよりして「ば」「ど」「ども」等すべての接續助詞につゞくるものに宛てたるは譯語のみを見て、實際を顧みざるより起れる誤謬なり。可能法は必要なる事件としてそれが可能なりといふ精神を以て述べたるものにして助動詞の助けによりてあらはせり。我國語にても又複語尾の分出によりて之をあらはすものあり。又その他相當の動詞「得」「能はず」などいふ語につゞけてあらはすものにして動詞の本體にそれをあらはす形式なし。命令法は國語の動詞存在詞にも命令形ありてこれを特別の形にてあらはすことを得べし。

さて又不定形とは動詞の原形として一定の法をも態をもあらはさぬ形をさすものなるが、この形は或は名詞の如く、或は形容詞の如く、或は副詞の如くに用ゐらる。これを以て、我が所謂未然形にあてたる文法家もあれど、徒に名を等くせしめ

たるにすぎずして實は大に異なり。わが動詞にては或は終止形或は連體形或は複語尾「べし」の連用形を附したるものを以て代表せしむるより外の手段はなし。

分詞とは動詞にして形容詞の役目をなせるもの丶義にして我が動詞の連體形にて連體格に立てるものに似たり。名動詞と稱するものは一定の形即語尾に「ii」をとりて名詞として用ゐらるゝものをいふ。我が動詞にていへば、準體言と稱するもの之に似たり。かくの如くなれば、國語の動詞の用法は國語の特性に基づき說明を進むるよりも他に良法なきが故にことゝゞしく西洋文典の名目を襲ふを要せざるなり。

動詞の音便は四段活用及び變格活用の語の連用形にあらはるゝものなるが、それらは古語にては種々の場合ありたれど、現今の文語にありては複語尾「て」「たり」につゞくる時に限りて行はれ、口語にありては動詞につゞくる時及び複語尾「て」「た」につゞくる時に行はるゝものなりとす。而、それにはカ行四段活用の連用形「キ」を「イ」とするもの、波行四段活用の連用形「ヒ」を「ウ」とするもの、ハ行四段活用の連用形の「ビ」、マ行四段活用の連用形の「ミ」、「ナ行變格活用の連用形「ニ」を「ン」とするもの、カ行四段活用の連用形の「キ」タ行四段活用の連用形の「チ」、ハ行四段活用の連用形の「ヒ」、ラ行四段活用の連用形「リ」を促音とするの九樣あり。

動詞の音便は上の如く九樣あるものなれど、それらを音便の結果より見れば「イ」「ウ」「ン」促音の四種となるなり。次にこの四種に分ちて例をあぐべし。

一、「イ」の音便。カ行四段活用の連用形「キ」にあらはるゝもの。

これに就いて面白き話あり。

字を書いてゐた。

人々はさわぎ立つて櫓を構へようとひしめいた。

この場合にその活用が濁音「ギ」なる時はその濁聲を「て」「た」に移して「で」「だ」となることと次の如し。

急いで行けり。

仰いで天に愧ぢず俯して地に愧ぢず。

舟を漕いだ。

二、「ウ」の音便。ハ行四段活用の連用形「ヒ」にあらはるゝもの。

渚にそうて歩ます。

酒に醉うた。

何というてよいやらわからぬ。

三、「ン」の音便。この場合にはすべて下の「て」「た」は濁音となる。そのハ行四段活

用の連用形の「ビ」にあらはるゝもの。

土木を運んで祠堂を營む。

私を喚んだ人は誰れだ。

あまり遊んでかへるのが後れた。

そのマ行四段活用の連用形「み」にあらはるゝもの。

夕には月を踏んでかへる。

昨日この本を讀んでしまつた。

荷物をつんだ船が通つてゐたのです。

その奈行變格活用の連用形「に」にあらはるゝもの。

死んで謝する外に途なし。

それが基となつてとうとう死んだ。

四、促音の音便。そのカ行四段活用の連用形「キ」にあらはるゝもの。

さやうなら行つてまゐります。

追つかけて引つ捕へた。

そのタ行四段活用の連用形「チ」にあらはるゝもの

勝つて兜の緒をしめよ。

之をもつて世の信用を得たり。

昨日東京を立つた。

そのハ行四段活用の連用形「ヒ」にあらはるゝもの

誓つてこの恥を雪がむ。

北へ向つてぞ歩ませける。

酔つぱらつて仕末にいかぬ。

追つかけて引つ捕へた。

そのラ行四段活用の連用形「リ」にあらはるゝもの

凝つては百錬の鐵となる。

ああ降つたる雪かな。

立ちあがつて引きたふす。

動詞の敬語には謙稱、敬稱共に存し、それらには特別の語を用ゐるあり、複語尾によりてあらはすあり、接頭辭によりてあらはすことあるは既に說ける所なるが、これを文語と口語とに分ち觀察すれば次の如し。

文語にありては動詞の敬語は謙稱には特別の語を用ゐる。たとへば

うけたまはる　たてまつる　まうす

の如きこれなり。敬稱には特別の語を用ゐることあり。たとへば

あそばす　おはします　たまふ　めす

の如きこれなり。又敬意の複語尾を加へてあらはすことあり。その複語尾は「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五つなり。

口語にありての動詞の謙稱には文語と同じく特別の語を用ゐる。たとへば

うけたまはる　まうす　うかゞふ　つかまつる　いたゞく　いたす

などの如し。敬稱には特別の語を用ゐることあり。その特別の動詞とは

あそばす　いらつしやる　くださる　なさる

などの如きをいふ。又複語尾を以てあらはすことあり。その時に用ゐらるゝ複語尾は「れる」「られる」の二あり。又接頭辭を添へてあらはすことあり。その接頭辭はお「おみ」等なり。これらの複語尾、接頭辭の事は下に述ぶることあるべし。

敬語はもと實質用言にして、その示す屬性を敬意を加へてあらはすを本性とするものなるが、往々その實質甚だ茫漠となりて形式用言の性質をあらはすに至るものあり。從つてかくの如くなれるものゝ用法は多くは存在詞に準ぜらるべきものあり。それらの事は自然後に論及することあるべし。

第十三章　存在詞

存在詞といふ一類は要するに「あり」といふ語及びそれより發展せる一系統の用言をさすものなり。この「あり」といふ用言は存在の義をあらはし進みてはたゞ陳述の義のみをあらはすに至れり。さてその存在の「あり」といふ語は事物につきて極めて汎き形式の下に陳述をなすものにして、如何なる屬性をも豫定することなく殆ど一切の用言の基本的形式的部分を代表せるものなり。

「あり」の意義は上述の如く汎きものなるが之を更に區別すれば二樣あり。一は存在を示すものなり。

　昔小野篁といふ人ありき。

　われ世の中にあらん限りは。

などの如きこれなり。二はたゞ陳述の義をのみあらはすなり。これは現代の語にては「あり」の形にて用ゐるものなしといへども、古代には用ゐられしなり。

　安米都知能可未奈伎毛能爾安良婆許曾安我毛布伊毛爾安波受思仁世米。（萬、十五）

　乾政官大臣仁者仕奉倍伎人無時波空久置氐在官爾阿利（續紀、二十二、詔）

人の心こそうたてあるものはあれ。（源、葵）

とのもりつかさこそなほをかしきものはあれ。（枕、三）

何事もいけるかぎりのためこそあれ。源、浮舟）

この第二のものは「なり」といふ形になることも古代より行はれたるが「現代にては「なり」のみ用ゐらる。

「あり」の上の二別は口語に於いては極めて明かに認識せらるゝなり。即ち存在をあらはして陳述する場合には

こゝに梅の樹がある。

といふ如く「が」といふ助詞を加へたる語の下に用ゐらるゝものなるが、陳述の力のみをあらはす場合のものは

これは梅の樹である。

といふ如く、必ず「で」といふ助詞を伴ひてあらはるべきものなりとす。この二別は口語にては著しきことなるが、これをうつして文語の「あり」にも二様の別の存することを明かに知るを得べし。

「あり」の活用は良行變格活用にしてその活用形は次の如く

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形　命令形

あら　あり　あり　ある　あれ　あれ

六種共に用ゐられ、その命令形はそのまゝにて使用せらるゝなり。さて「あり」の活用が良行變格と稱せられて普通の四段活用と別なりとせらるゝ點は、その終止形に存すること既に述べたる所なり。然るに近世に入りては一般の用言に通じて終止形を失ひ、連體形を以て終止形に代用することゝなり「あり」も亦その通則に洩るゝことなくなりたれば、こゝにこれが良行變格たるべき特徴を失ひ、口語にありては普通の良行四段活用と同じ活用をなすに至れり。

「あり」に基づける用言として「をり」あり。古くは「侍り」といふあり。又「いまそかり」といふもありたりしなり。「をり」は「ゐ」と「あり」との熟合よりなれりと稱せらる。その義は有情の存在を示す。その終止形は「をり」にして「をる」にあらざる點良行變格たる證なり。

　あるにもあらぬ身をしらずしてと思ひをり。（伊勢）

　翁何事ぞとてかたぶきをり。（竹取）

現代の口語にてはこれも終止形なく、「をる」の連體形を終止とすれば、良行四段に活用するなり。

「侍り」は「這ひ」「あり」の熟合なりと稱せらる。賤しき者が貴人の側に從ひて在る意

を源とする語にして、もとは「をり」の謙語として、有情の存在の謙稱にのみ用ゐたれど、中古よりは「在り」の一般の用法を代表する謙稱語となれり。これらの形も亦その終止形が「侍り」の形にあるによりて良行變格の活用をなすことを知る。

おのれが許にめでたき琴侍り。（枕草子）

こよひかの宮にまゐるべく侍り。（源、手習）

この語は現代の文章にも口語にも用ゐることとなし。「いまそかり」は又「いますかり」ともいひて「います」と「あり」との熟合せる語と考へらるゝものなるが、これは貴人の存在をいふ敬稱語と考へらるゝものなり。これも終止形が「いまそかり」なれば良行變格活用をなすことを知る。

たかい子と申すいまそかりけり。（伊勢語）

大御息所とていますかりける。（伊勢語）

この語ははやく亡びて今は用ゐることとなし。古代にありては「侍り」と「いまそかり」とは「在り」の謙稱、敬稱として兩々相對して用ゐられしものと見えたり。

「あり」は上に形容詞を受けその連用形の語尾「く」と熟合して「かり」といふ形をなすことあり。今これを形容存在詞といふ。

かくの如き詞は現代の文章にも盛んに用ゐらる。從來の文法家は多くは之を

輕視せりき。余は敎科書には之を形容動詞といひてはやく之を説けり。この語の用例

　產物は國々の習慣風土によりて同じからず。

　封建時代には實業の輕視せられし事甚しかりき。

　蛇を甚短しといへども蚯蚓よりは長かるべし。

　稗を食料に用ゐるには糠を去ることなかれ。

この類の語の活用形は次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
（多）	から	かり	かり	かる（人）	かれ（ば）（ども）	かれ

而してそれらの活用形の用法は範圍狹く、連用形は現代にては通常複語尾に接するのみなり。然れども古代にては終止形の終止に用ゐられたるものあり。

　はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。（源、桐壺）

　文の道はすこしたじろくともそのすぢはおほかり。（空穗、俊蔭）

これらの例にて知るべし。なほこゝに注意すべきは「如し」といふ語にはこの形を生ずることなきことなり。

　口語にては上の「かり」の類は活用の數いたく減じて、わづかに未然形連用形の二

活用形の存するのみなり。その形次の如し。

未然形　　連用形

多から(ウ)　多かり

かくてその未然形の「から」は複語尾「う」につゞきて「からう」といふ形にてのみ用ゐられ、連用形の「かり」は「さう」といふ語につゞく時に用ゐられ、複語尾「て」「た」につゞくる時には音便にて促め呼ぶやうになれり。

随分面白からう。

それは大分面白かりさうに見える。

それはそれはなか〳〵面白かつた。

これらの外には用法なし。或は

遲かれ早かれ出來るだらう。

の如き形を以て口語にもこれが命令形の用法なほ存する如くに說ける人もあれど、これは文語よりなれる熟語を借用する特別の場合にして命令形として活動せるものといふべからず。

「あり」は又上に來る四段活用、左行三段活用の動詞と合併して「けり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」となることあり。今かくの如きものを動作存在詞と名づく。その例次

の如し。

後には青蘆さやさやとそよげり。

庭の眞砂いつしか霜置けるやうに白みぬ。

父は非常なる勤勉家にして多少の蓄財をなせり。

勤儉と慈善とによりて德行を示せる結果なるべし。

一人の老翁こなたをながめて立てり。

板を浮べて手に持てるは泳がむとする人なり。

鷄を飼へり。一羽の牝鷄巢につき卵をかへし五六羽のひよつこをうめり。

彼が行へる善事は一二に止まらず。

かすめる空に月朧なり。

こゝに於いて農業はじめて世に起れり。

以上は四段の例にして次は左行三段の例なり。

魚貝を捕へてその食料とせり。

これ亦貯蓄の法に基せるものなり。

今日は社會の進步著しくて人智開發の機關も完備せればその人の心がけ次第にて立身出世をなしうべし。

この類の語は文章にのみ用ゐられ、口語には用ゐず。而、その活用形は今日にては終止、連體、已然の三形のみ用ゐらるれど、古くは未然、連用、命令の三形も用ゐられ、又それぞれの複語尾に接せしなり。

思ふ事なしたまへらばこがねの堂たてむ。（宇、菊の宴）

思ひしづめりくんじおもやせて、（濱松中納言）

上のあこめ二つ奉り給へりたり。（紫、日記）

これらとりおかせ給へれ。（宇、藏開、下）

これが活用形を示せば次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
給へら	給へり	給へり	給へる	給へれ	給へれ

この類の語は從來の文法にては輕視して多く之を說かず。偶々之を說くものも唯過去の語法として「り」といふ形なりなどいへり。されど、これは過去をあらはすものにあらざるは明かなり。本書は之を動作存在詞といへり。又そのこれを特に說けるものは良行變格再轉格なといへり。その故はこの類の語はその動詞のあらはす動作作用が、今に繼續して存在するか、若くはその動作作用は既に存在せずともその結果が現に存在することをいへるものなる上に動詞と存在詞との結

合なることを示すにも好都合なればかく命名したるものなり。この類の語は古代には盛んに行はれ、現代にも文章には甚頻繁に用ゐらるゝものなり。但し口語にはこれを用ゐることとなし。

助詞「に」又は「と」を伴へる名詞副詞が「あり」に接して形體融合して「なり」「たり」といふ用言をなす。これらはその名詞副詞を伴ひて説明の用に供する働を有するが故に今之を名づけて説明存在詞といふ。こゝにいへる如く「なり」は「にあり」の約まれるもの「たり」は「とあり」の約まれるものなり。この二語は共に必ずその上に名詞又は副詞を受けそれと合してはじめて用をなす。これ元來その「なり」「たり」の中に含まれたる「に」「と」がその名詞副詞の補助として用ゐらるべきものなればなり。今これらの例をあげむに、名詞を伴へるものは

楠木正成は忠臣なり。

豪傑たり哲人たるを望まむはもとより不可なし。されど豪傑たらむとしてえせ豪傑となり、哲人たらむとして生物識となるは不可なり。

副詞を伴へるものは

氣候溫和なり。

その生活や質朴なり儉素なり。

滿天地の氣象は一種の暢美なる感情を起したり。
茫漠たる平野至る所にあり。
この事判然たらば後人の爲ともなるべし。
立ちて窓戸を排けば星斗燦たり。

この類の語の活用は「あり」に同じけれども、連用形は用法頗る狹く、僅かに複語尾につゞくるのみなり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なら	なり	なり	なる	なれ(ば)(ども)	なれ
たら	たり	たり	たる	たれ(ど)	たれ

(豪傑)　　　(人)

「なり」と「たり」とはその上に來る名詞には同一なるものを用ゐることあり。かゝる時にその意義上の差あるを知るべし。即ち「なり」は內面的にして主として斷定をあらはし、「たり」は外貌的にして主として資格又は狀態をあらはせり。

我は子なり。
我は子たり。

これにて一斑を知るべし。この區別は畢竟「に」と「と」との區別に基づくものなり。副詞に於いては「に」を伴ふものは「なり」を伴ひ、「と」を伴ふものは「たり」を伴ふ。これら

の事はなほ副詞の條に說くべし。

從來はこの「なり」「たり」を助動詞と稱せり。これらは他の語に伴ひて用を完くすること「如し」「す」の如くなるが、それらを單語と認めたると同じ程度にて單語と認めて差支なきものなるのみならず、これらは用言の語尾の補助成分たる複語尾とは、決して一列に說かるべきものにあらず。況んやその構成要素たる「に」「と」も「あり」もいづれも單語なりと認めらるゝに、それらの複合せるものが單語以下になり下れりとは何か特別の事情なき限りは考へらるべき事にあらざるをや。この故に余は之を單語と認めて、之を複語尾の類と區別を立て、性質の上に大なる差別あるものとして取扱ふべきものなることを主張す。

この說明存在詞の一類が口語にては如何になれるかと顧みるに「たり」は口語には用ゐることなく「なり」のみ口語に存するものなるが、その「なり」もこゝに於いては體言を受くるものと副詞を受くるものとの差によりて用法と活用形との上に特別の狀態を呈せり。その活用形次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(體言を受くる)	なら	なり			なれ
(副詞を受くる)	なら	なり		な	なれ

體言を受くるものにては未然形は次の如く
　それだけのお金ならば私が差上げます。
　この模樣なら今日は大したことはあるまい。
助詞「ば」をつけ、又は助詞をつけずに同じく假定の條件を示すに用ゐらる。而して
これより外の用法なし。次に連用形の「なり」は
　僕なり君なりだれか行かう。
の如く重ねたる上にて條件を示すに用ゐられ、又
　代人なりともよこせばよい。
　何なりと召しあがれ。
とやうにいふ形あり。これは本來文語の終止形に「と」「とも」といふ接續助詞のつけるものなるが、口語にてはかやうに用ゐる外に用法を見ず。この故に今姑く、連用形の一用法と取扱ひおく事とせり。次にこの場合のものには終止形も連體形もなく、「已然形の「なれ」は
　好きなればこそ上手になつた。
の如くいへり。この體言を受くる「なり」は準體言をも受くることあり。その事は準體言の條にいふべし。

副詞を受くるものにては未然形の「なら」は次の如くに用ゐる。

いやならよせ。

靜かならばねつかれよう。

この場合のは體言を受くるものと大差なし。

連用形の「なり」は

どうなりかうなりこぎつけた。

どうなりとかつてにしろ。

性質は穩かなり學問は出來るし、申分がない。

といふ如き形あり。これも體言を受くるものと大差なしとす。これは連體形も存するが、それが「なる」にあらずして「な」といふ形を以てする點は體言を受くるものと差ある要點なるが、その例は

それは餘りなお言葉です。

世に學者の事業ほど偉大なものはない。

おだやかな人。

の如し。この「な」は本來文語の連體形の「なる」の「る」の略かれたるものなるが、本來連體形なれば、連體格を示すこと當然なり。しかるに近世に至りては連體形を普通

の終止に用ゐること行はるゝやうになりたれば、この「な」も亦終止に用ゐらるゝことあり。その古き例は

いかさまどこやらで聞いたやうな。(狂言記、宗論)

それはあまりにきふな」といへば。(昨日は今日の物語)

などあり。現代の口語にても、亦

それはそれは面白い事だつたさうな。

前へ〳〵と一歩づゝ近づくと思ふ中、何時の間にか我等の進路は東北に轉じたさうな。

の如く用ゐることあり。但、これはいつも「さうな」といふ形に限られたる樣に考へらる。次に已然形の「なれ」は「ば」につゞけて用ゐるのみなり。

已然形の「なれ」の例

左樣なれば頂戴いたします。

好きなればこそ上手になつた。

口語に於いては陳述の力のみの「ある」がその上なる助詞「で」と相熟して約まり、下略せられたる形をなせる「だ」といふ語あり。この「だ」も亦口語の說明存在詞といふべきものなり。これは連體形のみのものなるが、その用は終止としても連體とし

ても用ゐらる。その例

ことしは豐年だ。
楠木正成は忠臣だ。
ほんとに寒さうだ。

の如きは終止としての用例にして、

あの人が嫌だものですから。
ほんとにうまさうだこと。

の如きは連體としての用例なり。これらは「なり」と似て、體言をうくると、副詞をうくるとあること上の例にて知るべし。

口語には又「ぢや」といふ説明存在詞あり。こも亦「である」の約略にして、今は西國にのみ用ゐられてあり。恐らくは「だ」の本原の形ならむか。この「ぢや」も亦今は一の形のみにして終止としてのみ用ゐらるゝが故に終止形なりと認めらるれども、近世語の一般の例として終止形亡びて連體形これに代れるものなれば、これも亦その如く本來連體形なるべし。しかれど、現今にてはかへりて終止の例を見ること多く、連體の例は殆ど見ず。然れども、古くは次の如く

つれなきは尤も賤の身ぢや程に。

連體に用ゐたるなり。かの古く「兄ぢや人」「親ぢやもの」などいへるものは卽ち連體形の用例なりとす。

「です」といふ語も亦說明存在詞といふべきものなり。これは「である」の謙稱語ともいふべきものなるが、これは次の如く

我も日本男子です。

もうこれで結構です。

終止として用ゐらるゝが、又連體として用ゐらるゝことあり。

それは自分の子ですもの、かあいがらぬ事はありませぬ。

近頃は少しくは御ひまですか。

の如きこれなり。又「でし」といふ連用形あり。その例

それは外の事でして、これだけが主な事です。

この時は海は穩かでした。

これらは複語尾「て」「た」につゞくる場合のみを見る。又「でせう」といひて推測をあらはすことあり。その例

あれは生徒でせう。

それはきつと賑かでせう。

これらは「でせ」といふ未然形に複語尾「う」のつきたるものなるべし。以上を綜合すれば、これの活用形は次の如くなり。

未然形　連用形　連體形

でせ(う)　でし(たて)　です

これを以て考ふるに、これは左行三段活用の性質を有するものといふべし。たゞし、口語の左行三段の系統にあらずして文語のより直ちに系統を引けるものなりとす。

「あり」の複合よりなれるものに以上の外に存在をいふ「なり」「かゝり」「しかり」「さり」といふあり。いづれも文語なり。

存在をいふ「なり」とは場所を示す體言の「に」助詞を踐めるものが「あり」に熟合したるものにして普通には連體形のみ用ゐらる。

天原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

こゝなる門は誰が門。

これらの「なる」は說明存在詞の「なり」と意義異なれば混同すべからず。

「かゝり」は「かくあり」の約まれるものなり。「しかり」は「しかあり」の約まれるものなり。「さり」は「さあり」の約まれるものなり。いづれも「あり」の性質を存して終止形は

「り」なり。これ普通の動詞にあらずして良行變格たるなれば、注意すべし。

とあればかゝりあふさきるさにて。（源、帚木）

とありともかゝりともよき事はありなんや。（落窪、一）

いとかゝらでおいらかならましかば。（源、帚木）

いかではたかゝりけんと。（同上）

かゝる人も世に出でおはすものなり。（源、桐壺）

かゝれどもおぼつかなくもおもほえず。（和泉、日記）

しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかれぬあなう世の中。（古、雜下）

横座の鬼しかるべし〳〵といひて。（宇拾、一）

しかれどもひねもすになみかぜたゝず。（土佐日記）

おいさりさりとうなづきて。（源、玉葛）

さらばその宮づかひ人ななり。（源、夕顏）

さりぬべきすこしは見せむ。（源、帚木）

水の心ばへなどさる方にをかしうしなしたり。（源、帚木）

されどこの扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを。（源、夕顏）

今この三語の活用形を表示すれば次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
かゝら	かゝり	かゝり	かゝる	かゝれ	かゝれ
しから	しかり	しかり	しかる	しかれ	しかれ
さら	さり	さり	さる	され	

かくの如くこれは各、二語の複合せるものなれど、形體上單語と見ゆるものにして純然たる用言たるものなるに、これに「ば」「ど」「ども」といふ助詞のつけるものを以て接續詞なりとする説從來より盛に行はる。この例をいはゞ、

かゝらば　かゝれど　かゝれば　（和田氏文典）
しからば　然れども　（岡田氏文典）
さらば　されど　されば　（和田氏文典）

の如きこれなり。これらは文章の意義上の媒介をなすには相違なきものなれど接續詞とは稱すべからざるなり。況んや一の用言の各活用をば種々に分ちてその本體を顧みざるが如きは學術上甚だ不都合の事なりといふべし。今若し上の如きを接續詞とすべしとせば、この外

かゝりとも　しかりとも　さりとも

なども接續詞といふべきものとなる。かく一々の用言の用法の一々の場合を以て各別なる單語とすることはかの形容詞につきて、その連體形を形容詞、その終止形を動詞、その連用形を副詞としたる舊時の直譯文法と相距ること遠からぬものなり。かくの如き僻說は文運の進める今日にありては採用せらるべきことにはあらざるなり。

存在詞は本來の活用の外複語尾を分出せしめて種々の陳述をなすことあり。この事は動詞についていへると同じ。但し「あり」の外にはその分出に頗る制限あり。それらの事は下に述べむ。

存在詞にも音便あり。この現象は文語にては存在の「あり」にのみあらはれ、口語にありては存在の「ある」の外、陳述の「ある」にも形容存在詞にも「だ」「ぢや」にもあらはるるなり。

命あつての物種。

これには深い譯があつたのです。

少年の頃の夜食は茶漬に燒味噌だけであつたといへばその儉素の程も知られる。

いや〱弓が惜かつたのではない。

あそこに居たのは君だつたのですか。

さうぢやつた。

存在詞の敬語は文語にては敬稱のみにして「あり」に複語尾「す」と「らる」とを重ね加へたる「あらせらる」といふ語にのみ存す。その例。

親王王殿下は二日時刻の都合にて午後拜賀あらせらる。

陛下鳳凰之間に出御あらせられ、侍講等を召して進講を聞召さる。

口語にありては接頭辭「お」を「あり」に冠せしめて敬稱語をなすことまゝあり。

おありになります。

又「ござる」といふ敬語を用ゐることとあり。これは存在の「あり」の位置をも占め、又陳述の「あり」の位置をも占め、謙稱の語として用ゐらる。而して現今は「ござる」單獨にて用ゐることなく「ます」を加へて「ござります」といふ形にて用ゐらる。

こんな事は見た事がござりませぬ。

私も以前には一度御伺ひした事がござりました。

誠に御話の通の事でござります。

まことにきれいでござりました。

かく「ます」をつけたるものは「ござる」よりは一層敬意のつよきものなりとす。さて

この「ござる」といふ語はもと「おはします」といふにあてたる「御座」といふ文字を音讀にしてそれに「あり」を添へたるものが約まり轉じて生じたるものなり。されば古くは「居る」「來る」「行く」又は「あり」の意をあらはして、それらの敬稱語として用ゐられしものが、漸々變化して今の如く謙稱となれるは大なる變遷といふべし。かくして上にいへる「ござります」より「ございます」となり、「ござんす」となり「ごあんす」「がんす」「ごあす」「がす」「ごす」「げす」などいふ形を生じたるなり。この「げす」は「でげす」といふ形のみなれば陳述のものたるを知る。その他のは存在にも陳述にも通じて用ゐらるゝものと思はる。

第十四章　複語尾

動詞存在詞が、その本來の活用のみにて十分に説明若くは陳述の作用を果すこと能はざる場合に、その活用形より分出して種々の意義をあらはすに用ゐる特別の語尾を今假に複語尾と名づく。

この複語尾と稱するものは、口語に用ゐらるゝものとしては

れる、られる　　せる、させる

ぬ　ない　　う、よう

て　た　たい
らう　まい

といふあり、文語に用ゐらるゝものとしては

る、らる　す、さす　しむ
む　ず　ざり
たし　き　けり　つ　ぬ　たり
べし　まじ

といふあり。又古きものにては

まし　じ　けむ
めり　らむ　らし

等あり。

今複語尾としてあげたるものは從來「はたらくてにをは」又は動辭などいはれたるものなり。これにつきての研究を歷史的に概觀すれば、確たる分類をはじめしは富士谷氏なりとす。氏のあゆひ抄中の六倫十二身は實にこの複語尾に該當するものなり。本居春庭は富士谷氏が身の中に入れし「る」「らる」「す」「さす」等を以て用言の語尾と見たること、自他の研究の歷史にいひし所にて明かなるべし。義門は

これを用言の一部とせしが富樫氏に至りてはこれを動辭と稱し、大槻氏に至りて助動詞と名づけられたり。

現今の文法書には殆どすべてこれを助動詞と稱すれど、これらは用言の語尾の複雜に發達せるものなること既にいひし所の如くなれば、單語として取扱ふことは不合理なりといふべきなり。而してこの助動詞といへる名稱は英文典の術語の譯語を襲用せるものにしてその名とその實と吻合せぬものなるが故に用ゐるを避くべきなり。次にこれを動辭と稱するものは「や」「か」「かな」「は」「も」「ぞ」「が」「の」「を」「に」「より」等を靜辭と名づけてこれに對せしめ更にそれらを一括して助辭とするものなり。この見解は助動詞說よりは、國語の性質に近づきてありといへども、かの所謂靜辭といへるものは吾人の助詞と稱するものにして、他の種の單語の間に介在してそれらの間の關係を示す者なるを以て抽象的ながら單語とすべきものなるに、これは用言の語尾にのみあらはるゝものにして、その用言の作用又は陳述の委曲を盡さしむる用をなすに止まれるを以て用言の內部の形體上の變化と見るを穩當なりとすべき性質を有せり。されば、吾人はこれを語尾の複雜に發達せるものにして語尾の再び分出せるものなりといふ意を以て假りにかく名づけたるなり。而してこれらはその附屬する語尾にも一定の約束ありてその示す意義と共

に動かすべからぬ規律あり。

ある用言の活用形とそれより分出する複語尾との連續は緊密にして決して離るべきものにあらず。即ちその複語尾と用言の本來の活用形との間に他の語の入ることは決してなきなり。即ちこの場合にはその複語尾と上の活用形とは一體となりて離れず、その分出せるまゝのものにてはじめて一の用言たるなり。この故に分別書法をとりて各單語を離して記載する場合にもこの複語尾は本幹たる用言の活用形とは決して分ちてかきあらはすべきものにあらざるなり。これらの點は外國語の助動詞と全く性質を異にする點の主たるものなり。

かくの如く國語の複語尾と漢語英語などの助動詞とは頗る性質を異にするを以てかれらの助動詞と同一列に說くことを得ざるものなり。今これらの點を少しく說かむ。漢語にて助動詞と稱せらるべきものは

可、宜、當、應、須の類（「べし」の意を基として多少の異同あり。）

將、且の類（「む」の意を基として多少の異同あり。）

不、未、非、弗、勿、莫の類（「ず」の意を基として多少の異同あり。）

見、爲、被、所の類（受身の「らる」の意を基として多少の異同あり。）

使、令、命、敎の類（使役の「しむ」の意を基として多少の異同あり。）

英語にて助動詞と稱せらるゝものはshall, will, may, can, must, ought, 等にしてこの外 be, do, have は動詞としても助動詞としても用ゐらるゝものと稱せらる。これらのあるものは、又我國語の複語尾にて代表しうるものあり。たとへば豫想のshall 執意の will 許可の may 能力の can 義務の ought 必然の must 受身の be 過去の have は我が複語尾にてあらはしうることあり。これを以て助動詞といへば略同一のものゝやうに思惟せらるべしといへども、必しも然らず。既に述べたる如く國語の所謂助動詞と稱せらるゝものは實は語尾の複雜に發達したるものにして動詞の活用形の一部なりとす。この故にその所屬に一定の法則ありて動かすべからざるなり。未然形所屬のものは連用、終止に附屬せず、連用形所屬のものは未然終止に附屬せぬが如し。又之を本來の用言との間を離して中間に他の語を介むこと能はざるなり。この故にこの複語尾附屬したるまゝにて一の用言とみざるべからず。漢語英語の助動詞は一の單語にして、しかも主たる動詞を助くるものなり。而して主たる動詞とは形體上の連結なきものなり。この故に次の如き形は常にあらはるゝなり。

將以求吾所大欲也。(孟子梁惠王章上)

I shall soon go.

かくの如き形は決して國語の複語尾にはあらはるゝことなきなり。こゝに於いて吾人は複語尾を說明して次の如くいふことを得べし。

複語尾は用言の語尾の複雜に發達せるものにして、形體上用言の一部分と見るべきものにして、いつも用言の或る活用形に密着して離れず、中間に他の語を容るゝことを許さず常に連續せる一體をなすものなり。

こゝに於いて、この複語尾と用言の本來の活用との關係につきての問題生ず。卽ち用言の活用の一の用法として、必要の場合に下に複語尾を分出すといふことと考ふべきが、すべての用言にこの現象の存するものにあらず。この複語尾の分出といふことは動詞、存在詞には存すれども、形容詞にはこの現象全く存せず。これは形容詞としては命令形の存在せざると似たる現象にして、その命令形の存在せざるは既にいへる如く形容詞としては本質に基づける現象たるなり。而してこの複語尾の形容詞に無關係なることも亦形容詞としては本質的の現象なりと考へらる。たとへば受身とか使役とかいふ如き事は形容詞には本質的に起りうべき現象にあらず。なほ又豫想といひ、回想といひ、打消といひ、推量といふ如きものもすべて時間的推移的に屬性を考へての上の現象なるが故に、形容詞にはありうべからぬ現象なり。かくて形容詞以外の用言にこの複語尾の存する所以は、そ

れらの用言は屬性の表現に於いて又陳述の方法に於いて種々の變化を要求し、それらの要求のすべてをその本來の語尾のみにてはあらはし得ざるを以てこゝに複語尾の發達を促したるなり。かくて、それらの表現又陳述の委曲の狀況は卽ち國語にありてはこの複語尾にて示し得るものなれば、反面よりいへば、複語尾の存するだけ、國語の用言の表現及び陳述の方法は複雜になれるものといふべきものにして、正面よりいへば、國語の用言の表現及び陳述の方法の形式は用言の活用形及び複語尾の分出によりてあらはさるゝものに限られたりともいふべきなり。

上述の如く、複語尾は元來の用言の活用によりて種々の說明陳述をなしても、それにて十分に意を盡し得ざる場合にその必要に應じて分出せしむるものなるが故に、それは必要なる點のみ存在すべき筈のものなり。而して複語尾それ自身が又それ〳〵活用をなす必要あり、隨つて又一定の活用形を有す。しかも、それらの活用形も亦元來必要によりて起りたるものなるが故に、その必要とせられたる部分のみあらはるべきものなり。この故に本來の用言の活用に比して活用形の不完全なる點少からざるのみならず、それらの活用形の用法もまた局限せること多し。これらは皆必要なる部分のみの存在に止まるが故にして、複語尾が不十分なる故にあらざるものなることを豫め考へおくべきなり。

複語尾はそれの本幹たる用言の活用形に附隨するに一定の規律あり。即ち未然形より分出するものあり、連用形より分出するものあり、終止形(良行變格及び口語にては連體形)より分出するものあり。その本源の活用形につきて見れば、この三樣の別あるに止まれり。その三樣の複語尾を各につきてあぐれば次の如し。

未然形より分出するもの。(括弧內は口語)

行か　る(れる)　す(せる)
受け　らる(られる)　さす(させる)
行か　しむ
行か　ず(ぬ)(ない)　じ
行か　む(う)　まし
受け　む(よう)

連用形より分出するもの。

行き　つ(て)　ぬ　たり(た)
行き　けり　き　けむ
行き　たし(たい)　たかり

終止形(連體形)より分出するもの。

行く　べし　べかり　らむ(らう)　らし(らしい)　めり

行く　まじ(まい)　まじかり

從來の所謂助動詞の說明の方法はそれらの意義を主題としてそれより分類し說明することゝせるもの多し。然れども文法は語を主としてその理法を說く學にして理法を主として語を說く學にあらざるを以て意義を主として語を從とする方法は顚倒せる研究法なりとす。ことにこれらは單語にあらざるが故にこれを切り離しては初學者をして殆ど何の意義なるかを知るに苦しましむるに至らむ。これらは既にいへる如く、用言の活用より導かるゝものなればば上にいへる如く活用形の所屬を以て分類する時は最も記憶し易くしてしかも整然と秩序正しく研究するを得べし。その此の如き結果を生ずるはその本性に從へるが故なるなり。

複語尾も亦活用を有す。その活用は多くは用言そのものゝ活用に似たる點あるものなれど、必ずしも然らざるものもあり。今文語につきていへば、形容詞の活用に似たるもの、動詞の活用に似たるもの、存在詞の活用に似たるもの、特別の活用を有するものゝ四種に大別するを得べきが、それを細かく別てば、「くしき」活用の形をとれるもの「しくしき」活用の形をとれるもの、下二段活用の形をとれるもの、奈行變

格の形をとれるもの、四段活用の不完全なるが如き形をとれるもの、良行變格の形をとれるもの、特別の形をとれるもの、七様ありとすべし。次にこれを區別して示すべし。

「くしき」活用の形をとれるもの

(行き)　たく　たし　たき　たけれ
(行く)　べく　べし　べき　べけれ

「しくしき」活用の形をとれるもの

(行く)　まじく　まじ　まじき　まじけれ

下二段活用の形をとれるもの

(行か)　れ　る　るゝ　るれ
(受け)　られ　らる　らるゝ　らるれ
(行か)　せ　す　する　すれ
(受け)　させ　さす　さする　さすれ
(行か)　しめ　しむ　しむる　しむれ
(行き)　て　つ　つる　つれ

奈行變格の形をとれるもの

(行き) な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

四段活用の不完全なるが如き形をとれるもの、

(行か) 　む　　め

(行き) 　けむ　けめ

(行く) 　らむ　らめ

良行變格の形をとれるもの。これはすべてある複語尾と「あり」との複合よりなれるものと考へらる。

(行か) 　ざら　ざり　ざる　ざれ

(行き) 　たら　たり　たる　たれ

(行き) 　たから　たかり　たかる　たかれ

(行く) 　べから　べかり　べかる　べかれ

(行く) 　まじから　まじかり　まじかる　まじかれ

以上その活用形の略整へるものにして、次はその活用形の不完全なるものなり。

(行き) 　けり　ける　けれ

(行く) 　めり　める　めれ

特別の形をとれるもの、これらは

（行か）　ず　ぬ　ね
（行か）ませ　まし　まし　ましか
（行き）　き　し　しか
（行く）　らし

の如く活用するものなりとす。

複語尾には六種の活用形を完く備ふるものもあれど、多くは不完全にして一種二種若くは三種の活用形を缺くものあり。その六種の活用形を完く備ふるものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」「ぬ」「ざり」の八なり。その形次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
（書か）	れ	れ	る	るゝ	るれ	れ（よ）
（受け）	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られ（よ）
（書か）	せ	せ	す	する	すれ	せ（よ）
（受け）	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ（よ）
（書か）	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ（よ）
（書き）	て	て	つ	つる	つれ	て（よ）
（書き）	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

（書か）	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ

右のうち「ぬ」「ざり」の命令形はそのまゝにて用をなし、他の命令形は助詞「よ」を加へて用をなす。

活用形の不完全なるものゝうち、命令形のなきもの次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
（書か）	ず	ず	ず	ぬ	ね
（書き）	たら	たり	たり	たる	たれ
（書き）	たく	たく	たし	たき	たけれ
（書き）	たから	たかり	たかり	たかる	たかれ
（書く）	べく	べく	べし	べき	べけれ
（書く	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
（書く）	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ
（書く）	まじから	まじかり	まじかり	まじかる	まじかれ

右のうち「たり」は古代にては「たれ」といふ命令形用ゐられたりしなり。

活用形の不完全なるものゝうち、未然形と命令形とを缺けるものは次の如し。

連用形　終止形　連體形　已然形

(書き)	けり	けり	ける	けれ

「けり」には古代には未然形の「けら」も用ゐられたり。

連用形と命令形とを缺けるもの、

	未然形	終止形	連體形	已然形
(書か)	ませ	まし	まし	ましか

未然形と連用形と命令形とを缺けるもの、

	終止形	連體形	已然形
(書か)	む	む	め
(書き)	けむ	けむ	けめ
(書き)	き	し	しか
(書く)	めり	める	めれ
(書く)	らむ	らむ	らめ
(書く)	らし	らし	らし

右のうち「めり」は古く連用形のありしものにして「らし」は形には變化なきものなり。

複語尾はその終止形を以て代表的の形として、これをよぶにその形を以てする

こと本幹たる用言におなじ。
複語尾の活用形の作用はなほ本幹の用言の活用形の作用におなじ。されど、その作用は、用言の本幹に比して自由ならざる點あり。かくの如きはこれ複語尾の不完全なるが爲によるものなるか、これらの事一往、說明しおくべき必要あらむ。複語尾の活用のうちに缺けたるもののあることは前に述べたる如くなり。この事既にその活用形の作用の存在せぬことを示すものなるが、活用形の存在せるうちにても或る作用の缺けたるもの少からず。たとへば未然形は接續助詞「ば」に接する外「ず」「む」などの複語尾の分出するものなるが「る」「らる」「す」「さす」「しむ」等にはこの作用あれど、「ず」「べし」「まじ」等の未然形にはこの複語尾の分出する作用なきが如く、又連用形は下に用言に連ぬることをうるものなれど、「ざり」にはこの作用なし。かくの如き現象の存するはこれ複語尾の本質に基づくものにして複語尾が不完全のものなりといふことを得べきにあらず。卽ち、これは必要なる點のみが發達せるものにして必要とせぬものを理論的につくり出したるものにあらねばなり。さればこれらは複語尾が不完全なる爲に生じたる現象にあらずして、われらの用言操縱上必要なる點のみがあらはれたる結果にして、その他の點は語法上必要の無き爲に發達せざりしに止まるものなれば、くれぐれも誤解すべからざるなり。

複語尾の各活用形には、又その活用形に屬する複語尾を分出することあるものなり。卽ち一の複語尾を分出せしめてもなほ意義を十分にあらはし得ぬ時は更にその下より他の複語尾を分出せしめてその意義を完くすることあるなり。この時にはその複語尾の未然形には又未然形所屬の複語尾附隨し、連用形、終止形にも亦連用形、終止形所屬の複語尾附隨す。その例次の如し。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

かばかりの怒を忍びかぬる汝とは思はざりき。

しかれどもこれらの所屬は前にいへる如く、用言の本幹とすべて同樣なりといふべからずして不十分の點少からず。それらは下に自然に說く所あるべし。

上の例は複語尾二個の連續なるがなほ三個以上の連續せるものあり。それらも亦各活用形よりその活用形所屬の複語尾に連ぬるものにして一定の法則ありて動かすべからず。それらの例

早く母に別れ祖母の手に敎育せられたりき。

殿下は御課業了らせられて雪中に還啓あらせられぬ。

多大なる效果あらしめざるべからざる念愈切なり。

やがて之を印に彫らせられきとなり。

この兒才ありいかにも師を擇びて學ばしめらるべし。
不十分ながらも漢文を用ゐしめたりき。
人をして殆んど蕭條の氣に堪へざらしめむとす。
その勢實に常るべからざりき。
さまざま習はせられたれど何一つおぼえず。
以上あげたる如く、一の複語尾より他の複語尾の分出する狀態は本來の用言の活用形より複語尾の分出する現象と同じ。即ち形容詞の形を有する複語尾
「たし」「べし」「まじ」口語の「ない」
の類にはその下に複語尾の分出すること無きものなり。更に又
「む」「らむ」「けむ」「き」「ず」「じ」「らし」
の類も、その下に他の複語尾を分出せしめぬものなり。されど
「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」「ぬ」
の類は下に複語尾を分出せしむること盛んにして、又「有り」の複介より生じたる複語尾
「ざり」「たり」「べかり」「まじかり」
の類も然るべき複語尾を分出す。但し

「めり」「けり」

は古は複語尾を分出せしめたれど、後世は分出せしめず。

複語尾の多數のつながりの極限は如何程なるかといふことは實際上の問題にして、理論上の問題にあらず。されど一般に、他の複語尾を分出せしめぬ複語尾のあらはれたる時に分出は終息する道理なり。

複語尾は文語と口語との間に著しき差違あり。その差違の要點は次の五項なり。

一　意義用法のかはれるもの

二　形のかはれるもの

三　活用形のかはれるもの

四　文語になくして口語にのみあるもの

五　文語にのみありて口語になきもの

以上差異の委曲は、各論に至りて說くべし。

複語尾は獨立の語にあらねば、之を單獨に說くこと難し。又これを區分するにも、具體的にはその所屬の活用形よりして區別すべきこと既に述べたる所なり。かくの如くなれば、複語尾をば意義若くは性質の上より分類することは不可なる

事か、若くは不可能なる事かといふに必ずしも然らず。一旦、複語尾といふものゝ全體にわたりて具體的の知識を有したる以上、それら個々の複語尾を論ずるに及びては勢、おのづから、それらの性質にも論及する必要を生ずべく、隨つて、それらを性質によりて分類することは決して不可なるにあらず。又さる分類は決して不可能なる事にもあらず。たゞ分類をなすといふ以上、その事は合理的ならざるべからず。漫然と列擧するが如きは學問上の分類といふことを得ざるべし。然らば如何に分類すべきかといふに、こゝにもなほ先づ、その分類の標準を定めて而して後に之によるにあらずば、學問上の分類とはいふべからざらむ。今、複語尾といふものを一般的に考へ見るに、これは元來、その複語尾の附隨せぬ本來の活用形の用法を基として、それの足らぬ點を補充するを本旨とするものなるが故に、常に、その本來の活用形の用法と對比して考察せざるべからざる筈なり。さりながら、それは複語尾にてある以上、いつの場合にてもかゝる見地より觀察することを要するものなるが故に單にこれのみを以てしては分類の標準は立つべきにあらず。ここにそれら複語尾が、用言の如何なる點の用法の補助をなすかに眼を着くれば用言には既に屢いふ如く、屬性と陳述の力との二要素の包含せられてあることと明かなれば、こゝにこの二を以て分類の標準として、先づ、次の二に大別を施すことゝ

すべし。

一、屬性の表はし方に關するもの

二、陳述のし方に關するもの

この二大別を生ずるは、上にいへる如く、用言の本性を因とし、用言の本幹と複語尾附隨のものとの對比を緣としたるものなり。即ち用言の本幹たる第一語尾はその屬性の直接に作用せることと、又その陳述の單純に行はるゝ場合をあらはすが、ここにその屬性の直接に營まれざるものをあらはす必要、又はその陳述を委曲になすべき必要生じ來る。この際にあたり、之をいひあらはすには複語尾の分出によらざるべからず。かくて用言の要素は屬性と陳述の力との二者なるが故に、これらを助くるものにも亦、二者の區分を見るに至る。しかも、この二者は、それら用言に本來固有するものなれば、この二者は必然的に區分せらるべき理由あること明白なり。

さてその第一の場合を見るに、その複語尾のつかぬ用言が屬性の單純なる直接の表現をなす用をするに止まるが、その屬性の表現が複雜性のものにして、間接性を帶びたる表現を要する場合には用言の本來の活用形のみにてはあらはし得ざるを以てこゝに、

書かる。　受けらる。

の如き形を以て受身とか能力とかいふ表現法をなし、

書かす。　受けさす。　書かしむ。

の如き形を以て使役といふ表現法をなす。これらはすべてその屬性の表現法に關するものなり。従つて古來、これらの複語尾の分出したるものが、なほそのまゝ一の用言と認められたるなり。その理由はこれらが、屬性表現の相の違ふのみにして用言としての屬性には少しの變動をも與へぬものなるが故なるのみならず、この一類の複語尾はその活用形の數も、その活用形の用法も普通の用言と異なる姿を一も呈してはあらぬものなればなり。

抑も用言の有せる屬性をそのあらはされたる狀態につきて見れば、その主者が直接に之を營むものと、主者が直接に行ふものにあらざるものとの二種の區別を生ずべし。その主者によりて直接に行はるゝものは用言の本來の語尾を用ゐるものにして、その間接に行はるゝものは複語尾の分出によりてあらはすなり。この故に屬性の表はし方に關する複語尾は即ち間接の作用をあらはすものといふを得べし。

間接の作用といふにとりて亦二種あり。一は文の主者がその作用の主者にあ

らずして對者ありて、その若が、その作用を起す事實上の主者として作用を文の主者に與へをる場合、又は文の主者がその作用に對しては形式上主者の地位に立ちてあれども、その作用は現實となりてあらず、唯行はるべき狀勢にあるを示す。甲の場合は所謂受身にして、乙の場合は可能といはるゝものなり。而して二の場合共に主者その者の狀態を示す傾向强し。この故にこれらを一括して狀態性の間接作用といふ。これに用ゐらるゝ複語尾は「る」「らる」の二なり。

他の一は文の主者は直接にその作用をなすことなく、實際上その作用を起すものは別に存するものなるが、しかも、その文の主者は間接ながらその作用を起さしむべき主因となりて、實際上その作用を起すものをしてその事を營ましむるものなることを示すをいふ。これ所謂使役にして、同じく間接作用なれど、その性質發動的なれば、上の狀態性と區別して發動性の間接作用といふ。これに用ゐらるゝ複語尾は「す」「さす」「しむ」の三なり。

間接作用をあらはす複語尾は卽ち屬性のあらはし方を助くるものなるが、これには上に示す如く「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五あるものにして、これらはいづれも未然形に屬する點に於いて一致するものなり。これ卽ち形と性質とに於いて契合する點あるを示せるものといふべし。

次に陳述のし方に關する複語尾といふものにつきて考ふるに、用言の各活用形にてそれぞれ一定の陳述はなしうるものなるが、それは單純なる直接的なる陳述をなすに止まるものにして、複雜なる間接的なる種々の陳述のしかたは本來の活用形のみにてはあらはし得ざるものなり。即ち希望をあらはす場合、豫想回想をあらはす場合、否説をあらはす場合、推量をあらはす場合などはその本來の活用形のみにてはあらはしうべきものにあらず。さてかゝる必要ある場合にあたりて、それら種々の思想上の狀態に應じて、それぞれ陳述を果す爲にこれらの複語尾が附隨してあらはるゝなり。この場合にはその思想上に必要なる數の複語尾とそれに必要なるだけの活用形とのみがあらはるゝなり。隨つてこれらには活用の上に不完備の姿を呈し、各活用形の上にも局限せられたる點の存するものなり。

陳述のし方に關する複語尾は上にいへる「る」「らる」「す」「さす」「しむ」五の外すべてなるが、これらにも亦分類を施しうべし。先づこれを希望をあらはすものと、陳述の狀態に關するものとの二に大別するを得べきが、この二別は一は情意に關し、一は智的作用に關するものと見るをうべし。その希望をあらはすものは「たし」及びそれが「あり」と複合してなれる「たかり」にして連用形に屬するものなりとす。

「たし」「たかり」以外のものはすべて陳述の狀態に關するものなるが、吾人は更にこ

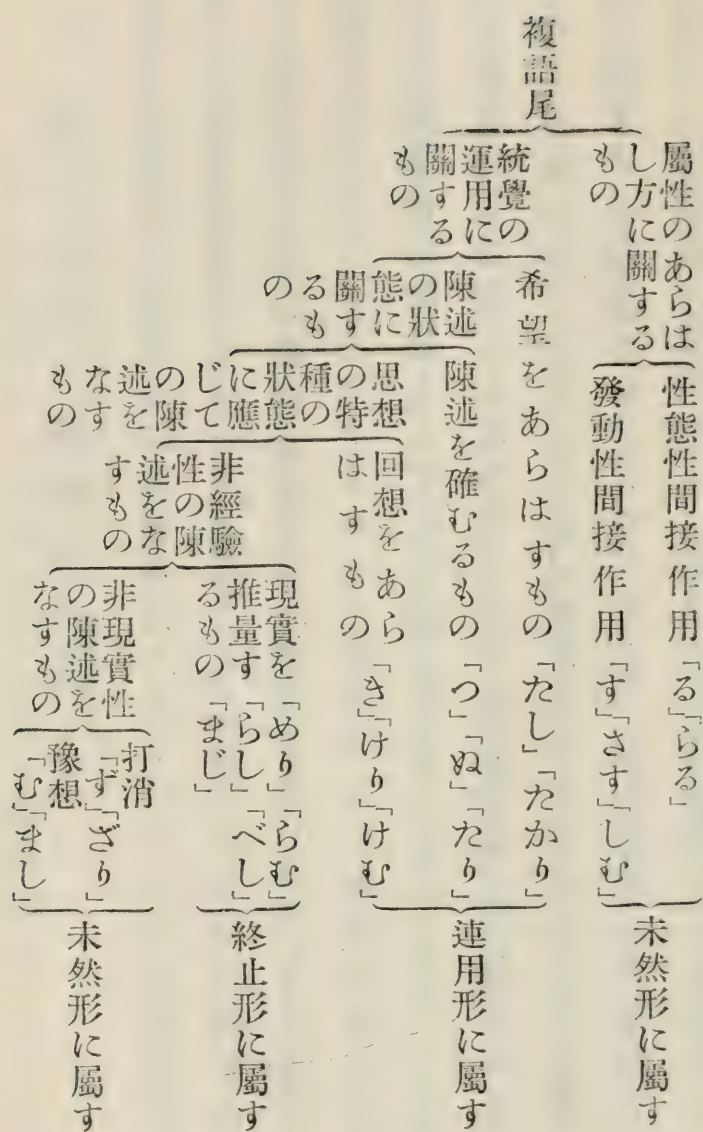
れを單に陳述を確むるに止まるものと、思想の特種の狀態に應じての陳述をなすものとの二に大別することを得べし。陳述を確むることに關するものとは「つ」「ぬ」の二つと、「つ」が「あり」に複合してなれる「たり」との三にしていづれも連用形に屬するものなりとす。

「たし」「たかり」「つ」「ぬ」「たり」以外のものは思想の特種の狀態に應じての陳述をなすものなるが、吾人は又更にこれを回想をあらはすものと、非經驗性の陳述をなすものとの二に分つことを得べし。回想とは事實として一旦存したりしことを追想することにして「き」「けり」を主とし、それより導かれたる「けむ」と、この三のものこれに屬す。而してこれまた連用形に屬するものなりとす。

非經驗性の陳述をなすものは又これを二分し、一を現實を推量するものとし、一を非現實性の陳述をあらはすものとするを得べし。現實を推量するものには又肯定するものと打消すものとあり。肯定的に推量するものには「めり」「らむ」「らし」「べし」あり、打消的に推量するものには「まじ」あり。而してこれらはいづれも、終止形(良行變格は連體形)に屬するものとす。

非現實性の陳述をなすものは、打消すものと、豫想するものとの二種に分る。打消すものには「ず」「じ」と「ず」が「あり」に複合せる「ざり」あり、豫想するものには「む」「まし」あり。

而してこれらはいづれも未然形に屬するものなりとす。
以上述ぶる如くなれば、統覺の運用に關する複語尾も亦その性質上の分類と、所屬の活用形の關係とはおのづから整然たる對應をなせるものなるを見る。即ち形と性質とに於いて契合する點あるを示せるものといふべし。
次に、すべての複語尾をその性質と所屬との對照を明かにしたる表をあぐべし。

- 複語尾
  - 屬性のあらはし方に關するもの
    - 性態性間接作用「る」「らる」
    - 發動性間接作用「す」「さす」「しむ」
    - ……未然形に屬す
  - 統覺の運用に關するもの
    - 希望をあらはすもの「たし」「たかり」
    - 陳述の狀態に關するもの
      - 陳述を確むるもの「つ」「ぬ」「たり」
      - 思想の特種の狀態に應じての陳述をなすもの
        - 回想をあらはすもの「き」「けり」「けむ」
        - ……連用形に屬す（希望・陳述を確むるもの・回想）
        - 非經驗性の陳述をなすもの
          - 現實を推量するもの「めり」「らむ」「らし」「べし」「まじ」
          - ……終止形に屬す
          - 非現實性の陳述をなすもの
            - 打消「ず」「ざり」
            - 豫想「む」「まし」
            - ……未然形に屬す

第十五章　複語尾各説

未然形に屬する複語尾は間接作用をあらはすものゝ全部(文語にては「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五、口語にては「れる」「られる」「せる」「させる」の四打消をあらはすものゝ全部(文語にては「ず」「ざり」「じ」口語にては「ぬ」「ない」、豫想をあらはすものゝ全部(文語にては「む」「まし」口語にては「う」「よう」)なり。今それらを通覽するに間接作用をあらはすものゝ外はすべて非現實性の陳述をなすものたるなり。

「る」「らる」は共に良行下二段活用の形を有し、意義と作用とは全く同一なり。然るにこの二者並び存する所以は「る」は四段活用及び變格活用に屬し「らる」はその他の活用に屬するの差異あるによる。而してその活用は次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行か)	れ	れ(給ふ)	る	るゝ(もの)	るれ(ば)(ども)	れ(よ)
(受け)	られ	られ(給ふ)	らる	らるゝ(人)	らるれ(ば)(ども)	られ(よ)

その所屬の活用の差異の關係は抽象的に見る時は頗る興味あるものにして之を一括すれば次の如し。

四段　行か(ア)‖る　加行三段　こ‖ら(ア)る

佐行三段		せ＝ら(ア)る
下二段		受け＝ら(ア)る
上二段		起き＝ら(ア)る
上一段		き＝ら(ア)る
下一段		け＝ら(ア)る
奈行變格		死な(ア)＝る
良行變格		有ら(ア)＝る

即ち用言の本幹の末に「ア」韻あるものには「る」屬し、末に「ア」韻なきものは頭に「ア」韻ある「らる」屬す。この故に中間に必ず「ア」韻一箇あることゝなる。これを見ても「る」と「らる」とは本來一なりしものが、音の都合によりて一方に省略若くは增加の行はれたるものならむと思はるれど、未だその起源を詳かにせず。さてかく複語尾の所屬などの現象に見ても余が、三段と變格との二者を區別して說けることの便なるを知るべし。

「る」「らる」は狀態性の間接作用をあらはすものにして、その最も根本的なりと認めらるゝは受身をあらはすものなり。その例

人に問はるゝ時いかゞ答へむ。

自ら信ずる者は毀らるれども怒らず。

それより一轉して自然にその事の現はるゝ勢にあることを示す。今これを自然

勢といふべし。その例

坊主山の早蕨かと怪まる。

眺めらるゝは故郷の空なり。

この自然勢が受身の一變態なりといふことは、その勢の起る本源は大自然の勢力にありて人力を以て如何ともすべからぬことを示すものにして、人はそれに對して柔順なるより外の方途なきなり。これ即ち大なる受身なりといふべきなり。この自然勢より再轉して文の主體に或る能力の存する義を表はすなり。その例

その面白さ筆紙に盡されず。

我もこの問題には答へらる。

の如し。この能力をあらはすものは第三の自然勢より更に一轉したるものにして、上には自然の大勢力これを然らしめたるをいへるが、こゝにはその主體にその勢力の存することをいへるものなり。即ち勢力をあらはすことは二者共通なるが、こゝにはその勢力の本源たる主格あり。彼にはその勢力の本源が自然なるを異なりとす。さてこの「る」「らる」は又一轉して敬語として用ゐらる。その例

生きては王事に勤勞せられ、死にては國家の鎮護となられしなどその功績のほど何にかたとへむ。

まづ靜まられよ。

ともかくも試みられよ。

この敬語となれるものは恐らくはその能力の存するをいへるものより一轉せるものならむ。卽ち、その人にさる能力の存する由をいひ、その人の優越の地位に在るを示し、以て崇敬の意をあらはすに至れるものなるべし。以上の四の場合、これを還元すれば、受身の一に歸し、その作用の直接に行はるゝことを示すもの一もなし。而してその作用のあらはれ方いづれも傍觀的なり。これ狀態性の間接作用といふ所以なり。さて以上四樣のうち第一の受身には必ず、その作用を受くる所の客語の存するなり。こゝにいふ客語はその動詞のあらはす動作作用の事實上の主者が文法上對者となりてあらはれたるものをさせり。(客語の事は後に詳かに說くべし。)その他の場合には客語の存することなきを以てその區別を明かにするを得べし。

以上は主として動詞より分出する場合をいへるものなるが、存在詞の場合には第一の受身第二の自然勢のものはなくして、主として用ゐらるゝは、能力をあらはすものなりとす。たとへば、

別れてはながらふべくもなかりしにあればあらるゝうき身なりけり。

かくてもあられけるよとあはれに見るほどに。（新續古、哀傷）
姫御前のあられもない。（徒然草）

などいへるもの卽ち、その「あり」より能力をあらはす「る」の分出せるものなりとす。又敬意をあらはせるものも存在詞には屬することありうべし。かの古踏歌の歌曲の終りに

萬年阿良禮

（私記曰今俗曰阿良禮走。師說、此歌曲之終必重稱萬年阿良禮。今改曰萬歲樂是古語之遺也。）（釋記、十五）

といへるも敬意の複語尾の命令形にて「萬年あらせたまへ」といふ義なるべし。口語の「をられ〻ます」もこの現象の一なり。

「る」「らる」は口語にては良行下一段活用となりて「れる」「られる」といふ形をとれり。而して意義と用法とは大體文語のに同じきが、その活用形次の如し。「れる」は四段活用より出で「られる」は三段、一段の各活用より出づ。

	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
（行か）れ		れ	れる	れれ	れ（よ）

(受け)られ　られ　られる　られれ　られ(よ)

この下一段活用の形は中國四國以東すべてに行はれ、九州にてはなほ二段活用として用ゐる所多けれど、福岡小倉唐津延岡等には一段活用として用ゐるなり。

この「れる」「られる」が四段活用の語の本幹と結合せるものは俗語にては往々

(打たれる)　うてる

(書かれる)　かける

(讀まれる)　よめる

(勝たれる)　かてる

の如き形となりてあり。これらはその形の上に於いてこれを動詞の本幹と複語尾とに分解することは能はざるものなればこのまゝ一の成語として見るべきものなり。この形は主として能力をあらはす場合に行はるるものなり。

「られる」が左行三段活用の語の本幹と結合するものは未然形よりする

せられ　せられる　せられゝ

の形の外に連用形よりして

しられ　しられる　しられゝ

の形をなすことあり。而、又この「せられ」若くは「しられ」が約まりて

され　　される　　されゝ

の形をなして一の成語の動詞の如くに用ゐらるゝことあり。この「される」は受身にも能力にも用ゐらるゝものなり。かくてその「される」が、

解（ゲ）される

譯される

などの如く、一字の漢字を受けたる語なる時には更に約めて

解せる

譯せる

などいふ形をなすものあり。この場合のものは能力をあらはすものに限れり。これらも亦既に成語たるものとすべく、上の場合と同じく複語尾の範圍を脱したるものとせざるべからず。

「す」と「さす」とは共に左行下二段活用の形を有し、意義と作用とは全く同一なり。これらは動詞存在詞に共通するものなるが、この「す」「さす」二者の差は「る」「らる」の差と同じく「す」は四段活用、及び變格活用に屬し「さす」は三段二段一段の各活用に屬するものにして

四段　　行かす　　　カ行三段　　こさす

ナ行變格　死なす　サ行三段　せさす
ラ行變格　有らす　上二段　起きさす
下二段　受けさす
上一段　きさす
下一段　けさす

の如く中間に一のア韻音の存すべきこと丶なりてあり。その活用形は次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行か)せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)
(受け)させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)

「す」「さす」は發動性の間接作用をあらはすものにして、その本來の意義作用は主體が直接に動作作用を起すことをせずして他を使役してその事を起さしむることを示すものなり。その例

茶屋に腰うちかけてラムネを拔かせ榮螺をやかす。
旗の青きは浪の和ぎたるを知らするなり。
朝早く起きさす。

かくてこれは一轉して敬語として用ゐらるゝことあり。その例

我をはかるなりけりとて泣かせ給ふ。

大に民心を得させ給ふ。

この敬語は、貴人は事を自らせずして下臣を使役してなさしむることより起りて敬意をあらはすに轉じたるものなりとす。かくてこの複語尾の本意は使役をあらはすにあるものなるが、それが動作作用は主者の直接に營むものにあらぬによりて間接作用といふべく、しかも主者はこの發動の主因たるものなれば、これを發動性の間接作用といへるなり。これも使役の場合にはその使役せらるゝものを客語として伴はざるべからざるものにして、敬語の場合にはこの客語なきを以て容易に識別し得べし。

「す」「さす」は口語にては左行下一段活用となり「せる」「させる」といふ形をとれり。その活用形次の如し。

	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
(行か)	せ	せ	せる	せれ	せ(よ)
(受け)	させ	させ	させる	させれ	させ(よ)

而してその意義用法は文語のよりは狹くして使役のみに用ゐられ、その所屬にも多少の異例あり。かくてこの口語の下一段活用なるもの丶實地に行はるゝ範圍

も略「れる」「られる」の場合におなじ。

口語の「させる」を左行三段活用の語に結合せしむるときはこの未然形よりして

せさせ　せさせる　せさせれ

といふべき筈なるが、往々連用形よりして

しさせ　しさせる　しさせれ

といふ形にして用ゐる所あり。（宮城縣、宮崎縣の延岡）而して實際殆ど全國一般に用ゐる形は上の「せさせる」又は「しさせる」の形にあらずしてこれらの約まれる語、

させ　させる　させれ

といふ形を用ゐる。この「させる」は「爲」の語を受けたるもの丶約まれるものなれば動詞の性質を有して單なる複語尾の「させる」にはあらざるものなれば注意して區別せざるべからず。これには又多く漢語を受けて「勉强させる」「出張させる」などともいふ。この「させる」即ち動詞としての「させる」にして漢語より直ちに複語尾につづけるものにあらず。さて又この約まりてなれる「させる」といふ語より誤認して文語にも往々

勉强さす

出張さす

などいふことあり。これらは文語には決してなきことなれば、正しく「勉强せさす」「出張せさす」といふべきものなりとす。

「しむ」の活用は麻行下二段活用の形をなす。その形

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行か)しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)

上の如し。而してこれには所屬の用言に差別を附せず。

「しむ」は發動性の間接作用をあらはすものにして意義と作用とは「す」「さす」に同じく、使役をあらはすを本體とす。その例

これを憐みて金を償ひ歸參することを得しむ。

その幅狹く大船を出入せしむるに足らず。

國民をして天を仰がしめよ。

かくてこれは又一轉して敬語に用ゐらる。その例

この年御位に卽かしめ給ふ。

この敬語の成立の理由も「す」「さす」に同じきことなるべし。さて使役の場合には客語を要し、敬語にはこれなきことは「す」「さす」におなじ。この「しむ」といふ語の盛んに用ゐられしは奈良朝以前にして平安朝以後は著しく衰へ、現代の口語には全く

用ゐることとなし。然るに現代の文語にこれの盛んに用ゐらるゝは蓋し、漢文訓讀の影響によるものなるべく、その漢文の訓讀は奈良朝以前に定まりしをそのまゝ今に傳へたるものなるを見るに足る。

「ず」は打消の意をあらはし、活用形は特別の形を有すること次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(行か)ず	ず	ず	ぬ	ね

その用例次の如し。

これを想うて粛然として襟を正しうせずばあらず。

爭を好むは勇にあらず。眞の大勇は人とものを爭はぬものなり。

人は青蘆にかくれて見えねど四ッ手網は確かに見ゆ。

この「ず」は口語にも用ゐらる。されど、口語にては終止形を失ひ、連體形を以て終止に代用するを以て活用形は次の如くになれり。

未然形	連用形	連體形	已然形
(行か)ず	ず	ぬ	ね

「ず」の「あり」につゞけるものは相熟合して「ざり」といふ一種の複語尾をなすことあり。これが意義は「ず」に同じくして「あり」の形を有し、ラ行變格の活用を有す。然れ

ども終止形は用ゐられたる例を見ず。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行か)	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ

その用例次の如し。

これを以てたゞちにその起點といふべからざらむ。
人物の出でざる蓋し怪むに足らざるなり。
名相同じからざれども事はすなはち一なり。

「ざり」は文語に用ゐるものにして口語に用ゐず。されど、方言にはこれが痕跡を止むるものなきにあらず。たとへば、出雲土佐日向などにて「知らざつた」などいふ「ざつた」は「ざりき」に相當するものにしてその「ざつ」といへるは「ざり」の轉じたるものなり。然れども一般には用ゐることなし。

口語には「ず」の意義に同じく打消をあらはす「ない」といふ複語尾あり。これも亦未然形所屬のものにしてその活用は口語の形容詞の活用に似たり。この活用形次の如し。

	連用形	連體形	已然形
(行か)	なく	ない	なけれ

その用例次の如し。

日が暮れて何も見えなくなつた。

人が居ない。

知らない事を知つた風しないがよい。

私は父に手紙を送らなければならない。

この「ない」は左行三段活用の動詞には連用形に屬して「しない」といふを普通とす。この「ない」は本來東國の方言に發達したるものと思はれ、現今にても、遠江、信濃、越後を境として、專ら東國に行はれ、それより西は大抵「ぬ」卽ち文語の「ず」の系統のものを用ゐるを常とす。

この「ない」の連用形の「なく」より「あり」につゞけて約めたるものに「なからう」「なかつた」といふ形をなせるものあり。これには上の如く、

未然形　　連用形

なから(う)　なかり(つた)

未然形、連用形のみ存して、しかもそれも、上述の如き場合卽ち「う」「た」といふ複語尾につゞく場合の用例のみを見る。その例

夏になつても多分草は生えなからう。

しかし、天は尙未だ予を棄てなかつた。
肥後の球磨川に果さなかつた川下りの遺憾はこゝで償はれた。
なほこの「ない」の系統と思はるゝものに「なんだ」といふ形あり。その例
そんな事とは知らなんだ。
といふ如きこれなり。その由來は未だ詳かならず。
この「ない」と形容詞の「ない」とは性質異なるものなるに往々混同せられ易く、現にこれを混同して說ける學者あり。この複語尾の「ない」は動詞、存在詞の未然形に屬すれど形容詞の「ない」は未然形につくことは決してなし。然るに次の如く形容詞又は形容詞の形なる複語尾の連用形に接する形容詞の「ない」は往々複語尾の「ない」と混雜して考へらるゝことあり。
人口は多くない。
あの山は高くない。
それはよくない事だ。
そんな事はしたくない。
それは男らしくない振舞だ。
これらの場合の「ない」は普通の形容詞の「ない」即ち「存在」と反對の意なるものとは稍

意を異にせるものなるが故に、世の學者の惑へるも多少の理由なしとはいふべからざれど、打消の複語尾たる「ない」とは全く性質を異にするものなり。この場合の「ない」は本來の「無」の意義より一轉して漢字の「非」の字の義に似たる意義をあらはせるものなり。即ち「なし」はもと「あり」の存在の反對たる「無」の意義をあらはしたりしが、いつしかその意義擴張せられ、陳述をなす「あり」の反對なる意にまでも用ゐられたるものにしてこゝに「非」の字の義を有するに至れるものなり。「なし」のこの種の用法は鎌倉時代(委しくいへば院政時代)より既に發達せる一種の語法なり。かく特別の語となれるものなれど、そはなほ一の用言たる性質を失ふことなく、いはゞ存在詞「あり」の否定の場合をあらはせる一種の形式用言となれるものといふべきに似たり。されど、なほその本源の形容詞の中にて說くを妥當とすべし。この形容詞の「ない」は又

その騷動は一通りの事ではない。

あの人の處置も穩かでない。

の如く用ゐることあり。これ皆「あり」の陳述のみの意なるものゝ否定をあらはせるものにして單なる「無」の意にあらざるは論なけれど、くれぐれも複語尾の「ない」とは別なるを識別すべきなり。即ち形容詞の「ない」は、用言につくときはその連用形

よりす。これそれが一の用言たるが故なり。複語尾の「ない」は一般に打消の複語尾の屬すべき未然形に屬するものにして外形上より見ても區別の明かなるのみならず、それを切り離しては具體的の意を認め難きものなりとす。

「じ」も亦打消す意をあらはすものなるが、これは多少ためらふ點あるを示し、上の「ず」「ざり」「ない」の決定的なるに比して遲疑又は多少豫想する意を含めりと見ゆ。これは形の變化なくして終止形と連體形との用をなす。その終止形の用例、

君はまだ遠くは行かじ。

連體形としてのものは名詞又は「を」といふ助詞につゞくる例を見る。

幾世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるゝ。（古今、十八）

白川の瀧の糸みまほしけれど、みだりに人をよせじものをや。（後撰十五）

雨降れど、露も漏らじを笠取の山はいかでか紅葉しにけむ。（古今、五）

この複語尾は口語には用ゐず。文語にても普通文には殆ど用ゐず、主として和歌又は擬古文に用ゐらる。

「む」は豫定又は想定の意をあらはすものにして、活用の形は麻行四段活用の下半に似て、終止連體已然の三形のみを有す。その活用形次の如し。

終止形	連體形	已然形
(行か)む	む	め

その用例次の如し。

よしさらば余は君が保護者たらむ。

兄の子に家を讓らむ志この時より起させたまへり。

よく思ひならはせる故にこそあらめ。

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにし木實なるときもがな。

(古今、物名)

この「む」は文語にのみ用ゐらるゝものなるが、しかも、その已然形は普通文に用ゐる事殆どなくして和歌又は擬古文に稀に用ゐらるゝなり。

從來この「む」を以て未來と稱せり。元來、未來といふ術語は動詞の用法上ありうべきものにあらず。且之を說明するに初心のものには殊更了解せらるべくもあらず。著者は多年教授上の實驗によりてこの術語を以て說明しうべきものにあらざるを體認せり。而、又一方に於いて研鑽の結果論理上に於いても動詞の未來といふこと及び過去といふことの不合理なることを看破せり。委しくは日本文法論に述べたるが、今一二例につきてその不合理なる事を述べむ。上述の

よく思ひならはせる故にこそあらめ。

の「め」は「む」の已然形なるが、これを未來とせよ。この文は神皇正統記に、

昔許由と云ふ人は帝堯の國を傳へむと有りしを聞きて潁川に耳を洗ひき。巣父はこれを聞きてこの水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。

とある文章にして、この許由巣父の事蹟を批評せる語なり。こゝには未來といふべき分子、一毫も存せざる筈なり。若し、この「め」を未來といはば、その文章果して如何にあるべきぞ。又「花の木にあらざらめどもさきにけり。」に於いても「め」が未來なる時には語をなさゞる事明白なり。即ち、はじめの例は過去の事柄に對しての推定想像をあらはせるものにして、次の例は事實に非ざることを知りながら、それを想像の形式にていへるものにして、想像をあらはせるものたることは一なり。この故に上述の如くするときは誰にも明かに意義を認めうるものとなるべし。從來の英文典直譯流の文法家が動詞の法とか、式とか、相とか、時とかいへるものは徒に煩を畣すのみにして教科の上にも研究の上にもさまでの效なきものなり。たゞに效なきのみならず、往々累を殘せるもの少なからずとす。

口語にては「む」のかはりに「う」「よう」を用ゐる。この「う」はもと「む」の變形せるものに

して四段活用及び變格の未然形に屬する時に用ゐる形にして一段活用に屬する時は「よう」といふ形となれり。さてこの「う」「よう」は形の上の變化なくして、終止連體の二形に用ゐらるゝなり。「う」の用例。

明日は雨が降らう。

彼處に死なうと思つて行つたのだ。

面白い事があらう。

それは面白からう。

行かうかかへらうかと考へてゐる所である。

いはうやうのない事である。

「よう」の用例。

行つて來よう。

試驗を受けよう。

花を見よう。

うつかり出ようものなら何處迄も何處迄もついて來て逐つたつてどうしたつて歸らない。

あの人に出來よう筈がない。

この「う」と「よう」とは本來同一のものにして「む」が基なること既にいひし通りなるが、それが四段活用より分出するときはその未然形より直ちに出づるものなるが、一段活用よりする時はそれらの未然形より「う」につゞくる場合に「イ」「エ」の韻と「う」との混和によりて「よう」といふ形の生じたるなり。

受けよう
起きよう

といふものこれなり。これは古くは

受けう
起きう

といひしものにして、かく書きたる例古には存せり。さて三段活用の動詞にありては四段活用と同樣に未然形より「う」につゞけて、

こう
せう

といふが當然にして現にしか用ゐてもあれど、又「よう」を分出せしむることあり。その時にはカ行三段の方は本來の如く未然形よりして、

こよう

といふことなれど、サ行三段の方は連用形よりして

しよう

といふことゝなれり。これは「せう」といふ語より再轉したるものと考へらる。

「まし」は「む」に似て豫想するものなるが、不確定の度强きを示すものなれば、寧ろ假想といふべきものなり。これは一種特別の活用を有し、連用形と命令形とを有せず。

その活用形次の如し。

未然形	終止形	連體形	已然形
(行か)ませ	まし	まし	ましか

その用例次の如し。

うちわびて落穗拾ふと知らせませば我も田つらに行かましものを。(伊、物)

梅が香を袖にうつしてとゞめてば春は過ぐともかたみならまし。(古今春上)

まして龍をとらへたらましかば又事もなく我は害せられなまし。(竹取)

これは口語には用ゐず。文語にても古きものにして、今は和歌又は擬古文などにも殆ど用ゐず。

連用形に屬する複語尾は希望をあらはすもの(文語にては「たし」「たかり」口語にて

は「たい」「たから」陳述を確むるもの(文語にては「つ」「ぬ」「たり」口語にては「て」「た」)回想をあらはすもの(文語の「き」「けり」「けむ」)なるが、希望をあらはすもの以外は、すべて現實性を帯ぶるものなり。

「たし」は希望をあらはすものにして、形容詞の「くしき」活用に同じき活用をなす。その活用形次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(行き)	たく	たく	たし	たき	たけれ

その用例次の如し。

みたくばみせてやらう。

(但未然形の用例は古書に未だ見ず)

ハルカニ見送リ奉リ走付テモ參タク思ケレトモソモカナハス、(延慶本平家、三末)

きゝたしや宿をたとりてなくなみたわすれ水とや流れゆくらむ。(月詣集)

イツクニテモ父ノオワシマサム所ヘソ參リタキ。(延慶本平家、六末)

かやうの物こそ一人なりとも召つかひたけれ。(曾我物語)

これが、連用形は音便にて「たう」となることあり。

この「たし」は主として鎌倉時代頃よりあらはれたりと思はる。萬葉集第六巻の
凡有者左毛右毛將爲乎恐跡振痛袖乎忍而有香聞
の「ふりたきそで」の例をこれなりとする說あれど、この「たし」は「甚しき」意の「たし」なりとの說もあるのみならず、平安朝の文獻にこれに似たる例なきを以てその連絡如何なり。この故に今姑く、鎌倉時代頃よりの語と考ふ。

「たし」の連用形「く」より「あり」につゞけるものが約せられて「たかり」といふ形をなすことあり。これが活用形は良行變格の形をなすものなるが、その形次の如くなるべきものなれど、

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(行き)たから	たかり	(たかり)	(たかる)	(たかれ)

未然形連用形の外は用ゐられし例を未だ見ず。

山寺は法師くさくてゐたからず心清くばくそふくにても　(明恵上人傳)

「たし」は口語にては「たい」となれり。これが活用形も亦口語の形容詞に似たり。その活用形次の如し。

未然形	連用形	連體形	已然形
(行き)たく	たく	たい	たけれ

連用形の「たく」は音便にて「たう」となること文語のにおなじ。その用例

逢ひたくばよびにやらう。

何遍でも見たくなる。

是非拜見したう存じます。

明朝は是非早く起きたい。

寢たい時にねる。

見たければ見てもよい。

「たかり」も亦口語に存す。これは未然形「たからう」連用形「たかつた」の二の活用形のみ行はる。その例

早く家へ歸りたからう。

君も來たかつたらう。僕もあひたかつた。

「つ」は主觀的には陳述を確むる意をあらはし、客觀的にはその事の完く了れるを示す。その活用は下二段活用に似たり。その活用形は次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行き)て	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)

その用例次の如し。

梅が香を袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし。

曙光は見えそめつ。

あさましかりつる夏もくれて秋にも既になりにけり。

篤と吟味致しつれば雲にてありしもをかしく候ふ。

「つ」の未然形、命令形は今日の普通文には殆ど用ゐることなく、和歌又は擬古文にのみ用ゐられ、終止形も亦古風を模する美文に多し。連體形、已然形とても亦殆ど然り。然るに、連用形なる「て」は用法極めて廣く、殆ど單獨に「つ」の意義を離れて單に決定の意をあらはして使用せらるゝ傾向あり。其例次の如し。

頭の方太く尻の方尖りて西洋の獨樂に似たり。

波瀾と上下して走る。

動詞の連用形につゞきて單に連用の意を強くするに止まり、又同格連用又は修飾連用をなすこと多し。（同格連用、修飾連用のことは後に説くべし。）かくて「て」はこれより一變して形容詞の連用形につくことあり。

柄は短くても可なり。

これは中間にあるべき「あり」を省きたるものにして、なほ連用の意を强むるものなり。而して、又

花は紅にて葉は綠なり。
內地にては金澤地方にてこれを培養せり。
昔上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。
人知るまじとて歎くは妄なり。

の如く「に」「と」の下に來るべき動詞を略して、それの位置を暗示すること少からず。これ卽ち「にて」「とて」といふ形なり。

「ぬ」は「つ」と同じく主觀的には陳述を確むる意をあらはし、客觀的にはその事の完く了れるを示す。その活用は奈行變格活用に同じ。活用形次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行き)な		に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

「ぬ」の用例次の如し。

月影はやうやくわがもとに來りぬ。
浪うちよせなばやがて流れも失せぬべし。
のどかに物語してかへりぬるいとよし。
このともがらは皆步兵にこそ侍りぬれ。

「ぬ」は古風の詞にして多くは美文に於いてし、普通文には主として終止の形のみ

用ゐらる。

「ぬ」は奈行變格の動詞には附屬することなし。

「つ」と「ぬ」とはその意義大略相似たるものなれば往々混同し易し。この二者の區別につきては古來種々の論ありて一定せず。普通には「つ」を他動に「ぬ」を自動にといふ區別を說けれどもそれの當らぬことは既に定論あり。又「ぬ」を狀態「つ」を動作といふ區別をなせる人もあれど、二者共に動作にも狀態にも通じて用ゐるものなれば、この區別も亦通ずるところなし。これによりて古來の用例を按じて考ふるに「つ」はその事實を直寫する場合に用ゐ「ぬ」はその事を傍觀的に又は說明的に述ぶる時に用ゐるものとする時に最も當れるに似たり。次に一二の用例をあげて說かむ。

我心慰めかねつ、更科や姨捨山にてる月を見て。　(古今、雜上)

待つ人もこぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな。　(古今、春下)

谷川のうち出づる浪も聲たてつ、鶯さそへ春の山風。　(新古今、春上)

以上「つ」の例なり。いづれもその文の主者の地位より直寫的にいへるものなり。

谷川の流れし淸くすみぬれば隈なき月の影もうかびぬ。　(新古今、釋敎)

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　(古今、秋上)

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ。(古今、春下)

以上「ぬ」の例なり。いづれも説者の傍觀的に說明せるを見るべし。なほ一層明かなる例は次の如きにて見るべし。

をし鳥のつたふ岩根に浪かけてうきぬしづみぬ身をぞうらむる。(永久百首、鴛鴦)

萠黃緋威赤威色々の鎧のうきぬ沈みぬゆられけるは神南備山の紅葉葉の嶺の嵐にさそはれて龍田河の秋の暮ゐ塞にかゝりて流れもやらぬに不異。(覺一本平家、四)

此文ヲヒロケツ卷ツ千度百度ヲキツ取ツシテ臥マロヒテヲメキ叫ヒテ悲ノ淚ソ流シケル。(延慶本平家、二本)

「たり」は「つ」と「あり」との結合によりて成れるものにして、意義は「つ」に似たれど、その用汎し。これは良行變格に似たる活用形を有す。その活用形次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行き)たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

「たり」の用例次の如し。

過を知りたらばそを補はむとつとむべし。

恰も穽に落ちたる野獸の身をあせりて上らむともがくに似たり。

花は見頃は過ぎたれどもなほ七分の匂あり。

これの連用形は下に複語尾をつゞくるのみにして、

待やすきものにおぼしたりきかし。（源、朝顏）

命令形は古代にありたれど、現今は用ゐることなし。

山城茄子（なすび）は老いにけり。とらで久しくなりにけり。あこがみたり。さりとてそれをばすつへきか。おいたれ（措き）〳〵たねとらむ。（梁塵秘抄、雜歌）

「き」は回想する意をあらはすものにして特別の活用形を有す。その活用形次の如し。

終止形	連體形	已然形
（行き）き	し	しか

その用例次の如し。

うれしかりし事どもなり。

貧窮甚しかりしかば上方に往きて身を立てむと思ひき。

この「き」がその活用形の上に音質の一致せぬものを用ゐてあることは注目すべき點なるが、今それらの理由を知るに由なけれども、恐らくは「き」と「し」「しか」とは源とす

る系統の異なるものにあらざるか。而して「き」は回想をあらはすものゝ本體にして「し」「しか」は本別種のものたりしが、後に二者合一せしものにあらざるか。かくてそれにつきて考ふべきことは後に句論に行きて說く如く、

いかで見てしがな。

甲斐がねをさやにも見しが。

などの如く希望をいふ場合にこの「し」を用ゐる點なり。この場合の「し」には回想の意も過去の意もなくして、たゞ事實を確認せむとする意の著しく見ゆるに止まるものにして、この如き用法はたゞこの「し」にのみ存する特別のものと認めらるゝが、こゝにこの「し」が恐らくは確認を示すものとして用ゐられし事古代にありしことを示すものならむと思はるゝなり。

この「き」の活用形は三段活用に限り所屬に特別の現象あり。即ち加行三段にはその「し」「しか」の二活用形のみつき、しかも、未然形にも連用形にもつくなり。その未然形につけるものゝ例

くらべこし振分がみも肩すぎぬ。(伊勢語)

人ふるす里を厭ひてこしかども奈良の都もうき名なりけり。(古今)

その連用形につけるものゝ例

きしかた行くする𛀁思ひつゞけられて　（源、總角）

（「きしか」の例の古きものは例を見ねど普通には用ゐらる。）

次にサ行三段活用に對しても亦未然、連用の二活用形につく。但、こゝにてはカ行三段に於ける場合と現象を異にし、連體形の「し」已然形の「しか」が未然形につき、

今まで無禮せしは過なり。

やがてさぶらはむとせしかど　（宇都保、藏開中）

終止形の「き」のみ連用形につけり。

鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。　（竹取物語）

「けり」も亦回想をあらはすものにして良行變格活用に似たる活用を有す。その活用形次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
（咲き）（けら）	（けり）	けり	ける	けれ

これらのうち普通に用ゐるは終止、連體、已然の三活用形なり。その用例

友は詞はなくてたゞ頻にうちうなづくなりけり。

之を傳へきゝける將士皆王の赤心と大膽とに驚けり。

砂漠の中に出でければその困苦いふべくもあらず。

上述の「き」「けり」の二は回想する意をあらはせり。回想とは思ひ起すことなり。過去に經驗せしことを「あゝであつた」「かうであつた」と思ひ出すことなり。而して、人は經驗以外の事は回想しえざる筈なり。この故にそれらの事は直說せざるべからず。所謂歴史的現在などいふ苦しき解釋は過去といふ語法上の型を强ひて立てゝ自繩自縛に陷りたる苦境を脫せむとする附會の說なり。

さて又「き」と「けり」とは根源一なれど「けり」は「き」と「あり」との結合よりなれるものなれば、「き」とは意義少しく差ありて、現に見る事に基づきて回想する意をあらはせり。その意の著しくあらはれたるものは次の歌の如きものなり。

八重葎しげれる宿の淋しきに人こそみえね秋はきにけり。（百人一首）（拾遺集）

かくの如きものを普通の「けり」と別なる語として、詠嘆の「けり」などといふ名目を立てたる學者あれど、それらはたゞ文全體の意義よりいへるに止まり、「けり」としてはかへりて本來の意義を保存せるものといふべし。

以上に說ける「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」の五は從來は過去の助動詞と稱せられたり。しかれども、そのうち「ぬ」「つ」の二は「なむ」「てむ」「なまし」「てまし」「ぬらむ」「つらむ」「ぬべし」「つべし」「ぬめり」「つめり」の用例に見る如く過去をいふものにあらずして叙述を確むる

に止まるものなり。

又「き」「けり」「たり」の三は過去の助動詞といふこと殆ど通說の如くなりをれど、これも亦、過去とは何の意味をあらはすものなるか、決して知らるゝものならざるに止まらず、著者硏究の結果も亦、その誤なることを結論せり。(日本文法論には特に之に關して詳論せる章あり。)これは過去の事を回想するものにして過去の事實をかきたるものにあらざるなり。近時の學者余がいへる說の事實を認めつゝなほ過去未來といふ語を强ひて用ゐ、さて、それを說明するには、

主觀を時の延長のある點に定着させて、主觀の經驗的認識の內容をなす部分の無始的限界から反對の限定までを過去とし、その認識の終る限界を現在とし、經驗的認識をその方向に延長した部分を未來といふ。

といふが如き(哲學にも心理學にもあらぬ)以てまはりたる說明を下せるは何の必要あることか。旣に時そのものを直接にあらはすものにあらざるを認めたる以上は時の區別を以てこれらの主觀の表明をなす語法にあつることは明かに迷妄といふべし。かくの如きは哲學上の範疇を以て言語を矯めむとするものにして決して從ふべからず。然るに西洋の文法學にかくの如き言議の存して、牢として動かすべからざる如く見ゆるものは、その文法學の源が、哲學者の手より生ぜしこ

とに照せば、有りうべき事に屬すといへども、從ふべき事にあらず。これらの點に於いては、吾人は十分に自由の地歩を占むるものといふべし。

以上の如くなれば、吾人の「き」「けり」の如きものも亦、嚴密にいへば、一旦經驗を經たるものにあらずば、これにていひあらはすことを得べきものにあらずして、經驗以外の事はいかに過去の事たる事が明確なりとも「き」「けり」にてあらはしうべきものにあらざる筈なり。これ外國語の法則に歴史的現在といふ苦しき説明を要するに至る點なるが、國語にてはかゝる自繩自縛的の説明は全然必要とせざるものなり。たゞこゝに前と反對の現象として一往注意すべきは、本邦の假名文の歴史が過去の事を記すに、この「き」「けり」といふ語を用ゐるもの多きがうち、往々その著者の經驗の範圍外の事にも及ぼせりと思はるゝ點なり。伊勢物語などの虚實半する物語はこれらの論の對象とするには價値なし。かの大鏡、水鏡などの類にこの現象あるは一往説明すべき必要あらむ。然れども、これらの文はすべてその語り手が、その當時に生れあひて、實地に經驗せしことを物語る由に結構せるものなれば「き」「けり」を用ゐたりとて經驗以外の事を記す精神にて用ゐしものにあらざることは明かなり。たゞかゝる史書の本邦にその數多きによりて、後遂に史實を記すに「き」「けり」を用ゐるを常とする如くなれるはかへりて一の變態なり。而してその變

態として著しきは神皇正統記の文なりとす。しかもその文も、すべて「き」を用ゐるにあらずして、主として各御一代の終りに天皇の御年齢をあぐる所等に特種の所にのみ存するはその變態たる由を暴露せるものといふべし、

「けむ」は過去の事實を想像するものにして、その成立は「き」と「む」との結合に基づくものと思はれ、意義も亦二者の結合せるものを以て考ふべし。これはその活用は「む」に同じく、終止、連體、已然の三活用形を有す。その活用形次の如し。

終止形	連體形	已然形
(行き)けむ	けむ	けめ

その用例次の如し。

涙川なに水上をたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり。（古、戀一）

變化の者にて侍りけむ身ともしらず。（竹取）

先世の芳縁も淺からずや思ひしられけむ。（平家、三）

人々の心のうちさそ嬉しくも又哀にもありけめ。

これは文語のみに用ゐ、口語には用ゐず。

「つ」は口語にてはその連用形の「て」のみ用ゐらる。而してその用法は文語のよりも更に汎くなれり。先づ文語にもある單に連用の意を强くするに止まるものゝ

例は、

夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に滿ちてゐる。
天地の大觀に覺えず、吾を忘れて眺めてゐたが、促し立てられて船に歸つた。
大きな虎が出て來てあれまはります。

かくてこれより一轉して形容詞の連用形につけるものは、

倫敦の冬は日が短くて霧が多くて誠に欝陶しう御座います。

などなるが、これは文語にもある如く、中間に「あり」のあるべきを省きて連用の意を強めたるものなり。さて又これより再轉して複語尾「ない」「たい」の連用形をうくることあり。その例

實戰に役に立たなくては何にもならぬ。
見たくて見たくてたまらないのだ。

これらも亦中間にあるべき「あり」を省きて連用の意を強めたるものなるが、この用例は文語になき所なり。

口語には又「たり」の變形せる「た」といふものあり。これの活用形次の如し。

未然形	連用形	連體形	已然形
(行き)たら	たり	た	たれ

その用法にはまた特別の現象あり。未然形の「たら」はそのまゝにて條件をあらはし、又「ば」をつけても條件をあらはすことあり。

遊んだら歸れ。

見たら見たといふさ。

書いたらば渡しなさい。

連用形の「たり」は同様の事を列擧するに用ゐらる。この場合には

さうしてしまひには大きなもとの木になつて、美しい花がさいたりうまい實がなつたりするでせう。

飛んだりはねたり騒いでゐる。

立つたりすわつたりする。

雨が降つたり風がふいたり静かな空が少い。

の如く二語以上を重ね用ゐるなり。然れども時として

若しかしてころんだりしてはいけないと思つたからです。

の如く、一語にのみ用ゐることあり。されど、これとても、言外にその並列せらるべき語を豫想せしむるものなりとす。連體形の「た」は終止としても連體としても用ゐらる。その終止としての例

五年前に東京へ來た。
ちよつと待つた。
連體形としての例
尖つた山。
犬見たやうなもの。
昨日紹介しておいた人が來たか。
已然形の例
昨日行つたれば居なかつた。
この「た」は「たり」の變形なること上述の如くなれど、意義は汎くして決定の外回想をあらはすものとしても用ゐらる。畢竟これは文語の「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」の代表たる如き觀ありとす。さてこの「た」につきて世には過去を示すものなりといふ說もあり。これは「き」「けり」の代用をもなす點もあれば、それをさせるものなるが、その過去といふものゝ無用なること既に說ける如くなるが故にその誤りなることといふまでもなきが、假に回想をあらはす意を過去なりといふことを容すとしても、この「た」がそれに止まらずして決定のみをあらはすことと
ちよつと待つた。

尖つた山。

光つたはさみ。

などの例にてさとるべし。この故にこれを過去をあらはすといふ如きは不當の説なりとす。

終止形に屬する複語尾は推量するものすべてにして、肯定の推量をなすもの(文語にては「べし」「べかり」「めり」「らむ」「らし」口語にては「らしい」)と打消の推量をなすもの(文語にては「まじ」「まじかり」口語にては「まい」)との二様あり。

この類の複語尾は文語にありては所屬に多少の異例あり。動詞には終止形に屬すれど、存在詞卽ち良行變格活用の語には連體形に屬す。又複語尾にても良行變格の形をなせるものにてはその連體形に屬するものなり。今これが動詞の終止形に屬する場合の例を三段二段の各活用につきてあぐべし。(四段一段は終止形と連體形と同じ形なればこの區別の見わけには直接に用ゐられず。)

明朝は早く起くべし。

此の處に塵芥すつべからず。

龍田川紅葉みだれて流るめり。

春たつ今日の風やとくらむ。

すまじきものは宮仕へ。

その良行變格の連體形に附屬する例。但動作存在詞には附屬することなし。

今十日の後なるべし。

かくいはれて恥ぢざるものはなかるべし。

さることはあるまじ。

今兩雄共に鬪はゞ勢必倶に全かるべからず。

天の力は無量にて、その秘密には際限あるべからず。

考察は長かるべく、決斷は速なるべし。

かく終止形に屬する場合と連體形に屬する場合との二樣あれど、その大多數につきて終止形に屬するを本體とし、連體形に屬するを例外の場合として本文の如く說く。さてこの良行變格に限りて連體形より接するは特別なる現象なれど、その良行變格の連體形といふものはその形は普通の四段活用の終止形と同じ形なれば音韻の方よりいへば、かへりて普通の例といふべきなり。卽ちいづれも「ウ」の韻の活用形より接するを以てなり。

なほ注意すべきことはこの類の複語尾を動詞の本體ことに二段三段の各活用につゞくる時に誤り易き二種の傾向あり。一は

この所に塵芥すてべからず。

決して御心配かけまじく候。

の如く連用形をうくるやうにすることなり。こは古くは鎌倉時代頃よりあるなれど、文語としては認めらるゝものにあらず。又一方にては

この事決して忘るゝべからず。

以後かやうの事はするまじ。

の如く連體形よりうくるやうにすることあり。これは四段活用、一段活用などは終止形も連體形も一なるが、上にいへる如く良行變格には連體形よりうくるが故にそれらを思ひうかべて知らず知らず、かゝる誤を起すに至るものなれば注意すべきなり。殊に注意すべきは二段活用の詞なり。これは連用形につくると連體形につくるとの二様の誤を生ずべければなり。又一段活用にては連用形より受くる形とする誤往々あり。(これは終止連體同様なれば、この點には誤なし。)その

例

上一段　みるべし(正)・みべし(誤)

　　　　みるまじ(正)　みまじ(誤)

下一段　けるべし(正)　けべし(誤)

けるまじ(正)　けまじ(誤)

このうち上一段活用の連用形より「べし」につゞくるものは奈良朝時代より平安朝の初頃までは用ゐられしものなり。されど、今は之を用ゐるはかへりて破格と認めらる。

「べし」は形容詞「くしき」と同じ活用をなす。その活用形次の如し。

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形
(行く)べく　べく　べし　べき　べけれ

「べし」の根本の意義は推量をあらはすにあり。その例

古寺の庭に紅つやゝかなるは若楓なるべし。

これより一轉して可能の意をあらはせるものあり。その例

以てその注意深きを見るべきにあらずや。

これより更に轉じてこれが適當なることを示すものあり。その例

事務をとるには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。

これより再び轉じその對者につきてその事をなすがよしと勸誘するが如き意をあらはしてこゝに義務を指定する意を示すものあり。その例

人は必ず道德を守るべきものなり。

この義務の存するを指定するものを世には往々命令をあらはすといへれど、それはたまたまその終止形の用例が事實上命令の用に供せらるゝことあるによるもののならむが、特に、その終止形の用例のみをとり出してその意を說き他を顧みざるが如きは活用を具有する語を取り扱ふべき正當の方法にあらず。況んや、これは本來の義務を指定する意は依然たるものをや。抑も語句の形式と實際の用とは必ずしも一致するものにあらず。文法はいづこまでも方式を主として論ずべきものなり。方式を顧みずして、たゞその用法意義をのみ論ずるときは何等の條理もなきに至るべし。

この「べし」は專ら文語に用ゐらるゝものにして、普通の口語には用ゐぬものなり。されど秋田縣の北秋田郡地方などには「ゆくべし」(行きませうの意)などいひて方言には存す。但しこれも終止形のみ用ゐらるゝなり。

「べし」の連用形なる「べく」は音便によりて「べう」となり、連體形なる「べき」は音便によりて「べい」となることあり。これらは主として平安朝の語に行はるゝものなり。その例

いひかへすべうもあらずあさまし。(堤、中語)

ほんいのいとしづかなるべい事のかたかべい事をなむいかさまにせましと

思ひ侍り。（宇都保、樓上）

この「べい」は關東、東北地方の方言の「べい」として終止連體に用ゐること今に存す。「べかり」は「べし」と「あり」との複合によりて成れるものにして良行變格の活用を有するものにして、その意義は「べし」に准じて知るべし。これは理論上よりいへば次の如き活用形を有するものなり。

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形

（行く）べから　べかり　（べかり）　べかる　べかれ

然れども、終止形の「べかり」といふを用ゐたる例を見ず。その他も活用形の用例多からずして古くより「べから」「べかり」の未然連用二形のみ多く用ゐられ、現今の普通文にては未然形の「べから」に打消の「ず」「ざり」を附屬せしめ「べからず」「べからざる」といふことのみ用ゐらる。その例

造次顚沛にも忘るべからざる訓言にあらずや。

縷々として絲綱を放つこと幾千萬條たるを知るべからず。

學生たるものよくこの言を味はざるべからず。

これらのうち「べからず」といひて所謂禁制をあらはすことあり。これ「べし」の肯定義務をあらはせるものに對してその反對を示せるものなり。

この「べからず」は現代の普通文に盛んに用ゐらる。かくの如きは「不可」といふ漢語の訓讀によりて傳へられたるものにして、漢文書下し文の普通文に及ぼせる影響の大なることを想ふべきよき證據なりとす。而してこれも口語には用ゐず。

「めり」は推量をあらはすものにして良行變格の活用に似たれど、未然形なし。その活用形次の如し。

連用形	終止形	連體形	已然形
(行く)めり	めり	める	めれ

その用例次の如し。

立田川紅葉みだれて流るめり。

鶯の花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさむ。

風のみこそ人に心はつくめれ。

「めり」の意は推量をあらはすこと既にいへる如くなるが、その推量の意味は「べし」よりも一層輕く、略一種の肯定とも見るべき勢の思想をあらはす。卽ち或る事柄を現に見てその實相を傍觀的に推定するにあり。この「めり」は古風なる語にして今日の普通文には全く用ゐることなく、たゞ擬古の歌文に用ゐるのみ。口語には勿論用ゐることなし。

「らむ」は豫想の「む」と同じく四段の不完全なる形を有して、終止連體已然の三活用形をなす。その活用形次の如し。

終止形　連體形　已然形

(行く)らむ　らむ　らめ

その用例次の如し。

秋はつる色のかぎりを見するなるらむ。

浮き寢ながらの草枕夢より霜や結ぶらむ。

まことにさこそは思しめされ候ふらめ。

これの意は多少の疑惑を含める推量をあらはす。なほ委しくいへば、それは純粹の疑惑的推量といふべきものにして、その事實の客觀的存在如何に拘らず、自家が想像推量する意をあらはす。この點に於いて「めり」とは對角線的の反對に立てり。この「らむ」は文語にのみありて口語には用ゐず。然れども、これの變形せる「らう」といふ形は口語にも存するが如し。たとへば、

退却が安全だらう

の「らう」の如し。然れども、これは或は「であらう」の約、即ち「であら」の約なる「だら」に「う」のつけるものならむも知られず。故に今はこれを省けり。然れども山口縣高知

縣鹿兒島などの方言に「あるらう」「面白かつつらう」などの如く用言又他の複語尾につけて用ゐらるゝものは明かにその「らう」なるものなり。(「あるらう」は文語の「あるらむ」「面白かつゝらう」は「面白かりつらむ」なり。)

「らし」は形の上に變化なくして終止連體已然の三活用形の用をなす。その例は終止形としての「らし」なり。

さよ中と夜はふけぬらし、雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ。

此河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし。

は連體形としての例なり。

ぬき亂る人こそあるらし、白玉の間なくもちるか袖の狹きに。

は已然形としての例なり。かく三形あれど、いづれも終止に用ゐたる例のみにして他の用法を見ず。而して、その「ぞ」の係に對するものは連體形「こそ」の係に對するものは已然形たること勿論なりとす。これが意は「らむ」に似て傍觀的に推量する意をあらはす。

「らし」は口語にては「らしい」となりて口語の形容詞に似たる活用を有す。但し已然形を缺く。その活用形次の如し。

連用形　連體形　已然形

(行く)らしく　らしい　らしけれ

かくの如く文語にては變化なきものなりしが、口語にては進歩して複雜になれり。これらの用例

何だか一茶までが痩せた人でゝもあるらしく思はれる。

勉强してゐるらしくない。

何か面倒な事があるらしい。

一里以上の路を往復するらしい一年生位の小兒の連立つて行くのも勇ましく心地よげに見える。

その已然形の「らしけれ」といふ形は普通には用ゐねど、時として用ゐるをきくことあり。この口語の「らしい」を文語の形になほして

らしく　らしき

などいふ事往々見ることあれど、これらは文語として古來存せぬものにして、近時の、文語と口語との見さかひのつかぬ人の妄りにつくれる誤れる語なりとす。又この「らしい」と紛れ易きものは體言又は副詞等を受けて形容詞をつくる接尾辭の「らしい」なり。これは

男らしい　豐年らしい

たしからしい　　　　わざとらしい

などの「らしい」にしてこの複語尾の「らしい」とは別なるものなり。

口語の「らしい」は又その連用形「らしく」より「あり」につけたるものを約めて「らしかつた」といふ形にすることあり。その例

兄上も大聲をあげて何か云つてゐるらしかつた。

「まじ」はその事實の存在せぬことを推量する意をあらはすものにして、形容詞「しくしき」の活用に似たる活用を有す。その活用形次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(行く)まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ

その用例

かばかりの事驚くにもあたるまじ。

よも忘れはすまじ、覺悟せよ。

これが連用形の「まじく」を音便にて「まじう」とすることあり。これは古く平安朝よりあり。この例

うけたまはりすごすまじうなむ。　　(宇都保、菊の宴)

又同じく連體形の「まじき」を「まじい」とすることあり。これらの形は鎌倉時代頃よ

りはじまれるが如し。その例

一引もひくまじいものをとひとりことばし居たる。（平家、七）

「まじ」の連用形「まじく」より「あり」につゞくるものが約まりて「まじかり」といふ形をなすことあり。この時には良行變格に似たる活用を有する筈なれど、その用ゐられたる活用形は未然形、連用形の二のみなり。

未然形　　連用形

（行く）まじから　　まじかり

その用例次の如し。

みかどにて子をもたらむもめでたくもあるまじからむ。（空穂、樓上、下）

叶候マシカラムニハ今ハ思死コソ候ナレトテ。（延慶本平家、二本）

なき跡まで人の胸あくまじかりける人の御覺かな。（源、桐壺）

返々モ人ハ世ハ有ハトテヲコルマシカリケル事カナ。（延慶本平家、三本）

これが意義は「まじ」と大差なきものなり。これは口語には用ゐることなし。

「まじ」に對する口語の複語尾は「まい」なり。これは形に變化なくして終止連體の二種の用をなす。その用例

とても間にあふまい。

又事實それに相違はありますまい。

以上は終止の例にして

讀むまいものでもない。

は連體の例なり。この「まい」は文語の「まじ」の變形したるものにして「まじ」より「まじい」となり「まじい」より「まい」となれるものと思はる。

第十六章　副詞

今こゝに副詞と稱するは現今のすべての文法家の所謂副詞とは一ならずしてそれらの所謂副詞と接續詞と感動詞との三者を含めるものなり。今その接續詞感動詞と稱せらるゝものにつきて概略の意見を述べむに、今日の文法家の所謂接續詞は西洋文典にいふ所の conjunction (接續詞と譯す)に該當するものにあらずして、かれらの conjunctive adverb (接續副詞と譯す)、或は half-conjunction (半接續詞)と稱するものに該當し、眞にかれらの conjunction に該當するものは實に「ば」「ど」「ども」「が」「に」「を」等の接續助詞なること既に日本文法論に詳論せる所なり。又今日の文法家の所謂感動詞は西洋文典の interjection (間投詞と譯すべきものなり)にあらずしてなほ一種の副詞たることは、その用法上の位置を以て見ても知らるべし。而、眞に

interjection といふべきものは謠物の囃詞等をさすべきなり。これらの事も亦日本文法論に詳述せる所なり。

以上の如くなれば吾人が副詞といへるはたゞその語をかりていへるのみにして、從來の文法家の副詞とは範圍を異にせるものなるのみならず、その性質も意義も異なりとす。卽ちこゝに副詞といへるは副用語たる品詞の義にして、語又は思想及び文の裝定をなすが爲に、それにたよりて用ゐらるゝ單語をさせるなり。

副詞は語形に變化なく、常にその依りて立つべき語句の前に存するものなりとす。副詞はかくの如く語形に變化なくして、しかも觀念をあらはす語たるを以て從來往々體言と混同せられたり。されど、體言といふは文句の骨子たるべき概念をあらはせるものにして、この副詞は常に依存觀念をあらはすものたるを以て明かに二者は區別せられざるべからず。實に副詞はその觀念を具體的にあらはしうることは體用二言に同じけれど、直接に文の骨子となることなし。卽ち副詞は本質上體言の如く、呼格主格に立つことなく、又用言の如く述格に立つことなし。而して必ず他の自用語卽ち體言又は用言の先在を條件とし、それに依りて存立するものにして文の構成に關しては意義上、用法上第二次的のものたるなり。

次に副詞は常にその依りて立つべき語句の前に來るものにして、これ卽ち富士

谷氏の所謂「かざし」の特性たるなり。この點に於いては助詞の必ず下に附屬すると全く趣を異にするなり。勿論倒置法によりて特にその下に移されたるものなきにあらずといへども、それらはその本來の用法に溯りて考ふれば、即ちその前に立つものたることを明かに認めざるべからざるなり。

副詞のよりて存する對象は或る語なることあり、又或る文句なることあり。この故にその對象を基として分くれば、語に依存するものと、文句に依存するものとの二に別つことを得べし。然れど、單にこれのみを以て區別の基準とするときはその語の意が下なる語句のみに關するものと、それより前にあらはれたる語句の意を下の語句に連ねて意義上二者を媒介結合するものとの二に分つを得べし。今先づ種々の空隙を生ずべきによりてなほ他の方面よりも觀察する必要あり。今甲を假りに先行の副詞といひ、乙を接續の副詞と名づくべし。

先行の副詞は又これをある文句に先行するものと、ある語に先行するものとの二に分つことを得べし。そのある文句に對して先行をなすものとは

いな、これは余が所有なり。

うべ、かくや姫のこのもしがりたまふにこそありけれ。

あはれ、おもしろき月夜かな。

などの如く、次に來る文句の全體の意義を導くものにして、これらはその文句の思想を概括してその要を豫め示して、いはゞ次に來るべき文句全體の縮圖たるなり。これらは應答諾否の語と感動をあらはす語との二種を含む。今これを假に名づけて感動の副詞といふ。

ある語に先行する副詞とは普通に用言に對してその示せる屬性又はその陳述を裝定するものと認めらる。然れども時として體言に依り、これを裝定することあり。從來の說にては所謂副詞の職能は用言の修飾をなすものとしたり。しかれども、吾人のいふ所の副詞は adverb の義にあらずして副用語たるものゝ義なれば、副次的に用ゐらるゝもののすべてをさす。隨つて語に先行する副詞といふものの用法は用言に對してその示せる屬性又は陳述を裝定することを主たる點とはすれども、それよりもひろく、時として、體言の裝定をもなすことあり。この時には助詞「の」を伴ふを常とす。これらの事は從來の文法家殆ど說けるものなし。次に二三の例をあぐ。

かりそめのかくれがとはた見ゆめれば。（源、夕かほ）

やんごとなきまづの人々おはすといふことはよしなきことなり。（源、若菜）

おほかたの海を見るにも。　（古今六帖）

山里のまれの細道あと絶えてまさきのかづらくる人もなし。（堀川初度百首）

などてか梅つぼは今はとありともかかかりとも必の后なり。（榮花）

うたての仰候ふや。（謠曲高砂）

折角の合戰二十餘箇度なり。（保元）

かやうに隨分の勇士共もわろびれて進み得ず。（保元）

かくの如き例甚だ多し。從來の文法家はかく副詞にて「の」を伴ひて名詞の修飾をなすことを文法を破れるものとして一切之を排斥し、

性質溫厚の者　　必要の物

などいふべからず。必ず

性質溫厚なる者　　必要なる物

とすべきものなりといへり。然れども、吾人の副詞の特性はそが副次的の性を有すといふに止まりて、西洋の副詞の如く、用言の修飾のみをなすといふにあらざること既に述べたる如し。

語に依存する副詞は又これを大別して屬性の裝定をなすものと陳述の裝定をなすものとの二とするを得べし。この二別は用言に屬性と陳述の力との二要素の存する事實に並行するものなり。從來の說にては副詞の職能は用言の修飾をなすものとしたり。然れどもそはその職能の全體にあらざること前に述べし如くなるが、同じく用言を修飾すといひても、その普通の用言に屬性と陳述との二者の合併して存在せるものなるを注意せざるを以て副詞の研究は甚だ粗雜なるものなりき。用言は一面に於いて屬性觀念をあらはし、一面に於いて陳述をなすものなり。かくて用言に關する方面より見れば副詞にもこの屬性の裝定をなす性質のものと、陳述の裝定をなす性質のものとあり得べき筈なり。屬性の裝定をなすものは普通に所謂副詞の大部分にして

遙に遠く見わたされて

甚だ高き山

の「遙か」「甚だ」の如きこれなり。陳述の裝定をなすものは

けだし彼は行きたらむ。

もし汝行かばよろしく彼に告げよ。

今は逃ぐともよもにがさじ。

をさをさ出でまじらひたまふことなし。

の「けだし」「もし」「よも」「をさをさ」の如きものこれなり。これらは下にある用言のあらはす屬性には關係なくしてその陳述の斷言的なるか、躊躇的なるか、否定的なるか、或は條件的なるか等それら陳述の態度を豫め拘束するものにして、これらに應ずる用言は必ず陳述をなすべくして、その陳述の方法にも一定の約束あり。卽ち「けだし」といへば、推測の語氣を要し「若し」といへば假想の語氣を要し「よも」「をさをさ」にては打消の語氣を要するが如し。而してこれらはこの用法屬性の修飾をなす副詞とは頗る趣を異にするものあるなり。今これを一類として陳述の副詞といふ。

さてその屬性を裝定する副詞につきて見るに、これにも亦二種あり。一はそれ自身が、或る屬性觀念を具體的に有するものなり。たとへば、

あきらか　つまびらか　はるか　ほのぼの　ちらちら　からり

漠然　混沌　靜肅

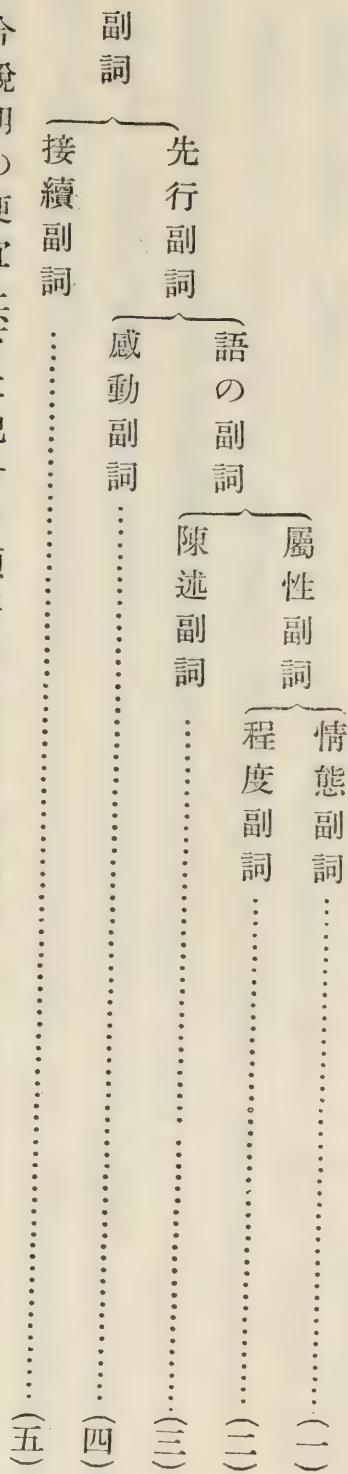
の如きものにして、自ら屬性をあらはし、かねて、屬性の修飾をなしうるものなり。今これを情態の副詞といふ。一は

甚だ　最も　頗る

の如く意義としては單に程度をあらはすものにして專ら他の屬性をあらはす副

詞又は用言に屬してその屬性の程度を示すに用ゐらるゝものなり。今これを程度の副詞といふ。

以上の如く副詞はその性質と職能とよりして之を接續の副詞、感動の副詞、陳述の副詞、情態の副詞、程度の副詞の五に分つ。その分類の經過次の如し。

- 副詞
  - 先行副詞
    - 語の副詞
      - 屬性副詞
        - 情態副詞……………………（一）
        - 程度副詞……………………（二）
      - 陳述副詞……………………（三）
    - 感動副詞……………………（四）
  - 接續副詞……………………（五）

今説明の便宜上、下に記せる順序によりて各説を下すべし。

副詞は助詞の助けをからず、單獨にて用ゐらるゝあり。たとへば

しばし　あだかも　やがて

の如きこれなり。又助詞の助けをかりてその職能を完うするものあり。この場合にその助けとして用ゐらるゝ助詞は「に」「と」又は「の」なりとす。この「に」「と」及び「の」はいづれも格助詞なるが、格助詞の中この三種の助詞のみは副詞に從へども、他の格助詞は決して副詞に從ふことなし。何が故にかゝる現象の存するかと考ふる

に「に」「と」は用言に對して修飾格若くは賓格に立つものを示し、副詞に從ふ「の」は體言に對して連體格に立つことを示すものなるが、修飾格、賓格、連體格共に從屬性の位格にして副用語の用ゐらるべき位格たるが故なり。その他の位格即ち主格、補格等は體言の如く、自用語にのみ存する位格たればなり。

副詞が連體格に立つときは「の」といふ助詞を伴ふべきを普通とするが、その事は既にいひたれば今再びいはず。副詞が「に」「と」を伴ふときは主として修飾格に立つものにして、まゝ賓格に立つ場合もあり。而して修飾格に立つものは既にいへる如く助詞の助をからぬものもあり。又助詞の助をかるものもあるが、それらの間の徹頭徹尾助詞の助をからぬものゝ事は上にいへるが故に今說かず。その助詞の助けをかるものにつきて見るに、これに又二樣あり。一は助詞の助をからずしても用ゐられ、又時としては助詞の助によりても用ゐらるゝ性質のものにして、一は常に助詞の助をかりてその用を完くするものなりとす。

助詞の助けを或は借り、或は借らぬ副詞とは次の如きものなり。

いさゝか(に)　さすが(に)　たまさか(に)　たちまち(に)　あながち(に)

つやつや(と)　はるばる(と)　ほのぼの(と)　すらすら(と)　つくづく(と)

その用例の一二をあぐれば、

その由いさゝかものにかきつく。（土佐日記）

雨いさゝかにふりてやみぬ。（土佐日記）

熊野川くだす早せのみなれさをさすがめなれぬ浪の通路。（新古今、神祇）

をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづのゆふぐれの聲。（新古今、雜上）

おほよそかく程の事にておはしましけるをつやつやしりたてまつらず。（著聞集、七）

此馬大和國の家のかたへ行けり。つや〳〵としらずしてはるかに歸りにけり。（著聞、十六）

からころもきつゝなれにしつましあればはるはるきぬるたびをしぞおもふ。（伊勢語）

はるはると雲ゐをさしてゆく舟の行末遠くおもほゆるかな。（拾遺、雜賀）

今の口語にもかゝる例頗る多きなり。かゝる場合には單獨に用ゐる場合と助詞を添へて用ゐる場合とに於いて意義職能の上に多少の差異を來すを常とす。卽

ち助詞を添へたる方は助詞を添へぬ場合に比しては意義の上にもその職能の上にも深く關係を及ぼせるものとなるが如し。

助詞を伴ふを常態とする副詞にありても、又上の如く時ありて助詞を伴ふ副詞にありても、そが修飾格に立つとき「に」「と」の一方のみを伴ふものあり。又「に」「と」の二者を伴ひうるものあり。その「に」のみを伴ふものは

かりそめ　まれ　つと　おろか　つまびらか　のどか　まめやか

の如き語にして「と」のみを伴ふものは

がは　はつし　はた　ちらり　からり

の如き語なり。かくの如く「に」「と」の助詞の所屬の區別ある所以はその語の意義の差に基づくものにして「に」「と」は又それ〳〵本性的の意義用法を有し、それに相當するものに屬するなり。これらの事はなほ下にいふ事あるべし。次に「に」「と」二者を伴ひうるものは次の如きものなり。

宮木きる小野のかはらを見わたせば目もはる〳〵に淺綠せり。（好忠集）

いといたくあれて人目もはる〳〵と見わたされて。（源、夕顏）

ふつに思ひすてけるはうらやましき心もちなり。（父子相迎）

さま〳〵　かたらへどふつ<u>と</u>いらへもせず。（發心集）

これらの場合も亦「に」「と」の屬する差によりてその意義用法の上に多少の差異あるものとす。

すべての副詞は文語と口語とによりて用ゐる語の差異あることあれど、文法上の法格に至りては差異なきものとす。

情態の副詞は意義上よりいへば、それ自身に具體的の觀念ありて事物の屬性をあらはすものにして、その觀念のみをいはゞ形容詞に似たるものなり。たとへば

あたゝか　しづか　たひらか　たをやか　なめらか　にこやか
ねんごろ　はるか　ほのか　からから　さわさわ　しづ〳〵
はら〳〵　ひら〳〵　ほの〳〵　さらり　からり　すらり

等の如きこれなり。

情態の副詞はかく意義に於いて形容詞に似てありながら、なほ副詞なりと稱せらるゝは陳述の能力の缺けたるによる。而してこれらは屬性觀念を屬性本來の性質のまゝ依存的のものとしてあらはすが故になほ體言たること能はずして依存的に他の觀念語を裝定するにのみ用ゐらるゝなり。

情態の副詞はそのまゝにて用ゐられ、或は助詞「に」「と」を伴ひて用言の屬性を裝定

するを主たる職能とし、又稀には助詞「の」を伴ひて名詞の裝定をなす。

情態の副詞のそのまゝ用言の屬性を裝定せるものゝ例。

たまさか人の來ることとあり。

童しぶ〳〵法師になりにけり。

椿はぼたり〳〵落ち落ちて地も紅なり。

助詞「に」を伴ひて用言の屬性を裝定せるものゝ例。

靜かに立ちて窓の戶を開く。

徐に之を處置せむ。

懇にいたはりてかへらしむ。

助詞「と」を伴ひて用言の屬性を裝定せるものゝ例。

いたくあれて人めもなくはる〳〵と見わたされて。（源氏、夕顏）

する〳〵と木にのぼりたり。

かくて同じ副詞にして助詞を伴ふ場合と助詞を伴はずして單獨に裝定する場合とは意義の上に少差あり。即ち單獨に裝定するものは主たる用言につきてその意義を裝定する程度、助詞を伴へるものに比して稍薄きなり。即ち助詞を伴へるものは主たる用言に關係すること頗深きなり。そは次の例を比較して知るべ

し。

空のけしきもいとはれ〳〵しく心のどかにうら〳〵ゆかしげなり。（榮花、木綿四手）

春の日のうら〳〵にさしてゆく舟はさをのしづくも花とちりけり。（源氏、胡蝶）

つや〳〵魚とるすべもしらねども。（著聞集）

つや〳〵としらずしてはるかにかへりけり。（同　）

アナカチカクナ思ソ敎盛サテアレハサリトモ少將ヲハ申預ムスルソ。（延慶本平家、二本）

サレトモ今御成敗有ヘキ由被仰下之上ハ衆徒强チニ被成嗔哉トテ。（同　一本）

この類の副詞の助詞「の」を伴ひて名詞の裝定をなせるもの丶例は既にあげたれば今示さず。

情態の副詞には本來の國語なるものもとより多けれど、又漢語より借用せるもの頗る多し。國語本來の情態の副詞は具體的に觀念をあらはすものとたゞ形式的にいふものとあり。形式的のものとは「さ」「と」「かく」「しか」等にして汎く狀態をあら

はしてその實質の如何は前後の關係により任意に補ひて考ふべきものなり。これがうち「さ」は口語にては「さう」「かく」は「かう」となり「しか」は口語には用ゐず。

具體的に狀態をあらはす國語本來の副詞は又觀念的にいへるものと外貌的にいへるものとあり。この觀念的のものは助詞「に」を伴ひ、外貌的にいへるものは助詞「と」を伴ふを以て意義上外形上區別を認むることを得るなり。

たしか　おもむろ　あきらか　しづか　なめらか　にこやか

等は「に」を伴ふべき性質あり。この「に」を伴ふべき性質のものは、その觀念は特に形容詞に近くして、多くのものは、少しく之を變形せしめて語尾を活用せしむる時に形容詞に化せしむることをうべし。たとへば、

あきらか゜―あきらけ゜し゜
しづか゜―しづけ゜し゜
なめらか゜―なめらけ゜し゜
さやか゜―さやけ゜し゜

の如きこれなり。次に「と」を伴ふべき性質のものは

きら〳〵　はら〳〵　つく〳〵　つや〳〵　はつし　さつ

の如きものなり。

漢語より借用せる情態副詞も亦その意義の如何によりて或は「に」を伴ひ、或は「と」を伴ふ。その「に」を伴ふべき性質のものは大體その意味よりして國語の形容詞に譯しうべきものに多しとす。それには二字の熟語たるもの最も多く、

奇異　奇怪　敏捷　自然　勇猛　活潑
精密　正確　激烈　緩漫　澹泊　姑息
因循　懦弱　狡猾　善良　溫厚　篤實
偉大　雄渾　明白　高尙　悲壯　滑稽

又一字のもの少しとせず。

優　苛　切　便　簡　賢　愚　大　小
美　醜　妖　快　粗　密　幽　敏　勇

の如き皆これなり。

次にその「と」を伴ふべき性質のものは雙聲、疊韻、疊字及び「然」「焉」「乎」「如」「爾」「若」等を下につけたるものに多しとす。而、これらは漢語にても從來形容の語と稱せられしものにして、主として事物の外貌を形容するものなり。

雙聲は二字よりなる語にして、その語を組立つる二字の子音を同じくす。即ち日本語的に說明せば同行の音を頭とせる語の重なりたるものなり。その例

浩汗(カウカン)　倉卒(サウソツ)　參差(シンシ)　瀟洒(セウサイ)
悽愴(セイサウ)　忸怩(ヂクヂ)　繽紛(ヒンフン)　髣髴(ハウフツ)
淼茫(ベウハウ)　茫漠(バウバク)　澎湃(ホウハイ)　陸離(リクリ)
淋漓(リンリ)　凛烈(リンレツ)　劉亮(リウリヤウ)　玲瓏(レイラウ)

疊韻は二字よりなる語にして、その語を組立つる二字の韻を同じくす。即ち日本語的に説明せば同段の尾音を有せる語の重なりたるものなり。但し、音韻に古今の變遷あるが故に今の韻を以てすれば、全く同じ韻ならぬもの少からず。又、本邦に來りて後、音のくせによりて多少變りたるものもなきにあらずといへども、それらの點は今論ぜず。その例

靉靆(アイタイ)　崔嵬(サイクワイ)　嵯峨(サガ)　婆娑(バサ)
倉皇(サウクワウ)　茫洋(バウヤウ)　窈窕(エウテウ)　朦朧(モウロウ)
燦爛(サンラン)　爛漫(ランマン)　紛紜(フンウン)　嬋娟(センケン)
聯綿(レンメン)　淅瀝(セキレキ)　赫奕(カクヤク)　潑剌(ハツラツ)

疊字は同一の文字を重ねたるものなり。その例

藹々　悠々　皓々　赫々　巍々　蒼々　颯々　嘖々
蠢々　昭々　蕭々　蕩々　淡々　遲々　沈々　點々

嫋々　得々　霏々　飄々　漫々　朗々　縷々　碌々

この疊字を更に重ねたるものあり。その例

侃々諤々　切々偲々　戰々兢々　明々白々

「然」を下に践めるもの丶例次の如し。

藹然　悠然　蔚然　慨然　愕然　欣然　渾然　嶄然

燦然　泰然　超然　漠然　漫然　默然　瞭然　凜然

「乎」を践めるもの

茫乎　凜乎　確乎　昭乎　浩乎　溫乎　澹乎

「如」を践めるもの

皎如　紛如　突如　豁如　欣如　淡如　躍如

「爾」を践めるもの

莞爾　率爾

「若」を践めるもの

瞠若　沛若

又疊字のものを更に「然」「焉」「乎」「爾」「如」の上におきて用ゐるものあり。

「然」を践めるもの

紛々然　茫々然　悠々然　蠢々然　莫々然　颯々然　巍々然　昭々然
得々然　嘖々然
「焉」を践めるもの
浮々焉　縷々焉　巍々焉　淡々焉　兢々焉
「乎」を践めるもの
蒼々乎　昭々乎　茫々乎　斷々乎
「爾」を践めるもの
洋々爾　颯々爾　蠢々爾
「如」を践めるもの
欣々如　皎々如　夭々如
又一字なるもの少からず。次の如きこれなり。
殷　節　眇　恍　凜　赫　茫　寂　漠　儼　紛　寥　鬱
情態の副詞は既に述べたる如く、その意義に於いて形容詞に似たるものにして
たゞ陳述の能力の存在せぬものなるが、今これに說明存在詞を結合すれば相合し
て一の用言の如き用をなすに至る。これその陳述の能力は存在詞によりて附與
せられたるによるなり。それらの例次の如し。

偉大なり。　暖かなり。
漠然たり。　藹々たり。

かくてこれらは助詞「に」を伴ふべきものは「なり」を伴ひ、助詞「と」を伴ふべきものは「たり」を伴ひ、相合して形容詞に似たる意義と用とをあらはすものなり。かゝる場合にはその副詞は、修飾格に立てるものにあらずして賓格に立てるものなりとす。情態の副詞が用言を裝定する時にはその用言が陳述をなせる時にも、又連體格に立てる時にも準體言たる時にも裝定をなしうるなり。たとへば、

空俄にかきくもれり。
俄にかきくもれる空のさまたゞならず。
空の俄にかきくもれるは驟雨のふらむとにや。

の如し。かゝる現象の存するは、これが裝定の對象が、その屬性にありて、陳述の方法に關係なければなり。この點はこれが屬性の副詞たる所以にして、陳述の副詞と全く相容れざる特性なりとす。

程度の副詞は情態性の屬性の程度を示すものにして情態の意を有する用言及び情態副詞の上にありて、その屬性を限定する性を有す。この類の副詞は「いと」「やや」「甚だ」「頗る」「もつとも」「たゞ」の如き語にして、屬性の限定をなすを本性とす。而して、

これらは專ら狀態をあらはす語に附屬して之を限定するものにして、動作には關係なしと見ゆ。この例

甚だ高し。

の「甚だ」は高きことの程度を示し、

いと遙に見ゆ。

の「いと」は遙かなることの程度を示し、

頗る遠き處なり。

の「頗る」は遠さの程度を示す。これらいづれもその下なる語の屬性を限定するが故に、その下なる語が、如何なる用法に立つ時にも用ゐらるゝものなり。即ち

頗る遠し。頗る遠けれど。頗る遠く見ゆ。頗る遠き處。

のいづれにても可なるが如きこれなり。これその語の示す屬性にのみ關するが故なり。かくて上例の如くこれを情態の副詞の上に重ねて之を修飾することあり。この時も亦それが屬性を修飾せるなり。

世に行はるゝ文典に往々副詞は又他の副詞を限定することありといふ如く漠然たる說明をなせるものあり。これは程度の副詞の特性を認識せぬものゝ言にして、かく他の副詞を限定しうるものは程度の副詞に限られたる現象にして、情態

の副詞には存せぬ特性なり。而して副詞が又他の副詞を限定すといへるは多くは英文典などの說明を直譯流に傳へたるまでのものと見ゆるが、かれらの語にありてもかく用ゐらるゝは程度の副詞に限らるべき筈のものなりとす。

この類の副詞は自ら屬性をあらはすことなくして屬性の修飾をなすが故に、情態の副詞に比しては第二次的のものとす。從つて情態の副詞の如く、說明存在詞に結合して用言の如き用をなすことなきなり。

程度の副詞は體言の直上にありて之を裝定してその意を限定することあり。これは方向、距離、關係、數量等をあらはす體言の直上に「の」助詞なくして裝定するものなり。たとへば

稍北　　最も東

今一つ　只一人

の如きこれなり。これこの種の副詞の一の用法にして、他と異なる點の一なり。

陳述の副詞は述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の實質上の意義卽ちその示す屬性には關係なく、この陳述の方法のみを裝定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には裝定することなきものなり。この點は上の二類と全く性質を異に

するものなり。これに屬するものは

若し　蓋し　豈に　必ず

の如きこれなり。而してこれらはそれに對する述語に一定の方式を要するものとす。

陳述の副詞はその述語の狀況よりして分ちて述語に斷言を要するものと疑惑假說を要するものとの二に大別することを得べし。これらの區別は文法上一々例示する必要なきものなれど、初學の便宜の爲に次に少しく說くべし。

述語に斷言を要する副詞はこれに對する述語が疑惑假設にわたらぬ陳述をなすべきものをいふ。この類の副詞に對する陳述は常に斷言の形式をとるを要するものなるが、之を肯定を要するものと打消を要するものとの二に分つを得。又他の方面より見て、强めたる意を要するもの、決意を要するもの、比況を要するものの三に分つことも得るなり。今それらの例をあぐべし。

一、肯定を要するもの

かならず　もつとも　是非　まさに

二、打消を要するもの

いさ　え　さらさら　つやつや　つゆ

この類に制止をあらはすものあり。

ゆめ

三、强めたる意をあらはすもの。述語はその意によりて肯定又は打消をなす。

いやしくも　さすが

四、決意をあらはすもの。同上。

是非　所詮

五、比況をあらはすもの。同上。

恰も　さも

述語に疑惑假說等にわたるものを要する副詞は疑問反語の如く、述語に疑問の語を要するものと、推測をあらはすものと、假設假容など述語に假設條件を要するものとの三種に分つを得べし。その例

一、述語に疑問の語を要するもの。そのうち

など　なぞ　いかゞ

などは疑問をあらはし、

あに(豈にまた偉ならずや)　いかで

等は反語を要す。

二、述語に推測の語を要するもの。

けだし　よも　をさ〳〵

このうち「けだし」は肯定をも否定をも導くものなれど、「よも」「をさ〳〵」は必ず打消を要するものなり。

三、述語が假設條件を要するもの。このうち

もし（もし假睡せば夢も亦緣ならむ。）

は假設を要し、下に接續助詞「ば」を要す。

たとひ　よし

等は假容を要するなり。これも下に接續助詞「とも」「ば」などを要す。

感動副詞は感動したる時の氣持又は誘ひ、呼掛等意志の發表の前提をあらはすものにして、文句の組立の上には形式上の拘束のなきものなり。世には感動詞の目のうちに感動をあらはす終助詞等を含ませたることもあれど、それらは助詞の性質を具し、これらは副詞の性質を有するものにして、一列に說くことを得るものにあらねば、その間に區分を立つるを穩當なりとす。

感動副詞は之を二に分ちて見るを得べし。

一は驚愕、嗟嘆等感情をあらはせるものにして

あゝわが思ひは足り、わが心は樂し。

あら面白の歌や。

あはや舟覆らんとしぬ。

の「あゝ」「あら」「あはや」の如きをいふ。「あ」「あな」「あはれ」等これに屬す。一は誘ひ呼掛等意志の傾きをあらはせるものにして、

いで目にものみせてくれむ。

やよやまて、山ほとゝぎすことづてむ。

すはや敵こそせめきたれ。

の「いで」「やよや」「すはや」の如きをいふ。「やあ」「いかに」「やよ」「いざ」「すは」等これに屬す。

接續副詞は上下の語を連ね、又は上の文句の意をうけて、下なる文句を修飾する用をなすものなり。こゝに接續副詞といへるものは既にいへる如く、從來の文典にては接續詞と稱せらるゝものなるが、我國にて純粹にかれの conjunction に當るものは下にいふ接續助詞にして、こゝにいへるものは彼の所謂接續副詞 conjunctive adverb と稱するものに似たるものにして、純粹の conjunction にあらざることは既に日本文法論第一部第二章二ノ六「接續詞について」の條にて詳論せり。若し又假りに以上の諸語を接續詞と稱すとしても純粹に接續詞と稱せらるべきものは

甚だ少く、純粹なる國語にては一も接續詞と名づくるに足るべきものなきなり。たゞ接續詞と稱すべきものを强ひて求むれば「及び」「並びに」の二語なるが、これらは「及」「並」等の漢字を直譯する爲に動詞の連用形を轉用せる不純なる國語なり。「また」は「又」「亦」の字をよむが、漢字の「亦」が副詞なる如く副詞を本來の用とす。「且つ」も本來副詞にして之が接續詞的に用ゐらるゝは漢文直譯より來れるものなり。「はた」も亦然り。「しかし」「たゞし」は「しか」「たゞ」といふ副詞に助詞「し」を添へたるものにして自然に接續的の用をなせど、それとても副詞の用をなすをその見方よりしてかくいふにすぎず。とにかくに國語には純粹の接續詞といふ觀念語なきは事實なり。

接續副詞は之を用法上より分類するときは二の類となる。第一は語と語との中間に入りてこれを結合するものにして、

欅は建築及び器具の料に使用せらる。

見わたす限り山又山。

ますゝゝ學問を勵み、又其の身の行を愼めり。

庭はたゞ三坪。誰かいふ狹くして且つ陋なりと。

の例の如きこれなり。第二は文句の冒頭にありて前文の意を受けて後文の意を誘起する用をなすものなり。

もつとも、是非にと御強申す次第には御座なく候ふ。

また、同じ年の六月の頃俄に都遷り侍りき。（方丈記）

そもそも、吾朝に白拍子の始まりける事は昔鳥羽院の御時に島の千歳、和歌の前是等二人が舞出したりける也。（平家、一）

但し、婦人はこの限りにあらず。

第十七章　助詞概說

助詞は用法上獨立するものにあらずして、他の品詞卽ち體言、用言、副詞に附屬してそれらを助くるものにして、意義の上より見れば、その附屬する語の文法上の地位を明かにし、同時にその助詞の有する所の意義を以てそれらの語の一定の職能若くは一定の意義を明かにするものなり。今その一二をいはむ。體言、用言などは主要なるものなれど、それらの集まりたるのみにては十分の意味をあらはし得ざること多し。たとへば

我　汝　愛す。

といひたるのみにてはその意味十分に明かならず。今之を

我は汝を愛す。

若くは
　汝は我を愛す。
とせばその意明瞭になり、愛する人と愛せらるゝ人との關係明かになるべし。しかもその「を」の所屬如何によりてその關係正反對になるものあるを見れば、助詞が他の語を助くといふ事が、語法上重大なる意味を有するものなるを見るべきなり。
　助詞は上の如く他の單語を助くるを本來の職能とするものなるが故にかく名づけたるなり。こゝに助詞と名づくるものは從來「てにをは」といへるものゝ大部分なり。然れども、元來「てにをは」といへるは古くは國語の語法といふ程の汎き意を有し、近世にても複語尾助詞を總稱せる名目に用ゐられしものにして助詞のみをさせるものにあらず。この故に本書は助詞といふ名を以てこの一類を一括せるなり。
　助詞は形に變化なく、概ね一音にして、稀に二音又は三音等より成るものあり。
　助詞は他の品詞に附屬し、それによりそれら助けらるゝものゝ文法上の價値職能意義等を明かにするものにして、必ず助けらるべき語の下に直に接すべきものなり。この事は平凡なるが如くなれど、大切なる事にしてかくの如き特性は他の品詞と異なる點の主なるものなり。

助詞は一面は英文典などの前置詞(preposition)に似たる點あれど、彼れよりは範圍廣く、用法も種々なり。而してこの助詞の存在は卽ちわが國語の特性の主要なるものにして、支那語又は英、佛、獨の諸國語などゝの相違の主要點こゝに存す。言語學者は世界の言語をば形態上より分類して三とせり。一を孤立語(isolating language)といふ。これは單語に形式上の變化なく、主としてその位置によりて文法上の關係をあらはすものをいふ。支那語その標本なり。二を屈折語(inflexional language)といふ。これは語中に起る音の變化卽ち屈折を以て文法上の關係を示すものにして、印歐語これなり。三を粘着語(agglutinative language)といふ。これは文法上の形式をあらはす短き語ありて之を他の語に屬せしめて使用するものにして「ウラル、アルタイ」語族全般にこの現象あり。わが國語も亦これらのうちに包含せらる。されば助詞の存するは卽ち粘着語に共通の現象たるものにして、これ支那語、英、獨、佛等の語と國語との大に趣を異にする點實にこゝに存すといひつべし。而、西洋人などのわが國語を學ぶ時に最も困却するは實にこの助詞にありとす。

助詞は他の三種の觀念語が運用せらるゝにあたりて、他の語との間に生ずる種種の關係の概念又はそれらの觀念語の用法上生ずる思想上、文法的の種々の形式を抽象したるものにして、その意は著しく抽象的、形式的のものにして、獨立しては

具體的の觀念を認め難きものなり。されども、その抽象的の文法上の形式概念はすべての語に對して共通し、しかもそが形の上にては遊離せる語としてあらはれたるものにして、複語尾の如く、他の語の形體上の一部分と認むるを得ざるものなり。この點に於いては、西洋語の冠詞、前置詞などが單語と認めらるゝと同様の程度に於いて單語たるなり。今余が分類四種の品詞をその具體的より抽象的に進む程度によりて次第せば、

體言　用言　副詞　助詞

の如くなるべく、副詞に於いては既にいへる如く、依存的のものとなりたるが、助詞は一層それよりも抽象的形式的になれるものなり。然れども、單語たることを失はず。その單語たることを失はざる所以は、文法上他の品詞と對立するに足る職分、寧ろ、他のものが助けらるゝ地位にありてこれが助くる地位にあるを以てなり。即ちこの點より見れば、文法上能動の地位に立ち、他の品詞はかへりて助詞に左右せられてはじめて文法上の職能地位を確保するを得るものなり。されば、これを觀念よりいへば、助詞は他の補助たるに止まる如くなれど、職能よりいへば、他の語が助詞の助を乞ひてはじめてその地位を保ちうることを見る。されば、これらは決して他の品詞以下の價値を有するものにあらざるを知るべし。

上に述べたる如く助詞の文法上に有する價値は甚だ大なるものにして、用言の活用複語尾と相待ちて、わが民族の言語操縱上の樣式、又他の方面よりいへば、わが民族の思想運用上の樣式を網羅して言語にあらはしたるものといふべくして、これら用言と助詞とを十分に研究せば、逆に日本民族の思想上の傾向等をも推究し得べきほど重要なるものなり。そのうちにも助詞はことに重要なるものにして、これによりてよく文法上の關係の微妙なる差別を示しうべし。かの古より人口に膾炙する發句

米洗ふ前に螢の二つ三つ。(死)

米洗ふ前を螢の二つ三つ。(活)

に於いて「に」と「を」とによりて死活の差ありといふ俗說も一面の眞理はやどれるなり。この故に若しこれが用法を誤るときは一文章をあげて支離滅裂ならしむるに至り、之を巧妙に使用するときは人をして眞に會心の作なりと感ぜしむるに至る。されば和歌發句などの巧拙は助詞の用ゐ方の如何に基づくこと多し。助詞の研究はかく重要なるに關せず、從來の研究は概して正鵠を失せり。これその研究の方針を誤りしに基づけりと考へらる。

助詞の性質を研究するには先づその分類より出發せざるべからず。さてその

分類をなさむには先づその分類の規準を定めざるべからず。抑も助詞の助詞たる所以は實に他の品詞に附隨してそれらの關係と文法上の職能とを明かにする點にあればこれが分類の規準も亦それらの示す關係とその示す文法上の職能とに存せざるべからざること當然なり。然るに從來多くの學者の之を研究せしに關せず、この學の進步の遲々たりし所以は、その職能上の研究を疎略にし、單に意義の研究に沒頭したりしもの多かりしが故なり。今吾人は助詞の分類の規準としては主としてその職能卽ち他の品詞に伴ひて用ゐらるゝ狀態とその示す關係の如何との二點にありと認め、それに基づきて研究を施して以て、助詞をば格助詞、副助詞、係助詞、終助詞、間投助詞、接續助詞の六類に分てり。次にその理由を說くべし。

今一切の助詞を通觀するに、その示す關係の狀態に於いて著しく異なる二樣の種類を見る。一は一の句中の內部に於ける要素たるものにして、一は一の句をば他の句に結合する用をなすものなり。この句と句との結合を職能とするものとは

一日讀書すれば、一日の益あり。

雲きたれども、雨とならず。

の「ば」「ども」の如きこれなり。今これを一の類として接續助詞と名づく。これは從

來用言に附屬するものといはれたるやうなるが、それは單に用言に附屬すといふのみのものにあらずして、用言が述語として用ゐられたる時に限りて附くものなり。而してその上の句をば下の句に接續せしめて、二の句の結合によりて構成せられたる複雜なる思想を發表せしむる用をなすものなり。而してこれらの助詞はすべてその用言の一定の活用形に附屬すべき約束あるものにして、漫然といづれの活用形にも附屬するものにあらず。

接續助詞以外の助詞即ち、一の句の內部に於ける要素たるものは、又之を二類に分つことを得べし。その一はその示す所の關係嚴密にして特定の意義を以て一定の關係を示すもの。一はその用ゐる範圍寬やかにして唯語調文勢を力强くあらはさむが爲に用ゐられ、文句の構成上緊密の度の少きものなり。たとへば、文語にては

なには津にさくやこの花冬こもり今を春べとさくやこの花

の「や」の如き、口語にては

わたくしね、東京にね、居ました時ね、こんなことをね、きゝましたのよ。

の「ね」の如きものなり。これらのものを一類として間投助詞と名づく。間投助詞の意義は上の如くなるが、これはその位置他の助詞に比して稍々自由なりといふ

に止まるものにして、全く無系統に用ゐらるゝものにあらず。隨つて、自ら一定の規律もあり、且つ助詞の本性として獨立に用ゐらるゝことなく、他の品詞の上に行くこともなきなり。

一の句の內部にありてその示す關係嚴密にして特定の意義を以て一定の關係を示す助詞は又之を二に大別す。その一は一の句のその全體としての意義性質に關係するものにして、他の一は一の句の內部の構成分子に屬して、その句の組成又は意義に關係するものなりとす。

一の句その者の全體としての意義又は性質に關するものは主としてその句の陳述の要素に或る關係を生ぜしむるものにして、之を更に二種に分つ。一は專ら句の終止にのみ用ゐらるゝものにして、

あゝ悲しきかな。

それはそれは面白いぜ。

の「かな」「ぜ」の如きものこれなり。これらは文句の陳述に關するものなるが、終末にのみ用ゐらるゝを特性とす。而してこれらはその上に來るべき語に一定の約束あり、又多く陳述の性質に關係あるものにして、同時に希望感動等の意味をもあらはすものなり。他の一は時として句の終止に用ゐらるゝこともあれど、主として

述格の上に存する或る語に附屬して、しかもその述格に對して一定の拘束を生ずるものなり。これは古來係辭と稱せられたるものなり。たとへば、

人は萬物の靈なり。

何程の事かある。

水をほかのまぬ。

の「は」「か」「ほか」の如きこれなり。この第一の場合のものは、これを終助詞と名づけ、第二の場合のものはこれを係助詞と名づく。この二者は述格に關係を及ぼせる點は同じけれど、その用法の位置の差によりて分ちたるなり。實際古今を通じて觀ずれば、係助詞と終助詞とは相通ずる點あるはたとへば「な」といふ禁止の助詞の如きは、古は

なこそ。

な行きそ。

の如く係助詞として用ゐ、又

行くな。

くな。

の如く終止にも用ゐたるものなりしが、口語にありては專ら終助詞といふべきこ

とゝなれり。而して係助詞は、又終止としても用ゐらるゝ特性あることは下に詳かに述ぶべきが、これらの點は二者共通の性あることを示すものといふべし。

一の句の內部の構成分子に屬してその句の組成又は意義に關係するものは亦これを二に分つ。一は一定の構成分子に屬し、その句の組成に關するものにして、一定の關係以外には通用するを得ざるものなり。たとへば、

梅の花。

月を見る。

父母の恩は山より高し。

の「の」「を」「より」の如きこれなり。今これを一類として格助詞と名づく。この一類は體言又は副詞に附屬し、それらが句の構成分子として句の組立に關して、それらの有する資格上の區別を明確に示すものにして、一の資格を示すものは他の資格をあらはすこと無く、その區別儼然たるものなり。他の一は句の構成分子にはいづれにも通じて附屬しうべきものにして、しかもその下に來る述格に立つ用言の意義に對して副詞の如き性質をあらはして修飾限定するものなり。たとへば、

桁柱ばかり殘れるもあり。

潔きがなかに猶暖かなる趣さへあり。

家の高さだけつみあげる。

の「ばかり」「さへ」「だけ」の如きこれなり。今これを一類として副助詞と名づく。この一類の助詞はその意義を見れば、大略屬性の副詞に對比するものにして、自然英語などの副詞に似たる點あるものにして、これらを英語などにて譯したるを見るに多くは彼れの副詞を用ゐて之にあてたり。これはその性質の似たるが故なるべし。

以上六種類の助詞の分類の經過を表示すれば次の如し。

助詞
- 一の句の内部にあるもの
  - 一定の關係を示すもの
    - 句の成分の成立又は意義に關するもの
      - 一定の成分の成立に關するもの……格助詞(一)
      - 句の成分に附きて下の用言の意義を修飾するもの……副助詞(二)
    - 句その者の成立又は意義に關するもの
      - 述語の上にありて影響を與ふるもの……係助詞(三)
      - 句の終止に用ゐるもの……終助詞(四)
  - 使用範圍のゆるやかなるもの……間投助詞(五)
- 句と句とを結び合するもの……接續助詞(六)

助詞は文語と口語とによりて用ゐる語を異にするもの少からず。文語に存し

て口語になきものあり。副助詞の「だに」「のみ」終助詞の「かな」「かし」等これなり。口語にのみ用ゐるものあり。格助詞の「で」副助詞の「だけ」「ぐらゐ」係助詞の「でも」「ほか」等これなり。文語と口語と形は似て性質の異なるものあり。「さへ」は文語にては副助詞なるが、口語にては係助詞の性質を帶び、「か」は文語にては係助詞なるが、口語にては副助詞の性質を帶ぶるが如きこれなり。

第十八章　格助詞

格助詞は體言又は副詞に附屬し、それらが句の構成分子として句の組成に關してそれらの有する資格上の區分を明かにするものなり。こゝに格といふ語を用ゐたるにつきて一言せむ。元來文法上に格といへるは英文典にいふ case の譯語たるなり。この格といふは名詞を基礎として之が他の詞に對する一定の關係をさせるものなれど、吾人の用ゐる格といふ語はそれよりも一層意義汎く、句の構成分子が句の組成に關して保つ所の一定の資格の義に用ゐたるなり。かくて、これらは體言が他の體言に對して限定語たる場合、體言が用言に對して主位、補充、修飾等の地位に立つ場合、又副詞に屬してその意義を完全にせしむる場合等に用ゐらるゝなり。而してこれらは一の資格を示すものは決して他の資格をあらはすこ

となくその區別儼然たるものなりとす。

文語に於ける格助詞は「の」「が」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」の八種なるが、口語にては以上の外に「で」ありて、すべて九種あり。但し、文語口語に共通する助詞といへども、用ゐ方によりては多少の差あり。それらは各條に說くべし。

格助詞は體言又は副詞に附屬してそれが他の語に對して有する一定の關係を示すものにして一の資格を示すものは他の資格には流用すること能はざるものなり。格助詞のこの性質は甚だ明かなる事なれば、往々輕視せられ易けれど、實は最も大切なる事項にしてこれを基として副助詞、係助詞との區別を明かにするを得る主眼點なりとす。

「の」はその語が、他に從屬する地位にあることを示すものにしてその用法は多端なり。今之を四の場合に分つ。(一)體言を修飾限定する語に附屬して、その限定語たる資格を明かにし、(二)又體言及び體言に準ずべきものに附屬してそれが、不完全なる形容詞又は副詞の觀念を補充する用に供せられたるを示し、(三)又體言が用言に對して主格たるものを特に示してその主格と賓格との間を緊密に結合する要素となり(四)或は又體言に附屬して同じ趣の語を重ね示すに用ゐらる。今次々に例をあげて說明すべし。

「の」の第一の場合は體言に附屬する場合と副詞その他に附屬する場合との二あり。その體言に屬するものは、

義經の‖鎧　海の‖水　牛の‖角

箱の‖中　机の‖上

汝の‖本　彼れの‖家

中の‖箱　上の‖石

などなり。これらの場合にその下の體言を省き去ることあり。この時にはその「の」にて體言の存在を標示するを以て、その體言なくても、もとそれが存せしことを推測しうべきものなり。

上の（　）が君の（　）にして、下の（　）は僕の（　）なり。

とかくいひて前の守も今の（守）も諸共におりて今のあるじも前の（　）も手とりかはしてゑひごとに心よげなることとして出でにけり。（土佐日記）

唐の（　）もやまとの（　）もかきけがし云々　（源、葵）

又これより再轉して「の」にて體言を代表して、その地位を補充することあり。これは古き例にては

人妻とわがの‖とふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり　（好忠集）

口語にはかゝる用例少からず。

多いのは唯鳥の聲である。

櫻の咲くのは春の末である。

長いの方がよい。

これは僕ののである。

さてかゝる修飾限定する語につける場合に上なる體言を修飾形容する意の極めて强きものはその體言としての資格極めて輕くして、形のみ體言にして意義は宛も形容詞の如くに會得せらる。その例

花の都　浮草の身　夢の浮世

の如きものにして從來これらは「の如き」の意なりと稱せられしものなり。然れども、これはその「の如き」の意義が「の」に存するにあらずして上下二の體言の關係上より生じたるものなることを忘るべからず。次に副詞その他に屬して體言の修飾をなすものは次の例の如し。

まれの細道　つひのすみか

必要の物　不當の要求

自然の事　あたりまへの事

これらの副詞に屬せる例に類して、又

近くの山　　遠くの親類

の如く形容詞の連用形を受けたるあり。又

わざとの使　　むねとの者　　郷里からの手紙

忘れじの行末　　京までの道中

の如く用ゐることあり。

「の」の第二の場合は「如し」に對して觀念を補充するに用ゐらるゝものあり。その例

落花雪の如し。かくの如し。思ひの如くにものたまふかな。

われ未だかつて君の如き義人を見ざりき。

又「まゝ」「まにまに」「やう」などの如き不完全なる副詞に對してその觀念を補ふ爲に用ゐらるゝことあり。

心のまゝ　　聲のまに〳〵

花の樣に　　汝の樣なるもの　　君のやうな人

の如きこれなり。

「の」の第三の場合は單文の主格を示すものと、附屬句の主格を示すものとあり。

甲の場合は
　鶯のなく。
などの例にして、これは文語にのみ用ゐらる。乙の場合は文語にも口語にも用ゐらる。
　鶯の來鳴く梅が枝。（連體格たる句の主ナ）　（文語）
　鶯の來て鳴く梅の木。（同）　（口語）
　梅が枝に鶯の來鳴くを見てよめる。（體言に準ぜらるゝ句の主格）（文語）
　梅の枝に鶯の鳴くはよいものだ。（同上）　（口語）
「の」の第四の場合は先づ次の如きものを主とす。
　風まじり雨ふる夜の雨まじり雪ふる夜は　（萬葉集、五）
　天地に悔しき事の世間の悔しきことは　（同、十三）
これより一轉して次の如き用例あり。
　空蟬の世の人ごとのしげゝればわすれぬものゝかれぬべらなり。　（古今、十四）
　なつかしくやはらかなるもののいとめづらに面白し。　（宇都保、俊蔭）
これらの例の「ものゝ」をば一の助詞とすること普通なり。されど、これらは上の例

と同じ旨趣にて前後の二事實の同時に存し行はるゝによりて重ねいへるにて、なほ「の」の本性にたがふことゝなし。(なほ文のかくの如き構成法は、句論に至りて明かにすべし。)

かゝる用例より再び轉じて今の口語には「の」を各の語句につけてこれを重ね合する用に供せり。その例

花だの月だのといふ遊び事ではない。

痛いの痛くないのといつて話にはならぬ。

死ぬの生きるのといふ騷をした。

「が」の用法はこれを三種に分ちて見るべし。一は體言に附屬してそが他の體言を修飾限定することを示し、二は「如し」及び、不完全なる副詞「まゝ」「やう」の如きものに對して觀念の補充をなす語に附屬し、三は汎く用言に對して主語たるものを特示して、その主語と述語との間を緊密に結合する要素となる。

「が」の用法の第一の場合はいづれも所有所屬の主たる體言に附屬するものにして、

君が代　梅が枝　賤が家　わが國　汝が家

の如きその例なり。これらは主として文語に用ゐるものにして、口語にては主と

して代名詞に添ふるものとす。

「が」の用法の第二の場合は代名詞又は用言の連體形につくものなり。

わが如くものや悲しきほとゝぎす。

汝が如きもの。

世に傳ふるが如くば。

その狀目に見るが如し。

我がまゝ。　早くこれがやうにならばや。

「が」の用法の第三の場合は單文の主格を示すものと(甲)附屬句の主格を示すもの(乙)とあり。甲の場合は體言につきて

花がさく。　鳥がなく。

の如く用ゐるあり。これは主として口語に用ゐるものなるが、文語にも用ゐること少からず。又用言の連體形を體言に準じて主格に用ゐるときに之を加へて示すことあり。たとへば

長いがよい。

負けるが勝だ。

煙の立つが見える。

氣樂にするがよい。

の如し。これらは主として口語に用ゐらるる。乙の場合は

わが行く道。

君が讀めるは何ぞ。

雨が降る時には出かけぬがよい。

それは日が長かつた時の話さ。

などなり。これらも亦口語に多くして今日の文語には稀なり。

「を」は動詞に對して用ゐらるゝ語に附屬するものにしてその動詞の含める作用の影響を蒙るべき目標たるものを示すものにしてその動詞の示す作用の性質意義によりて種々に用ゐらる。

「を」の用例は大略五に別ちて示すことを得べし。第一はその動作の影響を直接に受くる對者を示すものにして世に所謂他動の目的これなり。たとへば、

本を讀む。

水を飲む。

の如きこれなり。第二は所謂自動詞にて使役作用をあらはす場合にその使役を受くるものをあらはす。たとへば、

母子を眠らす。

子供が犬を走らせる。

の如きこれなり。第三はその動詞によりて說明せらるべきものが、自身にて移動する作用を有するものなるとき、その作用の行はるゝ地點を示すものなり。たとへば、

路をありく。

門をすぐ。　門を出る。

空を飛ぶ。

家を繞る。

國を去る。

の如きこれなり。以上三の場合は、古今に通ずるところにして文語も口語も異なることなし。すべてこの「を」は動作々用の影響を被れる目標たるものを示すものにして、その目標が、その作用を受けてあるか、然らずばその目標によりて進み動くことを示すものなり。この故に所詮は動的目標といふ一語にてよくその共の意をあらはすことを得べきものなり。かくして「を」はなほ進みて、主者と對者とが同時に進動する場合の對者を示すにも用ゐらるゝことあり。これを「を」の用例の第

四とす。たとへば、

おほ阪にあふやをとめを道とへばたゞにはのらずたぎまぢをのる。（日本紀、歌）

たらちねの母をわかれて。（萬葉集）

あふ坂にて人をわかれける時。（古今集）

の如し。これらをば古來「に」に通ふ「を」なりといへるをば、富士谷御杖は評して逃詞なりといへり。これ實に「を」の動的目標たる性質の最も著しくあらはれたる實例にして、これを「に」に通ふなどいへるは「に」と「を」との間に靜と動との區別あるを知らざるに基づくなりとす。「を」は又時間的に繼續する動作をあらはす動詞に對してその經過せる時間を目標として補充する用に供せらるゝことあり。その例

朝日照る佐太の岡邊に鳴鳥の夜鳴變らふ此年ごろを。（萬、二）

荒雄らは妻子の産業をば念はずろ年の八歳を待てど來まさぬ。（萬、十六）

以上の如き時間的の目標を示すものも、その動的目標たる本性を失はず。これを「を」の用例の第五とす。

「に」は體言に附屬してそれが靜的の目標たることを示す場合と、用言に對して修飾格に立つ語に附屬して、その修飾の關係を明かにする場合とあり。

「に」が體言に附屬してそれが靜的目標たることを示す場合のものはそれを目標として要する語の如何に注目するときは(甲)動詞に對しての目標を示す場合と(乙)形容詞に對しての目標を示す場合と(丙)存在詞に對しての目標を示す場合と(丁)他の體言に對しての目標を示す場合との四樣ありとす。

「に」が動詞に對しての目標たる體言につく場合は(イ)その動作々用のそれより出で又は歸着する目標を示す場合あり。その例

子父に似る　牛は馬に勝る。

人に物を與ふ。　師に道を問ふ。

机に書を載す。　人に別る。

(ロ)受身の作用を受くる目標を示すもの。

母子に泣かる。　病に惱まさる。

(ハ)使役作用の歸着する目標を示すもの。

敎師生徒に課業を受けさす。

大工に家を建てさせる。

我に得しめし山づとぞこれ。　(萬葉集)

(ニ)動作々用の原因を示すもの。

花に舞ひ月に謠ふ。　鹿のなく音に目をさましつゝ。

腹の痛いのに苦しむ。

聞かれるに困る。

(ホ)動作々用の結果を示すもの。

木石に化す。

名に立つ。

音になく。

露を玉にぬく。

病氣になる。

櫻も青葉になつた。

湯が水になる。

(ヘ)動作の目的を示すもの。この場合には動詞の連用形を以て體言化したるものⅹはそれを體言に準じたるものにつく。その例。

花見に出かく。

研究しに行く。

話をしに來た。

氣休めにいふ。
知らせに來た。
叱られに行つたやうなものだ。
(ト)動作々用の存在又は行はるゝ時を示すもの。
眞夜中に風吹き出づ。
五日に風吹き、十日に雨ふる。
午後六時に神戸を立つ。
いつも秋になると持病が起る。
(チ)動作作用の存在又は落着の場所を示すもの。
東京に住む。
長崎に著く。
海上に月出でたり。
道に人にあふ。
三所に幕を張つた。
「に」が形容詞に對しての目標たる體言につく場合は、(イ)場所を示すものあり。
山に近し。

海に近し。

不信ノ者世ニ多ク成タリ　（延慶本平家四）

（ロ）對比の目標を示すものあり。

その顏は稍々狐に似たり。

無由者ニ親クナリテ返々クヤシク候ヘトモ甲斐モ候ハス　（延慶本平家、一末）

（ハ）類同又差別の目標を示すものあり。

甲は乙に等しからず。

偏に風の前の塵に同じ。

なほこの性質のものは情態副詞と説明存在詞とが合同して一の用言の如くなれる場合のものに對してもその目標となることあり。

そのさま風に吹かるゝ木葉に異ならず。

人の禽獸に異なる所以は道德に存す。

などの如し。

「に」が存在詞に對しての目標たる體言につく場合は（イ）存在の場所を示すものあり。

富士山は駿河國に在り。

(ロ)存在の時を示すものあり。

午前九時に卒業式あり。

秋に在りては紅葉を可とす。

(ハ)斷定の客者を示す。この時は存在詞に準ぜらるゝ敬語その他の動詞に對しても用ゐらる。

この器は金製にしてかの器は銀製なり。

これはこの邊に住居する者に候ふ。

「に」が他の體言に對しての目標たる體言につく場合のものは(イ)或る事物に他の事物の添加することを示すあり。その例

月に叢雲花に風。

牡丹に唐獅子、竹に虎。

これは甲に乙が加はる如き場合にして、「に」にて示せるものは、その基本體として本來存在せる事物たるを示すなり。(ロ)これより一轉して口語にては次の如くいふことあり。

子供に女に年寄だけだ。

あなたにわたくしにこの方にすべて三人です。

これらは枚擧する用をなし、かねてそれらを相合して一團とする力を有するものなり。

「に」が用言に對して修飾格に立つ語に附屬して、その修飾の關係を明かにする場合のものは二樣あり。一は情態副詞に附屬してそれが修飾的地位を確かにするものなり。その例、

あきらかに知る。

うれしげに見ゆ。

親切に取扱ふ。

偶然に有り。

美事に出來る。

ありのまゝにいふ。

の如し。二は動詞の連用形に附屬してそれが、用言の修飾に立つことを示すものなり。これらは

雨しきりに降る。

うつむきになる

いつた通りに出來た。

の如き例を見て知るべし。而してかゝる場合には多くは下の動詞と同じ動詞を上に重ねて意義を强むるが如く見ゆるものあり。例へば、

降りに降る。
泣きになく。
食ひにくふ。
もみにもんで進む。
待ちに待つてゐました。
揃ひに揃つて立派な人々である。

の如きこれなり。これらは從來その意義のみによりて同じ動詞を重ぬるものなりといはれたれど、その說明にては語格は全く知られず、意味も亦徹底せざるものなり。若し、動詞を重ぬるのみならば、「ゆくゆく」といふ如く終止形のまゝにて重ねても「ゆきゆき」の如く連用形のまゝにて重ねても用ゐらるゝにあらずや。しかるに、この形はそれらとは性質も形も異なり。加之たゞ同じ動詞を重ぬといひては如何なる形式のものをさすかも明かならぬにあらずや。今この場合のものを仔細に觀察すれば、これらはその連用形に立てる動詞を以て一の狀態として情態副

詞の如くに下なる動詞の修飾の資格に立たしめたるものなり。その證は、その上なる連用形にある語又は接辭を冠してたとへば、

どしや降りにふる。

ひた泣きに泣く。

たゞ食ひに食ふ。

などいふ時には、その「どしや降り」「ひた泣き」「たゞ食ひ」が、下の「降る」「泣く」「食ふ」ことの形容たること極めて明かなるべし。しかも、その文法上の資格は、その冠せられたる「どしや」「ひた」「たゞ」などいふ語によりて變更せられたるにあらざること明かなるべし。これ上の連用形が修飾の用をなせりといふ所以なり。次に又その連用形を重ねて用ゐることとあり。たとへば、

思ひ思ひに出たつ。

散り散りになる。

別れ別れになる。

の如し。これらも亦修飾せるものなること明かなり。

「と」は體言又はそれに準ずるものに附屬してそれが、或る目標たることを示す場合と、用言に對して修飾格に立つ語に附屬してその修飾の關係を明かにする場合

とあり。

「と」が體言又はそれに準ずるものに附屬してそれが、或る目標たることを示す場合のものは大別して二とすることを得。一はそれが他と共同する場合の目標たることを示すものにして、一は或る事物の名稱又は狀態として指定せられたる目標なることを示すものなり。その第一の他と共同するを示す場合には二樣あり。一は下にこれに對する用言又は體言ありて、それに對して直ちに作用を及ぼすものにして、他は多くの體言を合同して一團とするものなり。その多くの體言を合同して一團とするものは次の如し。

鄒と魯と戰ふ。

月と花とを賞す。

攻むると守るといづれか難き。

文よむと歌よむとより外の樂ぞなき。

これらの「と」にて合同せられたるものは一團となりて、文中に一の語と同じき位置を占むべきものなりとす。而してこの場合は必ず、その各の下に「と」を添ふるを原則とす。然れども次の如く用ゐること往々あり。

君とわれいもせの山も秋くれば、色かはりぬる物にぞありける。

京都と大阪と長崎へ行く。

（宗于集）

これらを破格といふは不當なれど、又次の例の

史記と漢書の列傳をよむべし。

如く曖昧なるものは誤解を招く虞あれば、必ず、明かに各に「と」を加へて

史記と漢書との列傳をよむべし。

とか

史記と漢書の列傳とをよむべし。

とか明かに示すを要す。

「と」の他と共同するを示す場合の第二たる、下にこれに對する用言又は體言ありて、それに對して直ちに作用を及ぼすものは、その下に來る語の如何に注目する時は(甲)動詞に對しての目標を示す場合と、(乙)形容詞に對しての目標を示す場合と(丙)副詞に對しての目標を示す場合との三あり。その(甲)動詞に對して直ちに作用を及ぼす場合のものは

父と語る。

友と遊ぶ。

後でゆつくり君と相談したい。

の如きこれなり。「乙」の形容詞に對するものは

甲は乙と等し。

これと同じ。

の如きこれなり。「丙」はこの「乙」と性質を同じくするものなれど、その對象の異なるによりて別にあげたり。これには

君と共に遊ばむと欲す。

あなたと御一緒に參りませう。

の如きあり。又

人はもとより禽獸と異なり。

甲は乙と同一なり。

の如くに用ゐるあり。

「と」の或る指定せられたる目標なることを示すものは、主の場合あり。一はある變化生成の場合の目標を示すものにして、その例は

雀海中に入りて蛤となる。

楠木石と化す。

黄が赤とかはる。

の如し。二は比準の目標にしてその例は

父とあがむ。

股肱とたのむ。

雨霰とちる。

雪とあざむく。

の如し。俗語に「これは水とは輕い」などの如くいひて、比較の目標をあらはすものはこの場合より一轉してなれるものなり。されど、これは俗語以外には用ゐず。

三は事物の名目を示すものにして、その例

鈴木といふ人

名を東京と改む。

子供の名を太郎とつけた。

これを大化の改新とす。

の如きこれなり。四は思想上の對象を示すものにして、その例

我は楠木正成を古今無雙の忠臣と信ず。

私にはあの人が豪傑と見える。

花咲きたりと告ぐ。
滿開の花と見ゆ。
今日は雨降らむと思ふ。
今將に出で行かむとす。

の如きこれなり。五は引用の語句を示すものにして、その例

「死にし子顏よかりき」といふ樣もあり。
彼意を決して「否余の書けるものなり」と答ふ。
なるほど「日本一の景色である」と感心した。

この「と」が引用の語句を受くる時にはすべて一旦意義の完結せる形につくを法とす。この一旦完結せる形といふは必ずしも終止形といふにあらず、連體形にても已然形にても命令形にても又略語ある場合にても、すべてその意の切れたるものには「と」をつくることを得るものなり。

「と」が用言に對して修飾格に立つ語に附屬してその修飾の關係を明かにする場合のものは二樣あり。一は情態副詞に附屬してこれが修飾の地位を確かにするものなり。その例

からからとわらふ。

漠然と考ふ。
しづしづと歩む。
茫漠として限なし。
はたと行きつまる。
断然とやめる。

の如し。二は動詞存在詞の連用形に附屬してそれが用言の修飾に立つことを示すものなり。この場合は種々の現象あり。甲は下なる用言と同じ用言の連用形につきて、これを重ねたる如くに見ゆるものなり。その例

みと見る人。
しとすること。
吹きと吹きぬる風。
行きと行きて。
ありとある人。
世にありとある人。

の如きこれなり。これらも「に」の場合と同じくたゞ同じ用言を重ぬるものとのみ世にはいへるやうなれど、上なるものは下なるを修飾する地位に立つものにして

その結果、その意を強くあらはす用をなすなり。又上の例と異にして上の用言と下の用言と異なる場合のものあり。

木々の木葉の散りとまがふに。（古今集）

などこれなり。この場合のものは上なるが修飾する性質明かに見ゆべし。この「と」はなほ別に連用形を重ねたるものを受けて修飾格に立たしむることあり。たとへば、

散り散りとなる。
別れ別れとなる。
ありありと見ゆ。

の如し。又この「と」は下に「も」を伴ひて「とも」といふ形をとり、形容詞、副詞を重ねてその意を強め示すことあり。たとへば、

うれしともうれし。
ながしともながし。
世の中はいざともいざや。

の如きこれなり。この場合には形容詞にはその終止形につくものとす。

さて上に述べたる場合を見るに「に」と「と」とはある場合に於いて殆ど同じ用法を

有せり。この故に、さる場合に「に」をとるべきか「と」をとるべきかといふことは畢竟それらの意義上の差別によりて決するより外なきなり。今その差別をいはゞ「に」は性質の變化の如く專ら內面的の事情を示し、「と」は狀態の如き外的の變更を示す。隨つて又「に」は絕對的のものに使用し、「と」は相對的のものに使用す。たとへば、

父とあがむ。　花と見る。　股肱とたのむ。

の如きは實は「父」ならず、「花」ならず、「股肱」ならざるものを以てしかる如くに思惟することをいへり。これ相對的外的なりといふ所以なり。「に」にては、

青葉になる。　花の衣になる。　親になる。

の如きは全くそのものに變更し了れる由をいへるなり。これ絕對的內的なりといふ所以なり。これらの區別は、これらが「あり」に熟合して「なり」「たり」となれるものにて最もよくあらはる。しかうして情態副詞中「に」のつく性質のものと「と」のつく性質のものとの區別は、またこの二者の區別を明かに認むる材料として顯著なるものあり。されど、今日の口語にてはこの區別又混雜せるものあり。たとへば、

手足になつてはたらく。

の如きものあり。されば口語にては本來、區別ありしものなりといふに止まらむか。

「へ」は動詞に對して用ゐらるゝ語に附屬するものにして、文語にありてはその動作の進行するその目標所在の方向を示すものなり。この動作の進行する目標を示すといふことは「に」にも存するを以て往々混同せられ易し。されど「に」は動作の歸着すべき地位を示すに「へ」はその動作をその方向に進行するをいふのみにして、その動作者がその地點まで實地に行きつくか、又はそこに止まるか否かは度外に置きたるものなり。この故に「へ」は地位としてはその指す所漠たるものとす。

西へ行く。

筑紫へつかはす。

住む館より出でゝ船に乘るべき處へ渡る。（土佐日記）

どちらへ行くかまだきめぬ。

君の近くへ引越す。

さて「へ」は口語にてはなほこの上に動作の歸着する地位をも示すことあり。たとへば、

机へ載せる。

財產を子へ讓る。

これは文語にては明かに「に」といふべきなり。口語のこの現象は正しき用法にあ

らず。然れども汎く用ゐられてあれば、今これを否定すべくもあらず。然りといへどもこの口語の形を文章にとり入れて文語にて「へ」を「に」の如く用ゐるものあるは斷じて容認すべきものにあらず。

「より」は動作々用の出自、基點を示す場合と其の動作の基準を示す場合とあり。その動作々用の出自の基點を示すものは動詞に對する場合に限るものにして

守の館より呼びに文もて來れり。（土佐日記）

曉より雨ふれば同じ所にとまれり。（同　）

朝廷より勳章を賜ふ。

の如きこれなり。この性質よりして古代にはその動作がある地點を經由し、なほそれよりも進みて行はるゝことを示す爲にその地點をさす語に附屬せしめて之を用ゐたることあり。

あたりよりだにな歩きそ。（竹取物語）

蘆荷ひたる男のかたゐのやうなる姿なるこの車の前よりいきたり。（大和物語）

いといかめしうして此のとしかげの家のまへより詣で給ふ。（宇都保、俊蔭）

の如きこれなり。かくの如き「より」をば、古來「を」に通ふ「より」なりといへり。然れどもこの說き方は甚だ粗雜にして、「より」はおのづから「を」と趣を異にせるを忘れたるなり。即ち「を」はその地點を主眼として現にそこに動作作用の行はるゝをいひて他をかへりみず。「より」は其の動作作用の引きつゞき行はるゝものゝうちにての觀察の基點たる地位を示すものなり。この故にこの區別は微妙なるものにして國語の妙諦實にかくの如き點に存するなり。さてかく動作作用の基點を示すものは文語のみにして口語には存せぬものなりとす。

「より」の比較の基準を示す場合のものは第一は主格に對比して用ゐる場合と、ある體言に對していふ場合とあり。その主格に對比していふ場合のものは形容詞に對しても動詞に對しても用ゐらるゝものにして、その例

父母の恩は山より高く海より深し。

かくてあらむよりもまさりなむ。

これはあれよりすぐれてゐる。

それよりこれがよい。

の如し。又次の如く用ゐることあり。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ。

これらは「あはれとおもほゆ」といふ事につきての比較をあらはしたるものなり。第二のある體言に對して比較をあらはす場合は直接に用言に關係することなき場合にして、前、後、左、右、上、下、內、外、四方等、相對的に一定の限界を有するものに對してその基本點を示すことあり。

泣くより外の事ぞなき。

今より後はかゝる過すな。

五位より上は升殿を許さる。

逢阪の關より東をば關東といふ。

五時より前に御伺ひいたします。

五合目より上の方は樹木がない。

口語の「より」はこの比較を示すもののゝみ用ゐらる。而して、その「より」が「ほか」といふ語につゞくべき場合には次の如く、

風より外に知る人もなし。　君より外には見ない。

必ず下に打消の語の來るべきものなるが、口語にてはその「ほか」をあらはさず、「より」のみにてその意をあらはすことあり。

今日は鰯より(ほか)ありませぬ。

ほんものとより(ほか)思はれぬ。
三つより(ほか)ない。

かくの如き「より」は意義すでに一轉して、それ以外の事を否定する意をあらはすものなり。しかるに之を「限る」意なりといふ說あり。この說は一面は通ずる所ある如く見ゆれど、この語はその本來の消極的の性質は失せずして依然たるものなれば、これを積極的に「限る」といふことは不當なり。上の諸例を「限る」意として譯し見よ。その不當なることは直ちに知らるべきなり。

「から」は文語も口語も動作々用の基點を示すものなるが、文語にては「より」も亦基點を示すが故にこの點に於いて「より」と「から」とは殆ど共通の如く見らる。その例

明日からは若菜つまむと。
去年から山籠して侍るなり。
これからゆかば、かれからゆかむ。
小さな木の間から小鳥がとんで來ました。
朝から晩までよく働く。
それからその菜をおなべの中へ入れて下さい。

などいづれも時間又は場所を示す語に附屬するものにして動詞存在詞に對する

場合に用ゐるものなり。以上は文語にも口語にも共通するものなるが、口語にては右の外なほ「から」を以て動作々用の起る基點を示すことあり。たとへば、

馬から下りる。

私からはじめませう。

樟から樟腦をとる。

その事から起つた喧嘩だ。

口語の「から」は又文語の「より」と同じ樣に、前、後、左、右、内、外、上、下、四方等相對的の一定の限界のあるものに對してその範圍の基點を示すことあり。その例、次の如し。

それからあとは君自身にしたまへ。

あの杭からこちらは西田の受持だ。

こゝから上が御花畠だ。

「で」は口語にのみ用ゐらるゝものにして二樣に用ゐらる。一は動詞に對してその作用の行はるゝ場所又は時、或はその作用の方便、材料、原因、由緣等を示すものにして、一は說明存在詞又はそれに準ぜらるゝものに對して陳述の資位を示すものなり。第一の場合の動詞に對してその作用の行はるゝ場所又は時を示すものゝ例、

文學は人生の縮圖である。
なんと面白い事ではないか。

以上は體言を受けたるものなるが、この場合の「で」は副詞をも受くるあり。その例
この花は實に綺麗である。
海上は至極穩やかであります。
さうでなからう。

この賓位を示す「で」は句を重ぬる場合に下に說明存在詞を伴ふことをせず、そのまゝにて上句の述格を代表することあり。その例次の如し。

顏は人で、心は鬼だ。
天氣も穩かで、氣候ものどかだ。
それは金でこしらへたもので、あれは銀でこしらへたものである。

さて以上の如く用ゐらるゝ「で」といふ語の源を考ふるに、これはもと「にて」なりしが、その「で」といふ形の成立したるは明かに鎌倉時代にあり。而してこれは口語の上にては甚だ重要なる助詞たることと上の諸例にてさとることを得べし。

第十九章　副助詞

副助詞は或る用言の意義に關係を有する語に附屬して遙かに下なる用言の意義を修飾するものなり。この副助詞といふ名目は著者のはじめて命名せしものにして、その内容は著者が數年研究したる結果によるものなり。この種類の助詞はその意義を見れば、大略屬性の副詞に對比するものにして、自然英語などの副詞に似たる點あることは既にいへる所なり。

この類の助詞は從來或は格助詞と混一して說かれ、或は次にいふ係助詞と一類として說かれたれど、格助詞とも係助詞とも別なる性質を有するものにして、おのづから一團をなすべきものなり。次下に說く所を見てその特性職能を委しくせば、著者が之を一括して別種としたることもおのづから首肯せらるべし。

文語に於ける副助詞は「だに」「さへ」「すら」「のみ」「ばかり」「まで」「など」にして口語にては「ばかり」「まで」「など」「やら」「か」「だけ」「ぐらゐ」なり。されば「ばかり」「まで」「など」は文語口語に共通すといふべし。されどなどの外は文語と口語とにて用法性質の上に多少の變動ありとす。

副助詞は主格にも補格にも修飾格にも附屬しうるものにして、それらを示す格助詞の下にあるを普通とす。

この助詞は主格補格のいづれにも附屬しうべく、又副詞の下にも用言の連用形

の下にも汎く用言の意義を修飾する語には一般に附しうべく、又それを示す格助詞ある時はこの下に附くを普通とす。而してかくの如き狀態は係助詞にも存す。然れども係助詞は用言の陳述の方法を修飾するものにして、副助詞は用言の意義に從屬し、それを支配するものなれば、その支配の對象を異にするなり。從來は用言につきて屬性と陳述の力との二を區別することなかりしが故にかく二者を混同したりしなり。この類の助詞の一斑を次にあぐ。

はかなき事だにかくこそ侍れ。
潔きがなかに猶暖かげなる趣さへあり。
千古絕調の寶物を外人の手に賣却せしものすらあり。
二三年以前までこゝにすみたり。
白きひとへうちたれなどしあり。
桁柱ばかり殘れるもあり。
誰やら來た樣だ。
三つだけ貰ふ。
それぐらゐはまあよいとせう。
この種の助詞の格助詞の下にある例。

これが爲に寢食をさへ廢するに至るといへり。
粥をのみすゝる。
家道ますく衰へてその日の生活にすら困窮せり。
他人にまで迷惑をかく。
いづれの人と名をだに知らず。
家族にだけしらせてやりました。
品川へぐらゐ行かれよう。
誰にやらやつた。
水でなど煮る。

この類の助詞の大部分(だにを除く外すべて)は又格助詞の上にも來ることあり。この際は「の」「が」の上にも「を」「に」等の上にも來ることあるなり。次にそれらの例をあぐべし。

「の」の上にありて體言の裝定をなす體言につける例。

今日のみの樂み。　軍隊などの話。
こればかりの事。　其處までの決心。
こゝだけの話。　五歲ぐらゐの子。

「が」の上にありて主格に立つものにつきたる例。これは口語にのみある現象なり。

そればかりが心配です。
人々の心までが總立ちになつた。
君などがいつたとて成功する筈がない。
あれだけが缺點だ。
これぐらゐが關の山だ。

「を」「に」「と」「で」等の格助詞の上にある例。

世の中はねてもさめても夢ならばわすれぬさへをわするとやせむ。
今こむといひしばかりを命にてまつにけぬべしさくさめのとじ。
行末ばかりを考へる。
十日までを限る。
三等ぐらゐを望む。
二人分だけをとる。
あの人などを友達にしたらよい。
彼の善行はこれのみに止まらず。

秋風膚寒きまでになりぬ。
道すらにしぐれにあひぬ。
色さへにこそうつろひにけれ。
人ばかりにたよる。
これまでにする。
友達などに話する程の事でもない。
仲間だけにみせる。
せめて親類ぐらゐに話してもよからう。
子供などと話す。
明日までときめる。
どれぐらゐといつて一寸いひにくい。
三つや四つなどではおつゝかない。
そればかりで澤山だ。
三日ぐらゐで出來る。
これらはそれらの意義を以て上の語に附屬してその意義を制限するものなるがかくの如き性質はこの類の助詞の特質の主たるものにして係助詞には全くなき

所なり。

この類の助詞は或る語句を受けて、その語句と自己との結合せる一體を以て情態の副詞と同じ意義と用法とをなして修飾格に立たしむることあり。かくの如き性質も亦他の助詞には全くなき所にして、一面にはこの類の助詞が、副詞と性質の似通へる一の證左たり。さてかゝる用法に立ちうるものは、文語にては「ばかり」「まで」「など」の三に限られたるやうなれど、口語にては殆どすべてにこの用法あるなり。さてかくの如き場合の實例を見るに、二の異なる現象あり。一は體言に附屬するものにして、二は用言の連體形に附屬するものなり。次にそれらの例をあぐ。

一、體言を受けて修飾格をつくるもの。

三年ばかり研究せり。

曉ばかりうきものはなし。

人の心ばかりくちをしき物こそなけれ。（宇、國讓中）

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。

千圓ばかりかゝる。

今日まで待ち居り候。

晝までは內に居る。

家の高さだけ積みあげる。
犬ぐらゐよくねるものはない。
長さはこれくらゐあつた。
犬やら狼やらわかりませぬ。
何が何やら目當がつかぬ。

二、用言の連體形をうけて修飾格をつくるもの。この場合にはそれは修飾格として更に下に格助詞「に」をつくることあり。

いみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ。(源、東屋)
色ならばうつるばかりもそめてまし。(後、戀三)
手がとゞくばかりになつてふみはづした。
うたて恐しきまでなきこえたまひそ。(源、若紫)
あやしきまでかをりみちたり。(源、橋姫)
あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪。
足のうらが見えるまで高くとんだ。
人に笑はれるまでつまらぬ眞似をする。
風が膚寒いまでになつた。

花だやら雪だやら見分がつかぬ。
出るやら這入るやらさわがしいことだ。
降られるやら測りがたい。
いそがしいだけ人手がかゝる。
取るだけつかふ。
値の高いだけに品がよい。
透き通るくらゐ白い。
痛いぐらゐうつた。
をかしいくらゐにうれしがつた。

この副助詞は古來、往々格助詞と混同せられ、又は係助詞と混同せられたるものなり。されど、この三種は各その特質ありて決して混同せらるべきものにあらず。而してこれら三種が相重ねて用ゐらるゝ場合にも一定の規律ありて相犯すことなきものなり。こゝには係助詞を後にして格助詞、副助詞を主としてそれらの區別を說かむ。先づ格助詞を主としていへば、

一、格助詞は決して相互に重ね用ゐらるることなきものにして、その規定は嚴密にして、一歩も犯すことを容さぬものなり。

二、格助詞と副助詞とは重ね用ゐらるゝことあり。この時には格助詞の下にあるを通例とすれど、時として格助詞の上に行くこともあり。

次に副助詞を主として見れば、この時には互に上下して重ねられ、そのさま種々になる。たとへば、

祈りくる風間と思ふをあやなくに鷗さへだに浪と見ゆらむ。（土佐日記）

此の度だにさへ下らずばいとつべたましき様になむ世人も思はむ。（蜻蛉日記）

物言はぬ四方のけだものだにすらもあはれなるかな親の子を思ふ。（金槐集）

別のかなしみにこゝまでだにまゐりつるなり。（宇都保）

この御琴のねばかりだにつたへたる人をさをさ侍らじ。（源、若菜、下）

影ばかりのみ人のみゆらむ。（古今集）

の如き例あるなり。以上は外形的のことを主として說けるものなるが、內面的にいへば、格助詞と副助詞とは句の組成分子につくことは共通すれど、格助詞は一定の關係を示して他に融通することなく、副助詞はすべての組成分子に共通して附

屬す。この故に余ははじめに定格助詞、通格助詞といふ名目を用ゐたることあり
しが、副助詞の、すべての格に通行することは寧ろ偶然的にしてその本性にあらざ
ること明かになりしが故に定格助詞といひしを格助詞と改め、通格助詞といひし
を副助詞と改めしなり。

なほ係助詞との關係は係助詞の下に行きて說くべし。

「だに」は文語にのみ用ゐるものにして、その擧げ示したる點を主とし、他を顧みざ
る意を以て下なる用言に對しての意義を裝定するものなり。その例、

主格の語につけるもの。

みやまには松の雪だにきえなくに。（古、春、上）

はかなきことだにかくこそ侍れ。（源、帚木）

格助詞の代理をなせるもの。

枕だにせでねしものを。（古、戀、三）

家のあたりだに今はとほらじ。（竹　取）

格助詞の下にあるもの。

わが君をだにこそは御かたみに見奉らめ。（源、玉鬘）

ぬかづきなどいふものゝやうにだにあれかし。（枕、　三）

この世の人とだに思ひたらず。（枕、三）
あたりへだによせられねば。（宇、國讓中）
よし今よりだにようゐしたまへ。（源、少女）

賓格の語につけるもの。

苔の袂よかわきだにせよ。（古、哀）
珍らしう御心うつるかたのなのめにだにあらず人にすぐれたまへる御ありさまよりも。（源、槇柱）

修飾格の語に附屬せるもの。

今しばしだにおはせなん。（落窪、三）
こよひさへさだにあらば、（狹衣、三）
今しばしかくだにあらば、浪にひかれて入りぬべかりけり。（源、須磨）

連用言の下につけるもの。

更に入れだに入れずなどいへば、（落窪、三）
御らんじだにおくらぬおぼつかなさをいふ方なく悲しとおぼさる。（源、桐壺）
きゝだにあはせでやみぬるいぶせさよ。（狹衣、一）

見だにおくりたまへかし。

おぼしだにしらば、慰む方ありぬべくなむ。（源、藤袴）

「すら」も文語にのみ用ゐるものにして、一事をあげて他も同様ならむと類推せしむる意を以て下なる用言に對しての意義を裝定するものなり。その例、

主格の語につけるもの。

都すらものあはれなる頃にあらずや。

草木すら春にはなべてあふさかの。（躬恒集）

格助詞の代理をなせるもの。

ゆくへすらもおぼえず。（竹取）

格助詞の上にあるもの。

我すらにおもひこそやれ。（榮、初花）

道すらにしぐれにあひぬ。（貫之集）

連用言の下にあるもの。

しばしこゝろみてすらときもせんかしと思ひつゞくるに。（蜻蛉、中）

とけてすらぬる程もなき梅雨にねざめ勝にてあかす頃哉。（曾丹集）

「さへ」も亦文語に用ゐるものにして、一をあげてそれが元來存するものゝ上に更

に增加せるを示す意を以て下なる用言の意義を裝定するものなり。その例、

主格につけるもの。

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花。　（古、春、下）

まけてはやまじの御心さへそひて、命婦をせめたまふ。　（源、末摘花）

格助詞の代理をなすもの。

人のためさへからきことありかし。　（源、若菜、上）

みこさへうちぐし奉らせたまひて。　（狹衣、一）

格助詞「に」の上にあるもの。

いろさへにこそうつろひにけれ。　（古、秋、下）

格助詞の下にあるもの。

涙をさへこぼしてふしたり。　（源、空蟬）

限ある貢物をさへゆるされき。

琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ。　（古、戀、二）

うき事をいひいづるたぐひもきこゆかしとさへおぼしよるも。　（源、若菜、下）

修飾格の下にあるもの。

かくさへなりたまへるものを。（狹衣、一）

この「さへ」は口語には用ゐず。口語にてはかかる場合に「まで」を代用す。但口語には係助詞に「さへ」といふあり。その「さへ」はこゝの「さへ」より轉じたるものなること勿論なれど、既に性質をかへて係助詞の性を帶ぶるに至れるが故にその條に說くべし。

「だに」「すら」「さへ」の三は古來往々混同して說かれ、紛れ易し。これその性質頗る相似たるによる。されど區別あること上に述べたるを見て知るべし。

「のみ」も亦文語にのみ用ゐらるゝものにして、その事物の唯それに限れる意を以て下なる用言の意を裝定する性を有するものなり。その例、

主格につけるもの。

一人のみながむるよりは。（古、秋、上）

尼君の行ひの具のみあり。（源、寄生）

格助詞の上にあるもの。

かくてのみを今はものしたまへ。（宇、國讓、中）

すさまじきのみにもあらずわりなし。（枕、二）

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは。

格助詞の下にあるもの。

（古、春、下）

世の中のあはれに心うき事をのみおぼされければ。

（落、窪、一）

寺にいそぎにのみ心を入れたまへり。

（源、寄生）

女房などはすべて年の内つごもりまでもあらじとのみ申すに。

（枕、四）

賓格の語に附屬するもの。

夕さりはかへりのみしければ。

（古、戀、五）

夢の心地のみす。

（源、御法）

修飾格又は連用言に附屬するもの。

かくのみ思ひていかゞはすべからむ。

（源、寄生）

かの人もいみじげにのみいひわたれども。

（源、若菜、下）

なきにのみなきたまへば。

（源、桐壷）

夜はねぶつのこゑきゝはじむるよりやがて泣きのみあかさる。

（蜻蛉、上）

「ばかり」は「のみ」と殆ど同じ意の助詞なるが、たゞ少しく異なる點は他と區別して

示す意あることなり。これは文語にも口語にも用ゐらる。その文語の例。

格助詞の上にあるもの。

六尺ばかりの金銅のまきゑのづし。（宇、國讓、上）

櫻ばかりの花なかりけり。（貫之集）

主格につけるもの。

聲ばかりこそ昔なりけれ。（古今集、夏）

桁柱ばかりのこれるもあり。（方丈記）

格助詞の代理をなせるもの。

さ侍りぬべくはその日ばかり御むかへにまゐりこむ。（宇、藏開中）

格助詞の上にあるもの。

たゞいたゞきばかりをそぎ、五戒ばかりをうけさせ奉る。（源、浮舟）

君三十よばかりにてあいぎやうづきにほひやかなり。（宇、國讓中）

翁さび人なとがめそ、狩衣、けふばかりとぞたづもなくなる。（伊勢、語）

唯そのきさらぎばかりより音づれきこえさせたまひし御文に。（源、蜻蛉）

格助詞の下にあるもの。

心ちのなやましくてありつるとばかりいひ送りて侍りければ。（後、戀、四）

賓格の語につけるもの。

寢殿の御しつらひいとゞかがやくばかりしたまひて。（源、薄雲）

修飾格につけるもの。

かくばかり又なきさまにもてなしきこえて。（源若菜、下）

これを加ふるによりて修飾格をなせるもの。

人の心ばかりくちをしき物こそなけれ。（宇、國讓、中）

大藏卿ばかり耳とき人はなし。（枕、九）

文語には「のみ」と「ばかり」とありて、同じ様に用ゐられ、しかも稍そのさす意を異にすれど、口語にては「のみ」なくして「ばかり」のみ用ゐらる。その例。

こゝばかりの事ではない。

毎日雨ばかり降つてゐる。

私にばかり下された。

綺麗なばかりで品は惡い。

十三時間ばかりかゝる筈です。

「まで」は文語にては及ぶ處の範圍を示す意を以て下の用言の意義を裝定するものなり。

從來は「まで」をばその「より」と相對する用法のあるよりして格助詞の類に入れたれど、決して「より」と同類にあらずしてこの副助詞たるなり。その理由は既に富士谷氏が「のみ」の類とせし如く、かの格助詞と重なることあり、又主格補格等に附屬する性あるを以てそれが格助詞にあらぬことは明白なるをや。

格助詞「の」の上にありて連體格の語につけるもの。

身にあまるまでの御志の萬のかたじけなきに。（源、桐壺）

殿上人諸大夫院司しも人までのまうけいかめしくせさせたまへり。（源、若菜、上）

今日までの苦心は一方ならざるものを。

主格につけるもの。

うすくこき野べの緑のわか草に跡まで見ゆる雪の村消。（新古、春、上）

あやしの法師ばらまでよろこびあへり。（源、賢木）

格助詞の代理をなせるもの。

つれもなき人の心の關守はゆめぢまでこそゆるさゞりけれ。（ヲ格）

宰相までなり給ふ。(ニ格)　　(風雅集)

格助詞の上にあるもの。

中將は大臣までになさせたまひてなんありける。　　(枕、十)

格助詞の下にあるもの。

故障多之天今爾末天息太利。　　(文德實錄、八、策命)

夢がたりとまできく。　　(源、寄生)

修飾格の語につけるもの。

さまで心とゞむべき事のさまにもあらず。　　(源、夕顏)

之を加ふるによりて修飾格をなせるもの。

うたて此世の外の匂ひにやとあやしきまでかをりみちけり。　　(源、橋姬)

「まで」は口語にありては文語の如く範圍の及ぶ處を示す意の用法も存するが、その上になほ、それが、元來あるものゝ上に更に增加したることを示す意を以て下の用言の意義を裝定するにも用ゐらる。其の文語と同樣に用ゐらるゝものゝ例。

今日まで待つて居るのにまだ來ない。

下關まで汽車で行つた。

ろくに知らぬ人にまで案内狀を出したといふ事だ。

口語の「まで」の元來存するものゝ上に更に增加したるものを示す意のものは文語にはなきものにして、これに似たる場合に「さへ」を用ゐるなり。惟ふに「まで」のこの用法は文語の「さへ」が亡びたる後にその空處を充さむが爲に發達したるものなるべし。その例。

年寄まで騷ぎ出す。

逆境に立つと親類まで近寄らなくなる。

死なうとまで思ひこんだ。

花も美事なのに實まで結構だ。

「など」は文語口語共通のものなるが、その事物を例として示して、下の用言の意義を裝定するものなり。「など」は從來「ども」と同類となし複數を示す接尾辭とせるものあれどそれは誤なり。「など」はいつも例示する意味のものにして複數にあらず。この故に「ども」とかさね用ゐたる例古來多きなり。その古文の例をあぐれは次の如し。

いにしへゆくさきの事どもなどいひて。（伊勢、語）

はこのふたに草子どもなどいれてもてゆくこそ。（枕、九）

飯酒菓物どもなど。

木どもなどはは〻かばかしからぬ中に。（枕、十一）

これらは「どもにて既に複數を示してあるにあらずや。これらの例を見てもそれが複數を示すものにあらざるをさとるべし。「など」は實に一をあげてそれを例としたるを示す語なり。これによりて自然にこれに類似するもの〻他に存することどをいふことあるによりて所謂複數と誤られしなり。されどいづくまでも例示にして複數にあらぬことは、次の二例を比較して知るべし

（一）　おのれなどはさる事なし。

（二）　おのれどもはさる事なし。

（一）は往々傲慢不遜の感を與へ（二）は專ら謹愼謙遜の感を與ふるにあらずや。これ（一）は自己を例として示すが故にして、（二）は自己を多數中の一にかぞへたるが故なり。更に又次の如きは如何に說明すべきか。

庭などもいと蓬茂りなどこそせねども。（枕、八）

除目の程など內裏わたりはいとをかし。雪ふりこほりなどしたるに申文もてありく。四位五位、若やかにこ〻ちよげなるはいとたのもしげなり。

などかくはあるぞとて湯をせめて入るれば呑みなどして見などなほりゆく。（枕、一）

（蜻蛉、上）

かくの如きを複數とはいかでいふを得む。即ちこれらはすべて例示せるものなるを見るべし。

次にこれが接尾辭ならぬ證は次の例どもなり。

京になど迎へたまひて後。（源、蜻蛉）

京へなど迎へ參らせたまへらむ後。（源、浮舟）

これらは助詞「へ」「に」の下にあり。かゝる用法に立てるものを以て接尾辭とすることは如何にしてもありうべからぬことなりとす。これらは實にこれが助詞たることの確かなる證據なりとす。

格助詞「の」の上にありて連體格の語につけるもの。

樂人舞人などのことは大將の君とりわきて仕うまつりたまふ。（源、夕霧）

銀行などの書記。

「など」の主格につけるものゝ例。

心ひとつに思ひあまる事などおほかるを。（源、帚木）

髮つきいろぎはなどいとめでたし。（宇、國讓、上）

うるはしき繪などあり。

もう月などあるものか。

格助詞の代理をなせるもの。

繪などかきて色どりたまふ。（源、末摘花）

若菜籠に入れて雉子など花につけたり。（土佐）

白馬やなどいへども心地すさまじうて七日もすぎぬ。（蜻蛉、下）

茶などのんでゐる。

格助詞の上にあるもの。

あふ阪などをさ思ひ返したらばわびしからむかし。（枕、六）

世ばなれたる海づらなどにはひかくれぬかし。（源、帚木）

それより後除目などとて音なし。（蜻蛉、下）

遠きところ人の國などより家のあるじののぼりたる。（枕、十）

黑いのなどをもつてきてはいけない。

親兄弟などに話す。

猿などといふものは人に馴れやすい。

格助詞の下にあるもの。文語の例は上にあげたれば、口語の例を示す。

暖になどなつたらまゐりませう。

西へなど向いてゐよう。

水でなど煮る。

賓格の語につくもの。これも文語の例は上にあげたり。

驚いて氣絶などしたら大變だ。

われわれの尊敬する人物は楠木正成、木村重成などである。

修飾格の語につけるもの。

ほのかになど見奉るにもかたちのまほならずもおはしけるかな。（源、少女）

などかかくなどのたまはざりし。（宇、國譲、中）

「など」は元來「なにと」といふ語の變形してなれるものなれば、そのもとの性質を保存して「と」と同じく、一切の説話を引證とするに用ゐらるゝことあり。この時は「と」と同じく完結せる文句をそのまゝ受くるなり。

これかれ「いと情なし、あまりなり」などものすれば、（蜻蛉、上）

「幾尋かあらむ」などいふに。（枕草子）

「やら」は口語にのみ用ゐる助詞にして不定又は推量の意をあらはして下なる用言を裝定するものなり。これは平安朝の語には全く存せぬものにして、當時行はれたる「にやあらむ」といふ連語が、同期の末に至りて「やらむ」となり、鎌倉時代にはそれが轉じて「やらう」となり、次第に遷轉して「やら」の形となり、性質もかはりて現代にては一種の助詞となれるものなり。その用例。

助詞「の」の上にありて連體格の語につけるもの。

誰やらの話。

何やらの事だ。

主格の語につけるもの。

何やら見える。

誰やらわからぬ。

格助詞の代理せるもの。

何やら見て居る。

格助詞の上にあるもの。

誰やらがさういつた。

壁に畫やら寫眞やらがある。
何やらをよんで居る。
どこやらにさゝやくやうな聲ひゞきがして、それもやがて消えてしまふ。
誰やらと約束した。
何處やらへ行つた。
誰やらから貰つたのだ。
何處やらで聞いたやうな聲がする。

格助詞の下にあるもの。
誰をやらつれてきた。
ざるの中の豆はいつの間にやら芽をふいた。
何とやら言つた。
大阪へやら行つた時の事だ。
どこからやら手紙が來た。
電車でやら行くといつて居た。

修飾格の語につきたるもの。
どうやらかうやら出來上つた。

慥かやら慥かでないやらはつきりしない。
さてこの「やら」はその不定の意よりして、種々の事柄を列擧して條件とすることあり。たとへば
おまへのやら私のやら色々まざつて居る。
何やらかやら譯がわからぬ。
打たれるやら蹶られるやら散々な目にあつた。
「か」も亦口語にのみ用ゐる副助詞にして不定の意をあらはして下の用言の意義を裝定するものなり。この「か」はもと文語の係助詞より轉じたるものなるが、文語にては係助詞として疑又は問の意をあらはせるに、口語にては一方にては不定の意のみをあらはして大體副助詞の性質をもつやうになり、一方にては、疑問の意をあらはして終助詞の性質をもつやうになりて二に分離せり。次の諸例を見よ。
格助詞「の」の上にありて連體格の語につけるもの。
何かのたしにはならう。
主格の語につけるもの
誰かをらう。
格助詞「ヲ」のあるべき地位に加へられたるもの。

幾つか買はう。
何かください。
格助詞の上にあるもの。
どちらかをあなたにあげます。
どれかにきめやう。
どこかへ行かう。
どこかから來た。
何かで見たやうだ。
格助詞の下にあるもの。
誰にかやらう。
吉川とかいふ人が見えた。
つぎの雲もどこへか行つてしまつた。
どこでか逢つた。
この「か」はかく副助詞の性質をあらはすに至りたれど、完全に副助詞になりはてたるにあらぬことは他の副助詞の下にのみ用ゐられて、その上に重ね用ゐらるることなきによりて知るべし。次にこの「か」はその不定の意よりして二以上の事を

並列して離接的に合せいふことあり。その例。

櫻か桃かゞ咲いた。

此の紙に繪か字か書いて下さい。

君か今村かに頼まねばならぬ。

君か僕かさへ承知すれば出來るのだ。

讀みか書きかする。

かくてこの性質のものは主格に立つとき、又は格助詞を伴ふ場合には最後の「か」を除き、中間にのみ「か」を存することあり。その例。

一人か二人くる。

梅か桃をくれ。

あれは和田か大島でせう。

「だけ」も亦口語にのみ用ゐる副助詞にしてその意義を見れば、或はこれに限る意をあらはし、或は程合をあらはして以て下なる用言の意義を装定するなり。

「だけ」のそれに限る意を示すもの。

家族だけ殘る。

見るだけ許す。

友達にだけ話す。
「だけ」の程度を示すもの。
家の高さだけ積みあげる。
入用はそれだけか。
ほめられるだけの直打はある。
「だけ」に副助詞の性質の存することは次の諸例にて明かなるべし。
格助詞「の」の上にありて、連體格の語につけるもの。
これだけの事か。
これはこゝだけの話にしておきませう。
主格の語につけるもの。
これだけある。
三つだけある。
格助詞「ヲ」の位置に加へられたるもの。
子供だけつれて行きます。
こゝだけなほしてくれ。
格助詞の上にあるもの。

これだけが残つた。
それだけをあげます。
仲間だけに見せる。
あの人だけと行きませう。
向島だけへ行くのだ。
木だけでこしらへてもよい。
格助詞の下にあるもの。
子供をだけつれて行つてくれ。
友達にだけ話す。
親類へだけ送る。
私は君とだけ遊ぶのだ。
これはこゝでだけこしらへるものです。
修飾格の語につけるもの。
も少しだけまけてくれ。
ちよつとだけまつて下さい。
これが附屬するにより修飾格の語をなすもの。

家の高さだけつみ上げる。
のびればのびるだけきつてとる。
「くらゐ」は又「ぐらゐ」ともいふ。これも口語にのみ用ゐる副助詞にして、分量程度を示して下の用言の意義を装定する用をなすものなり。これは元來名詞の「くらゐ」より轉成したるものなるが現代の口語にては副助詞の性質を有せり。その用例次の如し。
格助詞「の」の上にありて、連體格の語につけるもの。
それぐらゐの事は誰にも出來る。
それは栗の實ぐらゐの大さだ。
主格の語につけるもの。
三つくらゐのこればよい。
格助詞「ヲ」の位置に加へられたるもの。
小學校くらゐ卒業してからにせう。
三等賞ぐらゐくれてもよからう。
格助詞の上にあるもの。
百圓ぐらゐが相當である。

そんな事ぐらゐに恐れるものか。
吉田君の宅ぐらゐへ行くのだらう。
僕にはこれぐらゐより出來ない。
そんな事ぐらゐですむものか。
格助詞の下にあるもの。
この本をぐらゐ讀めぬことはない。
少佐にぐらゐなれるだらう。
あの人とぐらゐ取組まれよう。
日のあるうちに高崎へぐらゐ行かれよう。
あの人からぐらゐくれるだらう。
そんなものでぐらゐたゝれて痛いものか。
修飾格の語につけるもの。
ちよつとぐらゐ來てもよいではないか。
すこしぐらゐ見せてもよからう。
これがつくによりて修飾格をなすもの。
透き通るくらゐ色が白い。

痛いぐらゐうつた。

第二十章　係助詞

係助詞は陳述をなす用言に關係ある語に附屬して、その陳述に勢力を及ぼすものにして、これらは從來係詞といへるものなれば、之を他の助詞と同じ樣の名を與へむが爲にかく名づけしなり。

係助詞に屬する語は文語にては「は」「も」「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」「な」にして、口語にて「は」「も」「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」等なり。

さて今吾人がこれらを係助詞とすることは誰も異論あるまじけれど、その係助詞の意義と實質とは從來甚しき誤解を傳へ來れり。卽ち係といふことの意義の誤解よりしてかの副助詞と稱すべきものをも之に入れ、甚しきは格助詞をも係のうちに入れたるものあり。これ係といふことの眞意を知らざるは勿論、各助詞の本性をも知らざるによりてなり。著者の研究は助詞の中にてもこの係助詞とその他との比較に端を發したるものにして、その係といふことの眞意は既に百年の昔に於いて詞の玉緖によりて明かにせられたるものなり。

抑も係といふ語は本居宣長の唱へし術語にして、余がそれに基づきて係助詞と

いふ名を設けたるなり。その係といふ事の意義は本居は詳細に說明してはあらず。されど本居は係を「はも徒」「ぞのや何」「こそ」の三類に分けて說けるが、その「徒」については「上にこそ、ぞのや何はも、などいふ辭のなきを今かゝりに徒といふ」と說明してあるが故に、上にあげたる以外に係詞を認めぬものなる事は確かなり。このうち「の」が係にあらずといふ事と「何」（疑問と不定と汎稱との意をあらはす語の總名）が係の如くに見ゆるはその下に「か」の來る時に限るものにして「何」の係といふは實は「か」の係にして「何」のみにては係になるものにあらず（これは不定又は汎稱の意に用ゐる時なり）といふ事萩原廣道の「てにをは係辭辨」によりて唱へられたり。この萩原の說はこの點に於いて正しきものにして本居說の不備を補ひ正したるものとして永く學界の定說となれり。然れども萩原はそれと同時に「徒」といふは「は」「も」の外「て」「に」「を」「の」「ば」「ど」「より」「まで」「へ」等をも含めていへるものとしたるなり。こゝに本居の云ひたる「徒」といふ術語の意味の誤解せられ、爾來百年許の間學界を惑したり。本居の「徒」といふ術語は今日の語にていへば、零といふ如き意味の語にして係となる辭の無き場合といふ意を示したるものなり。卽ちこれは消極的の語にして、他一切を拒斥したる意のものなり。然るに、萩原は積極的に他一切を包含したるものと見たり。こゝに大なる誤解を生みたるなり。萩原は上の二點を見れば、本居

宣長の說に對しては功罪相半すといはざるべからず。萩原の爲に本居の「徒（タヾ）」といふ術語が誤解せられてより、それが爲に係辭といふ術語の意味も明かならざるやうになれり。本居は係の意味をば明確には說明せざれど、「は、も、ぞ、なむ、や、か、(これは萩原の訂正にかゝる)こそ」の外に係詞は無きものなりと考へたるに相違なし。然らざれば「徒（タヾ）」といふ術語を按出すべき道理なし。抑も「係り」といふ語を廣く解すれば他に關係すといふ意味なりといふべく、かく廣く解すれば、萩原の如き事にもなり、なほ一層ひろくすれば一切の語は皆他にかゝりあふものなれば、皆係となるといひうべきものとならむ。こゝに問題はその「係る」とは何に係るをいふなるかといふ、その「係る」といふ事にうつらずばあるべからざることゝなるなり。こゝに著者はその何に係るものなるかの研究に沒頭すること多年、終にそが陳述に關與するものなることを明かにし得たるなり。かくて吾人は眞に係助詞と稱すべきものは萩原の補正を經たる「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」及び「な」を加へて之を文語に於ける係助詞と認めたり。さて又口語に於ける係助詞といふものは上の係詞と同じ性質を有することを認めたるものにして、これ實に全然著者の創意といふべく、近時口語法を說く人あれど、口語の助詞にも係助詞ありと考へたるものなきが如し。これ係助詞の眞價を認識せず、所謂係結の現象といふ外形上の說明のみに拘

泥するが故なるべし。

この係詞の大體の認識は室町時代に於いて略成り立ちてありしもの丶如く、かの歌道秘藏錄に大事の口傳として示したる歌に

ぞる、こそれ、思ひきやとは、はり、やらん

これぞ五つのとまりなりける。

とあるは「ぞ」「こそ」「は」「や」の四をあげてその係結を示せるものにして、本居のこれに加へたるは「も」「なむ」の二なり。（「の」「何」をも加へれど、その誤なることは既にいへり。）これは數量的にいへば僅かに二個を加へたるに止まる。されど「徒」といふ術語を立てたるにて本居はその他が係にあらざるものと認めたる事は明かなり。然るに今日にてもなほ「係」といふは結の活用形を變形せさする事柄をさすものなりとやうに考へてある人も往々あり、又「こそ」に對して口語にては普通の終止を用ゐるにより「係」などいふものは既に亡びたりと思ふ人もまた存するやうに見ゆ。されども、かくの如き人は外形のみを見て、他を知らぬ人にして國語の學理を語る資格のなき人と思はる。これらが陳述を導くものなることは下に說く所にて明かなるべし。さても係助詞の係といふ事の意味は上述の如くなるが故に、口語に用ゐるのみの助詞にもこの種類のもの丶存するものを認むるなり。それは「さへ」「でも」「し

か」「ほか」といふものなり。

係助詞は主として副助詞の如く用ゐらるれども、その支配する點は陳述の力にあり。即ちこの種の助詞が上にあらはるゝ場合にはそれに對して一定の陳述をなさずしてはこれらの結末がつかぬなり。この故にその性質によりて陳述に一定の約束を生ず。係助詞の特質は種々あるうち、その第一は上述の陳述の勢力を支配する點なり。この故に述語との關係に於いて形の上にさへ特種の約束を生ずることあり。この述語にあらはれたる特種の約束は即ち結と稱せられたるものなり。さて係結の法則とは從來往々「ぞ」「なむ」「や」「か」が係となる時に述語は連體形を以て終止し、「こそ」が係となる時は已然形を以て終止すとせる現象をいふとせり。されどこれは係結の中にても特別の現象にして本居翁のいへる如く「は」「も」に對して普通の終止形を以て終止するも亦係結たるなり。抑も係とは述語の上にありてその陳述の力に關與する義にして結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふなり。そのかくの如く普通の終止形にて終止するをも係結と稱する所は、實にこれらの助詞が陳述の勢力に大なる關係を及ぼすを以てなり。この關係を忘れたるものは、この類の助詞と格助詞、副助詞との區別を認むること能はざるなり。

係助詞の大部分は時として述語の下に附きて以て陳述の方法に關與することあり。この性質の最も著しきは「や」「か」にして、これが終止に用ゐらるゝことは古來認められたる所なるが、又「ぞ」「は」「も」かくの如く用ゐらる。「も」は現今は終止に用ゐずといへども、古代にありては終止に用ゐたり。又「な」は古來終止に用ゐられたれば異論あるまじきものなり。更に考ふるに「なむ」「こそ」も亦古は終止に用ゐられたり。かくてこれらは終止に用ゐらるゝ時はそれ〴〵特別の意味を分擔するものなり。「や」「か」は本來の意義より疑問をあらはし、「は」「も」「ぞ」は意味を强むる用をなし、「なむ」「こそ」は希望をあらはし、「な」は本來の意味より禁制に用ゐらるゝなり。かくの如き性質は著者の創見にかゝることにして係助詞の特性の一たるなり。

以上係助詞が、その特性の一として終止にも用ゐらるゝことの現象は、古今を通觀しての事なるが、ある一時代を限りて見れば、その時代にはこの係助詞は係としての用法なくして終止に用ゐらるゝ場合あり、又終止としての用法なくして係たる用法のみのこともあり。たとへば「な」は古は係にも結にも用ゐしに、今の口語には終止にのみ用ゐ、「も」は古は係にも結にも用ゐしに、今は文語にも口語にも結として用ゐることとなし。かゝる場合には吾人は便宜上そが係としての用法のみのものは係助詞とし、終止のみに用ゐらるゝものは終助詞として取扱ふべし。卽ち口語

にては「な」は終助詞とせるが如し。これ或る時代の現象として說く時は止むを得ぬことなるが、畢竟するに、終助詞も係助詞もそが、陳述に關與すること同樣なれば、廣汎なる意義を以てすれば、この二種は本源一なるものたることは殆ど疑ふべからざるに似たり。

係助詞は格助詞のその在るべき地位に存せぬときその位地に加へ用ゐらるゝことあり。而して格助詞と同時に用ゐらるゝ時には、その下に加へらるゝことは副助詞に似たれど、格助詞の上に置かるゝこと決してなし。これ副助詞と係助詞との區別の要點の一なり。

格助詞の無き所に加へられたるものゝ例

人は萬物の靈なり。

我庭は雪ふりつみて道もなし。

私はちつとも知りませぬ。

かゝる人も世にいでおはするものなりけり。

頭の雪となるぞわびしき。

春やとき花やおそき。

其人かたちよりは心なむまさりたる。

なんでふ事かあらむ。
黒紗の如き雲の絶間より月こそあらはれて候へ。
雨こそ降らないが、いやな天氣だ。
皮は勿論骨さへくさつてしまつた。
あのかたしかおいでになりませぬ。

格助詞に附屬せるものゝ例。

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ。
笛竹の聲のうちにも思ふ心あり。
なにをうしとか夜たゞなくらむ。
出雲へぞ行く。
茶をこそ飮んだが、菓子はくはぬ。
人には劣らぬ。
子供にさへ出來る。
どこへでも行け。
雪よりは白い。
筆でほか書かれぬ。

これでもない。

格助詞は副助詞と重ね用ゐらるゝことあり。この時には副助詞の下にのみつきて上に置かるゝことなし。これも亦副助詞と格助詞との區別の要點の一なり。その例。

櫻花ちるまをだにもみるべきものを。

今年ばかりは墨染にさけ。

夜中までなむゐはせし。

住江のゆきてさへこそみまくほしけれ。

こと人を目に近くだにぞみざりつる。

こゝなどは田舍も同じ事だ。

仕舞までこそ見ぬが、大抵はわかる。

それぐらゐでもよい。

これだけしか殘つてゐない。

君などでも出來ることだ。

係助詞は時として相互に重ね用ゐらるゝことあり。この場合は特に用例あるものに限り、全體が必ず相互に重ね用ゐらるるといふにあらねど、この助詞の性質の

說明としてなほ必要なるものなれば、次に例を掲ぐ。

うらめしく君はもあるか、宿の梅の散りすぐるまで見しめずありける。

春雨にぬれてたづねむ櫻花、雲のかへしの嵐もぞふく。

かくさける花もこそあれ、わがために同じ春とやいふべかりける。

我こそは新島守よ。

かくの如きは古語に多きことにして、文語之につぎ口語には多からず。口語の例

君こそは百まで大丈夫だ。

あの方でさへも出來ないものが、私などには猶更です。

係助詞は又接續助詞「ば」の下に附屬して上の句と下の句との關係を緊密に結合することあり。この時は下の句の述語に勢力を及ぼすものなり。

この性質は格助詞、副助詞に全くなき所にしてこれ亦係助詞の特質の一たり。

この際には「は」「も」は接せずして「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」「な」の六語は用ゐらるる。これらの例

まろをあつまりてうて。さらばぞたれも子はまうけむ。（狹衣、四）

いにしへも今も心のなければぞうきをもしらで年をのみふる。（後撰、戀六）

けどほからず、もてなさせたまはばなむほいなるこゝろすべき。

ものしつればなむきこえずなりける。　（源、澪標）

心あてに折らばや折らむ、初霜のおきまどはせる白菊の花　（宇都保、國讓中）

草のはにかゝれる露の身なればや心うごくに涙おつらむ。　（古今、秋下）

いくばくの田をつくればか時鳥しでの田長を朝な朝なよぶ。　（大和物語）

いかならむいはほの中に住まばかは世のうき事のきこえこざらむ。　（古今、俳諧）

（古今、雜下）

なみなみの人ならばこそあらゝかにもひきかなぐらめ。　（源、帚木）

げにわが心ざしをみたまへばこそかくものたまへ。　（宇都保、國讓、中）

さらばなたのまれそなどむづかれば。　（枕、七）

この現象は以上の如く文語には稀ならぬ現象なるが、口語にては「こそ」にのみこの現象の存するを見る。その例

それを思へばこそやかましくいふのだ。

長ければこそきるのである。

手があればこそ始めて今日の人間になつたともいへる。

以上の如き例の存するはこれ實に係助詞が陳述の力に關するものたるを證す

るものにしてかの接續助詞の「ば」の如きも本源は或はこの「は」にしてそれが變形せしものならむの疑あり。又「も」は「と」「ど」の下に附屬して「とも」「ども」の形をなせり。かく或は接續助詞と變じ或は接續助詞を助くるものとして用ゐらるゝことこれその助くる主點が陳述の力に存するを以てなり。

以上、係助詞の特色はよりより述べたるが、今それらを一括して次に示すべし。

一、格助詞と係助詞とは重ね用ゐらるゝことあり。その時には係助詞は必ず格助詞の下にあるべきものにして、決して上に行くこと無し。

二、副助詞と係助詞とは重ね用ゐらるゝことあり。この場合には副助詞は係助詞の上にのみありて、決して係助詞の下に行くことなし。この關係は儼然たるものにして決して例外をゆるさゞるなり。

三、係助詞は時として相互に重ね用ゐらるゝことあり。この場合にはは「はも」「もぞ」「もこそ」「もや」「ぞは」「ぞや」「こそは」「やは」「かは」「やも」「かも」「かや」などの用例あり。されど必ずしも自由なりとはいふべからずして一定の慣例あるものに限るならむ。古くは「はなむ」「なむは」「はな」「もな」「もなむ」「ぞなむ」「ぞも」「やぞ」「なむは」「こそや」等の例も見えたり。

四、係助詞は接續助詞「ば」の下につきて、その上の句とその下の句との陳述の關係

を嚴密に結合する用をなすことあり。而して、この第四次の特性は格助詞、副助詞には決して無きことなり。

以上は外形的のことなるが、內面的には、

副助詞と係助詞とはすべての格に通じ、又下に來る用言に關係を有する點に於いて共通する所あるが如くに見ゆ。然れども副助詞は下の用言の意義卽ち屬性に關係を有するものにして、係助詞は下の用言の陳述の力に關係を有するものなれば、その對象に差あるなり。

こゝに係助詞の一般論の終りに臨みて、係助詞の用法上、古文に見ゆる特種の現象を一二述べむ。その一は次の例の如きものなり。

人の心こそうたてあるものはあれ。（源、葵）

殿守づかさこそなほをかしきものはあれ。（枕、三）

男こそなほいとありがたくあやしき心ちしたるものはあれ。（枕、三）

これらは、上の「こそ」のつきてあるものは主格なるが、下の「は」のつきてあるものは賓格なり。「は」がかやうに賓格について、今の口語の「で」に似たる如き意味になりてあるは、それが陳述に深き關係ある爲なり。次は、

秋芽子乎妻問鹿許曾一子二子持有跡五十戶。（鹿こそ一子二子持たりといへ）

いふなれ。（萬、九）

是亦此之島根乃人爾許曾有伎度云那禮（是も亦此の島根の人にこそありきと

いふなれ。）（續日本後紀、長歌）

父みかどの位に即かせ給ひて五日といふ日に生れ給へりけんこそいかに折

さへ花やかにめでたかりけんとおぼえ侍れ。（大鏡、淸和）

こひしきもかたもかたこそありときけ。（古今、俳諧）

などの形なり。これらは「こそ」が主格その他についてあり、かくて、その主格に對し

ての述格は「と」の上にある「持たり」「ありき」「めでたかりけん」「あり」なる事は明かなり。

しかるに、それらは「こそ」に對する結としての形たる已然形をあらはしてあらぬの

みならず、かへりて、「と」の下にある語が「いへ」「なれ」「侍れ」「きけ」といふ已然形を以て陳述

をしてあり。かくの如きはもとより常規をはづれたるものなり。しかしながら

古代にはこれも萬葉時代より平安朝にかけて頗る汎く行はれたるものなること

明かなり。然らば常規をはづれてはあれど、これが行はるべき事情なくばあらず。

余はこれもその係助詞の勢力が、下の陳述を支配するその力の一種の變形と考ふ。

卽ち當然の形はその「と」の上の述格に勢力を與ふべきなるが、この「と」にて下につゞ

くる時にこの「と」の境を越えて、その下の述格に勢力を及ぼしたる爲と見ゆ。而し

てこれは「こそ」が上にある時に限らるゝものなるが、それは「こそ」が最も力の强き係詞なるが爲なるべしと考へらる。

「は」はその意排他的にして事物を判然と指定し、他と混亂するを防ぐに用ゐらる。これが係となる時に之に對する結は終止形(口語にては連體形)を以てするものなり。その例、

雪は白し。

夏は暑くて、冬は寒し。

竹は絕えてなく、杉も甚だ稀なり。

遠くは三浦三崎の山々まで見ゆ。

人には劣らぬ。

これではない。

憎にはいはれぬ。

又之を用言の連體形に附屬せしめて終止することあり。この時は强く主張する意をあらはすに用ゐらる。その例

げに面白かりけるは。

そは我も知り候ふは。

この形は平安朝の文に頗る多くあらはれたり。而して現代の口語にても多く用ゐらるゝものなり。こは感動をあらはすが如くに見ゆれど、なほ然にはあらずして、述語の下につき辨別する意をあらはせるなり。その例、

銀行が年々殖えるは‖。

みんな濟んだは‖。

これは重いは‖。

この「は」は從來往々主格を示す語なりと誤り認められ、今なほかく信ずるものなきにあらず。これにつきては主格といふもの、本質の說明を確かに示す必要あれど、そは後に讓ることとして直ちに「は」につきてこれを論ぜむ。「は」は判定辨別の意をあらはすものなるによりて、陳述に關係を有すること及び、その格助詞の代理をなし、又格助詞と重ね用ゐることの特質を有するを以て格助詞ならぬことは明かなり。而して格助詞にあらぬ以上、主格を示すを本性とせぬことはいふをまたぬ所なり。されど

(一)鳥が飛ぶ。

(二)鳥は飛ぶ。

といふ如く、事實上「が」も「は」も主格につける場合にありて、これを一方は主格を示し、

一方は主格を示すにあらざることを明かに認むること能はずといふが如き問に往々接することあり。こゝにこれらにつきて少しく說く所あらむとす。この場合に於いては二者の差は「が」と「は」とに止まるものにして、文句の構成は同一なりといひて差支なく、又「鳥」の主格たることは明かなるが故に、「が」も「は」も主格を示してあるものと云ひても不可なきが如くに見ゆ。されど、主格の語に附隨するが故にその助詞が主格を示す性質を有するものなりとは直ちにはいひ得ぬ筈なり。何となれば、その主格の語に附隨してあるは、その本質が主格を示すものなるに因ることもあらむ。或は又偶然主格の下に用ゐられたりと云ふ事無しとは斷言しうべからぬ道理なり。こゝに於いて他の類似の場合を考ふるに、

鳥も飛ぶ。　　鳥でも飛ぶ
鳥まで飛ぶ。　　鳥だけ飛ぶ。
鳥さへ飛ぶ。　　鳥ばかり飛ぶ。

といふ如き事も少からず。而してこれらの場合にても「鳥」と「飛ぶ」との關係はかはらぬものなり。然らば「も」「でも」「まで」「だけ」「さへ」「ばかり」といふこれらの助詞が主格を示す性質を有するものなりといひうべきか如何。如何なる人も、これらの助詞が主格を示す性質を有すとはいひ得ざるべし。されば、これらの助詞がかく主格の

語に附隨してあるはいはゞ、偶然的の現象にして、それらは本質的に主格を示す性質を有するによりてこの現象を呈すとはいひうべきにあらず。かかるが故に「は」が主格を示す本質を有する爲に「二」の如き例の存するものなるか否かは上述の理由によりて輕卒には決定しうべからぬ事柄なりといふことは明かなり。次に、上にあげたる「一」「二」の例を基として、それらを少しく變形してその「飛ぶ」といふ語を連體格とする爲に下に或る體言を加へ試みるに

(三)鳥が飛ぶ時

(四)鳥は飛ぶ時

といふ如き關係となるべし。この場合に「が」と「は」とは同じ作用を呈して見ゆるか如何。「三」の場合には多少物足らずとは考ふるが、それはこれの下に存すべき語が未だあらはれざるが爲なりといふのみにして、「が」の助詞の作用のみにつきて考ふる時はそのまゝにて十分なるものにして、不滿足の感は起らず。これは如何なる理由によるかといふに、この場合には「が」の勢力は「飛ぶ」といふ語に及ぶのみに止まりて「時」といふ語には及ばざるが故なり。即ち「が」は主格を示すものなるが故に、その主格の對手たる「飛ぶ」に關係を結べば、その役目は果されてあるが爲にして、その外には關係無き故なり。(主格の本質、隨つて主格の對手の何なるかといふことも

從來の說明にては不十分なり。下に說く所あらむ。即ちその「が」にて示すべき關係は「三」の場合には既に果されてある故なり。これを以て「鳥が飛ぶ時にはその姿勢を見たまへ」。「鳥が飛ぶ時には空氣が動く」などいひても「鳥が」と「飛ぶ」との結合はいつもかはることなし。然るに「四」の場合には「鳥は」と「飛ぶ時」とは分離して考へられ、その「鳥は」に對して必ず「飛ぶ時に」「どうするか」とか「どうなるか」といふ如き或る說明を要求することは明かなり。この場合にそれに對する說明若しなきならば省略か、若くは片言なりといはざるべからず。こゝに於いて、たとへば

(五)鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

といふ時には「鳥は」の「は」は「羽根をこんな風にする」といふ說明を導き出せるものなることと明かにして、「飛ぶ」に直接の關係の無きこと明白となるなり。されど、この場合にも「鳥は」主格なるが故に「は」は、主格を示すならむといふ疑は未だ十分に離れ得ざるべし。次に、

(六)鳥は飛ぶ時の姿勢を見る。

といふ如き事ありとせよ。この場合には「鳥は」の力が「飛ぶ時」に對するにあらずしてその下に及ぶものなることと明かなるが、その「鳥は」が「見る」に對しての主格なりとする時には「鳥が他のものゝ飛ぶ時の姿勢を見る」といふ意になるべきものにして、

國語としては尋常のいひ方にあらず。普通に「六」の如き文を見れば、「鳥をば」「人が」「見る」にして、「鳥は」は主格にあらざる事となるべし。又これを更に少しくかへて、

(七)鳥は飛ぶ時の姿勢を見たまへ。

とする時には「鳥は」は決して主格にあらずして、確實に「鳥をば」の意となる。然るに以上すべてに通じて「鳥は」といふ形とそれにつゞく「飛ぶ」といふ語との形には變動なきなり。こゝに於いて「鳥は」といふ語と「飛ぶ」といふ語と或は結びつき、或は離れするは如何なる事情と理由と原因とによるものなるかといふ問題起る。こゝに、考ふるにいづれの場合にも二者の形も位置も變化せぬものなるが故に、その差異は内面に起りてあるものならむといふことは疑ふべからず。而してその差はその「飛ぶ」が陳述をなすに用ゐらるゝか、他の語の裝定に用ゐられてあるかといふ點の上に存す。さらば、それが陳述に用ゐらるゝと裝定に用ゐらるゝとによりて「鳥は」と結びつくか結びつかぬかといふ差の生ずる理由はいづこにあるか。かく考へ來れば、「飛ぶ」といふ語の示す屬性的方面は二者に共通してあるが故に、これはその屬性的方面の上に「鳥は」の結合すべき對手の無きものなりといふ事は明かなり。即ち「飛ぶ」が陳述をなす時には「鳥は」と結びつき、「飛ぶ」が下の語の裝定をなす時には「鳥は」と結びつかずといふ事になり、結局、これは下の「飛ぶ」が陳述をする格に立つか

立たぬかといふ事によるものなりといふことに歸す。こゝに於いて「六」「七」の場合を考ふるに、これらの場合は「は」が上にありて、下に或る陳述を要求してある點は「二」「五」の場合と同樣なり。然れども「二」「五」の場合には主格としての「鳥」につき、「六」「七」の場合は主格としてにあらざる「鳥」につきたるものにして、主格には附きてあらぬなり。こゝに「二」「五」「六」「七」四の場合に共通せる點を考ふれば、主格に附屬すといふことは本質的のものにあらずして偶然の現象たるに止まり、いつも下に陳述來らざれば治定せずといふことを認むべし。かくの如く考へ來てはじめて「は」といふ助詞は主格を示すことを本性とするものにあらずして、その本質は一定の陳述を要求すといふ點にある事の明白になるべきなり。本居宣長の「係り」といひしは實にこの意味にてありしにて「結び」と云ひしはそれに對する一定の陳述をさしたりしなり。而してかゝる性質は係助詞すべてに通ずるものなりとす。

「は」のこの性質はおぼろげながら古くより知られてありしなり。上にもあげたるかの歌道秘藏錄に大事の口傳として示したる歌にある「はり」といふは「は」といへば「なり」とか「けり」とか「たり」とか云ひて之に對するものなりといふ說明なるが、「は」は元來論理的性質をよくあらはすものなるが故に「なり」などにて結ぶこと最も頻繁にあらはる。而して「は」が主格をあらはすものなりと誤認せられたる理由の一部

にはこの論理的性質を有すといふ事に存すと思はる。我々が論理的にものを明確に言はむとするには、いつも「は」を用ゐる。而して普通には主格の語にこの「は」を加へて用ゐる。かくて又その主格といふことも元來論理的に考へ出されたる事なるが故に、論理學に用ゐる主格の語には專ら「は」を加ふ。或はかやうにして論理學上用ゐる主格には「は」のつくといふ點より「は」は主格を示す助詞といはるゝに至りしものならむとも思はるゝふしあり。されどこれらは非論理的頭腦の持主の謬見たるを免れず。以上「は」の事を一往說きたるが、その上に主格の本質についての誤解よりして、前述の誤を一層深めたるものゝ如し。主格の事は後に詳論すべきが、こゝに便宜一言せむ。現今の文法家は殆どすべて、主格を以て叙述の力と對立するものゝ如くに考ふるやうに思はる。もとより叙述の格と主格と對比することある場合ありといへども吾人の見る所を以てすれば、この主格なるものは賓格と對立するものにして叙述はその主賓の二の格を關係づけて結成せしむる力を有するものにして、叙述の格と主格とは本質上對立すべきものにあらざるなり。それ故に叙述を導くもの卽ち主格なりとするはこれ亦一種の迷妄たるなり。

「も」はその意、對比的含蓄的にして、事物を擧げ示して同樣の事物のこの他にも存することを言外に暗示するものなり。これは現今は文語にも口語にも係として

のみ用ゐられ、それに對する結は終止形(口語は連體形)を以てするを法とす。その例

雪も白し。
東も西も海ばかりなり。
花も咲きぬ。鳥も鳴きぬ。
さすがの豪傑も之を破ることが出來ない。
一言いつてもおこられる。

又之を用言の終止形に附屬せしめて終止し、以て感動をあらはすことあり。たとへば、

雲路まどひて行くへしらずも。
あまの小舟のつなでかなしも。

の如し。この現象は奈良朝時代に盛んに用ゐられたるが、後世漸く衰へ、現代には全く見ざるなり。

「ぞ」は他の事物に關せず、一の事物を强く指す意ありて、普通には說明を爲すに用ゐられ、又疑問をあらはすに用ゐらる。而してこれが係となる時はそれに對して用言を述語として用ゐる時は連體形を以て結とす。その例

其の勢決然として攻むべき樣ぞなき。

心得ぬ事のみぞ多かる。

無禮講といふ事をぞ始められける。

夕涼よくぞ男に生れける。

以上は說明の場合の例なるが、疑問をあらはす場合は上に必ず疑問の意をあらはす代名詞又は副詞のあるなり。

汝何ぞ余が言を信ぜざる。

そのかげにはにかめる菫菜花の何ぞ美しき。

「ぞ」は又終止として用ゐらるゝことあり。この時には體言につく場合と、用言の連體形につく場合とあり。その體言につけるものゝ例、

誰か美術問題を目して閑人の閑問題となすものぞ。

あれは何の煙ぞ。

その用言の連體形につけるものゝ例。

惣門は錠のさゝれて候ふぞ。

こはいづこへ行くべきぞ。

かくてこれらは又說明をなす場合と疑問をあらはす場合とあり。この說明をなせるものゝ例、次の如し。

まろはさらにものいはぬ人ぞよ。

さる事は我は知らぬぞ。（堤中納言物語）

疑問をあらはす場合には係の場合と同じく、必ず上に疑問の意をあらはす代名詞又は副詞のあるなり。それらの例、

汝は何者ぞ。

一人して二人の物をばいかでかもつべきぞ。

「ぞ」は現代の口語には係助詞の性質を失ひて、間投助詞の性質を有するに至れり。この故にそれらは間投助詞の條に說くべし。

「なむ」は一の事物を特示してそれに感情の集注せることをあらはすものにして、これが係となる時には用言の連體形を以て結とす。その例、

其の人かたちよりは心なむまさりたる。

これを治せむやうは面に水なむいるべき。

「なむ」は又終止として用ゐらるゝことあり。この時には用言の未然形に附屬するものにして、他に對して希望の意をあらはす。その例、

鳥も啼かなむ。

苦しき冬は早くすぎなむ。

この結となれる「なむ」は係となれる「なむ」と別種のものと見ること從來の說なれど、他の係助詞皆終止となるを得るに照して考ふるに、これも亦この終止的用法に外ならじ。「なむ」は近世に至りては全く用ゐず、今日にては擬古文に僅かに用ゐらるることとあるのみ。

「こそ」は一の事物をとりいでて特に指定する意ありて、これが係となる時には述格に立つ用言は已然形（口語にては連體形）を以て終止す。その例、

黑紗の如き雲の絕間より月こそあらはれて候へ。

ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ。

さる人こそさやうには惱むなれ。

以上は文語の例なるが、口語にてはその下なる述格が確かに斷言するか、若くは「が」にて下の句につゞけて强き反撥力を起さしむるなり。その例

これこそ本ものである。

それでこそ男といふものだ。

お前からこそ聞かないが、よく知つてゐる。

はきとこそせぬが、見えぬことはない。

讀ませこそするが、書かせはせぬ。

都にこそ居るが、世間の事は知らぬ。

「こそ」は又古く奈良朝時代にては結としても用ゐたることあり。この場合には動詞存在詞の連用形に附屬するものにして他に對しての希望をあらはす。その意「なむ」に似て一層逼れり。その例

酒にうかべこそ。

ちらずありこそ。

「や」は疑又は問をあらはすものにして、係となる時は述格に立つ用言は之に對して連體形を以て終止するなり。その例、

水や淸き。

月や出でたる。

而して又これを用言の終止形に附けて終止とすることあり。その例。

わが思ふ人はありやなしや。

物は覺ゆや。

我が心地も少したがふふしもいでくや。

思ひきや、かくあらんとは。

さることあるべしや。

これを往々連體形に添へて終止とするものあるは誤なり。この「や」は口語には用ゐることなし。

「か」は疑又は問をあらはすものにして、係となる時は巡格たる用言は之に對して連體形を以て終止す。その例、

皇御國の武夫は如何なる事をかつとむべき。

としごろは何事かしたまへる。

いづかたへかまかりぬる。

白露のちぎりかおきし、朝がほの花。

又之を體言又は用言の連體形に附けて終止とすることあり。その例、

霞か雲かはた雪か。

秋風のふき上げにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか。

われきゝて「その何故なるか」をとはず。

一人か二人來る。

の如し。口語にては「か」は係助詞の性質を失ひて一方に於いて終助詞となり、一方に於いて副助詞の如くになれるによりて、口語法としては二に分ちて說くことゝせるなり。

「な」は禁制の意をあらはすものにして、現今にては主として終止にのみ用ゐらるれども、古くは係としても用ゐられたり。その係として用ゐらるゝ時は之に對する述語は動詞(三段活用にては未然形)存在詞の連用形を以て、その下に「そ」を加へ終止するを法とせり。之を「なそ」の格と稱す。

この「なそ」の格は今日の文語には稀に用ゐることあれど、本來は近古以前の語法にしてそれより後に用ゐるは、皆古に擬したるに止まれり。それらの例、

たはわざなせそ。(萬葉集)

いたくななきそ。物思ふ我に聲なきかせそ。(古今集)

御立たしの島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで。(萬葉集)

天狗のするにこそあらめ。なおはせそと聞え給へば、(宇都保、俊蔭)

大將をな見そ。(宇都保、國讓、中)

おそろしきまでな聞えさせ給ひそ。(源氏、浮舟)

かくなのたまひそ。(宇都保、國讓、中)

さらばなたのまれそ。(枕草子、七)

この下なる「そ」はもと、係助詞の「ぞ」の清音なるものなり。さてこの格は奈良朝に

は下の「ぞ」なくして動詞の連用形のまゝにて終止せしものあり。卽ち

あやになこひきこし。（古事記）

父母も表はなさかり。（萬葉集）

淸き月夜に雲なたなびき。（同上）

あれなしとなわび、わがせこ。（同上）

沖へなさかり、さよふけにけり。（同上）

の如くにもいひしものなり。

「な」が終止として用ゐらるゝときは動詞に對しては終止形（口語にては連體形）に存在詞にては連體形に附屬す。その古語文語に於ける例、

わが振る袖をなめしと母布な。（萬葉集）

我兒我王過无く罪無く有らば、捨ますな忘ますな。（續紀、宣命）

人に語るな。

汝過ちすな。

龍の首の玉とり得ずば、かへりくな。

その口語に於ける例

聞いた事を忘れるな。

もう決してこんな所へくるな。
そんなやかましい議論をするな。

口語の終止形は連體形と區別なきが故に之に紛れて文語にても連體形に「な」をつけて終止すること往々見ゆ。これ誤なり。注意すべし。さて以上を以て「な」が他の係助詞と同じ性質なるを知るべし。但し、現代の口語にては終助詞といふを適當とするなり。

「さへ」は口語にては係助詞として用ゐられ、專ら陳述の上に影響を與ふるに用ゐらる。これは文語の副助詞の「さへ」の轉化したるものにして、係助詞の性質を帶び陳述の上に勢力を及ぼすやうになれり。かくてその意義は文語の副助詞の「だに」「すら」に似たり。而してこれは係としての用法のみあり。

その主格につけるもの。
水さへ喉に通らぬ。
犬さへくはぬ。
湯さへあれば、よい。
古來最多作の歌人と言はれた家隆卿さへ天皇に比べれば、物の數でもない。
格助詞の代理をなせるもの。

お茶さへ下されば、よい。

格助詞の上に用ゐることとなし。これは係助詞の特性の一なり。

格助詞の下にあるもの。

あなたにさへ相談しないのですか。

あんな强力でさへもてぬ。

せうとさへ思へば、いつでも出來る。

副助詞の下には用ゐらるれども、上にあること決してなし。これも係助詞の特性の一なり。

君だけさへ承知すれば、それでよいのだ。

その他の例

強くさへあれば、宜いといふ譯ではない。

其の要を提げさへすれば、其の他は之をあげる必要もなく、むしろあげない方がよいのである。

以上の諸例を通覽しても明かなる如く、この「さへ」は、實に下なる陳述に勢力を及ぼすものなることは明かなるが、その外形上あらはれたる現象を見るに、そが單文なる場合には必ず述格中に打消の語をあらはし、然らざる時はその句は必ず「ば」とい

ふ助詞につゞきて條件を示すに限られたるなり。

「でも」も口語にのみ用ゐるものにしてある事物をばその手近き方面としてあげ示し、他の場合を類推せしむる意をあらはして以て述語の上に勢力を及ぼすものなり。これも亦係としてのみ用ゐらる。元來この「でも」は格助詞の「で」に係助詞の「も」の附屬して生ぜるものなれど、その意に於いて「で」と「も」との意を別々にあらはすにあらずして、「でも」が一となりて新しく別の意と用とをあらはせるものなり。即ち意義に於いては文語の副助詞「だに」に似、用法より見れば、係助詞の特性を有せり。この故に格助詞の「で」に臨時に「も」の添はれるものと、かく一の助詞となりはてたる「でも」とは區別せざるべからず。

主格につけるものゝ例。

教師でも來たらばきかう。

格助詞の代理をしたるもの。

茶でもほしいものだ。

何でもしてみせる。

格助詞の上には決して用ゐられず。これ係助詞の特性の一なり。

格助詞の下にあるもの。

これをでも買はう。
誰にでもやる。
何とでもいへ。
昇降器は三十臺以上もあつて何階へでもまたゝく間に行かれる。
墨ででも塗らう。
副助詞の下には用ゐらるれども、上にあることは決してなし。これも係助詞の特性の一なり。
見るばかりでも許されぬ。
私などでもそれくらゐは出來る。
これだけでもとつて置かう。
その他の例。
靜かにでもしてくれゝばよいに。
心安くでもなつたら話すかもしれぬ。
帳面につけてでもおけばよかつた。
かくの如く手近き方をあげて他を類推せさせ、かねて係助詞の性を帶ぶるに至らしめたるは主として「も」の勢力に基づくものならむ。

「ほか」「しか」は同じ意の語なるが、これも亦口語にのみ用ゐるものにして、ある事物をあげて、それ以外を排する意をあらはして述語に勢力を及ぼすものなり。これも係としてのみ用ゐられ、これを受くる述語は必ず打消の意をあらはすに限らる。

主格につけるもの。

私ほかしらぬ。

この店には古いものほかない。

僕の庭には桃しかないのだよ。

あのかたしかおいでになりませぬ。

格助詞の代理をなせるもの。

ひとへものしかもつて來ない。

水ほかのまぬ。

格助詞の上には決して用ゐらるゝことなし。これ係助詞の特性の一なり。

格助詞の下に用ゐらるゝもの。

水をほかのまぬ。

この品は銀座にほか賣つて居らぬ。

上へほか向かぬ。

東京からほか來ぬ。
筆でほか書かれぬ。
それは庭をしか見なかつたからだ。
あの一件はあなたにしか話しませぬでした。
うそとしか思へない。
夕方からしか出かけられぬ。
それはほんの一瞬間の出來事でしかなかつた。
それは名古屋でしか出來ないものです。
副助詞の上には決して用ゐらるゝことなし。これも係助詞としての特性の一なり。
副助詞の下に用ゐらるゝもの。
これだけほかない。
これぐらゐほか出來ぬ。
京都までほか行かぬ。
九時までしか待たれぬ。
これだけしか殘つて居ない。

その他の例。

まだ一度ほかあひませぬ。
僅かほか殘つてゐない。
たまさかにしか逢はない。
ちよつとしか見なかつた。

この「ほか」は「より外」の意にして除外を示したるものゝ變形ならむ。「しか」はその源詳かならず。

第二十一章　終助詞

終助詞は述語に關係あるものにして常に文句の終止にのみ用ゐらるゝものなり。これが名目も又其の内容も著者の創定にかゝる。これらは文句の述素に關する點は係助詞に等しきものながら文句の終末にのみ用ゐらるゝを特徴とす。而して、その助詞は上に來るべき語に一定の約束を有し、又多くは陳述の性質に關するものにして命令、希望、感動等をあらはしつゝ終止するものなりとす。

終助詞は文語にありては「が」「がな」「か」「かな」「かし」「な」（感動）等あり。口語にありては「か」「え」「な」（希望）「よ」「い」「ろ」「とも」「ぜ」「さ」等あり。口語にありてはこの外禁制の「な」あれど、

係助詞の條に說きたればこゝに說かず。

「が」「がな」はいづれも希望をあらはすものにして、これは動詞の連用形を受けて「しが」「しがな」(「し」は複語尾なり)の形をなし、體言、形容詞及び打消の複語尾「ず」の連用形をうけて「もが」「もがな」の形をなしてあらはるゝを通例とせり。

上にいへる「しが」の「し」は「き」の連體形にして多くは之を以て上複語尾「ぬ」「つ」の連用形をうけて「にしが」「てしが」等の形をなして動詞にはこの形にてのみ受くるなり。「もがな」等の「も」は係助詞にして體言、形容詞等にはこの形にてうくるなり。それらの例。

世の中にさらぬわかれのなくもがな。(古今集)

老いず死なずの藥もが。(古今集)

今一度見奉るものにもがなとのみおぼえて。(源、寄生)

しりたる人もがな。(枕草子)

甲斐がねをさやにも見しが。(古今集)

心うし深き山にも入りにしが。(好忠集)

御返事をだにみうけてしがな。(源、夕霧)

これは中古以後「がな」といふ形のみ用ゐられ、その用法も亦間投助詞の如くなれ

り。この故にそれらは間投助詞の條に說くべし。

「か」「かな」はいづれも感動をあらはすものにして、用言のすべてに附し、その連體形を受け、又體言を受けて逃格とするなり。

あゝ悲しきかな。

きたなきみ方の振舞かな。

痛快なるかな、言や。

うつせみの世にも似たるか。

いとかしこくとりならべてもさきけるかな。

これらのうち「かな」は今の文語に盛に用ゐらる。されど、口語にはすべて用ゐることなし。

「かし」は念を押し力を添ふるものにして、すべて一旦終止の形をとれるものに附屬す。

これは普通の終止形につけるあり。その例

誠にあはれなりかし。

さは思ひつかし。

さても君忘れけりかし。

係助詞「ぞ」に附屬して「ぞかし」といふ形をなせるものあり。

去年の春の事ぞかし。

さてぞかし。

命令形に附屬するものは最も多く用ゐらる。

ふけかし、風のふかであれかし。

とめこかし、梅さかりなるわが宿を。

言の葉にだにかけよかし、君。

これは文語には用ゐれど、口語には用ゐず。

「な」は感動をあらはすものにして主として文句の終止をなせる語の下につきて終止し、又直に體言に接して述格を構成することあり。

汝は平家の侍よな。

いつとも知らぬ船出悲しな。

折々の御和歌などこそめでたく侍れな。

見せばやな。

さる見物やは候ひしな。

かれぞ䍐の少將な。

以上は文語の例なるが、口語にては用言の連體形につきて述語に感動の調子を添ふるに用ゐらる。

それは面白かつたですな。

この櫻の花は隨分見事だな。

それはよかつたな。

この「な」と希望をあらはす「な」とは同じ終助詞ながら意義と用法とを異にするによりて區別あるを見るべし。

「か」は疑問をあらはすものにして、文語にては係助詞なるが、口語にてはその係としての用法は性質をかへて副助詞の如くになり、疑問の意のものは終助詞として殘れるなり。これは體言又は用言の連體形につきて終止するなり。その例、

それぐらゐで追付く話か。

これは君の本か。

それでよいと思ふか。

明日僕の宅へ話にこぬか。

左樣でございましたか。

諸君文學とは何であるか。

「え」は口語にのみ用ゐらるゝものにして、元來は文語の係助詞「や」の終止に用ゐられたるものゝ、音を轉化せさせたるものなるべく、疑問の意を輕くあらはすものなり。これは說明存在詞「だ」又は複語尾「た」終助詞「か」にて終止したるにものに附屬するなり。その例

だれだえ。

なんだえ。

それからどうしたえ。

それでよいかえ。

どうだ面白かつたかえ。

「な」は口語にのみ用ゐるものにして、勸誘希望の意をあらはし、動詞の連用形又は漢語にして敬語動詞の素となるものにつきて終止をなす。その例

この本をよんで見な。

早くそこを下りな。

私と一緒にお出でな。

以上は動詞の連用形につけるものにして、

早くきて御覽な

五時になつたら起して頂戴な。

の如きは漢語にして敬語動詞の素たるものにつけるなり。而して敬語のものにつくもの多し。なほ又いづれも、それらのつかぬ場合にも命令希望の意はあらはされたるものなり。

「い」も亦口語にのみ用ゐるものにして、動詞の命令形に屬して命令の意を確かに示すものなり。これはすべての動詞に附屬しうべきものなるが、その著しきは三段活用の動詞につける場合なり。

早くそれを持つてこい。

こちらの方にせい。

又一段活用の動詞にも屢加へ用ゐらる。

さうしてくれい。

この問題を解いて見い。

「ろ」も亦口語のみ用ゐるものにして動詞に附屬して命令の意を確かに示して終止をなす。この「ろ」は元來東國の語なるが、主として一段活用の動詞に附屬するものなり。

いそいでたべろ。

これをみろ。

などその例なり。又左行三段活用にはその連用形につきて命令の用をなす。

こちらの方にしろ。

而して加行三段活用と四段活用とには附屬せず。

「とも」も口語にのみ用ゐらるゝものにして「勿論然り」といふ意を示すものなるが、用言の連體形に附屬して終止するものなり。

廣いか、廣いとも。

讀まれるか、讀まれるとも。

さうですとも。

よろしうございますとも。

これらは文語の「うれしとも うれし」などの如き形の下略より轉々して生じたる語法なりと考へらる。

「ぜ」も亦口語にのみ用ゐるものにして、念を押して指定する意をあらはし、用言の連體形につきて終止するものなり。これは文語にて終止に用ゐたる「ぞ」に間投助詞「や」のつきて終止せるもの即ち「ぞや」の一轉して「ぞえ」となれるものゝ約まりてなれるものと思はれたり。從つてその意義用法は「ぞ」の終止のものと似たり。

それはそれは美しいぜ。
花が咲くぜ。
君は待つてるけれども、あれは決して來ないぜ。
どこにもありませぬぜ。
もう出來たぜ。
「さ」も亦口語にのみ用ゐるものにして、輕く念を押して指示するものにして、用言の連體形、體言、副詞又は體言に準ぜられたるもの其他略語あるもの等を受けて終止す。
用言の連體形を受けたるもの。
そんな事はどうでもよいさ。
明日からは朝早く起きるさ。
それはそれはなかなか面白いさ。
さうやる方が人にすかれるさ。
體言又は副詞を受けたるもの。
知れた事さ。
それはその筈さ。

そこが妙さ。
體言に準ぜられたるものを受けたるもの
これは昨日僕が買つて來たのさ。
わたしも行きたいのさ。
下略の語につきて終止したるもの。
君はどこに行く。花見にさ。
今日は賑かだ。お祭だからさ。
さればさ。さうさ。

第二十二章　間投助詞

間投助詞は語勢を添へ、若くは感動を高めむが爲に用ゐらるゝものにして、その位置他の助詞に比して稍自由なるものなり。この助詞の名目も亦著者の創設せる所なり。これはその使用の範圍他の助詞に比して稍自由なるより名づけたるものなれど、全く無系統に使用せらるゝものにあらず。隨つて自ら一定の規律を存し、且助詞の本性として獨立に用ゐらるゝことなく他の品詞の上に附屬することなきは勿論なりとす。

間投助詞に屬するものは文語にては「よ」「や」「し」等にして、口語にては「よ」「や」「ぞ」「ね」「がな」等なり。而して「よ」「や」は文語口語共通といふべけれど、性質の上に稍差異あり。「よ」は確かに指示する意ありて用言の命令形禁制の語の下に附屬して命令禁制の意を確かにし、又呼掛の意をあらはして用言の連體形を受けて終止し、又體言を受けて述格に立たしめて終止し、又省略の叙述をなせるものにつき、或は呼格主格の下、格助詞「と」接續助詞「ば」の下に用ゐらる。

用言の命令形につけるもの。

忘れでまた訪ひ給へよ。（宇都保、菊の宴）

花を見よ。こなたへ來よ。早く起きよ。

獨立獨行せよ。

きこえ奉れよ。（宇都保、菊の宴）

文はよもみたまはじ詞にて申せよ。（大和物語）

あはれとだにおぼしおけよ。（源、藤袴）

朝露の思はむ所に猶さらばおぼし知れよ。（源、夕霧）

宮の御前に大殿ごもれよ。（狹衣物語）

禁制の語につけるもの。

われ人に見すなよ‖。
ひとりな月をみたまひそよ‖。
用言の連體形を受けて終止せるもの。
見るわれさへに心おのづから若やぐよ‖。
やみに惑ふよ‖。心和ぐよ‖。
體言を受けて述格をなして終止するもの。
我こそは天下第一の名僧よ‖。
もえわたる我身ぞふじの山よ‖。　（後撰）
略述をせるものにつきて終止せるもの。
さらばよ‖」とわかれし時に
よもあしくてよ‖」とみたけのたまはじとて　（枕草子）
呼格の語につけるもの。
こけの袂よ‖、かわきだにせよ。
友よ‖、來れ。
少納言よ‖「香爐峯の雪はいかならむ。　（枕草子）
主格の語につけるもの。

まろがまろねよ、いくよへぬらむ。（拾　遺）
その文よ、いづらとのたまへど。（源、夕　霧）
格助詞「と」の下にあるもの。
夢かとよ、見しにも似たるつらさかな。（狹　衣）
養和の頃かとよ。（方　丈　記）
接續助詞「ば」の下につけるもの。
さればよつひにあらはれにけり。
さればよあらはなりつらむ。
以上は文語の場合なるが、口語にては寧ろ終助詞といふべきものにして、用言の命令形又は禁制の語の下に附屬して命令禁制の意を確かにし、又體言の下、用言の連體形、又省略せる語法に附屬して終止するなり。
命令禁制の語につけるもの。
まてよ。
ごめんなさいよ。
そんな事しなさるなよ。
體言の下につきて終止したるもの。

知れた事よ。
その通りよ。
用言の連體形につきて終止したるもの。
さきの方はよつぽど深いよ。
あとからきつと行くよ。
皆さん、これが目じるしだよ。
釣つたよ。信夫翁を釣つたよ。
そんな事もありませうよ。
叙述の省略あるものにつきて終止したるもの。
それだからよ。
こつちの方がよ。
なにすこしばかりよ。
さうよ。
どうならうとまゝよ。
ごめんよ。
かくの如くなれば、口語にては終助詞といふを適當とす。

「や」はその意「よ」に似て稍輕く多くは語調を整ふるに用ゐらる。その命令形につくものは四段活用變格活用以外のものには「よ」を加へたるものにつきて終止するを普通とす。又用言の終止形その他一旦終止の形をとれるものにつきて感動の意を添へて終止することあり。又體言とその連體格の語との中間に入り、同じ語を繰り返す中間に入り、又感動副詞の下につき、又體言に附屬して呼掛をあらはすことあり。又事物を枚擧するに用ゐるものあり。俳諧にては汎く主題とする語を提示する爲に附屬せしむ。それらの例を次々にあぐ。

命令形につけるもの。

かかれや、者共と下知す。

うてや、こらせや。

心して行けよや。

用言の終止形その他、一旦終止せるものに附屬するもの。

うれしや、たのしや。

氣上りてものぞ覺えぬや。

軒端も遠く見えたるぞや。

體言とその連體格との中間に入れるもの。

難波津にさくやこの花。
さらしなや姨捨山。
近江のや鏡の山。

同じ語を繰り返す中間に入れるもの。

よの中はいかにやいかに。
うしやうしいとへやいとへ。

感動副詞の下につくもの。

すはや、一大事こそ出で來たれ。
いでや、この世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。
やよや、まて、山郭公ことづてむ。

體言に屬して呼掛をあらはすもの。

げにあが君や、をさなの御物いひや。（源氏、寄生）
朝臣や、さやうの落葉をだにひろへ。（同、常夏）

事物を枚擧するに用ゐたるもの。

柚や梨やなどをなつかしげに持たりてくひなどする。
みな人は蝶や花やといそぐ日も。

この場合には最後の「や」を省き、中間にのみ「や」を加ふることあり。

詩や歌などを弄びて日を暮す。

何となく花や紅葉を見る程に。

俳諧にその主題を示すに用ゐらるゝもの。

古池や蛙とびこむ水の音。

菊の香や奈良には古き佛達。

以上は文語にての事なるが、口語にては次の如き用例を見る。

命令の語につけるもの。

早くこいや。

それ見や。

そんな事はやめろや。

禁制の語につけるもの。

そんな事はすなや。

複語尾「ない」「う」「よう」の連體形につけるもの。

僕は知らないや。

皆で行かうや。

テニスをしようや。

呼掛の意をあらはして體言につけるもの。

坊や、おとうさまがおかへりだよ。

松子や、お使に行つて來ておくれ。

事物を枚擧するに用ゐたるもの。

今は菜種や櫻の花盛です。

露や時雨が色よくそめた。

牛乳は蛋白質や澱粉や脂肪を含んで居る。

ちつとやそつとの事ではない。

「し」は稍强力なる調子を添ふるものにして、文中にのみありて終止に用ゐらるゝことなし。これは格助詞の代理をなし、又は格助詞「の」「が」の上にあり、又格助詞の下にあり、係助詞の上にあり、又修飾格の下にも附屬す。

格助詞なきに主格の語につけるもの。

人し告げずば。

格助詞「の」「が」の上にあるもの。

誰しの人か知らざらむ。

一文字をだに知らぬものしが足は十文字にふみてぞあそぶ。
格助詞の下にあるもの。
之をしも忍ぶべくんば、何をか忍ぶべからざらむ。
ちる花のなくにしとまるものならば、
修飾格の語につけるもの。
うべし神世ゆはじめけらしも。
かくしこそ春の初めはうれしけれ。
係助詞の上にあるもの。これには「しも」といふ形多し。
これは物によりてほむるにしもあらず。
必ずしも然らざらむ。
島かくれゆく船をしぞ思ふ。
いつしか夜もあけぬ。
これが、格助詞の代理のやうに用ゐられ、又格助詞の下に用ゐらるゝ時は、多くは「ば」にて導かるゝ句の中に存す。たとへば
種しあれば岩にも松は生ひにけり。戀をしこひばあはざらめやは。
（古今集）

ちる花のなくにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは。
（古今集）

の如し。又單文中にありてはその述格は形容詞か、形容詞に似たる複語尾にて終るものあり。たとへば、

春の日は山しみがほし。秋の夜は河しさやけし。（萬葉集）

うへし神世ゆはじめけらしも。（萬葉集）

の如し。この點よりして係助詞の如くに見ゆるならむが、上にいへる如く格助詞の上に用ゐらるゝを見て、係助詞にあらぬことを明かに認めうべし。この助詞は文語にのみありて、口語には用ゐず。

「ぞ」は口語にのみ用ゐるものにして、文語の係助詞「ぞ」の變化したるものなり。かくて、その主格に接し、格助詞の代理をなし、連用の語に附屬し、用言の連體形について終止することは係助詞に似たれど、格助詞の上にあり、又連體格の語に附屬することは間投助詞の性質をあらはせり。

格助詞の上にあるもの。

誰ぞにやらう。

これぞといふ程の事もない。

連體格の語に附屬するもの。
何ぞの種にならう。
誰ぞのものだ。
主格の語につけるもの。
何ぞあるか。
誰ぞきたか。
「ヲ」格の語につけるもの。
誰ぞたのまねばならぬ。
連用の語に附屬するもの。
どうぞかうぞせねばならぬ。
つひぞみたことがない。
用言の連體形について終止せるもの。
今日行くぞ。
なかなか面白いぞ。
暇をつけまいぞ。
空は晴れるらしいぞ。

「ね」は口語に盛んに用ゐるものにして親密の意を寓するものなり。これは呼掛の語、主格の語、格助詞、副助詞、係助詞の下、條件を示す語の下、終止をなせるものゝ下等に附屬す。

呼掛の語につけるもの。

あなたね、どうかわたくしの頼みをきいて下さいね。

主格の語につけるもの。

私ね、昨日上野に行きましたよ。

上野にはね櫻がね、澤山さいてゐましたのよ。

格助詞の下につけるもの。

それがね、ほんとにね、困りますのですよ。

私をね、よびに來ましたのよ。

これをね、こちらへね、御あづけ致したいと思ひまして參りました。

そこでね、私の方からね、かういつてやつたのですよ。

副助詞の下につけるもの。

どこやらね、似たところがありますね。

私にねこれだけね、くださいね。

係助詞の下につけるもの。
それはね。この間御覽に入れようとした物ですよ。
あれもね。このごろ隨分神妙にしてゐますしね。
どうかね。何分よろしく御願申します。
條件を示す語の下につけるもの。
昨日上野へ行きましたらね。櫻がよく咲いて居りました。
どう致しましたらばね。よろしうございませうか。
一旦終止をなせる下につけるもの。
どうもこの方がうつくしいね。
僕ならば、そのまゝにしておくね。
僕はこちらの方を貰ひたいですね。
ほんとにうまく出來ましたね。
これだけ下さいね。
あなたはもはや御出になりますまいね。
「がな」は口語にては間投助詞の性質をあらはす。意は文語の終助詞なるにおなじく希望をあらはすものなるが、その希望の對象たる語につき、その語に格助詞の

附せる時にはその上又は下につく。その例

何がなあるだらう。
芝居にがな行かう。
何がなと心をつかふ。

これの性質は近古以來あらはれたるものにして、たとへば次の如き例あり。

さらむ人がな使はむとこそおぼゆれ。
なほよからむ敵がな組んで今一人首取らむ。

第二十三章　接續助詞

述格として用ゐられたる語(主として用言)に附屬して、之を次なる句と接續せしむる用をなす助詞を接續助詞とす。接續助詞とは同等の資格を以て對立せる句を結合して一體たらしむる用をなすを本體とするものにして英獨語の文典などにいふ對立的接續詞、又は同列接續詞といはるゝものの文に屬するものに該當し、所謂接續詞の本體實にこゝに存せるなり。かくてこの類の助詞はこれによりて句と句とを相結合して一體とせるが、各句がその互に同等の資格を以て相合してその混一せる思想を表白したる文の連結をなすものなり。從來この類の助詞を

以て用言を助くとせるは皮相の見にして、こは決して一の單語としての用言を助くるにあらずして、用言が述格として用ゐられたる時に限りて附屬するものなれば、思想と思想との結合をなすを本性とせるものなり。

此の類に屬する助詞は文語にては「ば」「と」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」にして口語にては「ば」「ど」「ども」「ところが」「のに」「ものを」「も」「し」「と」「から」「も」「けれど」「けれども」等なり。

接續助詞は用言が述格に立てる時に附屬するものにして、その附屬するには一定の規律あり。文語にては未然形に屬するものは

「ば」(一切の用言の未然形に)

「と」「とも」(形容詞及び形容詞に似たる形の複語尾の未然形に)

あり。終止形に屬するものは

「と」「とも」(動詞存在詞及びそれらに似たる形の複語尾の終止形に)

あり。連體形に屬するものには

「が」「に」「を」

あり。已然形に屬するものには

「ば」「ど」「ども」

あり。口語にては未然形に屬するものに

「ば」

あり。連用形に屬するものに

「も」

あり。連體形に屬するものに

「し」「と」「から」「けれど」　「けれども」

「が」「に」「を」　「ところが」「のに」　「ものを」

あり。已然形に屬するものに

「ば」「ど」「ども」

あり。

「ば」は順に續く條件を示すものにして文語にては未然形に屬して假設の條件を示す時と已然形に屬して既定の條件を示す時とあり。その假設の條件を示すものゝ例次の如し。

暴風吹き起りて盾を劈くが如き患なくば、これまことに僥倖のみ。

風吹かば、波たゝむ。

これが形容詞を受けて「くば」打消の複語尾「ず」をうけて「ずば」となる時には「ん」を加へて「くんば」「ずんば」といふことあり。

「ば」の既定條件を示すもの丶例次の如し。

水至りて清ければ、大魚すまず。

太陽西に沈めば、雲は金色の色なして輝く。

泰山木の花咲きたれば、來りみよ。

この區別は文語にては重要なるものなりとす。

口語にてはこの未然形に屬する「ば」は形容詞及び複語尾ずにのみ接して用ゐるものなるが、それも甚だ稀にして、多くは已然形に屬するもの用ゐらる。而して已然形に附屬する場合は既定條件のみならず、假設條件をも示すに至れるものあり。

長ければ、切りませう。

よく讀めば、わかるだらう。

時がすぎれば、間に合はぬ。

見たければ、見せてやらう。

誰でも譽められゝば、うれしくおもふ。

の如きこれなり。かくの如くなれば、口語の意義を以てすれば、文語の意義に變動を生ずるに至るを以て注意すべし。

「と」「とも」はその意同じくして形容詞及びその系統をうけたる複語尾には未然形

に屬し、その他には終止形に屬し、いづれも反對の結果を導く假設條件を示すなり。
「とも」の形容詞及びその系統に屬する複語尾を受けたる例
一の悲字なくとも、既に心動きて禁ぜざるものあらむ。
花の色は霞にこめて見せずとも、香をだに盜め春の山風。
「とも」の動詞その他を受けたるものゝ例
譏るとも、苦しまじ、譽むとも、聞入れじ。
國の東西は幾千里を隔つとも、氣候大抵ひとし。
あひたゝかはむとすとも、彼の國の人きなばたけき心つかふ人よもあらじ。
徒に身をなしつとも、玉のえをたをらでさらにかへらざらまし。
「と」は古き形にして「とも」はこれに「も」の添へるものなり。「と」の用例。
繪にかくと、筆も及ばし。
人は見ると、我はみじ。
嵐のみ吹くめる宿に花すゝきほに出でたりと、かひやなからむ。
たのめずは人をまつちの山なりと、ねなましものをいさよひの月。
現代の文語には「と」は殆ど用ゐることなく、專ら用ゐらるゝものは「とも」のみなり。
而してこれらは口語にては文語のよりは用法狹く意味稍廣くなれり。先づ形容

詞の未然形につくものは口語にては「とも」のみなり。その例

遲くとも、十日にはくる筈だ。

金は無くとも、智慧さへあればよい。

動詞の連體形（口語にては連體形卽ち終止形たり）につけるものは「とも」も「と」もあり。而して「と」は「とも」とはその意義用法稍異なる點あるを見る。その「と」の例

どうならうと、かまはない。

行かうと、行くまいと、僕の勝手だ。

「とも」の例

どこへ行くとも、心のまゝだ。

どうするとも、勝手にしなさい。

待たれるとも、待つ身になるな。

雨が降らうとも、行くときめた。

然れども口語にては又これらのかはりに「ても」といふ形を用ゐる。その「ても」は下にいふ「も」の用ゐらるゝ場合の現象なり。

「ど」「ども」はその意同じくして、すべての用言の已然形に屬して、反對の結果を導く既定條件を示すなり。

「ど」の用例

讀まむとすれど、よみかねしかば、上聞に達しぬ。

この間に面白き事多かれど、え書きつくさず。

「ども」の用例

口にいふは易けれども、實際に行ふはかたし。

人は美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて之を完うすること能はざるもの多し。

雲きたれども、雨とならず。

あやしき下﨟なれども、聖人の誡にかなへり。

これは口語も大差なし。

「が」は前後の事實を綜合するに用ゐるものにして、連體形に附屬するものなり。この「が」は文語にも口語にも存するものなるが、從來往々前後の事實の齟齬せるを示すとせられたり。されどそれはその事實の相齟齬したるものがたまたま前後に來たることのある場合のみを見たるものにして、この「が」の力によりて齟齬せしめたるものにはあらず。次の例を見よ。

簾の内に矢をつまよる音のするが、その矢の來て身に立つ心ちして。

の如きはたゞ倶存の事實たるは論なきにあらずや。さてこの「が」の意は前件後件を同等に考へたるのみにて、その間に輕重をたてずに結合して示したるものなり。それの文語の例

父は屢說諭したりしが、彼は終に聽かざりき。

暫しかくれてゐたりけるが、やがて捕へられにけり。

人はいはぬが、われいふな。

見物は多きが、品物は賣れず。

それの口語の例。

風は寒いが、天氣はよい。

無いといつたが、やつぱりある。

私も知つてゐるが、親切な人だ。

口語にてはこの「が」を附けたる句を二以上重ねて假設條件とすることあり。

雨が降らうが、鎗が降らうが、驚くことでない。

取らせようが取らせまいが、こつちの勝手だ。

口語にては上の「が」より出でたる「ところが」といふ形を用ゐることあり。これは「ところ」にて上の句をうけて體言の資格を得しめたるものなるが、自然に下の「が」と

合體して今は一の助詞の如くになれるなり。その例

人が來たところが、一人だ。

行つて見たところが、見もしらぬ人であつた。

昨日公園に行つて見たところが、花はまう散つて居た。

「に」も亦前後の事實を綜合するに用ゐるものにして連體形につくなり。これも亦從來齟齬を示すものといはれたるものなれど、その然らざることは「が」におなじ。即ち

今日明日にても唐へ歸らむと思ふに、君の來らむをまちつけてわたらむ。

の如きはたゞ倶存の事實たるは論なきにあらずや。さてこの「に」は後件を主として考へたる時の前提を示すものなり。

庭の面はまだ乾かぬに、夕立の空さりげなくすめる月かな。

日くれかゝりて物悲しと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

孔子にはかく物問ひかくる人もなきに、斯く問ひけるはたゞものにはあらぬなり。

屢試みたるに、一度も功を奏せず。

以上は文語の例なり。口語の例は

早く來ればよいに、まだこない。

折もあらうに、今急しい時にどうしたのだ。

試みにこれを新聞紙の印刷に就いて考へて見るに、若し之を木版に彫つて手刷にしたら勞力も非常で、費用も亦夥しいであらう。

の如し。

口語にては上の「に」より出でたる「のに」あり。これはその「の」をば上の句を受けて體言の資格を與ふる爲に加へたるものが自然に下の助詞と合體して一の助詞の如くなれるなり。その例

財產も無いのに、贅澤をする。

呼んで居るのに、返事もしない。

こんなに海が荒れるのに、君はよく平氣でゐられるね。

「を」も亦前後の事實を綜合するに用ゐらるゝものにして連體形につくなり。これも從來齟齬を示すものといはれたるものなれど、その然らざることは「が」「に」におなじ。たとへば、

椎の木、常盤木はいづれもあるを、それしもはがへせぬためしにいはれたるもをかし。

これらはいづれも齟齬にあらずして倶存の事實なるは論なし。しかるに往々齟齬せる事をあぐる如くに見ゆるはこれその綜合せられたる前後の事實の間にたまたまかゝる現象の見ゆるに止まり、「が」「に」「を」にかく齟齬を示す力あるにはあらざるなり。この「を」は前件を主として考へて後件に及ぼす意をあらはすものなり。その例、

いつしかみ崎といふ所わたらむとのみ思ふを、風浪ともにやむべくもあらず。
雪とのみ降るだにあるを、櫻花いかにちれとか風の吹くらむ。
かくまでとは思はざりしを、さても殊勝なる少年かな。

これ又直に體言に接して述素となり、かねて接續の用をなすことあり。

白露の色は一つを、いかにして秋の木のはをちゞに染むらむ。

この「を」は文語にのみ用ゐ、口語には用ゐず。口語にはこれより變形せる「ものを」といふを用ゐるなり。

「ものを」は上の「を」より出でたるものにして意は同じ。これは上の「を」の上に「もの」といふ語を加へて體言の資格を與へたるものが、自然に下の助詞「を」と合體して一の助詞の如くになれるものにして、その關係は「が」に對して「ところが」、「に」に對して「のに」の存するとおなじ。その例

ねてゐても苦しいものを、とてもおきられさうにもない。
人が深切でするものを、ありがたいとも思はぬ。
醫者でさへなほせぬものを、しようがあるものか。
「し」は口語にのみ用ゐるものにして前句の連體形につきて句を重ぬる用をなすものなり。その例
讀みもするし、書きもする。
夏は涼いし、冬は暖い。
法律家の討論ではあるまいし、そんなに理窟を云ふにも及ぶまい。
さてこの「し」を附屬せしめたるものを二句以上並列して條件を示して合文を構成することあり。
雨も降るし風も吹くし、今日は止さう。
朝は早いし夜は遲いし、暇がない。
電信は不通だし郵便は遲いし、仕様がない。
「と」も口語にのみ用ゐるものにして、同時に存する事件を合せいふ性質のものなり。これは前句の述語の連體形につきてこれを後句に結合せしむるものなるが、或は條件を示し、或は單に共存の事實を合せあぐるのみに止まるあり。その條件

を示せるもの。

あまり長いと、折れる。

雨がふると、涼しくなる。

落ちると、こはれよう。

早く行かぬと、間にあはぬ。

單に共存の事實をあぐるもの。

家へ歸ると、日がくれた。

汽車から下りると、雨が降つて來た。

門に這入ると、人が居るぞ。

この「と」は元來時の意の名詞にして奈良朝頃には廣く行はれ、平安朝時代にも用ゐられたり。その一例をいはゞ、

「かひはかくありけるものをわびはてゝしぬる命をたすけやはせぬ」とかきはつると絕え入り給ひぬ。（竹取物語）

などあるは今日の「と」と殆ど同じものゝ如くなれども、平安朝頃には助詞として用ゐられしものにあらで「とき」の意をあらはしたりしものゝ如し。これより後漸次慣行せられ、遂に助詞の一となりしものと思はる。

「から」も口語にのみ用ゐる接續助詞にして、原因となる條件を示すものにして、用言の連體形につくなり。この「から」はもとは格助詞の「から」と同じものなりしものと考へらる。それが久しき慣用の後に接續助詞として分化したるものならむと考へらる。その用例

手がなまぐさいから、水をかけて下さい。

それよりもわたしがこゝへねるから、お前はふみ越えて渡れ。

それですから、小さい時から海になれておかなければなりませぬ。

かやうにいろいろの影響があるから、見る人によつて文學の批評も違ふ。

いつまでたつても勝負がつかないから、鳥と獸とが仲直りをしました。

「も」も亦口語に用ゐるものにして、これは複語尾「て」格助詞「で」に屬して反對の結果を導く條件を示すものなり。その「ても」の例

少しぐらゐ高くても、買ひませう。

無いといつても、少しはある。

誰にやらせても、これ位より出來ない。

この「て」が音便によりて「で」となる時は「でも」といふ形をあらはす。その例

あなたの御恩は死んでも、忘れませぬ。

格助詞「で」を受けたる「でも」の例

顏は人でも心は鬼だ。

もとは君のでも賣れば人のものだ。

今は穩でも安心は出來ぬ。

この「も」は文語に用ゐる「とも」「ども」の「も」の特別に發展したるものならむか。されど元來その「も」には反接の意味のなきものなるが、「とも」「ども」の慣用久しきにつれて、いつしか「も」にこの意あるが如き意識生じて、この「も」にて反接の用をなすに至りしものと考へらる。

「けれど」「けれども」は口語に用ゐるものにして、二者その意同じく、述語の終止形に屬して反對の結果を導く既定條件を示す。

この二は元來形容詞の已然形に上の「ど」「ども」の附屬せるものを語尾より切り離して獨立の形とせしものなるが之を口語の形容詞の終止形に附屬せしめて、

わるいけれど、こらへよう。

忙しいけれども、御世話はしませう。

の如く用ゐたるより更に轉じて汎く用言全般に附屬せしむるに至りしものなり。

かくて口語にては一の助詞と見るを適當とするやうになれるなり。その意義は

「ど」「ども」に同じ。

ことわるけれども、押して頼む。

隨分火は焚くけれども、なかなか暖まらぬ。

雨天だけれども出かける。

しないけれども、したと同じである。

そんな事はあるまいけれども、どうも氣がかりでならぬ。

第二十四章　語の運用の研究序說

前約二十章にわたりて語の分析的研究として、その性質を論ぜり。今よりはその綜合的研究にうつるべし。この綜合的研究はかの分析的研究が性質の研究として靜止態の研究なりしに對し、これは動態の研究にして、それらの語の運用の研究となるべきものなり。この運用の研究は從來の文法學には特に立てざりし部門にして、吾人が、はじめて提唱する所なれば、こゝにこの部門を設けたる本旨を明かにせざるべからず。

凡そ科學の研究には二の方面あり。一は複雜なる現象を最簡單なる要素に分解して其の本性を研究す。二は其の分解せられたる要素よりして複雜なる現象

を呈する所以の法則を論ず。科學研究のこの二方法は實に語の研究にも存するを見る。卽ち先づ複雜なる現象を最も簡單なる要素に分解すること卽ち分析的研究これなり。次にこの最簡單なる要素より複雜なる現象を呈する所以の法則の討究これ卽ち綜合的研究なり。この二の研究はその對象の範圍を全く同一にする場合にも並び行はるゝものなり。この區別はその對象の範圍全く同一なれども、その觀察の態度を異にするより起る區別なりとす。吾人の前章までの研究は語の性質の研究なるが、そは語の靜止的態度に對する研究にして、同時に分析的研究たるなり。本章以下に論ずる所は前章までに論定したる單語を觀察の立脚地として、之を綜合して運用する場合の法則を研究するなり。この故にかれの靜止的なるに對してこれは活動的態度を研究の對象とす。而してこの研究は進みて語と語との相關係する狀態を研究の中心とするが故に、著しく發展的に展開すべきものなり。この故に前章以前と本章以後とは論理學の歸納法と演繹法との關係に似たる點あり。社會學の靜學と動學との關係、純正哲學の本體論と目的論との關係にも似たる點あり。其の他物質的の科學物理學、生理解剖の學等に至りても皆かく分析的と綜合的との對比、靜止的と活動的との對比、本性的と關係的との對比、溯源的と發展的との對比あらざるはなし。この故にこの二方面は理論上

まさに區別あるべきは當然の事なりとす。たゞその敎育上の方便として二者を混同して論ずるを利とする場合なきにあらざるべしといへども、理論上、研究の方法としては之を區別すべきなり。

次には語の運用の研究と句論との區別を明かにせざるべからず。從來の文法學はこの二者を混同して區別を立てざりしものなるが、この二者は明かに區別せざるべからざるなり。さても從來の考說によれば、語の運用論と句論（文章論）とは區別なくして同一のものと見られてありき。卽ちそれらの文章論は一面は語の相關の論にして、一面は思想發表の方法の研究なるを見る。然れども、熟之を思へば、語の運用と句の成立とは相關聯するは論なきことながら、またその對象を取扱ふ時の主眼點を異にす。卽ち語の運用の研究は語といふものを唯一の對象として寧ろ絕對の對象として、それらの間に行はるゝ關係を主題として研究するものなり。句論は然らず。句論も亦語の運用を取扱ふといへども、それを研究の主題とするものにあらずして、その主とする所は思想の發表にあり。而してそれが語の運用に關係する場合には思想發表の方法として觀察するが爲にして、寧ろ副次的のものなりとす。されば、句論にありては語の運用はその研究の中心的對象にあらずして、副次的の現象として論及するに止まるものなり。この故に、句論と語

の運用の研究とは當然區別あるべきは明かなり。今これを建築に譬へむか、語の研究は建築材の研究なり。句の研究は建築そのもの丶研究なり。さてその語の研究中語の性質の研究は建築材の素質の研究なり。語の運用の研究は建築材の用途の研究なり。建築材の用途の研究と建築そのもの丶研究との間に大なる區別あるは誰も異論あるまじ。然るに語の運用の研究と句の研究とを混同するものあるは何ぞや。かくの如く理論上明かに區別すべきものなるに從來は殆ど全くこの區別の閑却せられたりしものなりしが故に、特に注意を乞はざるべからず。

今吾人が句論とするものは從來は多く文章論と稱せられしものなり。而もその文章論といふは主として英文典にいふ syntax の譯語として使用したるものなり。元來 syntax の名は希臘語よりいでしものにしてその本來の意義は必ずしも今日用ゐる文章論の意をのみあらはしたるものにあらず。されば、舊く meiklejohn の英文典の如きは吾が國の文法家にて文章論といふ一部門にて說かるべきものをば syntax と analysis との二部に分ちて說けり。而してその syntax にて語の一致と語の支配とを說き analysis に於いて、sentence の組織を論ぜり。これ大體吾人の語の運用論と句論とに當るものなれども、しかもこれなほ語の研究の範圍と句論との間に研究對象の差異あるを明かにせるにあらねば、吾人の心服する

こと能はざるところなり。今一二の例につきていはんに、從來の文法家は主語、述語の如きものを文章論上の名目とせり。然れども吾人の研究によれば、一の文にして(吾人がしか認むるのみならず、從來のすべての文法家のしか認むる實例のうちに於いて)主語、述語の形式をとらざるものあり。こは句論に至りて詳かに述ぶべきが故に今はたゞかくの如きものありといふに止めむが、かくの如き文はそれらの人々の文章論中にては說くべき餘地もなく、又これを說きたるものを見ず。かくの如きものはこれを國語ならずといふことは主張しうべきにあらぬに、そを論定したるもののなきは何故ぞや。而してそれらの論者は主語、述語等を說かずば、文章論中に說くべき事項なきに至らむを憂ふる如きさまにあり。されど、吾人はこれらを除きても優に句論に於いて當然論究せらるべき幾多の問題を有するなり。而して主語、述語の如きは實に語の相關狀態より生ずる現象にして、本來、語の運用論の範圍に屬するは自然の事なりとす。

次に又從來の文法家は所謂補語、客語等と稱せられたるものをもおなじく文章論の研究對象とせり。しかれども、これも亦體言と用言との關係上の名目にして句論中の研究題目とすべきものにあらざることは、それらが用言の有する屬性の性質によりて要求せらるゝものなれば、これ亦語の運用の必要上生じたる對象な

ることと明かなり。吾人は上の如きもののすべてを語と語との關係上生じたる現象として、これらをば、語の運用の硏究の題目と認め、之を句論中に置くを拒絕す。かくの如く論じ來れば、或は杞憂家ありて、かくては所謂句論は何の用もなくなるに至るべしと思惟することあらむ。しかもかくの如きは實に理論上よりいふも實際より見るも無用なる眞の杞憂にすぎず。吾人の句論には硏究すべき事項の多存するなり。而して吾人は思ふ、吾人のとれる態度の如くにして、はじめて眞に句論の目的を達し得らるべきものなることを。

以上余は語の運用の硏究の目的と大體の職分とを論じたり。而してこれらの硏究はさきにも述べし如く綜合的活動的硏究なるが故にその說明の順序は發展的ならざるべからざるのみならず、語の關係といふことを硏究の主眼とするが故に著しく以前とは說明の態度を異にすべき必要あるなり。

語の運用の硏究は上、語の性質の硏究の結果を基礎とし、それが動的狀態を硏究するものにして、以て句論にうつるべき階梯となるべきものなるが、これらのうちにも亦幾つかの見方もあり、又幾つかの階段ありと考へらるゝが、之を概括すればなほ一二の部門あるべしと思ふ。その第一の部門は、それらの動的現象の結果が、なほ一の語として取扱はるゝ範圍のものゝ硏究なり。これは單語を出發點として、それ

らが或は內面的に意義又は性質をかふる場合、或は內外二面より或は形體或は意義或は性質をかへて複雜なる組織の語となるに到るまでの狀態の硏究にして、これらの硏究には單語の轉成よりはじめ、それに關聯して接辭の硏究を導き、更にまた合成語、合體語、語の轉用などの現象を對象とするなり。以上は單語の素質又は形體の上に種々の變動を呈したるものにつきての硏究なれど、要するにその變動を受けたる結果あらはれたるものは、なほ一の語としての取扱を受くる點は單語と殆ど異なることなきものにして、次下の硏究として單語もそれも同樣の取扱をなして進むべきものなりとす。第二の部門は單語又は上にいへる一語の取扱を受くるものが、實地に運用せらるゝ場合に起るべき現象にして、これも亦外面的にも見、內面的にも見ることを得べし。外面的に見れば、ある語が他と形體上の關係を有して用ゐらるゝか否かといふことより出發すべきこと明かなるが、それが他と形體上の關係を有せぬ場合は孤立的に用ゐらるといふべく、他と形體上の關係を有する場合は卽ち他の語に連接する場合をいふものなるが、その連接にも亦一定の限度あるべければ、その限度如何といふことを硏究する必要も生ずべく、隨つて、又そのこゝに如何なるものに續くか、如何なる形態を以てつゞくか、如何なる點にてその續きが終るかといふことの問題を生ずべし。而して又そが連接する場

合にもその語の本質に基づきて或は下に連なり、或は上に加へらるゝ場合あり。又この終る場合にも如何なる場合に終るか如何なる形をとりて終るかといふが如き問題あり。これらの點いづれも不斷の注意を要するものなり。又内面的に見れば、他と形態上の關係なく見ゆるものが、意義上に於いても果して關係なきか如何。又形體上の關係あるものにつきてもその意義上の關係如何。又その關係の意義或はそれらの關係の生ずる根源、又その關係の範疇等幾多の問題存すべく、又その連接する時と續かぬ時との内面の上の差違如何。又下につゞく場合と上に加へらるゝ場合との内面的の差異如何といふが如き問題存すべし。而してこれらの研究は語の運用の研究の主部たるものなるが、これには横に語と語との關係の法式を論ずる部分と、縦に語の連續する狀態を論ずる部分との二大區分を立てうべく、又かくの如く區別して論ずるをよしとすべし。以上の如き研究を經てはじめて語の運用論の目的は達せらるべきなり。

第二十五章　語の轉成

こゝに語の轉成といへるは、單語の動的狀態の一の現象なるが、この場合の動的狀態は一の語の内部の形體の變動たとへば、活用の如きものゝ研究をさすにあら

ず。それら活用の如きは一の語の形の內の一部分のことにして、その語の本質に基づく特性の一なれば、前既に論じ了へたるものなり。こゝに論ぜむとするは一旦成立せりと認められたる單語が、その一個體として成立したる、その後に更に或は形體或は性質或は用法の上に變動を起すことある、その狀態を硏究せむとするものなるが、かゝる意味にての動的狀態は單語の轉成のみならず、接辭を加ふる場合の現象、又合成語となる場合、合體語となる場合及び、語の轉用の現象などみな然りとす。而してその最初に論ずべきは今いはむとする語の轉成なりとす。

語の轉成とは或る語が、その性質又は意義の上に變動を起して他の語に轉化することをいふものなるが、吾人が行ふ硏究にはこれに紛はしき「語の轉用」といふ術語を用ゐて、他の場合を說明することあるが故に、茲に豫め二者の混同を防がむ爲に、その「語の轉用」といふことを一往說明せむ。語の轉用とはある語が、その本來の性質を失ふことなくして、臨時に性質の異なるものとして用ゐらるゝ場合をいふものにして、こゝいふ轉成の如く性質又意義を完く變へ了れるものをいふにあらざるなり。この故に二者は明かに區別せられざるべからず。さて語の轉成とは委しくいへば、既に成立せる單語が、用法によりて形又は意義若くは性質の上に變動を生じて本來の語とは異なる語として取扱はるゝに至れるものをいふなり。

而してこれの研究は一旦成立せる單語につきて、それらが更に轉化し行く狀態の研究なり。この故に單語そのものゝ解剖的研究によりて起る單語の構造又は單語の成立の研究とは目的を異にす。世には往々かくの如きを「語の構造又は成立の研究」と名づけてあれど、吾人は今かく唱ふることをせず。否かく唱ふることは吾人の今の目的に反するのみならず、吾人の研究する事實そのものも亦決して語の成立を研究するにあらざればなり。卽ち、こゝには既に成立せる單語が實地に運用せらるゝ場合に必要上變化し行く狀態を研究するものにして、その現象はまさしく單語の活動狀態の一にして、その研究もまさしく運用論の第一步たるなり。かく本章の目的は元來語の運用を論ずるにあるが故に既に成立せる單語を基礎とし、それが更に轉成する場合に限るものとす。

本章の研究が、語の成立の如き解剖的研究にあらずして、運用上の研究なりといふことは、言語の生命が活物的なる點に基づくものなり。凡そ如何なる言語もその國民、民族の思想の所產なるはいふをまたぬが、その民族の思想は生々活動一日もやまぬものなれば、固定せる語のみにては十分にその思想を傳ふるに足らざることあり。これが爲に往々その必要に應じて或は合成語をつくり、或は語の轉用をなすに及ぶものなるが、その轉用の範圍を超えて、その意義性質の變動が固定的

に進むことあり。かくの如き場合に於いてこゝにいふ所の轉成といふ現象を生ずるものなり。而してこの轉成の現象は又新たなる事物、新たなる事實などの名目などを構成する爲には日常行はるゝは何人も知れる所なり。この意味に於いて吾人は之を運用論に於いて論ずべきものと主張する所なるが、それと同時にこの運用論上に於いて論ずる所は、吾人の國語運用上往々起るべき狀態の研究を主とすべきものにして、いづこまでも既に成立せる單語を基礎としてそれらが更に轉成しうべき場合に限らざるべからず。しかも將來の轉用は豫想しうべくもあらねば、勢過去に轉成せるものを以て例とせざるべからず。然れども一步その既成の單語を分解してその內部の構造を論ずるを目的とする如きに至らば、これ吾人の唱ふる運用論とは正反對の方面に向へるものなりといふべきなり。

語の轉成にはその轉成の結果よりいへば、名詞に轉成するもの(一)形容詞に轉成するもの(二)動詞に轉成するもの、(三)副詞に轉成するもの(四)の四樣ありて、助詞に轉成するものは運用論上には存せざるなり。

既に成立せる語又はその語幹を以て名詞に轉成するものには次の二大別あり。

一、その語又は語幹を以てそのまゝ直ちに名詞とするもの。

二、接尾辭を添へて名詞とするもの。

この第二の接尾辭の事は次章に說くべし。その語又は語幹を以てそのまゝ直ちに名詞とするものには次の四樣の狀態あり。

一、用言の語幹を以て名詞とするもの。
二、用言の終止形を以て名詞とするもの。
三、用言の連用形を以て名詞とするもの。
四、感動副詞を以て名詞に轉成するもの。

用言の語幹を以て名詞とせるものは形容詞の語幹を以てせるもの多し。

あか　しろ　あを　くろ　たか

の如きその一例なり。又普通の名詞にはあらねど、姓名等に「おほ」(多)「きよ」(清)「さと」(聰)「ちか」(親)「やす」(安)などいふもこの種類の運用より生じたるものなりとす。又動詞の語幹を以てせるものあり。

やど　うた

の如きこれなり。しかも、この類のものは多からず。これらのうちには名詞がもとにしてそれより用言となりしか、用言がもとにしてそれより名詞となりしか、容易に斷言すべからぬものもあらむなれど、二者相關するものたるは明かなり。た

とへば「つなぐ」「はらむ」「ゑる」などの如きは「綱」「腹」「繪」といふ名詞を基としたることは明かなれど、「やどる」の如きは「屋」を「とる」といふ事が本なるべければ「やど」といふ語は「やどる」の結成してより後の語ならむと思はる。以上用言の語幹より轉成せる名詞をば從來は略體言といへり。

用言の終止形を以て名詞とせるものは例多からず。形容詞にては、

すし　おもし

などあり。動詞にては

むかふ　かげろふ

などあれど、いづれも稀なることなり。されど人名には盛んにこれを用ゐる。たとへば形容詞にては

とし(敏)　たかし(孝)　ひさし(久)　きよし(淸)

など、動詞にては

したがふ(順)　きほふ(競)　しげる(茂)　みのる(實)

などなり。

用言の連用形を轉じて名詞とするものは動詞に多けれど形容詞には稀なるものなり。卽ち形容詞にては、

おほくの年　　はやくの事
ときじくの香の木實
遠くの親類近くの他人。
君の近くへ引越す。

の如く特別の場合に稀に行はるゝなり。これに反して動詞にはその例甚だ多く、日用の語にも頗る頻繁にあらはるゝものなり。今二三の例をあぐ。

あふぎ(扇)　あき(明)　あがき　せき(咳)　あき(飽)
のし(熨斗)　さし(尺)　かし(借)
あやまち(過)かち(勝)　そだち(育)　もち(持)
あらそひ(爭)あそび(遊)　あぢはひ(味)
かすみ(霞)　あやしみ(怪)いとなみ(營)
こほり(氷)　ひかり(光)　かり(借)　いきどほり(憤)より(縒)
つき(運の盡き)
はぢ(恥)　もみぢ(紅葉)ねぢ(捩)　おび(帶)　さび(錆)
ほころび(綻)うらみ(恨)　おい(老)　くい(悔)　むくい(報)
うけ(請)　さまたげ(妨)まけ(負)

おほせ(仰)　みせ(店)　あて(宛)　くはだて(企)
かさね(重)　うれへ(憂)　こたへ(答)
いさめ(諫)　かため(固)　つとめ(勤)　ながめ(眺)
あれ(荒)　おくれ(後)　おとづれ(音信)つれ(連)　もれ(漏)

又存在詞の「あり」を以て名詞とすることあり。

ありのまゝにいふ

などの如きこれなり。又複語尾の附屬せるものゝ連用形を以て名詞に轉成すること少からず。

やけだされ
姫御前のあられもない。
西光がきられの事
おもたせの御菓子
あけずの御門
こらしめの爲
みせしめにする。

などの如きこれなり。かくの如く連用形より名詞に轉成せるものをば從來居體

言といへり。

感動副詞を以てそのまゝ名詞とせるものは

きく人いづれもあはれを催せり。

の「あはれ」の如きこれなりとす。

既に成立せる語を以て形容詞に轉成するものには、大別して次の三種ありとす。

一他の語を語幹の地位にたゝしめて活用を起さしめたるもの。

二、ある語の末の音を變化せしめて活用とするもの。

三、接尾辭を加へて形容詞とするもの。

第三の接尾辭につきては次の章に述ぶることゝし、こゝには第一第二の場合を說くべし。

他の語を語幹の地位に立たしめて活用を起し以て形容詞に轉成するものを見るに、次の二樣の狀態ありとす。

一、ある語一を語幹の地位に立たしむるもの。

二、ある語を二つ重ねて語幹の地位に立たしむるもの。

ある語一を語幹の地位に立たしめて形容詞としたるものには次の三樣ありとす。

一、體言を語幹の地位に立たしむるもの。
二、漢語を語幹の地位に立たしむるもの。
三、副詞を語幹の地位に立たしむるもの。

第一の體言を語幹の地位に立たしめて形容詞としたるものは

大人(オトナ)し　童(ワラベ)し　功勞(イサヲ)し　まことし　ひと(一)し
黃色い　ひもじい　茶色い

などこれなり。この時には文語にては「しくしき」活用をなすなり。

第二の漢語を語幹の地位に立たしめて形容詞としたるものは

しふねし(執念)　四角し　鬱陶し
ひどい(非道)　角い

の如きこれなり。これらは文語の場合には多くは「くしき」活用をなすなり。

第三の副詞を語幹の地位に立たしめて形容詞としたるものは次の例の如し。

甚だし　未(イマ)だし　未(マダ)し　うたてし
かたくなし　こまかし　きらきらし　にぎやかし
いどどし　いかがし　あたゝかし　やはらかし

の如きこれなり。これらは文語にてはいづれも「しくしき」活用をなすなり。

ある語を二つ重ねて語幹の地位に立たしめて形容詞としたるものには次の五様ありとす。

一、名詞を二つ重ねて語幹としたるもの。
二、漢語を二つ重ねて語幹としたるもの。
三、用言の語幹を二つ重ねて語幹としたるもの。
四、動詞の連用形を二つ重ねて語幹としたるもの。
五、副詞又は副詞に助詞を添へたるものを二つ重ねて語幹としたるもの。

第一の名詞を二つ重ねて語幹とし以て形容詞としたるものは次の如し。

男々し　女々し　兒々し(落くぼ)
人々し　ものものし　ことごとし
げすげすし　ばかばかし　はなばなし　かうがうし(神々し)

第二の漢語を二つ重ねて語幹とし以て形容詞としたるものは次の如し。

美々し　怠々し
仰々しい　禍々しい

第三の用言の語幹を二つ重ねて語幹とし以て形容詞としたるものは形容詞の語幹を重ねてつくれる例頗る多し。一二をいはゞ、

おもおもし　かろがろし　よわよわし
ながながし　にがにがし　たけだけし
にくにくし　わかわかし　とほどほし

の如し。動詞の語幹を重ねたるは稀なるものなるが、その一二をいはゞ、

くねくねし　たどたどし　おどろおどろし
のろのろし　やつやつし　にぎにぎし　ひがひがし

第四の動詞の連用形を二つ重ねて語幹とし、以て形容詞としたるものは次の例の如きなり。

つきづきし　はればれし　すきすきし
なれなれし　しれじれし　たえだえし

第五の副詞又は副詞に助詞を添へたるものを二つ重ねて語幹とし以て形容詞としたるものは次の例の如きなり。

うべうべし　いとどし(いといと)
げにげにし　まめまめし

以上ある語を二つ重ねて語幹の地位に立たしめてつくりたる形容詞は文語にてはいづれも「しくしき」の活用をなすものなりとす。

さてある語の末の音を變化せしめて活用として形容詞としたるものには次の二様あり。

一、動詞の末の音を變化せしめて活用とするもの。

二、副詞の末の音を變化せしめて活用とするもの。

第一の動詞の末の音を活用せしめて形容詞としたるは例甚だ多し。次に二三の例をあぐ。而してこれらはいづれも「しくしき」活用をなすものなり。

さわがし(さわぐ)　なつかし(なつく)
あさまし(あさむ)　いさまし(いさむ)
にぎははし(にぎはふ)　くやし(くゆ)
うらめし(うらむ)　くるほし(くるふ)
このもし(このむ)　たのもし(たのむ)

第二の副詞の末の音を活用せしめて形容詞としたるもの丶例次の如し。

あきらけし(あきらか)　さやけし(さやか)
のどけし(のどか)　はるけし(はるか)
しづけし(しづか)　やすらけし(やすらか)

而してこれらはいづれも「くしき」活用をなすものなり。

既に成立せる語を以て動詞に轉成するものにも次の四大別あり。
一、他の語を語幹の地位に立たしめて活用を起さしめたるもの。
二、ある語の末の音を變化せしめて活用とするもの。
三、ある動詞の活用を語幹の地位に立たしめて活用を起し以て別の動詞とするもの。
四、接尾辭を加へて動詞とするもの。
第四の接尾辭につきては次の章に述ぶることゝし、こゝには第一、第二、第三の場合を說くべし。
他の語を語幹の地位に立たしめて活用を起し、以て動詞に轉成するものを見るに、次の四様の狀態ありとす。
一、體言を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしむるもの。
二、漢語を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしむるもの。
三、形容詞の語幹を基として動詞としての活用を起さしむるもの。
四、副詞を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしむるもの。
第一の體言を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしめたるものは次の例の如きなり。

くびる(頸)　すゝぶ(煤)
はらむ(腹)　しわむ(皺)
つなぐ(綱)　またぐ(股)　つめる(爪)

第二の漢語を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしめたるものは次の例の如し。

りきむ(力)

第三の形容詞の語幹を基として動詞としての活用を起さしむるものは頗る多し。二三の例をあぐれば次の如し。

かなしぶ　たふとぶ　をしふ
あかむ　あをむ　しろむ　をしむ
あやしむ　いとほしむ　たのしむ
いぶかる　ほそる　ふとる

第四の副詞を語幹の地位に立たしめて動詞としての活用を起さしめたるものゝ例次の如し。

そゞろく　すゞろぐ　たひらぐ
すゞろぶ　あはれむ　いなむ

これらの類のの活用のうちには或は接尾辭として取扱ふべきものもあらむ。今姑くこゝにあぐ。

ある語の末の音を變化せしめて活用とし、以て動詞に轉成せしめたるものを見るに、次の三様あるを見る。

一、名詞の末の音を變化せしめて活用としたるもの。

二、漢語の末の音を變化せしめて活用としたるもの。

三、副詞の末の音を變化せしめて活用としたるもの。

第一の名詞の末の音を變化せしめて活用として以て動詞としたるものゝ例次の如し。

ひじる(ひじり)

第二の漢語の末の音を變化せしめて活用とし、以て動詞としたるものゝ例次の如し。

さいしく(彩色)　さうぞく(裝束)

さうどく(騷動)　こじく(乞食)

さるがふ(猿樂)　もくろむ(目論)

れうる(料理)

第三の副詞の末の音を變化せしめて活用とし、以て動詞としたるもの、例次の如し。

はるく（はるか）　けざやく（けざやか）
すみやく（速やか）　しめやぐ（しめやか）

ある動詞の活用を語幹の地位に立たしめて活用を起し、以て別の動詞とせるものを見るに、多くはその語幹とするもの、末の音の上に母音の變化を起すを見るなり。それらの例次の如し。

（つなぐ）つながる　（またぐ）まだがる
（およぶ）およぼす　（かわく）かわかす
（とどむ）とどまる　（ひそむ）ひそまる

既に成立せる語を副詞に轉成せしむるものを見るに、次の四様あるを見る。

一、名詞を以てするもの。
二、動詞の連用形を以てするもの。
三、形容詞の語幹を重ねたるものを以てするもの。
四、他の語に接尾辭を添へて副詞とするもの。

第一の名詞を以てするものはそのまゝ轉成するもあれど多くは格助詞「に」を添ふ

るによりて副詞の資格に轉成するなり。その例次の如し。

まこと(誠)　つゆ(露)　まことに　次第に

第二の動詞の連用形を以てするものも亦、多くは格助詞「に」(稀に「と」)を添ふるによりて副詞の資格に轉成するなり。その例

みだりに　しきりに

ならびに

しきりと

および

第三の形容詞の語幹を重ねて副詞の資格に轉成するものは主として格助詞「と」を添ふるによりてその用を完くす。たとへば、

あかあかと日はつなくもあきのかぜ。

はやばやと御見舞下され候段御禮申上候。

されども亦格助詞なくして用をなすこともあり。

はやばや御出被下度待上候。

ながながお世話に相成候。

第四の接尾辭の事は次の章に至りて說明すべし。

第二十六章　接　辭

前章に約束せる如く接尾辭を說くべき順序となれるが、それにつきては一往、接辭全般にわたりてこの章に說かむとす。

接辭は單語の內部に於ける遊離する性質を有する部分にして既に成立せる單語又は語幹に附屬して稍複雜なる意義を有する單語を構成するものなり。

接辭といふ名目は英語の affix の譯語なり。これを接頭語接尾語などいふ人もあれど本書には「詞」といふは性質上の名目に用ゐ、語といふは運用上の名目に用ゐ、いづれも單語又はこの合成せるものに用ゐたれば、單語の內部の成分たるこの種のものに對しては辭といふ語を用ゐて區別せり。

接辭は直接に文句の構成要素として用ゐらるゝものにあらず、又單獨にては語としての資格をも有するものにあらず。その一般性質をいはゞ既成の單語又は語幹或は語根に附屬して單語たらしむるものなりといふべし。而してその用ゐらるゝに當りては上に加へらるゝものあり、下に加へらるゝものあり。かくの如く用ゐられて、それらに或る意義を添加し、又は用法資格の變動を惹き起すなり。今本章には語の運用論としての必要上說くものなれば、その既成の單語又は語幹

に加へらるゝ場合のみを說きて語根に加ふるものを說かず。

接辭はその位置と性質との見地よりして二重に分類を施すことを得べし。即ちその上に加ふるか下に加ふるかの點より見て之を接頭辭と接尾辭との二に大別す。又その性質によりて語調又は意義を添ふるに止まるものと語の性質上に於ける一定の資格を示すものとの二に大別することを得べし。以上の如く二重に二大別するによりて接辭は四種あるべきさまに考へらるれども、接頭辭には資格を示すものなければ事實は三類あるに止まる。

接頭辭は prefix の譯にしてこれを接頭語といふ人もあり。これは體言、用言、副詞の上に加へて、その語調又は意義を添ふるものにして、おのづから二種の別あり。即ち一は音調を添ふるに止まるものにして、一は明かに一定の意義を示すものなり。而してこれらは文法上重きものにあらねば一斑を說くに止むべし。

音調を添ふる接辭といふはその示す意義全くなしといふにあらざるべけれど漠然として捕捉すべからず、たゞ調子の爲に加へたりと見らるゝものをさす。その例次の如し。

「さ」名詞及び動詞に接す。

さ夜　さ衣　さ牡鹿

さ渡る　さ迷ふ　さ走る　さ躍る

「み」名詞に接す。

み空　み雪　み山　み谷

み吉野　み熊野

「た」用言に接す。

たやすし　たよわし

たばしる　たなびく　たくらぶ

「け」用言及び副詞に接す。

け清し　け近し　け疎し

け壓さる　け劣る

けざやか

「か」用言に接す。

か弱し　か細し　か黒し

かよりあふ

「そ」動詞に接す。

そたゝく　そだつ　そよる

「ひ」形容詞に接す。

　ひよわし

「い」動詞に接す。

　い行く　い倚る　い隱る

　い渡る　い觸る

以上の例、音調のみならず幾らか或る感情或る意義を示すものなれば、各多少意義の差なしといふにはあらねど、その意極めて稀薄にして單に音調を添ふるに止まるといひてよき程度なり。かくの如きものを古來發語といへり。而してこれらは現代にては活動的に用ゐらるゝこと殆どなきなり。

一定の意義を添ふる接頭辭は次の數種に分たる。

一、敬意を添ふるもの。

「み」名詞に接す。

　み位　み輿　み言　み衣

　みあかし　み屋(宮)　み門

　み堂

これらは口語には活動せず。

「おほ」名詞に接す。

おほ君　おほ前

これらは古語にして現代の文語にも活動せず。

「おほみ」名詞に接す。

おほみ心　おほみはからひ　おほみくるま

これは上の「おほ」と「み」と重ねたるものにして敬意一層深きものなるが、これも亦古語にして現代にては主として擬古文に用ゐる。

「おほん」名詞に接す。

おほん世　おほんとき

これは上の「おほみ」の音便にして、亦古語なり。

「おん」名詞に接す。

おん心　おん手　おん酒　おん使

おんとりはからひ　おん話し

これは「おほん」の約にして現代の文語には盛んに用ゐらる。

「お」名詞に接する外、数詞、形容詞、副詞にも接す。

おいくつ　おふたつ　おいつゝ

お心　お前　お顏

おからだ　お役所　お天氣

お早い　お近い　お久しい　お安い

おあいにく　おさつぱり

これは「おん」の約まれるものなるが、文語には殆ど用ゐず、口語に盛んに用ゐらる。

「おみ」名詞、形容詞に接す。

おみ帶　おみ足　おみ輿　おみくじ

おみ大きい

これは口語にのみ用ゐるものなるが、古語の「おほみ」の約とも見られざるにあらねど、なほ、古語の「み」の上に口語に用ゐる「お」を冠したるものと見るべし。なほ口語にてはこの「おみ」の下に再び「お」を加へて「おみお」といふ形をなすことあり。この時には名詞にのみ接す。

おみお膳　おみお汁（ツケ）　おみおなか（腹）

「ご」漢字「御」の字音を用ゐるものにして主として漢語より出でたる名詞、副詞に接す。

ご殿（テン）　ご飯（ハン）　ご用（ウ）　ご近處

ご覽　ご勉强　ご存じ
ご迷惑　ご丁寧　ご深切
これは現代の手紙及び口語に盛んに用ゐらる。
二、眞正又は純粹なる意を示すもの。
「ま」眞正の意を示す。名詞、副詞に接す。
ま心　ま夜中　ま晝　ま東
ま白　ました(下)
ま最中　ま正面
これは下に來る語の首音との關係によりて促音便、撥音便を起すことあり。而して、この現象は主として口語に起るものとす。
まつか(まあかの約)　まつくろ
まつさかさま　まつしろ　まつすぐ
まつぴら　まつぱだか
まんなか　まんまる
「き」生來のまゝの意を示す。名詞、副詞に接す。
き藥　き酒　生(キ)絹　きそば

き‖すぐ　き‖まじめ

これらは古語にも現代語にもあり。

「す」生地のまゝ故意に加ふることなき意を示す。名詞、副詞に接す。

す‖顔　す‖肌　す‖面　す‖燒

す‖なほ

これらは古今に通じて用ゐらる。

三、小さき又は少しなる意を示すもの。

「を」名詞、用言に接す。

を‖篠　を‖川　を‖野　を‖車

を‖暗し

を‖止みなく

これは古語にして現代にては擬古文のみに用ゐる。

「こ」名詞、數詞、用言、副詞に接す。

こ‖山　こ‖松　こ‖男

こ‖一里　こ‖百圓

こ‖高し　こ‖憎し　こ‖面憎し（これは「面憎し」に「こ」を添へたるもの）

こぎれい　こざつぱり

これらのうち名詞、用言につくは古語にも用ゐるが、その他は主として現代の語に用ゐるものなり。

四「初めて」又は新なる意を示すもの

「うひ」はじめての意を示す。名詞に接す。

うひ學び　うひ山ぶみ　うひ孫

うひ産

これは古語なれど、ある場合には現代語として用ゐらるゝものあり。

「にひ」新なる意を示す。名詞に接す。

にひ月　にひ田　にひ參り

にひ墾り

これは古語にして現代には活動せず。

「はつ」最初の意を示す。名詞に接す。

はつ穗　はつ雪　はつ音

はつ午　はつ節句　はつ旅

これは古語「ウハッ」の約なる「ハッ」にして意も亦轉じたるものなるが現代に活動的

に用ゐらる。

五、似て非なるもの〻意を示すもの、

「えせ」名詞に接す。

えせ法師　えせ商人　えせ笑ひ

これは古語にして現代に用ゐず。現代語の之に相當するものは「でも」なり。その「でも」は「でも醫者」の如く用ゐるものなるが、卑語として斥くべきものなり。

六、打消の意を示すもの。

「ふ」「不」の字音を用ゐたるなり。漢語よりなる名詞に接す。

ふ信心　ふ便利　ふ承知

七、無き意を示すもの。

「ぶ」「無」の字音を用ゐたるなり。漢語よりなる名詞に接す。これは次の「む」よりは意強く、時としては醜き意を寓せりと見ゆ。

ぶ用心　ぶ意氣　ぶ器用
ぶ禮　ぶ遠慮　ぶ愛相
ぶ勢

「む」「無」の字音を用ゐたるなり。漢語よりなる名詞に接す。

む利息　む實　む欲
む差別　む分別　む理解
これらは現代語に盛んに用ゐらるゝものなるが、この外になほ支那語よりうつりたる「沒」などの字音を用ゐるものあり。
八、不可なる意をあらはすもの。
「ふ」「不」の字音を用ゐたるものにして、第六の「ふ」と似たれど、意は異なり。從つて漢語よりなる名詞のみならず、汎く名詞に接す。
ふ取締　ふ心得　ふ行跡
ふ首尾　ふ機嫌
「ぶ」「無」の字音を用ゐたるものにして、第七の「ぶ」と似たれど、意は異なり。されど醜き心持ある點は似たり。從つて漢語よりなる名詞のみならず、汎く名詞に接す。
ぶ男　ぶ作法
ぶざま　ぶしつけ
九、順序を示すもの
「だい」「第」の字音にして漢語の數詞の上に添ふ。
第一　第二

以上たゞ大要をあげたるのみなり。

接尾辭はsaffixの譯にしてこれらを接尾語といふ人もあり。これは意義を添ふるものと、一定の資格を與ふるものとの二種あること上にいへる所なり。

意義を添ふる接尾辭は體言、副詞に附屬せしめて、その本來の語の資格、性質の變化を與ふることなく、唯一定の意義を添ふるに止まるものなり。從つてこれらは文法上重きものにあらねど、實際上は盛んに用ゐらるゝものなり。次に語用法上注意すべきものを數件をあぐ。

一、尊敬の意を添ふるもの

「さま」名詞、代名詞に接し、稀に副詞に接す。

神さま　佛さま　人さま　母さま　あなたさま　どなたさま

こちらさま　おあいにくさま　いかゞさま

これは現代語に盛んに用ゐらるゝものなるが、その副詞につくものは俗語にして口語にのみ用ゐらるゝなり。

「さん」人に關する名詞、代名詞に接す。

叔父さん　叔母さん　兄さん　お孃さん　太郎さん　お松さん

高山さん　おまへさん　あんたさん

これは「さま」の轉化したるものなるが、專ら口語に用ゐる。

「どの」專ら人に關する名詞に接す。

大佐どの　文部大臣殿　太郎どの　お松どの

これは現代にては文語殊に手紙の文に用ゐらる。

「どん」專ら人に關する名詞に接す。

小僧どん　太郎どん　お松どん

これは「どの」の轉化したるものなるが、專ら口語に用ゐ、しかも卑しきものに對する場合にのみ用ゐる。

「くん」「君」の字音を用ゐたるものにして、人に關する名詞に接す。

高山くん　太郎くん

二、卑め又は侮る意をあらはすもの

「め」人に關する名詞、代名詞に接す。

高山め　太郎め　百姓め　大工め　弱蟲め　馬鹿め　私め

三、多數なることをあらはすもの

「ら」多數あるを統括して主たるものを點出して大略に示す意あり。名詞及び代名詞に接す。現代は主として人に關する語に用ゐらる。

義經ら　少女ら　子供ら　鈴木ら

我ら　私ら　汝ら　これら　それら

柊木ら

この「ら」は古くなほ人以外のものにも用ゐられたることあり。

又これを場所、方向の代名詞に添ふるときは多數の意なく、場所、方向を大略に廣く示すものたり。

こちら　そちら　あちら　どちら　こゝら　そこら　あすこら

「ども」同類の多きうち一を示して他を代表せしむる意あり、名詞、代名詞に接す。

車ども　木ども　闘屋ども　人ども　親ども　私ども

「たち」人の同類のうち一をあげて他を代表せしむるものにして多少尊敬の意あり。名詞、代名詞に接す。

大臣たち　親たち　子供たち　君たち　汝たち　おまへさんたち

「ばら」人の同類にいふものなるが、多少卑むる意あり。名詞に接す。

殿ばら　奴ばら　法師ばら

これは古語にして現代には用ゐず。

「がた」尊敬すべき人の同類に對して用ゐる。名詞、代名詞に接す。

宮がた　皇族がた　殿がた　御婦人がた　皆さまがた　あなたがた

これは現代語として盛んに用ゐらる。

四、順序を示すに用ゐるもの。これはいづれも數詞に接するものなり。

「め」　本來の國語なるにも漢語より來るものにもつく。

一つめ　二度め　五年め　十枚め　幾つめ

「番」　主として漢語なるものにつき、又「いく」「なに」といふ語につく。

一番　十番　幾番　何番

「等」　これも番におなじ。

一等　十等　幾等　何等

「號」　これは漢語より來るもの丶外「なに」といふ語につく。

一號　十號　何號

又上の「番」「號」の下に更に「め」を添ふることあり。

一番め　三號め

の如し。

以上の外數量をあらはす接尾辭「ち」「つ」「たり」「り」「か」等あれど、語の運用上に關係なき故に略す。又「一人」「二羽」「三匹」「四册」「五本」「六枚」「七帖」「八束」「九輪」「十臺」などいふ數量を示

す接尾辭頗る多けれど、それをも今は略して說かず。

資格を示す接尾辭は上の、語の性質に影響を及ぼすものにして前章に述べたる如く、これが附屬するによりて一定の資格を與ふるものなり。これには名詞の資格を與ふるもの、形容詞の資格を與ふるもの、動詞の資格を與ふるもの、副詞の資格を與ふるものゝ四種存することは前章述べたる所にて明かなるべし。

名詞の資格を與ふるものは、稀に體言につくことあれど、主として體言ならぬ他の品詞に接して、それを名詞の資格に變ぜしむるものなり。その例次の如し。

「み」形容詞の語幹に接して名詞とす。その意は其の性質の存する點又はその程度を示すにあり。

赤み　白み　青み　黑み　高み　深み　重み　厚み　强み　凄み

圓み　面白み　をかしみ

「さ」形容詞の語幹、動詞の終止形、複語尾「たし」の幹音「た」、又は副詞に添ひて名詞とす。その形容詞「たい」副詞につけるはその狀態又は程らひを示し、動詞につけるは場合を示す。

赤さ　白さ　高さ　重さ　厚さ　うすさ　近さ　遠さ　よさ

あしさ　悲しさ　面白さ　逢ふさ　行くさ　かへるさ　見たさ

言はせたさ　ほめられたさ　あはれさ　大膽さ　綿密さ　不思議さ

このうち動詞につくもののみは現代に用ゐず。

「け」形容詞及び動詞の語幹、動詞の連用形に接して、その樣子をいふ名詞とす。

寒け　眠け　おぢけ

「げ」名詞、代名詞につきてその樣子をいふ名詞をつくるものなり。

大人げ　雪げ　何げ

形容詞の資格を與ふるものはそれ自身に形容詞としての活用を有するものなるが、その活用は種々あり。次にその例をあぐ。

「けし」「くしき」活用の形を有し、名詞を受けて形容詞とするなり。

露けし

これは古語のみにあり。

「めかし」「しくしき」活用を有し、名詞、形容詞の語幹を受けて形容詞とするなり。

今めかし　生めかし　商人めかし　狐めかし　上手めかし　古めかし

これは本來「めく」のつきたるを更に形容詞化せしむるものなるべきが、便宜ここにあぐ。これも多くは古代の語に存す。

「がはし」「しくしき」活用の形を有し、動詞の連用形などをうけて形容詞とす。

みだりがはし　らうがはし

これは古語のみに用ゐるものなるが「らう」は「亂」の字音の轉なりとせば、それもこの部類に入るべく、然らば字音の語をも受くと知るべし。

「がまし」「しくしき」活用の形を有し、名詞、動詞の連用形、副詞又副詞の助詞を伴へるものを受けて形容詞とす。

　人がまし　ことがまし　議論がまし　追從がまし　へだてがまし

　奢りがまし　はれがまし　をこがまし　勝手がまし　すずろがまし

　わざとがまし

これは本來上の「がはし」と同じものなるが、後世はこの「がまし」の方多く用ゐられ、現代にも盛んに用ゐらる。而してこれは文語に用ゐる形なるが、口語にては「がましい」といふ形として用ゐらる。

「らし」「しくしき」活用の形を有し、名詞を受けて形容詞とす。

　人らし　男らし　女らし　子供らし　學者らし

而してこれは文語に用ゐらるる形なるが、口語にては「らしい」といふ形をなし、その用法も名詞を受くる外に、副詞及び副詞に助詞の添はれるものを受けて形容詞を形づくるなり。その例、

ことさららしい　穩當らしい　ほんとらしい　わざとらしい

以上の外古くは「し」「じ」といふ接尾辭ありきとも考へらる。たとへば

大人し　功勞し　花々し　人々し

時じく　家じぐ　おもじき

の如きこれなるが、今はこれらをその成立當時に溯らず成語と見るべきなれば、接辭として取扱ふことをせず、而してこれらの大要は前章に既に說きたれば今はいはず。

動詞の資格を與ふる接尾辭も亦それ自身に各動詞としての活用を具するものなるが、その活用は種々あり。次に例をあぐ。

「めく」　加行四段活用の形を有し、名詞を受け、その狀態に見ゆる意をあらはす。

春めく　時めく　人めく　唐めく　上手めく

これは古語に多けれど、現代語にも往々用ゐらる。

「めかす」　上の「めく」を左行四段に轉ぜしめたるものにして名詞を受けて、故意にその樣子にして見する意をあらはす。

今めかす　時めかす　學者めかす　才子めかす　我物めかす

これも古語に多けれど、現代語にも往々用ゐらる。

「だつ」多行四段活用の形を有し、名詞を受けてその狀のあらはるゝ意を示す。

頭だつ　おもだつ　氣色だつ　夕だつ

これは現代語には活動的に用ゐず。

「なふ」波行四段活用の形を有し、名詞、副詞を受けてその樣になす意をあらはす。

音なふ　罪なふ　うべなふ

これも現代語には活動的に用ゐず。

「ばむ」麻行四段活用の形を有し、名詞と動詞の連用形とを受けて、その狀態の少しく見ゆる意をあらはす。

黃ばむ　由ばむ　氣色ばむ　枯ばむ

「がる」良行四段活用の形を有し、名詞と形容詞の語幹、複語尾「たし」の幹音「た」、副詞を受けて自らしか思ふ意をあらはす。

親がる　通人がる　才子がる　おもしろがる　寒がる　痛がる

をかしがる　こはがる　みたがる　聞きたがる

いやがる　得意がる　あはれがる

これは現代語に盛んに用ゐらるゝものなり。

「ぶる」良行四段活用の形を有し、名詞、副詞に接して、故意にその樣に振舞ふ意を

あらはす。

賢人ぶる　才子ぶる　學者ぶる　上品ぶる　勿體ぶる　利根ぶる

これも現代語には盛んに用ゐらる。

「ぶ」波行上二段活用の形を有し、名詞、副詞を受け、その狀態にある意をあらはす。

都ぶ　鄙ぶ　翁ぶ　大人ぶ　ことさらぶ　よのつねぶ

これは古代語に用ゐられたるのみなり。

「さぶ」波行上二段活用の形を有し、名詞に接してその狀態に振舞ふ意をあらはす。

神さぶ　山さぶ　翁さぶ　をとめさぶ

これらも亦古代語に用ゐられたるのみなり。

「じみる」麻行上一段活用の形を有し、名詞に接して、その様子に見ゆる意をあらはす。

氣違じみる　年寄じみる

これは口語にのみ用ゐらるゝものなり。

副詞の資格を與ふる接尾辭は稀に他の副詞を受くることもあれど、主として他の品詞を受けていづれも情態副詞とするものにして、これにも亦種々あり。

「げ」名詞、形容詞の語幹、動詞、存在詞、複語尾「ず」の連用形、漢語の副詞を受く。

人げ　心地よげ　面白げ　物思はしげ　うれしげ　知りげ　心ありげ

思はずげ　存外げ　迷惑げ　不滿足げ

これは古語にも現代語にも用ゐらる。

「ら」名詞、形容詞の語幹に接す。

つぶら　うまら　あつら　きよら　さかしら　わびしら

これは古語に存するのみなり。

「か」末に「ら」の音ある副詞に接して更に副詞とするものなり。これには

つぶらか　きよらか

の如き例あれば、名詞、形容詞の語幹に「らか」の添はりたる如く見ゆれど、

つばらか　たひらか

などは「つばら」「たひら」といふ本來の副詞なれば「か」のみが接尾辭にして上の例は「ら」のつきてなれる情態副詞に更にこの「か」のつきたるものなることを見るべし。而してこれは現代語には活動的に用ゐることとなし。

「やか」名詞形容詞の語幹、動詞の連用形、副詞に接す。

花やか　きはやか　たかやか　あをやか　しのびやか　のびやか

まめやか

これも現代語には活動的にあらず。

「さう」　これは口語にのみ用ゐるものにして、形容詞、複語尾「たし」の語幹、動詞、存在詞、複語尾の連用形、副詞に接す。

面白さう　うれしさう　いたさう　えらさう

形容詞の語幹が一音なる時はそれと「さう」との間に「さ」を加ふるを常とす。

よさ゜さう　なさ゜さう

行きさう　できさう　迷ひさう　ありさう

勝たれさう　みられさう　おこらせさう　行きたさう　みたさう

あはれさう　大切さう　澤山さう　穏かさう　賑やかさう

「ながら」　體言につきてそのまゝ皆などの意をあらはす。

皮ながら　女ながら　自分ながら　我れながら

十ながら　三日ながら　いつもながら

第二十七章　合成語

合成語とはその意義と形とに於いて明かに二以上の單語の集合と見ゆるもの

にして、しかも他の補助成分(たとへば助詞、接續副詞等の如き)の助をからず、直ちに相合して文法上一の語として取扱はるゝものをいふ。

合成語の組織を見れば、二様の狀態あり。一は同じ語を重ねて一としたるものにしてこれを疊語といひ、他は異なる語を合せて一とせるものにして、これを熟語といふ。

疊語の例

山々　人々　年々　それぞれ　一々　萬々

熟語の例

谷川　草木　水呑み　書き附け　みぐるし　ものがたる

合成語にては下なる語の首音を濁ることあり。之を連濁音といふ。連濁音はすべて二の言語要素の結合が緊密なることを外形にあらはす用をなすものにして、合成語にのみあらはるゝ現象にあらず。たとへば

たばしる　かぐろし　きざけ　すがほ　をがは　うひざん(産)

の如く、接頭辭を附けたる場合にも起り、又

はなばなし　かろがろし　ひとびとし

の如く、ある語を二つ重ねて、語幹の地位に立たしむる場合にも起る現象なるが、そ

の多くあらはるゝは合成語にありとす。その合成語に於ける例次の如し。疊語に於ける例

ひとびと　きぎ(木木)　しまじま　それぞれ　ひとつびとつ

とりどり　はなればなれ

熟語に於ける例

やまざくら　さくらばな　みぐるし　ものがたる

さて、これらの場合にありては連濁の起るによりて、はじめて合成語たることを明かにするもの少からず。たとへば「やまかは」といへば「山」と「川」とが別にして合成語にはあらぬに、「やまがは」といへば山間を流るゝ川の義となるが如し。されど、この連濁音はいつも必ず起るものにあらず。

疊語は同じ語を二つ重ねて一語の如く取扱ふものにして體言、用言、副詞に見ゆる現象なり。而して助詞にはこの現象を見ず。

疊語には往々下なる語の頭音を略して重ぬるものあり。たとへば、

(いよいよ)いよよ　(いといと)いとど　(あさなあさな)あさなさな

の如きこれにして、これらは古語に多く見ゆる現象なり。たとへば、

をりて見ば落ぞしぬべき秋萩の枝もたわわに於けるしら露。　(古、秋上)

の「たわわ」は「たわたわ」の疊語の略せられしものにして、その「たわ」は
時わかずふれる雪かとみるまでに垣根もたわにさける卯花。（後、夏）
の「たわ」なり。又「とをを」といふも「とをむ」の語幹「とを」を重ねたるものゝ略なり。

とをを（とを―とを）
しとど（しとしと）
しみみ（しみしみ）
しぬぬ（しぬしぬ）
しほほ（しほしほ）
はらら（はらはら）
ひりり（ひりひり）
つらら（つらつら）
とろゝ（とろとろ）
くるゝ（くるくる）
ほろろ（ほろほろ）
あらら（あらあら）
やらら（やらやら）

きりり(きりきり)

の如き皆その例なり。これは今の口語にも往々行はる。たとへば、

あつつ(あつあつ)

あいたゝ(いたいた)

などの如し。而してかくの如き現象は主として、それが情態副詞の如き用をなす語となれるものに多きは注意すべき現象なり。さて又さる現象より生じたる語の名詞に轉成せるものあり。その例は

くるる

とろろ

つらら

の如きこれなり。

體言を以てする疊語は意義の上より見れば三の別あり。一は單にその意義を强むる爲のものにして次の如きあり。

上々様ますます御機嫌克くいらせらる。

かくては下々の者難儀すべきなり。

先づ先づこれを御覧下さるべし。

これは例多からぬものにして、多くは名詞のものにあらはれたりと見ゆ。二はその事物の多數なるを示すものにして次の如き例あり。

人々　山々　川々　木々　我々　たれたれ　なにな
に

これには數詞を重ねたるを見ず。三は情態副詞の如き意と用とをなすものにして、次の如き例あり。

年々　歲々　下々　樣々　心々　面々　折々　處々　それぞれ

一々　三々五々　萬々

體言を重ねてつくれる疊語は又形容詞の語幹をつくること轉成の條に說けるが如し。それらの例は既にいへれば略す。

用言を以てする疊語は形容詞の語幹、連用形、終止形、動詞の連用形、終止形、存在詞「あり」の連用形、終止形を以て構成す。而してその示す意は其の用言の意義を强むるに止まるものと、情態副詞の如き意と用とをなすものとの二樣あり。

形容詞を以てする疊語のうち、その語幹を重ねてつくれるものゝ例

はやばや　ちかぢか　ながなが　くろぐろ　うすうす　わかわか

ひろびろ　ひさびさ

これらはいづれも情態副詞の如き意と用とをあらはすものなるが、その類の疊語

を以て形容詞の語幹をつくることは轉成の條に既に說けり。次に形容詞の連用形を重ねてつくれるものゝ例

よくよく御覽候へ。

とくとく來れ。

これらはたゞその意を强むるに止まるものなり。次に形容詞の終止形を重ねてつくれるものゝ例

よしよし目にものみせてくれむ。

これらは情態副詞の如き意と用とをあらはすものなりとす。

動詞を以てする疊語のうち連用形を以てかさぬるものには二の狀態あり。一は其の動詞の意義を强むるに止まるものにして、次の例の如きものなり。

うなはらはかまめたちたつ。（萬一）

暗き山路をたどりたどりて家にかへりつきぬ。

ゆきゆきてするがの國に至りぬ。

流れ流れてこゝに來る。

これらは元來單に「たどりて」「ゆきて」「流れて」といひても意通ずべきものなるを、上に同じ語を重ねてその屬性の發現の度々くり返さるゝ由を示せるものにして、用言

としての本性は依然として失はざるものたるなり。卽ちこれはかの體言の疊語の多數をあらはす場合に對比すべきものなりとす。而してかゝる現象は現今にては必ず「て」といふ複語尾によりて下につづくる場合に限られたり。さてこの現象はその動詞に複語尾のつける場合にもあらはるゝものなり。たとへば

ゆられゆられて波間にたゞよふ。

動詞の連用形を以てかさぬるものゝ他の場合はその疊語を以て情態副詞の如き意を用とをあらはすものにして、たとへば

泣き泣き　かねがね　次ぎ次ぎ　たえだえ　かさねがさね　思ひ思ひ

の如きこれなり。これらが情態副詞の如くに用ゐらるゝには、そのまゝ用ゐらるるあり、助詞「に」又「と」を添へて用をなすあり。かくてこの種のものは又

くりかへしくりかへし同じ事を物語る。

の如く熟語の動詞を以てすることあり。この場合は全く同じ熟語を重ねたるものなるが、それに似て少しく異なる場合あり。たとへば、

くりかへし、まきかへし同じ事を物語る。

の如し。この場合は主たる動詞のみが同じきものにして、上なる動詞が異なるものなれば、純然たる疊語とは認めうべからねど、性質は似通へりと考へらる。又

目ひき鼻ひきわらふ。

などいふ例あり。これも「ひく」といふ動詞のくりかへさるゝによりて疊語に似たる現象をあらはせるが、もとより純然たる疊語にはあらざるなり。たゞ似たる點あるによりて序にこゝに之を說けり。さて又この種の現象は複語尾の附屬せるものにもあらはるゝことあり。

しらずしらず帝の則に從ふ。

の如きこれなり。又この種の疊語を以て形容詞の語幹を形つくることあるは既に轉成の條にのべたり。

動詞の終止形を重ねてつくれる疊語はすべて情態副詞の如き意と用とをあらはすものなり。その例

ゆくゆく　泣くなく　かへすがへす　たどるたどる　はふはふ

存在詞を以てする疊語には

ありありてわびしき目を見るかな。

の如きあり。これは連用形を以て重ねたるものにして、その事の久しく續き、若くは繰返さるゝ意をあらはすものなり。又

ありありと見ゆ。

の如きあり。これは終止形を重ねたりと考ふべきものにして情態副詞の如き意と用とをあらはすものなり。

以上の用言の例は複語尾の場合にも準用せらるべき筈のものなるが、しかも、複語尾には特異の現象あり。

同じ複語尾をふめる同じ趣若くは相對する意の動詞はその連用形又は終止形を以て重ね、以て疊語の如くに用ゐることあり。その例連用形を以て重ねたるものには

たつたり坐つたりじつとしてゐない。

の如きあり。これは口語に限るものと見ゆ。終止形を以て重ねたるものは

浮きつ沈みつ流れ行く。

浮きぬ沈みぬ流れ行く。

の如し。これは文語に限るものと見ゆ。かくの如き作用を有する複語尾は口語にては「たり」文語にては「つ」「ぬ」の二なるが、これらの場合は相合して情態副詞の如き意と用とをなす。これは眞正の疊語とはいふべからねど、用言の連用形又は終止形を重ねたる疊語と性質を同じくするものなり。

複語尾の「つ」は之を重ねて「つつ」とすることあり。これは上に來れる動詞、存在詞

を受けて前後の作用の同時に行はれ、又は上なる作用の繼續せることをあらはす。これは古文に盛に用ゐられ、今文にも廣く用ゐらる。その例

禪尼手づから小刀してきり廻しつゝ張られければ。（徒然草）

ごたちの前についがさねしつゝあり。（宇都保、國讓中）

この「つゝ」につきては從來の文法說にてはその性質の誤解あり、意義の誤解あり、用法の誤解あり。今次にその誤を正すべし。

從來の說にてはこの「つゝ」を以て助詞、吾人の所謂接續助詞の類とせるものあり。又全く之を度外におきてとはざるものあり。されども、こはかの確述の複語尾「つ」の疊語たることは明かなる事實なり。

從來の說にては又この「つゝ」を副詞をつくるものとせり。しかれども、こは副詞をつくるものとはいふべからず。すべて動詞の終止形の疊語は「ゆく〳〵」の如く情態副詞の如き用を爲すものなり。即ち「なくなく」「遺ふ遺ふ」の如きも亦この類なり。而して複語尾の附屬せるものにても亦かくの如き疊語をなすことあり。「つつ」もたとへば「ゆきつつ」といふ語につきていはむに、「行きつ行きつ」といふを本體とすべきに、便宜上動詞は一つのみにして、「つ」をのみ重ねたるものこの「つつ」なりとす。而してこれは「つらら」「とろろ」「いよよ」「いとど」と同樣の現象を呈せるものと見らる。

かくの如くなれば「つつ」は副詞的のものたるは異論なしといへども、副詞をつくるものにはあらず。卽ちその意義よりいへば、前後の動作作用の同時に行はるることと又は反復せらるゝことと或はその作用の繼續せることをあらはせるものなりとす。

從來の文法家は「つつ」をゆるせども「つつ」より「あり」に連ぬるものを以て飜譯文の口調なりとして排斥し去れり。余が研究の結果はかくの如きことの何等の理由もなきことを證明せり。かくの如き說を唱へたるは所謂純粹の國文法と稱するものを遵奉せる大家先生にありしなり。その理由とするところは「つつ」は作用の同時又は交互に行はるゝをあらはすものにして作用の繼續をあらはすものにあらずとすることとなり。されど、平安朝以前にありては動作の繼續をあらはす爲に波行四段の形なる一種の複語尾を用ゐたるものありしが平安朝時代にはそは消失せり。而してそれにかはれるものはこの「つつ」にして「つつ」は前代より存せしものなるが、こゝにこれを以てそれにも代用せしものと見えたり。今平安朝時代の歌文にあらはれたる「つつ」にして動作作用の繼續をあらはせるものゝ例をあぐれば次の如し。

梅が枝にきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつつ。

やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたき香に匂ひつゝ。（古今、春上）

花すすきほに出てこひば名をゝしみ下ゆふひものむすぼれつゝ。（古今、秋上）

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりと思へば。（古今、戀四）

男みこ達はいとうつくしげにかたちよく人にほめられつゝあまたもたり。（古今、秋上）

（宇都保、藏開上）

琴琵琶の師とて内教坊のわたりより迎へとりつゝならはす。（源、東屋）

内なる人ひとりは柱に少しゐかくれて琵琶を前におきてばちを手まさぐりにしつゝゐたるに。（源、橋姫）

いと限りありつゝ及ばざりけりや。（源、若菜上）

六七月おなじことにありつゝはてぬ。（蜻蛉日記、中）

いとらうたくかきなでつゝゐたり。（源、若菜下）

きこゆべきこともなくて打ちなげきつゝゐたり。　（源、夕霧）

又形の上よりして「あり」の上に「つゝ」を持來したること古にその根據なしと說ける人あり。されどそれらの人の說こそ根據なきものなれ。今平安朝時代の文獻に「つゝあり」とかさねたるものゝ例を次にあげむ。（上にも一をあげたり。この例は、最異論あるべき「しつゝあり」といふ形をあげたるものなりとす。）

御格子どももみなあけわたし御几帳たてつゝあるに。　（宇都保、藏開上）

それよりたかくもりつゝあり。　（同　下）

萬におぼゆる事いと多かれどいとものさわがしくにぎはゝしきにまぎれつゝあり。　（蜻蛉日記、中）

女房十五六人ばかり皆こききぬをうへにきてひきかへしつゝありしなかに。　（枕草子、九）

海づらに並びて集りたるやどもの前に船どもを岸に並べよせつゝあるぞいとをかしき。　（蜻蛉日記、中）

なほ多かれどさまではと思へば略せり。これらを見てかの說の根據なきを知るべし。

さてこの「つつ」の示す意義は一般の疊語と大差なく、その上に來る用言の示す意

義の繰返さるゝを示すものあり。これ即ち繼續の意をあらはすものにして、

彼は書をよみつゝあり。

車をひきつゝゆく。

の如き例これなり。他は上なる用言を以て情態副詞の如き意と用とをなさしむるものにして、これにはたゞ下なる語の裝定に用ゐらるゝあり。たとへば

見つゝくらさむ。

書をよみつゝ抄錄す。

の如きものなるが、又上なる句を導きて下なる語の從屬たらしむるもあり。たとへば、

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ。

の如きこれなり。

副詞を以てする疊語はそのまゝ重ねて構成するものなるが、その意を見れば、その意味を强むる爲のものと、その事情の繰返しを示すものとあり。而してその原成分たる副詞につきて見れば、副詞の各類にこの現象あるを見る。

情態副詞の疊語の例

なほなほ　かくかく　しかじか

程度副詞の疊語の例

いといと

これは「いとど」と約していふこと多し。陳述の副詞の疊語の例

かならずかならず　ゆめゆめ

感動副詞の疊語の例

あはれあはれ　いでいで

接續副詞の疊語の例

またまた

熟語とは異なる語の集合して一となり、原の語の個々の意義をあらはすにあらずして、相合して成れる新しき一の觀念をあらはせる合成語をいふ。この故にここに

山櫻　櫻山

といふ語ありとせむに、これが「山」と「櫻」との個々の意を以て使用せられたるものならば、そは二單語の集まりにして熟語と稱すべからず。これが「山中に自生する櫻」「櫻の多き山」の義をあらはすに於いて、はじめて熟語と稱せらるべきものなり。

上に例示せる「山櫻」「櫻山」の二語は熟語たることは同じといへど、その組成分子た

る各單語の相互の關係に至りては大に差あり。即ち「山櫻」に於いてはその觀念の主たるものは下にある語にして上にある語はその意義を限定する關係にあるものなり。この種類に屬するものは「櫻山」「山櫻」「花櫻」「櫻花」等なり。これらは「櫻山」といへば櫻のある山をさし「山櫻」といへば、山にある櫻若くは櫻の一種をさし「花櫻」といへば「花さける櫻にして「櫻花」といへば、櫻の木の花をさすが如し。かくの如き性質の複合方法を主從複合といふ。即ち一方が主にして一方がそれの從屬たるものにして、この種の熟語にありてはいつも下なる語が主にして上なるが、それの從屬として修飾限定の用をなすなり。今又ここに「野山」といふ語ありとせんに、この場合にはこの二語相合してはじめて新に他の意をあらはせるものにしてその觀念の主たる單語を指示すること能はず。この類のものは即ち「野山」が自然的なる荒涼たる地と同じ意となる。「山水」が風景といふと同じ意になれるものもこれなり。かくの如きを同格複合といふ。「春秋」にて年の意をあらはし「草木」にて植物の意をあらはし「西東」にて方角の意をあらはし「忠孝」にて主たる道德の義をあらはすが如き皆これなり。

上に同格複合、主從複合といふことをいへるが、これらの事はなほ委しく說くべき必要あるを以てこゝに之を述べむ。凡そ一切の語句に通じてそれらのものが

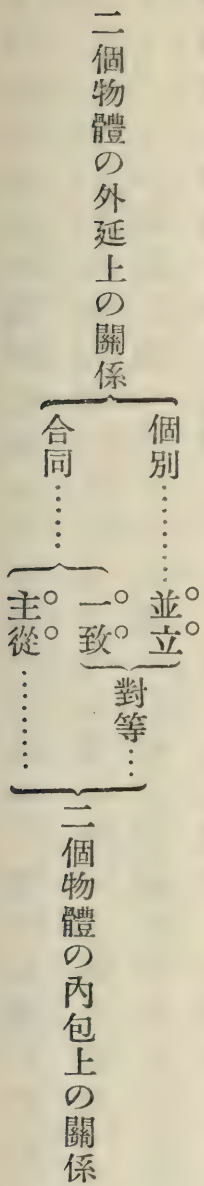
二個複合せらるゝ方式を考ふるに、實に次の三樣の方式あるを知る。

一　主從關係

二　一致關係

三　並立關係

この三樣の方式は單に熟語に限らず、句中の成分の結合、句その者の結合等すべてある單位の複合せらるゝ際に必ず現はるべき關係の範疇なり。抑も二の事物の同時同處に存在する場合に生ずる關係は上の三の範疇を出づるものにあらざるは明白の事實なり。なほ之を委しく說かむに、茲に二個の物體ありとせむに、そは必ず個々に存在するか、若くは合同して存すべきなり。而してその合同の方法は二者對等に同じ資格にて相互に相助け合致して一體たるか、若くは一が主となり、他がそれに從屬するかの二より外に方法なきなり。卽ちこれを個別か合同かの關係より見、又主從の關係にあるか對等の關係にあるかの方面より見ればまさに次の如き現象を呈す。

二個物體の外延上の關係
- 個別………並立 ┐
- 合同……┬一致 ┘ 對等……┐
- 　　　　└主從………………┘ 二個物體の內包上の關係

即ち外延よりいへば個別にして内包上より對等なるものを上に並立組織といひたるなり。又外延よりいへば、合同せるものにして内包上よりいへば二者對等なるものをば、上に一致組織といひたるなり。又外延よりいへば、合同せるものにして内包上よりいへば主從の關係にあるものを主從組織といへるものなり。而してこの三樣の組織は單に文法のみならず、百般の事物に通ずる範疇なり。從來哲學者の研究は主として分析的研究のみを事として總合的の研究の事に至りては極めて疎略なり。さる故に分析法の上にはカントの十二範疇を立つれども、綜合の上の範疇を研究したるもの殆ど見えず。今綜合の範疇を明かにすることと上の如し。この範疇は二個の物體間の範疇なるが、三個以上のものはこれらの現象が互に加はりて複雜となりてあらはるるまでにして、他に別なる方式あるべきものにあらず。されど、吾人は今文法に關係してのみ説くに止むべきが、この三方式の關係は次下全般に通じて常に忘るべからざる重大なる事項たり。さて今、上の三方式を合成語にあてゝ説かむに、疊語にては同じ語を重ぬるが故に主從關係をなすべき要素なきが、その並立關係のものは「人々」「山々」の如く多數をあらはすものにあらはれ、一致關係のものは「年々」「ちかぢか」「泣く泣く」の如く副詞の如き意をなすものにあらはれたり。又熟語にては並立關係のものはなき道理なれば(個々別々な

る時は熟語にあらず)一致關係の同格複合と主從關係の主從複合との二樣あらはれたり。されば二者の別偶然にあらずと知るべし。

熟語の合成する際には上なる語の末音が轉ずることあり。これを轉音といふその例

ふな(ね)うた　ひや(え)みづ　たか(け)むら　こわ(ゑ)いろ　なは(へ)しろ
かな(ね)もの　すが(げ)はら

この外連濁音の生ずることは既に述べたるところなるが、熟語には轉音と連濁音と同時に行はるゝもの少からず。

かざ(ぜ)ぐるま　あま(め)ごひ　さか(け)だる　つま(め)づく　むな(ね)ぐるし
ま(め)ばゆし

又熟語によりては上なる語の末の音を省略し去ることあり。たとへば

つく(り)も(の)どころ　あ(し)ぶみ　か(み)ざし

の如きこれなり。されど、この現象を呈せるものは今は單語と認め、熟語の取扱をなすことなし。さて以上の諸現象は熟語に必ず存すべしといふにあらず。即ち

かはかみ　かはしも　くろくも　ふでたて　あさせ

の如きは連濁音を起しても差支なき如きさまにありながら連濁音をなすことな

くしてしかも熟語をなせり。

熟語なるものを熟語ならぬものと區別するには連濁音轉音の行はるゝと否とによる事少からずといへども、これらの現象は熟語にあらはるゝ必然の現象にあらざることと上述の如し。しかるに又熟語によりては連濁音轉音等の有無によりて同格複合と主從複合との差別を呈することあり。たとへば「露」と「霜」「明」と「暮」とは連濁にして

つゆじ。も　あけぐ。れ

といふ時は「露の如き霜」「夜の明くる際のまだくらき時」の如き意を呈して主從複合をなし、連濁なしに

つゆしも　あけくれ

といふ時は「露霜などの降り物」「あけてもくれても」の意を呈して同格複合をなすなり。

上來說ける所の熟語は專ら二語にてなれるものをあげたるが、まゝ三語以上の合成せるもののなきにあらず。

山櫻花　夕月夜　長鳴鳥　鵜飼舟　高瀨川

などの如きこれなり。これら三語以上のものは個々の語が同時に相合してなれ

るは稀にして、多くは先づ二語の熟語をなし、さて又他の語と合成せることとたとへば「山櫻花」といへば、

山と櫻花とか　山櫻と花とか

のいづれかの方法により合成せるものなるべく、(而してその手續の差によりて意義多少異なるものなり)。鵜飼舟の如きは明かに

鵜飼と舟と

の合成語たるなり。この故に本書に熟語の方式として說く所は二語の複合に止む。その他はこれより類推して知るを得べければなり。

熟語はそれをその組成分子たる單語を主題として研究するよりもその成立せる熟語の資格を標目として研究するを便とす。この故に次下その熟語をばその有する資格に基づきて說くべし。

名詞の資格を有する熟語は普通に次の三要素を以て構成す。

一　體言特に名詞

二　形容詞の語幹

三　動詞、存在詞の連用形

この外副詞を上の三種の要素に冠せしめてつくることあり。さて二語の合成よ

りなれる熟語の名詞は上の三種相互に結合して九種の形式をなす。その例次の如し。

一　名詞—名詞

谷川　船歌　山川　草木　忠孝　父母　酒樽　濱風　東西　左右

春秋　牡牛

二　形容詞の語幹—名詞

淺瀬　白馬　黑船　細道　淺草　青雲　輕業　長歌　遠山　深草

近隣　若松　薄茶　濃紫

三　動詞(存在詞)の連用形—名詞

讀み物　作り話　織り物　枯れ草　干魚　燒き鹽　釣り舟　ひや水

き(着)物　釣り香爐　廻り燈籠　有り金　有り樣

四　名詞—形容詞の語幹

夜寒　裏白　日永　足弱　面長　年若　目白　端近　たけ長　裾濃

鹽辛　お齒黑　面高

五　形容詞の語幹—形容詞の語幹

遠淺　細長(古代の衣服　青鈍　白黑　高低　薄赤　善し惡し

六　動詞(存在詞)の連用形――形容詞の語幹
　待ち遠　稼き高　きせ長
七　名詞――動詞(存在詞)の連用形
　雨乞ひ　兎狩り　水呑み　筆立て　飴だき　田植ゑ　車ひき　野分き
　面伏せ　草刈り　船乘り　從弟違ひ　魚釣り
八　形容詞の語幹――動詞(存在詞)の連用形
　薄着　うれしなき　高とび　苦笑ひ　長いき　遠のり　うま煮
　淺漬け　清祓ひ　細作り
九　動詞(存在詞)の連用形――動詞(存在詞)の連用形
　差し支へ　取り込み　書きつけ　たきおとし(焚落)　有り來り
　思ひやり　立ちゐ　のみくひ　とりおき　受けとり
動詞、存在詞に複語尾のつけるものも亦その連用形を以てすること上の例におなじ。
　三の場合　したりがほ　しらずがほ
　七の場合　親知らず　とりとまらず
　九の場合　くはずぎらひ

その副詞を上述の三要素に冠せしめてつくれる熟語の名詞次の如し。

副詞——名詞

父もの　父いとこ　あだ名　おぼろ月夜　あばら屋　すゞろごと

すくよか心

副詞——動詞の連用形

うたゝ寝　すゞろありき　あだぶし

以上は二語のものなるが三語以上よりなるもの丶例を一二あぐれば次の如し。

名詞のみのもの。

夕月夜

名詞と動詞の連用形とにてなれるもの。

鵜飼舟　犬追物　葦手書

名詞と形容詞の語幹と動詞の連用形とにてなれるもの。

いか物作り　長鳴鳥　心安立

動詞の連用形のみのもの。

なきねいり　みこみちがひ

代名詞の資格を有する熟語はすべて代名詞を名詞に冠せしめてこれをつくる。

そのうち自稱の「わ」を名詞に冠せしめて

わどの　わぬし　わ男　わ女　わ御前　わ子　わ僧　わぎみ

などいふものは古代に對稱に用ゐて親しみの意をあらはしたるものなるが、今は用ゐず。又第三人稱の「こ」「そ」「か」「あ」を「やつ」に冠せしめて、

こやつ　そやつ　かやつ(口語にていふ「きやつ」は「かやつ」の轉)　あやつ(口語にては「こいつ」「そいつ」「あいつ」「どいつ」などいふ。)

といふことあり。これは侮りいふ詞とせり。又不定稱の「なに」を冠せしめて

なにびと　なにもの　なにごと　なにやつ

などいふことあり。その「なに」を冠せしめたるにて必ずしも代名詞の性質を有せぬものも亦少からず。

數詞の性質を有する熟語は數量の單位を示す名詞に數詞を冠せしめたるものなり。これらは次の如く小數をあらはすもの、

一分　二厘　三毛　四絲

度量衡、貨幣、距離等の量をあらはすもの、

一尺　三寸　五升　六石　七圓　八錢　九間　十里

又

一將校　三年　六歲

の如きものこれなり。さて深く數詞の構成を考ふるに單語としての數詞と稱せらるべきものは嚴密にいふときは單位の數詞「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」及び「百、千、萬」等の數の段階を示せる語のみにして

三十五　百六十八　二千三百　一萬五千六百七十八

などいふものは實は熟語たるものなり。而してこの構成法によりて先例の有無をとはず、吾人は自由にある數量又は順序をば臨時にいひあらはしうるなり。又不明の數をいふ爲に「なに」「いく」といふ語を冠してつくれる

何百　何十　何年　何間　いく百　いく十　いく年　いく圓

などいへるも亦熟語にて數詞の資格を有するものといふべし。

形容詞の資格を有する熟語は形容詞の上に、上にいへる三の要素を冠せしめてこれをつくるなり。その例、

名詞——形容詞

心細し　物憂し　名高し　おくゆかし　目ばゆし　心よし

氣強し　なまぐさし　間近し　胸苦し　物狂し　あぶらこし

形容詞の語幹——形容詞

細長し　薄暗し　熱苦し　かたくるし　青白し　赤黑し
惡賢し　ふるくさし
動詞(存在詞)の連用形——形容詞
みにくし　きゝぐるし　こげくさし　ありがたし　のこりおほし
まちどほし　ねぐさし　むしあつし
動詞の性質を有する熟語は動詞の上に、上にいへる三の要素を冠せしめて之をつくるなり。その例
名詞——動詞
心ざす　物がたる　名づく　手繰(タグ)る　木傳ふ　目(マ)みゆ　後(シリ)ぞく
口(ク)ごもる　腹ばふ
形容詞の語幹——動詞
近づく　遠ざかる　うすがすむ　近よる　長びく　短すぎる
遠のく　わかゞへる
動詞(存在詞)の連用形——動詞
落ち入る　引つ(き)はる　かへりみる　あり餘る　こひねがふ
おしやる　あひなる　取りかくす　かきくらす　うちきく

さし控ふ　たちよる　うりさばく

さてこれらのうち「あひ」「うち」「かき」「さし」の如きものを以て接辭なりとする人あれど非なり。これらは動詞としての意義甚だ輕く見ゆるが故にかくいはるゝものなれど、そは慣用上無意義のやうに用ゐらるゝが故にかく見ゆるにて、なほ明かに動詞の連用形を以て動詞に冠せしめて熟語の動詞をなせるものなり。その意義輕く見ゆるは卽ち、主從複合の方式によれるが爲に、下なる動詞の意重く上なる動詞の意輕きによるに外ならず。なほこれらの事は連用形の用法の條に再び說くことあるべし。さて又動詞の性質を有する熟語には動詞の上に副詞を冠せしめたるものあり。

さらかへる

の如きこれなり。

副詞の性質を有する熟語は「ほど」「さま」「やう」の如き汎き意ある名詞に「かく」「しか」「いか」又「か」「さ」「と」の如き副詞を冠せしめてつくれるもの多し。

「ほど」の上に他の語を冠してつくれるもの。

かほど　さほど　いかほど

「さま」の上に他の語を冠してつくれるもの。

かくざま　いかさま　とさま
「やう」の上に他の語を冠してつくれるもの。
かやう　さやう　いかやう
又副詞二を重ね合せてつくれるあり。
なほさら　ゆめさら　ことさら
これらは極めて大體をあぐるに止む。
助詞にも熟語に準じて論ずべきものあり。これらはたゞに助詞が數多相重なりたるをいふにあらずして、その間に意義の轉化あるものをいふなり。卽ち「ばし」「もぞ」「もこそ」「しも」「ばや」「ばこそ」「をや」の如きこれなり。次にそれらの用例をあげむ。
「ばし」これは元來下にいふ「をば」の下に「し」の添はれるものなるが、「を」の省かれて「ばし」の一語となれるものなり。そのはじめは「をば」の意の强きものなりしこと
心もしらぬ人を宿し奉りてかまばしもひきぬかれなばいかにすべきぞ。
（更科日記）
の如く用ゐられたり。然るに、慣用久しき間に、もとのをば」の意はなくなりてたゞ「ば」の意の强きもの丶如くに考へらる丶に至りて次の如き用例を生ぜり。
弓ばし引くな間近く寄よとぞ下知せられける。（梅松論）

人に顯ばし切られうとて不覺の人哉　（延慶本平家、二一本）

よくよく宮仕へ奉れ相構へて御心にばし違ひふな（平家二、新大納言被渡）

庭ふかき池に生ふてふみくりなはくるとは人に語りばしすな。　（新撰六帖）

漕ぎかへるみしまがくれのもより舟ほにばしこふな人しれずのみ。

判官兄弟何れも無恙してばし歸り參りて候はば如何に、今一入うたてしさも無遣方候べきに。　（太平記、十八、瓜生判官老母事）

下人に使はるゝいはればしあるか。　（謠曲、鳥追船）

「もぞ」これは助詞の「も」と「ぞ」との合一せるものなるが、二者熟合して、新義を生じ將來をかねて推測する意を呈せり。而してこれは「ぞ」の係として終止を用言の連體形にすべきものなり。

春雨にぬれてたづねむ山櫻雲のかへしの嵐もぞふく。　（金葉、一）

秋山の淸水はくまじ、濁りなば、宿れる月のくもりもぞする。　（詞花、秋）

「もこそ」これも係助詞「も」と「こそ」とを合せたるものなるが、二者熟合して新に將來をかねて推測する意を呈せること「もぞ」に同じ。而して「こそ」の係に對して終止

を用言の已然形にすべきものなり。

花見れば、心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ。（古今、春下）

みかりするかた野のみのにふる霰あなかまゝだき鳥もこそたて。（新古今、冬）

「しも」　これは間投助詞「し」と係助詞「も」との合成せるものなるが、これにはその力甚だ强くなりて「こそ」に准ずべく、文中にありては大抵終止に曲調を生ぜしめ用言の已然形を以てそれに應ぜしめ、以て下の句に對して意義上條件となる（形はつゞかず）に至れるあり。

時しもあれ、秋やは人のわかるべき、あるをみるだにこひしきものを。（古今、哀傷）

女郎花多かるのべに今日しもあれ、うしろめたくも思ひやるかな。（後拾遺、秋上）

されど「しも」はいつもかゝる力を有するものにあらずして、普通の「しも」もあり。

天の川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ。（古今、秋上）

あまたみしとよのみそぎのもろ人の君しもものを思はするかな。

(拾　遺、戀)

「ばや」これは元來接續助詞の「ば」と係助詞の「や」との結合によりてなれるものなるが、相合して一語となり、常に終止にのみ用ゐられ、終助詞の性を具するに至れるものなり。かくてその意は希望をあらはし、動詞、存在詞の未然形に附屬す。

いかではやく都に行かばや。

心あらむ人にみせばや津の國のなにはわたりの春のけしきを。

(後拾遺、春上)

今しばしいきてあらばやと思ふ。

よそ人にとはれぬるかな、君にこそみせばやとおもふ袖の雫を。

(千載、戀一)

「ばこそ」これは元來接續助詞の「ば」と係助詞の「こそ」との結合によりてなれるものなるが、相熟して、一語となり、常に終止にのみ用ゐられ、終助詞の性を具するに至れり。かくてその意は反動をあらはすものにして動詞、存在詞の未然形に附屬す。

里にすめども、あこより外に見えかよふ人のあらばこそ。(宇都保、俊蔭)

別の御使にても候はばこそ。

(平　家)

御名はあらばこそ。赦免狀の面を御覽候へ。（謠曲、俊寬）
淚をだにもおさふべき袂も袖もあらばこそ。（謠曲、卒都婆小町）

これは中古より生ぜしものなり。

「をや」これは元來古代の間投助詞「を」に係助詞「や」を添へたるものが熟合して一語の如くなれるものにして、その意義も用法も一定の形式をとるに至れり。即ち意は反動をあらはしつゝ、主として體言又は複語尾「て」につきて終止す。而してその上には必ず「況んや」といふ語を冠するものとす。

況んや大雨の急に降り下るに於いてをや。
聖人だに然り。況んや我等をや。

以上の助詞はすべて文語にのみ用ゐらるゝものにして口語には用ゐられず。

第二十八章　合體語

合成語に連關して合體語の事實を少しく說くべき要あり。合體語とは二以上の語が、形の上に融合して一語の如きさまとなり、外形上分つべからざるさまを呈して、しかも原の語の各の意義を個々に存するものをいふ。この故に、合成語とは、その觀察點相反するものといふべし。しかも二者三者合して一語のさまをなせ

るは相通ぜり。その區別をいはむに、彼は、意義の上に於いて新に一個體をなせるものを主として說くものにして、此は意義の上にては個別的なるもの丶形體の上に於いて一個體をなせるものを主として說くものといふべきものなり。この合體語は嚴密にいへば、文法上の研究要目にあらざるべしといへども語の用法上往かゝる事實を生ずるのみならず、この事實を心得ぬときは往々他人の說を了し得ざる處なしとせず。この故に本章を設けてその大略を說かむとす。

合體語はその合體せる形に就いて研究すべきものなれば、これらを事實につきて指示するを便なりとす。而してこれらはその合體以前の語につきて考ふれば、合成語なるものあり。然らぬあり。今合成語につきてその合體語となれるものをいはば、疊語にては

いといと　を　いとど

朝なあさな　を　あさなさな

といふが如き、これなり。熟語にては、

かははら　を　かはら

おもひいで　を　おもひで

といふが如きこれなり。

合體語の成立するは、その各語の間に、音の省略若くは縮約ありて、形體上これを分解するに由なくなれるに基づく。上の例にあげたる

いとど　あさなさな
かはら　おもひで

の如きはみな中間の音の省略あるに基づくものなるが、音の縮約に基づくものとは

はらおび　を　はるび
ながおし　を　なげし
おほとのあぶら　を　おほどなぶら

といふが如きものをいふ。

以上あげし合體語の例は合成語のものゝみなるが、連語より生じたる合體語も亦存す。たとへば、

くれのあゐ　を　くれなゐ
しほのあわ　を　しほなわ
いもがあり　を　いもがり

の如きこれなり。

合體語に似たるものに融合語と名づくべきもののあること、並びにその融合語は便宜上單語に準じて性質論上に於いて取扱ふべきことは既にいへり。融合語と合體語とはそのさま略同じやうに見ゆれど、融合語はその合體せるものが形の上に於いて融合せるのみならず、意義の上に於いても融合して一の語として取扱はるべき民族的認識を生じたるものをさす。而してその融合語たるものは存在詞「あり」を基とせるものに多し。かの「かり」の形をなせる形容存在詞「けり」「せり」「てり」等の形をなせる動作存在詞「なり」「たり」の形をなせる說明存在詞等これなり。複語尾にも亦存在詞に熟合したるもの少からず。そのうちに於いて「たり」「けり」の如きは融合語たること明かなれど、「ざり」「べかり」「まじかり」の類は融合語といふよりは合體語たるべく、ことに「ざり」の如きは用法上より見れば、「あり」の意著しきものにして合體語といふべきこと明かなり。又「春日なる三笠の山に出でし月かも」の「なる」の如き、副詞と「あり」との合體せる「かゝり」「しかり」「さり」等も亦合體語たること明白なり。されど、それらは便宜上既に性質論に於いて說きたれば、今こゝには說かず。

左行三段活用の「す」の連用形「し」より複語尾「て」につゞけたる「して」といふ形は存在詞「あり」の連用形の代用をなすものなるが、これが助詞「に」「と」をうけて「にして」「として」といふ形にて用ゐらるゝものが、「にて」「とて」といふ形に用ゐらるゝこと頗る多し。

又複語尾「ず」をその「して」にてうけて「ずして」といふあり。その「ずして」が約まりて「ずて」となり、更に約まりて「で」となれるあり。これらの「とて」「にて」「ずて」「で」も亦各合體語たる性質を有するものなり。それらのうち「とて」「にて」は「して」に連關して別に一括して說くべきを以てこゝには「ずて」と「で」とを說くべし。

「ずて」　これは「ずして」の略よりなれるものなるべきが、その例次の如し。

いかで月見ずてはあらむ。（竹　取）

君こずて年はくれにき立ちかへり春さへ今日になりにけるかな。（後撰、春下）

我宿の尾ばなが上の白露をけたずて玉にぬくものにもが。（後撰、秋上）

「で」　これは「ずて」の更に約まれるものにして、意は「ずして」におなじ。

いなみもやらで說き出しぬ。（平　家）

櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける。（拾遺、春）

さらでだに鷄人曉を唱ふる聲明王の眠をさます程になりければ。

以上の「ずて」「で」はいづれも古代に用ゐられしものにして現代にありては稀に文

章に用ゐらるゝことありとす。しかるに近世に入りてはこの「で」をば「いで」といふ事になれり。而してその所屬は「ず」の性質を失はず、未然形に屬せり。

物言ふ事も叶はいで顏をしかめた。

見もせいでわるいとはいはれまい。

算用が出來ても、できいでも、ぜひとも連れて行かねばならぬ。

この「いで」は口語にも所々の方言として存すれど、東京にては用ゐぬものたり。

又助詞と存在詞「あり」との合體せる語あり。次にこれを說くべし。

「まれ」　これは係助詞「も」と存在詞「あり」の命令形「あれ」との熟合して一體となれるものにして多くは「とまれかくまれ」の如く、放任の語法をなす時に用ゐらる。而して、その他の活用形なるものは更に見えず。その例

とまれかくまれ、とくやりてむ。　（土佐日記）

君といへばみまれみずまれ、ふじのねのめづらしげなくもゆる我こひ。　（古今、戀四）

人にまれ鬼にまれ、かへし奉れ。　（源、蜻蛉）

松ひきて千よともいのるけふしまれ、ふるほどもなくきゆるはつゆき。　（保憲女集）

君しまれ、道の往來を定むらむ過ぎにし人をかつ忘れつゝ。（新古今、戀五）

「ざり」これは係助詞「ぞ」と存在詞「あり」との熟合して一體となれるものなるが、これには多くは「ざりける」といふ形なるあり。これは「ぞ」に對して「ありける」にて終止せるなり。

菊の花ひぢてながるゝ水にさへ浪のしわなき宿にざりける。（貫之集）

ふる雪に色しまがへばうちつけに梅をみるさへ寒くざりける。（貫之集）

てる月のながるゝ見れば天の川いづるみなとは海にざりける。（土佐日記）

かの秋萩帖の歌に

花の色のみるめあくまでへましかば、うくざらましな、にほひながらも。

とある「ざらまし」も亦「ぞあらまし」の合體語なりとす。又平家物語などに多く見ゆる「ごさんなれ」（「にこそあるなれ」の約略）といふ語もこの部類に入るべきものなり。

助詞にもこの合體語と目すべきもの一二あり。「をば」「だも」の如きこれなり。

「をば」これは格助詞「を」の下に係助詞「は」の添はれるものなるが、合體語として「は」が濁音となれるものなり。

これをばとらむ。かれをばすてむ。

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ。（古今、別）

かゝる時の「ば」はたゞ連濁音として起れる現象にして、接續助詞の「ば」とは別なるものなり。

「だも」これは副助詞「だに」の下に係助詞「も」の添はれるものにして、もと「だにも」といひしものが「に」の省かれてなれる合體語たるなり。

われを賴まむものにだもあらば、

それ聖人は孔子だも居らず。

吾人は前數章より本章にわたりて、ある語が動きて性質又は形をかへたるものを研究せり。これらの事實は、語の動的狀態の一たることはいふをまたざる所なるが、然もその結果、卽ちその歸着したるものを見れば、なほ靜止的のものにして語の運用の研究の豫備的狀態に止まれる觀あり。卽ち前數章來、述べたるものはその結果をとりて見れば、單語と同じ性質を具せりといふことを得べし。かく、これ

らの合成語、合體語等が實地に運用せらるゝに當りては單語と殆ど全く同一に取扱はるゝものにして、それらは分析的の見地に立たざる限りは略同様のものとして取扱はるべきものとす。かくて次章より眞正の運用的研究に入らむとす。

第二十九章　語の轉用

語の轉用とは或る語がその本性を變ふることなくして臨時に資格を轉じて文句の中に用ゐらるゝ現象をいふ。この轉用といへることは前にいひたる轉成と動もすれば混じ易し。されど、これはその本來の性質をかふるものにあらねば、注意すれば紛るゝことなし。すべて一定の語はその本性によりてそれ〳〵の用をなすものなるが、時として言語運用上の必要よりして、之を他の種類の語に代用して臨時にその資格を與へて以てその應用の範圍を廣くすることあり。而して、かく自由に運用せらるゝことは國語の活動の活潑なることを示すものといふべし。今それらの事情をこの章に於いて研究せむと欲す。

上述の如くその語を臨時に他の語の資格に轉用する際には、その語の元のまゝの形にて轉ずるを普通とすべきに似たれど、用言にありては活用形ありて、必要に應じて形を變ふる性質あれば、一定の用法の時に一定の活用形を以てするを必要

とするものあり。

語の轉用として說くべき主要なる事項は代名詞の內に於ける稱格の轉換と、他の語よりして體言の取扱を受くる場合のものと、用言に關する轉用との三の場合ありとす。

代名詞はそのさし方に一定の規格あることは既に述べし所なるが、まゝその本來の格に使用せられずして他の格に轉用せらるゝことあり。先づ反射指示の代名詞は自稱又は對稱に轉用せらるゝことあり。自稱に轉用したるものは

おのれは天上より來り給ひし人の御子どもなり。（宇都保、俊蔭）

おのれがもとにめでたき琴（キン）侍り。（枕、五）

の如く謙稱に用ゐるものなるが、對稱に轉用したるものは

などおのれはみそか男して人と文かよはしやはする。（宇都保、國讓上）

おのれは𡖋ではないかいやい。（狂言、伯母酒）

の如く對者を侮りていふ時に用ゐるものなりとす。

稱格の代名詞にありては第一人稱「われ」を第二人稱に轉用して侮蔑の語とすること往々あれど、そは卑しき語として姑く措くべし。その他にては第三人稱を種種に轉用するなり。先づ方向をさす第三人稱の代名詞を以て人の第三人稱に用

ゐるものあり。これは主として口語にあらはるゝものなるが、その例は

こなたはどなたでいらせられますか。

あなたがたの事は恐れ多い事である。

の如し。これには中稱を轉用するものなし。次にはそれらの方向をさす各稱を以て第二人稱に轉用するものなるが、これには二樣の別あり。一は「そち」などいふ語にして、これは

そちは何者なるか。

の如く、中稱のものを用ゐるに限り、しかも敬意を含まざるものなりとす。二は「こなた」「そなた」「あなた」といふ語を第二人稱に轉用するものにして、これは

こなたは何を仰せられる。

そなたは默つてゐられよ。

あなたは何時御上京になりますか。

の如く、いづれも敬意をあらはすに用ゐるものなるが、それらのうち「こなた」より「そなた」の方が敬意深くして「あなた」を最も敬意强しとす。これはこの語がもとの稱格の遠近に深き關係あるものと考へらる。次には又場所の中稱を第二人稱に轉用することあり。たとへば、

そこには如何におぼしたまふぞ。

そこは何してゐるか。

の如し。これらには特別に敬意はなきものなりとす。次には又事物、場所、方向の近稱を以て第一人稱に轉用することあり。この時は方向のは「こち」のみ用ゐられて「こなた」は用ゐざるものと考へらるゝ。その用例

これは一所不住の沙門にて候ふ。

こゝにもしか思ふなり。

こちはそんな事は知らぬ。

體言以外の種類の語が、體言の取扱を受くる場合を見るに、種々の段階ありと考へらるゝ。今これらのうち、語の轉成の條に述べしものはこの類に入るべきにあらずとして除外してもなほ多くの現象の存するを見るなり。既に性質論中にも論ぜし如く、體言は思想の對象たる概念をあらはすものなるが、元來體言にあらぬものにても、それが思想の對象として用ゐらるゝときには如何なるものにてもあれ、體言の資格を文中にて有することを得べきものなり。かくてそれらのものはいづれもその文中に於いて體言の取扱を受くべきことは論をまたず。今かく體言の取扱を受くべき場合を考ふるに、大別して四の場合あり。

一　說明の對象とする場合

二　その語句を引用する場合

以上二の場合は一切の語に通じたる場合なり。

三　用言の屬性の活動をいひあらはしつゝ、しかもそれを以て體言の取扱をなす場合

四　その用言の屬性を以て動作の目的をあらはすものとして取扱ふ場合

この「三」「四」の場合は用言のみにあらはるゝ現象なりとす。次下にその四の場合を說くべし。

あらゆる語はそれを說明の主體又は客體とする場合に體言の取扱ひをうくべきものなり。たとへば

「咲く」は四段活用の動詞なり。

「咲けり」は「咲き」と「あり」との結合よりなれる語なり。

四段活用の動詞の「咲く」に「あり」を結合したるが「さけり」なり。

の如き例にて「咲く」「さけり」「あり」といふ語の體言としての取扱ひを受くるにさまざまの場合のあることを見るべし。又副詞、助詞にても

「あに」は副詞なり。

反語を導く陳述副詞の一例としてあぐべきは「あに」なり。

「ば」は接續助詞なり。

用言の未然形にも已然形にも附屬する接續助詞は「ば」なり。

「されば」といふ語は「さり」といふ語に「ば」を附屬せしめたるものなり。

の如くいひうるものなり。かくの如くそれらを說明の對象とする時に、いつにても體言の取扱をうくるものなりとす。

他の語句を引用する場合とは、上の場合とその取扱方の結果に於いては大差なしといへども、その本源を異にす。即ち、上の場合にありてはその語を說明の對象とする場合には說明者の主觀に於いて、相當の調節を加へてこれをとり出し來れるものなるが、引用の場合はその語句は著しく客觀性を帶び、その語の形式は主觀に於いて左右することなく元のまゝこれを自己の語句中にとり込む點を異なりとす。たとへば、

兵卒は「進め」を待てり。

この子は「さやうなら」を忘れてゐる。

の如きこれなり。これらの外

日本人の人に別るゝ際にいふ常套語は「さやうなら」である。

「休め」から「集まれ」までの間は僅に十分間であつた。

などの如く、これらも亦種々の場合に用ゐらるゝこと本來の體言と殆ど異なることなし。

こゝに語句引用の方式を少しく述ぶべし。語句引用の方式には直接引用と間接引用との二様あり。直接引用のものはその引用せらるゝ語句をばそのまゝ直接にその資格に相當する格助詞に接せしめ又格助詞を用ゐぬ時はこれが地位に代用する副助詞、係助詞などに接せしむ。前項の例はいづれも直接引用の例なり。間接引用のものは、本來その下に「と」といふ助詞を加へて「いふ」といふ動詞の補格とし、さてその用言と共に體言の取扱をなせるものゝ變形なり。たとへば、

「古池や蛙とびこむ水の音」は芭蕉の名句なり。

といふ場合は直接引用にして、

「古池や蛙とびこむ水の音」といふは芭蕉の名句なり。

といふ場合には「云々といふ」までが、體言の取扱を受けて主格に立てるものにしてこの發句はその「いふ」の補格として引用せられたるものなり。而して吾人は今これを直接に主格としては考ふることを得ざるものなれば、嚴密にいへば、これは主格としては引用の語句といふを得ざるものなり。しかるに、この「と」と「は」との間の

「いふ」を略して

「古池や蛙とびこむ水の音」とは芭蕉の名句なり。

といふ時にはこゝにその發句は間接引用にして「とは」といふ形を以て主格として立てりと考ふるを得べし。かく間接引用たるものを示すにはその語句の直下に「と」を添へてさて係助詞「は」を加へて主格に立たしむるものに多しとす。

次に用言の屬性をいひあらはしつゝ、しかもそれを以て體言の取扱をなす場合とその用言の屬性を以て動作の目的をあらはすものとして取扱ふ場合との事を述べむとするに先だちて、用言が體言の資格をうるに種々の段階あることを說くべし。これには六の段階ありと考へらる。第一はその語そのものをそのまゝ說明の對象とするものにして、これは既に述べたる

「喜ぶ」は四段活用の動詞なり。

の如き例なり。第二はその語の示す意義そのものを抽象的概念として取扱ふものにして「喜び」といふが如きこれなり。これらは、語の轉成の條にいへる名詞に轉成せるものこれなり。第三は現在ある事物につきて屬性を陳述してあるものを一の觀念として取扱ふものにして、

「人の喜ぶ」を見ればうれし。

「人の怒れる」は傍いたきものなり。
「髪の長き」は美人の相なり。
「力の强き」を誇るは小人の事なり。
の如きこれなり。第四は事物の狀態動作等を一の事實としてこれを概念的に取扱ふものにして
「喜ぶ」はよく「怒る」はあし。
「長き」は「短き」の反對にして强き」は「弱き」の反對なり。
の如きこれなり。第五は第四と似たれども、その意異にして、現にある事物の狀態動作等を裝定してありと見らるゝものをば概念的に取扱はむとするものにして
「怒れる」は彼れにして「喜ぶ」は我なり。
「長き」をば竿とし「短き」をば杖となす。
の如きこれなり。第六はある動作事實を陳述せるものを更に動作の目的として體言に準じて取扱ふものにして、
花を見に行く。
證書を受けに來る。
河へ釣しに行く。

の如きこれなり。これら六種のうち、第一第二は既に說明せるものなり。第三はその用言のみにあらず句そのものを以て體言に準ずるものなれば、句論の範圍に入るべきものなり。その第四以下卽ち本章に說くべきものに屬す。

上の第四の場合と第五の場合とは嚴密にいへば區別あるものなるが、そが用言の屬性の活動をいひあらはしつゝ、しかも、それを以て體言の取扱をなす點に於いて二者共通なるを以てこゝに便宜上これを一括して說くことゝし、それらを名づけて準體言といふべし。卽ちこれらは、一面に於いて用言としての活動を有しつゝ、しかも文句中にありては體言に準ぜられ、それらの資格を以て取扱はるゝものにしてその活用形は常に連體形をとるものなりとす。この準體言は用言の性質を保存しつゝ一方に於いて體言の取扱を受くるものなれば、いはゞ、體言と用言との中間に立てりともいふべし。かゝる用ゐ方をなしうべきものはすべての用言にわたりて存す。次に少しく例をあぐべし。

形容詞を以てする準體言の例

勤勉なる人はわづらはしきを厭はず。

愛憐の情うすきに似たり。

動詞を以てする準體言の例

風浪何ぞ恐るゝに足らむ。
德に報ゆるには德を以てす。
節に死ぬるは君子の本懷なり。
これやこの行くもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかのせき。

存在詞の各類を以てする準體言の例

これ亦貯蓄の法に基せるなり。
はじめなるは已に林麓におちぬ。
余は彼が愛國の士たるを信ず。
あゝ日本は松國たるべし。櫻花國たると相待たざるべからず。

以上の外複語尾をふめるものにての準體言の例

見わたす限りなつかしからぬはなし。
すぎたるは及ばざるが如し。
今まで無禮せしは余が過なり。
あれに浮びたるが江の島なり。

從來の文法書はこの準體言に就きて論じたるもの全くなかりき。されど、こは頗る廣く用ゐらるゝものにして、これの知識なきものは國文を語ること能はざる程

の重要なるものなり。抑も體言は主格、補格、賓格等に用ゐらるゝことといふまでもなきことなるが、この準體言も亦その如くに用ゐらるゝなり。而してこれらは既にいへる如く、用言の意義を有しながら他方に於いて體言の取扱をうくるなり。これ準體言と名づくる所以なり。これを英文典などに比較するにこの用法のものは大抵かれのgerund（名動詞と譯する人あり）に似たるものにして、かれにても亦主格、補格に立つことあり。而してその形は分詞と同じ。しかして分詞と稱せらるゝものはわが用言にての連體格に該當せり。これを以て見れば、國語の連體形が準體言の一定の形式なりといふことは彼是共通の面影ありといふを得べし。

ある動作事實を說明せるものを更に動作の目的として以て體言に準じて取扱ふものを目的準體言といふ。これはその用言のあらはす屬性を以て動作の目的とせることをあらはすものにして動詞に限りてあらはるゝ現象なり。而してその用ゐらるゝ形は連用形に限られたり。その例、

花を見に行く。

月は何しに樓には上るべきぞと。（今昔廿四、廿七語）

見送りに參り候。

魚を釣りに出かく。

即ちこれらはいつもその連用形を用ゐて、格助詞「に」を添へて補格に立たしめて動作の目的を示したるものなり。而してこれには複語尾をふめるものも亦用ゐらる。その例

泣かれに來りしやうのものなり。
叱られに行くが如し。
かくては花見るにはあらで人に見られに行くといふべし。
人困らせにするわざならむ。
又のたませむこときこえさせに。あすあさてのほどにもさふらふべし。（蜻蛉下）
世人へのみせしめにかくはするなり。
實否をたゞさしめに使をつかはす。

かくの如く用ゐらるゝ複語尾は屬性をあらはすものに限られたり。

こゝに普通の準體言にして意義の上より見れば動作の目的を示すものあり。一般的にいへば、準體言にして格助詞「に」を伴ひて補格に立ちたるもの、うちには目的を示すものもありうべき筈なり。然れども、實地を檢するにその用をあらはせるものは甚だ稀にして、その專ら用ゐらるゝは複語尾「む」をふめるものなり。そ

の例

かへるさに妹にみせむにわたつみの沖つ白玉拾ひてゆかな。　（萬葉、十四）

の如きこれなり。而してかくの如き用例は「何せむに」といふ語として多くあらはる。

白銀も黃金も玉も何せむにまされるたから子にしかめやも。　（萬葉、五）

何せむにかいま又かへりたまふべき。　（宇都保、國讓中）

なにせむにかはききおかむ。　（源、若菜下）

これらは目的準體言の「何しに」と意稍似たれどその成立異にして、文法上の取扱方に差異あるものなりとす。

準體言目的準體言はいづれも一方に於いて用言としての活動をなせるものなれば、用言としての性質は十分に發揮しうべきものなり。即ちその用言に對しての主格を有し、補格を有し、賓格を有しうべく、又修飾格をも伴ひうべきものたるがそれらの具體的の事實は以下の章に於いて必要に應じて說くべきなり。

用言に於ける語の轉用は主として形式用言の間に起るものなるが、こゝには左

行三段活用の「す」といふ動詞が存在詞「あり」の如くに用ゐらるゝものを主として述べむと欲す。抑も「す」といふ語は動詞としての屬性を有することは明かなるが、その屬性は甚だ廣漠たるものにして、たゞ動作作用といふ極めて抽象的の意をあらはすものなるが故に、いづれの動詞の意をあらはすにも代用せらるべき性質を有するなり。この故にこの語が實地に用ゐらるゝにあたりては種々の事相を呈するものなり。即ちこの「す」の上に他の語を冠せしめて、その動作作用を具體的に示すこと少からず。これらの具體化せむが爲に加へらるゝ語の事は後章に說くべきものなるが、その具體化の爲に加ふべき語が「もの」といふ名詞なることあり。この場合にては「もの」の意義の極めて廣きが上に「す」の意義も亦廣きが故に二者相合してなれる「ものす」といふ語の意も亦甚だ汎くして唯一般の動作作用を代表することなほ名詞と代名詞との關係に似たり。たとへば、

親などものし(ゐ)たまはぬ人なれば。(源、東屋)

阿闍梨にものし(いひ)つけ侍りにき。(源、宿木)

思ふべき人々の打ち捨てゝものし(去り)給ひにけるなごり、はくゝむ人あまたあるやうなりしかど。(源、夕顏)

世を離るゝさまにものし(見え)給へば。(同　)

の如く、それ〳〵その場合に相應すべき動詞を以てかへて、その具體的意義をさとらざるべからず。さてこの「す」といふ動詞は、しか「もの」などいふ語を冠せずして單獨に用ゐられて上の如き種々の場合をあらはすことたとへば、

歌合せむとて(歌合)しける時に。（古、夏）

むかしの人の袖の香ぞする。(匂ふ)

田中の明神のほどには時雨のし(ふり)けるにいかゞすべきとおもひけるに。（枕草子）

などの如きあり。

以上の例は「す」の意の抽象的のものなるを示せるものなるが、それらは抽象的なりとはいへ、なほ「す」の本來の用法によれるものなり。然るにこゝに「す」がその本來の意義用法より一歩進みて一種の決定要素 copula たる如き意と用とをあらはせるものあり。そは何ぞといふに次の諸例の如きこれなり。

いづこも〳〵あしのむきたる方へいなむず。（竹取）

まかりなむずる事の口惜しう侍りけり。（同）

さる處へ罷らむずるもいみじくも侍らず。（同）

ゆゝしからむをいかゞせむずるといひたり。（蜻蛉）

一和尚になり給はむずればよ。（沙石集）

方々の手分をこそせられむずれ。（保元）

これは專ら複語尾「む」をふめる用言の終止形よりうけたる時に限りてあらはるゝ現象にして、從來助詞「と」と「す」との熟してなれるものなりと稱せられたるものなるが、その說は直ちに首肯せらるべくもあらず。古く枕草子に（わろきものゝ條）既に

難義の事をいひてその事せさせむとすといはむといふをと文字をうしなひて唯「言はむずる」「里へ出でむずる」などいへばやがてわろし。

といへり。これはげにもこの說の如く本來は「とす」といひたりしが、いつしか「と」の省かれたるものといふべきものにして從來行はれたる「と」と「す」との熟して「ず」となれりといふ說は不當なりとす。さてかく「と」の省かれたる結果「す」が直ちに「む」に接することゝなり、こゝにその「す」が上の「む」音の影響をうけて連濁音となれるものなれば、これは枕草子に「と」の失はれてといへる如く「と」の省かれたる結果といふべきものなりとす。かくてこの場合の上の「む」が「う」とかはれるものあり。その例

ぬしたちてうどとりおはさうぜよや。（更科）

人もなかりけるにそら耳ききおはさうじて。（和泉語）

などかう物ぐるほしうおはさうずらむ。（狹衣）

清げにおはさうずる御子どものはぢらひおはさうずるいとをかしげなり。　　（源、宿木）

（源、竹川）

これらの形は謠曲などにも盛んに用ゐらるゝものなり。從來かゝる場合の「ず」は終止形、連體形、已然形の三形のみ存する如く說かれたれど、「おはさうぜよ」以下の例を見れば、この三形に限らざるを見るべし。さて又この「むず」の形はその「む」を更に略してその用言の未然形より直ちに「ず」につゞくる如き形を呈することあり。それの古き例は土佐日記に

この歌主なむ「またまからず」といひてたちぬ。

「まからず」とて立ちぬる人を待ちつけてよまむとて求めけるを夜更けぬとにやありけむやがていにけり。

とあるなり。これらは「まからむず」なるべきを更に略したるなれど心をつけずは打消の「ず」を加へたるものと同じやうに考へられ易し。この語遣は田舍語には永く傳はりて今も地方によりてはこれを用ゐる。たとへば遠江の方言（今は「ざあ」「ずい」などいふ由）又飛驒の方言にも信濃（諏訪にては「ずい」といふ由）の方言にも殘れり。「す」が上の如く用ゐらるゝものは、それに動作の意は殆どなくしてたゞ一種の決定要素の如くになりたりと觀察しうべし。かくの如く單に決定要素たる性をあ

らはしたる「す」はこゝに存在詞「あり」の陳述をあらはすものと共通の點を有するに至りてそれらの代理をなすことあるに至れり。今こゝにこの二者を相對比して用例を示すべし。

「す」の變化　「あり」の變化
さすれば　しかすれば　されば(さあれば)　しかあれば
さしながら　しかしながら　さりながら(さありながら)　しかありながら
さして　しかして　さありて　しかありて
むげに弱るやうにし給ふ　あり給ふ
月皎々として　月皎々とありて
山高くして　山高くありて
我身一つは元の身にして　元の身にありて

卽ちこれらの場合の「す」の各活用形は「あり」の場合の各活用形の代用をなすものなり。かくの如くにして「あり」と「す」との交渉は古より今に至るまで國語の上に頻繁にくりかへさるゝなり。

又說明存在詞の「なり」は

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

皆人は花の衣になりぬなり。

の如く文に强調を添ふる爲に加ふることとあり。即ちこれらは「なり」を除きても、その意完全なるものなり。然るにそれに「なり」を加へて一層意を强くするなり。かくてかくの如きことは「す」にもあり。それは上にいへる複語尾「む」を受けたる「ず」もこれなるが、その本原の形なる「とす」を加ふるものも亦これなり。たとへば

凮吹むとす。

余をば頑なりと誹らむずらむ。

の如きこれなり。これらは「とす」「ずらむ」を除きても文の意を害することなきなり。されど、文勢と情調とはこれを除くときにいたく劣れり。これ即ち上の「なり」を加へたると略同じ狀態のものにして、一は助詞「に」と「あり」との合體よりなり、一は助詞「と」と「す」との合體よりなれりといふべきものにして、「に」と「と」との本來の別あり、「あり」と「す」との本來の差別は多少存すべきが、その文勢と情調とを添ふるのみのものなりといふ點に至りては一致するところなり。

上の「とす」といふ語の用法はなほ少しく說明を加ふべき必要あり。この語が、强勢を添ふる爲に用言の終止形にて終止せりと認むべきものに更に加ふることは上の例にて示せる所なるが、これは上にいへる如く、

不測の禍實にこゝに發らむとす。

の如く「む」の下に用ゐらるゝものゝみにあらずして、「なり」にて終止して可なるものに更に添ふることあり。たとへば

これも亦名詞の一種なりとす。

從つてかくの如き處置を執れるは當然なりとす。

の如きこれなり。かくて又この「とす」が、今一步進みて全然「なり」の代用をなすことあり。たとへば、

氣比神宮は古來由緒ある神社にて官幣大社とす。

かくの如き現象の生ずるは此の原因に基づくものとす。

卽ちこれらの「とす」は動作作用の本來の意義をあらはすにあらずして「なり」と全く同じ意と用とをあらはせるものなりとす。されど、「とす」とあるものはすべて上述の如きものゝみにあらずして、本來の意卽ち動作作用をあらはすものももとより多々あるべき筈なれば、この特別の場合に心を奪はれて通常の「とす」を忘るべきにあらず。上にいへる

不測の禍實にこゝに發らむとす。

の如きもその本來の用ゐ方によれるものならば「發らむとする」ことを示す意とな

り、その「發らむ」といふことを强調する意なるときは斷言附屬の格となるべきなり。「あり」と「す」との交渉中最も頻繁に起るものは「して」の用法なり。この「して」は「す」の連用形に複語尾「つ」の屬してなれるものゝ連用形なること既にいへる如くなるが、その用ゐ方は頗る廣きものなり。先づその最も具體的のものをいへば、普通の動詞の連用形を代表せるものなり。その例

頼朝義經をして(使して)義仲を攻めしむ。

今にして(至りて)わが思慮の足らざりしをさとりぬ。

獨逸國の名相ビスマルク嘗て公使として(なりて)佛蘭西國に駐劄せしことありき。

法師はせめてこゝにやどさまほしくして(思ひて)かしらかきてありく。(源、玉葛)

げにそのいろよりして(はじめて)あいなく見ゆるを。(枕、三)

の如きものなり。かくてこの「して」は又次の如く上なる格助詞をも領じて直ちにそれら補格の語に接するもの少からず。たとへば

汝はよく心して(を用ゐて)常にこの一小事を忘るゝことなかれ。

刀して(を用ゐて)削る。

文して(をかきて)いひおこす。（源　薄　雲）
中將の君して(を使として)聞えたまふ。（土　佐）
よねして(を用ゐて)かへりごとす。（同　）
いひぼして(を用ゐて)もつつるとや。

これらは「をもちて」「によりて」などの意をあらはせるものなるが、これより更に一歩進めるものは「あり」の存在の意なるものゝ連用形を代表せるものあり。その例

秋深くして滿樹金よりも黄なり。
春の花にほひ少くしてむなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば。（古今集、序）
こゝにして家やもいづくしら雲のたなびく山をこえてきにけり。（萬　葉、三）

然るにこゝにその「して」が更に一歩を進めて陳述の力をあらはすのみに用ゐられ陳述の「あり」の連用形の代用をなすに至れるものあり。而してこれらは主として說明存在詞「なり」「たり」の連用形の代用として頻繁に用ゐらるゝものなり。元來この「なり」「たり」の連用形は複語尾につづくるのみにして連用形としての主たる用、卽ち語を重ぬる用法は缺けたるものなるが、さる場合にその「あり」の代りにこの「して」

を用ゐることあり。さてその「なり」「たり」は本來「にあり」「とあり」の合體語なるが故に、かゝる場合にはその「に」「と」と「あり」とを分解せしめてその「あり」の地位に「して」を置き「にして」「として」といふ形をなさしめ、それを以て「なり」「たり」の連用形の代用をなすなり。その例次の如し。

天地たゞ平和にして、四顧たゞ寂寞たり。

草は綠にして、花は紅なり。

水淼茫として、舟搖々たり。

以上は重文の上句の述格をなせるものなるが、又次の如きあり。

海面平にして鏡の如し。

筆をとること巧にして速かなり。

遠近靡然として背くものなし。

これらはその語を以て下の用言に重ねて共に陳述するものなるが、かゝる場合に用ゐらるゝ「して」はその意極めて廣きものといふべし。然るに「して」はなほそれらよりも一層抽象的になりて次の如くに用ゐることあり。

答へずして去る。

山も海もみなくれ、夜更けて西ひんがしも見えずして、てけのこと機取の心に

まかせつ。（土佐）

かくの如く、「ず」の連用形の下に用ゐるものは、特にこれといひてとりたてゝ說明すべき程の具體的の意義なく、たゞ陳述の確めをあらはすに止まる觀ありて陳述をあらはす「して」よりもなほ一層廣き意をあらはすものといふべし。

上の「に」と「して」との結合體たる「にして」はその中間の「し」を略して「にて」とすることあり。この「にて」も亦「にして」と同じく種々の用法をあらはすものなり。それには語を重ぬるに用ゐらるゝことあり。存在詞「あり」を代表することあり。又他の動詞の連用形を代表することあり。それらの例、

「にて」にて重文をつくるもの。

春の夜は曇がちにて朧月おほし。

語を重ぬるもの。

ぢく〳〵と松脂の如く燃ゆるのみにて決して爆發せず。

昔博士にて大學頭明衡といふ人ありき。

陳述をあらはすもの。

是は大友黑主にて候ふ。

存在の意をあはすもの。

東京にて見たり。
田舍にてくらす。

手段を示す用言の意をあらはすもの。

筆にて書く。
水にて洗ふ。
舟にて渡る。
謀略にて敵を破る。

又所有をあらはすものあり。その例

月かげを色にて(にもちて)さける卯の花はあけば在明の心地こそせめ。(後拾遺、夏)

口語の「で」といふものはこの「にて」の約まれるものにして、一種の助詞となりはてたるものなり。

用言の轉用に聯關して、なほいふべきことあり。そは敬語の用言の轉用なり。これは敬語の動詞と敬語の存在詞とにつきていふべきことあるものなるが、先づその敬語の動詞につきて說くべし。抑も敬語の動詞は本來具體的の意味を有するものなるが、それが慣用久しきにつれて漸次に抽象的になり、終に「す」と同じやう

に汎き動作作用をあらはすのみの敬語となることあるなり。かくの如きものは口語の敬語動詞にては

まうす　いたす　つかまつる　まうしあげる　あそばす　なさる　くださる

の七語が「す」と同じやうなる意と用とをあらはし、文語にては

申す　いたす　仕る　申しあぐ　なさる　あそばす　くださる　相成る

以上主として候文に用ゐるるものなるが、

申す　ましょす　あそばす

は普通文に用ゐらるゝものなり。

以上のうち

まうす　いたす　まうしあげる　つかまつる　（口語）
申す　いたす　申しあぐ　仕る　（候文）
申す　（普通文）

は謙稱にして、

あそばす　なさる　くださる　（口語）
あそばす　なさる　くださる　相成る　（候文）

あそばす　ましまず　（普通文）

は敬稱なるがこれらはいづれも「す」と同じやうなる意と用とをあらはすことあり。而してかゝる時にはいづれも「す」の資格となりうべき語を以てそれの資格として伴ひうるものなるが、それを以てこの場合の特徴とはするなり。それらの用法の詳細は資格の條に說くを見るべし。

敬語に於ける用言の轉用は存在詞にも行はるゝなり。即ち「あり」の存在の意をあらはすものが、動詞「す」の資格となるべきものを伴ひて次の如くいはるゝことあり。

これも麴町邊へ借宅あるべきよしに候。
折角勉强あるべき樣賴み入り候。
主上は詩の心を御さとりありて天顏殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
直ちに御許容ありてやがて謁見をぞ賜はりける。
先帝には外國公使を京都の宮廷に御召見あり。

の如きこれなり。これらの「あり」は「す」の位置を占めて、同時に敬意をあらはすに用ゐられたるものなりとす。又「あり」の意を代表したる敬語の用言あり。即ち

この頃は暑さ强く候へども御障りも入らせられず候や、御樣子伺ひたく候。

御揃平らかにいらせられ御悦び申上候。

の例の「いらせらる」の如きは存在の意をあらはせる敬語たるなり。又

先々心易き事に候ふ。

貴下の御希望はいづれに候ふや。

隨分面白き遊にて候ひき。

この品粗末には候へども拜呈いたし候。

御一家御無事に御座候や。

これは鄕友小川淸近に御座候ふ。

島津久光公の養女にておはす。

御身は何人にてましますか。

夜もいたくふけぬれば定めて御空腹におはしまさむ。

の「候ふ」「御座候」「おはす」「まします」「おはします」の如くに陳述の力をのみあらはすもの

あり。これらすべて、それらが、敬語として存在詞の位地に轉用せられたるものに

していづれもそれに對しての賓格を件ふものなり。以上敬語としての轉用は賓

格と相待ちて用をなすものなれば、それらの事はなほ賓格の條に至りて述ぶべし。

第三十章　語の位格概說

本章よりは語の運用の研究の主要部分に入るべきが、こゝに說かむとするは、その語の運用の方式にして、この方式の研究は實に語の運用の研究の中心たるものなりとす。

こゝに吾人が研究せむとする語の運用の方式の中に於いて最も著しくあらはるゝものは語と語との相關係する場合なれば、先づそれらの關係が何によりて示さるゝかといふことを顧みるべし。吾人の國語にありては、それらの關係はその語の位地によりて示さるゝことあり。たとへば、

(一)花咲く。

(二)咲く花。

の二の場合を見るに共に「花」と「咲く」との二語なるが、普通には「一」の場合には「花」といふ語につきて「咲く」といふ事實のあらはれたることの說明をなせりと認め「二」の場合にありては「咲く」といふ語が「花」といふ語の意義を制限せりと認められ、同じく「花」と「咲く」といふ語を用ゐながら二樣の別あるを見る。この說明と制限との區別は何によりて表示せられたるかといふに、この二の語の相互の關係的の位置により

てあらはされたりといふべきなり。されば語の相關狀態はそれらの關係を有する語の相互の位置如何によりて區別せらるといふべきが如し。されどこれ實はその相關狀態の表示の一部分の現象に過ぎず。こゝに又、「人」「我」「見る」の三語ある場合を見るに、これを以てそのまゝの順序にしてたゞいふ時には意頗る不明なり。こゝに於いてこれらの關係を明かにする爲に、

(三)人　　我を　　見る。

(四)人を　　我　　見る。

の如くいふ場合ありとせよ。「三」と「四」とのいづれの場合にも「人」「我」「見る」の觀念語ありて、しかもいづれもその位置に差違なし。然るに「三」にては人は「見る」といふ作用を起すものにして「我」は「見る」といふ作用を受くるものなり。「四」にては「人」は「見る」といふ作用を受くるものにして「我」は「見る」といふ作用を起すものたり。かくの如くにして「人」と「我」との「見る」に對する關係は「三」と「四」とに於いて全く相反せり。しかもかゝる反對地位に立てるにかゝはらず、排列上この二者の地位は依然として同一なり。然らばこの關係は如何にして區別せらるゝかといふに、これを外形的に見れば、實に「を」といふ助詞の附屬するか否かを以て區別せらるべきなり。こゝに於いて語の相關係する狀態の差違を示すものは、それらの語の相關的の位置の差

達の外に助詞を加ふると否とによりても示さるゝものなるを知るべきなり。然るにこゝに又その語の相關的の位置と助詞の附屬との二者の共同するによりて示さるゝものあり。たとへば、

（五）山の花

（六）花の山

の二の場合にありてはいづれも「山」と「花」との觀念語よりなり、又「の」といふ助詞の附屬すといふことも一なれど「五」の場合は「花」が意義上の主となり「山の」はこれを制限し、「六」の場合は「山」が意義上の主となり「花の」はこれを制限せり。この區別は實に「山」と「花」との相關位地の差と同時に「の」の附屬するによりて異なるものとす。而してこはその位置の變更と共に「の」助詞のいづれに附屬すべきかの關係も示されたるものなれば、相關的の地位の差違と助詞の附屬すべきことゝは亦相關連する所ありといふべきなり。

さて上の例に於いて或は「を」を加へ或は「の」を加ふる如く如何なる助詞の附屬するかといふことも亦語の相關の方式の區別をなすに重要なる關係ありと考へらるゝところなるが、かゝる役目を有するはすべての助詞なりやといふに、然らずして、これ實に格助詞に限りてあらはるゝ特質なりとす。格助詞は既にいへる如く

にこれら種々の語に附屬して一定の關係を示し、それによりてその資格上の區別を明かにするものにして、一定の資格を示したる以上は他の資格をあらはすこと能はず。その區別儼然として犯すべからざるものなりとす。而して、その他の助詞たとへば、副助詞、係助詞の如きものはその格助詞を助け又時としては格助詞を用ゐざる場合にそれらの位置におかれ、恰も格助詞の代理をなせる如くに見ゆれども、そは偶然の現象にして、これらはただその本來の意義を以て相互の關係の上に更に意義上の制限を與ふる役目を有するものにして、關係そのものをばそれらの助詞によりて表示せるにはあらざるなり。

こゝに於いて、吾人は更に觀念語と關係語との區別を運用上より說明すべき必要に迫られたり。觀念語は、吾人の思想上の結節としてのある觀念をあらはすものにして、關係語はそれら觀念語の間に生ずべき思想上の關係の主要なるものを言語といふ形としてあらはしたるものなり。この故にそれらの關係を起すべき目標となる語はすべて觀念語に限らるゝこと明かにして、關係語たる助詞はそれらに附屬してそれらの關係又は思想上の位地を示す役目を有するに止まれり。この故に關係といふことを抽象的に研究せむには關係語たる助詞は或は主題となりうべきことあらむともいふべきが、他方に於いてそれらの關係を起すべき語

をとりて論ずるときは觀念語たる體言、用言、副詞等がまさに研究の出發點とならざるべからざるなり。その觀念語と關係語との結合によりて生ずる種々の狀態はこゝに一々あぐるを要せざるべしといへども、この二者の區別と關係とは最初に理解せられざるべからず。

以上述ぶる如く語と語との相關係する狀態は相互の位地の差異又は格助詞の結合するによりて示さるゝ所なるが、これを更に深く考ふれば上述の地位の差異又は格助詞の結合といふことはいはゞ、外形的にこれらを表示せるものたるに止まれるものなれば、それらをしてかゝる外形上の表示をとるに至らしめたる內面の精神的事情なかるべからざるはいふまでもなきことなり。然らば、その內面の精神的事情の狀態如何。惟ふに吾人がある思想を表示せむとする時にたゞ單獨にある觀念語を用ゐてその主要點を提示するに止まることあり。或は又ある觀念と他の觀念とを相關聯せしめて表示することもあるべし。而してかくの如き思想の表示は汎く論ずれば、必ずしも言語といふ形式に於いてあらはさるべきにあらずといへども、吾人の硏究の範圍に於いては言語といふ形にあらはされたるものに限るべきものなり。かく言語の上にて表示せらるゝ時にはこゝにその表示は單に思想上のみの問題にあらずして言語上の問題とならざるべからず。今

特にかゝる事をいふ意は外形たる言語と內容たる精神的狀態とが形の上に於いて往々一致してあらはるゝにあらざる場合あるを以てなり。たとへば、言語上二語以上なるものにして精神上一觀念に止まるものあり。精神上二三の要素に分解せられうるものにして言語上一語に止まるものあり。又ある言語にありてはその言語としての性質上よりそれに關係ある語を伴はずば、それに對應する精神的內容を十分にあらはすこと能はざる如き場合も生じ來るべし。かくの如き場合にそれらを單に精神上の問題として研究する時は言語上の形式と齟齬する場合を生ずることあり。又言語の上のみをたどりて說明せむとせば殆んど不可解の窮境に陷るべき恐あり。さればこの硏究にありては言語にあらはされたる形式を主とし、その形式の生ずるに至れる言語上の必要とそれに對應する精神的の內容とを顧慮して、以て說明を下すべきなり。

以上述べたる如き事柄を豫備としてはじめて語の運用の方式を研究するを得べきが、これが研究につきてはあらゆる場合を個々に說くべきにあらずして、それら多くの現象に通じて存する一定の型を考へて之れによりそれらの運用の方式を研究すべきなり。こゝに吾人はかく觀念語を運用する場合に起る一定の法式を名づけて位格といふこととすべし。

この位格といふ語は既にいへる如く英文典などにいふcaseの譯語たる格といふ語を借用したるものなれど、吾人の用ゐるものはそれらよりも一層意義汎く觀念語の運用せらるゝ場合に於ける一定の資格をさすに用ゐたり。

位格は上述の如く、觀念語の運用上生ずる一定の資格をさすものなるが、その資格は多くの場合に於いて觀念語相互の間に於ける種々の關係に於ける資格をさすなり。その相互の關係とは體言が他の語に對して起す種々の關係、用言が他の語に對して起す種々の關係、副詞が他の語に對して起す種々の關係をさすものにして、それらの各種の語が他の語に對する關係は內容上よりいへば千差萬別なるべしといへども、その用ゐらるゝあらゆる場合を研究して歸納して得たる一定の方式あり。この一定の方式即ち型を稱してこゝに位格といへるなり。

かくの如く位格はすべて觀念語につきて生ずるものにして、關係語たる助詞はそれらの補助成分としてそれら位格を示す職能を存することあれども、それ自身に位格を有することはなきなり。

かくの如くにしてこゝに吾人は語の運用の方式として呼格、述格、主格、賓格、補格連體格、修飾格の七の位格の存するを認む。この七の位格は決して演繹の結果得たるものにあらずして、種々の見地より生じたる結果をかぞへあげたるものなれ

ば、その各の位格はそれぞれその立脚地を異にするものなりとす。その事情は各論に入りて說くべし。

抑も語の運用の研究といふことにつきてなほ仔細にその次第を考ふれば、まさしく縱橫の二方面より觀察しうべきものなることを認む。縱とは各種の品詞につきてそれらの用ゐらるゝ狀態を仔細に研究するなり。橫とはこれら各品詞に通ずる運用上の各種の方式を探求し、これより一定の型を求めその型によりて各品詞にわたりてその共通の運用方式を研究するものなり。この共通の運用方式は卽ちこゝに位格と名づくるものなり。されば、この位格の研究は、各品詞を橫斷してそれらの運用上の一定の型を立ててそれらによりて運用の硏究をして條理あるものたらしめむとするものなり。この位格の研究が運用の研究全體に對して有する位地は恰も活用形の研究の用言の性質論上の研究全體に對する位地に似たり。卽ち活用形の研究ありて、はじめて各種の用言に對して秩序ある研究を施し得たる如く、この位格の研究ありてはじめて語の運用に對しての秩序ある研究を施し得べきものなりとす。而して活用形の研究は性質論上、用言の橫斷的研究にして、その縱の研究卽ち各種の活用の研究と相經緯して、はじめて用言の性質上の研究を完くし得たる如く、この位格の研究は運用上の橫斷的研究にしてその縱

の研究卽ち各種の用言につきての各の用法の研究と相經緯してはじめてその運用上の研究を完くしうべきものなりとす。而して、その縱の研究も先づこの横斷的研究を施したる後にあらずば、不明了に陷るべき惧あり。この故に運用の研究の中心は位格にありとすべきなり。

第三十一章　呼格

呼格とは文句中にある他の語と何等形式上の關係なしに立てる語の位格にして、その對象又は對者を呼び掛け指示する形をとるによりてこの名あり。

呼格は上述の如き性質を有するものにして思想上の必要に應じ、如何なる場合と限らずあらはるゝものなり。これは思想上の關係より見ればもとより相對的のものなれども、語として表示せられたる結果卽ち形の上より見れば他の語との間に形式上の拘束を起すことなくして、絕待的のものといふべきなり。

この呼格といふものゝ言語上に存する內面の事情を考ふるに、これ實に吾人がある思想を表示せむとする時に了解作用に訴ふるの方法によらずして端的にその思想の中核たる觀念を提示するに基づくものなりとす。然れども、吾人がかくの端的にその思想の中核たる觀念を提示する時はすべて呼格となりてあらはるゝ

ものなりやといふに然らず。かくの如き場合に使用せらるべき語は觀念語のすべてに存す。たとへば席上を靜肅にせんが爲に、一聲「しっ」といひ「靜に」といひ「だまれ」といふが如きも亦思想上よりいへば呼格と略同じ精神狀態に基づきて表示せられたる語なり。この故にこれらの場合に於いては西洋風の記載法によりて感點「エキスクラメーション、マーク」を加ふることを得べし。されど、吾人はこれらを呼格とよぶこととなし。何が故にそれらを呼格と呼ぶことをせざるかといふことを講明する時はこゝに呼格の特質を明かに認むることをうべし。

上の例の「しっ！」「靜に！」「だまれ！」などいふ語はその一語のみを投げつけたる如く呼び掛けの形式によりて表示せられたる語たる點は呼格に似たる所あり。されど、その呼格と似たる點は思想の狀態にありて、言語としての形より見れば、「しっ」「靜に」は副詞が或る思想の先行をなせるものにして、それに導かれたるくはしき思想發表のそれにつゞきてあらはるべき形式の語なり。卽ちこれらは言語としての表示よりいへば、相待的のものにして、呼格が言語の表示として絕待的なるとは性質を異にせり。「だまれ」も亦思想上よりいへば呼掛の性質を有すれど、言語として表はされたるものよりいへば用言が陳述をなせるものと認めらるゝものにして、次に說明する如く相待的の表示たる性質を有するものたり。この故にこれらは

たとひ呼掛の形式によりたりといふとも、語の位格としてそれ〳〵修飾格、述格として取扱はるべきものにして、呼格と稱することを得ざるものなりとす。これはその用ゐたる語が用言又は副詞たる時に必ずかくあらざるべからざるはその語の本質上避くべからざる點の存するものなり。こゝに於いて呼格としてあらはさるべき語は體言に限らるゝことをさとるべきなり。

呼格に立つことを得る語は上述の如く體言に限るものにして、準體言は體言に準じて取扱はるゝものなること既に述べたる如くなれど、その準體言といへども決して呼格には用ゐらるゝことなし。この故に純正なる體言としての特有の位格と認むべきものは唯この呼格一のみなりとす。實に呼格は體言の最も根本的の運用方式にして、同時に體言の本格的の運用方式はこの呼格にあるものと考へらるゝものなるが、體言の有する多くの位格はいづれも相待的のものにして、しかもそれらの位格は他の類の觀念語を用ゐてもあらはし得べき位格なればこゝに體言の體言たることの運用上の特徴は實にこの呼格たりうる事に存すといふべきなり。この故に、運用上よりして體言とその以外の品詞との區別を識別せむとするものはそが呼格に立ちうるか否かを以て標準とせば直ちに知らるべきものなりとす。この故に呼格に立つを得るものは體言に限れりといふを得べく、又之

を逆にして體言特有の位格は呼格一のみなりともいふことを得べきなり。

體言が呼格として用ゐらるゝ狀態を見るに二樣あり。一は助詞を伴ふことなく體言そのまゝにあらはるゝものなり。その例

櫻花、ちりかひくもれ。

藤の花、はひまつはれよ。

きりぎりす、いたくななきそ。

いかに辨慶。

いざこども、たはゝざなせそ。

香をだにぬすめ、春の山風。

二は助詞を伴ひてあらはるゝものにして、その伴ひあらはるゝ助詞は間投助詞「よ」「や」を多しとす。その例

少納言よ、かうろほうの雪はいかならむ。

苔の袖よ、かわきだにせよ。

おひしげれ、平野の原の綾杉よ。

あが君や、をさなの御物いひや。

朝臣や、さやうのおちばをだにひろへ。

呼格に立てるものをその稱格より觀察すれば、第一人稱なるは極めて稀にして最も屢あらはるゝは第二人稱たるものを呼格とするものなり。これらは命令、禁制、疑問をなす場合の對者たるものを呼格とせるものにして、上のすべての例はみなこの第二人稱者を以てせる呼格なるが、なほ

いかに佐々木殿、遂に見參し奉らず。

の如く對話の際の第二人稱を呼掛くる場合のものも少からず。又第三人稱なるものを呼格とすることあり。この場合には多くは感動又は希望の對象として、その第三人稱者を呼格とせるなり。或は主格として可なるべき第三人稱を呼格の形にしてあらはすものあり。たとへば

まろがまろねよ、いくよへぬらむ。

の如し。この場合にはその語を制限するに第一人稱の連體格を有すること多し。

上にいへる第三人稱の呼格にして感動の對象を呼格とするものは、多くは上に連體格の語を伴ふものなるが、その下にも亦助詞をふめるもの多しとす。その下にふめる助詞は終助詞「か」「かな」「よ」「や」等なり。その助詞をふめるものゝ例次の如し。

あさみどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。

きたなき御方の振舞かな。
妙なる笛の音かな。
此の花のうるはしさよ。
さゝがにの絲をたのめる心細さよ。
最後の姿を今一目みざりしことの口惜さよ。
あらおもしろの歌や。
又下に助詞を伴はざるものあり。その例
よのみじかくてあくるわびしさ。
音のさやけさ。
心づからにうつろふがうさ。
かくの如き場合はいつもその核子たる體言が、形容詞の語幹に接尾辭「さ」の添ひてなれる名詞を以てするものなりとす。
第三人稱の呼格にして、希望の對象を呼格とするものは、必ず終助詞「が」「がな」を伴ひてあらはるゝものにして、
老いず死なずの藥もが。
君が八千代にあふよしもがな。

の如き形にてあらはるゝものなりとす。

第三十二章　述格

用言が陳述をなすに用ゐらるゝときその位格を述格といふ。述格に立てる語を述語といふ。述語は又說明語ともいふことあり。

述格は普通には主格に對して、陳述をなすに用ゐらるゝ位格なりといはるゝものなるが、これは實は通俗の見にして述格は主格と對立すべき必然の約束を有するものにあらず。こゝにその理由を簡單に述ぶべし。抑も陳述をなすといふことは之を思想の方面よりいへば主位の觀念と賓位の觀念との二者の關係を明かにすることにして、その主賓の二者が合一すべき關係にあるか、合一すべからぬ關係にあるかを決定する思想の作用を以て內面の要素として、そを言語の上に發表したるに外ならず。而してこの陳述の能力のみの言語としてあらはさるゝものを論理學にてはcopulaといへり。これを係辭繫辭と譯する人あるが、要するに陳述の力はこのcopulaによりて外形的に認むる事をうべきものなり。このcopulaとしての形明かに認めらるゝ用言はわが國語にありては存在詞(たとへば「なり」「たり」「である」「だ」「です」等)のみにして、實質用言たる形容詞、動詞にありては、その一語中に用

言の實質的方面たる屬性と用言の形式的方面たる copula としての力とを混一して存するものなり。通常用言が主格に對して陳述をなすといはれたるものは實はその用言の實質的方面たる屬性を主格に對比することを主としていへるものにして、眞に陳述の力を主格に對比せしめたりと確認しての言にはあらざるなり。今この copula の內面卽ち陳述の力といふことは實に主位觀念と賓位觀念との對比といふこと、それ全體に對して存立するものにして、單に主位觀念に對しての存在にあらざるは明かなり。さればこの關係は次の圖式の如きなり。

（主位 ←→ 賓位）→ 繫辭

この故に主格と述格と相對すといふ通常いふ如き說明は實は通俗的の見にして嚴密にいへば意義なきことなり。卽ちそれらは實質用言を用ゐて、

月は淸し。

花が咲く。

などいふ場合には外形上、

月　と　淸し　と　相對し

花　と　咲く　と　相對し

て存する如く見れど、

月　明かなり。

花　紅なり。

などいふ場合にはその「明か」「紅」といふが賓位觀念をあらはし「なり」が copula としてあらはれたるを見るべし。かくて主位たる「月」「花」に對する賓位觀念は「明か」「紅」にしてしかもそれらは用言にあらず。又陳述の力をも有せざること明かなり。即ちこゝに陳述の力の寓せられてあるものは「なり」といふ說明存在詞なり。こゝに於いてその眞の述格はこの「なり」に存して「明か」「紅」にあらぬこと明かなり。而して「なり」は「月」「花」のみに對して存する語なりやといふに然らずして「月」と「明か」との關係「花」と「紅」との關係を對象としそれに對して用ゐられたるものなること明かなり。この故に述格の眞の精神は單に主格に對應して存する如き狹き意義のものにあらざることを知らざるべからず。

述格のあらはす陳述とは上述の如く、思想上、主位觀念と賓位觀念との對比といふことの存立といふことを先在の條件として、その二者の間の關係が異か同かのいづれにあるかを明かにする爲の精神的作用の言語的發表なり。されば、この陳述といふ精神的作用の對象とするものは主位觀念と賓位觀念との關係といふ現

象にして、單に主位觀念のみなるときには陳述といふ精神的作用は決して直ちに起るべきにあらざるなり。否なほ嚴密にいへば、その主位觀念といふことは、賓位觀念といふものに對して存する思想上の作用にして賓位觀念といふ思想上の作用なくば主位觀念といふことが生ずべき精神上の要求なきなり。この故に主位觀念を以て直ちに陳述の力に對比するが如きは思想の成立上決しあらはるべからざることなりとす。されば、通俗的に說くときは論の外として、嚴密に論ずる時はこの述格の對象は前述の如く、主位觀念と賓位觀念との對比といふ關係狀態に存すといふべきなり。しかるにこの主位觀念と賓位觀念との對比といふ關係狀態は內面の精神的作用たるに止まりて、その關係狀態は言語といふ形に於いてあらはるゝこと殆どなし。かの

月　明かなり。

花　紅なり。

の如き文にては主位觀念と賓位觀念との對比は言語上に認めらるゝが故にそれらの相關狀態が容易に想像せらるれども、これらとても、外形上よりいへば、吾人がその相關狀態の內面に存すと思惟するに止まりて、その相關狀態によりて起りてあるべき精神的作用を言語といふ形に於いて認むることを得ざるなり。されば

この陳述に對應すべき眞の精神的作用は言語上にあらはるゝことなきものといはざるべからず。この故にこの陳述の對象としての眞の對象は言語といふ形式に於いては認めらるゝことなきものなりといはざるべからず。こゝに於いて述格は言語といふ形に於いては認められ難き絕待的の位格なりといふべきなり。

述格は言語上絕待的の位格にして、これがすがたを言語の形に於いて認められ難きものなることと上述の如くなるが、さてこれを用言そのものとの關係につきて見るに、いかなる用言もこの述格に立ち得ざるものなくして用言にして述格に立ち得ざるものありといはゞ、これ自家撞着の言なりといはざるべからず。抑も用言の用言たる所以はこの陳述の能力あるによることは既に繰返し說きたる所なるが、その陳述の力を實地に發揮せる運用上の位地が卽ち述格たるなり。この故に吾人は用言の本性としてはこの述格に立つことを得といふにありと認むると同時に本質上述格に立つことを得るものは又用言の外に一も存せざることを明言しうるなり。而して用言には實質用言と形式用言との區別を立つることをうるものあれど、そのいづれも必ずこの陳述の能力を有し、この能力を缺けば用言たるを得ざるものなれば、この述格は實に用言の本質的用法の方式たることも明かなり。卽ち用言の根本的用法はこの述格に存し、上述の如く體言の根本的用法は

呼格に存することとなるが、この二者共に言語上絶待的の位格にして次下の相待的の位格と異なる點も亦二者共通する所にして、かく絶待的の位格たりといふことが體用二言の本原的用法たりといふことゝの間に因果の深き關係ありと考へらる。卽ち絶待的の位格なるが故に本原的なるか、若くは本原的なるが故に絶待的なるか。もとより今日より見ればいづれが因にしていづれが果なるか、觀察點のおき所によりていかやうにも考へらるゝところなるが、この因果の關係の存すべきことは疑ひあるまじきなり。

上述の如く吾人の述格といふものは賓位觀念を除外していへるものなり。しかるにこの述格といふ語又說明語などいふ語はもと英語などの predicate の譯語より起れるものなり。されど、この predicate といふ語は賓格と譯せらるゝ語にして、嚴密にいふ意の predicate は賓位觀念をあらはすものなれば、賓格と譯するを當れりとす。而して吾人のいふ述格はこの意の predicate 以外の copula たることは繰返して述べたる所なるが、本書は二者を理論上區別あるものとして、その陳述をなす位格を以て述格と名づけ、用言の觀念部を補充する位格を賓格と名づけたり。その賓格といふものは下に詳かに述ぶべきなり。

述格に立つべき語は主として、用言にして形容詞、動詞、存在詞の各種皆これに用

ゐらる。既に屢論ずる如く、用言の用言たる所以は實に陳述の能力を有する點に存するものなれば、用言の主たる性質はこの述格に立つ點に存することは明かなり。その用例

花うるはし。

花咲く。

花あり。

これは花なり。

さてかく用言が述格として用ゐらるゝ場合に實質用言が用ゐらるゝときと形式用言が用ゐらるゝときとによりて多少その趣を異にする點あり。即ち實質用言にてはその屬性觀念が述格と共に具有せらるゝが故に賓格なるものは實際上述格と共に一語の中に存して、外形上その二者を區別すべき方法なし。この故にかゝる場合にはその重き性質に基づいて、その語をば述格に立てりといふことゝし、賓格はその內部に沒入して外形上差別を立てゝ認めざるものとす。

用言は普通の場合に於いては、そのある活用を以て述格に立つものなり。これらの例は前項にあげたり。なほこの類のものは複語尾を伴ひてその陳述を詳細にあらはすことあり。その例

雨ふらむ。

日は入りぬ。

雪消ゆべし。

又その用言が助詞の助けによりて特殊の陳述をなすことあり。これは命令、禁制、感動、確意等の意をその助詞によりて添ふるものにして、かく助詞の存するにより て句の意に大なる影響を與ふるものなり。この際にこれを助くるは係助詞と終助詞と間投助詞となり。その例

こゝに來よ。

この枝を折るな。

この書は既に讀みたるか。

げにも花は美はしく咲きたるかな。

こは實に大事なるぞ。

形容詞の語幹は時としてそのまゝにて述格に立つことあり。かゝる時には多くは感動をあらはすなり。その例

あゝいた。

おゝあつ。

あなおもしろ。
ありがたや。
この時には「や」といふ間投助詞を末にふむことあり。さてかく用ゐらるゝことはかの體言の呼格と稍共通する面影ありて、恰も呼格の如く見ゆる點あり。これらは恐らくは用言の運用の方式として最も原始的のものにして體言の呼格と相距ること遠からざりし時代の遺物ならむか。なほかくの如き例を見て、呼格と述格とが體用二言の運用方式の本源的のものなることをも考へうべし。

ここに用言の活用形を以て陳述するものをなほ少しく觀察せむ。こゝにはそのまゝ終止することあり、接續助詞によりて下に接續せしめらるゝことあり。又句を重ぬる用を爲すことあり。又陳述を中止したる形にて述格をなすことあり。これら形式は種々に異なれど、述格たるに於いては一なり。これらの狀態の一斑を述べて後の縱の研究の豫備とせむ。先づ述格のあらはれたる形式としてはそのまゝ句の終となる場合と更にその句を下につゞくる場合との二に分ちて考ふることをうべし。一言していへば斷か續かの一なりといふべし。而してこの二の區別は一の句はそれにて完結するか、若しくは下につゞくかの二者以外の方式をもたずといふ根本の道理に基づく必然の現象なりとす。さてそのまゝ句の終

となる述格には、又それにて陳述を完く終れるものと、陳述を完くするまでに至らずして、中止するとの二樣の狀態あり。その陳述を完全に終へずして中止するものとは、たとへば

初花の世とや嫁のいかめしく。（冬の日、杜國）

いつはりのつらしと乳をしぼりすて。（冬の日、重五）

ゆゝしき身に侍ればかくて坐しますもいまいましう辱く。（源、桐壺）

あまりものいひさがなき罪さりどころなく。（源、夕顏）

の如きものにして主として用言の連用形を用ゐるものなるが、これはその述格に用ゐたる連用形が、なほ下につゞくべき語勢なるより十分に陳述を完了せしめずして餘意のなほ存することを言外に示せるものなり。かくの如きを中止の述格と名づくべし。次に陳述を完く終ふるものにつきては單に說述するものと、疑問をあらはすものと、命令禁制をあらはすものとあり。この三別も亦偶然の事實にあらずして、後に句論にて說くが如く、必然的の區別にして、この三別は必ずあるべく、又この三別以上の區別をなす必要もあらざるなり。さてその單に說述するものは通常終止形を以てするものなれど、上に「ぞ」「なむ」といふ强勢なる係助詞ある時には連體形を以て之に應じたる述格の形とし、又「こそ」といふ一層强勢なる係助詞

ある時には已然形を以て之に應じたる述格の形とするなり。又さる强勢の係助詞なき時にも往々連體形を以て終止の形とすることあり。かくの如きは感情を深く寓する時に行はるゝものなり。たとへば、

我はうしとも思ひ侍らぬ。

ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろかれぬる。

わが袖にやどる月さへぬるゝがほなる。

夢にものしく見えしなどいひて　（蜻蛉、上）

しりへの方なる池にしぶきといふもののおひたるといへば（蜻蛉、中）

の如きこれなり。かくの如きを今餘情の述格といふ。これらみな說述をなす述格の形とす。次に疑問をあらはす場合にはすべて連體形を以て述格の形とす。又命令禁制をあらはすには命令形を以て述格の形とす。これは命令をあらはすには普通の命令形を以てし、禁制をあらはすには「ざり」の命令形を以てするなり。（禁制をあらはす助詞「な」を用ゐることは既にいへるところなるがこゝにいはず。）次に句を下につゞくる場合にとる述格の語の形は連用形をとるものと、接續助詞につゞくるものとあり。その連用形をとる場合は主として重文の上句の述格たる時にあらはるゝものにして接續助詞につゞくるものは、その助詞との關係によ

りて未然形乃至已然形の種々の活用形のいづれかをとるなり。それらの接續助詞に接する活用形及びそれら意味の區別は既に接續助詞の條にいひたり。又その他の事は用言の用法の條に到りて說くべきなり。

以上述格の語の形の上にあらはるゝ點は頗る繁多なれど、詮ずる所述格たる點に於いて一なり。而して述格がかく繁多なる形をとるに至れるものは吾々日本人がその陳述のしかたに種々の變化を要求するが爲なりとす。

第三十三章　主格

主格とは何か。從來は之を文の主體なりといへり。然るに吾人の研究する所によれば、文は必ずしも主格述格の對立する形をとるものにあらずして、主格述格の區別を認むること能はざる形式の文も存するなり。この故に文の主體即ち主格なりといふことは事實の上に於いて普通性を有せず、又說明の上にも通ぜざる所あるなり。元來主格述格といふ如き考へは了解作用に基づくものにして、思想の要素の分解と結合との作用の結果生じたるものなることは明かなり。されば了解作用にたよらずして生ずる思想の發表たる文即ち吾人が所謂喚體句にありては主格といふものゝ存せざるは當然のことなり。この故に主格を以て文の主

體即ち文の主たりといふことは事實の上にも理論の上にも通用するものにあらずといふなり。されば、主格といふものは實に體言が他の語、主として用言に對して實地に用ゐらるゝ場合の關係の一の範疇にして語の運用論の範圍に屬すべきものたることは明かにして、句論の範圍に於いて說くべき性質のものにあらざるなり。

先づ主格といふ觀念は相待的の觀念たることは明かなるが、それは何を待てるものなるか。嚴密にいへば、主格は論理的にいふ主位の觀念たるものにして、これに對するものは賓位の觀念なり。抑も吾人の思想に於いて一事一物を理會せむとせば、必ず其對象とその對象に關聯して考へらるべき賓位觀念(主として屬性、されど必ずしも屬性に限らず。)とを分離して、相對立せしめて考へ、再びこれを統合してその間の關係を明白に示し、こゝに一の思想が成立するなり。かくの如きは即ち了解作用の特徵にして、この主位觀念は賓位觀念と相對立して存し、それが陳述の力によりて統一せらるべき性質を有するものなり。而して多くの場合に賓位觀念と陳述の力とは一の語にて示さるゝものなることは屢述べたる所なるが、その賓位觀念と陳述の力とを合一して含める語が實質用言と名づけらるゝものたり。さてこゝに第一に注意すべきは主格の意義なり。主格とは吾人の思想に

於いて賓位觀念がこれを待ちて存立すと思惟せらるゝ所の中心核子たるなり。而して賓位觀念はこれが屬性の思想に上りたるものにして、主格と相待的に立ちて、しかもそれと合致し、又は合致せずと考へらるべき性質を有する觀念たるなり。こゝに於いて先づ主格といふものは相待的の位格たることを認むべきなり。

主格は相待的の位格にして賓位の觀念と對立するものなり。この賓位觀念は通常、用言の實質として含まれてあるが故に、通俗には主格は述格に對して存するものなりと考へらる。これはその用言のふくめる屬性を賓位觀念に立たしめたる場合に於ける現象にして若しその用言が形式用言なるときはその賓位觀念を示す語は用言の外に存すべきものなり。かゝる場合には主格と賓位觀念との對立は著しく認められ、述格はそれらの外に存することを明かに認むべきものなり。

主格は前に述べし如く、賓位觀念と對立するものにして、賓位觀念によりて說明せらるべき對象が主格たるものなり。かくてこれも亦前章に述べし如く述格は主格と賓位觀念との對比によりて生ずる關係といふものに對しての陳述をなすものなれば、主格と述格とを相待的のものとして說くが如きは正鵠を得たるものにあらざるは明かなりとす。かくの如くなれば主格は述格と對比すべきものにあらざるは明かなると共にその用言が、述格以外の格に立つときにも亦主格はそ

の用言に對して主格として用ゐられうべきものなり。たとへば、

花咲く。

人住まず。

は通常主格と述格とよりなるといはる。しかるにこれは

花の咲く樹

人の住まぬ家

といふやうに主格と述格とよりなるといはるゝと同時に、相合して「樹」「家」の限定語たる位置に立てり。この故にこの場合の「花の咲く」「人の住まぬは嚴密にいはゞ陳述をなすものにあらずして「花」といふ主格と「咲く」といふ賓位觀念との結合せられてあるものを體言の限定語としてあらはせるに止まりて、未だ十分に陳述をなせりといふを得ず。この故に、こゝに必ず陳述を導くべき助詞たとへば「は」を加へて

花は咲く。

人は住まず。

といふ場合には「は」助詞の力によりて下に必ず一定の陳述を要求するが爲に、これは

花は咲く樹　（花の咲く樹と對比せよ）

人は住まぬ家（人の住まぬ家と對比せよ）

の如き形にいふことを得ざるなり。これ何の理由に基づくかといふに、「は」は陳述を支配する助詞なるに、こゝの「咲く」「住まぬ」は概念を限定して陳述の力を十分にあらはさず。この故に「は」はこの場合の「咲く」には無關係にしてなほ他にその對手の存すべきを豫定するものなればなり。然るに

花の咲く樹

人の住まぬ家

といふ場合の「花の」「人の」は更にこれ以外に陳述を要求することなし。而して「花」「人」が主格たることは前も後も動くことなし。これを以て主格はその本質として述格と對立するにあらずして、用言その者の有する屬性と待立するもの卽ち賓位觀念としての屬性に對して立つものなるを知るべきなり。

主格の地位上述の如きものなれば、これが實質用言に對してはいつもその對象として用ゐられうべきものたる性質を有する位格たるを見るべし。實際上その用言が、上述の如く述格に立つ場合にも連體格として體言の限定をなす場合にも

又

花の咲くを見る。

といふやうに用言が準體言たる場合にも、又

勢よく走る。

の「よく」の如く用言が修飾格として用ゐらるゝ場合にも伴ひてあらはるゝものなり。要するに用言の有する屬性觀念に對比してそれの說明の對象たるべきものならばいつも主格といふことをうるものなりとす。而してその用言が實質用言ならぬときに於いては、上に述べし如く賓位觀念をあらはす語が形式用言と伴ひてあらはるゝものなれば、主格と賓位觀念との對立は極めて明かに認めらるゝこととなりとす。

上のすべての場合に、とにかく主格と賓格とを對立結合せしむる作用は述格の力の多少行はれたる爲にして述格の力全くなしといふにあらねど、十分の陳述をなせるものにあらねば述格は不十分の狀態にあり。しかれども主格は賓格に對して完全にその力を發揮せるものなりとす。

主格と賓位觀念との關係を外形的にいへば、二種あり。第一はその說明せむと欲する對象をば直ちに主格としたるものなるが、これに又二種あり。その一はさむと欲する實體そのものを直ちに名詞にて示すもの、

雪ふる。

友人は西國へ旅立ちぬ。

その二は代名詞にて實體を代表せしめてさしたるもの、

われは東京にて生れぬ。

彼れは病にかゝれり。

第二はその說明せむとする對象をば賓位觀念の位置におきたる場合の主格にしてこの際には代名詞を以てそれを指して主格とす。

これは武藏坊辨慶なり。

かくの如き場合には主位賓位實質同一なるものなれば、

武藏坊辨慶はこれなり。

の如く互に轉換しうるものなり。

主格に立つべき語は主として體言にして、準體言も亦主格に立つことあり。その體言を以てするものは前に既にあげたり。その準體言を以て主格に立てたるものゝ例次の如し。

その色の美しきは薔薇なり。

喜ぶはよく怒るは惡し。

かくの如きは誠に賞すべき行なり。

これを處する又一にこの法に從ふべし。
はじめなるはすでに林麓におちぬ。
みわたすかぎりなつかしかぬはなし。
或は又如何なる語にてもそれを說明の主題とする爲には主格に立たしむることを得べし。その例次の如し。
「淸し」は形容詞なり。
「咲か」は加行四段活用動詞の未然形なり。
「らる」は受身をあらはし、能力をあらはし、又敬意をあらはす等に用ゐらる。
「あはれ」も「あゝ」も感動をあらはす語なり。
「こそ」は係として已然形の結を要す。
主格は文語にては助詞なくしてあらはるゝを本體とす。
月淸し。　　花さく。
山あり。
の如きこれなり。されど場合によりて助詞を伴ふことあり。この場合に主格にのみ附屬する助詞は格助詞の「の」「が」の二にして、副助詞係助詞の二類はその本來の意義を以て主格に伴ふこと稀ならず。「の」「が」の伴ふものは、それが複雜なる構成を

なす場合に主格と他と混雜し易きを以て一は之を明かにする爲に一はその結合を力强くせむ爲にするものにして、それには「の」と「が」と用法上の差あり。先づ「の」はきえもあへずはかなき程の露ばかり有りやなしやと人のとへかし。（後拾、雜三）

今よりは心ゆるさじ月影のゆくへもしらず人さそひけり。（金、秋）

むすぶ手に影みだれ行く山の井のあかでも月のかたぶきにけり。（新古、夏）

の如く體言が主格に立てるを示すを主とし、「が」は

秋の田のいねてふことをかけしかば、思ひいづるがうれしげもなし。（後撰、戀一）

おふれども駒もすさめぬあやめ草かりにも人のこぬがわびしき。（拾遺、戀二）

炭をかさねおきたるいたゝきに火どもおきたるがいとむつかし。（枕、十一）

の如く準體言が主格に立てることを示すを主とす。而していづれも特に主格を下の用言に緊密に結合する力を有す。口語にありては「の」は用ゐらるることなくし

て專「が」のみ用ゐらる。さてその副助詞が主格の語につくときは主格を示すを主眼とするものにあらずして、たゞ主格と用言との間の意義を支配する爲にたまたま主格の語に附屬するに止まれり。而して、この時は又特に主格を示す「の」「が」のなき時に限るなり。それらの用例は副助詞の條にて見るべし。係助詞も亦主格を示すを主眼とするものにあらずして、たゞ述格の上にありて陳述の態度を支配する爲にたま〳〵主格の語に屬するに止まれり。而して、これも特に主格を示す「の」「が」のなき時に限るなり。こゝに注意すべきは係助詞「は」なり。これは往々主格を示す助詞と誤認せられたり。これはその本性判定的なる爲に判定の性質を有する句の主格に附屬することあるものなるが、その判定をなす句は最も、頻繁に用ゐらるゝを以ていつしか、誤らるゝに至りしものなり。然れども、前に屢々述べたる如く、主格は本來述格と對立すべきものならぬによりてその本質を明かにする時はかくの如き誤認のいはれなきことは直ちに氷解すべきなり。なほ又俳諧について見れば、その「は」が主格を助くる例よりも「も」が主格を助くる例の方多く、芭蕉の發句について見れば主格につける「は」の例九十七句に對して「も」の例百六句あり。これを以ても「は」が必ずしも常に主格につくとか主格を示すものは「は」に限るとかいふことを得ざるを見るべし。

第三十四章　賓格

賓格はもと predicate の義にして主格に對してその說明の任に當る觀念をいふものなり。この故は實質用言が、說明の用に供せらるゝときはいづれも、そは賓格に立つといふことを得る筈なり。然れども、實質用言が主格に對して說明の任に當るものは通常述格に立つといはる。果して然らば之を賓格に立つといふは不可なることか。若し又述格に立つといふことの不可なるにあらざるか。この問題を先づ解かざるべからず。曰はく、實質用言が、主格に對して說明の任に當るときはその見地によりて賓格とも見られ、又述格とも見らるべし。何の故にかゝる現象を呈するかといふに、その實質用言には屬性の觀念と陳述の要素との二者一體となりて存し、その屬性觀念と陳述の要素とは言語の形に於いては分つべからざるによるものなり。この故に、その屬性觀念の方面をとりて考ふればこれを賓格なりと見らるべく、その陳述の力の方面を主として考ふれば、述格なりと見らるべし。この故に理論の上よりいへば、これを賓格と見ても誤にあらず、又述格と見ても誤にあらずといふことになるべし。

然れども述格は主格のみを存立の對象とするものにあらずして主格と賓格と

の相待ちて存立することを以て對象とするものなること既に述べたるが如く、又その用言が陳述をなす時にはじめていはるべきものなれば、述格と賓格とは性質の頗る相違せるものなることを考ふべし。賓格と述格とはかく理論上明かに區別すべきものなれど、既にいへる如く實質用言にありては語の形の上に於いてこれを區別して示すこと能はざるを以て、そが陳述の力をあらはす方を主としては（用言の本質は陳述の力を有するにあれば）これを述格といひて賓格といふことを唱へざるなり。しかもこれたゞ賓格といふことを敢へてせざるに止まるものにして賓格たる實を具せることは明かなりとす。

以上の如くなれば實質用言のみなる場合には賓格といふ語は用ゐる必要なきなり。さらば賓格といふ如きことは無用の事なるかといふに、必ずしも然らず。形式用言たる「如し」「なり」の如きものにありてはこれを實地に用ゐる場合には必ず「雪の如し」「雪なり」の如く、他の語を之に加へて用ゐることをせぬときには用言としての用を十分に果すことを得ざるなり。何が故にかゝる現象の生ずるかといふに、これらの用言には陳述の力のみありて、屬性觀念缺けたるを以て、實地に用ゐる場合は必ず、その觀念部を受持つ語を加へそれと共に用ゐざるべからざるものなればなり。さてかくの如き場合に、たとへば

落花雪の如し。
これは雪なり。

の如き文につきて見るに、「雪の如し」「雪なり」は「落花」「これ」といふ主格に對して説明陳述の任にあたれるものにして、それには主格に對する賓格の存すると共に主格と賓格とを統合する述格との存すべき筈なることは明かなり。而してその「月」「雪」は即ち賓格を擔當し、「如し」「なり」は述格を擔當するものなり。この故に形式用言が、實地の活動を起して用に供せらるゝ場合には必ず賓格の語を伴ふものといふべきなり。

賓格は上の如く形式用言を以て述格として用ゐるときに必ず、それに伴ひてあらはるべきものなること明かなりとす。然るに、上にいへる「如し」「なり」等の語はそれが、

雪の如き色
雪の如く見ゆ
雪なる場合

等の如く、述格に立たぬ場合にもなほその觀念部を補充せざるときは實地の用に立たぬものなり。然るに、この場合のものは主格に對立せぬものなるが故に嚴密

の意にて賓格といふを得ざるもの丶如し。然れどもそれらと「如し」「なり」との關係に於いては述格に立てる場合と全く一なり。吾人は今それを區別して、この場合を異なるものなりと取扱ふことをば得ざるなり。こゝに於いて賓格の意をこゝに擴張して汎く形式用言の觀念部として伴はるゝ語の位格といふ義とせむ。かくすれば、その賓格といふものは形式用言に必ず伴はるべき觀念たるもの丶位格といふことゝなるべし。而してこの意にての賓格は形式用言の實地運用上必要なるものなるを見るべし。かくの如く見て賓格といふものを立つる時には吾人は形式用言のみならず、形式用言に準ぜらるべき敬語の動詞又は形式のみを有する副詞にも亦この賓格といふべきものを要するものあるを見るべし。かくて賓格といふ語の意義はこれらにまで擴充せらるゝを必要とす。

こゝに賓格の意義をいはゞ屬性觀念の缺乏せる用言又は副詞に接してその屬性觀念の位地に補充せらるゝものをいふ。而して、これを要する語は文語にありては、形式用言たる「ごとし」を主とし、存在詞の「あり」の陳述をあらはすもの及び「あり」の變形よりなる「なり」「たり」あり。口語にては「ごとし」はなきが、存在詞にては「ある」を本體とし、それの代用をなす語、敬語又はそれの派生よりなる「ない」「ござる」「だ」「です」の類あり。又動詞「す」の特別の場合にも賓格を要す。敬語動詞は往々形式用言の性

をあらはすものなるが、かゝるものも亦賓格を要することあり。又形式的勢力をのみ有する副詞にありても往々その觀念の補充を要するが爲に用言の賓格と同じ性質の語を伴ふことあり。今この章にはこれらを一括して述ぶべし。

「如し」に對する賓格として用ゐらるゝものは主として體言なるが、又準體言を用ゐ、稀に情態副詞を用ゐることあり。これにはその語が直ちに「如し」に接するものあり。又格助詞「の」「が」を介して接するものあり。

體言が「如し」の賓格に立つときは直に接することは稀にして多く助詞を伴ふ。而して、名詞には次の如く「の」を伴ひ、

落花雪の如し。
飛沫は霧の如し。
往事茫として夢の如し。

代名詞にては「我」「余」は「が」を伴ふこと多く、その他は多く「の」を伴ふ。

わが如く物や悲しきほとゝぎす。
余が如き輩に至るまでその數少からず。
汝の如き人はまたとあるべしや。
かれが如きは世の美談として傳ふべきなり。

準體言を以て「如し」の賓格とする時は多くは直に接す。

歳月は流るゝ如し。

文字は繪より出でゝ遂に今用ゐる如きものとなれり。

人を欺きて得たりとする如きは余の擯斥する所なり。

スエズ運河は世人の知る如く有名なる大堀割なり。

かくて助詞を伴ふこともあるが、その時は助詞「が」を伴ふものなり。

その禮儀は至つて正しきが如し。

往來繊るが如し。

いひしが如くにすむ所に至りぬ。

副詞にして「如し」の賓格に立つものは「かく」と「さ」との二にして、これらは必ず助詞「の」を伴ふものなり。

かくの如きことあり。

さの如き非常の事のさふらはんをば、いかでかうけたまはらぬやうは侍らむ。（源、浮舟）

あまぐもたなびくまでおひのぼれる如くにこの歌もかくの如くなるべし。（古今、序）

現行の普通文に「左の如き云々」といへるは元來この「さ」を賓格としたる語なるに、「左」といふ文字を宛てたるより「ひだり」の意ありとして、既にあげ示したるものをいふときは「左の如し」といふべからずと思ふものあるに至れるはかへりて誤れるなり。又「同じ」といふ形容詞を以て「如し」の賓格に立たしむる場合には「同じきが如く」とやうに準體言を以てするもあれど、又その語幹より直ちに接せしむるものあり。

つじ風例の琴どもをみな同じ如くおきつ。（宇、俊蔭）

おなじごとおもはせてもありぬべきを。（源、明石）

存在詞「あり」の陳述をあらはすものは現代の文には「あり」といふ形のまゝにては用ゐらるゝこと稀なり。然れども全くなきにあらず。たとへば、

この事實に感ずべき事にはあれど、衆人にのぞまむには無理なるべし。

これ小生の賛成する次第にこれあり候。

などの如きこれなり。この場合の「あり」は存在の意をあらはすものにあらずして陳述の力をあらはすものなれば、上の格助詞「に」に導かれたる語はまさしく賓格たるなり。かく「あり」に對して賓格たる語は主として格助詞「に」にて導かれたるものなるが、これが用例は古代に多しとす。

安米都知能可未奈伎毛能爾安良婆許曾安我毛布伊毛爾安波受思仁世米。

乾政官大臣仁者仕奉倍伎人無時波空久置弖在官爾阿利。（萬、十五）

心者忘日無久雖念人之事社繁君爾阿禮（續紀、二十六詔）

猶天乃由流之天授倍伎人方在止良牟念天定不賜奴仁已曾阿禮。（萬、四）

（續紀、三十一詔）

この場合の賓格は體言の外、準體言もあること上の例にて見るべし。

陳述の力をあらはす「あり」は平安朝時代の語にありては、その賓格に「に」助詞を作はざるものあり。たとへば、

人の心こそうたてあるものはあれ。（源、葵）

とのもりつかさこそなほをかしきものはあれ。（枕、三）

男こそなほいとありがたくあやしき心地したるものはあれ。（枕、三）

まづめづらしきものはかのなみのりがまうできたることのみなむある。（宇都保、初秋）

何事もいけるかぎりのためこそあれ。（源、浮舟）

かくの如き場合にはその「あり」は必ず述格に立てるものにして、その賓格は必ず格

助詞に導かれたるものなり。而してこれ中古に於ける特別の詞遣なりと考へらる。

上に述べたる「に」と「あり」とが結合して、なれるものを「なり」とす。この「なり」の由來は上の如くなれど、後には一の語として取扱はるゝものなれば、今はたこれを分解して說くべきにあらず。又情態副詞をうけたる「に」と「あり」とも亦結合して「なり」となる。この二者その本原につきて見れば、少しの差あるものなれど、格助詞「に」と「あり」とを本原とし、結合してなれる「なり」といふ語に於いては全く別なきものなれば、今一にして說くべきが、それに對しての賓格として用ゐらるゝものは、上述の由來より明かなる如く、主として體言にして、又準體言なるもあり。而して又情態副詞をも賓格として伴ふことあり。さてそれらの賓格は直ちに接するを普通とすれどまゝ副助詞を伴ふことあり。かく副助詞を伴ふを得るは「なり」が格助詞「に」と「あり」との結合よりなるものにして、副助詞は格助詞「に」の上にありうべき性質なるによる。而してその他の助詞の伴ふことなきは、格助詞の上に用ゐらるゝものは副助詞以外にはなきが故なり。

體言が「なり」の賓格に立つ場合は名詞にも代名詞にも數詞にもあり。

位山峯までつける杖なればいま萬代のさかの爲なり。

名高き富士山とはこれなり。
すべて十五なり。
年つもる人こそいとゞをしまるれけふ計りなる秋の夕暮。(後拾遺、秋下)
今日來れるは甲某乙某などなり。
今はこれまでなりと思ひきはめて出陣す。
これを見舞ひしは我が一族のみなり。
準體言が「なり」の賓格に立つものは形容詞にも動詞にも存在詞にも存す。
口惜しきはわが學を積めることの未しきなり。
余は容易にその説に從ふこと能はざるなり。
勇を好むはわれなほ由の如きなり。
松風にも水の聲にも自然に美しき調はあるなり。
金銀るりしてつくれるなり。
又複語尾を伴へるものにもあり。
これへまゐるべきなり。
流るゝ水のかへりこぬなり。
自らその事の思ひ出でらるゝなり。

これらの副助詞を伴へるものゝ例

こは試みにいひしまでなり。

快美なるのみならず莊嚴の感さへ起るなり。

この「なり」は動詞の終止形に更に接してその力を强むる用をなすことあり。これは古文に用ゐられしものなるが、蓋し、これは古はその終止形のまゝ體言に準じて、この「なり」を下に加へしが故に、かゝる形の行はれたるものと思はれたり。

今はとてこゆなる浪にぬるゝそでかな。（後撰集）

格子おろしてこゝによりくなり。（源、東屋）

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。（古今集）

などの例の如し。かくて考ふるに古事記、日本紀、萬葉集等に於ける用例を見るに三段活用、二段活用、奈行變格活用、良行變格活用にありては終止形よりうけて連體形より受けたる例を見ず。その例

沖邊の方に梶の音すなり。（萬、十五）

霍公鳥鳴きて越ゆなり。（萬、二十）

鶯ぞ鳴きていぬなる。（萬、五）

葦原の中國は甚く騷ぎて在りなり。（古事記、神武）

騒げりなり。　（日本紀三、自注）

さて、四段活用、一段活用にては

天の川浮津の浪音騒ぐなり。　（萬、八）

求食しに出でむと鶴は今ぞ鳴くなる。　（萬、十八）

の如く用ゐるが、これらの語にありては終止形、連體形ともに同じ形なれば、これらにて連體形をうけたるものとはいひがたし。さて又これには動詞の性を有する複語尾の終止形をうけたるものあり。

みな人は花の衣になりぬなり。　（古今集）

いひさしてとゞめらるなる池水の波いづかたに思ひよるらむ。　（後撰集）

尾上の鹿も聲たてつなり。　（後拾遺集）

これらの場合に又「ばかり」といふ副助詞を伴ふことあり。

雲ゐにもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり。　（古今集）

よそながら我身にいとのよるといへばたゞ僞りにすぐばかりなり。　（古今集）

さてかくの如く用ゐるは平安朝にても多くは歌に用ゐたり。この「なり」を咏嘆の「なり」などいふ人もあれど、「なり」としてはもとより說明存在詞の「なり」にして別に異なるものにあらず。たゞ通常は準體言卽ち連體形をうくるものたるに、これは終止形をうくるが故に意義緊縮して、咏嘆の如き用をなすに至れるものなり。これは元來上述の如く古代の語法のなごりにして、なほ恰も「なり」にて可なる所に更に「とす」を加へて「なりとす」といひて說明の意を强むるに似たる性質の語法なり。

情態副詞が「なり」の賓格に立つものは、本來の國語なるものにも「漢語なるものにもあり。

このあたりの海は日和よく風靜かなる時だに浪荒し。

心つかひことなりけり。

いつよりもこよひの月はさやかなれ。

うば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり。（古今、戀三）

さなりさなりとうなづきぬ。

いかならむいははほの中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ。

その生活や質朴なり儉素なり。

なか〳〵やうかはりていうなるかたも侍りし。

この場合には副助詞を伴ふものなきが如し。

「たり」はもと格助詞「と」と「あり」との合成よりなるものなるが、その「と」と「あり」との分別ある場合の「あり」は陳述の力のみなるものにあらずといへども、相合して「たり」といふ形をなしては形式用言の性を有するに至れるなり。さてその本原の「と」と「あり」との結合せる場合には體言を伴ふ場合と情態副詞を伴ふ場合とあるが爲に、ここにも亦その賓格として用ゐらるゝものは體言又は情態副詞たりとす。而していづれも直ちに接して中間に他の助詞を容れず。それらの例次の如し。

體言が「たり」の賓格に立てるもの

親たるものは子を愛せざるべからず、子たるものは孝を盡さゞるべからず。

舍利弗和上たり。

情態副詞が「たり」の賓格に立つものは、「と」助詞を伴ふ性質のものなるが、主として漢語より來れるものなり。

婆娑たる月影。

立ちて窓戸を排けば星斗燦たり。

天陰り風起り落花繽紛たり。

城內は古松鬱蒼として、瑞雲靉靆たり。
願はくはわが英國に赫々たる大勝を授け給へ。

口語にありては存在詞の「ある」が陳述の力のみをあらはす場合には又賓格の語を要す。この場合にはその賓格は必ず格助詞「で」を伴ひてあらはるゝものなり。而してこの場合に賓格として伴はるべきものは體言の各種、及び準體言並に情態副詞にして、その大體は「なり」の賓格に準じて知るべし。

これは櫻の花である。
日章旗はわが大日本帝國の國旗であります。
だれであつたか全く覺えない。
三と五との和は八である。
それは私のこしらへたのである。
この花は實に綺麗である。
海上は至極穩かであります。

これらは又「で」の上に副助詞を伴ひたるものを用ゐることあり。

見わたす限り花ばかりである。
そこにゐたのは私だけであつた。

その數は三つぐらゐであつたらう。
又この場合には、その「で」と「ある」との間に往々係助詞を入るゝことあり。
これは櫻の花ではありませぬ。
それは櫻の花でもありませぬ。
天氣はあまり穩かではありませぬ。
さうではありますが、一概にはいはれませぬ。
さうでもありませうが、曲げて御ゆるし下さい。
そんな事ぐらゐではありませぬ。
さういふ譯でもありませぬ。
陳述の「ある」の否定の場合をあらはす爲に用ゐらるゝ「ない」といふ語あり。これは元來非存在をいふ形容詞にして「あり」に對應して、存在の「あり」の否定の場合の代用せらるゝものなるが、それが意は漸く擴張せられて陳述の「あり」の否定の場合にも用ゐらるゝことあるに至れり。かゝる場合の「ない」は形は形容詞なれど、意義は明かに形式用言たりとす。而してそれの用法を見るに、上の陳述の「あり」に似て殆ど同じ様なる賓格を伴ふものなり。次にそれらの例をあげむ。
これは櫻の花でない。

それでは君でなかつたかも知れぬ。
三と五との和は九でない。
それは私のこしらへたのでない。
この花は綺麗でない。
海上は穩かでない。
又その「で」の上に副助詞を伴ふものもあり。
花ばかりでない。
そこにゐたのは私だけでなかつた。
この數は三つぐらゐでなからう。
又その「で」と「ない」との間に係助詞を入るゝこともあり。
これは櫻の花ではない。
これは櫻の花でもない。
天氣はあまり穩かではない。
さうではない。
さうでもない。
さういふ譯でもない。

「ある」に相當する口語の敬語に「ござる」といふ存在詞あり。これは「ある」と同じ性質を有するものなるが、これにも存在をいふ場合と陳述の力のみをあらはす場合とあり。その陳述の力のみをあらはすものは必ず賓格を要することは「ある」の場合と同じくして、これ亦格助詞「で」を伴ひて用ゐらるゝものとす。

小生が西郷吉之助でござる。

それはこの人のおかげでござります。

それはこの書物にはつきり書いてあるのでございます。

義經に此の名を惜む心があつたので何時の戰にも勝つたのでございます。

さやうでござる。

天氣は至極穩かでござります。

これはその「で」の上に副助詞を加ふることあり。

一寸申し上げてみたばかりでございます。

こゝにあるのは五ぐらゐでございませう。

一人だけでございます。

又その「で」と「ござる」との中間に係助詞を介むことあり。

あまり多くあるといふ譯でもございませぬ。

輕少ではございますが、さし上げます。

日は屋根から出て屋根へはいるものではございませぬか。

口語の「だ」は陳述の「である」の約まりてなれるものなれば、賓格を要すること又その賓格の語につきては「である」と殆ど同じといひて可なり。次にそれらの例を示すべし。

ことしは豐年だ。

楠木正成は忠臣だ。

そこに居るのは誰だ。

三と五との和は八だ。

僕が書いたのだ。

ほんとに寒さうだ。

實に綺麗だ。

その副助詞を伴ひたるものゝ例

こゝにあるのは櫻の樹だけだ。

それを知つてゐるは君ぐらゐだらう。

「です」は「である」の敬語に相當するものなるが、これも亦「である」に對する賓格と同

様の賓格を伴ふものなり。

それはありがたい事です。

私も日本男子です。

も少し下に行くとそつち岸に流れ寄るですよ。

それはあの人のこしらへたのです。

神田祭は隨分賑かです。

もうこれで結構です。

これも亦副助詞を中間に介することあり。

それは〳〵愉快な事ばかりです。

參りましたのは私だけでした。

私はそれを一寸みただけです。

これは上の如く體言、準體言が賓格たるものにつく場合は他の例と異なることなければど、副詞なるものにつく場合には

賑かなだけです。

結構なだけです。

といふ如きにすることあり。この場合のものはその情態の副詞が直接に賓格に

立てるものにはあらずして「な」といふ形式用言の賓格として立てるものをば、準體言として、而して後賓格に立たしめたるものなり。されば情態の副詞が賓格に立てる時には、副助詞を介むことはなしといふべし。而して、上の場合にては亦「賑かなです」「結構なです」といふことを得ざるものなれば、この用法は局限せられたる特別の現象といふべきなり。

「す」といふ動詞は動作作用をあらはすものにして、そのまゝ用ゐらるゝものなれど、その意甚だ汎くして、形式用言といひて可なるものなり。この故にこの語にも亦賓格を要することありと考へらる。しかも、その動作作用をなす場合の補格とも考へらるべきものありて、二者の區別は或る場合には立てがたきものあり。されど、その著しき點よりしてこゝに賓格と目せらるべきものにつきて說くべし。

「す」に對する賓格として用ゐらるゝ語は主として體言なるが、又用言が體言に轉化したるもの及び稀に情態副詞をも用ゐることあり。これらは直ちに接するあり、又助詞の助けをかるものあり。

體言が「す」の賓格に立つものは、名詞のみにして、代名詞、數詞にはこの用に立つものなし。

ざんぶと音‖して‖おぼろの波の蘆の葉わけゆく。

由やわれ汝にくみす。

用言が「す」の賓格に立つものは體言の取扱をなせるものにして、しかもなほ用言の性質を名殘として有するものたるべく、全く體言に化し了せるものは體言として取扱ふべきこと前項の「くみす」の如きなり。さてこれに三樣あり。その一はその連用形を以てするなり。たとへば、

衣冠を輕くして馬車をのみ重くす。

かくの如くす。

名殘盡きすまじうなむ。

山や死にする。

上の名詞及び動詞の連用形の名詞化せるものが「す」の賓格に立つ場合には往々「を」助詞を伴ひてあらはるゝことあり。

人しれぬ思ひを常にするがなるふじの山こそわが身なりけれ。

かゝるとみの事には誦經などをこそすなれとて。

さる事をすべきにあらず。

又上の名詞及び動詞の連用形の名詞化せるものが、賓格に立つときには、その格助詞なき時に限り副助詞、係助詞などを中間に入るゝことあり。

こゑはして姿はみえず。
思ひやるさかひはるかになりやする。
いはで心に思ひこそすれ。
まどかうしあげなどして。
それは思ひだにせぬ事なり。
又形容詞の語幹に接尾辭「み」をそへて體言の資格を與へたるものを賓格とするあり。
其行を嘉みし給ひぬ。
この時の「み」を「ン」と發音すること多し。その時には「ず」は連濁音をなす。
責任を重み(ン)じ熱心にして倦まず。
いさゝかの費用も輕み(ン)することなし。
又動詞の終止形に「と」助詞を添へてこの賓格に立たしむることあり。
つれなき人をまつとせしまに、
かくるとすれどあらはれにけり。
春ごとになくとはすれどほとゝぎす。
副詞にてこの賓格に立つものは「と」「さ」「しか」「かく」の四種なり。

とすればかゝり、かくすれはあないひしらずあふさきるさに。

しかしけらしも。

さしたる御望みなどありけるに。

この場合には中間に助詞を介むことなし。

普通文に於ける敬語動詞のうち「す」の性質を有して賓格を伴ふものあり。この場合の賓格は前項に準じて取扱はる。こゝにいへる敬語動詞は敬稱にては「あそばす」「まします」謙稱にては「申す」なり。これらが、賓格を伴へるものは次の例の如し。

女子高等師範學校に行啓あそばされしことも亦再三にとゞまらず。

正式に御學問遊ばさるゝことゝなりぬ。

天孫日向高千穗宮に天降ましまし始めて共稻穗を播して新穀を聞召す。

全權は常に天皇御親ら掌握ましますなり。

否臣何ぞ異志を抱き申すべき。

存在詞の「あり」形容詞の「なし」も亦賓格の語を伴ひ、相合して一の敬稱をなすことあり。この場合の「あり」は寧ろ「す」の性質を有す。

こゝにいへる「あり」の例次の如し。

主上は詩の心を御さとりありて天顏ことにうるはしく笑ませ給ひぬ。

先帝には外國公使を京都の宮廷に御召見あり。

以上の如き場合の意義「御さとりあり」は「さとる」の意「御召見あり」は「めし見る」の意にして意義性質共に動詞に同じくなれるなり。かくてこれらは「あらせ給ふ」「あらせらる」といふ形にて用ゐらるゝことあり。その例。

軍人を訓誡あらせ給ふこと至れり盡せりといふべし。

されば軍旗を授與せらるゝに當りては最嚴肅の儀式を以て御手づから之を御授與あらせらる。

「なし」の上述の如く用ゐらるゝは上の「あり」に對しての打消の意を以てするものにして、意義性質また「あり」と同じくなれるなり。その例。

御許容なきを以て止むを得ずかくなしたりき。

皇太后の御用途に少の節減をも御許可なかりしとぞ。

すべて賓格の語とそれを伴へる用言とは相合して一の用言と見做して取扱ふべきものなり。これは形式用言が陳述の力のみを有して屬性觀念を缺くが故にその觀念をあらはす賓格とその用言と相合してはじめて具體的の用をなすものなれば語の運用の上よりいへば二者の合一せるものにてはじめて實質用言と同じ用をなすを以てかく取扱ふを適當とするなり。又本來形式用言ならぬものに

ありてもそが賓格を要するに至れるものは形式用言と同じ性質になれるものなれば、その取扱また同様なるべきものとす。それらの例、

落花雪の如し。
我汝に與みす。
月影婆娑たり。
日本軍は武勇なり。
世をうち山と人はいふなり。
皆人は花の衣になりぬなり。
衣冠を輕くして、馬車を重くす。
行啓あそばされぬ。
主上は詩の心を御さとりありて天顏ことにうるはしく笑ませたまひぬ。

さて上の如き場合に於ける具象的の意義の主點はその賓格にありや形式用言にありやと考ふるに、陳述の形式を決定する力の形式用言にあることは明かなれども、これには具象的の意義なきものなれば意義を主として考ふるときにはその賓格の方遙に重しと見らる。この故に實地にこれらの形式によりてあらはされたる文章を讀むものはその意義の重き點にのみ意を奪はれて形式用言たる陳述

の決定をなす部分を輕んずる弊に陷り易し。然れどもたとへば、

（イ）名殘つきず。

（ロ）名殘つきせず。

の如き場合ありとせむに「名殘のつきざること」をいふは同じ。されど、「つきず」といふと「つきせず」といふとは意義の强弱あるを見るべし。この强弱は「つく」といふ動詞の意義の强弱にあらずして、「つく」といふと「つきす」といふとの差に基づくものなり。卽ち「つき」を以て「す」の賓格に立たしめて陳述の方法に手數をかけたる點にその强さを示す手段は存するなり。この故にこれらの形式用言は陳述の力をあらはすものにして屬性觀念を含むものにあらねば、屬性をのみ見て足れりとするものにとりてはこれらの形式的要素は無用のものたる如き感を抱くことあるべし。然れども一旦、語の感じに眼を轉ずる時はその感の深さ、强さはこれらのいひ方に存するをさとるべし。實にこれらの眞意は國語の眞の微妙さをあらはすものとして、言語を感ずることの鋭敏なるものにあらずば味ふべからざる點多々存すと見らる。さて又かくの如き關係よりしてその賓格のみにて往々述格を代表することの生ずるなり。

「なり」に伴へる賓格はその用言が重文の上句となる時に「あり」を省き助詞「に」のみ

にて述格の代りをなすことあり、又その「に」をも伴はず、賓格のまゝにて述格の代りに立つことあり。

「に」を伴ひて述格に代れる賓格の例。

桃紅に、柳綠に、春の風ゆるやかに吹く。

風さわやかに、氣淸し。

賓格のまゝ述格の代りに立てるものゝ例。

孔子名は丘（ニシテ）孔子はその尊稱なり。

天氣また淸朗（ニシテ）風おもむろに、四方の眺望はじめの如くなりぬ。

口語にありては「である」「だ」「です」等の賓格なるものを有する用言を以て、重文の上句とする時に、それらの用言の部分を省き「で」のみにてその述格をなすことあり。

顏は人で、心は鬼だ。

これは金でこしらへたもので、あれは銀でこしらへたものである。

天氣も穩かで、氣候ものどかだ。

わたしが見ただけで、誰もしらない。

これらも亦前項の如く、賓格を以て直ちに述格の代りに立たしめたるものなり。

「なり」に對する賓格たる體言はその文勢の急迫なる場合にその形式用言たる「な

りを全く缺き、係助詞、終助詞、間投助詞等を下に添へて述格をなして終止することあり。その例。

汝は誰ぞ。

それはことわりの御しわざぞかし。

これは誰の本か。

汝は平家の侍よな。

我れこそは新島守よ。

口語の「である」「だ」「です」等に對する賓格たる體言も亦その文勢の急迫なる場合又は疑問をあらはす場合に、その形式用言たる部分及び助詞をも省きて賓格のまゝ述格として用ゐることあり。その例

これは僕の本。

あれは櫻の花。

それはなに。

形式的の勢力のみを有する副詞「まま」「やう」等に對して賓格と同じ關係に立つものは主として格助詞「の」「が」の助けを借るものにして、その例次の如し。

風のまにまにめぐるなり。

わがまゝ。
行きのまにまに。
見るがまゝ。
花の様に。
汝の様なるもの。
はやくこれがやうにならばや。

第三十五章　補　格

實質用言が運用せらるゝにあたりて、それのみにては意義を十分にあらはし得ざる場合ありて、それに關係を有する觀念をそれが補充として要求することあり。抑も實質用言はそれ自身に屬性觀念を具有するが故に、そのまゝにて相當に具體的の意義を有すれども、なほ不十分なることあり。たとへば、

一、鶯　　鳴く。
二、政府は　　發行す。
三、彼　　戒む。
四、太郎は　　載せたり。

の各例を見るに、各主格は存在し、實質用言にての述格またあり。而して「一」はそのまゝにて意義完全なれど、「二」「三」「四」はその動詞のみにては思想を十分にあらはすこと能はざるものなり。今これにある語を加へて

二、政府は　紙幣を　發行す。
三、彼は　店員を　戒めたり。
四、太郎は　車に、　荷を　載せたり。

の如くせば、動詞の意義を十分に明かならしむることをうべし。この際に使用せられたる「紙幣」「店員」「車」「荷」の如き語は、その補充せられたる觀念をあらはすものとして用言に伴ひて用ゐらるゝものにして、かゝる用をなす語の位格を補格といひ、その補格に用ゐらるゝ語を補語といふ。

補格といふものは上述の如く用言の意義の不十分なる場合にそれが補充に立つ語の地位をいふものなり。然らばこの補格の必要は如何にして起れるかと考ふるに、これ實に其の用言の有する屬性に基づくものなり。卽ちその屬性がたとへば「みる」といふ語にていひあらはされたる時にはその「みる」といふ作用はそれに對して行はるべき對象を要するものたることは明かなり。然らばその「みる」べき對象をも同時に一語のうちにてあらはさば、或は可なりとせむも、その見る對象は

千差萬別にして、その對象をも含めていふ時にはその「みる」といふ意をあらはす語は對象の差別に相當するだけの個數を具有すべきものとならむ。（たとへば漢語の「みる」に多くの字の存するが如き原因主としてこゝにあるが如し。）然れども、かくする時は徒らに煩雜に流るべきを以て、その「見る」といふ心的作用をあらはす部分をとりてこれを實質用言として、その見るべき對象はその必要に應じて然るべき概念を以て隨時これに補充すべき組織とすることゝせしものならむ。又「のむ」「くふ」といふ語の如きものは「みる」といふ語ほど、その對象の種々あるものにあらずして、その對象は稍限られてあれど、これとてもその對象は決して、少き數に止まらぬものなれば、これ等その對象を隨時に概念語を以て補充するを必要とす。然れども、その對象の極めて限定的なるものに至りてはその對象と用言とを形の上に一語としてあらはすことゝあり。たとへば「巣くふ」「田かへす」「土かふ」「水かふ」「木こる」「草きる」「名のる」の如きこれなり。されど、かくの如き語も、後には再び又補格を要するやうになることとあり。「田をたがへす」「名を名のる」といふ如きその一例なり。かくの如くなれば、實質用言に補格を要することはその屬性の性質上當然また自然に生ずる現象といふべし。かく補格はその用言の有する屬性の性質に基づくものなれば、この用言が實質用言にあらぬときには、この補格の必要生ずべき原因はな

きなり。かくの如く補格の必要は屬性の性質に基づくものなれば、これは實質用言の各種に存しうべく、又その屬性の同じものならば必ずしも用言のみに限るべき道理もなき筈なり。然るに從來補格を要するものは動詞のみの如くに說けり。動詞が實質用言として補格を要することあるはいふを待たぬことなるが、動詞のみが補格を要し、その他には補格を要せずとは理論上いひうべからぬ筈なり。而して實際につきて檢するに形容詞にも補格を伴ふものあること少からざるを見るのみならず、時として情態副詞などにも補格を伴ふことあるを見る。何が故にかゝる現象あるかと考ふるに、それらはいづれも屬性を有し、その屬性は粗相似たる性質のものたることは既に屢いひたる如くに明かなる事實なり。この故にここに補格の意義を擴張して用言又は副詞の有する屬性の意義を完くする爲に補充せらるゝ觀念をあらはす語の位地なりといふことゝすべきなり。而して從來動詞に對してのみ補格を說き、その他には補格といふもののあるを說かざりしものは、それらの學者の研究の結果しか認めたるが故なりとは考へられず。恐らくはそれらの學者の模楷とせる西洋文典に說くことなきが故ならむ。西洋文典にこの說なきは事實なり。然れどもこれは語の性質の相違あるのみならず、かれらの語學も亦至らざる點あるが爲ならむ。既に屢いへる如く、わが形容詞は用言の一

部にしてかれの形容詞といふものとは異なるものにして、その形容詞に補格の伴ふことを說くものなきなり。然るにわが國語にはこの事實あり。更に進みて考ふれば、形容詞の有する屬性觀念の或るものと情態副詞のあらはす屬性觀念の或るものとは殆ど一なるものあることも既に述べたる所なるが、かゝる關係よりして見れば、情態副詞に對しても補格の伴はれうることは理論上よりも否定すべからず。況んや事實上その事の存するにおいてをや。

補格に立てる語のうち客語と稱して可なるものあり。それらにつきては次章に說くこととし、こゝには一括して補格として說を下すべし。

こゝになほ賓格と補格との區別を明かにしおくべし。賓格は賓位觀念たることを示す位地にして、形式用言又は形式用言と同樣に陳述の力のみなる用言に對して存立するものなり。補格は實質用言の屬性の意義をあらはすに不十分なる場合にその用言に對して存立するものなれば、その對象の差あること明かなるのみならず、形式用言を基として觀察すれば、賓格は第一次的の必要條件にして缺くべからざる要求に基づくものなるが、補格は第二次的にして要用なるには相違なけれど、賓格よりは必要の程度低きものなり。而して次の如き例にありては、

太白月よりも明かなり

賓格先づ存するにあらずば、補格の必要は起らざるなり。而してその省略せらるるか否かを見れば、補格なくてもその文は一往の用は辨ずるものなれど、賓格はこれを缺かば全く文の形をなさず、又文の意をもあらはすことなし。即ち賓格は絶待的必要のものなるに補格はなくても一往は差支なき程度のものなり。これらを以てその區別を認むべきなり。

動詞に補格の存することは既に述べたるところなるが、その屬性の性質によりて補格を要せぬものあり。補格を要するもあり。その補格を要せぬものは

花さく。

鳥鳴く。

の「さく」「鳴く」の如きものなり。さてその補格を要するものにつきて見るに、一の補格にて足るあり。二以上の補格を要するものあり。而してこれらの補格を示すには格助詞「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」を用ゐるを常とす。その補格一を要するものは

政府は紙幣を發行す。

彼は店員を戒む。

我字を書く。

の如きものなり。補格二を要するものは

親　身代を　子に　讓る。

二宮金次郎　金穀を　貧民に　施す。

の如きこれなり。又

天皇　都を　西京より　東京へ　遷させたまふ。

此品を父より　君に　贈りたり。

の如く補格三を要する性質の動詞あり。さてこれらの補格を示すには上例の如く格助詞を用ゐるものにして、上にあげたる外その二三の例を示せば次の如し。

友は　實業家と　なりぬ。

烟は　天へ　上る。

名取彥兵衞　生絲を　橫濱へ　輸出す。

光村彌兵衞　支那より　注文を　受けぬ。

去年から　此處に　住めり。

木で　こしらへる。

吾人は格助詞によりて助けられ、用言の意義を明かにせん爲に加へられたる體言をばすべて補格と稱せり。この中には時間及び場所をあらはすものも亦入る。

即ち「に」「へ」「を」「より」「から」にて示されたるものにこれあり。これらをば、從來副詞と稱せり。然れども、そは直譯流の文典にていへるものを踏襲せるにすぎずして決して副詞にあらず。その組立よりいへば、名詞と助詞とよりなれるものにして英語獨逸語などの如く場所時間の副詞として特に發達せるものにあらず。而して、深く研究すれば、時間空間は說明の規定條件にして、物の依りて存する根柢的の形式なり。これを以て說明の附屬物とみるべからず。卽ち用言の意義を明瞭にせむが爲のものにあらずして、一層根本的のものなり。この故に本書は斷じて副詞と稱せず。

形容詞にても亦補格を要することあるは既にいへり。形容詞に對しての補格といふことと從來の文法學者全く度外視して之を研究せるものあらざりしなり。されど、形容詞にも補格を要するものあるは明かなる事實なり。元來補格は用言の意義を十分に明かにせむが爲に助くるものにして、動詞にこれあるはその動詞のみにては說明をなし了へざる場合あるが故なり。而してその要否はその動詞の有する屬性に基づくものなるも明かなり。わが形容詞とても然り。形容詞の有する屬性の性質として比較をなすものあり。この場合には比較の標準を要す。その標準卽ち補格としてあらはるゝなり。この場合の補格は「より」にて示さる。

又場所に關して說明する形容詞あり。これらは場所に關する補格を要す。この場合の補格は「に」にて示さる。又難易をいふものあり。この場合には又難易をいふ標準を要す。この標準も亦補格としてあらはるゝものなるが、その場合には「に」にて示さる。又同等又は類似をいふものあり。この場合にも亦その標準を補格として伴ふ必要あり。而してそれらは「に」又は「と」にて示さる。かくの如く、補格を要する場合少からざるを見るべし。然るに從來これを等閑に附したりし所以のものは英語などには形容詞は動詞と全く性質を異にせるよりかくの如き研究の必要を認めざりしを以て、かれらの文典にはこれを說くことなかりしなり。而して直譯流の文典は又之に傚へるものなれば、何等の注意をも與へざりしなり。然れどもこれを明かにせざる時は形容詞の研究はたゞ分解抽象にのみ弃りて之を實地に應用する上に何の效果もなきことゝならむ。深く顧みるべきなり。

形容詞の補格は格助詞「に」「と」「より」のいづれかを伴ふものなるが、その最も多きは比較をなすものなり。形容詞にて比較をなすことは古今東西いづれも同じかるべく、又大抵の形容詞が比較をなしうることも東西軌を一にせりといふべし。而してその比較の標準たる補格は格助詞「より」を伴ふものとす。その例

往事夢より淡く前途雲よりも遠し。

父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

而してその「より」といふ格助詞の下に係助詞「は」「も」を添ふることなし。「も」の例は上にあり。「は」の添へるものは

富士山は新高山よりはひくけれど、淺間山よりはたかし。

この「は」「も」の添へるものは皆それ〲の意義をあらはせり。「よりは」は特にとり分けていふ場合を示し、「よりも」は多くの場合をかねていへるなり。而してこれらの補格は口語にありても同樣に行はる。その例

もう私のせいより高くなりました。

五月初の若葉は四月初の花よりも遙に趣が深い。

形容詞に對する補格にして格助詞「に」を伴ふものあり。これにはある場所をその目標とする場合に、その場所をあらはす語を補格として伴ふことあり。

渡月橋に近い茶屋に腰かけて嵐山を眺める。

所は海に近くて谷迫れり。

この場所に關するものは多く一定の場所よりの遠近をいふものなり。若し場所に關して比較をなす時は、そは前條の例による。

名古屋は東京よりも京都に近し。

又動作の難易をいふ時はその動作をあらはす動詞の準體言を補格とすることあり。

言ふに易く行ふに難し。

又同等又は類似を示す形容詞はその標目を補格とする場合のものあり。

甲は乙に等しく丙は丁と同じ。

又次の如き場合にもその標準を補格としてあらはすことあり。

あの人は歷史にくはし。

氏は又朋友に篤く部下に親切であつた。

形容詞に對する補格にして格助詞「と」を伴ふものあり。これは同等又は類似を示す場合の標準を補格としてあらはすときにあらはるゝものなり。

甲は乙と等し。

作者と作品との關係もこれと同じだと思はれます。

身はかの雲とかろく心はこの水と淡し。

情態副詞も亦時として補格の語を要することあり。元來情態副詞はその屬性觀念よりいへば、形容詞の屬性と殆ど同じものあることは既に述べたる所なるが、その形容詞の屬性が、その意義上補格を要するものある以上、而して情態副詞にも

それに似たる屬性が同樣に存する以上、それらの語が必要に應じて補格を作ふことあるべきは明白なることなり。その補格の例次の如し。

太白月よりも明かなり。
苛政虎よりも猛なり。
かゝる事は世に稀ならず。
人はもとより禽獸と異なり。
甲は乙と同一なり。

以上の例のみを見るときは、これはその副詞が賓格に立ち「なり」と合體して一の用言の取扱を受くるものに限られたる如く見ゆれど、さにはあらずしてその副詞の有する屬性觀念に對しての補格なるなり。そは次の如き例多きを以てさとるべし。

以前よりかへりてみごとになれり。
氏は又朋友に篤く部下に親切であつた。
おかあさんにそつくりです。
こんな雪の朝などはいつもよりはたくさん集るのです。
うちの者と一しよに夕飯をおあがりになりました。

友人と共に出づ。

これらの例を見るに、いづれもその副詞に對して補格の語の存するものたること明白なりとす。

動詞「す」が形式用言として賓格を伴ふとき、又補格を伴ひて相合體して一の用言の如き意と用とをなせるが、それ全體として、補格を要求することあり。たとへば、

責任を重んじて熱心にして倦まず。

我汝に與みす。

億兆心を一にして世々その美を濟す。

古の名將は士卒と艱苦を同じうす。

の如きこれなり。これらはその「す」といふ動詞のみなるときにはかくの如き補格を要しうるものにあらぬことはそれらの補格より直ちに「す」につゞけては意味をなさぬにて明かなり。卽ちこれらは「重んず」「與みす」「一にす」「同じうす」といふ語全體の意よりして補格を要求する性質を生ずるに至れるものなりとす。而して「同じうす」の場合に於いては「艱苦を」と「士卒と」との二の補格を要するに至れるが、その事情を考へみるに、「士卒と」といふ補格は本來「同じ」といふ形容詞の補格たる性質を有するものなれば、この場合に特に生じたる關係にあらず。この場合に特に生じた

るものは「同じうす」といふ語に對して「艱苦を」といふ補格を要したるなり。これ卽ち「す」といふ動詞に基づきて生じたる動的目標たることは著しき現象なりとす。

補格に立つべき語は體言を主とすれど、準體言又は目的準體言を以て補格に立つることも少からず。體言が補格に立てる例は、既にあげたれば、今あげず。準體言が補格に立てるもの丶例を少しく次にあぐべし。先づ動詞に對しての補格に立てるもの丶例、

勤勉なる人は煩はしきを厭はず。
大旱にも河川を涸らすに至らず。
風浪何ぞ恐るゝに足らむ。
これみな小事を忽にするより起れり。
家は新しいにこしたことはない。
笑はれるのには困つた。

形容詞に對しての補格に立てるもの丶例

言ふに易く行ふに難し。
この頃は勉强するに好い時候だ。

情態副詞に對しての補格に立てるもの丶例

水は思つたよりは冷やかであつた。

動詞「す」を基として結合せる語に對しての補格に立てるものゝ例

讀ませるからかゝせるまで世話をした。

目的準體言は專ら動詞の補格として用ゐらるゝものなり。その例

衣服をぬひにやる。

人々たえずとふらひにく。

何しに來りしか。

研究しに行かむとするなり。

準體言及び目的準體言はその用言の意義上の必要よりして補格の語を伴ふものあり。この際にはその補格をも合して準體言として取扱ふなり。その例次の如し。

耻を知らざるは人にあらず。

あれに浮びたるが繪の島なり。

これに處する又この法に從ふべし。

植物を栽培するを耕種といひ、動物を飼養するを養畜といふ。

大旱にも河川を涸らすに至らず。

これ道に違あるにあらず。
これみな小事を忽にするより起れり。
眞にパノラマを見るが如し。
目的を達するのに便利である。
櫻の花を見に行く。
着物を縫はせにやる。
蝗を取りに行かないか。

右の諸例の如く補格は用言の屬性の必要より伴はるゝものにして、その用言が、如何様に用ゐらるゝときにもその補格は伴ひうるものなり。これ即ちその語の運用上より生ずる必然の要求なりとす。

補格は用言に依存するものなれば、いつにてもその用言の延長として取扱はるべきものなり。この故に、その用言が述格に立つ時には、その補格と用言とをあはせて一の述格として扱ふべきものなり。

五重塔天に聳ゆ。
老媼茶をすゝむ。
春風如意嶽より吹く。

人々神山へ向ふ。

これら皆あはせて一の述格と見なすべきものなり。これを述格の一部と見なさざるが故に修飾格の說明にも困難を來し、又句法上種々の疑惑も生ずるなり。なほこの補格が、用言そのものに附屬する補助成分にして述格附屬のものにあらぬことは最初に論じたる所にて明かなるべきが、なほ、上の準體言の補格を伴ふものの取扱および役にいふ連體格に立つ用言にも補格を伴ふを見ても明かにしらるべし。

第三十六章　客語と受身使役

上にもいへる如く、動詞にはその屬性の性質によりて補格なくしても說明を完くするものあり。又補格を要するものあり。その補格の語のうち、特に人又は生物と認めらるゝものを要することあり。これら人又は生物として認めらるゝ補格はその主格の對手たるものとして普通に客語と稱せらるゝなり。次の例中の

犬　人を　吠ゆ。

父　子に　財産を　讓る。

「人を」「子に」の如きもの卽ち客語なり。

この客語といふ名稱は賓格と紛はしきものにして、對者といふを可なりと信ずれど、姑く世俗に從ひて客語といふ事とすべきが、その語の內容は從來の文法書と稍趣を異にせり。從來の文法書にては多く動詞の性質として自動詞他動詞の區別をなし、他動詞は客語を要するもの自動詞は客語を要せぬものとせることはこれ西洋文典特に英文典直譯の弊なるなり。英文典にては自他の區別は主客兩語に關聯せること上述の場合の如くなるが、なほその外にも理由ありてこの區別を施せるなり。即ち自動詞は働掛の態を有するのみなるに、他動詞は働掛受身の二の態を有し、而してその受身の時の主語客語は働掛の時の主客を轉倒せしむるものとせり。之を以て自他主客の區別を說くの必要なることを知るべし。然るに國語にては所謂他動詞にてもその受身の主は必ずしも働き掛の際の客語にあらず。又自動詞にても受身の態をなしうるものなれば、この方面より見れば、主客自他の區別を施すべき必要なし。元來補語客語等を要するは動詞の有する屬性の性質に基づくものにして、動詞の屬性によりてはかくの如きもの、補充を要せずしてそのまゝ意味を明かにしうる性質のものあり、又補語なくては意義を完くしえざる動詞もあるなり。かくて上にいへる客語とはその要する補語のうち特に生物たるを要する場合にこれを客語といひて、補語中特別の取扱を受くるものた

ることを明かにせむとするなり。

かくてその屬性の性質上客語を要する動詞をば他動詞といひ、その他の動詞をば自動詞と稱することとあり。而してこの區別は既にいへる如く文法上重要なるものにあらず。寧ろ文法上この區別をなす要なしといひても可なる程のものなり。然れども作文などの便宜の爲にこの名目を存しおきても可なるが故に一言するのみ。

客語が客語たることを示すには各特に格助詞を添へて示すものなるが、それには格助詞「に」を伴ふもの「を」を伴ふものを多しとす。「に」「を」を伴へるものは上にあげたる例にて知るべし。これをば英文典などのまねをして「を」を伴ふものを直接客語「に」を伴ふものを間接客語などいふ人あれど、かゝる區別は要なきことなり。この間接直接の區別は「に」「を」の二客語同時に一の動詞に屬する場合にのみいふことを得べき現象なり。然るに、國語の動詞には「に」客語のみを要するものあり。「を」客語のみを要するものあり。これらの場合にはその客語唯一のみなれば直接間接の區別をなしうべきものにあらず、强ひてこの名目を用ゐむとせば、いづれも直接客語なりといふべきことならむ。されば、これらはたゞ「を」客語「に」客語といひてありぬべし。若し、强ひて之を命名せむとせば、「を」に伴へるは動的客語といふべし。

これはいづれの場合に於いてもその動作々用によりて何らかの點に於いて動くといふことの觀念の存する故なり。而して又「に」に作へるものは靜的客語といふべし。これはいづれの場合に於いてもその動作々用の歸着する點なればなり。

上來說ける所のみを見れば、客語は所謂他動詞の爲にのみ必要なるものゝ如くに見ゆべけれど、さにあらず。我國の語にてはこの客語といふものは所謂他動詞に關係ある場合の外受身の語遣、使役の語遣に必ず存すべきものなり。而してその時はその動詞は、所謂他動詞ならぬ時にもあらはるゝなり。かくてこの章には客語が如何にあらはるゝかを說くものにして、その說明は同時に受身の語遣と使役の語遣とを說くものとなるべきなり。

受身及び使役はその動作々用の直接の發現にあらずして、その動作々用の發現は間接のものとして示さるゝものなり。而してこれらは動詞本來の形のまゝにては表現し得ざるものにして、それ〳〵の作用をあらはすべき複語尾をその動詞に附着せしめてはじめてあらはさるべきものなり。かゝる場合を考ふるに、これらの語遣はもとよりその動詞の性質に關係あるものなるべけれども、又その動詞の性質によりてのみあらはさるゝものとは考へられず。即ちこれらはこの動作作用のあらはれ方の差異に基づくものと見らるゝなり。而してそのあらはれ方

の特別の場合をあらはすが爲に、これらの複語尾は生じたりと見らるゝなり。かくてその現象は必ず對者たる客語と相照應して意を完うするものたるなり。

受身の語遣は複語尾「る」「らる」(口語にては「れる」「られる」)を分出せしめたる動詞を用ゐることによりて成り立つものにして、その受身の文には必ず、受身の對者たる客語の存すべき筈のものなり。これを受身の文の構成の原則とす。かくて、受身の文に對して普通の語遣の文をば働き掛といひて區別することあり。さてかく普通の動詞を受身の姿にかふる時にはその動詞の屬性の發現の態度を變ふるによりてその對象の上に變動を來すなり。即ちその動詞が、所謂他動詞にして元來客語を有するものたる場合には、元の客語が、受身の場合の主格に立ち、元の主語が、受身の客語にかはるなり。たとへば、

犬　人を　吠ゆ。

といふ文を受身の態にする場合に、「吠ゆ」は「吠えらる」となり、主客位置をかへ、主語たりし「犬」は客語となり格助詞「に」を添へて

人　犬に　吠えらる。

といふ形になるなり。さてかく所謂他動詞が受身になる時にはその受身の客語にはいつも格助詞「に」を附くべきかといふにこれは必ずしも然らず。たとへば、

父　子に　財産を　讓る。

の如き文はその動詞に對する客語に、もとより「に」格助詞を伴へものあり。今かくの如き文を以て受身の語遣をなすときは、主客地をかへ

子　父に　財産を　讓らる。

としてよき筈なり。然れども、かゝる時は「父に」といふ形は言語上やゝ不安定の感を與ふ。この故に

子　父より　財産を　讓らる。

の如くするを安定なりとす。この故に、これらの客語の形式は一定不動のものにあらずして「に」を添ふるを普通とし、時として「より」を添ふることもありとすべし。

前項の例は所謂他動詞を以て受身の語遣をなせる場合なるが、國語にては所謂自動詞を以て受身の語遣をなすことあり。この時には事實上の主格たるものが、客語となり、その動作々用の影響を受くるものを以て主格に立つるなり。而してこの時の客語は必ず「に」にて示さるゝなり。たとへば、

子　泣く。

父　死ぬ。

といふ場合の「泣く」「死ぬ」は所謂自動詞なること明かなり。而してこれらを以て

母　子に　泣かる。
子　父に　死なる。

といふ如き受身の文をつくることあるは明白の事柄なり。かくて元の主格たる「子」「父」が「に」を伴へる客語となり、それらの影響を蒙れる「母」「子」が主格となれるなり。かくの如きことは外國語、ことに英語などの法則より見れば異例とも破格とも見ゆべし。然れども國語にありては古來行はれたることにして何の疑もなき事に屬す。而してこれを道理上より考ふるに、「その子の泣くこと」「その父の死ぬること」が、母又は子にとりてある影響を與ふる場合あるは明かなり。この事實を言語にあらはさむとする爲に、國語にては受身の語遣を用ゐ、その影響を受くべきものをこの語遣の主格におき、事實上その作用を起すべきものをこの語遣の客語におきたること心理上當然の事なりとす。されば、外國語にこの語遣なしとても、吾れには吾れの當然の語遣としてかくの如きいひ方の存するを認めて何の不合理をも感ずることなきなり。

以上を通觀すれば、受身の語遣の客語は主として「に」助詞にて助けらるゝものにして、稀に「より」に助けらるゝものなりといふべし。さて又上の「る」「らる」（口語にては「れる」「られる」）といふ複語尾は受身をあらはす外にも種々に用ゐらるる。されど然る

時は客語の存すべき筈なきによりて直ちに識別しうべし。

所謂自動詞にても他動詞にても又存在詞にてもその主格の語にて示さるゝものが、直接に動作々用を營むにあらずして、しかも、發動の根元となる場合あり。この場合にはその主格の語にて示さるゝものによりて使役せられ、實地にその動作作用を營むものの存するなり。かくの如き場合をあらはす語遣を使役といふ。この時にはその用言より複語尾「す」「さす」「しむ」(口語にては「せる」「させる」)を分出せしめたるものを用ゐるなり。その例次の如し。

犬を　走らす。

大工に　家を　建てさす。

直に信號兵に令し　信號旗を檣頭に掲げしむ。

農業は人をして　健全ならしめ著實ならしむ。

これらの場合の「走る」は所謂自動詞、「建つ」「掲ぐ」は所謂他動詞、「健全なり」「著實なり」は說明存在詞を基として構成せる用言なり。而していづれも複語尾「す」「さす」「しむ」をとるによりて使役の態をあらはし、その用言等の實際の主格は卽ち使役せらるゝもののとして客語となりてあらはる。上の例中の「犬」「大工」信號兵」「人」卽ちこれなり。これらの客語はその用言が使役の態をあらはさぬときは

犬　走る。
大工　家を建つ。
信號兵　信號旗を檣頭に揭ぐ。
人　健全なり、著實なり。

といふ形をなすなり。
使役の語遣にも亦必ず客語の存すべきものなり。この客語はその用言に對して本來の主格たるべきものなるが、それが使役の態をなすによりて客語に變じたるものなり。而してその客語は助詞「を」「に」又は命令使役の意ある動詞を加へて示すなり。前項の例にていはゞ「犬」「大工」「信號兵」「人」の如きはその用言の事實上の主にして、こゝには客語に變じたるものなり。而してその客語たることは「を」「に」「をして」「に令し」等を加へて示されたるなり。而してこの場合は、所謂他動詞とその他との別によりて客語の形を異にす。卽ち所謂他動詞の時にはその事實上の主格を客語とし、その客語には助詞「に」を添へてあらはすことあるは上の
大工に家を建てさす。
の如し。然れど、この「に」のみにては、他の場合の「に」と混じ易きが故にさる場合には使役命令の意ある動詞を加へて、

信號兵に令し信號旗を檣頭に揭げしむ。
賴朝範賴義經に命じ義仲を討たしむ。
の如くすることあり。又使役の事實をあらはす動詞を加へて、
義仲今井兼平を遣して勢田を守らしむ。
賴政に仰せて鵼を射しめ給ふ。
の如くすることあり。或は又その動詞の代りに「して」を使用して、
信號兵をして信號旗を檣頭に揭げしむ。
今井兼平をして勢田を守らしむ。
の如くすることあり。
自動詞の場合にありてはその事實上の主格が、客語たる場合には助詞「を」を伴ふこと多く、又「をして」を加ふこと多しとす。その例
子供犬を走らす。（犬走る）
父、その子を學校に入らす。（子學校に入る）
この風と月と殆ど予をして眠る能はざらしむ。（予眠る能はず）
かくの如き場合に或は「に」格助詞を伴はしめて、
子供　犬に　走らす。

の如くすることなしとにはあらねど、寧ろ稀なりとす。

以上あげたる諸例中、複語尾「しむ」を用ゐる場合には多く上に「して」を加ふることを見る。これは元來漢籍訓讀の際にかれの「使、敎、令、俾」等の助動詞を「して」と「しむ」との二度に訓する習慣より起れるものなり。

第三十七章　連體格

すべて體言は或は主格に立ち、賓格に立ち、又は補格に立ちなどして用ゐらるゝものなるが、そが實地に使用せらるゝに當りては、大抵單純なることなくして、何等かの意義を以てこれを制限する語を伴ひてあらはるゝなり。たとへば、

彼は　徒弟となれり。

の如き文にありては、意義通ぜぬにあらねど不明瞭なり。これを、

彼は大工の徒弟となれり。

とせば、その義明白となるべし。又

資本は　結果なり。

の如き文にありては意義殆ど解せられず。これを、

資本は貯蓄の結果なり。

とせば、その義明白となるべし。かくの如き場合の「大工の」「貯蓄の」といふ語は下なる「徒弟」「結果」といふ語の觀念を明瞭にせむが爲に加へられたるものにして、これらの無き時は、その意明らかならざる場合少からざるなり。或は又上の如く、必要缺くべからざる程度にあらずといへども、しかもなほ、これらを制限する語を加ふる時にその意一層確實になること少からず。たとへば、

月の光　賢き人

流るゝ水　子たる者

の如し。以上の如く體言の意義を限定せむが爲に、ある語を、その上に加ふる場合に、その位格を連體格といひ、連體格に立てる語をば連體語といふ。上にあげたる例にては、

大工の　貯蓄の　月の

賢き　流るゝ　子たる

はいづれも下なる體言に對しての連體格に立てるものなりとす。

こゝに連體格といへるものは從來の文法書に所謂形容詞といへるものなれど、形容詞といふ名稱は語の性質上の分類の名目にもありて、甚だ紛はしく、又人によりて形容語といふ名を用ゐる人もあれど、これも亦形容詞と混同する恐れあり。

この故にこゝに連體格といふ名目を以て、體言の上にありて之を限定するものをさせり。かくの如くするときは形容詞形容語などの紛はしき名稱を避け得べく、一方に於いては、體言の限定をなすものなるを明かに示しうべく、又一方に於いてはそが、體言の上にありてこれに連なるものなることをも明かに示しうべく、すべての點に於いて明瞭にして適切なる觀念を與へうべく思はるゝなり。英語の形容詞卽ち adjective もその語の成立をいへば名詞に附加せられたるものゝ義にして、形容語といふよりも陪名詞といふが如き意義のものなりとす。

すべて連體格の語はその對象たる體言に對してその觀念を限定してその意義をば、明確にせむが爲に附加せしめられたる制限的觀念をあらはす語にして、之が附加せられたるによりて、その對象たる語とこの連體格の語とが一團となりて更に大なる觀念團をなすものなり。而してこの添加せられたる語は對象たる下の體言に對して、二樣の關係を有すと考へらる。其一は內面的にして、この意義よりいへば、この添加せられたる語はその體言よりは何等の影響を蒙ることなくして、自家がかへりて、其の體言を制限するなり。然れどもこれを他の一面卽ち外部的に見れば、これらはその體言を主としてそれに依りて、立てるものにして、原體言の存在はこの連體格の語の前提條件たり。この故にこの點より見れば、これらはそ

の原體言の附屬物たり。かくの如く體言に對して內面的にはそれを制限し、外部的にはこれに附屬することとこれ連體格の特徴なり。しかも、これらにつきてなほ顧みるに、實質的に見る時には、その間に二樣の差を見る。その一は下なる體言が實質的の重點なるものなり。これは最も普通なることにして論ずるまでもなきが、他の一卽ち「机の上」「箱の中」「椽の下」「貯蓄の結果」「門の內」「家の外」などの如く、下なる體言が極めて抽象的にして、連體格の語の存立を待ちてはじめて具體的の意の明かになる如きものにありては往々實質上の主點が、上の連體格に存する如くに見らるることとあり。されど文法上はもとより下に主點を置きて考へざるべからざるものなり。この事は後にも少しく論及する所あるべけれど、あらかじめこれを明かにしおくものなり。

連體格に立つをうるものは體言用言及び、慣用せられたる特別の副詞なり。或は又稀に準體言にして連體格に立つものあり。而して用言を以てする連體格はこの連體形よりするを常とし、又形容詞の語幹よりして連體格に立つものあり。その用言の連體形以外のものは格助詞「の」又は「が」を伴ふを常とす。

名詞が連體格に立つときは主として助詞「の」を伴ふものとす。その例は既にあげたり。然るにまゝ「が」を以て示さるゝことあり。

君が代。

梅が香。

などの如きこれなり。されど、これらは古來の慣用に從へるものにして、今日にては活動的勢力あるものにあらず。

さて名詞が連體格に立つときは上述の如き形をとるを常とすれど、まゝその助詞を省きていはざることあり。

東海道(の)濱松の驛。

東京市(の)日本橋區(の)室町。

後醍醐天皇(の)第二皇子。

の如し。これらは下の句論にいふべき同格語と混ずべき恐ある故に注意を要す。同格語に在りては、

鎭西八郞(卽ち)源爲朝。

の如く中間に「卽ち」といふ副詞を加へうべき關係に立てるものなり。勿論こゝに「鎭西八郞」と「源爲朝」との間に「の」を加へても意義をとりうれど、しかるときは、そはここに連體格となれるものなりとす。

代名詞が連體格に立つときには場合によりて助詞「の」又は「が」を伴ふ。卽ち「わ」「た」

の如きは「が」を伴ふものにして、

　わが資本。

　たが袖ふれし梅の花ぞも。

「余」「汝」の如きは「の」「が」いづれをも伴ふなり。

　余の本　　　余が本。

　汝のもの　　汝がもの。

その他は大抵「の」を伴ふなり。

　この本。　　その枝。

　あの人。　　かの花。

　これの机。　あれの弟。

　いづれの處なにの事なるかを知らず。

さて代名詞が連體格に立つ場合にはそのさし方によりて特種の狀態を呈せるものあり。元來連體格たる代名詞の用法には二樣の差別あり。一は西洋の所謂所有代名詞に當るものにして、

　わが父　　余が親友　　汝の兄

　汝が妹　　かれの靴　　たれの机

たがもの　これの筆　それの枝

あれの手

の如くして下なる名詞の歸屬すべき所をば、連體格に於いて示せるものなり。而してこれらの場合には必ずその所有主たるものは、その下なる體言の外に存し、而してその所有主はその代名詞にて代表せられてあるものなり。他の一は西洋の形容代名詞又は指定代名詞と稱せらるゝもの(demonstrative pronoun)に當るものにして、

いざ越せあの山。　いざ踏めその露。

この少年は今や憤然として立てり。

の如く、その代名詞の代表するものは他になく、その下に來る體言を指定するのみのものなり。即ちかゝる場合の語は、その連體格たる關係は前者と異なるものとはいひ難けれど、代名詞としての作用に於いては全く關係を異にせるものにして前の種と同一には見るべからず。かゝる用法の時は必ず「この」「その」「かの」「あの」の如き第三人稱の代名詞にしてしかも「れ」をとらぬ形のものを用ゐる。(古語にありては必ずしも然らず)而してこの種の用ゐ方よりして「これ、それ、あれ」等を指示代名詞といひて、一種特殊のものを立つる誤りも起れるなり。さて又こゝに注意すべき

は「この」「その」「あの」の如きが連體格に立つときはいつもこの指示の意なりといふにあらぬことなり。たとへば、

この木片は果して露將の目に入りてその膽を奪ひぬ。

といふ場合の如きは「その」は所有をあらはすものにして、「露將の」といふに同じ意をあらはせるものなるが如し。

第三人稱の代名詞の場所方向をさすものが、連體格に立つときはその存在の地位を示すことあり。その例、

こゝの山　そこの川
あすこの寺　いづこの人
こちらの間　そちらの家

の如し。これらも亦一種特別の場合にして、その「の」はみな「にある」の意をあらはせり。これらは上の指示の「この」「その」の如くにも見ゆれど、亦趣を異にし、又所有代名詞に該當するものとも意義上の關係を異にせり。

數詞が、連體格に立つときは助詞「の」又は「が」を伴ふものにしてその例次の如し。

三の寶　三が一
第一の人　七の賢き人

一人の老翁　三人がうちの一人

體言が連體格に立つ場合には、副助詞「のみ」「ばかり」「など」「まで」等を伴ひてあらはるることあり。

今日のみの樂み。

こればかりの事。

軍隊などの話。

そこまでの決心。

又口語にてはこの外「だけ」「ぐらゐ」「やら」などをも伴ふことあり。

こゝだけの事にしておきませう。

栗の實ぐらゐの大きさだ。

誰やらの話。

又用言の連用形を以て假りに體言として扱ひて「の」助詞にて連體格に立たしむるものあり。

多くの人々。

遠くの親類。

近くの他人。

老いず死なずの藥。
見ず知らずの他人。
興ありのわざや。

などいふが如し。これらはこの場合に限り體言としての取扱をなすものにして、體言一般と異なる取扱をなすことはなきものとす。
用言が連體格に立つときはその連體形よりするを常規とし、しかも直ちにその體言に接するものとす。たとへば、

新しき生活は始まり、はげしき格闘は開かれたりき。
異なる郷の珍らしき花禽を目にす。
爲すべき事はまことに多し。
こゝなる寺には大雅堂のかきたる畫多くあり。
世に學者の事業ほど偉大なものはない。
私のあげた本は面白い本でせう。
あらう事かあるまい事か。

の如し。
用言が連體格に立つときはその補格を伴ひてあらはるゝことあり。補格は既

にいへる如く用言の意義の補充たる附屬物なれば、これが連體格に立つときも補格を伴ひてあらはるゝことあるは當然の事なりとす。何となれば、用言が連體格に立つ場合の主要なる點は實に、その屬性に存するものにして、補格はその屬性に從屬するものなればなり。その用例次の如し。

我と等しき人しなければ。　枕に近き鐘の音。

山に近い方に草を刈る子供が見える。

織延を一切も得ぬ我らさへ薄恥をかく數に入るかな。

世に稀なる人材。

情を知らざる車夫に促されて去つて山の一角の海に臨める處に行く。

用言が連體格に立てる場合に、その用言とその體言との關係を觀察すれば種々の狀態の存するを見るなり。そのうち最も普通なるものはその主格たるべき體言に對しての連體格として用ゐらるゝものなり。この關係にある連體格は形容詞、動詞、存在詞一切の用言にあらはるゝことあるなり。その例、

賢き人。（その人が賢きなり）

ゆかしきこと。（その事がゆかしきなり）

玉の如き肌。（その肌が玉の如きなり）

落つる淚。（その淚が落つるなり）
勉强する學生。（その學生が勉强するなり）
こゝにある人。（その人がこゝにあるなり）
兄なる人。（その人が兄なるなり）
子たる者。（その者が子たるなり）
清める水。（その水が清めるなり）
卓越せる才能。（その才能が卓越せるなり。
玲瓏たる空。（その空が玲瓏たるなり）
世に稀なる人物。（その人物が世に稀なるなり）
繪をかく人。（その人が繪をかくなり）
身にふりかゝる雨。（その雨が身にふりかゝるなり）
山に近き村。（その村が山に近きなり）

又その用言の補格たるべき體言に對して連體格に立てるものあり。この場合の用言は主として動詞なりとす。

見し人。（その人を見しなり）
我がすぐる村。（我がその村をすぐるなり）

昨日汝に與へし書はもてりや。（昨日汝にその書を與へたり）

我が住む里。（その里に我が住むなり）

君が來れる道。（その道より君が來れるなり）

汽車の到らむ處。（その處へ汽車の到らむなり）

我がかく繪。（を格補語に對して）

繪をかく紙。（に格補格に對して）

以上の如き關係を同じ語にてわかりよく示せば次の如し。

繪をかく机。（場所を示す）

繪をかくとき。（時間を示す）

繪をかく術。（方法を示す）

繪をかく筆。（材料を示す）

又用言すべてに通じて、主格又は補格たるべきものに對しての連體格にあらずして、その他のものに對して連體格たるものあり。これに亦次第を二樣に立てゝ考ふるを得べし。一はその用言に關する時、場所、理由、原因等をいふ爲にそれらの意をあらはす體言を下におきそれらに對して連體格に立つものにして次の如し。

川尻に至れる程。十六夜の月さしいでたり。

みまかりける後櫻忽ち枯れにけり。
倒れたる上に又他人倒れかゝる。
雨降る故人は來ず。
吾が讀む間に汝は書き取るべし。
名ある人も多く交れる中に此人は殊にすぐれたり。
雨ふりし爲外出せざりき。

次は廣く漠然たる意義を有する體言に對して連體格に立つものにして、その意義よりいへば、その連體格の語が主にして、體言は寧ろ從たるものなり。即ちその用言をば、體言の資格をとらしめむが爲に下に體言を加へたる形のものなりとす。されど、文法上の形式よりいへば、その體言が、主にして、上の用言は連體格たれば、從たるべきものとす。さてかくの如き用に供せらるゝ體言は「ところ」「もの」「こと」などを主とし、手紙の文の「間」「條」などもまたこの類の用法によるものと認めらる。

多能は君子の恥づる所なり。
刀のさゝらに成る程はげしく戰へり。
御通知これなき條迷惑千萬に候ふ。
我は今美はしきもの奉らむ。

こゝに面白きことこそあれ。
直き木に曲れる枝もあるものを。
すべてその用言に對して主格に立つべき體言に對して連體格に立てる用言は再びこれに對する主格を排來すこと能はざるものなり。然れども、その他のものはその用言が連體格に立てる時にも主格を伴ひてあらはるゝことあり。
わが見し人。
君がかつて紹介せし友。
汽車の到らぬ處。
雨降る故人は來ず。
多能は君子のはづる所なり。
補格たる體言に對しての連體格に立てる用言も亦再びその補格を伴ふことなきなり。但その用言が補格二以上を有する性質のものなる場合に他の補格を伴ひうることは勿論なりとす。その例
友に與へし書
書を與へし友
子に讓れる財產

財産を讓れる子
使を遣りし親戚
親戚へ遣りし使
敎を受けし師
師より受けし敎

こゝに用言の連體形に格助詞「の」を添へて連體格にしたる如き形のものあり。その例次の如し。

一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけゐたり。
百折撓まざるの決心を以て從事したり。

これらは上にいへる用言の普通の連體格たる場合と酷しく似たるを以て通常の文法家は同じやうに解釋して、その中間に「の」を加へたるものとして觀察し、かくの如きものは破格なりとして之を排斥せるあり。近來また之を許容すべしといふ論あり。然れどもその論いづれも正鵠を失せりといふべし。抑も格助詞「の」を用言の連體形に附けて名詞の上に冠せしむるものは古より存する所にして、かくなしたりとてあへて破格とすべきものにあらず。その例、

君やこむ我やゆかむのいざよひに。　（古今集）

見せむの心ありければ。（蜻蛉日記）

衣笠始午の日は昔より京中に上、中、下の人稲荷詣とて參り集ふ日也。（今昔物語廿八、第一）

或は馬に乘て戰はむの心も無くして鞍を打て逃る者も有り。（今昔物語廿五、第五）

しかるに之を排斥する所以はこれみな中古の文語に熟達せりと自稱する文法家が空想より出で來れる所と、漢籍訓讀を攻擊せんとする一種の敵愾心より來れるものとにすぎず。但し從來之を用ゐるものも排斥するものも「の」の有無によりて意義資格に變化あるを注意せぬは大なる疎漏といふべし。卽ち、連體形より直に名詞につゞくるものはその用言を以て直に連體格とせるものにして、「の」を以てせるものはその語を以て準體言として更に連體格とせるものなれば、かの文部省許容案の例としてあげたるものはみな名詞を含ましめて解するを適當とす。

（「花を見る」の記）は（「花を見ることの記）

（「學齡兒童を就學せしむる」の義務を負ふ）は（「學齡兒童を就學せしむることの義務を負ふ」）

（「市町村會の議決に依る」の限りにあらず」）は（「市町村會の議決に依ることの限

りにあらず」

といふをうるものなりとす。即ちこれらはその連體形をとれる用言が準體言として取扱はれたるものにして、準體言を以て連體格に立たしめたるものと認めらるゝなり。而して「の」を容るゝ場合は上の如き準體言として取扱はるゝ場合に限るものにして、用言のたゞの連體格に對しては「の」を加ふべからざることたとへば、

我がかきしの繪

などいふことの不可能なることは小兒だにも知るところなるなり。これを以て「の」を加へたるものにはそれら特別の理あるを知るべきなり。

又形容詞の語幹を以て連體格に立たしむることあり。その時は「の」といふ助詞によりて助けらるゝを常とす。

面白の春雨や。

うたての仰候や。

心幼なのわざや。

あら心なの村雨やな。

口をしの花のちぎりや。

あなおそろしの物語や。

恨めしの人の心や。

これらは、今の日常語には用ゐねど、古くは盛に用ゐられしものなり。

副詞にして連體格に立つをうるものは、屬性の副詞を主とし、その他のものにては慣例あるものは往々この格に立つことあり。この時は助詞「の」を伴ふを常とす。さてこれらの副詞にては情態副詞最も多く用ゐらる。その情態副詞は國語のものも漢語のものも同樣にこの格に立つなり。程度副詞も亦然り。それらの例

わづかの迂路をせざるが爲に名勝を見殘すことあり。

そは實に尤もの事なり。

（これは「尤もに」といふをうべき情態の副詞にして「尤も」といふ陳述副詞にあらず、紛るべからず。）

官吏として重要の職にありき。

非常の用に備へ給へ。

自然の道理なり。

從來の文法家何を基として論をなせるかは知らねど、とにかくにかくの如き場合のものは誤謬なりとして排斥し、みな「なる」といふ語につゞけて、

重要なる職　非常なる用　自然なる道理　わづかなる迂路

尤もなる事の如くせざるべからずといへり。然れどもこの例を見て知る如く「非常なる用」「自然なる道理」は妥當ならぬ感を吾人に與ふるが上に、上に例示せるものは普通文に汎く用ゐらるゝものにして決して破格にも違例にもあらざるものなり。この故に本書は之を例示してその用法を説くことゝせり。但、すべての副詞が然るものといふにあらねば慣例あるものに限ることを明言せり。しかれども、慣例あるものに限るといふことは、必ずしもこの法則に限らず、大抵の文法的法則はかくの如きものとす。されば又平安朝の語に存せぬものなればといふ人もあらむ。されど、平安朝の語にもその例甚多きことは既に第十六章にあげたる所なるが、なほ二三をあぐ。

たゞの人にみえず。（宇都保、吹上下）

つひのたのみ所にはおもひおくべかりける。（源、帚木）

まづの人々おはす。（源、若菜上）

かりそめのかくれがとはたみゆめれば。（源、夕顏）

おほよそのなびく尾花にまかせてもみむ。（蜻蛉日記）

あはれの事や。（源、帚木）

とかくの事いとたふときに老僧のあひしりて侍りけるに(源、夕顔)

わりなきまれの細道をわけ給ふ程。(源、帚木)

さての御かた〴〵にも皆たてまつれ給ふ。(宇都保、藏開下)

かくの如く例甚だ多きものなるが、これらをすべて否定しうべき勇氣あるものにあらずば本書の所説を否定しうべきものにあらざるなり。

第三十八章　修飾格

連體格が體言に對すると似たる態度を以て用言に對するものあり。即ち用言のあらはす觀念を一層精密に示さむが爲に、之が制限をあらはす語を上に加へて語の集團を構成することあるなり。たとへば、

空よく晴れたり。

しばしまちたまへ。

ひたすら考ふ。

いかでよからむ。

の如し。かくしてその添加せられたるものは連體格の語が體言に對すると同じく二樣の關係を有す。內面的には用言のあらはす觀念を制限し、外部的にはその

用言に依存す。かくの如き語の位格を修飾格といひ、その語を修飾語と稱す。

この修飾格の語を副詞といふ人もあれど、副詞といふは單語の性質の名目にして之を直ちに運用上の名目とする時は混亂を生じ易し。この故に本書は之を修飾格といひて副詞と區別す。その性質上の名目とは家屋の材料を木、土、竹、石、瓦、釘、繩等といふが如くにして、運用上の名目とはそれらの材料を建築の部分として柱、桁、壁、窓、敷居、鴨居などゝいふが如く、而して釘繩の如きものは附屬物として建築上の部分の名目としてあげられぬことは、助詞が運用上に獨立の籍を有せぬに似たり。即ち副詞といふは、松杉の材木といふが如きものにして、修飾格といふは柱、桁、床板、羽目板といふが如きなり。

修飾格は連體格に似たりとはいふものゝ、仔細に觀察すれば、連體格とはその趣を異にするものあるなり。即ち連體格にありては、その對象たる體言の意義を修飾する爲にのみ存するものなれど、この種のものは、單に用言一個の意義を修飾するにあらずして、種々の狀態存せればなり。先づ普通にいふ所の用言は之を嚴密にいふ時は屬性と陳述の力との二種の混一せるものなり。この故に用言に對して修飾すといふ場合にありては、その屬性に對しての修飾なりや陳述に對しての修飾なりやといふことは理論上顧みられざるべからざる筈なり。而して事實を

見るにこの二種の區別は明かに存するなり。

その陳述に對しての修飾とは

けだしこれならむ。

いかでよからむ。

あにかゝる事あらむや。

ゆめ怠るな。

の類にして、これらはその陳述の言遣に對して一定のいひ方を要求するものにして、その修飾格に應ずべき一定の陳述のし方よりの外のいひ方をなしたる時は、完く無關係となるなり。たとへば、

いかで　よし。　ゆめ　怠る。

の如くいふ人ありとせば、吾人は「いかで」又は「ゆめ」と「怠る」と「よし」とは全く無關係にいひ表はされたる二個の發表と見る外にはこれを了會し得ざるなり。これ何故ぞといふに「いかで」又は「ゆめ」といふ語が出でたるによりて豫想する所の陳述のし方は「よし」又は「怠る」といふ言ひ方にあらざればなり。かくてこの陳述に關する修飾格はその用言の屬性に關するものにあらざるが故に、具體的の屬性としては認められざる用言、卽ち上の例にていへば、

これならむ。

かゝる事あらむ。

の如き語に對してもそれが陳述をなす限りは修飾すべきなり。されど、それらの用言が陳述をなすことなくして或は連體格或は準體言等として用ゐらるゝ場合にはそれらに對してこの種の修飾格は用ゐらるゝことなし。何となれば、それらは陳述をなせるものにあらざればなり。

用言の屬性に對しての修飾格とはたとへば、

さま〴〵に考ふ。

かくいひたり。

よく晴れたり。

の如きものなり。これら「さま〴〵に」「かく」「よく」は「考ふ」「いふ」「晴る」といふ事實につきての限定又は修飾をなせるものにして、「考ふ」「いひたり」「晴れたり」といふその陳述のし方には關係なきこと明かなり。されば、これらの修飾格はその用言の意義に對して依存するものにして、その用言の用ゐ方の變化には大なる影響を蒙らざるなり。たとへば、

さま〴〵に考ふるも面白し。

ひたすら考ふる時は
かくいふ人あり。
かくいふはいはれあるなり。
容のよく晴れたるは心地よし。
よく晴れたる容

の如くいひても不條理にあらざるを見る。陳述に對しての修飾格にはかゝる現象なきなり。これを以てもこの種のものはその屬性の修飾をなすものなるを見るべきなり。かくてこれらは屬性に對しての修飾を司るものなれば、屬性を有せざる用言に對してはそれが修飾格に立つことなきなり。たとへば、

さま〱にこれなり。

などいふこと能はざるを見るべし。これ何故ぞといふに、「これなり」は陳述をなせど、その資格は「これ」といふ體言にして用言の有する屬性とは全く異なる性質を有するを以てなり。

然るにこの用言の屬性に對する修飾格も亦その性質によりて情態を示すものと、程度を示すものとの二種に區別して考ふべきを見る。情態を示すものとは前項に示せる「さま〱に」「かく」「よく」の類にして、その屬性に對してなほ委曲に、情態を

述ぶるものなり。程度を示すものとは

やゝ早し。甚だ面白し。

の如きものにして、その詞自身には屬性としての内容を有せず、他の屬性に對して
その性質狀態の程度をいふものにして、狀態の性質をもたぬ用言即ち動作作用の
意をあらはすものには附屬することなし。即ち

やゝいふ(俗に「やゝ」を「やゝ暫く」などの意に用ゐることあるはその例にあらず)

甚だみたり。

の如きことをいひたりとせば、吾人はその修飾格と用言との間には何の關係もな
く各別なる二個の陳述と考ふるものなりとす。かくてこの程度の修飾格は、一般
的に靜止的の屬性を限定する性質を有するを以て情態を限定する修飾格の語な
ほ一層明かにいへば、情態の副詞に對しても修飾格として限定附屬しうるものな
りとす。たとへば

やゝ穩かに振舞へり。

甚だ速かに走る。

といひうるが如きこれなり。或は又「最も東に見ゆ」などの如く體言に對してさへ
限定することもあり。さてこの、程度の修飾格に至りては用言の意義を修飾すと

いふのみにあらねば、吾人の最初にいひたる用言の修飾をなすといふ說明はこゝに擴張せられて、別に修飾格の定義を要することゝなるべし。

以上の如くなれば、陳述に對する修飾格と用言の屬性に對する情態の修飾格と、用言の屬性の情態的なるもの及び情態副詞の屬性に通じて對する程度の修飾格とは相似たる點はありながら、各亦趣を異にするものなれば、嚴密に論ずればこれら三者は各別類とすべきものなり。然れどもこれらは文法上重要の度稍々ひきくして、これらを各別の種類と立つることは繁雜にすぐるを以て今便宜上一括して修飾格といふ。然るに、かく便宜上一括すとせば、吾人はなほこの他にも便宜上この一類中に攝取しおくべきものあるを見る。そは次にいふ句の修飾格たり。

句の修飾格とは、一の句その全體を導くものにして、その句の部分たる用言又はその陳述を導くにあらぬものをいふ。たとへば

いなこれは余がかけるなり。

うべちる事を人いとひけり。

いでわれを人なとがめそ。

あはれ旅人にこそあなれ。

の「いな」「うべ」「いで」「あはれ」の如きこれなり。これらは次なる句全體を導けるもの

にして、その修飾格の語とその句とが、相呼應するものにして、若し文章説話の急迫せる場合にはその修飾格の語一のみをいひても略々下の句の意を表明しうる性質のものなりとす。これらは上の三種の修飾格とはその對象と性質とを異にするものにして當然區別せらるべきものなれど、吾人は上に述べたる如く、これらを便宜上一括して修飾格といひおくべし。

然るになほ修飾格の別種としてこゝに一つ説き加ふべきあり。接續格これなり。これは主として語又は句を連結する用に供せらるゝものにして、接續副詞の用ゐらるゝ場合にあらはるゝ位格なり。これには語と語とを連結するものあり、句と句とを連結するものあり。嚴密にいへば、これは各別に一の位格と認めうべく、又そがうちにも語の連結をなすものと、句の連結をなすものとは、文章構造上の勢力に差あれば更に二種に分つべきものなれど、便宜上こゝに一括して附説すべし。

以上修飾格の各種は、文法上それ〳〵特性を有し、單に意義性質の差のみならず、その對象を異にするが故に、その用ゐらるゝ場合の位置の上にも亦差あり。それらの事は句法上の論として下章に述ぶべし。

修飾格に立つべき語は主として副詞又は副詞に助詞を添へたるものにして、又

名詞に助詞をそへてあらはすものあり。或は又用言を用ゐてするものあり。或は副助詞の添はりて修飾格をなすことあり。而してそれらは修飾格の各種類によりて各事情を異にすれば、今はそれら修飾格の區別に基づきて說明すべし。

情態を示す修飾格として用ゐらるるものは主として情態の副詞又はそれに助詞を添へたるものなり。それらの例

谷は田にて概ね細き流あり。

砂川やすらすら走る月の魚。

童しぶしぶ法師になりにけり。

つくづく思ひ出居たり。

これらはその副詞そのまま用ゐたるものにして、助詞を添ふる場合は「に」又は「と」を用ゐるなり。

あゝ諸子は既にこの意をさとりたらむ。

みすあをやかにかけわたして。

いかざらむも又心しられぬさまなれば、しぶしぶにいぬ。

たけのすらすらとたかき人。

つくづくと思ひくらして。

このかくやひめきとかげになりぬ。

さてかく情態副詞の用ゐらるる場合には、それに副助詞、係助詞、間投助詞の助くることあり。

しばしだにおはせなむ。

いとおいらかにのみもてなしたまへり。

かくまでさとしても汝は未ださとらざるか。

我いほは都のたつみしかぞすむ。

人の心ののどかなる時はおいらかにぞありける。

いとかたくなにこそ見ゆれ。

かうないきそ、のどやかにやれ。

ほととぎすだにさやかにをなけ。

又名詞に助詞を添へてあらはすことあり。この場合には助詞「に」「と」を用ゐるを普通とす。その例

斧斤の音常に絶えず。

雨霰とちりくる彈丸。

かゝる場合のものは形に於いて補格と似たり。されど、その用言に對する關係に

緩急の差あり。補格は用言の意義を完成する必要よりして補へるなり。修飾格はなくとも用言の意義は事缺かず。ただこれを加ふるによりて一層精細となるものなり。さて又名詞を以て情態の修飾格とする場合に格助詞「の」を添へて用ゐることあり。たとへば

刈菰のみだるる心。

例の來りぬ。

の如し。但し、これは古き語遣にして現代文には擬古の外は多く用ゐず。又用言の連用形を以てすることあり。例へばこれには次の如く形容詞の連用形を以てするもの多し。

かくの如きはただ空しく放浪者として終らむのみ。

又「如し」は特別の用法ありて、その連用形の下に更に助詞「に」を添へて修飾格に立たしむることあり。

飛ぶが如くに都へもがな。

仰せの如くに處置いたし候ふ。

又複語尾「ず」「つ」をふめる用言はその連用形をもちてこの修飾格に立たしむることと少からず。

絕えず敵の動靜を察せり。

しひて與ふ。

これらも亦その下に、副助詞、係助詞、間投助詞を作ふことあり。

とけてすらぬる程もなき五月雨をねざめがちにてすごすころかな。

人知れずこそ思ひそめしか。

いたくなきそ。

たちとまりみてをわたらむ。

の如し。用言が修飾格に立つ時はその連用形よりつゞくるものなるが、かく用言の連用形より下なる用言につゞくる時、上なる用言を連用言といふ。

こゝに連用言につきて一言すべし。抑も連用言には二の用あり。一は下の用言と合同をなす爲のものにして、たとへば、

壁を白く塗る。

に於ける「白く」の如し。この時の「白く」は「塗る」ことの修飾格にあらずして、壁の色の說明なり。而して「白く」と「塗る」とは相合して一の述格をなすなり。これをなほ嚴密にいへば「白く塗る」といふ述格のうち、その賓格に該當する部分が「白く」といふ語と「塗る」といふ語の屬性の部分となり。卽ちその色とそれをつくることゝの混成

觀念を壁に結合したる陳述が「壁を白く塗る」といふ語となれるなり。かゝれば、その「白く」と「塗る」の屬性とは合同して一の內容をなすものなり。この性質の連用言は動詞には多し。たとへば、

馬車にて走り過ぐ。

の如し。これらは「走り」と「過ぐ」との二語にて一の混成觀念をつくりこれを以て陳述せるなり。かくの如く用ゐたる連用言は同格連用といふ。今こゝにいふ所の「空しく」「たえず」「しひて」の如きは下なる用言に從屬してその修飾格に立てるものなれば、これを修飾連用といふ。この修飾連用は形容詞に多くあらはるゝものなるが、動詞も亦時としてかくの如き格に立つことあり。

書をくりかへしよむ。

衣服をいそぎかふ。

これらはいづれも修飾連用なり。何となれば「くりかへし」「いそぎ」は直接に上の「書」「衣服」等に關係を有するにあらずして、下なる「よむ」「かふ」といふ用言の事情を說明する爲に加へられたること明かなればなり。なほこの連用言のことは用言の用法の條に述ぶべし。

情態を修飾する修飾格は又、副助詞を體言、準體言に添ふるによりて成立つこと

あり。その例

あかつきばかりうきものなし。

受領などおとなだちたる人は。

いみじうしぬばかり思へるがいとほしければ。

花と見るまで雪ぞふりける。

いそがしいだけ人手がかゝる。

又これらの下に格助詞「に」を添ふることあり。

泣きぬばかりにいへば。

秋風膚寒きまでになりぬ。

情態を示す修飾格は用言の屬性觀念を修飾するものなれば、その用言が如何樣に用ゐられても附屬しうる筈のものなり。その述格に立てるを修飾せる例

胸中おのづから閑月あらむ。

柿の實もおひおひあかくなる。

これらの場合は下に複語尾ある場合もなき場合もおなじく用ゐられ、又いづれの複語尾にても附屬せしめうべきものなり。次に準體言たる場合にも修飾するを得。その例

十分に學問を研究するを要す。
空の俄にかきくれもれるは驟雨のふらむとにや。
明瞭に說明すべきによりて靜にきかれよ。
又連體格に立てるものをも修飾することあり。その例
面貌さながら猿の如き男出で來たり。
俄に吹き來る一陣の風。
心しづかに書を讀める人あり。
といふを以てその修飾の對象が屬性に存する所以を見るべし。
用言が修飾格として用ゐらるゝとき、それが賓格を伴ふべきものたるときは、その賓格と合して一の修飾格をなすものと認めらる。
我が如く物や悲しきほとゝぎす。
依然として舊の如し。
この場合の「如し」は特別の用法ありて、その連用形の下に更に助詞「に」を添へて修飾格に立たしむることあり。
飛ぶが如くに都へもがな。
仰の如くに處置いたし候。

補格を要する用言が修飾格に立つときはその補格の語も合せて一の修飾格として取扱ふべきものなり。

手を切る切るつんだる菜を。

勤儉と慈善とによりて德行を示せる結果なるべし。

木の間より花と見るまで雪ぞふりける。

今日を限りに舞ひあそぶ。

產物は國々の習慣風土によりて同じからず。

陳述に對する修飾格として用ゐらるゝものは主として陳述の副詞なるなり。

その例

もし假寢せば、夢も亦緣ならむ。

いかでか異存を申すべき。

よもさる事あらじ。

えいでおはしますまじ。

人はいさ心も知らず。

ゆめ疑ふことなかれ。

これらは通常上の如くそのまゝ用ゐらるゝなり。されど又係助詞を作ふことあ

り。

えぞしらぬ。

えなんみすぐすまじき。

なほえこそかき侍るまじけれ。

又形容詞の連用形を以てするものあり。その例

卿等も亦宜しく永住の決心をなすべし。

又動詞の連用形を以て修飾格に用ゐたるものあり。

かまへて人に知られ給ふな。

されど、かく用言を以てするものは稀なる例に屬す。

陳述に對する修飾格は述格を對象とするものなれば、述格に立たぬものに對しては決して用ゐらるゝことなし。而してその對象とする述格に對しては一定の陳述のしかたを要求するものなり。これは上の項に例示せるにて明かなるべきが、なほ二三の例をあげむ。

げに品性は何者よりも必要なりといふべし。

谷間の石の磨かれ、井桁の圓くなるも豈一朝一夕の力ならむや。

蓋しこれ實に最難事ならむ。

何故にわれをして久しく床に眠らしめたるか。

而してこれらはいづれも準體言、連體格に立つものに對しては決して用ゐられぬものなり。これを以てその性質の情態の修飾格と異なるを明かに知るべし。又

まことに勇ましき事といふべし。

これは實にたやすき事どもなり。

げに面白き事なり。

の「まことに」「實に」「げに」の如きは陳述の修飾格と認められ易きものなれど、こゝにはいづれも形容詞にしてしかも連體格に立てる語を限定せるものにして、陳述を支配せるものにあらず。しかも情態の修飾格にもあらず。これらは程度を示す修飾格たるものとす。

程度を示す修飾格として用ゐらるゝものは主として程度の副詞なり。その例

やゝかげ寒し。

いとよく見やらる。

甚だかしこし。

この間の芝居は大層面白かつた。

今年の展覽會は隨分成績がよい。

又用言の連用形を用ゐることあり。その例

甚しくこれを排斥せり。

ひどくうれしかつた。

至りてすなほなる木訥一遍の人なり。

極めて質素に出來てゐる。

程度を示す修飾格は下に來る語の意義を形式的に限定してその範圍又は程度を指示する性質を有するものにして、その修飾の對象となるものは用言、副詞又特別の體言なりとす。而してこれはその對手たる語の直上に緊く接するものにして他の類よりもその對象に結合する力强しと見ゆ。その對手は上にいへる如く、用言にては形容詞多く、副詞にては情態副詞に對してのみ用ゐられ、又東西上下等比較對照の意ある名詞にも附し、又數詞に對しても限定することあるを特徴とするなり。その例、用言に對するもの

漁業を以て生活する者頗る多し。

この地に最も多きは熊笹なり。

その色甚だ白くして宛も雪の如し。

是眞の最も長ずる所は蒔繪にあり。

その最も必要なるものを意志とす。
沼の西方にやゝ高く見ゆるは五輪峠である。
その朝は殊に烈しい霜の來た事と思つた。
これらはその用言が、如何なる用法に立てる場合にも用ゐらるゝを見て、その屬性に依存するものなるを知るべし。情態副詞に對するものゝ例
松もまた甚だ稀なり。
いと遙に見ゆ。
風やゝ靜になれり。
それは今まで聞いた事のない非常に微妙な音樂の音でありました。
至つて素直な木訥一遍の人間でありました。
この人は少し穩な方でありました。
これらも亦その副詞が如何樣に用ゐられても修飾せるを見るべし。名詞に對するものゝ例
最も上の方に見ゆ。
そこよりやゝ東に見ゆるは安房の山々なり。
數詞に對してのもの

唯一人暇をさして駒を早め行く。

たゞ二の柿を今食つてしまふことは心細かつた。

句に對する修飾格は感動副詞のなす職能にして句の意を豫め示してこれを誘導するものなり。

あはれ、此身の齢今十年若かりせば。

やよ、しばしまて。

すは、敵陣亂れ立ちたるぞ。

いざ、あすは故郷へかへらむ。

修飾格の變形又は特殊の場合と認むべきものに接續格あり。これは、上下の語句の間にありて、その語句を結合する用をなすものなるが、語と語との接續をなすものは修飾格たる性質容易に認めがたきさまなれど、句と句との接續をなすものは明かに修飾格の一種たることを示せり。かくて語と語と結合する接續格はその結合したる語を以て文法上一團の語としての取扱をなさしむるものなり。これには次の如く、

見わたす限り山又山。

一尺すなはち十寸なり。

文或は武を修む。

體言を連ねて一とする場合と、同格連用を以て連ねたる用言の中間に介在する時とあり。

庭はたゞ三坪。誰かいふ、狹くして且つ陋なりと。

吾は書を讀み又文字を書く。

これらは述格內の同格連用の中間に在るものにして

「不義にして富み且つ貴き」は我に於いて浮雲の如し。

よのつねの人は「あやまちて後改め難きになやみ、又はさすがに人目をはづる」によりておしかくす。

これらは準體言たるものゝ內にある同格連用の中間に在るものなり。

け高く且つ潔き丈夫の魂。

書を讀み又は文を作る事を學ぶ。

これらは連體格內の同格連用の語の中間に在るものなり。

句を接續する用をなす接續格の用ゐらるゝ場合を見るに、二の場合あり。一は

身の丈高くかつ力あくまで强し。

の如く形式上明かに結合せられたる二句の中間に入れらるゝものあり。

志堅し。かつ望遠し。

甲及び乙來る。而して丙は來らず。

の如く形體上の連結なき二句の中間に入りて意義上の結合を示すことあり。かく句の接續格は二句の意義上の結合を示すをその精神として、形體上の結合には關係なきものなるが、文法上その屬すべき所は上の句にありや下の句にありやと考ふるに、これは元來修飾格の一種と見るべきものにして、なほ下の句に屬するものとして考へらる。この故に上下二句に形體上の連結なき場合には必ず下句の所屬と認むべきものなりとす。

接續格として用ゐらるゝは接續副詞の本分なるが、文熟語にしてこの格に用ゐらるゝもの少からず。かゝる場合の語は副詞「かく」「しか」「さ」を冠したる「あり」といふ語に接續助詞をつけたるもの或は、それらを複語尾「て」にて受けたるものゝ變形なる「さて」「かくて」「しかして」等をも用ゐる。それらの例

詩文を以て名あり。しかれども其の心を用ゐたるは經濟の學なり。

春になりぬ。されどなほ冬の心ちす。

かゝれど、このうたをひとりごとにしてやみぬ。

さらば、その宮づかひ人ななり。

さりとも人にはおとり給はじ。
さるにその大將出てたばかりたまふやう。
しかるになほその非をさとらずは前途大に憂ふべきなり。
しかればば神皇の正統記とや名け侍るべき。
さて御願申上候事こそ候へ。
かくて我等は門出しぬ。
しかしてこれ千古の快事たるなり。

以上の例多くは文の意義を連ぬるものなるが、「さて」といふ語は稀に語と語との連絡を示すに用ゐらるゝことあり。而してそれらには特別の現象あり。「さて」といふ語は係助詞「は」を伴ひて次の如き用法に立つことあり。

弓矢持ちたる人さては下なる物、わらはなど三四人。（源、夕顔）
しるべせし隨身許、さてはかほむげにしるまじきわらは一人許ぞゐておはしける。（源、玉葛）

これはそれらを加ふる意にて枚擧することを示すと考へらる。

「もし」といふ陳述副詞は係助詞「は」を添ふることによりて接續格に立つことあり。その例

つれ〴〵なる夕暮もしは物あはれなるあけぼの。
無文の青色もしは蘇芳など五重にて。

第三十九章　體言の用法

以上述べ來りし語の位格の研究は各品詞を通じての用法上の横斷的研究にして運用論の中樞をなすものたること既に述べし所なるが、今こゝにはその横斷的研究によりて立てたる各位格を標目としてそれらが、各の品詞の上に如何にあらはるゝかを研究せむとす。これをかの位格の研究に對していへば、これは各品詞につきての縱斷的研究ともいふべきものにして、この縱横二方面より論じてはじめて語の運用論はその任を果すべきなり。

こゝに各品詞の用法を論ぜむとするに、先づ體言よりして之を說くべきなり。

凡そ體言が文中に用ゐらるゝには其のまゝにてあらはるゝことあり、又助詞の助をかりてあらはるゝことあり。今その用ゐらるゝ場合と共にそれに附屬すべき助詞をも說くべし。體言が文中にあらはるゝには大體二の方法あり。一は絕待成分として立つもの、一は相待成分として立つものなり。

體言が絕待成分として立つといふこととは、それ以外に相對應して用ゐらるべ

き語を要求することなき場合をいふものにして所謂呼格としてあらはるゝものをいふなり。體言が呼格の語としてあらはるゝ場合には單獨にてあらはるゝものと、間投助詞の助けをうくるものとあることは既にいへり。而してこれら呼格としてあらはるゝものは、對者か、若くは第三者をあらはすに用ゐらるゝものなるが、これらを更に事實の方面より例示すれば、對者としては、問ひかくる對手をさしていふ場合あり。たとへば、

少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ。

春の野にところもとむといふなるは二人ぬばかりみでたりや。君。

又對話の際の對手をさしていふことあり。たとへば、

いかに、金子殿。この馬何等の馬にて候ふぞ。御覽ぜよ。

續くか。小次郎。誤すな。誤すな。

やおのれ。かくありけるは。たゞ來れ。

又命令希求の對者をあらはすことあり。その例、

苔の袂よ。かわきだにせよ。

いざ子供。たはわざなせそ。

郭公。まだしきほどの聲をきかばや。

第三者をあらはすものは感動の對象として呼びかくるあり。

あはれ月。こよひの月のさやけさよ。

あが君や(これは對者)。をさなのものいひや。

あらおもしろの歌や。

又希望の對象としてあらはすこともあり。

老いず死なずの藥もが。

君が八千代にあふよしもがな。

體言が相待成分として立つことはそれ以外のなほ相對應して用ゐらるべき語を要求し、それと相待ちて用ゐらるゝことある場合をいふものにして、これは主格、賓格、補格、連體格、修飾格等に立つ場合をいふ。これらは助詞にて助けらるゝことあり。然らざるあり。これらの事は大要各の位格を說ける際に述べたれば、今略說するに止めむ。

主格に立つことは體言の用法の中最も普通に行はるゝ現象にして、それらが主格に立つときは通常そのまゝにてあらはれ、時としては格助詞「の」「が」の助けをかることあり、又その意義上の必要よりして副助詞を伴ひてあらはるゝことあり。又その述格との關係を明かにせむが爲に、係助詞を伴ひてあらはるゝことあり。又

時として間投助詞を伴ふことあり。それらの事は既に述べたり。

名詞が賓格に立つときは種々の狀態を呈す。卽ち「ごとし」の賓格としては「の」といふ格助詞に助けらるゝを常とす。又動詞「す」の賓格たるものは直接につゞくを常とす。而してこの場合には常に動作作用の觀念を有するものに限られたるなり。たとへば

ざんぶと音しておぼろの波の蘆の葉わけゆく。

の如し。かくて形容詞、動詞より轉成せる名詞はこの賓格として用ゐらるゝこと多し。又說明存在詞「なり」「たり」の賓格たる場合あることも既にいへるが如し。さてすべてこれら賓格の語は副助詞を伴ひてあらはるゝことあり。たとへば

かゝる際に泰然として動ぜぬは殆彼のみの如し。

月花などの如き時に最も遊覽に佳なり。

聲のみして姿は見えず。

音ばかりして。

ひぐらしの聲ばかりする柴の戶は入日のさすにまかせてぞみる。（金葉、雜上）

種々の遊事などしたり。

ここにあるは梅の花のみなり。

かしこに見ゆるは梅櫻などなり。

但し「たり」に對する賓格にはこの用法を見ず。

說明存在詞「なり」「たり」は往々その原の形たる格助詞「に」「と」と「あり」とを分離してあらはせるものあり。たとへば、

人にありせばきぬきせましを。

あやしう人こそ物いひさがなきものにあれ。

なか／＼に人とあらずは酒壺になりにてしがも。

といへる如きこれなり。さて又かゝる時に、それらの格助詞の下に副助詞、係助詞を添ふることあり。たとへば、

梅の花にだにあらませば、

梅の花にすらあらず。

梅の花になどあらば、

これは梅の花にはあらず。

これは梅の花にもあらず。

時しもわかぬものにぞありける。

逢阪は人だのめなる名にこそあるらし。

いづれの年の雪にかありけむ。

「に」のつきたる下はかく自由なれど「と」のつきたるはしか自由にはあらずと見ゆ。

人とはあらむ。

人ともあるべきものがかゝるわざする事やある。

これらは又間投助詞「し」を伴ふことあり。

頼みなき世にしあるらし。

上の「に」助詞を伴へる賓格の語はそのまゝにて句を重ぬる場合の述格に立つことあり。

桃紅に、柳綠に、春の風ゆるやかに吹く。

といへる、その例なり。これらは更に一歩を進めて、その體言のみにて述格に立たしむることあり。

孔子名は丘。孔子はその尊稱なり。

又これらの賓格の語はそのまゝにて述格の地位を占むることあり。たとへば、

柳は綠。　花は紅。

かたるやうつつ。ありし夜やゆめ。

谷風にとくる氷のひまごとに打ち出づる波や春の初花。

これらは世に省略終止と稱せらるゝものなり。又これらの賓格の語が、終助詞、間投助詞を伴ひて述格に立つことあり。

これこそよべもておはしたりしすずよ。

我こそは新島守よ。

これぞかの宮かし。（蜻蛉日記）

以上の場合はすべて、それらの體言が一旦賓格として立ち、その賓格の語が、更に述格の地位に立ちしものにして直ちに述格に立ちしものにあらざるなり。

名詞が補格に立つときは格助詞を伴ふを普通とす。但し、時としてその助詞を略することあり。

つばな（ヲ）ぬくあさぢがはらのつぼすみれ。

筆（ヲ）とりて字（ヲ）かく。

こち（ヘ）參れ。

かくの如く省略せらるゝは多くは「を」なり。されど、またの如きもあり。補格の語には副助詞、係助詞、間投助詞を添ふることを得るものなるが、上の如く格助詞の省略せられてある時には係助詞を附すること最も多し。

花(ヲ)散らす風の宿り(ヲ)は誰かしる。
茶(ヲ)はのめど、酒(ヲ)はのまず。
詩(ヲ)もつくり、歌(ヲ)もよむ。
夜や暗き。道(ニ)やまどへる。
古今(ニ)もきかず。和漢(ニ)もためしなし。
物思ふわれに聲(ヲ)なきかせそ。
なでふさる事(ヲ)かし侍らむ。
何方(ヘ)かゆかむ。

又まゝ副助詞のつきたる下に於いて格助詞を略することあり。

宰相まで(ニ)なり給ふ。
花のみ(ヲ)見る。
若菜籠に入れて雉子など(ヲ)花につけたり。

名詞が連體格に立つときは通常格助詞「の」「が」のいづれかを伴ふものとす。然るに、關係的意義を示せる名詞に對しては「より」「から」の二助詞を伴ひたるものを以て連體格と同じ位地に立たしめて、それの示せる關係の標準を示すことあり。たとへば、

今日より後。
山より東。
海より南。
鳥居より内。
花より外。
橋より左。
二階より上。
去年から前。
箱根から東。
門から外。
腰から下。
我より外の人。
これより内へ入るべからず。
ここより東の方。
そこから外はわが領にあらず。
五より上はなし。

の如し。これらは純然たる連體格とはいふべからざらむ。しかれども、その形式は連體格と大差なきものなればなほ連體格に準じて取扱ひて差支なきものならむ。

連體格に立てる名詞とそれの對象たる體言との關係につきては說明を加へおくべき點あるによりて次に少しく說くべし。先づ名詞が連體格に立つ場合は通常格助詞「の」にて示さるゝものなるが、かく「の」にて示さるる連體格たる名詞はその原本の體言に對しては從屬の關係に立てるを示すもの最も多し。その例

一、所屬を示すもの(をもてる)

刀の主

二、所有者を示すもの(のもてる)

兄の家　正行の刀

三、作者を示すもの(が作れる)

正宗の刀　光琳の蒔繪

行成の書　貫之の歌

四、材料を示すもの(にての)

雪の山　梓の弓

血の雨　　車の物見
劍の舞　　氷火の責苦
五、所業を示すもの（をする）
花守の翁　　行脚の僧
六、目的を示すもの（の爲の）
法の場　　晴の衣
祈の僧
七、所在を示すもの（に在る）
沖の小島　　葉末の露
賀茂の競馬
八、所屬の部分を示すもの（のある）
白斑の鷹　　帽額の簾
九、資格を示すもの（にてある）
五位の藏人　　頭の中將
兄弟の者
十、名稱を示すもの（といふ）

室の津　　武藏の國
守屋の大臣　青海波の曲
十一、狀態を示すもの(にてある)
朱の玉垣　　香染の衣
閑散の身
十二、形容を示すもの(の如き)
花の都　　夢の世
芙蓉のまなじり
十三、中間にある熟知せられたる言を略して連體格にしたるもの
袋(の中)の鼠
夜(きる衣)の錦
月(の中)の兎
次には前後對等の資格ある語を便宜上連ねいふ爲に用ゐたるあり。これには次の如き例あり。
一、前後同義なる語を連ぬるもの(すなはち)
鎮西八郎の爲朝

うゑ物の植物

二、一物の二面なるを併せてあらはすもの(にして)

われおもしろの人こまらせ。

内おとりの外めでた。

又關係を示す體言に對してのものは實質上よりいへば連體格の語が、意義上の標目となり、文法上の主體なる語即その制限を受くる體言がかへりて、實質上の制限を示すものとなるなり。たとへば、

世の中　　机の前　　家の北

の如し。「が」にて示されたる連體格の語はその意強くきこえて下なる體言を從がへしむる如き感を與ふるものなるが、その用ゐらるゝ範圍は「の」よりは狹し。その例

一、所有者を示すもの

雁が音　　梅が枝

老が身

二、作者を示すもの

金岡が馬　　運慶が二王

三、所在を示すもの
甲斐が嶺　蝦夷が千島
四、名稱を示すもの
淺間が嶽　三保が崎
清見が關
五、狀態を示すもの
千里が濱　葎が宿
淺茅が原
名詞は又稀に修飾格として用ゐらるゝあり。この時は通例助詞「に」「と」にて示され、稀に「の」にて示さるゝことあり。
蜻蛉羽ににほへる衣。
常磐堅磐にさかえませ。
雪とふる。
霜ときえゆく。
苅菰のみだるゝ心。
行く水のかへらぬ旅。

代名詞の用法は大體名詞に準じて知るべし。但名詞にある用法にして代名詞になきものあり。又代名詞としての特別の現象も少しく存す。この故に今それらの點を主として述ぶべし。先づ國語の代名詞の本體は元來は「わ」「な」「か」「こ」「そ」「あ」「た」の如きものなりしが如し。この故にこれらより直ちに「の」「が」「は」などいふ助詞につゞけて、主格連體格に立たしむるを得るなり。その例、

こは如何とあきれたり。

そは實に余が先に見たるものなりき。

わが國　ながな名萬葉集にあり）　そが葉　たが袖

この木　その花　かの山　あの人　どの机

この事は古き用例を見ればよく知らるべし。卽ち

あをなみたまひそ。（延喜式祝詞）

わになたえそね。（萬葉集）

なこそはよのながひと。（古事記歌）

こしよろし。（同）

そをとるとさわくみ民も。（萬葉集）

たにかもよらむ。（同）

の如く此の形にて自由に用ゐられしなり。又これより直に名詞につゞけて熟語をなすこともありき。

あぎ°み(吾君)　わぎ°み(我君)　なせ°(汝兄)

かの場所又は方向の代名詞といふものは、實はこの時期の熟語たるなり。

こ(場所)　こゝ　そこ　かしこ　いづこ　(どこ)
　　　　　　　　　あそこ(「かしこ」「あそこ」は「そこ」に更に「か」「あ」を添へたるものなり)

ち(方向)　こち　そち　あち　いづち　(どち)

代名詞が賓格として用ゐらるゝ場合を見るに、「ごとし」の賓格たる場合には格助詞「の」又は「が」に助けらるゝものなるが、この場合には前項にいへる如く、

「わ」「た」　は　「が」に

「こ」「そ」「か」「あ」「ど」　は　「の」に

つゞくるを常とし、その他の代名詞はそのまゝ接するものなるが、それも

「余」「汝」　は　「が」に

其の他　は　「の」に

接するなり。次に動詞「す」の賓格たる場合に代名詞を用ゐたるを見ず。說明存在詞にては「なり」の賓格として代名詞を用ゐたる例をしる。

余の最も敬愛する友は汝なり。
されど、「たり」に對して賓格たるものは未だ見ざるなり。
代名詞が連體格として用ゐらるゝ場合にも亦格助詞「の」又は「が」を伴ふ。その「の」「が」の所屬の區別は「ごとし」の賓格の場合に異なることなし。而してこの代名詞が連體格たる場合にはその對手たる體言との間の關係を見るに、種々の狀態あること、前に述べたる所なれば、今略す。
代名詞は修飾格として用ゐらるること極めて稀なり。然れども全くなきにあらず。今これらを少しく說くべし。先第三人稱の代名詞の事物を指示するものは時に修飾格として用ゐらるゝことあり。その例
時これ大正十五年十一月三日。
これ〳〵そんな事をしてはならぬ。
それつら〳〵惟みるに。
あれ〳〵大事起れるぞ。
いづれまた御伺ひいたしませう。
これらはみな、そのさす事物は明かならずして、一種の修飾格として用ゐられたるものなり。又「これ」「それ」「あれ」に係助詞「は」を添へたるものを重ねて修飾格の如くに

用ゐることあり。その例

これは、これは大變な人出である。

それは、それは有難き仰にてありき。

又「こ」「そ」「あ」より直ちに係助詞「は」につゞけて修飾格とすることあり。

こは何事するぞ。

くは(「こは」の轉ぜしもの)この御文みせたてまつりたまへ。

すは(「そは」の轉ぜしもの)見給へ。

あはちはやふる神にとへ君。

又「そ」に係助詞「も」を添へたるものを以て修飾格としても用ゐることあり。

そもこの本は……

そも〳〵何とおもひてたゞ今死なんとするに、この經袋をばさゝげつるぞといへば……　(宇拾十)

かく代名詞が修飾格として用ゐらるゝ時は多くは句の修飾格として、或は感動をあらはし、或は、意志をあらはすものと考へらる。この故に往々これらは感動詞などゝいはるゝことあれど、その本性はなほ代名詞にして用法上、句の修飾格に立てりといふべきものなり。

數詞の用法も亦大體名詞に準じて知るべきものなるが、これにも名詞にある用法にして數詞になきあり。又數詞としての特別の現象も少しく存するを以てそれらの點を主として述ぶべし。

數詞が、賓格に立つことは多からずといへども又なきにあらず。「ごとし」の賓格に立つときは「の」助詞の助けをかるものなるが「す」の賓格に立つことはなきものと思はる。說明存在詞に對して賓格たることはあるなり。數詞は又補格に立つことをうるものなるが、それには特別の事情なき故に今略す。

數詞が、連體格たる時は下が名詞なる時は格助詞「の」にて示さる。

五の指。　第一の人。

然るに下が數詞なるときは「の」を伴ふ場合と「が」を伴ふ場合とあり。

三の一　三つが一つ。

數詞は稀に修飾格として用ゐらるゝことあり。たとへば勅諭の

一　軍人は忠節を盡すを本分とすべし。

一　軍人は禮儀を正しくすべし。

といふ場合の「一」の如く、又賞勳局官制に

第一條　賞勳局ハ內閣ニ隸シ左ノ事務ヲ掌ル

一　勳位勳章及年金ニ關スル事項
二　記章褒章其他賞件ニ關スル事項
三　外國ノ勳章記章ノ領受及佩用ニ關スル事項

の「一、二、三」の如きは皆修飾格に立てるものにして、その一句一文を順序立たしめむが爲に副へられたるものなり。

一般に數詞特有の用法として他の體言と同列に說くを得ざる點あり。この事は第九章にも說ける所なるが、なほ繰り返していはむに、數詞がある名詞に對してその數量を示さむとする場合を觀察するに、その名詞の直上に冠せられて合成語をなすこととたとへば、

ナポレオン一世は身を陸軍の一將校より起せり。

といふ如き方法あり。次に連體格として名詞の上に冠せしめて、

一合の小豆を播けば一升の小豆をうべし。

といふ如き方法あり。又その名詞を連體格に立たしめ、その數詞をば下におくことあり。

かゝる時に友の四五人もくれば嬉しからむ。

年の四年をまてどきまさず。

次にはその數詞をばその名詞の下に單におきてそれの數量を指示するものあり。

その例

賣家五軒ありて、此を買はんとする人五人あり。

かくて、かくの如き場合にその名詞に附屬する助詞ある時には二樣の狀態を呈す。

その一はその助詞をば數詞の下につくるものにして、

一間には檜一本を畫き、一間には鶴二十五羽を畫けり。

他の一はその助詞は直ちに名詞に附屬し、その下に數詞をおくなり。

我が鄕人は五人行きぬ。

鼠を三匹殺したり。

第四十章　用言の用法

用言はそれが有する觀念の如何によりて或は賓格の語を伴ふべく、或は補格を伴ふべきことは既に述べたり。かくて又賓格を伴へるものが更にその意義の必要よりして補格を伴ふこともある由も既にいへり。かくの如く賓格は用言と相待ちて用を完くし、補格は用言の附屬物として、それらの加はるによりて用言の意義を完くするものなれば、意義上及び用法上、用言の部分と見なすべきものなり。

これらにつきては上に述べたれば、今改めて說くことをせず。

用言はその語尾の變化によりて種々の用法をなしうるものなるが、その固有の語尾のみにて十分に意義と用法とを發揮し得ざる場合あり。その時には更にその下に複語尾を分出せしむることある由は既に述べし所なり。而して、その複語尾を分出し得べき用言は動詞及び存在詞なることも既にいへり。この複語尾の分出すべき語尾には一定の法則あり。即ち第一、未然形よりする複語尾、第二、連用形よりする複語尾、第三、終止形(存在詞にては連體形)よりする複語尾の三類あることは既にいへり。而してその三類と、それら複語尾のあらはす意義及び性質上の分類とは、各一定の條理ありて系統正しく並行せるなり。即ち未然形より分出するものは屬性の運用を助くる複語尾全體(「る」「らる」「す」「さす」「しむ」)と非現實性の陳述をあらはす複語尾全體(打消の「ず」「ざり」「じ」豫想の「む」「まし」)とにして、連用形より分出するものは希望をあらはす「たし」と陳述の確めの「つ」「ぬ」「たり」過去を回想する「けり」「き」「けむ」なり。さて終止形(存在詞にては連體形)よりする複語尾は現實の事を推量するもの全體(「めり」「らむ」「らし」「べし」「まじ」)これなり。

用言の本幹の語尾と複語尾との連絡の大體は既に述べたれば、今は之を說くをやめ、こゝには二三注意すべき點を說くべし。先づ動作存在詞より複語尾の分出

することは現今には殆ど見ざる所なるが、古くは行はれたり。

いくたびにかはきゝさだめ給へらむ　（宇、菊の宴）

宮などをばむつびあそび給へるめり。　（宇、樓上、上）

誰みよと花さけるらむ。　（古今、哀）

少々の人はえたてるまじき殿の内かな。　（源、行幸）

舟子かぢとりは船歌うたひて何とも思へらず。　（土佐日記）

いといかめしき事多くしたまへりつるかな。　（宇、藏開、上）

この三人になむたまへりし。　（宇、吹上、上）

いにしへはおごれりしかど、わびぬればとねりがきぬは今もきつべし。　（拾、雜上）

初瀬にまうづるごとにやどりける人の家にひさしくやどらで、ほどへて後にいたれりければ　（古、春、上）

八幡といふ所にいたれりけるに。

我國の神の守りやそへりけむ。　（蜻蛉、下）

上の袙たゞ二つたまへりたり。　（紫、日記）

かくして、この動作存在詞より屬性の運用を助くる複語尾の分出することはなし

と考へらる。又この屬性の運用を助くる複語尾は形容存在詞よりも說明存在詞よりも分出することなしとも考へらる。而して以上の如き事實はこれ偶然の事實にあらずして、それらの特種の存在詞は、さる屬性の運用を助くる複語尾即ち作用の間接性發現をあらはすべきが如き必要なきが爲に基づくものと考へらる。されど存在の意をあらはす存在詞よりは分出するなり。その例

あればあらるゝ世なりけり。

人はいはじ、鳥も聲せぬ山路にもあればあらるゝ身にこそありけれ。（風雅、雜中）

されどめぐりにおきて中に火をあらせたるはよし。（枕、十二）

あらせばやとおもふ人のみうせはてゝあらざれかしとおもふ人のみ。（拾玉、四）

彼をして今日に在らしめば……

「しむ」といふ複語尾の分出する場合について少しく論ずべきことあり。先年文部省の世に示したる「文法上許容すべき事」といふ條目中の第七に次の如きことを記載せり。

「得しむ」トイフベキ場合ニ「得せしむ」ト用ヰルモ妨ナシ

例

最優等者にのみ褒賞を得せしむ。

上下貴賤の別なく各其地位に安んずることを得せしむべし。

今この項につきて論ぜむに、先づこれを以てすべて、一音の活用形より「しむ」に附する時は「せしむ」とすべきことを承認するものとして說けるものを見たり。されど本項の字面より見てさる事を發見せず。本項の文章は絕待にして類推を許せる餘地なし。次に從來はたとへば「著せしむ」「似せしむ」「見せしむ」の如き例をあげて之を文法上の誤謬となし、必ず「著しむ」「似しむ」「見しむ」とすべきなりといへり。今若しこの「著」「似」「見」を上一段活用のものと見るときはこは勿論誤謬なるべしといへども、「著せしむ」「似せしむ」「見せしむ」といふ形を主として考ふる時は決して破格にも誤謬にもあらざるなり。何となれば、「著る」「似る」「見る」は上一段活用の語なれども、「著す」「似す」「見す」といふ下二段活用の語も亦別に存すればなり。この故にこれら下二段活用の語の未然形より「しむ」につゞけたる「著せしむ」「似せしむ」「見せしむ」は何等の不都合もなきことなり。之を他の同時に下二段に活用せぬ「ひる」「射る」「居る」と同一に說きたるは大なる誤なりとす。次に「著す」「似す」「見す」の用例をあぐべし。

九月八日伊勢が家の菊にわたをきせにつかはしたりければ

大方はわが濡衣をきせずとも朽にし袖の名やはかくるる。（後撰集、秋下）

よと共に我がぬれ衣となる物はわぶる涙のきするなりけり。（源氏、夕霧）

（後撰、雜三）

同じくはきせよなあまのぬれ衣。（狹衣、三）

鶯の老いたるこゑにてかれ似せむとおぼしく打そへたることそにくれけれど又をかし。（枕草子、九）

いとようまねびにせ給ひて。（源氏、浮舟）

おん心のうちをみせ奉りたらば、ましていかに恨みきこえ給はん。（源氏、少女）

鶴のすむ松がさきには並べたる千代の例をみするなりけり。（拾遺、神樂）

かくの如くなれば「きせしむ」「似せしむ」「見せしむ」はもとより破格にも誤謬にもあらぬものなること明らかなり。されば、かの第七項は之を一段活用の語に及ぼせるものにあらずして、たゞ「得」といふア行下二段活用の動詞にのみ行はるゝものと

いふべし。さてその「得せしむ」の例の吾人に最も古く見ゆるものは次の如し。

我今夜孝養ノ爲ニ思企ツルヲ心ニ不違ヘ令爲得給ヘト祈念シテ居リタルヲ露知ル人無シ。

(今昔廿五、平維茂郎等被殺語第四)

さてこれにつきては「えす」といふ下二段活用の動詞存せぬを以て上の「著せしむ」の類と同一視するを得ざるものなり。されど、慣用久しきに至れるものなれば、之を認むることは不當とはいひ難し。然りとせば、これを文法上如何に說くべきかといふに、その「え」の連用形が「せしむ」といふ動詞と慣用上熟合せりといふを得べきものにして單に「えしむ」の中間に「せ」を加へたりといふが如きものにあらず。しかれども、これ慣用上の事にして一般の法則にあらざるは論ずるまでもなきなり。

推量をあらはす複語尾「めり」「らむ」「べし」「らし」「まじ」の上一段活用の動詞より分出する場合には、本來その終止形よりすべき筈なるが、往々連用形よりすることあり。これらは(「まじ」を除く)古代にありては連用形より分出したる例少からねば絕待的に誤りとはいひ難きことなれど、今はなほ誤用なりといふことになれり。又回想をあらはす「き」が三段活用の語より分出する時にその活用形「き」と「し」「しか」との間に所屬の用言の語尾に差違あることは既にいひたれば今說かず。

ある用言より一の複語尾を分出せしめてもなほその用を十分にあらはしえぬ

ときはその下に更に他の複語尾を分出せしめ、かくして第三、第四等順次に複語尾を重ねて用ゐること少からず。今かゝる場合を概括的に總論せむとす。先づかく複語尾の多數連なる場合を通じて見るに、すべての複語尾が、かく多くの複語尾を分出せしむるものにあらずして、おのづから差別あるなり。即ちその性質と形とよりして下に複語尾を分出し得べからぬものあり、又下に複語尾を分出し得べきものあり。それらの差別はその複語尾の性質とその形とよりして見れば截然たる區別ありとす。先づ複語尾の性質によりての現象を見れば屬性の運用を助くる複語尾と統覺の運用を助くる複語尾との間には截然たる區別ありて兩者相侵すべからざる狀態を呈せり。但しこれには存在詞の意の今なほ存する「ざり」は之を除きて別に論ぜざるべからず。

一、屬性の運用を助くる複語尾の內部にありてはその二種即ち狀態性の「る」「らる」と發動性の「す」「さす」「しむ」との間には相互に或は上となり或は下となりて互に他を分出せしむることとあるなり。而してかゝる場合には下なる方は多くは敬語となれり。その例

まづ戀しう思ひいでられさせ給ふに、

殿下は故らに微笑を含ませられ輕くうなづかせられたり。

この兒才あり。いかにも師を擇びて學はしめらるべし。
法皇忠盛をして射しめらる。
御笛たびてふかせられける。
二、屬性の運用を助くる複語尾は統覺の運用を助くる複語尾をそれより分出せしむることあり。然れども統覺の運用を助くる複語尾より屬性の運用を助くる複語尾の分出することは決してなし。この事はこれら二者の性質上より見れば、當然の現象なりとす。
三、統覺の運用を助くる複語尾はすべて、屬性の運用を助くる複語尾より分出しうるものなり。然れども、それらの反對の現象は決してなし。
以上の法則は儼然として侵すべからざる複語尾運用の根本原則なりとす。
次に複語尾の形によりての現象を見れば、動詞と同じ形卽ち下二段活用、奈行變格活用をなすもの、一類と存在詞と同じ形卽ち良行變格活用をなすもの、一類と、形容詞の形又は特別の形を有するもの、一類との三に大別するをうべし。これらの場合にも「ざり」は別として取扱はるべきものなり。
一、下二段活用をなす複語尾は屬性の運用を助くるる

らる
す
さす
しむ
の全體と陳述の確めをなす
つ
とにして奈行變格活用をなすものは同じく陳述の確めを爲す
ぬ
なり。この一類はすべて下に複語尾を分出しうるものなりとす。

二、良行變格の活用の形をなすものとは
けり
たり
めり
べかり
まじかり
これなり。これらはそれぞれの基とする存在詞の「有り」の力の活動によりての事

なるべきがすべて下に複語尾を分出しうる性質を有す。このうち、現時にありては「けり」「めり」は下に複語尾を分出することなし。然れども、往時にはなほ複語尾を分出せしめし事ありしなり。

梅の花咲きたる苑の青柳は蘰にすべくなりにけらずや。(萬、五)

いとめやすくもてなし給ふめりつるかな。(源、寄生)

尾君その程までなからへたまはなんとの給ふめりき。(源、若菜、上)

「たり」もまた、現時は複語尾を分出せしめねど、古くは下に複語尾を分出せしなり。その例

したりがほにおぼしたりつるもいとにくし。(和泉、記)

とみなる召使のきあひたりつればなむ。(蜻蛉、一)

現今にては「けり」「めり」「たり」共に下に複語尾を分出せしむることなきを普通とす。「べかり」「まじかり」は存在詞「あり」の意と力となほ幾分殘り存する爲か下に複語尾を分出するを常とす。

三、形容詞の形を有する複語尾は

たし

べし

まじ

にして、これらは形容詞と同じく下に複語尾を分出することなし。その他特別の形を有する

ず
む
らむ
けむ
まし
じ
らし

これらも亦下に複語尾を分出することなし。(「ず」にありては古代には分出せしことあれど後世にはなし。)即ちこの類の複語尾のあらはるゝときはこゝに複語尾を重ぬることの終りを告げたるをあらはすものと知るべし。

「ざり」といふ語は「ず」に「あり」の加はりてなれるものなるが、その存在詞の意と力とのなほ明かに活動してあるものと見えて、普通の用言と大差なき活動を複語尾との關係に於いて有す。その特別の用法を次に示すべし。

一、屬性の運用を助くる複語尾「しむ」の上にあることあり。但しこの時は「しむ」に限りてその他のものゝ上には來らず。その例

人をして驚嘆に堪へざらしむ。

二、この「ざり」を受けたる複語尾「べかり」の下に更に「ざり」を加ふることあり。例へば次の如し。

多大なる效果あらしめざるべからざる念愈切なり。

遵はざるべからざらむ。

以上によりて複語尾の承接は「ざり」又は屬性の運用を助くるものにはじまりたる時は多數の連續を起し易く、その内に更に「ざり」を存するものは最も多くの連續をなし、形容詞又は特別の形を有するものに及びて終りを告ぐるものなりといふべし。なほ複語尾の各個につきてその承接の實地を次に說くべし。

複語尾の未然形にしてその下に更に未然形所屬の複語尾を分出しうるものは屬性の運用を助くるもの全部及び「つ」「ぬ」「たり」「ざり」「べかり」「まじかり」なり。而して「ず」「べし」「まじ」の未然形にはこの現象なし。これらの例は今略す。

複語尾「べかり」より「む」にゆけるものは「べからむ」といふ形たるべきものなるが、古代にありて、それが約まりて「べけむ」となれるあり。

まことやきこえむとしつることはあす御くるまたまふべけむ。

(宇、國　讓、下)

人にして鳥にしかざるべけむや。

この「べけむ」は今日は漢文口調の文に多く用ゐらる。これは古代の語法にして、「よからむ」を「よけむ」「をしからむ」を「をしけむ」といふ如く「からむ」といふ形を「けむ」とせること古代に多く用ゐられしなり。「べけむ」もその一の形なるを漢文の訓讀によりて現代まで傳へられたるものなりとす。

複語尾の連用形にして、その下に更に連用形所屬の複語尾を分出せしめうべきものは屬性の運用を助くるもの全部即ち「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」及び「ざり」「たり」等にして形容詞の形を有する「たく」「べく」「まじく」にはこの用法なし。而して古くは「ず」「に」「て」「べかり」「まじかり」などにもかく複語尾を分出せしむる現象あり、又「めり」にも連用形ありて同じく複語尾を分出せしめたることありしなり。今これらを次に類別して說くべし。

一、屬性の運用を助くる複語尾は連用形所屬の複語尾すべてを分出せしめうるなり。その例

戰を挑まれ||。。しかば遂に干戈を交へき。

遂に男爵を授けられたり。
速に轉地療養あらむことを勸められけり。
頼朝義經をして義仲をうたせたり。
己が意匠を示して之によりて茶入を燒かしめき。
郊外の秋の色も思ひやられてうれし。
數年の後までも絶えず、新しき記憶を我にひき起さしめぬ。
さるほどに綱方やみて卒去せられぬ。
いかに口惜しくおもはれけむ。
いかに思ひてかゝる事をせさせけむ。
下部をしてとりに行かしめつ。
何とかしてこの榮譽を受けさせたし。
二、「ざり」「たり」より分出するは「き」「けり」「けむ」なり。
余は余の選擇の誤まらざりしを信ず。
數日の間一人だにも遇はざりけり。
予は羅馬の廢墟に坐して夕暮の景色を眺めたりき。
なかばかくしたりけむもかうはあらざりけむかし。

萬の蟲どもをかたらひて入れたりけるなり。

三、「ず」よりは古く「けり」「て」を分出せしめたり。その例

なほしかずけり。

いかで月見ずてはあらむ。

この「ずて」が約まりて「で」となれるものあり。

いなみもやらで說き出しぬ。

四、「て」よりは古く「き」「けり」「けむ」を分出せしめたり。その例

參議百川謀をめぐらして定め申してき。

御ぐしおろし給ひてけれぱ。

手すさみに火桶のおきやわりてけむ。

五、「に」よりは古く「て」「たり」「き」「けり」「けむ」を分出せしめたり。その例

人みては笑ひにてうつくし。（宇、藏開、下）

荒れにたる宿のならひとて漏る月かげぞ隈もなき。

雨のいたくふりしかばまゐらずなりにき。（大和語）

この枝かの枝散りにけり。

知りにけむ、きゝてもいとへ、世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる。

六、「べかり」「まじかり」よりも古くは「き」「けり」を分出せしめたり。その例

やがて一日にききうかべたまふべかりき。（古今雜下）

おとにぞ人をきくべかりける。

まゐるまじかりしをせちにのたまひしかば。

七、「めり」が古く連用形として用ゐられ、從つて、複語尾「き」「つ」を分出せしめしことあり。その例は上にいへり。

尼君その程までながらへたまはなむとの給ふめりき。（源若菜上）

されどわれよりさきにとこそ思ひ侍るめりつれ。（枕、十）

複語尾の終止形にして終止形所屬の複語尾を分出しうるものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」「ぬ」なり。而して、それらの複語尾より分出するものは終止形所屬の複語尾すべてなりとす。その例

熱心に業務を勵まるべし。

その人は慰めらるべければなり。

たとひかくなしたりとも叱らるまじ。

小兒の毒草を摘むをみば早くすてさすべし。

實業をして盛ならしむべし。
學生をして放縱ならしむべからず。
學生をして決して放縱ならしむまじき事なり。
なほこそものせらるめれ。
おそろしとこそおぼさるらめ。
みだりに人をとこそきこえさすめれ。
人にきかすまじと侍ることを。
吉野山みねの櫻やさきぬらむ。
夜もふけぬめりやとそゝのかし給ふ。
今の世の有樣昔になぞらへて知りぬべし。
猿澤の池の玉藻は見つべかりけり。
思ひつつぬればや人の見えつらむ。
天つ風こそふきてきつらし。

複語尾の連體形は口語にありては種々の複語尾を分出しうること、文語の終止形におなじ。されど文語の複語尾にありては連體形より複語尾を分出しうるものは存在詞「あり」の複合より成れるもの以外に存せず。しかもそれとても、現代文

に用ゐらるるは「ざり」のみなりとす。「ざり」の連體形は、存在詞と同じくその連體形「ざる」よりして複語尾「べし」「べかり」を伴ふものとす。その例

あひみつることよひのあはれ夢なれやさめては物をおもはざるべく。（風雅、戀二）

古代にありてはなほ他の複語尾をも分出せり。その例

素より佛國の敵にあらざるべきなり。

前途有望なりといはざるべからず。

などか思ひにかわかざるらむ。（宇、くら開上）

などなき人のかへらざるらむ。（重之集）

しほみつうらはこほらざるらし。（六帖、三）

すべていをこそねられざりけれ。（古、戀三）

けさはしもおきけむ方もしらざりつ。

古代にありてはなほ「たり」「べかり」の連體形もかく複語尾を分出せしめたり。「たり」の例

さなりたるべし。（蜻蛉日記）

昔だに人まどはし給ひし御こといかになりたるらむ。（宇、沖つ白波）

いきたるまじき心地するは。　（蜻蛉日記）

「べかり」の例

海にのみひぢたる松の深緑いくしほとかはしるべかるらむ。　（拾、雜上）

なほこの類の承接に於いては往々音の省略あり。先づ「めり」の分出せる場合には、その本の複語尾の「ル」音を省きたるものゝ例のみを見る。

あらざめり。　（竹取）

ことにかなしとも思ひたらざめるをや。　（宇、國讓、上）

さしぬきなどふみちらしてゐためり。　（枕、二）

こともなき心づかひして詣できためる。　（宇、初秋）

人々のぞくべかめり。　（源、帚木）

なさけなさけしくのたまひつくすべかめれど。　（源、帚木）

かくて「まじかり」といふ複語尾も亦「めり」を分出せしむるものなるを見る。而してその時にもその本の複語尾を省きたるもののみを見る。その例

ただいまのことわがくらゐはえあるまじかめり。　（宇、國讓、上）

さしも思ひよるまじかめり。　（源、橋姫）

ここに「けらし」といふ形あり。その例

ひとりのみにもあらざりけらし。　（伊　勢　語）

しのびて心かはせる人ぞありけらし。　（源、帚　木）

今朝ぞ初霜おきにけらしな。　（能　宣　集）

これらは「けらし」といふ一の複語尾にあらずして「けり」より「らし」を分出せしめたるものにして正格にいはば「けるらし」たるべきを上の「る」を省きたるものなりとす。かかる例は他にも少からず。次に旁例をあぐ。

秋の夜は露こそことにさむからし。　（古、秋　上）

流れくるたきのいとこそよわからし。　（拾、雑　上）

こひしねとするわざならし。　（古、戀　一）

雁なきて寒き朝の露ならし。　（後、秋　下）

これらいづれも「カルラシ」「ナルラシ」とあるべきを「カラシ」「ナラシ」とせるなればケルラシ」を「ケラシ」とせるは例外にあらずとするべし。

複語尾より更に複語尾を分出せしむることの存すること、及びその一般的通性は上に述べたる所なるが、こゝにその通性に基づきて複語尾の多数連續する場合に如何なる現象を呈するかの概觀をあげむ。これにつきては既にいひたる如く

複語尾を下に分出しうるものは

一　屬性の運用を助くる複語尾

る　らる　す　さす　しむ

二　ざり

三　陳述の確めをあらはす複語尾

つ　ぬ

四　良行變格活用の形をなす複語尾

めり　けり　たり　べかり　まじかり

にしてこれらよりは屢々多數の複語尾の連續狀態を引き起すことあり。而して

その二個連續の例は既にあげたる所にして、その二個連續の場合に下に

五　形容詞の活用に似たる形の複語尾

たし　べし　まじ

六　特別の形を有する複語尾

ず

む　らむ　まし

き　けむ

まじ　らし

が來る時はそれにて終りを告ぐることは既にいひたる所なり。されば、三個以上の連續を引き起すべき基礎となる二個連續の形は上の一乃至四の種類のうちに於いて重ねられたるものに存すべきは明かなりとす。次に四個連續を引き起すべき基礎となる三個連續の形を見るに次の八種ありとす。

一、（行か／受け）＝（せ／させ／しめ）＝られ＝ざる

二、（行か／受け）＝（せ／させ／しめ）＝られ＝たり

三、（行か／受け）＝（せ／させ／しめ）＝らる＝べから

四、（行か／受け）＝（れ／られ／せ／させ／しめ）＝ざら＝しむ

五、(行か／受け)＝{れ／られ／せ／させ／しめ}＝ざる＝べから

六、(行か／受け)＝{る／らる／す／さす／しむ}＝べから＝ざる

七、(行か)＝ざら＝しめ＝たり

八、(行か)＝ざる＝べから＝ざる

かくてこの種の三個連續のものを見るに、一、二、三、四、五、六は第一の複語尾が屬性の運用を助くるものにして、七、八は第一の複語尾が「ざり」なりと見ゆ。されば、この二種の複語尾よりはじまるものにあらざるときは四個連續を起すことなしといふをうべきなり。次にその第二の複語尾を見るに、一、二、三はすべて「らる」にして、七は「しむ」四、五は「ざる」六、八は「べから」なり。これによりて見れば、ここには屬性の運用を助くるものの外には「ざる」と「べかり」といづれも「有り」の含有せられたるものに限

られたるを見る。而してその第三の複語尾を見るに、

しむ　四、
ざり　一、六、八、
たり　二、七、
べから　三、五、

の四種に限られたり。今これを統括すれば

第一
　{る、らる / す、さす / しむ}（一、二、三）（四、五、六）
　ざり（七、八）

第二
　{らる / しむ}（一、二、三）（七）
　ざる（四、五）
　べから（六、八）

第三
　しむ四
　ざり（一、六、八）
　べから（三、五）
　たり（二、七）

の如くにして、屬性の運用を助くるもの丶外は「ざり」「べかり」「たり」の如くいづれも良行變格の活用を有するもの連續することを見る。しかも第三が「しむ」「ざり」「べから」「たり」の四種に限られたるを見るなり。次に五個連續を引き起すべき基礎と

なる四個連續の形を見るに次の四種ありとす。

一、（行か／受け）＝｛せ／さ／し め｝＝らる＝べから＝ざる

二、（行か／受け）＝｛れ／られ／せ／させ／しめ｝＝ざら＝しめ＝たり

三、（行か／受け）＝｛れ／られ／せ／させ／しめ｝＝ざる＝べから＝ざる

四、（行か）＝ざる＝べから＝ざら＝しむ

かくてこの種の四個連續のものを見るに、一、二、三は第一の複語尾が屬性の運用を助くるものにして、四は第一の複語尾が「ざる」なり。而してこれを統括すれば

第一　　第二　－　第三　　第四

（る、らる／す、さす、しむ）（一、二、三）　らる（一）　しむ（二）　しむ（四）

ざり（四）　ざり（二、三）　ざり（四）　ざり（一、三）

べから（四）　べから（一、三）

たり（二）

こゝにも属性の運用を助くる複語尾と「ざる」「べかり」「たり」とのみが現るゝを見、しかもその第四の複語尾が「しむ」「ざり」「たり」の三種に止まるを見る。次に六個連續を起すべき基礎となる五個連續の形を見るに、次の三種ありとす。

一、（行か／受け）＝（せ／させ／しめ）＝らる＝べから＝ざら＝しむ

二、（行か／受け）＝（れ／られ／せ／させ）＝ざる＝べから＝ざら＝しむ

三、（行か）＝ざる＝べから＝ざら＝しめ＝たり

今これらの間にあらはれたる複語尾を概括すれば次の如し。

第一	第二	第三	第四	第五
る、らる(二)	らる(一)			
す、さす(一、二)				
しむ(一)			しむ(三)	しむ(一、二)
ざり(三)	ざり(二)	ざり(三)	ざり(一、二)	
	べかり(三)	べかり(一、二)		
				たり(三)

こゝにも屬性の複語尾「しむ」と「ざり」「べかり」「たり」との活動を見るが、第四第五には「しめ」「ざり」「たり」の三個の活動するのみなるを見る。かくて七個連續を起すべき基礎となる六個連續の形を見るに次の二種を見る。

一、(行か／受け)＝{せ／させ}＝らる＝べから＝ざら＝しめ＝たり

二、(行か／受け)＝{れ／られ／せ／させ}＝ざる＝べから＝ざら＝しめ＝たり

而してこれはその下に「き」「けり」の分出するによりて七個連續を完成するものな

り。而してこの二形に通じて見ゆるものは第三の複語尾以下がいづれも

　　べから＝ざら＝しめ＝たり

にして、この四種の複語尾は、かの四個連續の基礎たる三個の連續よりして、常に專らその要素となり來れるものなりとす。これによりて判斷する時は、複語尾の四個以上の連續はこれら四個の複語尾の交互の承接より生ずる現象なりといふをうべきなり。而してその「しめ」「ざり」「べかり」の三種の屢々くりかへさるゝことは恐らくはこれ漢文讀み下しの文より導かれたるものならむと見ゆるなり。

これより各活用形の用法につきていふべし。但し、複語尾の活用形は本幹たる用言の活用形に比すれば用法限られてあれば、これらは後に別に說くこととし、先づ、本幹たる用言の活用形につきて說くべし。

用言の終止形は述格に立ちて終止するを本體とす。これらは今改めて例をあぐるに及ばざるべし。

動詞存在詞の終止形は又接續助詞「と」「とも」を伴ひて述格をなしつゝ下の語句に接續することあり。これらも亦改めて例をあぐるに及ばざるべし。

用言の未然形は接續助詞「ば」を伴ひて述格をなしつゝ、下の語句に接續することあり。これらも亦改めて例をあぐるに及ばざるべし。

形容詞の未然形は又接續助詞「と」「とも」を伴ひて述格をなしつゝ下の語句に接續することあり。これらも亦改めて例をあぐるに及ばざるべし。

用言の連用形は陳述をなしつゝしかも完くそれを終らず中止する意味を以て句の終をなすことあり。この用法は形容詞に多きものにして、

御機嫌よく。

おめでたう。

どうぞ宜しく。

などの如く日常の口語に多きものなるが、文章にても

ゆゆしき身に侍ればかくて坐しますもいまいましう辱く。（源、桐壺）

のどかに思ひ侍りけるを今なむ口惜しく。（源、桐壺）

佛のかよひ給はむよりもたふとく。（宇、俊蔭）

又複語尾を有する用言にもあらはる。

これ必ず御かへりごととらしめて」とのたまひて。（宇、藤原君）

唯この姫君のてんつかれたまふまじく」とよろづにおぼしてのたまふ。（源、螢）

の如く用ゐらるゝが、多く用ゐらるゝは發句及び川柳なり。その例

春雨や花まつ人の心しり。（貞室）

春雨やこたつの外へ足をだし。（來山）

鶯のなけば何やらなつかしう。（鬼貫）

松茸やしらぬ木の葉のへばりつき。（芭蕉）

初花の世とや嫁のいかめしく。（杜國）

うき草や流れては又さきかはり。（千代女）

山吹やこぼれし泥に上かはき。（北枝）

大雪やとなりの翁ききあはせ。（浪化）

以上は俳諧の句なるが、川柳にては

怠らずはげめつかはぬ桶は漏り。

番町でめあきめくらに道をきき。

など例甚だ多し。從來中止といひしは重文の上句の場合をさせり。されど、それらは中止にあらずして重ぬるものなり。中止といふ以上はこの場合の如きものをさすにあらずばあらず。而してかくの如き例の古よりあることは上にあげたるを見て知るべし。

用言の連用形は述格をなしつゝ下の句に、その句を重ぬる用をなす。その例

冬は寒く、夏はあつし。

本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。

用言の連用形は目的準體言として用ゐらるることあり。この事は既にいひたるところなるが、この場合にその用言は補格を伴ひてあらはるること多し。その例

花を見に行く。

魚を釣りに出かく。

衣服をぬひにやる。

用言の連用形はその用言を下なる用言と連ねて相合して一語の如くするに用ゐらるゝことあり。而して、かく用ゐらるることは頗る廣きものなれば、これにつきて先づ、一般論をなさむとす。先づ、今これらを總稱して假に連用言と名づく。さてこの連用言には下なる用言と同等の資格にて合同する意のものあり。下なる用言に從屬して之が修飾格に立つものあり。甲を假りに同格連用といひ、乙を假りに修飾連用といふ。この同格連用と修飾連用との區別は意義上よりみて重要なるものなるに、從來これを混同して一にし、甚しきは形容詞の修飾連用のものを以て副詞と稱して一の語類と見、なほ同格連用のものゝ存するを忘れて、これを

の別の存するを見る。先づ、並立の組織をとれるものは、

松青く砂白し。

月さやけく風冷かなり。

の如きものにして、上にいへる語句を重ぬる場合のものなるが、其は個々の語に用法上一々の格を有する場合なれば、今ここに問題とする所にあらず。次に合同の組織をなせるものとは次の如きをいふなり。たとへば

望月のかげ淸くさやけし。

け高く潔き丈夫の魂。

あしげの馬の太く逞しきに乘る。

といへる場合を見よ。その「淸く」は「さやけし」と對等の關係を有して共に「望月のかげ」に對せる性質を示すものなり。「け高く」も又「潔き」と對等の關係を有して共に「丈夫の魂」に對せる性質を示すものなり。又「太く」も「逞しき」と對等の關係を有して共に「あしげの馬」に對せる性質を示すものなり。これらいづれも、この二の用言にて

示されたる意義の混一したるものにてそれら「月かげ」「魂」「馬」を同時に說明せむが爲に二の用言を重ね用ゐる爲に、上なる語が連用言として重ねられたるものなり。卽ちこれらの二の用言は對等の資格を以て相重ねて一の用言の如くに用ゐらるるによりて、これを同格連用とはいふなり。この同格連用をなす上なる用言は連用形を以て重ねられたるものなれば、考へ方によりてはたゞ重ねたるものとも思はれ、從つて並立の組織によれりとも見らるべき疑あり。然れども一度文法上の位地卽ちその位格といふことを考へ來るときはこの區別は判然たるべし。卽ち並列組織のものはその連用形が、各一の位格を有しつつ重ねらるゝなり。合同組織のものはそれら相合して一の位格をなすのみなり。卽ち一の位格內にありての要素としての見地よりするものと見るときにこれを同格連用といひて、多くの位格の並列する場合との差別を明かにしうべきなり。この故に同格連用を事實に卽して適切にいへば、連用形を重ねつゝ、その用言は下なる用言と意義上相對等の關係を有し、しかも相合して一の位格を構成するものなりといふべし。卽ち上の例にていはゞ、

清くさやけし

は同等の資格を以て合同して以て一の述格をなせるなり。又

は同等の資格を以て合同して以て一の連體格をなせるものなり。次に

　　け高く貴き
　　太く逞しき

は同等の資格を以て合同して以て一の準體言をなし、而して、ここに一の補格に立てるものたるものなり。實にこの場合の如き合同組織と並列組織との區別は漠然と意義のみ考ふる場合には甚だ不明瞭なるものにして文法上の問題として、その位格の一なりや多なりやを考へずば、決して的確なる區別をなしうるものにあらざるなり。

以上にあげたる同格連用の例は形容詞にての例なるが、かゝる形は動詞にも存在詞にも存す。その例、次の如し。

　　馬にて走り過ぐ。
　　父母は飢ゑ寒からむ。
　　風はいよ〳〵吹きすさぶ。
　　偉績燦然としてひかりかがやけり。
　　京にありわびて田舍に下りけり。

これらは述格たるものに於ける同格連用の例なり。

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ。
いでいる人の尊び敬はぬはなし。

これらは連體格たるものに於ける同格連用の例なり。

山林をいたはりそだつるは農作に劣らぬ事業なり。
豪傑たり哲人たるを望まむはもとより不可なし。

これらは準體言たるものに於ける同格連用の例なり。

同格連用には又動詞の上に形容詞を重ねたるあり。たとへば、

櫻の花うるはしくさけり。
水淸く流る。
壁を白く塗る。

の如きものこれなり。これらの場合の形容詞は共にその主格又は補格たる「櫻の花」「水」「壁」に對して說明をなせるものにして、その文を分解して、

櫻の花うるはし。　櫻の花さけり。
水淸し。　水流る。
壁白し。　壁を塗る。

の如くすることを得るものなり。而してこれを陳述する時にあたり、この二の意義

を以て同時に說明せむとするが爲に、かく連用形にて連ねたるものなりとす。卽ちこれ亦對等の資格を以て合同して一の位格をなせるものなれば同格連用なること明かなり。然るに世には往々かくの如きものにつきて誤解するものあれば次に少しく論ずべし。

抑々從來の飜譯的文法學者はかくの如きもの、卽ち形容詞が動詞に重なりて同格連用をなす場合のものを以てすべて副詞なりとしたり。近來に至りては所謂副詞ならぬ性質あることを唱ふる人あるに及びたれど、なほその性質を明かにせるもの少きが如し。實にこの「うるはしく」「淸く」「白く」は下なる動詞の「さけり」「流る」「塗る」に對してそが屬性的觀念を修飾することなくして、上なる體言の屬性を示せることは明かなり。若し「さけり」「流る」「塗る」の修飾ならば「早く」「遲く」「うまく」などの如き詞こそふさはしからめ。こゝに於いてこれらを區別せむが爲に、一は形容詞的にして一は副詞的なるものとせる論あり。今先づこれらの論者に問ふべきは何が故に形容詞的副詞的の區別をもち來りて國語に强ひむとするか。先に吾人が論ぜし如く吾人の形容詞は決してかれの形容詞と一ならず。たゞ僅に內容たる觀念の類似あるに止まるのみ。その職能に至りては決してかれの形容詞の企て及ぶべからざる自由を有せるものなり。又或る論者は「烈しく」「速く」の

如きは元來副詞なるものなりなどいふなり。これ亦西洋文典に惑溺せる言のみ。西洋文典の副詞はわが「烈しく」「速く」の如く、其の本性としての職能が述語となり、體言の修飾となりうるが如き自由あるものなりや。これ亦觀念の類似によりて臆斷したるものゝみ。而してこの論者の說に從へば吾人の形容詞は當然形容詞と副詞との二種に分たれざるべからず。然らば、これを分つ文法上の法則は如何。而して又それら論者の副詞なるものは吾人の所謂副詞もこれら論者の形容詞より分ちたる所謂副詞とを合せたるものならざるべからず。然らば、その活用ある副詞と活用なき副詞とを統合して副詞と稱する原理ありや如何。吾人の見地よりすれば、これらは唯空の論議にして學術上何の價値もなきものなりとす。次に又用法上、寧ろ用ゐられたる意義によりて形容詞とも副詞ともなるものとせるあり。たとへば、

帽子を輕く造る。

といへば「輕く」は「造る」の修飾ならずして「帽子」の修飾なれば、形容詞にして、

帽子を輕く打つ。

の「輕く」は「打」つの修飾なれば副詞なりといふなり。然らばこの形容詞副詞の別は何によりて生ずるかといふに、唯その用ゐる意義によりて、寧ろ思ひなしによりて

分るといふより外に說明の方法あるまじきなり。吾人は亦この說につきても前と同じき駁撃を加へうべし。かく副詞と形容詞と時によりてたゞの思ひなしにより何等學術上の制約なしに區別せらるゝが如きは果して認容せらるべき事なりや。而してこれを何の理由によりて語類の異なるものに分ち屬せしむべきかといふことは終に說明せられざるなり。なほ又この論者の形容詞副詞の區別は單語分類上の區別たる如くに見えてしからず、たゞ用法上の區別たるなり。果して然らば性質上の區別としていふ形容詞副詞の意義と用法上の區別としていふ形容詞副詞の意義とは同じきか異なるか、これらの論者一もこれに答ふること能はざるなり。抑も上の如き說をなせる人々はその胸中にたゞ西洋文典の形容詞、副詞といふことのみ往來せるのみにして之に麻醉し、國語の上には何等正當の認識を有せざるものゝ如し。今こゝに吾人の見地を述べむ。吾人も亦事實まことに上の論者の如き意義上の差の存在せることを知れり。先二三の例をあげむ。

所謂形容詞的のもの	所謂副詞的のもの
風涼しく吹く。	風烈しく吹く。
水清く流る。	水速く流る。
帽子を輕く造る。	帽子を輕く打つ。

意義上よりいへば、この區別の存することはまことに論者のいへる如し。しかれども文法は單に意義の穿鑿に止まる學問にあらず。今吾人が之を解せむに、この上なる形容詞と下なる動詞との間に如何なる關係を保てるかを見るに、語の形式上勿論下なる動詞が主たるには相違なけれども、二者の關係には差等あるを見る。卽ち所謂形容詞的のものは上なる「風」「水」「帽子」に對してその形容詞も亦說明をなせる性質を有するなり。かくて下なる動詞と合同して一體となりて、こゝに一の述格をなせり。しかも、その形容詞は動詞の從屬物にあらずして對等的の關係を有して合同せるものなり。これ卽ち一致組織によれるものたるなり。次にその所謂副詞的のものは主として下なる動詞の意義を修飾せるものなるが故に、それに從屬せる關係にあるものといふべし。而してこれらはたゞ用法上の現象に止まるものにして語の本性上の區別にあらねば、形容詞副詞の名を以て區別するは斷じて許すべからず。次に又形容詞的、副詞的といふが如きも不可なり。何となれば、この現象は上の例どもにありては形容詞にあらはれたるものなれば、いづれも形容詞的といふべきものにあらずや。若し强ひてかく區別せむとせば「西洋文典に所謂」といふ語を冠していはざるべからず。しかも、これ實に語の用法の現象にして、その區別の生ずる原理は一致合同の組織によると主從の組織によるとの

區別に基づくこと明かなり。こゝに於いて同格連用と修飾連用との命名を以てこれを區別する必要存するを見るべし。

すべて同格連用をなす用言はそれが形式用言なるとき實格を伴ふべきはいふまでもなきことなるが、又補格を伴ひつゝ同格連用に立つものも少からざるなり。

その例

酒狂人は人に笑はれ人にそしられ人に疎んぜらる。

財に富み學に長けたれば。

恩に報い德に報ゆるは人の道なり。

師を尊び學を好み書を讀むものは賢者といふべし。

さて又これらの同格連用の語もその下なる用言との間に接續格の語を加へてその結合の意を强くあらはすことあり。たとへば、

不義にして富み且つ貴きは我に於いて浮雲の如し。

天巧の妙費に感ずべく又驚くべし。

の如し。

同格連用のあらはるゝ場合は用言の種類によりて差あり。形容詞の連用言にはこの同格連用なるは少けれど、動詞にての連用言は多くはこの同格連用にして、

存在詞にての連用言は全くこの同格連用のみなりとす。

用言の連用形が連用言として用ゐられ、而して意義上、下なる用言に從屬して、それが修飾限定をなすに用ゐられたるときはこれを修飾連用といふこと既にいへる所なり。この修飾連用はかの語句複合の方式の一たる主從複合の方式に基づく連用言なるなり。次にその例をあげむ。

彼性率直甚しく輕薄の風を罵れり。

春風輕く衣袂を吹いて征路長閑なり。

卽「甚しく」は下の「輕薄の風を罵れる」ことの「甚しき」をいひ、「輕く」は「衣袂を吹く」ことの「輕き」をいひ、すべてそれらに對して修飾限定をなす地位に立てり。而これらは、主語に對して、直接に陳述をなせるものにあらず。たとへば、これらの例にては、

彼性率直甚し。　春風輕し。

の意にて用ゐられてあるものにあらず。さればこれらの連用形は下なる用言の修飾限定をなす爲に從屬的に連ね用ゐられたるものなり。この故に同格連用とは性質を異にするものなるを見る。しかれども、その下なる用言と相合して一の位格をなす點は相同じ。たゞその異なる點は其が一の位格として取扱はるゝ場合の組織內に於ける各用言の間の關係にあり。卽ち同格連用にありては對等の

關係を以て合同し、一致して一の位格をなすに對し、修飾連用にありては下なる用言が主となりて一の位格に立ち、上なる連用言は從屬の位地に立ちそれに附屬するを以て異なりとす。

修飾連用をなすものは形容詞に多くあらはるゝものなるが、その場合は主として、下に動詞ある場合なること上の例の如し。然れども、又形容詞に對しての修飾連用なる場合もなきにあらず。たとへば、

この山は著しく高し。

といふ如き場合にはその「著しく」は高きことの程合を示したるものと考ふるが普通にして「山」を「著し」といへりと見るが如きは寧ろ强辯にすぎざるべし。この故にこの「著しく」は修飾連用と見るべきものなりとす。又

今日の氣候は甚しく寒し。

といふ場合の「甚しく」は明かに修飾連用なりとす。

修飾連用は存在詞には之を見ずといへども、動詞には往々あらはる。從來形容詞の連用形のこの修飾連用の者を副詞又は副詞的なりといへる論者少からざりしが、それらの論者は動詞にもかく用ゐられたるものを忘れたりしが如し。もとより動詞にての例は形容詞の如く多からずといへども、全くこれを無視するが如

きは不當なりといふべし。たとへば、

衣服をいそぎかふ。

木の葉あらそひ落つ。

書をくりかへし讀む。

鐘をつゞけうつ。

の如し。これらの「いぞき」「あらそひ」「くりかへし」「つゞけ」は上の「衣服」「木の葉」「書」「鐘」に直接の關係なき語にして「いぞき」は「衣服をかふる」ことを「急ぐ」なり。「あらそひ」も「木の葉の落つる」樣の頻りなるを「あらそひ」と見立てたるなり。又「くりかへし」は「書を讀む」ことの有樣をいへるにて「つゞけ」は「鐘を打つ」ことの有樣をいへるものなり。即ちこれらはいづれも下なる動詞の意義を修飾限定せるものにしてその文法上の關係は下なる動詞に從屬せること明かなり。而して下なる用言とそれとの合したるものが一の位格を有し、しかもその連用言はその內部に於ては下なる主たる用言の附屬物たるものなりとす。これを上の形容詞が修飾連用をなせるものに比するに、文法上の關係に於いては異なる點の存するを見ざるなり。今なほこれらの例の吾人のことさらに造りたるものにあらぬを證せむ爲に次に古來の例をあぐべし。

かくまでたどりありきたまふもをかしう。（源、夕顔）

くりかへし思ひつゞけて歎くかな何と迷ひをしづのをだまき。（新續古今集）

くりかへしわが身のとがを求むれば君もなきよにめぐるなりけり。（新古今集）

跡したふ涙の袖のくれなゐにあらそひおつる峯のもみぢば。（新千載集）

夏衣いぞきかへつるかひもなく立ちかさねたる春の面影。（新後拾遺集）

動詞にての修飾連用の語につきてなほいふべきことあり。それは

かきくもる。　さしうつぶく。

うちかたらふ。　たちわかる。

あひなる。　とりみだす。

等の如き用ゐ方の「かき」「さし」「うち」「たち」「あひ」「とり」の如き語なり。これらは本來四段活用の動詞の連用形なることは明かなるが、そがかく用ゐらるゝに至れるはこれ實に修飾連用に立てるが爲なり。今日にてはその語の上に殆ど何等の意味

なきが如く思はるれど、そのもとを考ふれば

牛と熊とあひあらそふ。

といふが如く、明かに意義ありしものなり。これらを接頭辭なりといふ人あれど然らずして明かに修飾連用をなせる用言なりとす。たゞかくなれるはその用例の人の耳に慣熟せるが爲なり。しかも如何に慣熟せりとはいへ、用言の連用形たることは明かなれば、修飾連用をなせるものとし、たゞ慣用上殆ど意義なくなれりと解釋するを穩かなりとす。

以上の修飾連用の例はその主なる用言が、述格に立てるもの丶みをあげたるが、それらは主たる用言が如何なる位格に立てる場合にても重ね連ねらる丶ことは論ずるまでもあらざるべし。

用言の連用形は又修飾格に立つことあり。これは修飾連用と根柢に於いて一なるものにして、意義と性質とに於いては殆ど同じものなれど、文法上の取扱ひに於いてそれ自身が一の位格として取扱はる丶と、一の位格の内部の從屬成分として取扱はる丶との區別に基づきて二者の別を立つべきなり。而してこの修飾格のことは既に述べたれば今は述べず。

同一の動詞又は存在詞を重ね用ゐる爲に上なるものを連用形にしてその間に

格助詞「に」「と」を加ふることあり。これはその意義を強むる場合に用ゐらるゝ法なるが、それの文法上の取扱は修飾格たるものとす。次に先づその例をあげて說くべし。

格助詞「に」を中介としたるものは動詞にのみ見る現象にして次の如し。

露ばかり袖だにぬれず、神無月紅葉は雨とふりにふれども。（新勅撰集）

あひにあふ君を月日とあふぐにも夜晝わかず世を祈るかな。（新續古今集）

臺盤所の胸をきりにきりて病ませ給ひしかば。（宇治拾遺、一）

夕立はきりにきるとも梓弓いにいてさへはくれずもあるかな。（堀河次郎百首、夕立俊頼）

いれにいれよ。（落窪、一）

櫻花ふりにふるとも見る人の衣ぬるべき雪ならなくに。（貫之集）

大軍もみにもんで進む。

よりによつてわるいものを買つたものだ。

待ちにまつた。

これらはその作用の一向に行はれ又は頻々なる意を示すものにして、意義上よりいへば、其の意義を强むるものにして、形の上よりいへば、同じ語を重ねたるものたるはいふまでもなきことなれど、その說明が、これのみに止まらば、この語遣の本質を明かにせりとはいふを得ざるなり。これは外見上疊語に似たれども、中間に格助詞の存するを以て、その格助詞の上なる部分が、用法上一の語として取扱はれ、隨つて何等かの位格を有すべき筈なり。かくて考ふれば、これ實に修飾格たるものなりとす。卽ちその連用形に格助詞「に」を添へたる「ふりに」「あひに」「きりに」(鑽)「きりに」(霧)「いに」(沃)「いれに」「ふりに」「もみに」「よりに」「待ちに」は下なる同樣の動詞の意を强めむが爲の修飾格たるなり。この連用形が修飾格として用ゐられたることを知らむとせば、その連用形の上に程度の副詞又は接頭辭を添へたるものにつきて見れば明かに認めらるべし。

御前ともたゞおりにおりてたてる車をたゞのけにのけさせて。(枕、九)

ただひえにひえいりて。(源、夕顏)

あさましく淚のただいできにいでくれば。(源、若菜下)

たゞいひにいひはなてば。(源、夕霧)

すのことよりたゞきにくれば。　（源、蜻蛉）
夜はたゞあけにあく。　（源、浮舟）
足手などたゞすくみにすくみて　（蜻蛉、上）
守にはくはしくも見えしられぬものなりけり。たゞいきに守のわたりける
前にいきて。　（源、東屋）
越前守たゞはらだちにはらだちて。　（落窪、四）
たゞわななきにわななきたまふ。　（源、野分）
あまた花のもとにたゞよりによりて引たふしとりて。（枕、七）
雨ふりてかみもおどろおどろしうなりたれば、物もおほえず、たゞおそろしにお
ろすしきの御ざうしは蔀をぞかうしに參りわたしまどひしほどに。
（枕、五）
たゞくれにくれてふけける夜なれば。　（源、總角）
三の君の方にたゞめしにめしいづ。　（落窪、一）
たゞせめにせめ申てうらみきこえて。　（枕、七）
面白き萩すゝきなどを植て見るほどに長びつもたるもの鋤など引さげてた
だほりにほりていぬるこそわびしうねたかりけれ。　（枕、五）

ひし〳〵とたゞくひにくふおとのしければ。（宇拾、一）
雨はいやまさりにまされば。（落窪、一）
思はいやまさりにまさる。（伊勢、語）
いやしげりにしげる。
ひた泣きになく。
ひた走りに走る。
どしやぶりにふる。

などいふ時に極めて明かなるべし。試みに上の數例の上に、こゝにあげたる「たゞ」「いや」「ひた」などを添へて見よ。余が說く所直ちにさとらるべし。卽ちこれらはその修飾格の意を一層强く明かにして示さむが爲にそへられたるに止まり、本來の位格の上に變動を與ふるものにあらざるなり。而してこの例には主たる下の動詞は述格にも連體格にも準體言にも用ゐらるゝを見る。卽ち用言として自由に用ゐらるゝを見るなり。

「と」助詞を仲介とするものは動詞、存在詞にわたりて行はるゝものにして、その例次の如し。

來ときては川の堀江の水を淺み舟も我身もなづむ今日かな。

山の端に入りと入りぬる月なれば。（土佐日記）

いかばかり戀てふ山のふかければ、いりといりぬる人まどふらん。（清正集）

なぞもかくみと見し人はきえにしにかひなき身しもなほとまるらん。（六帖、四）

山ふかみ入りてみとみる物はみなあはれもよほすけしきなるかな。（萬代、雜五、增基）

秋風のふきとふきぬるむさし野はなべて草葉の色かはりけり。（山家、下）

萩の葉に吹きとふきぬる秋風の涙さそはぬ夕暮ぞなき。（古、戀、五）

かたちこそ人にすぐれね何となくしとする事もをかしかりけり。（新勅撰、四）

春の內はきとこむ人を花にまかせて。（讃岐集）

ありとある人皆感じあへり。

世にありとある人は。（枕、一）
ありとあらゆるもの。
心にいりしさかりには世にありとありこゝにつたはりたる譜といふもの〻かぎりをあまねく見合せて。（源、若菜、下）
しりとしりたる人は。（蜻蛉、中）
いきといきてたちかへらむも心ぐるしなど。（源、蜻蛉）
時雨にしぬれとぬれぬることのはゝ。（伊勢集）
同じ名を立ちと立ちなば唐衣きてこそなれめうらぶるゝまで。（六帖、五）
知りと知りたる人法師にいたるまで、若君の御よろこびきこえにとおこせいふを。（蜻蛉、中）

これらの例は事物にてはその一切にわたる意をあらはし、作用にては一向なる意をあらはすものなるが、これらも亦「と」といふ格助詞に助けられたる以上は、その連用形は一の位格として取扱はれたること明かなるが、上の「に」にての場合に照して考ふれば修飾格たることは明かなりとす。而してこの「と」にて重ねたる場合のものは下の用言が連體格たる場合に多し。

さてかく同じ用言を重ねて修飾格とするものは時として、その格助詞の下に副助詞、係助詞或は間投助詞「し」などを加ふることあり。「に」の下に他の助詞を伴へる例、次の如し。

たゞなきにのみなきまさる。（狹衣、下）

見せばやなをしまの海人の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず。（千載、戀四）

君が行きけながくなりぬ山たづねむかへか行かむ、まちにかまたむ。（萬、二）

老はみのからきものなり、けふはしもぬれにもぬれむ菊の下露。（躬恒集）

たゞよわりになんよわらせ給ふめりし。（源、總角）

「と」の下に他の助詞の伴へる例次の如し。

こりともこりぬ、かゝることひせじ。（後、戀六）

いづれをかしるしとおもはん、みわの山ありとしあるは松にざりける。（拾、雜戀）

生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。（古今集、序）

秋風にあひとしあへば花薄いづれともなくほにぞいでける。

ありとしある人皆浮雲の思ひをなせり。

（後撰、秋下）

用言の連體形は連體格として用ゐらるゝを主とし、又準體言たることを示すにも用ゐらる。これらの事は上に述べたれば例をあげず。

用言が述格に立つときに、上に「ぞ」「なむ」「や」「か」といふ係助詞ある場合に連體形はそれに對應したる終止として用ゐらる。その例

御供に童子一人ぞ候ふありし。

こゝをなむ蘆の灘とはいひける。

なく鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき。

かれこれ得たる所えぬ所たがひになむある。

かの翁の面にある瘤をや取るべき。

春やとき。花やおそき。

今年はいくつにかなれる。

花なき里にすみやならへる。

又かゝる係助詞なき場合にも述格に立てる用言が往々連體形をとりて終止する

ことあり。たとへば、

萩のはにこと〻ふ人もなきものをくる秋ごとにそよとこたふる。（詞花、秋）

あかざりし袖の中にやいりにけむわがたましひのなきこゝちする。（古今、雜下）

あひにあひて物おもふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる。（古今、戀五）

かくの如きは餘情を含ませて終止したるものなり。而してこの現象は口語には存せず。

用言の連體形は又述格をなしつゝ、接續助詞「が」「に」「を」に接して、下の語句に接續することあり。この事は既にいひたれば例をあげず。

用言が述格に立つとき、その上に「こそ」といふ係助詞ある場合に、已然形はそれに對應したる終止として用ゐらる。その例、

今夜の月こそいと面白けれ。

涙のみこそ下に流るれ。

形こそみ山がくれの朽木なれ。

この用法は口語にては方言に存するのみなり。

用言の已然形は又述格をなしつゝ、接續助詞「ば」「ど」「ども」に接して、下の語句に接續することあり。この事は既にいひたれば、例をあげず。

用言の命令形は或は命令をなし、認容し、許諾し、放任する等の意を以て終止し以て述格に立つものなり。これは形容詞、及びそれに似たる形の複語尾又特別の形を有する複語尾には存せぬ活用形にして、動詞、存在詞及びその形を有する複語尾に存するものとす。この命令形の實地に用ゐらるゝにあたりては四段活用、變格活用にありてはそのまゝ用ゐらるれども、一段活用、二段活用、三段活用にありてはその命令形に「よ」をそへてはじめて實地の用をなすに至るものなること既に述べたるところなり。それらのことは既に述べたれば、今くりかへさず。たゞ形容存在詞、動作存在詞、說明存在詞の命令形は現代文に多くは用ゐぬところなれば次にそれらの用例をあぐべし。

形容存在詞の命令形を用ゐたる例

はや木高かれ。

過ちては改むるに憚ることなかれ。

天の下のどけかれとや榊葉を三笠の山にさしはじめけむ。

いりあひのかねの聲だにのどけかれ。（千載、神祇）
あしかれとおもうたまへねばこそ。（宇、國讓中）
久しかれあだにちるなとさくらばなかめにさせれどうつろひにけり。（後、春二）
動作存在詞の命令形を用ゐたる例、
これらとりおかせ給へれ。（宇、藏開下）
わが君御ふところにいだかせ給へれ。（同、中）
くだもの一餌袋しておいたまへれ。（落窪、一）
暫入りてふしたまへれ。（落窪、一）
事しげし、しばしはたてれ。（後、雜一）
說明存在詞の命令形を用ゐたる例、
いつよりもこよひの月はさやかなれ。（仲文集）
君は君たらずとも臣は必ず臣たれ。
命令形を有する用言は又これを用ゐて禁制の意をあらはして述格をなすことをうべし。この場合にはその述格の形は次の三樣のうちをとりてあらはるゝな

り。

一は打消の意味ある用言の命令形にてあらはす。その例、

人の惡をいふことなかれ。

人々これを誤ることなかれ。

二は禁制の意をあらはす助詞「な」を終止としてあらはす。

冬寒くとも火鉢にあたるな、寒しといふな。

めゝしきことのたまふな。

三は「なそ」の格にてあらはす。

門をなひらかれ給ひそ。

うたておそろしきまでなきこえさせ給ひそ。（源、浮舟）

きり〴〵すいたくななきそ。（古今）

この禁制の語法をなしうべきものは必ず命令形を有する語に限られたるなり。これは一見奇なる如くなれど、これ當然寧ろ必然の現象といふべきものなり。何となれば、禁制は一種の命令にして、その消極的のものなればなり。

形容詞の語幹は直ちに述格の如くに用ゐることあり、又助詞「の」を添へて連體格に立たしむることあり。これらの場合にはいづれも感動の意をあらはす。その

直ちに述格に立たしめたる例、

あゝいた。

おゝあつ。

あなおもしろ。

あなさやけ。

の如し。これは古今にわたりて存するところなり。次に形容詞の語幹は格助詞「の」を添へて連體格に立たしむることあり。その例、

面白の春雨や。

心幼なのわざや。

口をしの花のちぎりや。

あな恐しの物語や。

これらの用例は奈良朝にはなく平安朝に最盛んに用ゐられしものなり。これは現代の口語には用ゐられずといへども、文語ことに感動體の文にありては、頗有力なる形なれば、十分に注意をなすを要す。こゝにはたゞ連體格の方面よりしてあげたれど、この全體は實に感動體の文たるなり。

複語尾は概して活用形不完全なるものなるが、終止形、連體形、已然形は殆どすべ

てに通じて存するものなれば、先づこの三形につきてその用法をあぐべし。

複語尾の終止形は「ざり」「べかり」「まじかり」の外はいづれも終止して述格をなし得るものなり。又「る」「らる」「す」「さす」「しむ」及び「ず」「つ」「ぬ」「たり」は述格をなしつゝ接續助詞「と」「とも」に接して、下の語句につゞくることを得るものなり。その例、

人に誹らるとも意に介するに足らじ。

たとひこの規則かへらるとも影響なかるべし。

つかさを得さすとも、兄にはまさらむ。（落　窪、四）

あなたにはものせらるともこなたにはなわたりたまひそかし。（宇、樓　上　下）

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。（古、春　下）

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花。

徒に身はなしつとも玉の枝をたをらで更にかへらざらまし。（竹　取）

嵐のみふくる宿に花薄ほにいでたりと、かひやなからむ。（蜻　蛉、上）

複語尾の連體形は連體格として用ゐらるゝを普通とす。然れども「らし」にはこの用法なし。

複語尾の連體形は、準體言として用ゐらるゝことあり。それらの例、

むことらるゝもいとはしたなき心ちすべし。　（落窪、一）

かくらうたげなる子をかくいだしてありかする誰ならむ。　（宇、俊蔭）

その幅狹く大船を出入せしむるに足らず。

見わたすかぎりなつかしからぬはなし。

やほよろづの神もみゝふりたてぬはあらじとみえきこゆ。　（紫式部日記）

人物の出でざる蓋し怪むに足らざるなり。

まして誠なりとみはべらむぞかたはらいたうはべらむときこゆれど。　（和泉式部日記）

家にありける梅の花のちりけるをよめる。　（古、春上、詞書）

のどかに物語してかへりぬるいとよし。　（枕、一）

あやし、このありつるは誰ならむ。　（宇、初秋）

うちあてたるはいみじうきようありとうちわらひたるもいとはえはえし。(枕、一)
なかばかくしたりけむもえかうはあらざりけむかし。(枕、五)
以てその注意深きを見るべきにあらずや。
やがてこのすみかに朽ちぬべきより外のゆくへもなくなむ。(宇、俊蔭)
人しれぬ人まちがほに見ゆめるはたがたのめなることよひなるらむ。(拾、雜、戀)
かならずもるまじきはいとかたしや。(源、帚木)
而して「じ」「まじ」「らし」にはこの用法を見ず。
複語尾の連體形は又「ぞ」「なむ」「や」「か」といふ係助詞が上にあるとき、用言が、述格としてそれに對應する場合の終止の形として用ゐらるゝことあり。これは例をあぐるまでもあらざるべし。
複語尾の連體形は又、述格をなせる用言が、接續助詞「が」「に」「を」に接して、下の語句につゞくる場合に用ゐらるゝことあり。かゝる場合にも「らし」は用ゐらるゝことなし。

複語尾の已然形はその用言が述格をなすとき、上に係助詞「こそ」のあるとき、これに對應する終止として用ゐらるゝことは本幹たる用言の活用形におなじ。その例は今あげず。

複語尾の已然形は、又述格をなしつゝ接續助詞「ば」「ど」「ども」に接して、下の語句につゞくることあり。然れども複語尾「じ」「らし」にはこの用法を有せず。又「む」「けむ」「らむ」は接續助詞「ど」「ども」に接するのみにして「ば」に接することなし。その外のものはいづれも「は」「ど」「ども」に接しうるものなり。次に「む」「けむ」「らむ」の例をあぐ。

花の木にあらざらめどもさきにけり、ふりにしこの實なるときもがな。　（古今、物名）

まだかしこまではゆきつかざらめど心ゆくやうにおぼゆ。　（枕、九）

春のごと花のさかりはありなめど、あひみむことは命なりけり。　（古、春下）

かへしは上手なればよかりけめど、えきかねばかゝず。（大和、語）

家の内出でそめけむほどはさこそはおぼえけめど、かくしもてゆくにおのづからおもなれぬべし。　（枕、九）

色もおなじ昔に咲くらめど、年ふる人ぞあらたまりける。　(古、春上)

みづからはいみじとおもふらめど、いと口をし。

みそかにいふと思ひていふらめども。　(枕、二)

複語尾にして未然形を有するものは屬性の運用を助くるもの全體、卽ち「る」「らる」「す」「さす」「しむ」及び「つ」「ぬ」「たり」「たし」「べし」「まじ」「べかり」「まじかり」なり。而してこれらのうち、「べかり」「まじかり」の外は接續助詞「ば」に接して遡格をなしつゝ下の語句につゞくる用をなしうるなり。その例、

あたひとはれば千五百貫といらへよ。　(宇、たゞこそ)

とどむればあり、かへさせばなさけなし。　(宇、あて宮)

彼をして選手たらしめば必かたむ。

今日こずば明日は雪とぞふりなまし、きえずはありとも花とみましや。　(古、春上)

さかざらば櫻を人のをらましや、櫻のあたは櫻なりけり。(後拾、誹諧)

梅が香を袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし。　(古、春上)

かの國の人來なばたけき心つかふ人よもあらじ。（竹取）

草枕紅葉蓆にかへたらば心をくだくものならましを。（後、旅）

とぶ螢雲の上までいぬべくば秋風ふくと雁につげこせ。（伊勢、語）

この人えまぬかれ給ふまじくば巳を殺したまへ。（宇、國讓下）

さりぬべくば明日までものどやかに物がたりきこえむ。（和泉、記）

複語尾にして連用形を有するものは、屬性の運用を助くるもの全體即ち「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」及び打消の「ず」「ざり」陳述の確めの「に」「て」「たり」希望の「たく」推量の「べく」「べかり」「まじく」「まじかり」なりとす。「けり」も古は連用形ありしが、今は用ゐず。

複語尾の連用形中、述格をなして下に重ね又は連用言を構成しうる性質のものと然らぬものとあり。「ざり」「たり」「べかり」「まじかり」はいづれも複語尾を分出するのみにして上にいへるが如き能力なきなり。而してこれらはいづれも「あり」を含めるものとす。この他の複語尾はいづれも述格をなし、又連用言を構成する能力を有するなり。

「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「ず」「て」「たく」「べく」「まじく」はいづれも述格をなし、又連用言を構成する能力を有するものなるが、こゝに先づ、その述格をなす場合を説くべ

し。これらが述格をなす場合には、用言のたゞの連用形の如く、陳述を中止する意を以て句の終りをなすことあり。その例、次の如し。

一文で思のまゝにからがらせ。（川柳）
秋霧や浦の苫やは時雨して。（岱青）
梅遠近南すべく北すべく。（蕪村）

次には述格をなしつゝ、下の語句に重ぬる用をなすなり。その例、

父は京にて滅され、子は遠國に流さる。
天皇召して勅語を下され、皇后また優諚を賜ひぬ。
頼朝は二弟をして平氏を攻めさせ、己は鎌倉に止まれり。
頼朝は二弟をして平氏を攻めしめ、己は鎌倉に止まれり。
忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫に見えず。
月さえて、雁高く飛ぶ。
この本も見せたく、この書も見せたし。
花もさくべく、鳥も鳴くべし。
この事は君も諾すまじく、余も亦君に勸めざるべし。

上にいへる複語尾の連用形はいづれも連用言を構成し得るものなるが、それら

は屬性の運用を助くる複語尾と統覺の運用を助くる複語尾との區別によりて著しき差異を示せり。

上述の複語尾中屬性の運用を助くる複語尾は「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」なるが、これらはいづれも連用言としては同格連用をなすのみにして修飾連用をなすことなく、從つて、これらを以て修飾格を示すことも全然なきなり。これらの點は屬性の運用を助くる複語尾と他の複語尾との性質の差に基づきて生ずる用法上の差の著しくあらはれたる點なりとす。次に用例をあぐ。

尙院參あらんにはまづ重盛が首を刎ねられ候へ。

宸筆を下して賞美せさせ給ふ。

紫に紅に藍に墨に見る見る彩られゆく山影うすくこくあをく黒く消されゆく人影皆これ詩中のものならぬはなし。

この言にては末首肯せしめ難かるべし。

人にそしられ易き地位に立てり。

打たせにくきを念じて打たせぬ。

かゝる場合の形容詞は重に難易をあらはすものなり。これは複語尾に限らず動詞の下に來る形容詞は大抵かくの如き傾向あり。

前々よりいへる統覺の運用を助くる複語尾の運用形は「ず」「て」「たく」「べく」「まじく」なるが、これらは同格運用をなすと共に修飾格をなしうべきものなり。この同格運用をなす點は前項にいへる統覺の運用を助くる複語尾と略似たれども、これらが同格運用をなす時には下に來る語は必ず動詞、存在詞に限るものとす。その例、

その所在すら明かに知れずなり候ひし者もこれあり候。
滿船何となう氣も浮き立ちて見ゆ。
小生も一度は拜見仕りたく存じ候ふ。
いふべくもあらぬ綾織物。
何の恐るべきこともこれあるまじく候ふ。

さて、これらが修飾格たるものを導くことは、その本性が修飾運用に立ちうることに基づくものと見ゆるが、その用ゐられたる實際を見れば、用言全體を以て修飾格をなせりと見るべきものなり。その例、

花ごとにあかずちらしゝ風なれば、いくそばくわがうしとかは思ふ。
（古今、物名）
聲をあげて泣く。

十數里以上の間に恐るべく繁茂したる深林あり。

複語尾にして命令形を有するものは屬性の運用を助くるもの全部即ち「る」「らる」「す」「さす」「しむ」及び「ざり」「たり」「つ」「ぬ」なりとす。これらのうち「ざり」「たり」「ぬ」はその命令形のまゝにて命令の用をなし、その他はいづれも下二段活用の形をなすものなるが、これらは皆助詞「よ」を添へてはじめてその用を完うするものにして、いづれも、命令、許容等の意をあらはして述格に立つなり。その例

早く行きね。

惡しき事はせざれ。

置いたれ〳〵、種とらむ。

しばらく靜まられよ。

すてさせよ。

余をして暫しその次第を語らしめよ。

君わたりなばかぢかくしてよ。

命令形を有する複語尾(「ぬ」を除く外の)には、又禁制の意ある助詞「な」を添へて禁制の意をあらはすことあり。その例、

文七にふまるな庭のかたつむり。

さらばなたのまれそ。（枕、七）
物思ふ我に聲なきかせそ。（古、夏）
少將の命婦などにもきかすな。（源、夕顏）
足ふましむな。（萬、十四）
ふかざるなゆめ。（萬、一）
あさりつなゐのこ。（紀、十六）
わがおとゞの君ものなおもほしてそ。（宇、藤原の君）

第四十一章　副詞の用法

副詞は修飾格に立つを本來の用法とす。その例は既にあげたれば今略す。
副詞は又時としては連體格として用ゐらるゝことゐり。これも既に例をあげたれば略す。
情態の副詞は又「なり」の賓格として用ゐらるることあり。
程度の副詞は用言の屬性を限定し、又は情態の副詞の屬性を限定する爲に、それらに對して修飾格として用ゐらるることあり。又特別の場合に體言の直上にありてこれを限定することあり。その例、

唯半日の路ぞかし。

その所より稍東の方によりて見ゆるは筑波山なり。

接續の副詞は修飾格としては文の頭にありて、上にある他の文の意を承けて、下文を起す用をなすものなるが、又接續格として用ゐらるゝことあり。その例は既にいへり。

第四十二章　句論の序說

句論は文を構成する法則を論ずる文法學の一部門にして、語を材料として行ふ所の思想發表その事を研究するを主眼とす。句論も語を以て研究の材料とするものなればもとより語論と共通する點あるものなるが、その研究の主眼點は異なり。語論はその語を思想發表の材料としてそれの性質用法を研究するものにして、句論はそれらを材料として使用し以て構成する思想發表その事を研究するにあり。

句論の研究にあたり、第一に明かにしておくべきはこの句論と他の類似の學科との區域なり。これにつきて特に注意すべきは修辭學及び論理學との限界なり。抑も句論は語論と相待つ文法學の二大部門の一なり。然るに從來文章論と稱せ

られたる爲に往々修辭學と混同せられ、現に文法學の書と稱して修辭上の說明を加ふるもの少からざるなり。この故にこの區別を明かに知る要あり。先づ修辭學は文を研究の對象とする點に於いて句論と似たる點あり。而して修辭學者の敎ふる所によれば、修辭學は人間の思想感情を言語もて有效に表白する方法の研究なり。而して文法學は人間の思想感情を言語にてあらはす方法の研究なり。この二の學問は人間の思想感情を言語にて表白する方法の硏究たる點に於いては同じといひても可なるほど接近せり。されど、修辭學は如何にせば效あるか、又如何にせば美をなすかの目的を有する學術にして、その目的は有效といふことにありてその理想の實現如何によりて有效無效を決するなり。文法學の目的はただ事實を記述し、その現象を說明するに止まる。修辭學はかくせば最も效ありといふ。文法學は吾人はかゝるさまにいふと述ぶるに止まるなり。修辭學の目的は理想に則りて巧拙を論ずるなり。文法學の目的は事實の記述と說明とにあり。修辭學は學問としては美學を基礎とする一種の規範學たり。文法學はこれに對していへば一の說明學たるなり。又その對象につきて眼を轉ずれば、修辭學は思想を第一の對象としてそれと言語との關係につきて論ず。文法學は言語を第一の對象としてそれが思想に基づきあらはるゝ所以の方法を論ず。この故にその

對象同一なるが如くに見えて實は主客の差ありてその主眼點おのづから異なり。文法學の議論は修辭學の根據たるべし。しかも修辭學に何等の干渉をもなすべきにあらず。文法學はたゞその言語の發表の現象の記述說明をなすに止まり、その巧拙を論ずることなく、その論議の範圍も亦言語上の現象に止まり、思想上の可否、有效無效は問ふ所にあらざるなり。修辭學は文法學の論ずる現象の上に基礎を立ててしかも一歩進みたる目的を有す。しかれどもこれが爲を以て文法學の代用たること能はざるなり。文法學は思想感情の言語にあらはれたるものを解剖分析して其の成分を檢し、再びこの成分を材料として思想感情を發表する狀態を研究すべし。それらの現象の記述と說明とだに立たばその巧拙良否は敢へて文法學の關する所にあらざるなり。約言すれば文法學は言語が思想感情に應じて用ゐらるゝ現象を研究し、修辭學は言語を如何に思想感情に適切に應ぜしめて有效に使用すべきかを研究す。この故に文法學は言語が思想感情の發表として用ゐらるゝ現象のすべてを記述してそれらを說明すれば足れり。その以上は文法學の關係すべき所にあらず。かくの如く文法學と修辭學とは目的と範圍とを異にす。從つて句論は修辭學の外に特立するものたるは明かなりとす。

又句の構成は大體に於いて論理學の命題に一致するを以て、やゝもすれば論理

學を以て句の說明を下し、以て能事了れりとする如き傾向あり。如何にも文法學ことにその句論は思想に著眼する點に於いて論理學に接近す。然れどもこれと混同すべきにあらず。この故に今この別を述べむ。

論理學がその判定又は推論の言語にあらはるゝ形式を論ずる點は句論に論ずる所と頗る似たる點あるを以て往々混同せられ易きなり。然れども論理學はもと人間の思想の運用の方法を研究する學問にして、その思想の作用の研究に關係する點に於いては句論は著しくそれに接近すといへども、論理學の直接の對象とする所は言語にあらずして、思想にあり、文法學の直接の對象とする所は思想にあらずして言語にあり。この故にその直接の對象とする所を異にするを見る。加之文法學の關する思想はたゞに論理作用のみに止まらず、感情にもあれ、欲求にもあれ、想像にもあれ、すべて言語にあらはされたるものは皆文法學の對象となりうべし。その對象の輕重及びその範圍の廣狹かくの如く異なり。然るに、更に根本に溯れば、それらの學問の性質及び目的に於いて大差あるなり。論理學は正當に思惟すべき法則につきて研究する學問にして直接に思想其の者を對象としてその運用を研究す。而してその目的は規準を示すにありて所謂正不正を決する規範學たるなり。文法學は言語その者を直接の對象としてその運用を研究するも

のにして思想はその附隨問題として時に論究するに止まり、それが目的は思想的規準を示すにあらで言語上の事實を記述し說明するにあり。今若し言語を第二とし、思想を主として論ずるものあらば、吾人はそれを目して文法學の外に逸したるものといふに躊躇せざるなり。この故に、論理學と文法學とはその學問としての性質の上に於いて大差あり、又その目的を異にし、その對象を異にすれば混同すべきにあらざるなり。然れども言語はもと思想に基づきてあらはるゝものなれば、思想を無視して言語の事は論じうべきにあらず。特にこの句論にありては言語その者を直接の對象としつゝも常に間接に思想に着眼して、それらの言語が如何に思想感情の發表を擔任するかを記述し說明するを任とす。これ論理學と句論と觸接する點を有する所以なり。然れども上に述ぶる如くその目的と範圍とに於いて各異なる所あればもとより混同すべきにあらざるなり。

以上述ぶる如くなれば、文法學に接近せる修辭論理の二學とこの句論との範圍區域は互に相侵すべからざるものあるなり。句論は決して越權のものにあらず、これと同時に又越權の事あるべからざるなり。然るに世には往々句論を以て修辭學又は論理學の領域に侵入せるものとしてこれを否定せむとするものあり。又句論を以て修辭學の一分科の如く心得、一種の要求的態度を以て規準的に立論

するものあり。これらいづれも自己の領域を忘れたるものなり。句論に入らむとする前に於いて最もこの點に注意せざるべからず。こゝに吾人は句論の範圍を明確にしおくべき必要を感ず。然らば句論の範圍は如何。曰はく、

句論の範圍は言語によりてあらはさるゝ思想發表の形式を記述し說明するに止まる。

他の學科と句論との限界は上の如し。然るに文法學上の二大部門卽ち語論と句論との限界も亦明かにしおかずば往々誤を生じ易きを以て次に之を論ぜむ。從來の研究は句論は文章論と稱せらるゝこと多くして、その聲言には文章構成の法則を研究すと稱せられてありながら、吾人が旣に述べし、かの語の用法の研究の如きを擧げて文章論に委したり。然れども吾人の述べし如き語の用法の研究は旣にいへる如く、語と語との間に存する關係にして、その關係は各種の語の性質に基づきて起る現象たるなり。而してたとひその研究は總合的なりとはいへ、いづこまでも語その者の研究たるを失はざるなり。然れどもかくいひたるのみにては意を盡せりといふべからねば、こゝに於いて語論の研究と句論の研究との區別の根本問題を論ぜざるべからず。語論は語を研究の直接の對象とす。その語とは吾人の思想發表の素材たるなり。語論の内部に於いて吾人は性質論と用法論

とを區別して說けり。然れどもその性質論も用法論も語卽ち思想發表の素材としての研究にしていづれもその第一對象とするものは語なり。句論も亦語を研究の對象とするには相違なけれど、これを材料個々として見るものにあらずしてそれらの材料によりて構成せらるゝ文又は句を以て直接の對象とするなり。卽ち句論にありては語はたゞ材料として取扱はるゝのみにして研究の直接の對象にあらず。語は實に句論に於いては研究の主體にあらずして第二位の對象たるなり。句論に於いて主とする對象は實に言語によりてあらはされたる思想發表の形式にあり、句論に於いては上に述ぶる如く思想發表の方法として語を如何に取扱ふかといふことにも論及することあれど、個々の語の性質及び、それらの語相互の關係を以て直接の對象とするにあらず。かくの如くなれば同じく語を研究の對象とするものなれど、語論と句論とはそれに對する態度に著しき差あるなり。

以上は語に對する態度の差を主として述べたるに止まる。今なほ之を思想の方面より少しく委しくいはむ。語論に於いて論ずる單語なるものは之に對當する思想を顧みれば、思想を放散的にして分解したる觀念の要素を個々にあらはすものと見ざるべからず。たとひ、之が位格等を論ずる場合に於いてもなほその觀念の要素を一個一個として觀察せることは疑ふべからず。然るに一旦句論の主

題として即ち文を組立つるものとして見れば、この個々の觀念要素は直ちに或る統一ある一思想の內に融合して不可分解的のものとなる。かくの如くなれば、この方面より見れば、語論の對象は個々的の分解又は要素の硏究、又は文の材料の硏究と稱すべく、句論は要素の分解なるに對して結合なり、遠心的なるに對して求心的なり、材料的なるに對して構成的なり、個々的なるに對して統一的なり。かくの如くなれば、いづれの點より見ても二者は同一のものにあらず。

以上に述ぶる所によりて語論と句論との差違は略明かなるべし。然るにこの二者の區別は上の如き皮相上の差に止まらずして更に深く根本的の差違あるなり。抑も語論と句論との區別の主眼點はそれら思想發表の材料たる語をば個々のものと見て取扱ふか、又その語によりて構成せられたるものを有機的に統合せられたる一個體として取扱ふかの差にあり。卽ちこゝにたとへば、

松は常盤木なり。

といふ文ありとせむに、これは同時に語論の對象ともし、又句論の對象ともなしうべし。かく同一のものを同時に語として見、文として見てそれ〳〵硏究の對象とするを得べきを見ても、その硏究の對象としての主眼點の異なるを知りうべきなるが、その區別は抑も那邊に存するか。これ實に語論と句論との異同を明かにす

る最良の機會なり。抑も吾人が之を一の句なりと考ふる間は音、文字、語の數の多少に拘泥することなくして之を一個體なりと考ふるなり。これ吾人が先に統一的なり、求心的なりといひたる所以なり。統一的求心的なるが故に、かゝる際にはそれらの各語に對してはたゞその文の構成要素たりといふ點の意義の存するのみにして、更に語としての個々の本性用法等を特別に思惟することなきなり。而して一旦之を句として認むる場合の意識を放棄して、分解的の見地に立たむか、ここにこれらは或はたゞの聲音の集合とも見られ、或は文字の集合とも見られ、又語の集合とも見らる。實に語論の第一歩はかく句となれるものに對してその句としての意識の注點を放散せしめてこれを死物の如く取扱ひ、それが靜止的狀態を解剖學的に分解してその本體を研究したるものなり。かくの如く、その各の語に意識を注ぎて各個として研究するものは語論の任務にして、それらの多數の語にて構成せられたるものを文又は句と稱する一個體として取扱ふは句論の任務なり。卽ち吾人が一の句なり文なりと思惟する際には音の數、文字の數、語の數の多少に拘泥せずして之を思想上の一個體たるものゝ表現なりと認むる點にあり。されば語論は各語をば解剖學の如く、靜止的に取扱ふに對して、句論にては生理學の如く、活動的に、しかも一完體として對象を取扱ふなり。この故に、一の語にても

一の文として見らるゝこと往々存するなり。若しこの見地の相違に想ひ到らざる時には一の語にて一の文として見らるべきものゝ場合の如きは、到底說明せらるべきにあらず。句論と語論との區別の主眼點は實にこの點に存するなり。語論と句論との區別の最も主要なる點は一は思想發表の材料としての研究なるに對して、一は思想その者の表現としての研究にあり。かくてその思想の統一點の活動を基礎としてそれの表白せられたる文句を觀察するものを句論とし、その思想の統一點を放散せしめて、材料たるものにつきて觀察するものを語論とするなり。こゝに於いて思想の統一點の活動ありや、又その統一點を放散せしめたりやの區別によりて句論と語論とを別つべきものなるを考ふべし。

句論が語論と觀察點を異にせることは以上述べし所の如し。こゝに吾人は句論の研究の基礎が那邊に存するかを探究せざるべからず。

抑も事物を研究するにはその對象が自然に單體をなせるものゝ外は、その研究の基礎たる單體の何なるかを審定せざるべからざるなり。この故に語論に於いては單語を以て研究の基礎とせることと既に述べたる所なり。句論に於いても亦その研究の對象たるものゝ基礎の何處にあるかを審かに究めざるべからず。先づこの研究をなさずして漫然研究をなすものは的を見定めずして矢を放つが如

く勞して效なきに止まらむのみ。若し又假に效ありといふともそれは偶然の事に止まるべきなり。

句論は文又は句を構成する法則を論ずる文法學の一大部門なることは既にいへり。こゝに吾人は句論の研究の基礎那邊にあるかを求むるに先だちて、文と文にあらぬものとの限界を第一に明らかに知らざるべからず。今こゝに

月下に奏する劉亮の曲。

檢非違使等の武職。

徐に歩む。

遙に高し。

わが隣に住む。

の如き例ありとせよ。これらは體言と體言とを連ね、體言と用言とを連ね、或は用言と副詞とを連ね、又その間に助詞を加へたりなどして夫れ〳〵の意味をあらはしたるものなり。これらは多くの單語を集めて一に連續したる語をなせども未だ完全に思想をあらはすものにあらずと認む。かゝるときにはこれらをば吾人は文と稱することなくして、文法學上連語といふなり。こゝに連語といへるは英語にphraseといへるものにあたる。これは數多の語を列ねてはあれど未だ一の

思想をあらはせるものにあらずして、たゞ多少複雜なる觀念の群をあらはすに止まれり。從來往々かくの如きものを句といへり。然れども句とは次にいふ如く一の思想をあらはせるものゝ名なれば當らぬなり。こゝにいふ連語とは句論上の名目にあらずして、なほ語論上の名目たるに止まるべきなり。今連語の定義を下さば次の如くならむ。

多數の語を集めてある複雜なる觀念をあらはせど、完全なる思想をあらはすにあらざるものを連語といふ。

連語とは上の如くなるが、吾人はその連語の例としてあげたるもの、たとへば

徐に歩む。

遙に高し。

わが隣に住む。

の如き連語を用ゐて又一の完全なる思想をあらはすことなきにあらず。なほその最も簡單なるものにつきていはゞ「犬」の突然とあらはれたるを見て急に人に告げむとしては、委細を述ぶるに遑なくしてたゞ

犬犬

といふ如く叫ぶこともあり。この時の「犬犬」といへるものは思想よりいへば「犬見

ゆ」「悲しき夫よ」「夫汝に遁れり」「注意せよ」などの意をあらはすものなれば、ある思想をあらはすに用ゐたるなり。かくの如くある思想をあらはすに用ゐたるものはこれ既に單語にあらずして、文と認むべきなり。勿論たゞ一の語を以てする如きは不完全なるには相違なしといへども、たゞの單語としては取扱ふことを得ざるなり。かくて上の「徐に歩む」等の連語も、語の叢りと見る場合と一の思想の發表として見る場合とありて、その思想の發表として見る場合にはこれを文と稱するをうるなり。こゝに於いて文と語との區別は語の數などいふ外面上の區別によりて認むるを得ざるものなるを知るべし。然らば文とは何ぞや。

文は上にいへる如く、或は一の語よりなり、又數多の語の集合よりなるものなるが、これをその外貌より見れば、一の語又は數多の語の集合なりといふに止まるべし。若し果してかくの如くならば、語の研究のみにして足り「文の研究といふことは不要なるべし。然れども、何人もその單語の研究及び連語の研究のみにて文を研究し了へたりとは考ふることなく、語と文との間には明かなる相違の存するを認むるなり。然らば文が語と異なりと認めらるゝ主眼點は如何。今これにつきて從來の研究を見む。大槻博士は

言語ヲ書ニ筆シテ其ノ思想ノ完結シタルヲ「文」又ハ「文章」トイヒ、未ダ完結セザ

ルヲ句トイフ。

とあり。「思想ノ完結シタル」ものとは如何なる意義なるか、吾人は或は修辭學上の文をもいふことを得べし。思想の完結といふことは未だ文法學上の文の定義としての價値なきなり。岡田正美氏は

又文は完全なる思想を言語にあらはしたるものを更に文字にうつし出したるものなり。

といひなほ縷々の說明あれど、要するに上の語に歸せり。完全なる思想とは何をさすか。これらは未だ文たらざる單語の叢りとは或は區別しうべし。然れども、修辭學上にいふ文章とは如何にして區別しうべきか。これ亦不完全なりと評するの外なきなり。或は又草野清民氏の如く

意義完全ナル說話ノ體ヲ具ヘ語調ノ圓滿ニ完結セルモノ。

といへるあり。以上いづれも吾人の首肯すべき說明といふを得ざるなり。而して上の諸家の說は實は英文典に所謂たとへば

expressing a complete thought or meaning.（スキート）

any complete meaning is a sentence.（ベイン）

に基づけることは明かなるが、かくの如き說明を幾度繰返しても、語と文との區別

は明かにするを得ざるべし。何となれば上にもいへる如く、吾人は一の語にても相違なく、文として考ふれば一の思想をあらはしたるに相違なければなり。かく一の語にして同時に一の文たりうることありとせば、その語と文との區別はたゞ外貌上の說明にては判明しうべきにあらざるは明かなりとす。こゝに於いて我等はその區別の主眼點はこれら外貌上の如何に存するにあらずして、そが深く思想の內面に根柢を有するものなるべきを見るなり。實に、語と文との區別の要點は上にもいへる如く、意識の注點の活動と否とに存するものなり。卽ち考ふるに、一の語又は語の數多の集合體が、文とするを得る所以のものはその內面に存する思想の力たるなり。惟ふに思想とは人の意識の活動にして種々の觀念が、ある一點に於いて關係を有し、その點に於いて結合せられたるものならざるべからず。而してこの統合點は唯一なるべし。意識の主點は一なればなり。この故に一の思想には必ず一の統合作用存すべきなり。今これを名づけて統覺作用といふ。この統覺作用これ實に思想の生命なり。この統覺作用によりて統合せられたる思想の言語といふ形にてあらはされたるもの卽ち文なりとす。この故に一の語にせよ、數多の語よりなるにせよ、ある統覺作用によりて統合せられたる思想の發表

なる場合には文と認むべきものとす。實に文といふものは、通俗的にいはゞ

思想が言語によりてあらはされたるをいふ。

と定義すべく、嚴密にいへば、

統覺作用によりて統合せられたる思想が、言語といふ形式によりて表現せら

れたるものをいふ。

と定義すべきなり。

句論の對象たる文の本體は大略上の如くなるが、この句論の研究はこの文の基礎たるべき單體の討究よりはじめらるべきなり。從來の諸家は吾等が語の運用の研究上の標目として用ゐたる主語述語等を以て文の要素とせり。されど、これらは文を解剖して見たる構成上の素材といふべくして文そのものゝ元素といふべからず。吾人が前項に論究したる結果にも明かなるが如く、文といはるゝものは、その形が如何に簡單にもせよ、そこに必ず意識の注點の集注せられたる思想をあらはしたるものならざるべからざること、かの化學にていふ元素の如く、これが單體として存する場合、如何に分析しても異種のものに分つべからざるものをいふに似たるものならざるべからず。今主語述語を一の單體なりとせむか、何の單體なるべきか。文構成上の單體たるべくもあらぬこと明かなれば、語の用法上の

單體なりといふべきに似たり。されども、かくては語論上の名目たるに止まり句論上直接の用なきなり。されば、文の要素として吾人の研究の基礎たるものは文の最も單純なるものをさすに近しといふべし。この文の最も單純なるものは單文なりと稱せらる。されど、この單文といふことにつきは論ずべき事あり。抑も現時わが國の學問上に用ゐる文といふに二の義あり。一は修辭學の上にていふ文にして、英語にて composition 獨逸語にて Aufsatz といふものなり。一は文法學上の文にして英語にて sentence 獨逸語にて Satz といふにあてたる譯語なり。この二者は混同せられ易きものなれど又混同すべきものにあらず。さてこの sentence 又は Satz をば單文と譯する人あれど、かく譯する人はかの獨逸文法などにいふ einfache Satz, zusammengesetzte Satz を何といはむとするか。Satz を文と譯する時は前者は單文と譯し、後者は複合文と譯すべきものなれど、Satz を單文と譯する時はこれらは單一なる單文、複合せる單文とせざるべからず。世に豈にかゝる不合理なる說明あらむや。この故に單純に Satz といふ語にあてむには單文の單字を除かざるべからず。然れどもかく文とのみいふ時は本邦にては修辭學上の文をさすを常とすれば混雜を生じ易きのみならず、文法學上文の基礎たる單體を示す語としては甚だ紛はし。この故に余は文の基礎たる單體を句と稱せるなり。

この句といふ語は從來の文法家は英語の phrase 卽ち上にいへる連語の意にも clause の意にも用ゐたり。連語を句といふことのあたらぬは上にいへり。この clause は句といふに差支はなけれど、句はすべて clause にはあらず。卽ち clause は主として附屬性の句のみを稱せり。かくの如くにして說くもの往々句を以て文の一成分なる如くいへれど、元來句といふ語は附屬句たる意にあらずして寧ろ獨逸語の Satz にあたるものといふべし。さてこの句といふ語の意義を檢するに從來句讀と對していへる如く「語の絕ゆる處」をいふ語にして文法學上思想の完結せる一體をさすを主とし、又「語意不絕句」と黠例にいへるが如く英語の clause をもさすものなれば、句論上の單位をさすには最も適せる語なりとす。かくて余は句は文の素にして文は句の運用に際しての名稱なりとせむとす。

前にいへる如く文法學上、文の素たるものを句といひ、その句が運用せられて一の體をなせるものを文といふ。畢竟句は化學にていふ元素の如き意義をあらはし、文は化學にていふ單體化合體などいふに用ゐる體の如き意義をあらはすものと約束すべし。

今上にいへる如く、文の構成の基礎たるものを句といひたるが、實際上あらはるゝ文はその句一より成るか、若くは多くの句よるなるべきことは明かなりとす。

こゝに於いて文の構成上一の句よりなる文をば單文といひ、二以上の句よりなる文をば複文と稱すべし。卽ち吾人は文法學上の文をばその構成によりて單文複文の二に大別することの根據をこゝにおくものなりとす。

さて、こゝに複文といへるは如何なるものをさすかといふ事を明かにせざるべからず。文法學上にいふ複文とは、その文が二以上の句より成れるものをさすことゝ上にいへる如くなるが、二以上の文の結合によりて構成せられたる文章は隨處に見る所なれば、それらはすべて複文なりや否やといふに、それらは必ずしも文法學上にいふ所の複文とはいふべからず。抑も文法學上にいふ所の複文とは單に二以上の句より成れりといふに止まらずして、それらが言語上に一定の形式ありて結合せられたるものをさすなり。若し言語の形式上の拘束なき場合にはその文章が幾多の複合より成ること明かなりとも、文法上之を以て一の複文と稱することなし。たとへば、

一、みな人は花の衣になりぬなり。苔の袂よかわきだにせよ。

二、年の内に春はきにけり。鶯のこほれる淚いまやとくらむ。

三、秋はきぬ。紅葉は宿にふりしきぬ。道ふみわけてとふ人はなし。

四、春日野は今日はなやきそ。若草の妻もこもれり。我もこもれり。

の如き歌は修辭學的にいへば一個體にして所謂各一首の和歌なれど、文法學上にては二又は三の單文の集合にすぎず。即ち一二は二個の單文の集合體、三四は三個の單文の集合體たるなり。又

五、藥のむ。さらでも霜の枕かな。

六、夜着は重し。呉天に雪を見るあらむ。

七、秋凉し。手毎にむけや瓜茄子。

これらの發句はいづれも二個の獨立せる單文の集合體たるなり。かくの如きをば、二段落又は三段落の歌又發句と稱するなり。これらの集合體は詩歌文章としてはもとより一個體たれども、その集合體を一個體として取扱ふことは文法學の任務にあらず。文法學としてはその形體上個別的になれる各段落を以て各、個個の文法學上の一個體としてその研究對象とすべきものにしてそれらの集合體そのものは文法學の對象とすべきものにあらず。然るに今こゝに

月落ち、烏啼く。

月落つれば、烏啼く。

の如き文ありとせむに、これらは上の諸例に比ぶれば形はいづれも、簡單なれど、

月落つ。烏啼く。

といふ二の句より成り、しかも上の句の述語が「落ち」「落つれば」の如く形式に變化を起して次の句に連絡するに至れり。かくの如く言語上の拘束を生じて一體となれるときに於いてはじめて文法學上の複文と稱せらるべきものなりとす。この區別は事もなげなる如くなれど、はじめによく之を明かにしおかぬ時は末千里の差を生じ、文法學と修辭學との限界もわからぬやうになるべきなり。これ上に既に念を押しおきたる所なりとす。

上述べ來たる所によりて句論の出發點と到着點と即ち範圍は明かなるに至りしならむ。即ちその範圍は次の如し。

句論は句を研究の基礎として、その性質運用を研究し、言語上に制約ある限りの文の結合方式を研究の極限とす。

かくて句論の極限即ち文法學の極限といふべきものなり。この文法學の極限につきては別に說くところあらむ。

第四十三章　句

前章に於いて句論の研究の基礎とすべきものは句にして、句論はその性質と運用とを研究するものなることを論定せり。しかもその句と稱すべきものゝ實體

は未だ明かならず。ここに之が研究を試みむとす。

余がこゝに一の句と稱するものは既に述べたる如く必ずしも單文の義にあらず。然れども從來の諸家の單文と稱するものは吾人が句と稱するものゝ意義卽ち文の素なるものと單體の文たるものとの兩義を含ましめしものなれば、余はこの研究にあたりてそれら諸家の單文といへるものゝ定義を研究することを以て論を始めむと欲す。

從來の文法家殆ど一齊に唱へて曰はく、單文の必要元素は主語と述語となり、これら一をも缺かば文にあらずと。從つてその單文の定義といふものを見るに多くは、

一の主語と一の述語とを有するものを單文といふ。

といふが如きものなり。その單文といふ語を句と改めたりとしても、吾人は未だ遽かにこの說明に首肯すべからざるなり。先づこの定義には二重の大なる缺陷ありと認むるものなるが、今姑くその缺陷を容すとしても、この定義はその句たるものゝ内部に主語と述語との存在する現象をいへるに止まりて、その二者の結合といふ事實が句たるものを決定する主點たることを忘れたるものにして、極論すれば、原因と結果とを顚倒せる說明なり。何となれば、主語と述語とがたゞ累々と

存在すればとて何人も之を以て句若くは文なりとは認むることなかるべきなり。従來は多くかくの如き説明を以て論を進めたれば、末終に種々の破綻を生じてまた説明を加ふべからざる窮地に陥れるもの少からざるを見る。今假りに上の説明をば形をかふれば、

單文は一の主語と一の述語とを有す。

といふこととなり、やゝまされる説明となるを得べし。しかもこれたゞ單文の現象を記述せるに止まりて、それが根本の説明にはならぬなり。こゝに於いてそれらの説明は少くとも

一の句とは主語と述語との結び付けの一回行はれたるをいふ。

とせずばあらず。かくすれば、この定義に該當する實例は、

月清し。

花紅なり。

小兒犬と戯る。

我れ庭に梅を植う。

の如きものにしていづれも一の句にして文としては單文たるなり。而してかくの如き定義は文學博士芳賀矢一氏がウェッチェルの獨逸文典よりとり來りてそ

の著明治文典にのせたる定義に類似せり。その定義に曰はく

主語と述語との關係文法上の形式に於いて唯だ一回成立せるものを名づけて單文といふ。

これ卽ち上にあげたる定義に殆ど同じといふべし。然れども、これらの定義は上にあげたる如く主語と述語との形式を備へたる形の句又は文にあてはむることを得べけれど、一切の句又は文はこの種の形式のみによれりや否やの明確にならぬ以上は未だこれを以て當れりとはすべからぬなり。

惟ふに主格と賓格述格（述格には普通賓格を含むこと上にいへる所なり）とは既にもいへる如くいづれも語の用法上の範疇にして句論に至りてはじめて起るべきものにあらざるものなるが故に、これらを以て句の必要條件とするは根本に於いて誤れるものなりとす。然れども今數歩を讓りて、姑くこれをそれの條件として見む。この主格と賓格との對立は既に心理學及び論理學の明言せる如くに人間の了解作用が先づこの二者を分離して考へ、さて再び之を統一して考ふることに基づくものなることはいふをまたざるなり。されば、この對立は了解作用に於いてはじめて起るべきなりといふこと明かなりとす。然るに言語によりてあらはさるゝ吾人の思想はこの了解作用のみにあらざるなり。吾人の言語によりて

あらはすべき思想が判斷了解の作用のみなりといはゞ夫れまでのことなるが、苟も常識のあるものはそれらの外感情、慾求等をも言語によりてあらはさむと企て、又現に自らさる事を行ひしことを經驗承認すべし。されば、吾人はこの了解作用を發表する爲の主格と賓格述格との對立する形式を以て感情、慾求等をあらはしうべきかを檢し、同時に、又逆に感情、欲求等をあらはす言語發表が、上の了解作用を發表する形式のみに止まるかをも檢せざるべからず。先づ吾人はこの了解作用發表の形式を以て感情を發表しうるかといふに、

花うるはし。

花さく。

我花を見る。

といふが如きはいづれも主格と述格との對立ありて、了解作用に基づける思想の言語發表なること著し。今これをとりて少しく形をかへ

花うるはしきかな。

花さくぞや。

我は花を見るよ。

の如くする時は、こゝに感情を發表することをうべし。又これを少しく形をかへ

花よ、うるはしかれ。

花さけ。

花を見たし。

といへば、こゝに慾求を發表することをうべし。而してこれらいづれも主格と述格とあれば、了解作用に基づける思想發表の形式を離れて存する別の形式とは見られざるなり。これによりて吾人は了解作用の發表形式と略同じ形式を以て感情欲求を發表しうべきを知りたり。

然れども以上の事實を以て吾人の思想發表の方法は了解作用發表の形式を以て足れりと直ちに斷言すべからざるなり。而して逆に、感情欲求の發表が常に主格述格の對立する形式によりてのみ發表せらるべきか如何を事實の上より顧みざるべからざるなり。かくて考ふるに、吾人はこゝに「犬」の突然襲ひ來れるときに、直ちに

犬

と叫び、或は火災の起れるを告げむとて

火事

と叫びたりとせよ。これ卽ち感情の發表といひて差支なきことなり。或は又水

をたみたしと思ひて、しかもその急迫せる場合に

水

と叫び、或は又菓子を乞ふ場合に

菓子々々

といふが如きはこれ即ち慾求の發表といひて差支なきことなりとす。而して感情慾求のこの發表は如何なる形式をとれるかといふに、これはたゞ一語のみなれば主格述格の區分を求むべきよすがもなきなり。然らば、これらは文にあらざるかといふに、ある思想を發表せること明かなれば、文といふに差支なきなり。即ちこの場合の「犬」「火事」「水」「菓子」は語として見れば一語なるが、文として見れば一の文なるなり。そのこれを一の文として見るといふことは、これを或る思想の發表として用ゐたるが爲にして、その外形は唯一の語に止まりて單純なるやうなれど、內部には思想の複雜なる活動の存するありて、その發表が、この一語によりてなされたりといふに止まるのみ。これにつきて直ちに思ひ起さるゝは、古くスキートなどのいへるa word sentenceなり。こは一語を一文をなすものと認めたるものなるが、これにつきてかの國の學者間にも種々の論議ある有樣なるが、とにもかくにも一語にて一の思想をあらはし、隨つてその一語が一の文たるものゝ存するは事實な

り。この事は心理學に於いても論理學に於いても等しく肯定せる事實にして文法學者が如何に論ずるにもせよ儼然たる事實として存し、何人もこれを否定するを得べからざるなり。こゝに於いて吾人は感情慾求の言語上の發表が了解作用の發表形式によるものに止まらず、なほ他の形式によりても發表することをうべきものなるを知り得たり。こゝに於いてかの主格述格を以て單文の必要元素なりとし、その一を缺かば文にあらずとすること及び、上述の「主語と述語との結び付の唯一回なるものを云ふ」といふ說明も何等一般の說明として通用せぬことなるを知るべし。

以上述ぶる所によりて、從來の定義の容れられざる事情の存する當面の事實は一の語にて一の文をなすもの存すといふことに存するを見るべし。これによりて考ふるに、一の句とは何ぞやといふ事の正確なる見解を得むとするものは先づこの一語が一文たりうる事實を基礎として考へを進めざるべからず。而してこれ實に文として認めらるべきものゝ最も單純なる事實にしてこれよりも一層單純なる句又は文のありうべからざるは明かなる事實なることを考ふる時は、この事が、句論硏究の眞正の出發點たるを認むべきなり。

さてこの一語が一文たるものにつきては從來ある心理學者(ヘフディング)は「幼

態狀の句(Satz im Lauver zustande)といひ論理學者大西祝は直感的の判定(impersonal judgement)といへるが、西洋の文法學者は或は感動詞といひ、或はa word sentenceといへり。この感動詞といへるは語と文とを混同したるものなれば論ずるに足らざるが故に之を度外に置くべきが、其他にありては完全なりとは認めざるものゝなほ、satz, sentence 又は judgement と認めたるは明かなりとす。吾人も亦これらを以て完全なる形式を備へたる文又は句なりと認むるに躊躇するものなり。然れども、これらは決してたゞの語としては取扱ふべきものにあらずして如何に不完全なりとはいへ、なほ一の文又は句として認むべきことは斷々乎として之を信ずるものなり。

惟ふに、唯一個の語がよし完全なる文たらずとも、完全なる文と同様の資格を有するに至りては既に唯の單語にあらずしてその資格の上に變動を生じ單語と異なる性質を有するが故たるべきなり。而してこの資格の變動は外面には一もあらはるゝことなければ、何等かその內部に於いて之を活動せしめたるものなくばあらず。若しその外貌のみにつきていはゞ、たゞの單語たるのみにして、それより以上何等の名目をも附することは能はざるや明かなり。又その完全なる文は、た複雜なる文と稱せらるゝものにても、それらを外貌より見れば、たゞ某々たる單語の

堆積たるのみ。之を以て見れば、一般的に見て文又は句と稱せらるゝものは、何等か內面の之が活動を起さしむべき素因の存すべきは明かなり。文のこの內面の要素は所謂思想と稱せらるゝものなり。今吾人はこの思想につきて研鑽せむ。

抑々文は思想を完全にあらはしたるものなりといふことは何人も認むる所なり。而して單文は單一なる思想をあらはしたるものなりといへり。然らばその單一なる思想とは何ぞや。惟ふにその思想とは人間の意識の活動せる狀態にして各種の觀念が或る一點に於いて關係を有し、その一點に於いて統合せられたるものならざるべからず。この統合點は唯一なるべし。意識の主點は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用存する筈なり。今之を假に統覺作用と名づく。この統覺作用これ實に思想の生命なり。雜多の觀念累々として堆積すとも之に對して統覺作用の活動することなくば終に思想たること能はざるなり。ここに於いて單一なる思想とは何ぞやといふことに答ふるを得べし。曰はく、單一なる思想とは一の統覺作用によりて統括せられたるもの、換言すれば、統覺作用の唯一回の活動せるものをさすなりといふを得べし。

文の內面的要素たる思想の說明は上の如し。從つて一の句たるものゝ內面的要素は實に統覺作用が意識內にて唯一回活動せる場合のものをさすに外ならず

と考へらるゝなり。然るにこゝに考ふべきは、思想其のものは直ちに句とはいふべからざる筈なり。即ち統覺作用如何に活動すともこれを言語に發表するにあらずば句と稱すべからざることとなり。句は實にその内面に起れる思想の活動の外的發表たるなり。既に外的發表なりとすればこゝに形式を有せざるべからず。句又は文といふものは即ち思想が言語といふ外的形式によりてあらはされたるものに外ならざるなり。こゝに於いて吾人は初めて一の句とは如何なるものぞやといふ問に答ふるを得べきなり。曰はく内面より觀察すれば一の句は單一の思想をあらはすものなれば、所謂統覺作用の活動の一回行はれたる場合のものたらざるべからず。之を外部の方面より見れば、その單一なる思想が言語によりてあらはれたる一個體ならざるべからざるなり。而してこの一個體といふことは形式上他の同樣のものに對立して存することが即ち獨立せる一體たらざるべからずといふことを意味するものなりとす。以上の説明を約してこれを定義の形にするときはまさに次の如くなるべし。曰はく、

一の句とは統覺作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の發表をいふ。

なほこゝに注意しおくべきは「吾人がこゝにいふ統覺作用とは、意識の統合作用を

汎くさせるものなれば、說明、想像、疑問命令、禁制、欲求、感動等一切の思想を網羅するものなり。さる意の思想の活動の一回行はれたるものが、言語によりて發表せられたるものを一の句とはいふなり。

今この說明を以てすれば、かの所謂單文がこの類なるのみならず、幼蟲狀の句、直感的判定などいはるゝ一語にて一文をなす場合のものも亦一の句即ち單文たることを安んじて認むべきに至らむ。これらはすべて內面的にいへば、單一の思想の寓せられあることは明かにして外面的にいへば、言語によりてあらはされたる一體たるなり。さてこゝに吾人の顧みるべき問題あり。そは他にあらず。かの一語にて一文をなすものなり。この一語にて一文をなすものにつきてはヴントはその民族心理學の言語篇に於いて一語にて完全なる文たるものと不完全なるものと二樣あることをいへるが、吾人はわが國語に於いてもまたかく二樣あるを見る。たとへば、上に例とせる

犬。

と叫べる場合の如きも、これを了解作用に基づく

犬來れり。

といふ文の不完全なる發表と見ることをうべく、又感情の叫びとして見れば、別に

不完全といふことを以て見るべき餘地なきを見る。然れども單に考へ樣により
て完全なりとも不完全なりとも種々に解せらるべきかくの如きは、その形式上完
備せるものにあらずと認めても異義を挾むべき方法存せざるを以てかくの如く
不定なるものは吾人はすべて不完備なる句と認むべきなり。然れども、こゝに

行け。

といふ文ありとせよ。これまた一語よりなれるものなるが、吾人はこれに對して
は一定の思想を必ず喚起して、これを不完備なりと認むべき餘地の存せざるを知
るなり。こゝに於いて吾人は一語にてなるものにも、完全なる句あり。不完全な
る句ありといふことを知り得たり。而して吾人の研究の主眼點はそれらの一定
の方式を對象とすべきものなれば、その不完備の句は姑く度外に置きて先づその
完備せる句につきて模型的の構造を考へ、最後にその不完備なる句をば省略ある
句と合せて觀察すべきなり。

こゝに於いて吾人の問題は句の完備と不完備とを如何にして判別すべきかと
いふことに轉じたり。かくて第一に考ふべきことはその完備不完備とは何に基
づきていへることなりやといふことを審定すべきことなり。惟ふにそれらの句
は完備せるものにせよ、不完備なるものにせよ。その内面即ち思想につきていは

ば、一の句たる以上一回の思想の活動ありたるものなれば、その內面の思想の完備不完備によりて區別を立つべきにあらざるなり。よし又その內面の思想の完備不完備によりて區別を立て得べしとすとも、それが言語に發表せられたるにあらずば、吾人の今の問題とはなるべき機緣なきなり。この故にその言語上の形式の完備不完備といふことを以て句その者の完備不完備と目すべきは當然の事なりとす。然らばその言語の上にあらはれたる形式上の完備不完備は如何なる條件によりて區別せらるべきか、これ吾人の第二に考ふべき問題なりとす。これにつきて考ふるに、或る論者は曰はく「文は單語の結合ならざるべからず」と。然れども二以上の單語の結合にしてしかも文ならざるものあること、又一の語にして完全なる文と認むべきものあることは吾人の上に例をあげたる所にして、それらのもの丶存在することはこれらの論者も亦認めたる事實なり。されば此の論は成立すべからず。他の論者は曰はく「主語と述語とを具備するは文の必要條件なり」と。然れども、これは上にもいへる命令をあらはす文には主語を具せざるものあることはこの論者とても認めたる所なり。この故にこの論も亦成立すべからず。或は命令體の文にありては一の述語あるのみなれば、かくの如く述語一あるを以て文の完備條件とせむといふ人あらむ。されども未だ遽かにこの說にも首肯する

こと能はざるなり。何となれば、今こゝに

妙なる笛の音よ。

きたなきみ方の振舞かな。

の如き句ありとせよ。これらはこの以上に加ふることなくしてしかも意完きものにして一の句たり、文たりといふに差支なきものなれば、不完備なる句とはいふべからず。然るに、これらは主語も、述語もなく、主語述語の關係を求めむとすともも求むべきよすがもなきなり。かく外形よりして一概にいふべからず、しかも又内部よりしてのみ之を決定すること難しとせば、その區別の標準殆ど存せざるが如し。しかも、吾人はなほ完備不完備の別の存すべきを認む。果して然らば、上に述べたる諸點の外に句の完備不完備を分別すべき要點の存すべきや明かなり。

こゝに、これらの要點を探索する爲に言語そのものゝ本質につきて顧みむ。今若し言語を以て單に自家のみの爲の思想發表なりとせば、如何なる形式をとりたりとて己が思想を寓し了れば足れりとすべく、强ひてその形式の完否を問ふべき必要なく、又他人の容喙をも許さゞるべきなり。若し又文を言語の形式的なる純客觀より見むとすれば、支吾するところあるは既に述べし如く明かなり。この故に純客觀よりしても純主觀よりしても到底限定すること能はざるは明かなり。

それ言語の所依たるや一個人の主觀にあらずして社會の集合意識なり。個人が如何に之を主張すとも之をきく人にして了得せずんば、到底其の效を奏せざること明かなり。この故に文の制限はこゝに存す。發表せる人自身の思想と同樣なる(たとひ全然同一ならずとも、少くも基礎に於いて共通する同傾向の)思想を他人の意識内に喚起せしむることの必然なるか否かといふ點これなり。吾人がかくいふにつきて一二の注意すべき點あり。その一は其の他人に自己の思想と同樣の思想を喚起せしめむといふ事を極端なる例にあてゝ論ずべからぬ事なり。極端にいはゞ、ある言語によりて吾人と全く同一なる思想を他人の意識内に喚起しうるものにあらず。人各過去現在の經歷境遇が異なる以上は決して全然同一なる思想を二個の主觀に於いて認むることあるべきにあらず。この故に同樣なる思想といふことはかく嚴密なる哲學的程度にあらずして、常識の程度にありての說明なり。又必然なりといふ事も之を極端に解すべからず。極端なる必然はここにてもいふべからず。これも亦常識に於いて、之によりて思想を喚起する際には自然の勢必ず了得せられざるべからずといふが如き狀態をいふものにして、何人といへどもかく解するを普通とすといふ意なり。次に注意すべきは、その法則が、國語に行はれてある以上は、たとひ外國語の法則とは一致せずともその民族に

通ずる法則なるときは立てゝ則とすべきものなることなりとす。

之を以て句の完備不完備を鑑別すべき要件は一の思想をその言語に寓して同じ社會の人がこれに對して一定の思想を必然的に喚起しうるか否かといふ一點に歸すべきものなり。即ち、完備せる句と不完備なる句との區別はそれによりて聽者に說者の發表したると同樣なる一定の思想を喚起しうる條件を備へたりや否や、若くは說者自身の思想の發表たるに止まり、聽者がこれによりて、必ずしも說者の發表したると同樣なる思想を喚起しうべきものと限られざる場合との區別を以てこれが、形式の完備不完備の分るゝ所とす。例へば、

降る。

といへば、直ちにその主體の何たるかを想はしむるものにして、これを明言せずば聽者は種々の思をなし完全に說者の思想を了解せしめがたき形式にあるなり。

又

犬。

といへば、その所に同時に居るものならば姑く別とすべけれど、然らぬものはこれを聽きて完全に說者の思想を了解すべきにあらず。これらいづれもその不完備なる形式の句といふべし。之に反して

行け。

といふが如きは普通の場合には受令者に對していふものなれば、聽者に於いて不定の思想を以てこれに對するものにあらず。なほいはむに、上の「降る」「犬」の如きはその場合によりて聽者にも明かなる思想を起しうべしとせむ。然れどもこれを一般の場合に通じて論ぜむに決して一定の意義を喚起すべき形式にあらざるなり。而して「行け」の如きはいつも一定の思想を起しうべきなり。これ實に二者の重大なる差異なり。かくの如くなれば、その句の完備不完備の差異は句の一般的性質によりていふにあらず、又句の外形によるにもあらず、又もとより思想のみによるにもあらずして、句の性質によりてその狀態一樣ならざること明かなり。果して句の性質に起因するものとせば、これを如何にして文法上の法則とすることをうべきか。こゝに於いて更に他の問題を生ず。その問題とは句は如何にして一語にて完體となり、又はなり得ぬかといふことなり。こゝに於いて吾人の研究は句の性質上の種類の問題に移るべきなり。

第四十四章　句の類別

上に述べし如く、句の完備不完備は直ちに句の性質上の區分に基づくものとせ

ばこの區分は實にこの部の初頭に於いて研究すべき問題なりといふべし。これにつきては先づ從來の文法家の施せる文の類別といふものを一瞥する必要あり。

從來の文法家の多くは性質上必ず文の四種類あることをいへり。これ果して必要あるか。既にいひし如く句論は言語上にあらはされたる思想發表の形式につきそのあらゆる場合を記述し且つ説明すべきなり。若し、一歩たりともその發表の形式に何等の關係もなき意義の論に入らば、これ既に修辭學の領域に闖入したるものたるなり。然るに世の文を四種に分つべしとするものはこれ果して國語にこの分類の必然的に存するを認めたるよりの事か、或は西洋文典の顰に倣ひしものにあらざるか。

吾人は西洋文典殊に英文典に文 sentence を四種に分つを知る。今先づその要をあげむ。

第一の叙述文又は説明文といふものは彼の declarative sentence にして、かれの declarative sentence の特徴は主格最初に來り、文の尾は「・」ピリオドに終るべきものなり。

第二の疑問文といふものは彼の interrogative sentence にしてかれの interrogative sentence の特徴は主格の上に動詞又は疑問代名詞、疑問副詞來り、文の尾は「?・」イン

ターロゲーション、マークにて終るべきなり。

第三の命令文といふものは彼の imperative sentence にして、かれの imperative sentence の特徴は主格なく呼格を伴ふことはあり)文の尾は通例「!」エキスクラメーション、マークにて終るべきなり。

第四の咏歎文又は感動文といふものは exclamatory sentence にして、かれの exclamatory sentence の特徴は主格なきを普通とし、若し主格ある時は必ず疑問副詞にてはじめらるべく、文の尾は「!」エキスクラメーション、マークにて終るべきものなり。

以上の如き四種は何に基づきて區別せられたるものなるか。かれらはこれを以てその文の性質上の區別なりといへり。この性質の區別といへることの意義はなほ深く考ふべき必要ありとす。惟ふにこれらの區別は單にその文の內容たる意義の區別によれるものにあらずして、その意義の差別によりて誘ひ起されたる句の形式の變化あるによりて施せるものにして、實にその句の形にあらはれたる特徴に基づきての區別なりとす。この事はかの英國の學者も既に說けるところなれば、たゞに吾人一己の意見なるにあらず。かくの如く形式上の特徴なるものなれば、かれらの言語を操縱せむに、この形式を無視しては意想を正しく他に傳達すべきにあらず。たとへば、これらの形式に重大なる意義あることを十分に知

らざるものが、若し英語を語るとて、自己は說明敍述をなすつもりにて、その主格を動詞の次に置きたりとせよ。說者は說明敍述をなしたりと主張して、自らたのむところありとすとも、これを聽くものは疑問を提出せるものとして受取るべきなり。卽ちこれらの區別は純粹に主觀の上より起したる區別にあらずして、その思想の差異に基づきてあらはれたる言語上の形式の差異なりといふべし。かくてその形式上の差別を見るに、實にその主眼點は主格の有無と及び主格が存する場合にはそれと述格との相關上の位置如何とにありといふべきに似たり。されば上の四種の別をわが國文の上に移植せんとするものはこれらの點につきて考察を施しての後にすべきものなるべし。

先づこの分類につきて考察すべきことは、この類別は人類の言語全體に共通してあらはるべき絕待的の眞理なりや否やといふことなり。これにつきて考へらるゝはヴントがその民族心理學の言語篇に於いて Satz を三種に分てることなり。その三種は

der Aussage-satz　敍述句
der Aufrufungs-satz　叫喚句
der Frage-satz　疑問句

にして、これらの區別につきてはヴントは一切の言語に通ずる現象の如くにいへり。その點はしばらく問はざることゝして見むに、この三種の區別は少くもかの西洋諸國の語にありては缺くべからざる根元の分類なるべく思はる。而してかの國の普通の文典の多くが、四種に分つに比すれば、遙かに簡明なり。何となれば、既にいへる如く、かの四種の別をば、その終止に用ゐる符號より見れば、三種に止まり、而して文又は句の組織も亦その終止符の三種に適應する三種に攝せらるべきものなり。即ち「ピリオド」を用ゐるものは叙述體「インタロゲーション、マーク」を用ゐるものは疑問體にして「エキスクラメーション、マーク」を用ゐるものはかの四種にていふ命令體と感動體となるが、これらは一括してヴントの Aufrufungsatz の一類たるべきなり。この三類はその意義に於いても亦言語の形式より見ても區別を立つるを妥當とする如くに思はる。

以上の如くなれば、かの四種の分類は歐洲に於いても必ずしも絶待的の眞理と認められざるものなるを見るべし。然らば、ヴントの三類說は世界共通の眞理なりや。かれは言語一般の原則を說きたりと思惟せるものにして、これが世界一般に通ずべき眞理と言明せるものなりと認めらるゝものなるが、今吾人はこれらをわが國語にあてはめむ前に、試みに之を漢文に適用してその三種の區別の漢文に

は施すべからぬことを實驗せり。たとへば漢文典にいへる叙述文と疑問文と何等の文法上の差異ありや。たゞこの差はそれらに含まるゝ單語の差異によるのみにして語の相待的關係、語の排列の點に於いて共通なり。而してこれを類別する符號もなしとすれば、何を以て文法上の區分を立てうべきか。この故にヴントの言は少くとも一部を以て全般に推し及ぼしたるにて正しからざるを證するものなり。即ちヴントの言は歐洲諸國の語には共通の眞理といふことを得べきかも知らねど、世界共通の絶待的眞理といふべからざるなり。

こゝに吾人は上述の四種の分類三種の分類を參考に供しつゝ、しかもそれらよりの束縛を離れて、自由の地位より句の分類を如何にすべきかを考察するを得るに至れり。今わが國文にありてはこの三種の符號といふものなく、又これを用ゐるべき必要をも認めず。この故にこの點より三種にも四種にも分つべき理由なし。又かの疑問文の如き主格と述格との位置の相關的拘束もなきは明かなり。かくの如く論じ來れば、たゞかれの分類に盲從するが如きは論ずるに足らざるものなりとす。然れども、吾人はもと句の分類を企てたるものなり。上述の如きが不可能なりといひてもなほ他の見地よりして分類しうべき餘地なしとはいふべからず。こゝに吾人は上述の四種又は三種の類別がわが國語に適するか否かを

事實上より論究せむとす。

先づ叙述體は通常、文の本體なりとせらる。こは了解作用の發表せられたるものにして、いかなる言語にも存すべきは論をまたず。次に從來の學者が疑問體なりといひて叙述體の文と差別ありとせるものをとりて果してその區別の妥當なるかを檢せむ。たとへばこゝに

月は出づるか。

花は紅なりや。

などの文ありとせよ。これらは疑問をあらはせる文なるに相違なく、何人もたゞの說明とは異なる意義をあらはせりとは認むるものなるが、しかも、句の形式としては叙述說明の體と根本的に區別すべき程度を形式の上に認めうべきか。これらは通常の叙述說明をなす場合には

月は出づ。

花は紅なり。

といふものにして、その叙述と疑問との差異はたゞ、終止に疑問の助詞を加ふるか否かの點に存するものにしてその他に於いて形式上何等の差別なきにあらずや。又從來の學者が感動體なりといひて、叙述體の文、疑問體の文と差別ありとせるも

のを見るに

月出づるよ。

花は紅なるかな。

の如き形のものを感動體なりとせり。然れども、これらも亦その敍述體なるものと根本的に區別すべき程度の差異を形式の上に認めうべきか。これらも亦上の所謂疑問體と同樣にその敍述と感動との差は句の終りに、感動の意をあらはす助詞を添ふるか否かの差に止まれり。而して、上述の三者に通じて見らるゝ現象は主格と述格との存することと及び主格と述格との對立上の位置の關係は全く同じ。かの西洋文典にいへる文の種類を立つる要點はかくの如くたゞ一の助詞を終につくるか否かの點を外にしては全然同じ形式なるが如きものをさせるにあらざるは明かなり。

上に述べたる所にて所謂敍述、疑問、感動の三體は形式に於いて根本は一なること明かなりとす。次にその所謂命令體なるものは如何と見るに、多くの場合に於いて

行け。

といふ如く主格をあらはさずして述格のみをあらはせり。然れども、その命令を

受くる者は文中にこそあらはれざれ、必ず存在すべきことは明かなり。この故に必要に應じて之を呼格の形にて文中にあらはすことあり。

友よ。行け。

の如きこれなり。さればこれらは普通の叙述體と稍異なる趣あるものと考へらる。然れどなほ深く考ふれば、叙述體とこの種の體とは甚しき差異なきことを知る。何となれば、これらの文にても必要を感ずる場合には主格を伴ひて文中にあらはすことあり。たとへば、

汝は行け。

君は來れ。

などの如くいひうるにて知るべし。而して又叙述體にてもわが國文にありては第一人稱の句たるときは、通常主格をあらはさず、

花を見たり。

今歸りました。

の如くにいふを普通とし、第一人稱の句にて主格を文中にあらはすが如きは寧ろ特別の事情ある場合と認むべきはいふまでもなし。かくの如く見來るときはこの命令體といふものも亦根本は叙述體と同じくして唯些少の變形ありといふべ

きのみ。

惟ふに上述の所謂四體の句の根本の形式とするものは、主格と賓格との對立及び述格がそれらの結合をなせる形式の句にして、その主格と賓格との對立及びそれを述格にて結合することは前にもいひたる如く人間の思想の了解作用の必然の現象にして、吾人はその了解作用に於いては必ず先づその主格と賓格とを分離して考へ、さて後これが一致又は差別を識別し述格によりて二者を結合して一の命題となすなり。この論理上の命題は即ち文法學上一の句たるなり。たとへば

花は紅なり。

花は紅ならず。

といふが如きこれなり。かく論理學上の命題に似たる形をとれる句は些少の變更を施して、

花は紅なるか。

花は紅ならむ。

花は紅なれ。

花は紅なるかな。

の如く疑問、想像、欲求、命令、感動等をあらはすことを得べし。これらはいづれも主

格と賓格との一旦の分離と最後の結合との經路を經てなれるものなれば、その根本に於いて論理上の命題と大差なきものなりとす。然らばわが國語にありては文句の種類を區別すべき必要なきかといふに必ずしも然らず。

以上あげたる各種の例は多少の差異はあれど、要するに了解作用に基づきて起れる思想を發表する形式にしてその間に多少の差異あるは、要するにその形式の上に施されたる多少の變形の程度と方法との差異に止まるものにして根本的の差ありとは考へられざるものなり。然るに吾人はわが國語にありてはことに感情等をあらはす言語發表にして上述の如く主格述格の區別を立つる形式によらざるもの存するを見るなり。たとへば、

妙なる笛の音よ。

あつぱれの武者振や。

の如きこれなり。これらは主格述格の區別なくしてしかも完全に思想は發表せられたるなり。從來多くはかくの如きを不完備の句とせり。然れどもこの句には何處にも不完備と認むべき點なきなり。若しこれを不完備なりとせむか、何處に不完備なる點の存するかを明かに示さざるべからず。內容上よりいへば、そのあらはさむとせる思想に不完全なりと考へらるゝ點なく、却て讀者の聽者に共鳴

せしめむと企つる思想は必然的に聽者に喚起せらるべし。即ちこれには思想上不完備なりとすべき點なく、又形式上に不完備なる點ありとせば、この點を補ひて之を完うしうべき筈なるに、何人もこれの上に必要缺くべからざる要素の缺けたる點ありといふことを指定し得ざるべく、而して說く者の期待したると略同様の思想を聽者の胸中に起すべきこと必然なり。即ちこれらは思想上より見ても形式上より見ても一の完全なる句たることと明かなりといふべし。これを以て見れば、吾人は主格述格の區別なくしてしかもある思想を完全に發表しうる一種の形式を有すといふべし。而してかくの如き句は上述の論理上の命題の形をとれるものとは全く形式と性質とを異にせり。これ實に感情の發表の形式にしてかの理性の發表の形式とおのづから領域を異にするものなりとす。

この故にわが國語の句に於いては根本的に差別ある二種の發表形式の存することを認めざるべからずと信ず。その命題の形をとれる句は二元性を有するものにして理性的の發表形式にして、主格と賓格との相對立するありて、述格がこれを統一する性質のものにして、その意識の統一點は述格に寓せられてあるものなり。この故に今之を述體の句と名づく。次にその主格述格の差別の立てられぬものは直觀的の發表形式にして一元性のものにして、呼格の語を中心とするもの

にして、その意識の統一點はその呼格に寓せられてあるものにしてその形式は對象を喚びかくるさまなるによりてこれを喚體の句と名づく。而して國語の一切の思想發表の形式は根本に溯れば、この述體の句、喚體の句の二種に歸するなり。かくてこの二類がその構成と性質とを異にするによりて、その句の完備、不完備の條件もこの二類によりておのづから異なるなり。

第四十五章　喚體の句

喚體の句は常に一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心點として構成せらるゝものなり。これはその直感的一元性の發表にして、感情的の發表形式をとることに於いて、述體の句の理性的二元性の發表たるものと性質と構造との二面に於いて根本的に違ふものとして對立するものなり。

この喚體の句は形式は單純なりといへども、その形式に於いて一定の思想を完全に發表し得るものなれば、不完全なるものにあらず。然るに世には往々これらを不完備の句と唱ふるものあり、これらの說はこれが一元性の發表形式にして、述體の二元性なるものと根本より性質の違ふといふことを知らざるによるものにして、その不當なる事はいふをまたず。この喚體の句はこれが構成の形式を根本

より改めぬ限り、如何に複雜に副成分を加へても述體の形にはならぬものなり。

この喚體句といふものは從來の學者の認めざりしものなれば、こゝに少しく說明せむ。喚體の句の單純なるものは唯一個の呼格を主成分として立てるものなれど、多くの場合に種々の副成分を伴ふ。この副成分につきて觀察すれば次の如き事實を發見するなり。

あはれうるはしき花かな。

みかさの山に出でし月かも。

の如き句にありては、その「花」「月」がその喚體の中心骨子たることは明かなれども、若し、それを單に

花かな。月かも。

とのみ云ひたりとせよ。それにては一定の思想を聽者の心裏に喚起しうるものとは考へられず。即ちこの場合にこの「花かな」「月かも」は不完備句たること明かにして、それが完備せる句たるべき條件はその中心骨子たる體言とその上に「うるはしき」「三笠の山に出でし」といふ如き連體格の語の存在することにありといふべく、この種の句の形式上の完備不完備の分るゝ點こゝに存すと考へらる。

今この種の句の特質を考ふるに、この種の句はこれを述體の句に變更するとき

はその根本形式は上例の句につきていへば

　この花はうるはし。

　この月は三笠の山に出でき。

といふが如き形となるべきなり。而して喚體の句に於いてはそれらをば感動を直觀的にあらはす方式として、述體に於いていふ場合の主格たるべきものをその喚體の中心骨子とし、述體としていふ場合の賓格述格たるべきものをその中心骨子たる對象の意義を明かに示す爲に連體格として冠せしめたるものなりとす。

されども、或は上の例をば

　あはれ(こは)うるはしき花(なる)かな。

　(こは)三笠の山に出でし月(なる)かも。

の省略體にして括弧內に示すが如き略語あるなりといふ人あらむ。然するときは、これは述體句の主格と形式用言とを省略せる形式なりといふことゝなるべきが、述體句の成立條件は主格と賓格との二の對立ありて、それを述格にて統一する點に存するものにして、その述格の本質的模型はこの形式用言にあるものなるが故に、主格と形式用言とを除いては述體の句の骨子を全然失ひたるものにして、もはや述體の句とはいふを得ざるものなり。然れどもなほこれをさる省略に基づ

くものと見て、吾人の喚體句を否認せむとする論者あらむか。こゝに吾人は次の事實を提出してその論に對せむ。

こゝに從來多くの文法家に顧みられざりし一種の造句法あり。次にその例をあげむ。

秋萩をしがらみふせてなくしかの目には見えずて音のさやけさ。（古今集、秋上）

雁のくる峯のあきぎりはれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ。（同、雜下）

夕されはねにゆくをしのひとりしてつまごひすなるこゑのかなしさ。（後撰集、哀傷）

うつゝにはさもこそあらめ、夢にさへ人目をもるとみるがわびしさ。（古今集、戀三）

風をだにまちてぞ花のちりなまし、心づからにうつろふがうさ。（後撰集、春下）

なほき木にまがれる枝も有るものをけをふききずをいふがわりなさ。（後撰集、雜二）

神ならぬ身のかなしさよ。（保　元）

最後の姿を今一目みざりしことのくやしさよ。（保　元）

これらの例はみな、「の」「が」といふ助詞の上は體言若くは準體言にして、下はいづれも形容詞の語幹に接辭「さ」を加へてつくれる體言なり。而してその「の」「が」にて連ねられたる上下の語の關係は體言に對して連體格の語を加へたる形になれるが、それを述體的に考ふれば、上にある連體格の語が主格的のものにして、下にある體言は述格的のものなり。然れども、それらは決して主格述格の關係をあらはしてあるものにあらず。これはそれの成立の源より考ふれば、述體の句より轉成したるものなりといひうべきが如くなれど、その形として現に見らるゝものは喚體の句なり。從來この種の句法に對しては明確なる說明の行はれたるものを見ず。この種の語遣をあげたるものには、あゆひ抄、詞の玉緒、玉の緒延約、てにをは係辭辨、廣日本文典等あり。そのうち、あゆひ抄は句法には及ばぬものにして、玉の緒は係結專門の書なれど、いづれもこれの性質には論及せず。玉の緒延約は

「音のさやけさ」は「音のさやけざまなり」

「世の中のうさ」は「世の中のうざまなり」

「事のわびしさ」は「事のわびしざまなり」

といふ如き說にして徹底せるものにあらず。これは廣日本文典別記に

スベテ「さ」ト結ビタルハ「なり」ト斷言スル意ハアラズシテ詠嘆ノ意アルヤウナリ。

と云ひたる如く、これを斷定の形としたる事に於いて確かにあやまれり。又てにをは係辭辨にはこれを下略の言なりとして

聲のさやけさ、マコトニアハレナリ

世の中のうさ、マコトニクルシクセムスベナシ

と說明してあり。これにつきて廣日本文典別記は

サレバ此結法モ後ノ略語略句ノ中ニ入ルベキモノカトモ思ヘド、下略ノ語ノ解說甚ダ迂遠ナルノミナラズ、係辭辨ノ說ニ據ルトキハ此ノ用法ノ「の」ハ所謂「かり」ノ「の」トハナラズシテ、上下ノ名詞ヲ繫グ「の」トナル。

と批評せり。係辭辨が下に略語のある如くいひたるは文法上の論にあらずして意義を說きたるものなることといふまでもなし。然れどもこれが組織をば連體格と體言との結合とし、その意に於いて感動を寓したるものとしたるは眞實に近づきたりと評すべきなり。しかも未だその正しき見解を得たりといふことを得ざるなり。廣日本文典にはそれをば呼掛の結法といふ名目にて說けり。曰はく

呼掛ノ結法　呼掛クル語意ニテ文ヲ結ブコトアリ。但シ上ニ必ズ「の」又ハ「が」アリテ下ヲ形容詞ニテ結ブ場合ニ限ル。

といひて吾人のあげし例の如きものをあげ示し、さてその說明に曰はく

此ノ「の」「が」(第二八二節ノモノ)ハ主語ヨリ說明語ノ形容詞ニ係ルモノニテ(上下名詞ナルヲ繫グ第二八三節ノ「の」「が」ニアラズ)形容詞卽チ結法ヲ成スナリ、猶「音のさやけきかな」「うつろふがうきかな」と言ハムガ如シ。他ハ推シテ知ルベシ。

といひ、なほ別記に、再びこの意を委しく說きて、終りに

形容詞乃チ文ヲ結ブナリ、名詞ニテ結ビタルニアラズ。

といへるが、その形容詞の語幹に「さ」を添へたるものは誰人の見ても體言なるに、それを以てたゞの形容詞とすといふことは、明かに矛盾なり。それ故にこれを如何樣に解釋の詞を丁寧にしたりとも、それの文法上の本質を認めぬ以上は吾人の心服を得べき筈なきなり。

さて、かの形容詞の語幹に接辭「さ」を加へたるものは、誰もこれを體言と認めて一人も例外無きものなるが故に、如何に强ひてもこれのまゝにて述格に立てりとは考へられぬものなり。さりとてこれが省略體にあらぬことも大槻博士の論ずる所にて明かなり。而してこの句の組織に大關係ある「の」「が」は主格を示すこともあ

れど、又連體格を示すこともあるものなり。この「の」「が」が主格を示すものならば、下なる語は用言ならざるべからざるものなり。然るに下なる語は明白に體言なり。下が體言ならば上の「の」「が」は明かに連體格を示すものならざるべからず。而してこれをすなほに熟視したる時に誰人もこれは連體格と體言との結合なりといふことを認むるに相違なからんが、これを完備したる句と認むる時に、主格述格の對立といふ如きものにてこれを説明し得ざる事は明白なると同時に、余が主張する所の喚體の句なりと認めざるを得ざるなり。

從來この種の句を學者の認め得ざりしは多く國語の實地の法則を輕蔑して、西洋文典の摸倣をのみつとめたるに基づくものなるが、西洋文典にはその分類にも説明にもこれに似たるもの無くして、その四種の區別も吾人のいふ述體の句の內部の小區分に止まるものなり。それ故に、これらの句は多くはすてゝ顧みざりしものなるが、その間に於いて大槻博士の之をとりたてゝ一の完備句と認めたるは大なる功績と認むべきものなり。然れども、述體の句の構成法を以て之を説明せむとしたるが爲に、その論の不徹底に終りたるは遺憾といふべきなり。しかもかく不徹底に終ることは勢の然らしむる所當然の事といふべし。實にこの種の句は述體の句の外に特立して存するものにして、これを解釋するにただに述體の句を

以てしては不可なるものなり。元來喚體の句は直觀的のものにして、他がこれを受くるにも亦直觀を以て感受すべきものにして、決して理解せしむるを目的としたる發表にあらずして直感せしめむとするを目的としたるなり。感動は一元性にして非分解的のものなり。今若し、これを解釋せむとする時にはこゝに直ちに二元性の了解作用の乘ずる所となりて、分離思考によらざるべからざることゝならむ。この故に一旦解釋を施せばこれ既に述體の文を以て之に替ふることになるものにして、その味は間接的のものとならむ。喚體の句はいづこまでもその意を味ふべきものにして說明解釋にわたれば第二義に墮するものなり。

かくの如くなるが故に、この種の文が一の完備體なると同時に「の」「が」は連體格を示すもの「さ」はその用言を結體せしむるものたることは偶然のことにあらずして必然的のものたることを知るを得む。さてこの喚體句の組織を見むが爲に、上の諸例を集めて見れば次の如し。

一、(あはれ)うるはしき(連體格)花かな。

二、みかさの山に出でし(連體格)月かも。

三、音の(連體格)さやけさ。

四、こゑの(連體格)かなしさ。

五、みるが(連體格わびしさ。

六、うつろふが連體格うさ。

七、神ならぬ身の(連體格)かなしさ(よ)。

これらを見るに「一」には上に「あはれ」といふ感動副詞あり「一」「二」「七」には下に「かな」「かも」「よ」といふ助詞あるが、その他にはさるものは無し。こゝにこれらを通じて見れば、一面に於いてそれら副詞、助詞はこの種の句の組織には絶待の必要條件にあらずといふことの認めらるゝが、一面に於いて、この種の句は

連體格――中心骨子たる體言

といふ形式を以て構成せられたるものなることは明かなり。

上來、說ける所にて喚體の句の形式の著しく闡明せられたるを見るべし。今上に闡明せる形式を以て上にあげたる

あはれうるはしき花かな。

みかさの山に出でし月かも。

の構成に照し見るに、

(あはれ)うるはしき(連體格) 花(中心骨子) かな。

みかさの山に出でし(連體格) 月(中心骨子) かも。

の如く、感動の副詞及び助詞は副次的のものと見られ、その中心は全然同じ組織をとり同じ性質の句たるを見るべきなり。これを以てこれらは感動を寓したる一完體の句なるは疑ふべからずして、上にあげたる如き

あはれ(これは)うるはしき月(なる)かな。

の如きものゝ省略體なりといふことの强言なりといふことを知るべし。こゝに余は、なほこの喚體句の他の例を少しくあぐべし。

面白のけしきや。

情なの人や。

の如きも喚體句なり。又

白雲のこなたかなたにたち別れ、心をぬさとくだくたびかな。(古今集、雜別)

なつくさの上はしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな。(古今集、物名)

とゞむべきものとはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心か。(古今集、春下)

淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。(古今集、春上)

の如きも然り。これらは從來多く構造不完全なるものとせられたり。然れども
これは喚體句として立てるものにして述體句の智識のみを有する人々には全く
之が說明を下すことを得ざるものなりとす。

今この喚體の句の成立を考ふるに之を材料的に見れば、種々あるべしといへど
も、その形式をいへば、上にいへる如く常に體言を中心としてこれに對して連體格
の語を伴へることあるのみ。而してその形式は主格述格の關係をとるものにあ
らずして、一個の體言を對象として之を呼び掛くるに止まれり。喚體の句の形式
はかくの如く單純なりといへども、しかも單なる呼格にあらねば、句としての必要
條件をば有す。そは他にあらず。上にいへる如く連體格の語を伴ふを主として
時としては之に關して必要なる助詞を伴ふことあるものなりとす。かゝる際に
於ける連體格又は助詞はこの類の句の成立の上には必要にして缺くべからざる
ものにして、それらの有無は實にそが句として完きか完からざるかの區別をあら
はすに重大なる關係を有する必要の成分たるなり。而してこれらの構成によれ
る句は別にこの外に省略せられたりとすべき要素もなく、そのまゝにて一定の意
義を有するものなれば、之を完備句とするは不當にあらざるなり。從來はかくの
如きは副次的成分にして必要のものならずといはれたれど當らず。吾人も亦こ

れらを副次的成分といはむ。されど、必ずしも必要ならずとはいふべからず。副次的といふことは第二義的なりといふことに止まり、必ずしも不必要といふ意義にあらざるは明かなり。

さてかくの如く論定したる上に更に注意を加ふれば、喚體の句には二の區別をなすべきことを見る。今これをその思想より見れば、希望をあらはすものと感動をあらはすものとの區別なり。これをその形式より見れば、體言と助詞とにて句たる資格の成立するものと、助詞はとにあれ、體言と連體格との存在とにて句たる資格の成立するものとの區別なり。この二樣の見解よりなれる區別はこの者を二重の見地より見て分ちたるに止まるものにして、希望をあらはすものは體言と助詞との存在を以て句たる資格を得、感動をあらはすものは、體言と連體格との存立を以て句たる資格をうるなり。之によりて喚體の句をば、二種に分つことを得べし。一は希望の喚體にして一は感動の喚體なり。希望をあらはす喚體句とはたとへば次の如し。

あはれしりたる人もがな。

この句は形は單純にして主格述格の分裂無く、一元性の發表たるものにして意義より見れば、上に述べたる單純に感情をあらはしたるものとは稍異にして希望を

あらはしたるものなり。而して、その組織はこの例にては「人」といふ體言が上に「しりたる」といふ連體格の語を伴ひ下に「もがな」といふ助詞の伴ひてあらはれたるものにして感情をあらはすものと同じ樣に見ゆれど、よく考ふれば必ずしも同一にあらざるを見る。それはこの場合にその連體格たる語を除きて單に

人もがな。

と云ひたるのみにても希望の對象明かに示され、しかも希望の意明かなり。さればその連體格たる「しりたる」といふ語の有無はこれが句たることの條件としては大なる價値あるものにあらざるを見る。それ故に、かの感情を主とする句とは稍趣の異なるものたり。この種の句には上の如く連體格の語を伴ふこと少からず。

たとへば

老いず死なずの藥もが。

君が八千代にあふよしもがな。

の如きこれなり。されども、それらの連體格はたゞその體言に對しての修飾の用に供せらるゝのみのものにして希望の本意には關係なきこと明かなり。況してこの希望の喚體の句の成立の必要條件には決してあらざるなり。さればその本體は結局「人もがな」といふ如き形式の上に存すといふ事は疑なきことなるが、その

「人もがな」といふものを更に分解すれば「人」と「もがな」との二になるべく、「もがな」といふ助詞を除きて單に「人」とのみ言ひたるのみにては聽者に一定の意味を起さしめ得べからざるにより完備したる句とは認められず。それ故にこゝにその助詞が必要なるものなりといふこと明かなり。さて助詞のうち希望の意をあらはす本體は「が」にして、その他は「が」を助くるものなり。卽ちこの種の句にては中心骨子たる體言と「が」といふ助詞とが、その必要條件にして、連體格の有無はこれに深き關係無しと考へらる。これは希望といふものは、その對象を示し、それに對して希望の意をあらはさば十分なる筈にして、その希望の意は助詞「が」にて十分にあらはさるるものなるにより、それとその對象たる體言とが存在すれば、その句の完備すべき條件は充されたりといひて可なる道理なり。次に感動をあらはす喚體の句とは上に多くあげたる次の如きものなり。

あはれ、うるはしき月かな。

これらは「あはれ」といふ感動の修飾格を有し、又「月」といふ體言はそれに對する連體格の語と「かな」といふ助詞とを伴へり。今この「あはれ」を除きて

うるはしき月かな。

としてもその意は明かに認められ、句としての資格に於いて缺くることを認めず。

されば「あはれ」といふ如き修飾格の存否はこの句の資格上の必要條件にあらざるを見るなり。かくてこの例の如きは「かな」といふ助詞を除けば、句としては不備のものとなる感を與ふれども、

もれいづる月のかげのさやけさ。

の如く、主たる體言の下に助詞を伴はでも句たる資格に影響を及ぼさぬもあればこの種の句には、かの希望の喚體のよりもその助詞の必要の度の低きものなることを見るべし。之に反してその連體格たるものを除き去ることは何たる價値の存否に至大の影響を與ふ。即ち

あはれ月かな。

の如きは感動の修飾格も助詞も伴へども、完備せる句たる資格を十分に認め難し。而してこれが不備なる點は連體格の缺けたる點にあり。この故にこの種の句にはその體言を限定する連體格の存在を以てその成立條件の一とするなり。何故に、この二者が必要の條件となれるかと考ふるに先づその感動の對象の必要なるはいふまでもなく、次にその感動を寓せる點が如何なる所に存するかを示す爲にそれの狀態を指示するものを要すべくして、それが連體格としてあらはるゝものと考へらる。然らば、その狀態を指示する語が何故に連體格としてあらはるゝか

といふに、これ實にその對象が、體言たる故に、而してその體言はその中心骨子として動かすべからざるものなるが故にそれに對しては必ず連體格として添加せらるべき筈にしてこの外の方法は存せざるを以てなり。

以上述べたる所によりて喚體の句は、その構成上より見ても、意義上より見ても二樣に分つべきは明かなり。卽ち一は希望の喚體にして、一は感動の喚體なり。その關係は次の表の如し。

	意義	構成上の必要條件
希望喚體	希望	中心たる體言と希望終助詞
感動喚體	感動	中心たる體言と連體格

以上を約言すれば希望喚體は對象たる體言と「が」「がな」といふ終助詞との二因子によりてなり、感動喚體は對象たる體言と連體格との二因子によりて成るといふを得べし。

希望喚體は略して希望體といふこととあるべし。然れども、從來の希望體といへるものは必ずしも之に該當せず。たとへば、

(一)君が代は幾久しかれ。

(二)明日は故鄉に歸らばや。

(三)鳥も啼かなむ。

の如きものをば從來希望體といへり。これらは希望をあらはせるは勿論ながらそはたゞ意義上の事にして、句の性質形體の上より見れば、決して吾人の希望喚體と同一のものにあらず。(一)の如きは從來の學者の命令體なること明かなり。今若しこれを希望體といはゞ命令形を述格にもてるものゝ大多數は希望體たりといふべし。(二)(三)の如きは叙述體たること明かにして、たゞ述格の語が希望の意をあらはせりといふに止まる。而してこれらはすべて性質上形體上いづれも述體にして普通の說明體と異なるは、その述格の上に些少の變形を施したるによれり。この故にこゝにいふ希望の喚體とは性質と構成とを異にせるものなれば、明かに區別を認めおくべきものとす。

希望をあらはす喚體は上にいへる如くその對象をあらはす體言と希望の終助詞「が」「がな」との存在を成立の必要條件とするものにして

花もがな。

人もがな。

の如き形を以て最も簡單なる形なりとす。しかもその「が」は又古くは「がも」といへるあるが、「が」といへるを本體とす。卽ち

老いず死なずの藥もが。

の例にして知るべし。

すべて希望の喚體は必ず說者自身の思想を直覺的に投射的にあらはしたるものなれば、その希望をなすものは誰なるかを示す必要はなく、又その希望の對象はそのあらはされたる體言なればその他に之を示す必要もなく、その希望の意をあらはすことは終助詞にて示されたれば、これにて十分に句たる價値をあらはせるなり。之を述體にていひかふる事はなしうべしといへども、かくの如くすれば、その意義は相通ずることありとすとも、思想の上には大に變更せられたるものといふべきなり。

希望の喚體の對象たる體言には連體格を伴ふことあり。次の如きこれなり。

老いず死なずの藥もが。

君が八千代にあふよしもがな。

これらの連體格はたゞその體言に對しての修飾の用に供せらるゝにすぎずして、希望の意には關係なく況して希望體の句の成立の必要條件には決してあらざるなり。しかもその連體格は複雜なるもの少からざるは上にあげたる例にて知らるべし。

感動をあらはす喚體の句は之を略して感動體といふことをうべし。然れども從來の學者が感動體といへるものとは實質異なり。從來の學者の感動體といへるものは、

みるわれさへに心やはらぐよ。

われはあたゝかきこよひの夢に入らむかな。

の如きものをさせるなり。然れども、これらは既にいへる如くその句の様式はほ敍述體といふべきものなり。若しかくの如きものを以て感動體なりといはゞすべての敍述體は僅に感動の助詞を終りにとるによりて感動體となりうべきことなり。されど、句の性質上の區別はかくの如き淺薄なる表面的のものにあらず。今あげたるものゝ如きはたゞ感動を寓せられたる敍述體にすぎずといふべし。

眞の感動の喚體といふべきものは、

一、あつばれの武者ぶりかな。

二、きたなきみ方の振舞かな。

三、あな情なの御事や。

四、あゝげにも樂しき心よ。

五、あゝ山中の青葉のうつくしさよ。

の如きをさす。これらは多く上に感動副詞を戴き、下に感動の助詞「よ」「かな」等を伴へり。然るに一、二の如きは上に感動副詞なく、三四以下も感動副詞を除きても句として明かに意は認めらる。この故にその感動副詞の存在はこの種の句の必要條件にあらざること明かなり。又「かな」「や」「よ」等の助詞は上の例にては必要なる部分となせど、又既に屢いへる如く、

月の影のさやけさ。

の如きもあれば、それらの助詞も亦かの希望のものよりは遙かに必要の度低きものといふべし。之に反してその連體格の語を除く時は句としての價値を失ふに至る。この故にこの種の句には連體格の語の存在を必要條件とはするなり。

感動喚體の句はその成立より見て二の種類を見る。一は體言を骨子として、それに狀態をあらはす用言又は情態の副詞をば連體格として加へたるものにして次の如きものなり。

ありがたの情や。

あな情なの御事や。

あはれの物語や。

流れて早き月日かな。

きたなきみ方の振舞かな。

これらは感動の喚體に普通なる根本の形式と考へらるゝものにして述體の句にていはゞ、主格たるべきものを骨子とし、その述格たるべきものを連體格としたるものなりとす。次には述體の句にていはゞ主格にあたるべきものを連體格として、述格にあたるべきものを骨子たる體言とせる形式のものにして、この場合の骨子たる體言は形容詞の語幹又は情態の副詞に接尾辭「さ」を加へて結體せしめたるものたるなり。その例

もれいづる月の影のさやけさ。

あゝ山中の青葉のうつくしさよ。

最後の姿を今一目みざりし事のくやしさよ。

いとかく夜をだに明したまはぬ苦しげさよ。

の如きなり。既にいへる如く從來はこれらを一種の格としたるはよけれど、その述格と認めたるものが、體言たるにまよひて殆なにらの説明をもなしえざりしものなり。これらは既に論ぜる如く感動喚體の特徴にして、かく形容詞の語幹を以てしてもなほ之を體言化せずばやまざりしを見るに足るべし。

感動喚體の句の成立は大要上に述べしが如くなるが、なほ仔細にその成立を說

くべし。

先づ、その喚體の骨子たる體言が本來の體言たる場合と、形容詞の語幹、情態副詞に接尾辭「さ」を加へて體言化したるものなる時との區別によりてその句の構成方に多少の差異あるを見るが故にこの二樣の場合を別にして說くべし。

本來の體言が、骨子たる場合にそれに對しての連體格たるものには形容詞なるあり、動詞なるあり、存在詞なるあり、副詞なるあり。先づ形容詞を以てかゝる場合の連體格とするものは二樣の方法あり。一はその語幹を以てそれの連體格をなすものなり。この時は格助詞「の」を介とす。次の例の如し。

面白の春雨や。
心幼なのわざや。
やさしの花や。
口をしの花のちぎりや。
あなかひなのわざや。
あな恐ろしの物語や。

二はその連體形を以て直ちにそれの連體格となすものなり。次の例の如し。

きたなきみ方の振舞かな。

たえてつれなき君が心か。

動詞を以てするものは普通の連體格として、その連體形よりその體言に直ちに接するものにして次の例の如し。

心をぬさとくだく旅かな。

ちる花ごとにたくふ心か。

三かさの山にいでし月かも。

しかるに又、動詞の連用形を體言の資格に立たしめたるものを「の」助詞にて導きてこの連體格に立たしめたるあり。その例

あなしほたれの波のうきねや。

存在詞の類にては又その連體形を以て直ちにこの連體格に立たしむるなり。その例

かこちがほなる我涙かな。

妙なる笛の音かな。

淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。

又副詞を以てこの連體格に立たしむるものあり。この時は「の」助詞にて導かる。

あはれの物語や。

の時は

　あつぱれの武者振かな。

次に形容詞の語幹又は情態副詞に接尾辭「さ」を加へて體言化したるものを骨子としたるものに對しての連體格たるものは普通體言を以てその連體格とす。この時は

　もれいづる月の影のさやけさ。

　目にはみえずて音のさやけさ。

　あゝ山中の青葉のうつくしさよ。

の如く「の」助詞にて導かるゝを常とす。次には動詞の連體形を以て準體言としそれより格助詞「が」を介して連體格に立たしめたるものあり。その例

　心づからにうつろふがうさ。

　毛を吹き疵をいふがわりなさ。

　長きよのやみにさへまどはむがやくなさ。

　里近くありときゝつゝ見ぬがすべなさ。

次には動詞又は動作存在詞の連體形を以てそれが連體格として立たしむるものあり。その例

　さゝがにの絲をたのめる心細さよ。

よのみじかくてあくるわびしさ。

これは形は普通の連體格の如くに見ゆれど、實はさにあらずして、準體言としてのものが連體格に立てるものと思はる。而してこれを若し述體句とせば「絲をためる」「あくる」は準體言として主格に立てりとすべきものなり。然れどもこれは明かに連體格と體言との組織によれるものにして述體の句にはあらざるなり。

感動喚體の骨子たる體言は多くは終助詞「が」「がな」若くは間投助詞「よ」「や」を伴ひてあらはるゝものなり。

ことわりしらぬ我が涙かな。

流れて早き月日かな。

うつろひ易きわが心かも。

しら露を玉にもぬける春の柳か。

おもしろのけしきよ。

ありがたの詞や。

思ひ得たる事のうれしさよ。

然れども、またかゝる助詞を伴はぬものあり。たとへば、

わがせこが衣のそでをふきかへしうらめづらしき秋のはつ風。

天の原富士の煙の春の色の霞になびく曙の空。

の如し。而して形容詞の語幹に「さ」をそへてつくれるものなるときにはことにかかるもの多しとす。たとへば次の例の如し。

秋はぎをしがらみふせてなく鹿の目には見えずて音のさやけさ。

夜のみじかくてあくるわびしさ。

長きよのやみにさへまどはんがやくなさ。

すべて喚體の句はその句の修飾格として感動の意ある修飾格を伴ふことあり。

希望の喚體にては

あはれしりたる人もがな。

感動の喚體にては

あはれ妙なる笛の音かな。

あゝげにも樂しき心よ。

あらおもしろの歌や。

あつぱれけなげの振舞や。

の如きこれなり。

以上の喚體の句は主として文語に用ゐらるゝものなるが、口語にては如何にと

見るに、希望の喚體は口語には存せずと考へらる。感動の喚體も口語には稀なるものなり。されど、全く用ゐられざるにあらず。今人の口語體の文章中に

幹の中程に一流れながれた海の美しさ。

一樣な節の間々に「何とか何とかやあい」と一齊に囃す面白さ。

眺められる月に一點の曇もなく、眺める我が心に一塵の汚もないうるはしさ。

などいへる文をあらはせるは、これ口語にもこの種の句の行はるゝことを證するものといふべし。

第四十六章　述體の句

喚體の句が情意を投射して他の直觀に訴ふるに對して述體の句は理性的發表にして他の理解に訴ふるものにして、この類の句はすべて述格を中心として構成せらるゝものなることは既に述べたる所なるが、その述格を中心とすといふことは如何なる意なるかといふに、先づこの種の句は吾人の思想の了解作用の言語に發表せられたるものにして、論理學上に所謂命題の形式をとれるものなり。而してその意識の統一點がその述格に寓せられてあるものなるなり。この故にこれらには主格と賓格との對立ありてこの對立に對してこれを結合する述格の存す

るを模範的の形式とす。この形式を言語の上に明かに示せるものは形式用言を以て述格とせるものにして、

松は常盤木なり。（主　賓　述）

松は緑　なり。

の如きこれなり。されども實質用言を用ゐる場合にはその賓格に當る觀念と述格とが一の語にてあらはるれば、主格と述格との對立せる如くに見ゆるなり。

花　赤し。

鳥　なく。

の如きものこれなり。これを以て通俗的の説明にありては主格と述格と對立すといふなり。されどこれは何處までも通俗的の説明にして嚴密なる意味にての學術的説明とはいふべからず。かくて又主格は時としては句中にあらはれざることあり。而して述格は如何なる場合にも缺くべからざるものにしてこれを考へずしてはこの種の句は全然考ふべからざるものなり。

以上の説明はなほ未だ外面的たるを免れず。更にこれを内面につきて見れば述體の句は二元性の句にして主格と賓格との對立ありて、後二者を統合する述格あるべきこと既に屢々述べたる所なるが、その主格と賓格とは其の句の實質卽ち

觀念內容を充すものにして、述格はその觀念內容として對立せる二の者を結合して句としての統一を與ふるものにして、この述格なくば、この種の句は終に成立すべきにあらず。即ちこの種の句の生命は述格にやどれりといふべきなり。これ實に思想は分解より始まりて再び之を統合すといふ心理的事實に吻合するものにして述格がこの種の句の中心たる內面の理由こゝに存す。

述體の句はその述格を中心として成立つといふ點に於いてはすべて一にして必ずしも區別せらるべきものにあらず。されどその發表せられたるもの丶形式又は態度を檢すれば、又おのづからそれらの間に於いて區別を施しうべき勢を呈せり。今この點につきて研究せむとす。

今この區分を施さむとするにあたりて先づ考ふべきは、それらの區分は何を標準として施さるべきか。その分釋の原理を檢せざるべからず。從來の學者が文と認めたるは吾人の述體の句のみなるが、既にいへる如くそれらの學者は之を說明敍述、疑問、命令、感嘆などの種類に分てり。しかもその分釋の原理は那邊に存するかを明言せるものを見ず。若し、單にそのあらはす意義によりて區分すとせばその種類は上の四種にかぎるべからず。即ち推量をあらはすもの、假定をあらはすもの、義務をあらはすもの、受身をあらはすもの、使役をあらはすもの、敬意をあら

はすもの、否定をあらはすもの、反語をあらはすものなど數限りなくあらはるべし。かくの如き事は何等の必要もなき贅物にして、文法上殆ど、無意義のものといふべきなり。然らば、主格と述格との關係を以て分釋の原理とせむといふ人あらむ。されど、主格と述格との關係は吾人の述體の句に於いては、一にして二にあらず。これを分釋の原理とすることかなふべくもあらず。こゝに於いて、かの命令體などの說明に往々見ゆるが如く、主格が、常に句中にあらはるべきか否かの點によりて區別すべしといふ人あらむ。まことに所謂命令體にありては主格は往々句中にあらはれずして十分にその用を果すことあり。又その主格たるべきものが、呼格の形にてあらはるゝことあり。この點より見れば、これは他と區別せらるゝに確たる根據となるが如くに見ゆれど、これ亦必ずしも然らず。卽ち所謂叙述體の句にありても主格をあらはさゞるを普通の形とするものあり。又主格たるべきものを呼格としてあらはすものあり。されば、單にこの點のみを以て命令體、叙述體の區別を立つることは能はざるは明かなり。さらばかくの如く、主格の隱顯する狀態に基づきて、これらの句の分類をなし、或は顯主格の句、隱主格の句などいふ如き分類をなさむか、これ亦一見可なるが如くなれども、その主格の隱顯を第一の條件としては一定の分類をなしうべきにあらず。卽ち主格は時ありては形をあら

はし、時ありては形を潜む。たゞ說者の心意の狀態に任するのみ。かくの如きことは決して確乎たる分類の規準となすべきものにあらざるなり。茲に於いて、抑も述體の句の基本として立つ所のものは何ぞと翻つて考ふるに、實にその述格にあり。卽ち述格を基本として、はじめて述體の句は成立するものなれば、述格を離れて他に分釋の原理をたづぬるは本をすてゝ、末に趨れるものにあらざらむや。吾人はこゝに述格にその基礎を置き、これが上に分類の原理を求めむとす。

かく分類の標準の基礎は述格にありとはいふものゝ述格は、すべてに共通するものなれば、單に述格を標準として分類すといふが如きは無意義の事に近し。然らば述格に用ゐらるゝ語によりて區別を立つべきかといふにこれも或は一の方法たるべしといへども、その區別は恐らくは器械的たるに止まるべし。さらばその述格の語の意義によらむか。これもはじめに論ぜし如く、幾多の種類を分ち得べしといへども、恐らくは文法學上の根據なきものならむ。前述の二者既に標準とするに足らずとせば、こゝに吾人の問題とすべきものは、その述格の態度なりとす。しかもその述格の態度といふことにつきてもなほ研究すべき餘地存す。述格の態度といふことは要するに陳述の態度といふに歸すべし。その陳述の態度といふものにつきて考ふるに、吾人はこゝに二樣の見地に立つことをうべし。一

はその主格の方面より見ての陳述の態度なり。一はその賓格の方面より見ての陳述の態度なりとす。陳述といふものは主格と賓格との統合をなすものたることはいふまでもなき所にして、その陳述の態度にもし差別を認むべしとせばそはたゞ陳述の方法の差別といふに止まらずして、主格又は賓格の方面より見て如何なる陳述の態度ありやといふことを標準としての差別たるべきものとす。

こゝに吾人は主格の方面より見て觀察する時に如何にその陳述の態度を區分すべきかと考ふるに、その主格の如何につきて考ふれば、第一人稱の句、第二人稱の句、第三人稱の句の三種に分つことをうべし。すべての説話文章はこれを語る者なくばあらず。次にはその説話文章が獨語にあらざる限り、その對手としてその説話文章を受くる者なくばあらず。さて又多くの場合には、その陳述の話題たる第三者を要するは明かなるが、その陳述がその陳述者自身を主格とする場合に於いてはその句は第一人稱の句といふべく、その陳述が、その相手の者を主格とする場合に於いてはその句は第二人稱の句といふべく、その陳述が、第三者を主格とする時は、その句は第三人稱の句といふべきものなり。而して主格の如何に基づきて觀察する場合の陳述の態度は上の三種より少かるべきにあらず、又多かるべきにあらざるは明かなれば、この三種の區別は理論上必然的のものたるなり。こゝ

に吾人は先づこの三種の區別を述體の句に於いて認むべきものなりと主張す。

かくて陳述の態度の區別は上の三種の區別にて盡き、又他の方法なきかと考ふるに、吾人はなほ他の方面より觀察して區別を立てうべし。その區別の標準の存する點は、賓格(實質用言を用ゐる場合にはこの賓格に該當する觀念の表現を如何なる態度にて陳述せるかといふことに存す。即ち一は説話者が、その觀念内容をば自身の思考として表明したるに止まる態度のものにして、他は説話者が、ある者に對してその賓格の觀念の實現を要求する態度を以て陳述したるものなり。はじめのは思考の本質たるものにしてその形式は論理學上の命題の形に一致するものなり。これ即ち述體の句の本源の形のものにして今姑くこれを叙述體の句といふ。後のは二元性を有するものとはいひながら、その變形とすべきものにして、世に命令體といへるものなり。叙述體の句たるものはいづくまでも思考の性質を離れず、思考の發表形式の最も根本的普通的のものたり。然るに、命令體と名づくべき句は説話者がたゞ單獨に自己の思想としてあらはすに止まらずして、必ず、外界に存する或る者に對しての要求的態度をとれるものなり。而してその述格の語は説明をなすにあらずして、一種の要求をなす態度に出づるものなり。今これらをなほ他の方面より見れば、叙述體の句は、主格を中心としてそれに基づき

あらはせる叙述の發表なり。命令體の句は說話者を中心としたる要求の發表なり。この故に甲は靜的の發表なるに對して、乙は動的の發表なり。卽ち命令體はその賓格(實質用言を述格とする時はその用言の觀念內容)の發現を要求する態度の發表にして、著しく動作性を帶ぶ。この故にその述格として用ゐらるゝ實質用言には形容詞を用ゐることなきなり。されば、この二者の區別は全く賓格の內容を如何なる態度をとりて陳述せるかに基づくものにして、主格に卽しての區別とは全く殊なる標準によれる區別なりと知らる。今二者の特色を對比すれば次の如し。

叙述體	命令體
思考をあらはす	意向をあらはす
說明的	要求的
靜的	動的
主格を中心とす	說話者を中心とす

この命令體と稱するものは、必ずしも命令をあらはすに限るものにあらずして、或は許容をあらはし、放任をあらはし、又假容をもあらはすものなり。この故にこれを命令體と稱するはたゞ世間通用の名目を襲用したるまでのものなり。さて上

述の如くなるによりて吾人はこの述體の句をば二に分ち、一は叙述體の句と稱し、一は命令體の句と稱す。この二者共に二元性を有するものにして述格を中心とするに於いては一なれども、その陳述の態度に差違あることは明かなりとす。

叙述體の句はその形式に於いては思考の發表の模型的のものといふべきものなるが、その思考の態度を考ふるときは、吾人は或はこれを思考そのものとして單純に發表したるものと、ある思考に對して疑惑的地位にあるを示し、その解決を得むと望める一種の要求的態度に基づく發表との二に分つことを得べし。この區別はその句の根本的の形式に於いては殆ど一致し、僅かに疑ひ又は問ふ意をあらはす爲の語(代名詞、副詞、助詞等)を句の中に有するによりて他と區別せらるゝに止まるものなれば、叙述體の句と命令體の句との區別の如き著しき差違あるものにあらず。されど、その陳述の態度には多少の差違あるものなれば、或は分つを可とすることあるべし。この故に今姑く二者を區別して叙述體の基本的形式のものを說明體といひ、乙を疑問體といふことゝすべし。かくして述體の句をば、その賓格的方面よりしての陳述の態度によりて分くれば、上の三體となるといふことを知るべし。而してこの三體はその述格の語の形の上に一定の要約存す。次にこれをあぐべし。

説明體の句は事物の説明をなすものにして普通に最も多く用ゐらるゝ句の體なり。説明體の句の述格は主格と賓格との結合をなすのみにして、單なる陳述をなすを普通とし、その述格は用言の終止形を用ゐるを根本的の形式とす。而してこの形の述格は他の二體にはなき所なり。

月清し。

花咲く。

松は綠なり。

さてその述格にはこの根本形式の外、種々の變態あり。その變態の第一はその述格の上に特別の係助詞ある場合に、その述格が用言なる時には特定の活用形を以てこれに應じたる終止の形とすることとなり。その特別の係助詞とは「ぞ」「なむ」「こそ」の三にして、これらいづれも强き指定をなすものなるが、「ぞ」「なむ」が上にありてこれに勢力を及ぼすときはその述格たる用言は連體形を以て之に應じて終止す。その例

天下有數の淸絕なる松原とぞおぼえし。

こゝをなむ蘆の灘とはいひける。

又係助詞「こそ」がその述格に勢力を及ぼすときはその述格たる用言は已然形を以

て之に應じて終止す。

御身は不可能の事をこそのぞませたまへ。

人はかゝる境に立ちてこそはじめてその全能全力を發揮しうるものなれ。

變態の第二第三は、助詞にてこの體の句の述格の終をなすものなるが、かく句の終止たりうる性質を有する助詞は係助詞、終助詞、間投助詞の三種類のものにして、そがうち、この種の句の終止に屢々用ゐるものは係助詞の「ぞ」終助詞の「かな」間投助詞の「よ」の三なり。而してこれらはいづれもその助詞固有の意義を以てその句に多少の潤色を加ふるものなり。かくて變態の第二はこれらの助詞を述格たる用言の連體形に附屬せしめて終止をなすものなり。その例

今は遁れぬところとおぼゆるぞ。

こはげに健全なる村を造るの二要素なるぞや。

興ある事をも承るかな。

われはあたゝかきこよひの夢に入らむかな。

みるわれさへに心やはらぐよ。

その變態の第三は賓格たる體言に、これらの助詞が附屬し、その賓格の語と、その助詞と相待ちて一となり、こゝに特別の述格をなすものなり。而してこの形のあら

はるゝは必ず上に係助詞ありて、それと相呼應するものなり。その例

われは元帥ぞ。
それは無き名ぞ。
見る夢のうつゝになるはよのつねぞ。
こはありがたき事かな。
これこそは月よ。
汝は平家の侍よな。
彼ぞ羿の少將な。

されば、これらはその賓格と「ぞ」「かな」「よ」「な」などの助詞との合體せるのみの力にあらずして、上にある係助詞がこれらをして述格たらしむるに、大なる勢力あるものなるを忘るべからず。

疑問體の句は疑問をあらはすものにして形式に於いては說明體と大差なく、句中に疑問の意をあらはす用をなす語(代名詞、副詞、助詞等)の存するを以て識別するを普通とす。この體の句の述格は用言にて終る場合と助詞にて終る場合との二樣あり。その用言にて終る場合には、連體形をその述格の形として使用するものなり。この際にはその上に「ぞ」「や」「か」といふ係助詞のありてその力をその述格に

及ぼせるを普通とす。
何ぞその言の悲痛なる。
夜や暗き。道やまどへる。
梅白し。昨日や鶴をぬすまれし。
吾人は彼によりて何物をか得たる。
大氣はしかく清朗なり。何ものか予の心を曇らしむる。
その助詞にて終るものは、上にいへる「ぞ」「や」「か」といふ助詞を用ゐるものにして、これらを述格たる用言に附屬せしむるものと體言にこれらを附屬せしめて述格をなすものとあり。その述格たる用言に附屬せしむるものは「や」は用言の終止形に「ぞ」「か」は用言の連體形に附くるものとす。その例
夜半の鐘聲の響によりて客船に到るものありや、なしや。
汝もまた來れりや。
春は終に來らざるか。
われ御身の爲に一曲を奏づべきか。
御身は何人にてましますぞ。
體言にそれらの助詞を附屬せしめて終止するものは(この時は「か」「ぞ」の二の助詞

のみ用ゐられ、「や」は用ゐず。）次の如きものをさす。

榮譽人望はこれを求むべきものか。

それは人の使か已れが言葉か。

汝は何者ぞ。

その間國を建つる者幾何ぞ。

これらは、これを學術的に說明すれば、その體言は賓格に立てる語にして、その賓格とこれらの助詞とが、相待ちて合體して一の述格として取扱はるゝものなり。この點は說明體の述格の第三の變態と略々性質を同じくするものなり。

以上疑問體のすべてに通じて「ぞ」の助詞の用ゐらるゝものと、「や」「か」の用ゐらるゝものとの間に多少の差違あり。そは「ぞ」には疑問の意なきものなれば、これが用ゐらるゝ句中には、いつにても別に必ず疑問の意をあらはすに足るべき代名詞、副詞の存すべきものなり。「や」「か」はそれ自身に疑問の意あるものなれば、必ずしもこの必要なしとす。

なほ口語にありては文語の疑問體にあらはるゝが如き現象のほか、外形上全く說明體と異なることなきもの少からず用ゐらるゝ。

花が咲いた。

木がある。

の如きこれなり。これはその終末を平聲にいへば說明の用をなし、それを上聲にいへば疑問の用をなす。而してその句の組織は同一なり。かゝる現象は文語になき所なり。

命令體の句は命令又は禁制の意をあらはすものなり。その述格は動詞存在詞及び複語尾の命令形を以てあらはし、又はそれらの命令形を有する用言に禁制の助詞「な」を加へてあらはすなり。これは命令の場合と禁制の場合とに分ちて說くべし。その命令をあらはすにはすべて上述の命令形にてあらはす。その例

汝曹欽んで之を受けよ。

はや木高かれ。

余をして少しくこれを說くを得しめよ。

禁制をあらはす方法は三あり。一は「無し」に基づける、形容存在詞の命令形「なかれ」を述格とするもの。

人々之を誤ることなかれ。

人の惡をいふことなかれ。

二は禁止の助詞を終止としてあらはす。この時にはその「な」は上述の用言の終止

形につくるなり。その例

めゝしきことのたまふな。

文七にふまるな庭のかたつふり。

三はなその格にてあらはす。その例

門をなひらかれ候ひそ。

めゝしきことなのたまひそ。

以上にて述體の句の分類とその主要なる事項の説明とは大要を了へたり。しかるに、こゝにこれら述體の句に往々呼格の伴ひてあらはるゝことあり。かゝる現象は何に基づきて起れるか、この事も亦一往は顧みざるべからざる事なれば、こゝにこの點につきて研究せむ。按ずるにかゝる現象の生ずるは蓋しその説話文章が對話の體なるを以ての故なりといふべし。これらの點を以て一切の述體句を見るに、その陳述が、對者に話しかくる態度をとれるものと、しからざる態度のものとの二樣あるを見る。もとより説話文章たる以上、聽者を豫想せぬものはなき筈なれど、その説話文章の性質として直接に特定の對話者を要するものと然らぬものとあるは明かなりとす。かくの如き見地よりして、上の主格に關しての三種類の句を觀察するに、第一人稱の句は特定の對話者を要せぬ性質の句にして第二

人稱の句は特定の對話者を要する性質の句なること明かなり。かくて第三人稱の句は如何と考ふるに、これは特定の對話者を要せぬ性質の句たる如くに見え、又さる性質のものの多きことは明かなり。たとへば、

花さく。

鳥なく。

等の如き大抵みな然り。然るにこの第三人稱の句にして特定の對話者を要する場合のものも亦往々存す。たとへば、

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

君、これは實におもしろいね。

などの如きこれなり。こゝに於いてこの方面の見地よりして、第三人稱の句に、特定の對話者を要する性質のものをば對話の句といひ、特定の對話者を要せぬ性質のものをば、記述の句といひて區別することを得べし。かくする時は、その特定の對話者を要せぬ性質のものは第一人稱の句と、記述の第三人稱の句との二種にして、特定の對話者を要する性質のものは、第二人稱の句と、對話の第三人稱の句との二種なりといふを得べし。かくてこの特定對話者は、それを外形的に見れば呼格の形にてあらはるゝを普通とす。上の例の對話の第三人稱の句の

少納言よ、

君、

の如き、又第二人稱の句にては

我が友よ、かしこに行け。

といへる如きこれなり。これを以て、吾人はかく呼格のあらはるゝ句は對話の性質を帶ぶるものなりと判ずるをうるなり。然れども呼格のあらはるゝは純然たる對話に限らぬことあり。たとへば、

まろがまろねよ、いくよへぬらむ。

の如きこれなり。然らばこれは如何に取扱はるべきかといふにこれは主格たるべきものを呼格とせるものなるが、その呼格としてこれをあらはしたるは自問自答の形をとれるが爲なれば、その眞意は別として、形式としてはなほ對話の體裁をとれるものなれば、上述の一般的現象に對しての特例たりとはいへ、その原則に違背せるものにはあらず。

こゝに吾人はかの主格の方面より見ての三つの分類と賓格の方面より見ての三の分類との間に何等かの交渉又は關係なきかといふことをも考へざるべからず。而してこれらの事情を合せて、それらのすべての句の主格が如何なる狀態を

呈せるかを觀察するに、ある種の句には主格が句中にあらはるゝを普通とし、ある種の句には主格が句中にあらはれぬを普通とするなり。而して呼格の伴はるゝと否とは亦それらの句の種類によりて異なる點あるを見る。この故に今それらの關係を總括して次に略說せむとす。

第一人稱の句は說明體のもの多く、稀に、疑問體なるあり。而して主格は特に必要ならざる限り、之を略して句中にあらはさゞることあり。たとへば、

本を讀みたり。　　（我は）

明日參上いたしませう。（私は）

の如きこれなり。而して主格をあらはすは

我は今より何をすべきか。

我輩は是非とも之を完成させる。

の如く特別の必要ある場合に限るものとす。

第二人稱の句は、疑問體又は命令體なるを多しとす。

汝は之を忘れたるか。

汝はかしこに行け。

而して對者は上の例の如く主格としてあらはるゝことあるが、又呼格としてあら

はるゝことあり。その例

君、これを見たまへ。

あこよ、こゝに來れ。

第二人稱の句の主格は説話の際の對話者なることといふまでもなきが、疑問體の句にては、次の如く、

汝は之を忘れたるか。

主格をあらはすこともあれど、命令體の句にありては多くは略してあらはさぬこと次の例の如くす。

かしこに行け。

人に語るな。

或は又その對者を呼格としてあらはすこともあり。かゝるものは多くは命令體の句にあらはるゝものにして、

我が友よ、かしこに行け。

の如く對者は本來主格たるべきを呼格としたるによりて別に主格の存せざるを常とす。

第三人稱の句には對話のものと記述のものとの二種あることは既にいへる所

なり。而して、多くは說明體にして、稀に疑問體なることあり。この種の句には主格のあらはるゝを本體とす。その疑問體のものゝ例次の如し。

彼は遂に來らざりしか。

この疑問體のものはその主格の外に對話者を要することあり。その時はその對話者を呼格としてあらはす。その例

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

第四十七章　喚體の句と述體の句との交涉

喚體と述體とはわが國語に於ける句の二大種類として、二者の間にはその性質及び組織の間に根本的の差別あることは前に述べたる所なり。然らば、この二者は絕待的に無關係なるかといふに必ずしも然らずして、二者の間には又互に轉換變形せしめうべき關係を有するなり。かく根本的に差別ありつゝしかも交涉する所有るはわが國語の生々の妙趣たり。

喚體の句には希望の喚體と感動の喚體との二種ありて、この二種またその性質組織を異にすることは既に述べし所なり。而して述體の句にありては主格に對する陳述の態度よりして第一人稱の句、第二人稱の句、第三人稱の句の區別を認む

べく、賓格に對する陳述の態度よりして説明體、疑問體、命令體の三體の區別を認むべきことは既に述べたる所なるが、これらの區別は要するに程度の差に留まりて、組織の上よりいへば、主格賓格の對立とそれに對しての述格の統合との存することは同一にして喚體句の二種の別の間に存するほどの差違とはいふべからず。而して、この述體の句と喚體の句との交渉について見るに、述體としてはその三種三體の區別の上に基づく交渉上の差違といふことを認めざるにより、主としてその本體たる説明體をとるが喚體に於いてはその二類の間に組織上の差別あるが故に、次には述體の句と希望喚體の句との交渉と、述體の句と感動喚體の句との交渉とに分ちて説くべし。

述體の句の或るものはこれに多少の變形を施して、希望の喚體の句に轉成せしむることを得るなり。しかも、これには種々の階級あり。先づ述體の句の形を有するものをその終末の用言の形を少しくかへて體言化せしむることによりて、それ全體を體言の取扱として、これを希望の對象となし、それに希望の終助詞(「がな」等)を添へて希望喚體の句とすることを得。たとへば、

世の中にさらぬわかれの無くもがな。

といふ文ありとせよ。これ希望喚體の句たるものなるが、その希望の對象たるも

のはもと

「世の中にさらぬわかれの無し」

といふ形の述體句たるべき筈のものを、その述體句としての述語が、形容詞なる時に、その形容詞を連用形にしてこれを體言化せしめ(一般に形容詞を臨時に體言化せしむる時に連用形をとらしむることと「遠くの親類、近くの他人」などにて知るべし。)その「なく」といふ語の體言化と同時に、その句全體を體言の資格に轉ぜしめ、それを以て希望の對象として下に「もがな」を加へて希望喚體の句としたるものにして、これは

人もがな。

花もがな。

といふと文法上の形式の究極に於いては同一のものなりとす。

注意。上の例と外形頗る似たるものに

君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな。(後拾、十二)

といふ歌あり。これは形容詞の連用形に「もがな」がつきてあれば、同じ形式の樣に誤認せられ易し。されどこれは

君が爲惜からざりし命(ヲ)さへ「長くもがな」と思ひけるかな。

にして「命」といふ語が「思ひける」の補格として立ち「長くもがな」が一の喚體句にして「と」にて導かれてこゝに挿入せられたるものにして上の例と性質異なり。上にあげたるはその元の述格が形容詞たる場合のものを希望の喚體と化せしめし形のものなるが、次には形容詞以外の用言が述格に立てる述體の句の形あるものを末の語を少しくかへて體言化せしめて希望喚體と化せしめし形のものあり。これには二の形あり。甲は肯定の形を以て希望喚體の對象とするものにして、次の例の如きものなり。

かひがねをさやにも見しが。（古今集）
いかでこのかくや姫を得てしがな。（竹取物語）
久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。（拾遺抄）
こゝろうし深き山にも入りにしが。（好忠集）
みやこいでてけふここぬかになりにけり、とうかのくににいたりにしがな。（赤染衛門集）

これらも亦その本原の形はいづれも述體の句の形式を具したるものにして、その本の句の述格たる用言が複語尾「き」の連體形「し」をとりて準體言となり（一般に準體言は連體形をとる）こゝにその句全體が體言化したるものを以て喚體の對象とし

その下に希望の終助詞「が」「がな」を加へたるものなり。この場合には必「しが」「しがな」といふ形をとるものなるを見れば、その「し」はこの種の句の成立に必要なる意義を有するものにして從來いふ如く過去を回想するものにあらざるべきを想ふ。この事は既にもいひたるが、未だその本義を明かにせず。疑を存して解決を後に俟つ。乙は否定の形を以て希望喚體の對象とするものにして次の例の如きものなり。

ありはてぬ命まつまの程ばかりうき事しげく思はずもがな。（古今集）

いとかく朽木になしはてずもがな。
この御有樣どもをいかでいにしへおぼしおきてしにたがへずもがな。（源、竹川）

これらも亦その本原の形はいづれも述體の句の形式を具して、しかも複語尾「ず」の連用形をとりて否定をあらはせるものなるが、その「ず」の連用形を以てこれを體言化せしめたること、かの形容詞が述格たるものゝ場合と同様にして、それにて全體を體言化したるものを喚體の對象として直ちに「が」「がな」を添へたるものにして、「ず」の連用形にて體言化せらるることは、上の

老いず死なずの藥もが。

といへる場合の「老いず死なず」が體言化せられて「の」に連りて連體格に立てると趣異ならざるなり。以上の三の形式のものは本原よりの希望喚體にあらねど、かく成立せるその形は明かに希望喚體なりとす。而して、吾人は述體の句より希望喚體の句に轉換する方法をこれによりて學びうるものなるが、つら〳〵考ふるに、この三の方式の存することは決して偶然の現象にあらずして必然のものなりと考へらる。そは何故ぞといふに一般に述格は用言を以て之に充つるを本體とするものにして、その用言は形容詞か動詞か存在詞かの三者を出でざるはいふをまたず。かくて、その述格が形容詞たるときには、その陳述はたゞ肯定の一法式に止まるものにしてこれには否定の形の存せぬによりて、それよりの轉換方式は唯一に止まるは必然のことなり。然るに動詞存在詞が述格たる時にはその陳述は「肯定と否定との二の法式の存しうるによりて、それにつれて、肯定の場合の「しが」「しがな」の形式と、否定の場合の「ずもがな」の形式との二樣の形式をあらはすことも必然なりとす。かくて上の三樣以外にはあらはるべき素因の無きものなるが故に、これら三の樣式が必然的にして、しかも十分に要求の滿されてあるものなり。從來の文法學者はこの必然の現象を全く度外視したり。今吾人はこの希望喚體といふ

ものを知り得たる爲にこの必然の現象を明かにし得るなり。さて述體の句を希望喚體に變形せしむるものは上の如く形容詞よりするもの、動詞存在詞の肯定式よりするものと、同じく否定式よりするものとの三様あるを見たり。さてもかくの如く三様の方式あれど、要するに、述體の句の形を有する或るものを結體せしめ、これを對象として希望の喚體を組成することは一般の希望體と毫も異なることなきを知り得たり。而してその本原たる述體句の述格が如何なる用言たるか、及び肯定否定のいづれなるかによりて上の三様の區別の存することと明かなれば、この三様の區別の存することも亦吾人の思想發表の方法として必然の要求に基づくものにして漫りに三様の別の存するにはあらざるものなりと思はる。

上に述べたる所は正規の構成法たるが、こゝに上述の特殊の希望喚體の句に基づきて起れる變態あり。そは次の如きものなり。

かの君達をがな。

かひがねをねこし山こし吹く風を人にもがもや、ことづてやらん。

世の中はつねにもがもな。

我宿の尾花がうへの白露をけたずて玉にぬくものにもが。

もゝしきの人の心を枕ともがな。

飛ふが如くに都へもがな。

これらはもとより純粋の喚體句にはあらず。さりとてただの呼格にもあらず。從來の文法學者は殆ど一人もこれが構成を說けるものなく、ただ「をがな」「にもがな」「ともがな」「へもがな」といふ助詞なりとせるもの丶如し。されど、これらは助詞としても單一の助詞にあらざるは明かなり。しかもかく用ゐられたるはこれ一の句にしてただ助詞の一用法なりといひて說き去らるべき單純のものにあらず。先づこれらをその助詞につきて見るに、その「が」「がな」の上にある語が「も」を隔てたるもの多し。格助詞「を」「に」「と」「へ」にてあるを思へば、これらの格助詞の當然の性質として、その下にそれに應ずる用言(主として動詞存在詞)の存すべき筈のものなることを思はしむるものあるを見るべし。實にこれらは希望喚體の句の中に用言ことに動詞存在詞にこの述體の時の述格たるべき語の存すべきを省略したるものにして、その省略せられたるならむと推定せらるべき語を試みに加へば、

かの君達を(見てし)がな。

かひがねをねこし山こし吹く風を人にも(なしてし)がもや。

世の中はつねにも(在りにし)がな。

我宿の尾花がうへの白露をたけたずて玉にぬくものにも(ありにし)が。

ももしきの人の心を枕とも(してし)がな。

飛ぶが如くに都へも(行きにし)がな。

の如くあるべきものにして、これ即ち一種の省略ある形なりとす。さればこれらは結局上述の動詞存在詞の肯定形を以て對象としたるものの略體にすぎぬものたること明かなり。從來の學者これらをば「をがな」「にもかな」「ともがな」「へもがな」といふ助詞なりとしてこの種の句の組成を說くことをせざりしは甚だ疎漏といふべきなり。かくてこれらは正しくは語句の省略として說くべきものなることは明かなりとす。

以上述體句の形式より變形せる希望の喚體句は從來何人も說かざりし所なれど、明かに上の說明によりてその組織と性質とが認められ、句としての組織性質も決して曖昧のものにあらざるを見るべし。

次に述體の句の或る者はこれに多少の變形を施して感動の喚體の句に轉成せしむることをうるなり。これにつきては吾人は二樣の方法を以てこの變形を施しうべし。而して、かく二樣の方式をとりうる所以は感動喚體の句に二樣の方式のあることに基づくなり。その方法の一は體言を骨子としてそれに狀態をあらはす用言又は副詞をば連體格として加へたるものなり。即ち

ありがたの情や。
あな情なの御事や。
流れて早き月日かな。
あはれの物語や。

の如きものこれにして、これは感動喚體の句の根本の形式たり。これは述體の句にていはば、主格たるべきものを骨子とし、その述格たるべきものを連體格としてそれに冠したるものたり。次には述體の句にていはゞ、主格にあたるべきものを連體格とし、賓格述格にあたるべきものを體言化せしめて感動の對象たる骨子とする形式のものなり。この場合には骨子たる體言は形容詞の語幹又は情態の副詞に接尾辭「さ」を加へて結體せしめたるものなり。その例は上に多少あげたるによりてこゝに一例をあぐるに止む。

いとかく夜をだに明かしたまはぬ(連體格としての準體言)苦しげさよ。

感動喚體の句の成立は大要上に述べたる通りなるが、この二樣の差は、卽ち述體より感動の喚體に導き行くものにつきての關係の差違を呈する所以なり。その方法の一は本來の句の述格に立つ語の形と資格と位置とを變更して、それをもとの主格の語に對しての連體格としてこれに冠するものにして、次のやうにするな

り。たとへば「君の弓勢は恐し」といふ述體の句ありとすれば、これをば

あな恐しの君の弓勢や。

あゝ恐しき君の弓勢かな。

の如くするなり。第二の方法はその賓格述格の語が形容詞又は情態副詞なる時に行はるゝものにして、そのもとの主格以下の位置は變更せずに、その位置のまゝにてそれらの形と資格とを變更せさするなり。即ちもとの主格をばその位置のまゝ連體格に變じ、もとの賓格述格(この時は賓格を主とするなれど實質用言の時には述格といひても可なり。)をばその位置のまゝ體言に變ぜしむるなり。上の例を以てすれば、

君の弓勢の恐しさよ。

の如くにするにあり。或は又「月遙かなり」といふ述體の句ならば、これを變形して

月のはるけさ。

とする如きなり。かやうにしてこの場合と上の場合とは成立の手續は頗る違へども、その成立後の組成上の形式は二者全く同一のものにして骨子たる體言と、それに對する連體格との結合より成れるものなりとす。

さて亦上述の事と反對に感動喚體の句をば述體の句に變更することをもうべ

きなり。卽ち

もれいづる月の影のさやけさ。

は述體にては

もれいづる月の影さやけし。

といふ形となるなり。又

最後の姿を今一目みざりしことのくやしさよ。

をば述體に變形する時は

最後の姿を今一目みざりしことのくやしきなり。

の如き形となるべし。或は又

きたなきみ方の振舞かな。

は述體にすれば、

御方の振舞のきたなきかな。

の如き形となるべし。

以上の如くなれば、喚體と述體とはその思想の發表の形式と方法との上の差異にしてその思想の根柢に於いては通ずるものなること明かなりといふべし。

第四十八章　句の複雜なる構成

句の構造の大綱は前二章に既に論ぜる所なるが、こゝにはその構成の複雜に赴く狀態を觀察せむとす。

述體の句は述格を中心とし、喚體の句は、呼格と同じ形式の語を中心として成立することは既にいへるが、それらの句にはそれ〴〵必要に應じて主格、補格、連體格、修飾格を伴ひ、又呼格をも句中にあらはすことあり。これらのあらはれたるものは、それのあらはれざる場合よりも複雜なること勿論なりといへども、それらの格のことは既に位格として說明したれば、こゝにはそれらが、句中にあらはるゝことありといふことを一言すれば足るなり。今この章に說かむとする所はそれらの種々の位格の各のあらはるゝか否といふ如き事を述べむとするにあらずしてそれらの點よりも一步進みて論ずる所あらむとす。こゝに於いて吾人の考ふべき點は、その句の複雜なる構成といふことは何に基づきて考へらるゝかといふに、それらは專ら位格に立脚すと考ふべきは當然なり。而してその位格につきて如何に複雜なる構成法あるかといふに、これには次の如く二樣に分解して考ふべき點あり。

一　一の位格内に於ける語の數多きもの。

二　同一の位格の數多きもの。

この外異なる位格が種々にあらはるゝことあるべけれどそれらは、その位格の對象たる語の性質意義又は、說話者の主觀の如何によるものにして豫め一定の範疇を立つることを得ず。然れども若し、この他に一定の範疇を立つるを得べきものある場合にはもとより之を立てゝ論ずべきなり。

通常一の位格は一の語にて成るものと考へらるれども、既に論ぜる如く一の語よりなるといふことが一の位格たる決定的の條件にあらざるは論なし。卽ち一の位格にして多數の語より成れるものも亦少からざるを見る。これらの點につきては吾人は先づ體言より成る位格にはこの種の構成のもの頻繁に行はれ、用言より成る位格にも亦往々かくの如き構成を存せるものを見る。

體言を以てする位格、卽ち體言を以てする主格、賓格、補格、連體格は一の語よりなるものもとより少からねども、また多數の語より成ることあり。たとへば

東西には「稻荷、祇園、松尾、大原野等」(四語相合して一の主格をなす)光を雙べて日夜に詰番し禁闕を守り給ふ。

稻藁にては「俵、薦、莚、草鞋、囊など」(五語相合して一の「を」補格をなす。)を作る。

先渡邊黨には省播磨次郎、授薩摩兵衞、連源太、輿右馬允丁七唱「を」(五語相合して一の「を」補格をなせり始めとして二百騎ばかりなり。

もう「そこへ」に(二語相合して一の「に」補格をなす。洲が見えだした。

「和漢の先蹤、朝廷の禮節」に(二語相合して一の「に」補格をなせり)は似も似ぬ事なれば。

その時の鉢の木は「梅、松、櫻」にて(三語相合して一の賓格をなす)ありしよな。

「義經辨慶」(二語相合して一の連體格をなす)の五條の橋。

琵琶に「流泉、啄木」の(二語相合して一の連體格をなす曲あり。

夜討などいふ事汝等同士軍「十騎、二十騎」の(二語相合して一の連體格をなす)事なり。

さてこれらの一の位格内に多くの語ある場合の各語の間に起れる關係を見るに、これらの間の關係には種々の差別あるべけれど、上述の如く、體言を單に重ねたるものにありては、形の上よりこれを區別して認識することを得ざるなり。然るに、これらの結合を助詞又は接續格の語にて媒介するものにありてはその關係の差別を明かに示すことを得るなり。即ち先づ助詞「や」にて結合するものは、

「月や雪や」は唯一色である。

「柚や梨やなど」をもちてくびなどす。
「たこやいかや鱸」なども交つてゐます。
「伊勢や日向」の物語。
「彼やこれや」にかこつけて。
みな人は「蝶や花や」といそぐ日も。
雪とだに見るべき花のなどやさは「雨やみぞれ」とふらむとすらむ。
の例にて見る如くいづれも個々のものとして列擧する意味のものにして、しかもなほ他にもあげざるものゝ存する意を言外に示せるもの多し。次に助詞「と」にて結合するものは
「上杉謙信と武田信玄と」は戰國時代の二傑なり。
予は彼の「猛勇と剛膽と」に喫驚した。
「みすと几帳と」の中に入れて。
「吹く風と谷の水と」しなかりせば、みやまがくれの花をみましや。
白き鳥の「嘴と脚と」赤きが水の上に遊びをり。
「億計王と弘計王と」は兄弟にてましましき。
「それとこれと」を君にあげます。

余が親友は「君と乙君と」である。

の例にて見る如くいづれも相合して一團のものとして他に對するものなるが、それと同時に、その對象はそこに示されたるに限定せられたるなり。次に又助詞「か」にて結合せられたるものあり。これは

「汝か我か」ゆかざるべからず。

「雨か雪か」の降り來らむさまなり。

これを「兄か姉か」に贈らむと思ふ。

鯨は「獸類か魚類か」なり。

「狐か狸か」の所爲ならむ。

津の國のなにはわたりにつくる田は「あしかなへか」とえこそ見わかね。

「櫻か桃か」を手折りこよ。

鯨は「獸類か魚類か」である。

の如きものにして、その示されたる對象全體が事實上の對象にあらずして、その「か」にて示されたるものゝうち一をとるべきことを示すものにして、その一をとりたる場合には、他は不用となることを示すものなり。しかも、その選擇の範圍はこゝに示されたるものなれば、その示されたるうち一をとれば、可なるものとす。今こ

の三を名づけて、甲を枚擧といひ、乙を合同といひ、丙を離接といふ。「や」は枚擧を示し、「と」は合同を示し、「か」は離接を示す外に、前にいへる如く、なほ他の意をも有すれども、語の併せ示されたる意義の上の大別はこの三の義なりと考へらる。然るときは、上の體言のみにて重ね示されたるものにも、意義上甲乙の二者の區別あるべし（離接は特別の現象なるが故に助詞又は接續格の語を要すべし。）とは考へらるれども、今一々之を分ちあぐることをせず。かくてかの接續格の語にて媒介せらるる場合にもこの三方式ありと考へらる。先づ、

「山又山」をうち越えて。

「弓矢持ちたる人ふたりさては下なるわらは」など三四人………

の如きは枚擧せること明かなり。次に、

「松竹及び梅」は正月の飾となる。

「支那並に安南」を救ふ。

の如きは合同せるものを示せること明かなり。又

「葉書又は手紙」で御報知を願ひます。

「松或は竹」を立つ。

鯨は「魚類若くは獸類」なるべし。

「つれ〴〵なる夕暮もしは物あはれなる明ぼの」

「無文の青色もしは蘇芳」など五重にて。

の如きは離接すべきものを示せること明かなりとす。されば、體言を以てする位格のうちに多くの語ある場合には、形より見て、その體言をたゞ重ねたるものと、助詞にて結合せるものと、接續格の語にて結合せるものとの三樣あり、意義の上より見て枚擧せるものと、合同して示すものと、離接的なるを示すものとの三樣ありと知られたり。

用言を以てする位格につきてはそれらの格の各個につき說くべき要あり。先づ、準體言たるものゝうちに於いては多くの用言の存するを見ることあり。この際には、その上にある用言は連用形をとりて連なるものにして、それの直ちに連ねたるものは同格連用として、用ゐらるゝものなるが、その例は

あしげの馬の太く逞しきに乘る。

恩に報い德に報ゆるは人の道なり。

月雪花の效用は美術とおなじく、人を高尙にし人を溫雅にするのである。

の如し。又

「不義にして富み且つ貴きは吾に於いて浮雲の如し。

「この道を行き又かへる」は誰なるか。

の如く、接續格の語にて結合せらるゝことあり。而してこれは意義よりいへば合同なるものなりとす。

用言を以てする連體格に於いて多くの用言よりなる場合はその上なるものは連用形をとりて同格連用として連なるものとす。その例

赤く白き花ども。

どんよりと曇つて寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。

光りはためく雷電。

いでいる人の尊び敬はぬはなし。

の如し。而してその用言が「なり」なる場合にはその連用形の代に「して」を轉用して

一、美麗にして廣大なる公園。

の如くいふことあり、或は又その連用形中の「あり」を省きて格助詞「に」のみとして、

二、美麗に廣大なる公園。

の如くすることあり。或は又上の一、二の如き場合に、接續格の語を加へて結合を強めて次の如くいふことあり。

美麗にして且つ廣大なる公園。

美麗に且つ廣大なる公園。

これらの場合は多くは合同するものなれど、必ずしも然らずして、意義より見れば

「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ、さけるさかざる花のみゆらむ。」

の如く離接的なるものも稀には存す。

用言を以てする連格も亦多くの語を以てなることあり。この時は上なる用言は連用形を以て同格連用として重ねらる。或は又終止形のまゝ之を重ぬることあり。その用言の連用形を以て同格連用として重ねたるものは次の如し。

淵の水「清く深し。」

大夫黑といふ馬こそ「太く逞しけれ。」

雷電「光りはためく。」

以上の如き場合に接續格の語を介して結合するものあり。その例

人々「踊り且つ走る。」

この畫は「はでやかにしてしかも高尙なり。」

この事實に「感ずべく又學ぶべし。」

かくてこれら連用形を以て重ねたるものは形の上に於いて連りて下と一になりたるものなれば、かの體言の結合樣式中の相合同して一となれるものに相當する

ものなり。その終止形のまゝ之を重ねたるものは

かくてかれは「うたひつ、まひつ」。

しかし僕は「うれしい、やめられない」。

これは「にせ者だ、にくいやつだ」。

の如きものなるが、これらはかの體言の結合樣式中の枚擧するものに相當するものなり。さて又その述格の語が助詞にて終れる場合のものはそのまゝ之を重ねて示すことあり。これには、その意義上の關係より二樣の別を見る。

ことごとしきしらべもなしや、しどけなしや。

の如く、感動の意を寓せるものは、枚擧する性質をあらはせり。しかるに、

わが思ふ人は「ありや、なしや」。

この書は「よきか、あしきか」。

汝は「之を好むか、否か」。

の如く疑問の助詞を伴ふものは離接を示す性質のものなりとす。而してかくの如き場合には時として接續格の語を加へて結合の意を强むることあり。たとへば、

汝は「之を好むかはた好まざるか。」

一の修飾格のうちにも又多くの副詞を含めることあり。これにつきて先づ考へらるゝは形容詞の連用形を以てする修飾格にもかゝるものあるべく思はれざるにあらねど、そはその個々が修飾格をなせりとも見らるべければ、ここには言及せざるを穩當なりとす。次に副詞のものにてもそのまゝ重ぬるものあるべし。これらも亦それらが個々の修飾格として立ち、相合して一の修飾格をなせりと斷言しうべきものにあらねば、それらもこゝに省くを穩當とす。かくて殘る所はその副詞が接續格の語にて結合せられて、一團をなせること明かなる場合のもののみをこゝに認むべきなり。その例次の如し。

露に逢ふと草が如何にも「涼しさうに且つ新鮮に」見える。

上來、說ける所はすべて多數の觀念語にて一の位格を組織せるものにして、同じ位格の多數ある場合のものとは性質を異にするを注意すべし。從來の文法家は單文は一の主語と一の述語とより成るといふ如き定義を下したるが爲に、上に說ける如きをば、單文にあらずとし、多くの單文の結合よりなるとせり。若し多くの單文の結合よりなるものならば、それらはこれを還元して、多くの單文となしうべき道理なるにあらずや。然れども果してかゝる說明は實際に合せりや否や。先づ見よ。

上杉謙信と武田信玄とは戰國時代の二傑なり。

蕭何、張良、韓信は漢の三傑なり。

といふ文にありては、實に主格の內部に二人三人の人物の名は含めり。然るにこれを二又は三の單文の結合よりなるものなりとして、これを二又は三の單文に分解せむとする時にその賓格たる「二傑」「三傑」といへる語が無效となること明かなり。即ちこの「二傑」「三傑」といふ賓格はそれに對する主格として、二人又は三人をば一括したるものなるべきこと明かなり。しかるに世にはかくの如き見易き道理を忘れて、上述の如きをば二三の單文の結合せるものなりといへり。若し果してその說の如くならば、かの軍隊の如く上は司令官より下は一卒に至るまでを網羅して一隊をなせる場合をとりて之を一の句にていひあらはしたる場合は亦その何萬何千人の人名を一括して主格なり補格なり、賓格なりとするをうべきは理論上ありうべきこととなり。かゝる場合に用ゐられたるその句は然らば、その人の數だけの句の結合せられたるものといふべきか。愚論もこゝに至らば、極點に達せりといふべし。これらははじめ、單文の定義を嚴密に審定せざるに基づき起るべき自然の缺陷なり。抑もかくの如き弊の生ずるに至るそのはじめを尋ぬるに、實に語の數を以て單文の決定的條件としたるにはじまり、次に、語の觀念と位格の觀念と

をも混同したるによるものと考へらる。さて上述の如くなれば、一の主格が二三以上の語より組織せらるゝこと何の不思議もなき事なりとす。而してそれと同樣に「松竹梅を歲寒の三友と稱す」。といへる如く、一の補格賓格連體格も二三以上の語より組織せらるゝことこれ亦不合理にあらず。以上の事共が不合理にあらずとせば、一の述格として用ゐらるゝうちに二語三語を含みても差支なきことは明かなりとす。卽ちこれら一の位格といふことはその一個又は一團の語の用法上の位地を示したる取扱方に關しての名目にして、吾人の句の本義はそれらに用ゐられたる語の多少によるにあらずして、それらを用ゐてあらはす統覺の活動の一回なるをいふものなればなり。

以上述べたるは一の位格の內に多くの語あるものなるが、又同じ位格が、一の句中に多くあらはるゝことあり。されど、かゝる現象はその句の中心となるものには存せず。卽ち述體の句に於いて述格二ある如き現象は存せざるなり。若し、述格が二個あらはるゝ時はそは陳述が二回行はれたるものにして二の句たるものと認むべきものなればなり。こゝに於いて一の疑問生ず。そは上にあげたる

一、太夫黑といふ馬こそ太く逞しけれ。

二、雷電光りはためく。

三、この事實に感ずべく學ぶべし。
四、かくて彼はうたひつまひつ。
五、汝はこれを好むか否か。

の如き例は述格が二つ存するにあらずやといふこととなり。されど、これらはこれらの各語が相依りて一の述格をなせりといふべきものなり。何となれば、一、二、三の場合は、その上の用言は連用形をとりて重ね、吾人の所謂同格連用をなしたるものにして、それらの用言相合して一となりて、その主格を説明したるものなり。而してこれは嚴密にいへば、述格たる語が重ねられたるにあらずして、その各の用言の有せる實質卽ち屬性觀念を同時に併せて賓格とせむが爲に重ね用ゐたるにすぎざるものなり。四の場合はその各用言が終止形にて重ねられたるによりて一、二、三と外形を異にしたるものなれど、その觀念卽ち「うたふ」「まふ」といふ二の事實を同時に行へる由を以て賓格としたるものにして二回の陳述をあらはせるにあらぬは明かなり。五の例は述格の二ある如くに見ゆること更に著しけれど、その「好む」といふ觀念と「好まぬ」といふ觀念との二者のうちの一を以て賓格とせむと考へての述格にして述格としてはもとより一なるが、たゞその一の述格内に離接すべき二の觀念を含み、これを言明せる點が他と著しく差ありと見ゆるに止まる。卽

ち以上はその述格內に賓位の觀念の二あるより起れる現象にして述格そのものが二つあるにあらず、くはしくいはゞ二の賓格を一にして陳述したるものにして陳述が二回行はれたるにあらざるなり。卽ち述格の一なりといふことゝ、述格となれる語の一なりといふことゝは區別ありといふことを明かにしおくべきなり。

一の句の中に主格の二個以上並び存することあり。この際にはその各々に「も」助詞を添へて示すを普通とす。その例

英國人も米國人も露西亞人も此國の人には及ばず。

君も僕もかの人をよく知れり。

これやこの行くもかへるも別れつゝ、しるも知らぬもあふさかのせき。

東も西も海ばかりなり。

誰も彼も贊成す。

これらは、前に說ける一の位格內に多くの語の存するものとは趣を異にす。之を車にたとふれば、一の位格內に多くの語ある場合は車一輛に二人乘れるなり。今は一人の乘れる車二輛なり。かくの如き差あるを先づ辨ふべし。而してこれらの例も亦從來の文法家はまた多數の單文の縮約なりとせり。されど、それらの說の通ぜぬことは、上の例どもと、それらをそれ〴〵の單文に分ちたるものとを試み

に比較して果して、それらの合成なりや否やを熟思せば、その誤なるは直ちにさとらるべし。

一の句の中に、同樣の補格が二個以上並び存することあり。この際にもそれらは助詞「も」を添へて示さるゝを普通とす。

余は月をも花をも愛す。

人をも身をもうらみざらまし。

春霞峯にも尾にも立つ。

これを君とも親とも賴み奉らむ。

前へも後へも行くこと難し。

金剛石は鐵よりも水晶よりもかたし。

枕よりあとより戀のせめくれば。

以上の如く、係助詞「も」を加へたるものは、その各の位格が個々に、下の述格にかゝることを示せるなり。この場合にはそれらの位格の間には主從の關係もなく、合同の關係もなく、全く二者對等の關係を有し、しかも個別的に述格の語に對するものなりとす。

然るに、こゝに一の句の中に主格二以上存し、しかも、その一はその全體をあらは

し、他の一はそれの部分をあらはすことあり。たとへば、次の如きこれなり。

唐の物は藥の外は無くとも事かゝず。

象は體大なり。

彼は兩眼盲せり。

この人は年老いたり。

又一の句の中に補格が二以上存し、その一は全體をあらはし、他の一はそれの部分をあらはすこともあり。たとへば、

罪重き者をば首を斬る。

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきる。

一枝を折る者は一指を斬らむ。

あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはむ春の古里。(新古今集)

今昔天竺に深き山の洞に一の獅子住みけり。

河内と大和との境に金剛山といふ處に城をかまへて。

朱雀院天皇の御時に承平年中に將門が謀叛の事はありしなり。

今昔播磨の國に飾磨郡書寫の山といふ所に性空聖人といふ人ありけり。

これらは、すべて上なる語と下なる語とは同じ性質の位格に立ちたるものにして、

位格そのものとしては甲乙あるべきものにあらず。然れども、その位格の各語の相互の意義上の關係を見れば、上なる同じ位格の語はその全體を提げ示し、下なる同じ位格の語は上なる位格の語の示すものゝ一部分をあらはすものなり。即ちこれら二の同じ位格の語相互の間に主從の關係ありといふべきなり。これは前にいへる同じ位格が「も」にて示されたる場合のものに比して著しき差異あるを認むべし。かれはかつていへる語句複合の法式のうちの並立の組織をとれるものにして、これはそのうちの主從の組織をとれるものなりとす。而してかゝる現象は上の如く、主格にも、補格にもあらはるゝ現象なるに、從來たゞこれを主格に認めその全體を示すものを總主などいへり。然れども、これは主格にのみ存するものにあらぬことは上の例にても見らるべく、總主などいはゞ、總補、總客などいふ名目をも立つべき筈なり。然れどもこの總主といふ名目は、その部分を示す方の主格を本來の主格と立てたるものにして、事實の上より見て顚倒せる論なり。これらの眞の主格はなほその全體を示すものに存することとこれらの文例をよく味はゞ明かなることとなれば、若し、名を加へて區別せむとならば、その全體をあらはすものを本來の主格又は本來の補格と認め、部分を示す方のをば副主格、副補格といひ、總稱して副格といふを穩かなりとす。

以上全體と一部との同格の關係は、名詞と名詞との間に存する現象なるが、これらと殆ど同じ關係が名詞と數詞との間に存するを見る。

兄弟三人皆賢なり。

我が鄕人は五人行きぬ。

布五端は絹三端に等し。

鼠を三匹殺したり。

子供三人に分ち與ふ。

これらの數詞は上なる名詞の數量を示さむが爲に下に加へ示されたるものなるが、その語の位格はその上なる名詞の位格に同じきものなり。而してその意義はもとより上の名詞に從屬するものなれば、上の場合と文法上の關係は同じといふべきなり。たゞその差ある點は彼は全體に對しての部分を示し、これは實體に對しての數量を示せる點に存す。

一の句の中に同じ位格の二以上ありて、或は並立の關係を以て相對し、或は主從の關係を以て相合すべきものを用ゐたること上述の如し。然るに既にいへる如く語句複合の方式には、この外に合同の組織あり。然らば、この合同組織をとりて、句中に同じ位格の語の二以上のあらはるゝことなしとせざるべし。今かくの如

きものありやと検するに、次の如き例あり。

贈太政大臣菅原道眞公は北野に祀られたまふ。

鎭西八郎爲朝を召させたまふ。

日本第一の名山富士山に上る。

これらの上なる語は從來同格語と稱せられたるものなるが、かくいはるゝ所以は、一の句の中に於いて、その主格又は補格に對して同樣の意義又は資格を有するを以てなり。今二者の關係を見るに、この二者はそのさす所の實質は全然同一なるものにして、各のさす所は同じきを以てその一のみにても意通ずべく、又二者相合して一の意をなすものともいふべし。而してその意義の中心點は主として下なる語に存す。即ちその下なるが本來の主格又は補格にして、上なるが、それをいひかへたるに止まる觀あり。從つて上なる語が、下なる語の限定なるに止まると見るべき場合少からず。これこの上の語を「の」にて下の連體格となしうる形を呈する所以なり。然れども「の」は必ず、下なる語を限定するに限らずして、上下同資格なるを連ぬることあるはすでにいへり。この故に「の」にてつらぬるを得るを以てこれが必ず限定語たりと考ふるは不當なり。されども、このまゝの形にてはこの關係を明かに認めがたき點あり。こゝにその二語の間に「即ち」といふ接續格の語を

加へて結合することあり。

十寸卽ち一尺あり。

蜂は護身の器卽ち螫を有す。

といふ時には「卽ち」にて結合せられたる語が同意義同資格の語なるを明かに認めらるゝなり。これ卽ち合同一致の組織をとれるものにして、こゝにかの語句複合の三方式が、この同位格の語の間に完全に行はれてあるを見る。

時としては一の體言に對して二以上の連體格の並び存することあり。これらはその連體格としての語形のまゝ重ぬるものとす。その例

古の今の古き新しき歌えりとゝのへさせ給ふ。

花の咲く實のなる樹。

打ちたる白き狩衣。

まほのくはしき日記。

橿原神宮に參り平安神宮に詣でる時よりも更に大きい强い別種な感想を起すに相違ない。

これらは個々に下なる體言を限定するものにして、前章にいへる連用形を以て用言を重ねて一の連體格としたるものとは資格異なり。この事は

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ、さけるさかざる花のみゆらむ。

といふ例につきて、二者の區別を考ふれば明かにさとらるべし。「いたり、いたらぬ」は二者合して一の連體格をなし、「さける、さかざる」は同じ連體格が二つ並列せるものなればなり。なほこゝに注意すべきは形の上にてはこれと同樣にして意義上異なるものあることなり。先づ

この五十貫の錢

その語られつる夢

の如き例にありてはこれらは二樣に考へらる。一は

この——五十貫の——＞錢　その——語られつる——＞夢

の如く、二の連體格が、個々に體言に對せりと見らるゝ場合にして、これらは前述の例と同じ關係にあるものなり。然るに、これらの例は又、

この［五十貫の錢］

その［語られつる夢］

の如く「五十貫の錢」「語られつる夢」といへる如き連體格を伴ひてなれる一團の語をば再び限定するものとも見らるゝなり。而してかゝる思想のあらはし方はもとよりありうべきことなり。

堯舜と申す二人の帝

の如きは

堯舜と申す二人の帝

の義にして卽ちこの組織によれるものなり。或は又

魯の孔子といふ人

東京の赤坂といふ所

の如きあり。これらはこの「人」「所」に對して二の連體格あるが如くなれど然らず。又上の「この五十貫の錢」といへる如き組織とも異なり。これらは

魯の孔子といふ人

東京の赤坂といふ所

といふ關係になれるものにして、甲は連體格を有する一團の語が更に連體格を作へるもの、乙は連體格を有する一團の語が更に連體格となれるものにして、二の連體格の並立せる本文の例とは一致せず。而してかくの如き現象は如何に複雜なりといふともそれは思想上の關係にして文法上の法則としては別に說明すべき點なきを以て既にいへる如く深く論究せず、たゞ紛れ易きを注意しおくべきのみ。

修飾格に於いて同一の對象に對して同等の格の二以上並列しうべきは見易き

ことなればこゝに說くことをせず。

呼格は句の遊離部分として形體上の連絡をもたぬものなるが、これの伴ひて存するときはそれをも加へて、一の句又は文と認む。呼格の最も多く伴ひあらはるるは命令體の句にして、之につぐものは疑問體の句なり。說明體の句にても對話のものには呼格はあらはるゝことあり。

命令體の句に伴ひてあらはれたる呼格の例

香をだにぬすめ、春の山風。

藤の花、はひまつはれよ。

きりぎりす、いたくななきそ。

次郎、お前だけのこつてをれ。

疑問體の句に伴ひてあらはれたる呼格の例

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

やあ正綱、十四歲の時が二度あるか。

君、この繪はよく出來てゐるではないか。

說明體の句に伴ひてあらはれたる呼格の例

父よ我は悲しさにたへず。

諸君、これは實に偉大なる事業といふべきならむ。

民子、いよ〳〵今夜一晩になつたな。

をぢさん、勳章がふえましたね。

句は上の他の句との意義上の連絡を示す必要よりしてその頭に接續格の語をおくことあり。たとへば

然れども余は一々之を駁する愚をなさず。

但し婦人はこの限にあらず。

かゝる場合の接續格の語はその句の組織外にありてそれが上下の意を媒介するものなりとす。然れども、その所屬はなほ下の句にありとす。

第四十九章　句中に於ける語の排列

談話文章の構成分子としての語は、その談話文章の組織の中に於いて占むべき一定の位置あり。かく句の中に於ての排列につきてはいづれの國の語にありてもそれ〳〵の固有の法則あるものにして、この組織は或はその國語の特性の主要部分をなすことあり。然れば、これが知識は文法上甚だ重要なるものにして、句の組織の根柢たるものたり。語の排列はかく重要なるものなれば、その國語を語る

といふ以上、その國民には四五歳の童兒も殆どこれを誤らざる如く、普通になりてあるものなり。されど、外國人などが、この知識をその國語を語る國民の如くに體得するには大なる努力を要するものとす。

この語の位置といふものはそれと他の語との相關的位地よりして定まるものなるが、それにはそれ〳〵一定の規律のあるものにして、それは一面その語の性質に基づくものなり。抑も言語を以て思想を發表する場合にそれが二語若くはそれ以上より成立つ場合にはそれらの語の間に前後の順序の存せざるべからざる事は當然の事なり。この語に前後の順序のあることはこれ言語の本性上つき纒へることにして如何にしても離れられぬ事實なり。この語の排列については先づその性質如何といふ問題あり。これはその排列が確一的のものにして動かすこと能はざるものなるか如何といふ問題にして、この點につきて考ふれば、その排列の上に性質の違へる二樣の差別ありといふことを見るなり。その一はそれに自然に備はれる一定の排列法在りてこれを變更することを許さぬ性質のものにして、他の一はその排列の順序に尋常の場合に行はるゝ狀態あることはいふをまたぬが、しかもそれが絶待的のものにあらずして、時として或る必要より故意に變更して特別の排列法をなしうることのある場合なり。その自然に備はりたる一

定の順序在りて之を變更することを許さぬ性質の排列を今こゝに必然の排列といひ、當然の順序と認むべきものはもとよりあれど、必要に應じて、時に故意にこれを多少變更しうる性質の排列法を有するものについては、その通常、當然の順序に排列したるものを當然の排列といひ、故意に變更したるものを故意の排列といふ。即ち必然の排列とはその法則をば一歩も外るゝことを許さぬ性質のものをいひ、當然の排列といふは論理上よりいへば、しかあるべきものと考へらるゝ性質のものをいひ、それをば心理上の要求によりて多少變更したる時にこれを故意の排列といふ。さてかやうに排列には性質上二の大別あるが、その第二の場合に當然の場合と故意の場合とありて多少自由なりとはいへども、その變更のしかたにつきても又一定の規律在りて、みだりにすることは決して許されぬものなりとす。

語の排列には上の如く性質上二種を分ちうべきものなれど、その實地につきて見るに錯雜出入して一見甚だ解しがたく見ゆるものとす。かくて考ふべき點はそれらすべての場合に通じて、それら排列の上に一貫の理法あるか否かといふことなり。この一貫の理法の有無を考ふる基礎となるべきもののありとせば、そは言語の排列は一延長性を有するものなりといふことに存せずばあらず。

言語の排列が一延長性のものなりといふことは、言語の本性が精神的時間的の

ものなりといふことに基づくものなり。かく言語が一延長性のものなりといふことは二の方面よりして、必然的のものと考へらる。言語といふものは一面に於いて思想の展開の投影と見做すべきものにして、その思想の進展の過程が時間的のものなりといふ事を見る時にそれの投影と見るべく、又それの外相として、それに副うて表明せらるゝ言語が時間的過程をとることは當然なりといふことは明かなり。次に言語の外部的の根本條件の一として、音聲を以て他の聽覺に觸れむとするものなるが、その音聲といふものも時間的繼續を本質とするものにして、その音聲を受けて生ずる聽覺も亦時間的繼續を本質とするものにして、こゝに時間的一延長性を有することは疑もなきことなり。かくの如く言語そのものは內容外相共に時間的繼續をなすものなるが故に、隨つて、言語のその發表は時間的一延長性を有することは明かなり。かくてこの言語をば文字にて書きて記載して、空間的に同時に之を見るべきやうにしても、これを理解する精神の活動は時間的繼續によるべきものなれば、それが一延長性を失ふものにあらざることは明白なり。即ち言語の發表は如何なる場合にてもいつも一の線狀をなすものにして、それを構成する材料たる語どもは或は前になるか、或は後になるかといふ關係にあるものなることは爭ふべからざることなり。こゝに於いて語の排列といふ事が文法

學上の問題となるなり。
この語の排列といふことは要するに、或る語が他の語に對して有する關係に基づく位置のことなり。この位置はわが國語にありてはそれが文の構成法の上のみの事にあらずして、實に語の性質の上にも必然的に根據を有するものなり。先づ助詞と稱せらるゝ一類の語は實は國語の思想運用法式の或る範疇の抽象せられて概念化したるものゝ言語的發表と考へらるゝが、これらは他の觀念語(體言、用言、副詞)を助けて、それらが他に對して生ずる所の關係をば、主としてあらはすものにして、この一類の語はその助くる相手の語の下につくことを以て必然の法則とするものにしてこれには例外もなし。次に觀念語のうちにても副用語として發達したる副詞は屬性をば、その屬性たる性質のまゝに言語にあらはしたるものなるが、これはいつにても、その相手たる自用語(體言、用言)の上におきて用ゐらるゝものなり。これにも亦一の例外も無し。この根本的の特性に基づいて富士谷成章は脚結(アユヒ)と挿頭(カザシ)との二類を立てたるなり。なほ又助動詞、存在詞の下に複語尾が分出するものなるが、これらは又その用言の下に必ず直ちにつきて、離すことを得ぬものなり。かやうにして、その語の性質と排列上の位置とが必然的に一致してあるものあり。助詞と副詞と複語尾とは上述の如く性質上固有する位置の關係の存

するなるが、體用二言は必ずしも一定せず。然らばそれには規律の存せぬかといふに決して然らず。體言の用法は呼格に立つ場合の外はすべて、關係的のもの相關的のものなるが、それは何に對して相關的關係的なるかといふに、主として用言に對してなり。さて、用言はこの點に於いて如何なる性質を有するかといふに、用言は假りにその一語のみにて叫ばるゝ場合ありともそれは意味に於いて又性質に於いて必ず相關的のものなり。その相關的なりといふ相手は何なるかといへば、いふまでもなく體言なり。既にいふ如く語の排列といふものはその源は語の相關的地位といふことより起るものなり。今こゝに吾人が體言と用言との相關的地位を考究するには何を基礎とすべきかといふに用言を基礎として考ふることを當然とすべきなり。そは何故かといふに、體言には時として呼格の如く孤立的の用法あるにより、體言を基にする時は方途に迷ふ如き弊生ぜずといひがたき故なり。こゝに用言を基としてそれと體言との相關的地位を考ふる事とすべきが、用言の實地に用ゐらるゝ場合は千狀萬態とも云ふべきさまに見ゆれど、實は甚だ規則正しきものにして、それと體言との關係を見れば、たゞ二の範疇に止まるものなり。卽ち一は陳述をなす場合にして、他は裝定をなす場合なり。こゝにその陳述をなす場合に於いてはその用言はいつもその句の最後に來るものにして、そ

れに對して用ゐらるゝ體言はいつもその用言の上に在るものなり。この關係は一定不變のものにして決して紊亂することをゆるさぬものなり。この場合にはその體言が、その用言に對して主格に立つものにても、補格に立つものにても、賓格に立つものにても、一切その用言に對して上に在りといふ根本原則の存立してあるなり。たゞ、それらの間には嚴重にして動かすこと能はざるものと、多少自由にして動かしうるものとの差あれど、この根本原則は共通して存するなり。さてその用言が裝定すといふはある體言に對してその意を修飾限定する關係に立つことをいふものなるが、この場合は必ずその用言はその相手たる體言の上にあるべきものにして、これ亦一定不動の規律にして例外は一も存せぬなり。

以上は語の種類分けの上に存する語性と、それらの排列との上に國語の上には一定の關係ありといふことを述べたるなるが、語の排列の上の全般的現象を通觀するに、こゝに以上述べたる外に、なほ内面的の理由無きにあらざらむか。こゝにこの點につきて少しく考へむ。

先に言語の排列は一延長性のものといひたるが、その一延長性といふ事が如何なる狀態に在りてあらはるべきかといふに、これは外面的に見れば或る語を基點として考ふるとき、それを最初としてそれより上にか、若くはそれより下にか、若く

は上に行くと下に行くとの二方面に向ひてか、いづれにしても一延長をなして連續排列せらるといふことなるは明かなるが、その內面の意義上の關係を省みれば、最初にあらはれたるものが必ず主たり、後にあらはれたるものが必ず從たりとはいひ得ざることを知るなり。こゝに於いてこの排列に關する問題は種々の現象を呈するに至るべきなり。然らばその一延長性の排列の上に如何なる事情に基づきて、如何なる方法と樣式とを呈するかといふに、それらの方法樣式はその國語の性質によりて必ずしも一定せぬものなるべしと考へらるべきが、わが國語には國語特有の性質に基づきて特別の方法と樣式とを呈してありと考へらる。

まづ、語の排列といふことの起るは或る語の幾つかが連續すといふことより起るものなり。かくて我等が或る語を用ゐる場合にそれをいづこまで連續せしむべきか、若くはいづこかにてその連續が止まるかといふこと、これその先決問題なり。然るにそれにて止まるといふ場合には排列はこゝに終りを告ぐるを語るものなり。その排列の終りを告ぐといふことは何を意味するかといへば、思想的にはそこにていふべきこと終れりといふことなるべく、言語の外相にてはその終りを告げたりといふ形も必要たるべきなり。それ故にこゝにその終りを告げたる形といふ事がまた文法上の重要なる問題なるべきが、それは當面の問題の外と

してこゝにいはぬことゝし、こゝに問題とするはそのつゞく場合なり。

さてこゝに語のつゞく場合として、その一延長性といふことを考ふるに、これを考ふる所の中心點無からざるべからず。而してそれは初頭より見るか、終末より見るか、中間のある點より見るかの三樣の見方あらむ。その中間のある點より見れば、その延長はその點よりして上又は下の二つの方向の考へらるゝものにして、一延長性といふ以上それ以外には何も考ふることを要せず、又それ以外は考へられぬこととなりとす。

こゝに或る用言を中心として、考へ見るに、その用言を中心としてわれ〳〵は、上に延長する性質の排列と下に延長する性質の排列との二方面の、並び存することを見る。たとへば「讀む」といふ用言ありとして、これに吾人が或る補格たとへば「本を」といふ語を加ふとせば、それは必ず上に加へざるべからず。それを圖式にすれば次の如き關係と見ゆるなり。

本を讀む。

又更にそれに修飾格の語たとへば「靜かに」といふ語を加ふとせば、それは又必ず更にその上に加へざるべからず。

靜かに本を讀む。

かやうに、こゝに或る語を基礎とするとき、それに對する語が必ず上に加へらるゝ方式に出づるものあるを見る。然るに既に述べたる如くに助詞と複語尾とは必ずそれはその對手の下につくべきものにして上にあることはなし。こゝに於いてわれらは實際上或る語を對象として、それより上に加へらるゝ場合のものとそれより下に加へらるゝ場合のものとの二の著しき差別の存することを見るなり。この差別は如何なるものにして、如何なる場合に起るものなるか。この點の解決は恐らくは國語の語の排列の根本原理を示すものならむ。

今一の實質用言を基として、上の二の著しき差の生ずる場合の根本の理由を考ふるに、わが國語にありてはその語、寧ろその語の内面の思想の要素の上に着眼することによりて之を理解しうべきものならむと考ふるなり。即ち、或る實質用言を中心として考ふる時に、その上に行くと下に行くとの差別と根本の理由とを著しく認めうべし。即ち一の實質用言は或る觀念内容と陳述の力とを同時に具有するものなるが、その觀念内容を對象とする場合の排列とその陳述に從屬する場合の排列との間に相反對する方向をとるといふ排列上の根本法則の存するを見るなり。即ち觀念内容を對象とする場合にそれに對して從屬し、又は裝定する語は排列に於いては上行性を有し、陳述に從屬する部分は排列に於いては下行性を

有するものなり。

以上述べたる事は事實につきて見れば甚だ著しきことなり。たとへば、こゝに「馬」といふ語を基として、これを限定語とする場合に「白し」といふ觀念を用ゐる時は

　　白き馬

といふやうに「白き」を馬の上に冠するなり。然るに、その「白き」といふ觀念の程度を更に限定せむ爲に「甚だ」といふ觀念をそれに對して用ゐむ場合にはその「白き」の上にこれを加へて

　　甚だ白き馬

とすべきなるが、この法則は

　　頗る靜になれり。

の如き用言のあらはす觀念につきてももとより同樣たるなり。即ち或る觀念語の示す觀念に從屬するものはその對象たる原の語の上に加へらるゝものたりといふことなり。されば用言と補格との關係も亦同樣なり。

　　月を見る。

　　釣りに行く。

の如き場合も「月を」「釣りに」はいづれも「見る」「行く」といふ觀念を基としてそれに從屬

するものなるが故にその上に在るべき筈なりとす。而してこれらの場合にはその原觀念に關係の切なるものほど、その原對象に近き所におき緣の遠きものほど上方に置かるべきものにして、その位置の上下によりて略その關係の親疎をトすることを得べき筈なりとす。今なほこの事を一般的の理論につきて說き試みむとす。先づその用言の觀念內容に對するものを考ふるときに、それに對しては普通には主格、補格、修飾格の三種を考へうべきが、主格といふものは、普通には用言と對立すと考へられてあれど、それは既にいへる如く、用言の觀念內容をなす所の賓位觀念の對手たるが故に、なほ用言に對しての從屬たることは爭ふべからず。しかしながら、それは賓位觀念に對立するものなるが故に、補格が純然たる用言の觀念內容の從屬物たる場合とは一列にはいはれうべからず。こゝにそれらの排列上の位置を見れば

主格→　補格→　用言

といふ形式となる。この形式の生ずるは、補格の用言に從屬する度が、主格よりも親密なるものなりといふことを告ぐるなり。さて、その用言が實質用言ならぬ時には、その用言は必然的に賓位觀念として補充せらるゝ語を伴はざるべからず。これ余のいふ賓格なるが、さやうなる時にはその賓格はその用言の直上にあらざ

るべからず。即ち

主格　補格　賓格　用言

の如くになるものなり。この時には賓格は補格よりも一層その用言に密接の關係ある爲なり。さてこゝに修飾格あり。これはその用言に對して純然として從屬するものにして、必要物といふよりは一種の裝飾品たるが故に、その必要物たる補格などよりは親密の度輕く從つて位置は補格よりも上にあるを通例とす。然るに、その修飾格はその對象によりて、情態の修飾格、程度の修飾格、陳述の修飾格あり。このうち程度の修飾格は今論ぜざるが、情態の修飾格、陳述の修飾格の二は下の用言に關して裝定するものたるが故にその位置はその用言の上にあるが原則なり。而してその用言が、補格、賓格を伴ふ時にはそれらの上にあるを當然の法則とす。而して情態の修飾格は用言の觀念に關して裝定するものにして、陳述の修飾格は用言が陳述をなす時にはじめてその對象となるものなれば二者並びあらはるゝ時には陳述の修飾格はその上に行くなり。即ち

主格　陳述の修飾　情態の修飾　補格　賓格　用言(述格)

といふ如き方式になるを原則とす。この性質は用言に止まらず體言に對して裝定する連體格、用言副詞等に對して裝定する程度の修飾格にも存するものにして

それら亦その對手の語の上にあるなり。卽ち

連體格　體言

程度の修飾　用言(又は)副詞

かくの如くに

觀念內容として從屬する語

裝定する語

はすべてその對手たる語の上にあるが一定の法則にして、その意義上の關係の親疎が大體に於いてその對手の語との位置の遠近によりて示さるゝなり。

次に陳述に從屬すべき部分は必ずそれより下方に向ひて進行するなり。卽ち

花開く。

花開きたり。

花開きたりけむ。

花開かず。

花開かざりき。

花開かざりつらむ。

の如く複語尾が、用言の本幹の下につきて、その陳述が委曲になるに隨ひてそれぞれに

要する複語尾は下につくなり。かくてその多くの複語尾は上の如く陳述が委細に進めば進むほど、その委細を示す部分は下部に加はるべきものなりとす。かくして、その述格に助詞の從屬すべき場合にはその助詞は最終に附屬すべきものとす。たとへば

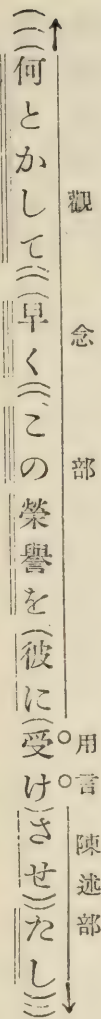
花開くか。
花開くかな。
花開きたるか。
花開きたりけむか。
花開かぬか。
花開かざりしか。
花開かざりつらむか。

の如し。さて何が故にかゝる現象を呈するかといふに、一は複語尾は用言の活用形の一部と見らるべきものなれば、それらの者の必要なるだけあらはれたるものすべてが用言の形態内のものなるが故なると、一は助詞は必ずその助くべき語の下に在るべき固有の性質によると同時にかゝる場合の助詞はすべて述格の從屬にして終助詞の性質を帶びて句の終末におかるべき性質あるとによるものなり

とす。

今、以上二者を對比するに或る觀念を對象としてそれに從屬する觀念をあらはす語は必ずその對象の上に存すべき特性を有し、その限定が、こまかくなるにつれてその委細を示す部分は次第に上方に加はるべきものなり。然るに陳述に從屬するものは下行性を有し、陳述を委細に示すにつれてその委細に示す部分は次第に下方に加はるべきものなり。今二者を對比的に區別して觀念部の上行性、陳述部の下行性と名づくることをうべし。この事は先にいへる如く一の實質用言が陳述をなすに用ゐられたるものにつきて著しく看取することをうべきものにして、さる場合にこの二者のあらはれ方を見るときはその特性の著しき狀態を直ちにさとりうべし。それを圖示せば次の如し。

↑觀念部　○用言　陳述部↓

（（何とかして（（早く（（この榮譽を（彼に（受け）させ））たし））

この陳述に用ゐたる實質用言を中心として觀念部の上行性と陳述部の下行性とを以て一延長の上に二方向に進展する狀は恰も植物が、幹より以上が向日性を有し根が背日性を有するに似たり。今姑くこれを國語の語排列上の遠心性と名づくべし。卽ちこの遠心性と名づくる特質はある中心より二方向に相反して走り

て一延長をなすものなるが、その遠心性の中心點は賓格と述格との接合點にありと考へらる。卽ちその接合點以上は上行性の法則に從ひ、以下は下行性の法則に從ふものと考へらるゝなり。以上の根本原理によりて排列上の仔細の點は次第に考へらるべきことなりとす。以下、その個々の場合につきて少しく說く所あらむとす。

陳述に關するものゝ下行性を有することは主として用言の上に現はるゝものにして、用言の本原の語尾の次に複語尾あり。複語尾も亦多數相つゞくべきことあるが、その時には所屬の活用形よりして一定の法則に從ふべきものにしてその中間に他の語を容るゝことなく一連續體をなすべきことは旣に說けるところなり。而してその最後に來るものが、その陳述の樣式を決定する任務を負擔するなり。すべて複語尾助詞が下につくといふことは國語としては根本の法則なれど、そは主として語の元來の性質に基づくものなれば、今再び特にこれを說くことをせず。こゝに主として說くべきは位格に關しての事なりとす。

賓格はすべてその對象たる語の直上にありて、離るゝことなきを原則とす。このうちに多少の例外あり。先づ、形容詞「如し」の賓格は決して離るゝことなきなり。

飛沫は霧の如し。

その禮儀は至つて正しきが如し。
年月は流るゝ如し。
「なり」「たり」の賓格も亦決して離るゝとなし。
これは櫻なり。
甚だ靜かなり。
四隣寂莫たり。
然れども、時としてその「なり」「たり」を解體して、助詞「に」「と」と「あり」とに分離せしむることあり。その時にはその「に」「と」と「あり」との間に副助詞、係助詞、間投助詞「し」等を容ることあり。
靜かにだにあらば、
靜かにこそあれ。
靜かにしあれば、
「す」の賓格も亦次の如く直上にあるべきなり。
奈良に狩りす。
彼は昨日門出せり。
されど、時としてその賓格に「を」を加へて、「す」につゞくることあり。

勉強をす。

補格は用言の有する屬性の必要より伴はるゝものなれば、その用言が如何なる格に立てる時にも伴ふことあるものにしてその所屬の用言の上にあるべきものとす。その例

所は海に近くて山に遠し。

專ら學問を好み德性を養へり。

大旱にも河川を涸らすに足らず。

子に讓れる財產

補格は既にいへる如く、用言の意義の上より要求せられて起れるものなれば、用言所屬のものなり。而して、そが觀念の補充をなすものなれば、上行性を有することも明かなり。かくてその用言の上にあるは當然なりとせらる。然るに、用言の意義によりては補格を二以上伴ふことあり。この時のその二以上の補格の相互の位置如何と考ふるに、これには一定の法則なく、心理上の輕重によりて上下して差支なきこととなり。たとへば

彼はその子に身代を讓りたり。

彼は身代をその子に讓りたり。

教師生徒に字を教ふ。
教師字を生徒に教ふ。

の如くいひうるにて明かなり。補格の位置は上述の如くにして比較的に自由なるものなるが、これにつきてなほ論ずべきことあり。下にいふことあるべし。

連體格の語はすべてその所屬の體言の直上にあるを本則とす。その例

資本は貯蓄の結果なり。
異なる鄉の珍らしき花禽を目にす。
一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけゐたり。

かくて多數の連體格並び存するときはそれらを對手たる體言の上に重ね、その間にまた他の語の介在するを許さゞるなり。然れども連體格の語は往々下なる體言との間に感動の修飾格或は接續格を介むことあり。たとへば、

夜明けて後にはうはいの八郞のいで矢目見むといはむには何とか、其の時答ふべき。（保　元、二）
たとひ命をめさるとも惜かるべき又わが身かは。（平家、一、祇王）

の如し。この場合は普通ならば、
いで八郞の矢目見む。

又惜かるべきわが身かは。

といふべきを八郎「惜かるべき」に力をこめていへるが爲にかゝる語法をとれるものなるが、かくの如きは接續副詞、感動副詞の加はる際にのみ起る現象なりとす。

情態の修飾格は用言の屬性を修飾するものなれば、その對手たる用言が述格に立てる時にも連體格に立てる時にも伴ふことあるものにしてその直上にあるを本則とす。

おほかたにおく白露。

椿はぼたりぼたり落ち落ちて地も紅なり。

たけのすら〳〵と高き人。

かの遙に見ゆるは繪島なり。

その禮儀は至つて正しきが如し。

然れども若しその用言が補格を伴ふ時は、その補格は既にいへる如く用言の屬性の延長とも見るべく用言の一部分とも見るべきものなれば、修飾格はその補格の上にあるを本則とす。

國内おほかた佛軍の馬蹄に蹂躙せられたり。

北風飄々鬢を吹きステッキ持つ手もかゞまむとす。

徐に車をやるもあり、あわたゞしく馬を馳するもあり。

この類の修飾格はいつもその對手たる用言の上にあるを原則とす。まゝそれが遊離することありても、他の用言の上に至ることなし。卽ちその範圍は

他の用言……情態の修飾格＝對者たる用言

の如き形式をとるものとす。されども

何はさておきまづ「學問を心がくる」を要す。

の如き場合に、その「學問を心がくる」が準體言となりて「要す」の補格に立てること明かなる時にはその「まづ」は「要す」に關せるものにして「學問を心がくる」に關することなしと認めらるべきなり。

程度を示す修飾格は主として用言又は副詞に、時として體言をも限定するものなるが、その對象たる語の直上にあるものにして、離れ、又は下にあること決してなし。その例

漁業を以て生活する者頗る多し。

松もまた甚だ稀なり。

いと遙かに見ゆ。

やゝ靜かになれり。

是眞の最長ずる所は蒔繪にあり。

頗る感ずべき行なり。

述體の句にありては主格は先頭に、述格は最後に來るを通規とす。その例

月清し。

菊の花さきたりき。

かくて補格のある時はその對手たる用言の上にありて主格の下にあるを普通とす。

政府は紙幣を發行す。

彼は身代をその子に讓りたり。

古の名將は士卒と艱苦を同じくす。

陳述の修飾格は述格に對しての修飾をなすものなれば、述體の句にのみ存するものなり。而して、その對手たる述格が實質用言にして、その屬性に關しての補格を有し、又賓格ありて、それが補格を伴ひ、又は屬性の修飾格あるときは、それらの上に位するを本則とす。その例次の如し。

何故にわれをして久しく床に眠らしめたるか。

世人もし之を疑はゞ遠くその證據を求むるに及ばず。

これ蓋し前述の理由によるものならむ。かくの如くなる理由は、補格及び屬性に關する修飾格はその用言の意義の擴張にすぎざるものにして、それらを一括したるもの卽ちそれらの陳述のしかたをば、この種の修飾格は修飾するが故にそれらの上にあるべきなり。かくしてこれは述格に屬するものなれば、その主格の下にあるを常規とす。

述體句に於ける主格と補格と述格との位置は時によりて顚倒せらるゝことあり。これには種々の狀態あり。先づ、主格を述格の下に持ち來せるものあり。

美なるかな、山河。

早返りたまふか、君は。

かねてぞみゆる、君が千歳は。

よそにのみこひやわたらむ、しら山のゆきみるべくもあらぬわが身は。

次には補格を主格の上に持ち來せるものあり。

何事をいかなるものがかきたるやらむ。

降る雪に、きこりの道もうもれけり。

この事を誰に汝は語りしぞ。

次には補格を述格の下に持ち來せるものあり。

誰か知らん、遠征の志を。
請ふ、賛成あらむことを。
とめこかし、梅さかりなる我が宿を。
思きや君なき宿をゆきてみむとは。
見せばや、人に、よはのけしきを。

又次の如くに述格の下に主格をも補格をも持ち來せるものあり。

とへかし、人の、花の盛りを。

かゝる位置の變更は心理的傾向に基づきて、その最も心をこめたる點をはじめにいへるものにしてこれらの組織は强き主張をなすもの、又は感情を强くあらはすものに多きものにして、歌謠美文に最も多く用ゐらるゝなり。

述格に用ゐられたる用言の補格は上述の如く自由の位置を有すれども、準體言又は連體格に用ゐられたる用言の補格にはかゝる自由はなく、それらは、必ず、その所屬の用言の上にありて離るゝことなく決して下に在ることなし。その例

彼は實に大手腕を有する人物なり。
彼は師より受けし教訓をよく守れり。
德に報ゆるには德を以てす。

これらの場合にその補格の語がその用言と離れ若くは下に行かむか、もはやその補格としての意義と職能とを有せざるに至るを見るべし。

目的準體言が補格を伴ふ時にも亦その補格はその用言の上にありて離るゝことなきを常規とす。たとへば、

着物を縫はせにやる。

花を見に來れり。

の如し。然るに時として、その目的準體言の伴ふ補格と述格に立てる用言の伴ふ補格との位置が前後交錯して置かるゝことあり。たとへば、

着物を縫はせに仕立屋へやる。

といふ時は二者の補格各判然と區別立てられてあれど、補格相互の位置の自由なるによりて

仕立屋へ着物を縫はせにやる。

といひても不條理にあらぬは明かにして、しかもこれも常例の排列たること明かなり。然るにこれを一歩轉じて

着物を仕立屋へ縫はせにやる。

の如くいふことあり。この場合のものは、述格たる用言の補格と目的準體言たる

もの丶補格との位置を前後せしめたるものにして、常例の配置にあらず。これも亦文の勢の爲にその地位を特に變更したるものと認むべきものなるが、誤解の生ぜぬ限りは破格といはるべきものにあらず。

述體の句に於ける陳述の修飾格は多くは主格の上に持ち來さるゝことあり。たとへば

げに品性は何者よりも必要なりといふべし。

蓋し、これ最難事ならむ。

この類の修飾格は述格の下に來ることなし。又これらの句に於ける情態の修飾格は主格の上又は述格の下に持ち來さるゝことあり。その主格の上にあるものの例

胸中おのづから閑日月あらむ。

早くも旭日の御旗ひるがへりぬ。

その述格の下にあるものゝ例。

我も行かむ、まて、しばし。

急げ、とくとく。

我は防がむ、力の限り。

これらはすべてそのはじめにあらはれたるものは特に力をこめて示すものにして文の勢を張る必要より來れるものなり。述體の句にありては時として體言よりなれる連體格をば述格の下に持ち來すことあり。その例

浪の文織れ、唐の大和の。

これが母です私の。

かくの如きことの起るは體言に「の」の附屬せるものに限れり。而してこれらは上にいへる中間に接續格、修飾格を加ふる場合と性質を同じくするものなり。

句の修飾格は句の頭におかるゝを通規とす。この種の修飾格はその意義よりして上の文句の意を下に接續するものと感動の意をあらはすものとあること既に述べたるところなり。その例次の如し。

かくて、彼は之を横濱へ輸出せり。

いざ、あすは故鄉へかへらむ。

あはれ、今年の秋もいぬめり。

然れども時として句の末に持ち來さるゝことあり。

主定まらぬ戀せらる、はた。

我は行かむ、いざ。
君は來たのか、また。
呼格は句の頭に置かるゝを通規とす。その例
少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。
あが君や、をさなの物いひや。
苫の袂よ、かわきだにせよ。
然れども時としては句の末に持ち來さるゝことあり。その例
來れ、我が友。
進めや、者ども。
長居すな、君。
こらまて、ゐざり。
あれは何ですか、君。
いざ給へ、浴に、大夫どの。
さて叉述體の句にてその中にある語に思想の主力を注げるものは、之を特別の方法によりて句の先頭に提げ示すことあり。今これを提示語と名づく。提示語は下の句と形の上の連絡なきあり。又連絡あるあり。いづれもその下なる句に

それが本來占むべき位格を有するものとす。而して、その下なる句の中に、それの本來の位格を示す爲に代名詞を置くことあり。然らずして、その位格を空位としてそれを代表する代名詞も何もなきことあり。次にこれらの種々の場合を說くべし。先づ下の句と形の上の連絡なき提示語は句の頭に獨立して示さるゝことゝ呼格と異ならず。たとへば、

不忍の池、詩人は之を小西湖といふ。

山櫻、わがみにくれば、春霞峯にも尾にもたちかくしつゝ。

の如し。これには、前にいへる如く、その位格を代表する代名詞を下の句の中に有するものあり。その代名詞をば再歸法に立てるものと名づけ、その提示語を再歸的提示語といふ。上の

不忍池、詩人は之を小西湖といふ。

及び

林、高山、蒲生、この三人を寛政の三奇士と稱す。

凡古言を解せむと心がくる者誰れか五十音の反切によらずして釋し得らるべき。

ちる花の忘れかたみの峯の雲、そをだにのこせ春の嵐。

の如きこれなり。さてその下の句の中に再歸法の代名詞なく、その位格は抽出されたるまゝ、空位になれるものを抽出的提示語といふ。上の

山櫻ヲわがみにくれば、春霞峯にも尾にもたちかくしつゝ。

の如し。これらは呼格と同じく往々位置顛倒せらるゝことあり。たとへば、

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の影そふゐでの玉水。(二)

かくて、獨立提示語に再歸的のものと、抽出的のものと二樣ありと知るべし。下の句と形の上に連絡ある提示語は之を連絡提示語といふ。その連絡提示語としての形の上の連絡は普通に係助詞「は」を用ゐて示すものなり。これにも再歸的のものと抽出的のものとあり。その再歸的の連絡提示語の例次の如し。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治したまふ。

君の令名は余夙に之を聞けり。

机は之を木にてつくる。

餘は之を略す。

これらは係助詞「も」にて示すことをもうべし。そはたとへば

机も之を木にてつくる。

といはれざるにあらざればなり。なほ、又元の助詞をそのまゝ再歸法の代名詞に

添へたるあり。

これを見よ、人もすさめぬ戀すとてねをなく蟲のなれる姿を。

次に、その抽出的の連絡提示語の例を示すべし。

一枝を折る者は(ヲバ)一指を切らむ。

春たてど花もにほはぬ山里は(ニハ)ものうかるねに鶯のなく。

吹きくる風は(ニハ)花の香ぞする。

これらの提示語は從來往々主格と混同して說かれ、それが爲に國語の法格を不明なるものゝ如くに誤認せしめたり。これらの用例は頗る汎く、かの俠客などのいふ。

上州は前橋にございます。

の如きものも、その連體格の語を抽出的連絡提示語としたるものにして、かく解してはじめて眞義を知りうべきものなり。一般にこの提示語は國語に頻繁に用ゐらるゝものにして、思想上最も重きを置く點を提示したるものなれば、主格と誤認せられ易きものなりとす。

第五十章　句の運用序說

こゝに句の如何に運用せられて文をつくるかを論ぜむとす。さきにもいひし如く、吾人の句と稱するものは思想發表の單位をさしたるものにして、これやがて文の素たるものなり。その句は之を運用するにあたりて文をなす。卽ち文とは句の實地に運用せられて人の思想發表の用に供せられたる場合の名なり。

從來は吾人の一の句なりとするものを以て直ちに單文と稱し、之に對して重文複文等の名目を設けたるものゝ如し。而してその重文複文とは單文を二個以上結合せるものなりといふものゝ如し。然れども吾人の思ふ所によれば、すべての文法上の文はこれ自身一個體たりといふべきものにして、その文法上の文を二個以上重ねて一の大なる思想を構成するものゝ如きは之を章節段などといふべきものにあらずや。たとへば、

廿三日。やきのやすのりといふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらざなり。これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる。

(土佐日記)

の如きものは、卽ち文法上に所謂單文三個を集めて構成したる文といふべきものなり。今若し、複文といふは單文を集めて構成したる文なりといふを文字通りに解釋せば上の如きは或は複文といひて可なるものゝ如し。然るに、かくの如きを

複文といふことは如何なる文法學者も認めざる所なるべきなり。されど、その說明を以てせばかくの如く解したりとてそれを排斥すること能はざるべし。

こゝに吾人は文の單複を認めざるを得ずといふことを認む。然る時に、それは單文にても複文にても、文としては一個體なるべきものにしてその單複はその文の構成が、單純なるか複雜なるかといふことに基づくといふことは明かなるが、その單純と複雜との區別をなすべき標準は何なるか。こゝに吾人は文の要素たるものゝ存在を考へ、その文がその要素を一個有する時には單文、二個以上有する時には複文といふことをうべしと考ふるものなるが、その單體は外面の姿のみを以て論定しうべきものにあらずして、同時に內面の思想を顧みるべき必要あるものなり。余はそれを句と名づくる事としたり。而してその句といふものは文の要素としての單位なりと考へ、それが一個にて成立したるものを卽ち單體の文を單文と名づけ、二個以上にて成立したる文卽ち複體の文を複文と名づくる事とせり。かくて單文にても複文にても、形體上明白に一個體にして文法上一個の文たることに於いては同一にして複文といひてもこれを二個若くは以上の單文の集合體なりといふことは不可能なる筈なり。その單複の差別はその內部の組織に於いて一の句より成るか、二以上の句より成るかによりて區別せるものなりとす。

單文はその構成單純にして一の句より成れるものなれば論なし。複文についてなほ篤とその如何なるものなるかを審定せざるべからず。複文は二以上の句より成るものなることは既にいひたるが、これは單に二以上の句より成り立つと云ひたるのみにては明白にあらず。二以上の文の結合により構成せられたる文章は隨處に見る所なるが、それらはすべて文法學上の複文なるかといふに、必ずしも文法學上の複文といふこと能はず。抑も文法學上に複文といふは單に二以上の句より成り立つといふのみにあらずして、それらが言語の上に一定の形式ありて結合せられて一個體となりたるものをさすなり。若し言語の上に形式上の結合無きならば、それらは二個以上の文の結合なりとしても、文法學上にては各獨立の文の集合なりと認むるものにして、かゝるものを以て複文とはいはず。即ち複文たるものは思想上の關係あると共に言語の形の上に連絡を保ちて一體となれるものにして、その言語の形の上の連絡あるにあらずば、之を一體なりと認むること能はざるものなることを注意せざるべからず。この故に既にもいへる如く、

「春は來ぬ。」「されど、花は未ださかず。」

「きのふこそさなへとりしか。」「いつのまにいなばそよぎて秋風のふく。」

「夜着は重し。」「呉天に雪を見るあらむ。」

の如きは文とし歌として發句としてはいづれも一章をなしたるものにして、思想上相合して一の統一體の觀をなしてあるものなれど、文法學にてはそれらは二個三個の文の集合體なりとして一個體の文とは認めざるなり。何となれば、これらの場合には上なる文は終結の語法をとりて下なる文と形體上の連絡なきを以てなり。而して、これらの點が文法學と他の文章を論ずる學問との境界をなすものなり。

然らば文法學にていふ複文とは如何なるものかといふに、そは上に說きたる如く、二以上の句が言語の形の上にての拘束をうけて、一體として結合したるものならざるべからず。上なる文をば終結の語法をとらずして卽ち陳述を終了せしめずして、陳述しつゝなほ之を下文に何等かの方法を以て形の上の連絡を生ぜしむる語法をとるときは、こゝに於いて、文法上の複文となるなり。たとへば

春來ぬれど‖花は未ださかず。

夏の夜はまだよひながらあけぬるを、‖雲のいづこに月やどるらむ。

といふ時に複文といふ一個體とはなれるなり。又事實は深き關係なきものにても陳述の方法上相連續したる形式をとりたるものあり。たとへば、

花さき‖鳥なく。

きものなりとす。

これも文法上の一文にしてその內部の組織には二以上の句あれば、複文と稱すべ

の如し。かくの如きも亦言語上形の連絡ありて相合して一となれるものなれば、

第五十一章　單　文

單文とは一の句にて成立する文なること既に述べし所なり。然れども、一の句といふことゝ單文といふことゝは、全然同一の意義を有するものにあらねばこゝに單文につきて說く所あらむとす。

單文は一の句にてなるものなり。その句には喚體、述體の別あること既に述べたり。又そを組織する爲に、各種の位格が、その內部に存すること、又それら一の位格內に多數の語の存すること、又同樣の位格が、多く存する場合あること等はすべてその一の句たることに妨となるものにあらざることをいへり。從つてそれらの事は單文なることに妨となるものにあらず。この故に

西郷隆盛、大久保利通、木戶孝允は卽ち維新の三傑なり。

彼はあまりの樂しさに歌ひ、舞ひ、踊り、狂へり。

潮はいよ〳〵川に滿ち殘照を浮べ、靑蘆の影を載せ、白き泡を運び、漫々として

まさに板橋を侵さむとす。

の如く、主格內に人名三を有し、述格內に動詞四五を有する文の如きも亦單文なるなり。從來はかくの如きものを以て多數の單文を縮め合せたるものとせり。然れどもその然らざる由は上に既に論ぜる所なり。又次の如き例

友も我も痛く疲れて、砂の上に座せり。

內省疚しからざる如き、屋漏に愧ぢざるが如き皆これ誠なり。

は主格、提示語等多くあれども、いづれも單文たるに妨げなきものなり。

單文はその句の體に基づき喚體、述體に大別し、又述體を說明體、疑問體、命令體等に區別をなしうべし。

こゝに單文の用法につきて說く所あらむとす。從來は單文の用法などにつきては何等の硏究をなすことなく、又硏究の必要もなしと思へるが如し。單文の用法につきては、これをその文單獨の用法につきての問題と、他の文と相關係して用ゐらるゝ場合の問題との二方面より觀察しうべし。

單文單獨の用法につきて考ふるに、その文がその句體の本性の示す意義をそのまゝにあらはして用ゐらるゝことは今更に論ずるまでもなきことなり。こゝにはその本性の示す意義以外の用をなすことあるを述べむとす。而してかくの如

きことは主として述體の文にあらはるゝものとす。

說明體の單文は之に感動を寓することあり。この時にはその述格の語に感動の意ある助詞「よ」「かな」等を添ふるなり。その例

　われはあたゝかきことよひの夢にいらむかな。

　みるわれさへに心やはらぐよ。

の如し。從來の文法家かくの如きものを感動體の文といへり。しかれどもこれらは體としてはなほ說明體といふべきものなること既に論ぜるところなり。說明體の文は又これを以て義務を示して事實上命令をなすことあり。たとへば

　機密の事を漏洩すべからず。

　圓山に遊はゞ山陽先生の墓をとふべし。

の如きこれなり。これらの文につきても亦近來誤れる說を傳ふるものあり。即ち「べし」を以て命令の助動詞となし(これ誤なり)これが述語に附屬せるものを以て命令體の文とせり。然れどもこれらは、義務を對手に示し、事實上命令禁止等の用をなす指圖と同じ用をなすことありといへども、本來義務を示せるのみにして、命令體の文にはあらざるなり。說明體の文は又問題を提示するに用ゐらるゝことあり。たとへば、

右の問題の解答を問ふ。

の如し。これはその文の體を見れば、明白に說明體なるが用法よりいへば、これは問題として提出せるものなれば疑問の用に供せられたるものなり。さればこれも上の例によらば、疑問體といふべきものにあらずや。然るに上のを感動體命令體といふ人々のこれを疑問體といはざるは如何なる理由によるか。然れども、もとよりこれらはすべてその文體の上よりいへば、說明體たること明かにして、たゞその實地の用ゐらるゝ場合の差別によるのみ。而してその實地の用法よりして觀察するときは、これらは決して、感動、命令、疑問の三の場合に止まらず、種々の場合を見るべし。されば、說明體の文は實際上の用法を見れば、種々の場合ありといふべく、單にそれらの用法のみを見て感動體、命令體などといふはこれそれの本質とそれと用法とを混同せるものなり。元來文法上の文の體の區別はその本性とそれの組織とによる特質に基づくものにして、單に實際上の用法にのみよるものにあらず。若し本性と臨時の用法とを混同せば、終には紛糾錯雜止まるところなきに至らむ。

疑問體の單文は之を以て反動的に叙述を强むる意をあらはすに用ゐることあり。たとへば、

げにあはれむべきことにあらずや。

豈にそれ然らんや。

の如し。これ即ち疑問體を以て實際は强き說明をなせるものにして、所謂反語なり。從來は反語を說くに語論のうちに於いてし、若くは句の種類とせり。されどそれらは皆誤れるものにしてこれたゞ句の用法上の一現象にすぎざるものなり。疑問體の單文は又それを以て命令禁制の用をなすことあり。たとへば

汝はまだこの事をへぬか。

又そんな事をしてゐるか。

の如し。これは疑問體の文を用ゐて催促又は制止をなし、實際は命令をなせるなり。疑問體の單文は又これを用ゐて感動の用をなすことあり。たとへば、

あつぱれの豪傑を死なせたるか。

世の中にいづら我身の有てなし。哀とやいはむ。あなうとやいはむ。

の如し。これまた從來の說の論法をせば、感動體といふなるべし。されどこれも體としては疑問體なるが用法上の實際は眞に疑ふにも問ふにもあらず、問ひ又は疑ふ形式を以て感動を寓したるなりとす。

命令體の單文はこれを以て、疑問を提出することをうべし。たとへば、數學の問

題などに

上の方程式を說け。

といふが如し。これは實用上疑問を提出せるものにはあれど、命令體の文たることは明かなり。すべて文法上の體の區別はその思想發表の方法に關する性質上の區別にして、單に意義上の問題にあらずと知るべし。

以上は單文につきての基礎的の事實を說きたるものなるが、それらの實地の用例は種々にして一々あげつくすべからざるものあり。それらのうちにても又自然文法學上說くべき點なきにあらず。それらは下の文法學の極限の條下に論及するところあるべし。

第五十二章　複文序說

二以上の句が相集まりて、複雜なる思想をあらはし、言語の形に於いて拘束を有して一體となれる組織の文を複文といふ。意義の上にてはこれと似たる關係を有し、しかも言語の形の上に一體となるべき拘束を有せず、形體上各一の文たるものゝ、集合たる場合は上に述べたる單文の用法上頻繁に起る現象にして文法上の複文とは文法學上性質の異なるものと認むるなり。

複文は二以上の句の相集まり、言語上の拘束をうけて一體となりたる組織の文をいふものなるが、その最も單純なるものは二の句の相集まりて組織するものなるが故に先づ二の句にて組織する複文につきて考察を下すべし。

二の句が相依りて複文といふ一體となるには形の上の拘束存せざるべからざると共に、それらは內容上にも相結合する點なくばあらず。これについて考ふべきことは語句複合の方式なり。これは既に述べたる如く、一切の事物に通じて二のものが複合するには

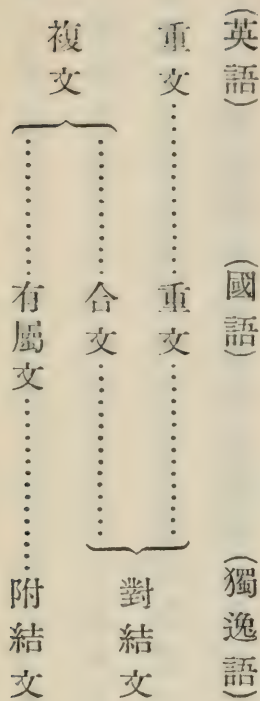
一、個々的に並列する　並立關係
二、對等の資格にての　合同關係
三、一が主となり他が從となる　主從關係

の三を出でぬことは森羅萬象に通じての一般的事實なり。こゝに複文にも亦この三種の別の認めらるゝなり。第一の並列的關係の組織になる複文は所謂重文なり。これは內容的にはその各個の句が並列してあるのみにして深き關係なきが形體上一になるといふ拘束をうけてあるなり。而してこれの拘束は上の句の末の用言をば連用形にするを規定とす。(口語に於いては其の外に接續助詞「し」にて結合す)第二の合同關係の組織になる複文は上句が接續助詞をふみて、下句につ

ながるといふ法式のものにして内容的には上の句が條件となり、下の句が歸結となり、上下二の句の合同によりて、一の大なる思想をあらはしたるものなり。それ故にこれを合文と名づく。第三の主從關係の組織になるものは一の句が主となり、他の句がそれの附屬的の地位に下りて、或る語と同じやうなる位格を占むるものなり。それを今有屬文と名づく。以上重文、合文、有屬文の三種は事物複合の三の方式より見て必然的にして、しかも十分なる類別にして、これより少かるべからず又多かるべからざるものなり。而して重文とは句を重ねてなせる複文、合文とは句を合せてなせる複文、有屬文とは附屬性の句を有する複文の義なり。

複文はその組織につきて見れば、三種に分つべき必然性あることは動かすべからざる所なり。然るに世には複文をば大抵二種に分つ。これは何に基づくか、その據を知らずといへども恐らくは英文典に據れるものならむ。英文典にては文をは simple sentence（單文と譯せり）compound sentence（重文と譯せり）complex sentence（複文と譯せり）の三に分ちてあるが、その complex sentence（複文）といふものは余がいふ所の合文と有屬文とを一に混合したるものなり。而してそれらの見解にては、余のいふ合文の上句を以て副詞的のものと見るものなるが、それは明白に謬見なり。何となれば、この種の文は論理學にいふ所の約結命題の性質を有せるも

のにして、上句は決して下句の從屬物にてはあらぬなり。卽ち上句に說く所の事成立せずば、下句に說く所は實現せずといふ如き關係にあるものにしてこれを副詞的といふは全然謬なり。かくて又、一方獨逸語の複文を見れば、その句法にてはsatzverbindung(對結文と譯せり)satzgefüge(附結文と譯せり)の二とせり。こゝには又余のいふ重文と合文とが混一して對結文と名づけられてあるを見る。こゝに考ふるに、重文も合文も二句の相互の資格上の關係は對等的のものなるが故に、その方面より見れば、獨逸文典の方、英文典のよりも合理的たるなり。而して獨逸語の實地につきて見れば、事實かくする方說明に好都合なりと見ゆ。さりながら、內容的の關係より見れば、その對等といふうちにも個別的の並列と相待的の合同との差あり。甲は加(＋)(プラス)の關係にして乙は乘(×)(タイム)の關係に似たるが故にこれは區別すべきものなり。かく余が示したる三別と英獨文典の分ち方とを對比すれば次の如き關係を見る。

(英語)		(國語)	(獨逸語)
複文	重文……	重文……	對結文
		合文……	對結文
		有屬文……	附結文

卽ち、英獨二文法の差違は余のいふ合文の所屬の差違なり。しかしながら二者共に、二分法をとり三分法をとらずといふ點に大なる缺陷あり、隨つて右の結果となりたるものなり。これは分析的研究に於ける二分法を綜合的研究にまで應用したる研究態度の根本的の誤謬に基づくものと認めらる。次下、上の三類につきて大意を說かむ。

前後對等の資格を有する二以上の句を重ねて一としたる複文を重文といふ。これは上にいへる並立の組織になれるものにして、前後の二句は意義上にては個個別々のものとして見らるゝが、形の上にては相連りて一の文をなすをいふ。その一文をなすに至る言語上の拘束は上の句をばその述格を連用形にして下の句に重ぬる點に存し、口語にはその外上の句の述格に接續助詞「し」を添へてもあらはす。その例

月淸く、風凉し。

人は步み、犬は走る。

花咲き、鳥鳴く。

花も咲くし、鳥も鳴く。

これらいづれも、同時に又は引續きて、起り又は思惟せらるゝ事項を重ねいへる

に止まり、その連絡は唯形式の上に有するのみなり。次の合文を化學上の化合物に比すとせば、これは所謂混合物に似たるものなり。

前後の二文が對等の資格を有し、しかも相合同して、一の新しき思想をあらはすに至れる複文を合文といふ。合文は上にいへる如く合同の組織になれるものにして、前後の二句は互に對等の資格を以て相對すれど、相抱合して元の二者いづれにもあらざる一の新しき思想を表明するに至れるものにして化學上にいふ化合物の如き性質を有す。その言語上の拘束は上の句が述體たる時にその述格に接續助詞「ば」「と」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」等を付けて上下を結合するにあり。その例

月清くば、庭に出でゝ眺めむ。

月清けれど、風涼しからず。

花咲かば、上野に赴かむ。

花は咲くとも、鳥は鳴かざらむ。

花は咲くに、鳥は未だ鳴かず。

複文の三種の別、特に合文を他と區別して一類と立つることは著者の創見に屬す。從來は既にいへる如く余がいふ合文と有屬文とを混一して複文と名づけ、之と重文との二種を認めたるに止まり、この合文の上なる句をば副詞句と稱せり。

然れどもこの上なる句は、

花咲けば　　鳥なく。

花は咲けども　　鳥は鳴かず。

花は咲くとも　　鳥は鳴かざらむ。

花は咲くが　　鳥は鳴かず。

花は咲くに　　鳥は鳴かず。

花は咲くを　　鳥は鳴かず。

の如く、下なる句の意義を修飾限定せるものにあらず。但し下なる句は思想の歸結點たることは勿論なり。かくの如きものは、各句はいはゞ相持ちのものにして上の句と下の句とが相合して一の大なる思想をあらはせるものとして構成せられたるものなり。而してこれらは皆論理上の約結命題の如きものにして上の句が下の句の條件たるが如き勢はあれど、修飾に止まる如き輕きものに非るは明かなり。この故に之を副詞句と稱するはあたらざるなり。

かくの如くなるにも拘らず、之を副詞句と稱する所以のものは其源英文典にあり。英文典にては上にいへる如く文を單文(simple sentence)重文(compound sentence)複文(complex sentence)の三に區別し、而して吾人の所謂合文はこの compound sentence の

中に入るべき筈のものなるに英文典にては皆これを complex sentence の中に說けり。世の文典家の三分說はみなこれを墨守せるものなり。然るに之を獨逸文典にかへりみるに、該文典は既にいへる如く文の結合をば、

Satzverbindung　對結文

Satzgefüge　附結文

の二として、吾人の重文及び合文をば一として之を對結文とし、吾人の所謂有屬文をば附結文として明かに區別せり。この有屬文卽ち附結文をば他と區別して一類とすることは合理的にして且つ明瞭なり。而して、重文と合文とは、その內部に於ける句が對等の地位に立ちうることは同樣なれば、その點より見れば、獨逸文法の方合理的に近し。然れどもその對等なる各句の關係は同一にあらず、一は個別的にして、一は合同して、一新思想をあらはすものなれば、これを重文と合文との二に分つべきは理の當然なり。わが文語にありては重文はいつもその上の句の述格を連用形にし、合文はいつも接續助詞にてつゞくるものなれば、言語の形式上よりいひても區別ありといふべし。

句が文中にありて語と同じくある位格の地位に立つものを附屬句といひ、附屬句を有する文を有屬文といふ。この有屬文は、主たる文とある句とが主從の關係

を有するによりて生ずるものにして一の句がその主體となり、他の句は之に附屬する位地に置かれたるものなり。而してその附屬の位地に置かれたる句をばここに附屬句となづけ、それらは文中にありては語と同じくある位格を占むるなり。その附屬句の事は下章に説くべきが、今略説せむに、それには文中にありて或は主格となり、述格となり、賓格となり、補格となり、連體格となり、修飾格ともなるなり。この例、

此の地の商業の興れる（主格）は工業に同じ。

この庭は石燈籠の配置がうまい。（述格）

あの人の美點とする處は操行の極めて正しき（賓格）なり。

この島人は禮儀正しき（賓格）が如く思はる。

余ははじめてその言の信なる（補格）を知れり。

夷狄の君ある（主格）は諸夏のなき（補格）にしかず。

彼は紅塵空を蔽ふ（連體格）活劇場裡に入り來れり。

唐辛子は勢よく（修飾格）生ひ立てり。

複文の根本方式は上の三種にて盡きたるものにして、それらの方式を基礎にして、これを總合して複雜になして進むときは種々の現象の起るものならむといへ

ども原理としては上の三種の方式に止まり、其の他は之れの實地の運用によりて生ずる現象に止まるものなり。

第五十三章　重　文

重文とは二個以上の句を行文の便宜よりして相並列せしめたるまゝ結合して一體の文を形づくれるものをいふ。而してその構成要素たる句は意義上互に獨立して相對的の關係に立つものが、たゞ形體上一連續をなせるものなれば、その重ねられたる句は唯空間上、時間上若くは思想上の接近を除きては別に深き交渉の存する所なきものなりとす。

重文を構成するには上にある句の述語が用言なる時にその形をば文語にありては連用形として下の句につゞくるものなるが、口語にては上句の述語の形を連用形を以てすることもあり、又接續助詞「し」を加ふることあり。而してその句は必要に應じて數句を重ぬることを得べし。その二句にてなれる例は上に屢あげたれば、次には三以上の句にてなれる例を少しくあぐ。

志堅く、望高く、才亦之に伴ふ。

大直は屈せる如く、大巧は拙なる如く、大辯は訥なる如し。

雨ふりいで、風加はり、神鳴りはためく。

商は交易し、工は製造し、農は耕種す。

これらはすべて唯重ぬればよきものなるを以て三句以上幾何にても必要に應じて重ねうべし。而して上の如く重ねて一體とする形は句の終末が用言なる時に行はるゝものにして、用言ならぬ時にはかくの如き用法は存せず。

上にいひし如く、重文は元來意義上互に獨立なる句を形體上結合せるものなるが故に、意義上に深き關係あることなし。然れども上句と下句との間には些少の差なきにあらず。即ち上句は下句に比して空間上、時間上或は思想上、前なるものをあらはせる如き觀あり。しかも下句はその文意の歸着する所なれば、陳述の樣式は下句の述格の形式如何によりて決定せらるゝものなり。

形體上重文の組織せらるゝ方法に多少の異同あるによりて次に例をあげて説明すべし。

一、形容詞、動詞、存在詞は、その連用形を以て重文の上句の述格を形づくるなり。

松青く、砂白し。

富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。

雨ふりいで、風加はり、神鳴りはためく。

花の咲くあり、實のなれるもあり。

さてこれらは上下兩句に同趣の用言を述格に用ゐたるものに限らず、重ぬることをうるなり。

山は青く、野は綠なり。

そこに少しの混雜なく、そこに些しの喧嘩を見ず。

風ふきいで、雨はげし。

二、形容存在詞、動作存在詞はその連用形を以て重文の上句の述格とする用を有せず。この故にこの種の用言を以て述格とせる句を上句として重ぬる時にはその「あり」を除きたる語の連用形になほして重ぬるなり。その例

この間の眺め東京附近と更にかはるところなく、別に目を惹くものなからむ。

岡らざるに牛は死し、岡らざるに主は存せり。

富士山高く懸り、浮島が原廣く橫れり。

形容存在詞動作存在詞を述格とせるものを重ぬる時は必ず本文の如くせざるべからず。されど、この例の如きものは、皆本文の如き手續によりて生じたるものとはいふべからず。卽ち、尋常の動詞、形容詞を上句の述格とし動作存在詞、形容存在詞を下の述格となせるものなしとは限らざればなり。但し、この例の如きもの

は殆ど皆こゝに說ける場合といひて可なり。

三、說明存在詞「なり」が述格に立てる句を重文の上句とするには種々の形あり。

先づその連用形を以て重ぬることあり。その例

舜も人なり、我も人なり。

夜は靜かなり、月は冴えたり。

次にはその「なり」を「に」と「あり」とに分ち、「して」を「あり」の代用として重ぬることあり。

その例

天地たゞ平和にして、四顧たゞ寂寥たり。

金は黃色にして、銀は白色なり。

次にはその「にして」を略したる「にて」を以てその代用として重ぬるあり。その例

頭は人にて、身は魚なり。

春の夜は曇がちにて、朧月おぼし。

次には、その「あり」に當る部分を全く省き、「に」のみにて述格をなして重ぬることあり。その例

桃紅に、柳綠に、春の風ゆるやかに吹く。

風さわやかに、氣淸し。

次にはその「に」をも省き、賓格のみにて上句の述格をなすことあり。
孔子名は丘、孔子はその尊稱なり。
天氣また清朗、風おもむろに、四方の眺望はじめの如くなりぬ。
四、說明存在詞「たり」が述格に立てる句を上句とするにはその連用形を以て重ぬることあり。
君は君たり、臣は臣たり。
その他にはこれを「と」と「あり」とに分解し、その「あり」の代に「して」を用ゐてその述格として用ゐることあり。
天地寂莫として、四隣に聲なし。
水淼茫として、舟搖々たり。
五、口語にありては「である」といふ語を述格としたるを以て上句とするには「ある」を省きて「で」のみにて之をあらはすことあり。その例
あれは櫻で、これは桃だ。
わたしが見ただけで、誰も見ない。
又「でして」を以て上句の述格とすることあり。その例
それはほかのことでして、これだけがおもなことです。

御目にかけるのはこれだけでして、あとはもつてまゐりませぬ。

六、複語尾にしてその連用形を以て重文の上句の述格を形づくり得るものは同格連用をなしうる「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「ず」「つ」「べし」「まじ」なり。この複語尾の狀態につきては用言の用法の中、同格連用を參照するを要す。これらの用例次の如し。

野は細流に截られ、街は水に夾まる。

頼朝は二弟をして平氏を攻めしめ、己は鎌倉に止れり。

忽ち螺をふき立てさせ、主從僅に六騎にて出陣せり。

潮は手に滿ちて泡さへも見えず、音さへも聞えず。

凡そかくべき事柄ありて、而して後文章生ず。

その量欽すべく、その德仰ぐべし。

この事は君も承諾すまじく、余も亦君に勸めじ。

七、連用形を有せざる複語尾「む」「き」「けむ」「らむ」等又は連用形ありても同格連用に用ゐざる「けり」「たり」「めり」等を述格に有する句を上句とする時はそれらの複語尾を除き、用言の連用形を以て上句の述格の形とす。その例

運ある者は運の結果をうけ、働ある者は働の報を得む。

紀信は高祖の命に代り、義光は親王の爲に死にき。

智識は名目の爭に留まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。

雨ふり、風ふきぬ。

折りしも北風雨を吹き、寒さは肌をつんざきけり。

八、複語尾「ざり」「べかり」の類は上句の述格となる時に「あり」を省きて「ず」「べく」にてその述格をなす。たとへば、

雨もふらず、風もふかざらむ。

花も咲くべく、鳥も鳴くべからむ。

又この「ず」に「して」を加へて上句の述格をなすことあり。この「して」は「あり」の代用たり。

山も海も皆暮れ、夜更けて、西東もみえずして、天氣の事機取の心にまかせつ。

又「ずして」の代に「で」を用ゐることあり。

空は霽れで、雪さへふりいづ。

重文の上句の述格の用をなしえぬ複語尾は別として、その他の複語尾は、重文の上句をなす際に、決して省き去るを得ず。たとへば、

その智には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。

の「べく」をば省きて

その智には及び、その愚には及ぶべからず。

とせば原文の意義とはかはりたるものとなるなり。又元より上句に「べし」のなき重文、次の如きものを

船子どもは腹鼓をうちて、海をさへ驚して、浪をもたてつべし。

をば、

船子どもは腹鼓をうちつべく、海をさへ驚しつべく浪をもたてつべし。

とすべきにはあらぬなり。なほ

行樹は烈風に倒され、道路は暴雨に毀たれぬ。

の如き場合「倒され」を「倒し」とすべきにあらぬにて知るべし。

すべて用言の連用形にて重文の上句の述格たるものをば、更に複語尾「て」を加へて結合を强むることとなり。かくてその「て」の用例を見るに、種々の狀態あり。先づ

月さえて、雁高く飛ぶ。

花もちりて、梢は青葉になりぬ。

かくの如き「て」は多數の上句中事實上特に密接なる關係を有するものを結合する用をなすことあり。

春過ぎて夏來り、秋往きて冬到る。

いらか破れては霧不斷の香を焚き、とぼそ落ちては月常住の燈を揭ぐ。

或は又上句二個を一として、次に重ぬる用をなすことあり。

月落ち、烏啼いて、霜天に滿つ。

美酒あり、嘉肴ありて、この月なきを如何にせむ。

重文にありては上句と下句との意義上の連絡を圓滑にし、或は緊密にせむが爲にその間に接續語を置くことあり。この接續語は文法上、下句に屬するものとす。

志堅く、且つ望大なり。

酒あり、又肴あり。

重文にありては上句は必ず述體なるべけれど、下句は喚體なることあり。その例

秋はぎをしがらみふせてなくしかの目にはみえずて、音のさやけさ。

かくの如きはその重文を以て喚體として取扱ふべきものなり。そは上にいへる如く、下句に於いて、その句の樣式は定まるものなればなり。

重文の下句は述體なるもの最も多し。そがうちにも說明體なるものを多しとす。それらの例は既に屢あげたれば今省く。さて又その下句の疑問體なるあり。命令體なるあり。その下句の疑問體なるものゝ例。

酒あり、肴ありや。
果して命の如く甲は行き、乙は止まりしか。

その命令體なるものゝ例

汚れたるはすて、清きのみとれ。
知れるを知れりとし、知らざるを知らずとせよ。

これらは下句の樣式によりてその重文全體の陳述の樣式の定まるものなれば、その重文を以て疑問體又は命令體として取扱ふべきものなりとす。

從屬の組織によれる同格の主語卽ち副主格を有する句が、重文をなせる時にはその從屬の部分をあらはす副主格のみの句にて重文をなし、その本主格の語をその重文全體の主格として、冠することあり。たとへば

象は體大にして、力强し。
東京は面積廣く、人口多し。
薔薇の花は色美しくして香高し。
汝等のうち、一人は殘り、餘のものは皆來れ。

の如し。

重文は文全體の修飾格を伴ふことあり。

あはれ、我が友は失せ、我が運、命はきはまりぬ。

あはれ、風烈しく吹き、雪さへ加はりぬ。

重文は上句は上に、下句は下にありて、位置を顚倒せしむることなきを通規とす。但し上句の述格「て」にて重ねらるゝものは往々顚置せらるゝことあり。その「て」にて述格をなせる上句の下句の下に置かれたる例。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ、我が身一つはもとの身にして。

ありときく音羽の山のほとゝぎす何かくるらむ、なく聲はして。

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ、身にいたつきのいるもしらずて。

重文の上句の中に係助詞ある時は、その助詞の勢力はそれの述格に吸收せられて下句に及ぶことなし。これは頗る注意すべき事なり。その例

かへる山何ぞはありて、有るかひはきてとまらぬ名にこそありけれ。

ヽヽヽとなんよみて、しにけり。（大和物語）

みゆきとかよにはふらせて、今はたゞこずゑの櫻ちらずなりけり。

これらは、その曲調を起すべき勢力が上句の述格の「て」に吸收せられたるなり。又

たぐひなかりし御氣色こそつらきしも忘れがたう、いかに人見奉りけむ。

（源、胡蝶）

の如く「て」なくてもかゝる現象を呈することあり。されど、これらは例多からず。

第五十四章　合　文

合文は通例二の句にて組織するものなるが、それらの句は各對等の價値を有して、しかも更に大なる思想をあらはす要素として相互に抱合して一體となりたるものなり。かくして連結せられたるものは、句と句とが形の上に於いて連合せるのみならずして、意義の上に於いては原の句のいづれの意にもかたよらず、二者の合同によりてあらはされたる首尾照應ある思想をなせるものなりとす。

合文の要素たる二句のうち、そのまづあらはるゝものは他に對しての前提の條件又は事實をあらはせるものなれば、之を前句といひ、後にあらはるゝものは、前句に對して何等かの關係をあらはし、かねて文の歸結の役目をなすものなり。今これを後句といふ。前句と後句とは意義上頗る密接なれども、形は唯助詞によりて結合せらるゝに止まり、この接續を除く外は各は更に互に形式上に影響をなすことなきを本體とす。

合文にありては前句が述體句たるを普通とすれど、稀に喚體句たることあり、又後句が、喚體句たることあり、述體句たることあり。かくてそれらの前句と後句と

の關係は又種々にあらはるゝなり。

喚體の句を前句としたるものは、後句は述體なることを普通とす。この様式の文はその種類は多からねど、用ゐらるゝことは稀ならず。この時にはその前句の末を「ものゝ」「ものを」といふ形にして後句につゞくるものなり。それらの例

なつかしくやはらかなるものゝ、いとめづらかに面白し。

君來むと言ひし夜毎に過ぎぬれば、頼まぬものゝ、戀ひつゝぞふる。

折角きたものゝ、これではしようがない。　（以上後句は說明體）

たちぬはぬ衣きし人もなきものを、なに山姫の布さらすらむ。

愁どもしきりなるものを、など遲くは參りつるぞ。（以上後句は疑問體）

さうはいふものゝ、やつぱり君はがまんしてゐたまへ。（後句は命令體）

これらの「ものゝ」「ものを」の「もの」は上なる句を體言に化せしむる力をあらはすものにして、「の」「を」にて下につゞくる用をなすなり。かくて「もの」にて體言化して上の句が喚體句となれるものを「の」「を」にて下の句につゞけて一體とならしめたるものにして、卽ち合文の一種たるなり。從來の研究によれば、かくの如きものは大抵は放棄して顧みざりしものなり。又たま〳〵之に注目せしものも「ものゝ」「ものを」を以て助詞と稱し、感動詞と稱し、その外に何等の研究を施すことなし。これはかの放

棄して顧みざるよりは少しくまさりたれども、要するに五十歩百步の差のみ。今これらが感動詞又は助詞たることを承認すとしても、なほこれらの句又は文としての構成を說くことなくば、殆ど何等の價値なきなり。今これらを「もの」にて喚體化せしめ、かくてそれは體言の形を有するによりて「の」「を」といふ助詞にて下句につづけたるものにしてかく解してはじめてその構成も了解せらるべきなり。

合文の前句の述體なるものは頗る多くして合文の大多數はこの形をとれるものなり。而して、その前句は接續助詞によりて後句に連結せらるゝものなるが、その接續助詞の如何によりて、或は假設の條件を示し、或は實在の事を條件として示し、又は共存の事實を示すものなるが、それらは助詞各個の力に待つこと多きものにして、それらの助詞の事は既に述べたれば、今說かず。さてその後句を見るに、或は喚體なることあり、又述體なることとあり。而して、述體なるものはもとより多けれど、又喚體なるものも少しとせず。ことに和歌にはこの後句の喚體なるもの屢あらはるゝなり。次にその喚體なるものゝ例をあぐ。

いそがずばぬれざらましを、旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。

郭公一こゑとこそ思ひしに、まち得てかはる我が心かな。

早き瀨にみるめおひせば、我袖の淚の川にうゑましものを。

さらぬだに草の枕は露けきに、涙すゝむる蟲のこゑ〴〵。

その後句の述體なるものは或は說明體なるあり。

世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。

昔賴光といふ人ありけるが、誠に人にすぐれたる剛の者なりけり。

日くれかゝるに、やどるべき家もなし。

春は立ちしかども、風なほ寒し。

而してこの後句の說明體なるもの最も多し。或は疑問體を以てせるあり。

もし天氣よくば、君は旅行したまふか。

鶯の谷より出づる聲なくば、春くる事を誰かしらまし。

氣候かく順調なれば、農家の愁眉や開かれむ。

或は又命令體を以てせるものあり。

夜啼すと、たゞもりたてよ。

若し汝之を欲せば、欲するまゝにせよ。

つゆも物空に翔らば、ふと射殺したまへ。

こは面白き事なれども、あまりに耽るな。

大和撫子さま〴〵におのがむき〴〵咲きぬとも、おほしたてゝし父母の庭の

訓にたがふなよ。

この後句と前句との關係に於いて、未然形をうくる「ば」「と」「とも」に對しては、後句は未來の語法を用ゐ、已然形をうくる「ば」「ど」「ども」に接しては後句は過去の語法を用ゐざるべからずといふ如き說をなせるものあり。これは一往理ある如く見ゆれど、實は不通の說なり。今單に「ば」のみにつきていはむに、その未然形を受けたるものに對して次の如く種々にいふことを得む。

明日日曜日ならば、遠足に行かむ。

明日日曜日ならば余がかねていひし通りなり。

明日日曜日ならば昨日は金曜日なりしなり。

もし事實ならば大變だ。

これらの例を見てその不當なるを知るべし。又已然形を受けたるものに對しても

昨日日曜なれば、今日は月曜日なり。

昨日日曜日なれば、明日は火曜日なり。

これは面白き事なれば、小生もこれを學ばむ。

かくいひて「き」「けり」等を加ふることなきのみならず、「む」をさへ用ゐるにあらずや。

この他「とも」「ども」に對しても同樣の事をあげて論じうべし。要するにこれらは修辭上の問題にして文法上の問題にあらざるなり。

合文の複雜なるものに至りては、一の後句に對して二以上の前句あることあり。

その例

雨は降りたれど、春の日數も殘り少になりたれば花見に出で行きぬ。

春は來たれども、櫻の花の未ださかねば人の心ものどけからず。

又合文を以て前句としたるあり。

讀まむとすれど、讀みかねしかば、上聞に達ぬ。

裘は火にくべて燒きたりしかば、めらめらと燒けにしかば、かくやひめあひたまはず。

又合文を以て後句としたるものあり。

吾が行ひ道理にかなはゞ、世こぞりて毀るとも、懼るべからず。

相戰はむとすとも、かの國の人きなば、猛き心つかふ人よもあらじ。

又前句の地位にも後句の地位にも合文を用ゐたるものあり。

のちに男ありけれど、子あるなかなりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。

停車場に行きけるに、既に發車したれど、そのまゝかへるべきにあらねば暫くまてり。

合文にありては前句の述格に附屬せる「ば」の下に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等を加ふることあり。この時には後句の述格は之に應じて連體形又は已然形を以て終止す。それらの例。

人をおもふ心木の葉にあらばこそ、風のまに〳〵ちりもみだれめ。
天の川紅葉を橋にわたせばや、たなばたつめの秋をしもまつ。
龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へまゐらざりし。
いかならむ岩ほの中にすまばかは、よのうき事のきこえこざらむ。

合文の前句のうちに係助詞あるときはその結はその述格に附屬する接續助詞に吸收せられて、後句に勢力を及すことなし。すべて句中にある係助詞の勢力はその句の述格に勢力を及ぼすに止まり、その外に勢力を及ぼすことなきものなるが、こゝにては述格は接續助詞によりて、下につゞくるに至りたれば、その係助詞の勢力はこゝに吸收せられて、後句に勢力を及ぼすことなく、したがひてこれに對する結といふもののあるべきにあらざるなり。その例

あひみてはなぐさむやとぞ思ひしに、なごりしもこそ戀しかりけれ。

したにこそ人の心もうつろふを、色にみせたる山櫻かな。

これらを「詞の玉緒」には「ぞ」「こそ」に對して「に」「を」を以て結ぶといへれど、そは當らず。「に」「を」は結末にあらずして接續なるをや。かくの如きは結尾と接續との區別もなき論なり。なほ他の例どもをあげむ。

はりまがたうらみてのみぞすぎしかど、こよひとまりぬあふの松原。

命をばあふにかふとかきゝしかど、われやためしにあはぬ死にせむ。

信濃なるそのはらにこそあらねども、わがはゝきゞと今はたのまむ。

都人さこそまつとも、郭公おなじみやまの友な忘れそ。

是こそ善惡のわかるゝ所なれば、心を用ゐるべし。

珍らしき春もあすとぞきこゆれば、くれなん年をなにかをしまむ。

從屬の組織によれる同格の主格卽ち副主格を有する句が合文をなせる時にはその副主格のみの句にて合文をなし、その本主格を合文の頭におきて、之を示すものとす。

櫻花は香少けれど、色艶なり。

賣藥は價廉なるが効能も亦うすし。

合文の前句の述格に對して用ゐらるゝ一定の修飾格あり。そは「若し」「蓋し」「たと

ひ」「よしや」などいふ語にして前句の述格を修飾し、接續の方法に一定の約束を有す。こゝにいへる修飾格はいづれも陳述の修飾格にして、「若し」「蓋し」等は前句は必ず順續の假設條件なるを要し、「たとひ」「よしや」等は前句は必ず、戻續の假設條件たるを要す。その例

もし假寢せば、夢も亦綠ならむ。

蓋し天氣晴朗ならば、眺望は可ならむ。

たとひうれへ侍りとも、何のかひか侍らむ。

よしや敵人きたりとも、われかくあれば、心强く思召せ。

合文の後句を修飾する修飾格あり。これは必ず後句の上前句の下に介在し、しかも後句に附屬するものとす。

明日天氣ならば、恐らくは野田君來らむ。

雨はいたく降れど、しかも友は訪ひ來れり。

この際の修飾格は前句と後句との間にありて前句の述格の上にあること決してなし。この法則を亂るものは文法上修辭上破格のそしりをうくるのみならず、文意を正しく人に傳ふること能はざるべきなり。

合文の全體の副成分として呼格の語を伴ふことあり。この呼格の位置は單文

のにおなじ。

やよしぐれ。物おもふ袖のなかりせば紅葉の後に何をそめまし。

花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ。春の山風。

合文にては前句は上に後句は下にあるを通則とす。時としてはその位置を顚倒せしむることあり。その例

匂ひつゝ散りにし花ぞ思ほゆる夏は綠の葉のみしげれば。（後撰集）

君しるらめや人しつげずば。（古今集）

君がよは限りもあらじ長濱の眞砂の數はよみ盡すとも。（同）

第五十五章　有屬文

有屬文とはその中に附屬句を有する複文をいふ。附屬句とは一の句が獨立性を奪はれ他の文中に於いて一の語と同じやうに用ゐられて、ある位格に立つ場合のものをいふ。この有屬文は同じ複文ながら上の重文、合文とはこの句の關係を異にして、主從複合によれるものなりとす。

有屬文の研究は畢竟附屬句を明かにすればおのづから知らるゝものとす。その附屬句は有屬文中の或る位格を占むるものなるが、その位格よりいへば、主格に

用ゐらるゝものあり。たとへば、
　雁の空高く渡るも見ゆかし。
賓格に用ゐらるゝものあり。たとへば、
　恐れをのゝくさま雀の鷹の巣に近づけるが如し。
　そはきく人のあしきなり。
述格に用ゐらるゝあり。たとへば、
　あの人は交際がうまい。
補格に用ゐらるゝあり。たとへば、
　時雨の音一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して云々。
　女子どもを六田の里に親しき者のありけるにあづけて。
連體格に立てるものあり。たとへば、
　河原などには馬車の行き違ふ道だにもなし。
　東西の市は人集まる所なり。
修飾格に立てるものあり。たとへば、
　君は餘念なく文章を起草し居られたり。
　聲たえず鳴けや鶯。

附屬句が如何なる位格をあらはすかの點より見れば、上の如く六樣の別を立てうべしといへども、その附屬句が如何なる形をとるかといふ點より觀察すれば、體言に準じて取扱はるゝもの、そのまゝの形にて述格に用ゐうるもの、その附屬句の述格の語が連體形をとりて連體格に立てるもの、その述格の語が、連用形をとり、又は副助詞をとりて修飾格に立てるもの、四種に分つことをうべし。而して、かく形を基として區別して研究する方便利なれば、次下これを基として論ずべし。

體言に準ぜらるゝ附屬句は準體句といふ。これはその句の述格は必ず連體形をとるものにして、その述語の形が準體言たるのみならず、句全體が實際體言に準ぜらるゝものにして、文中にありては體言と同じ取扱を受けて、主格、賓格、補格、連體格に用ゐらるゝなり。次には先づ主格、賓格、補格に用ゐられたる例をあぐべし。

その主格に立てる例。

人の來りてのどかに物語して歸りぬるいとよし。

昔より賢き人の富めるは稀なり。

君子の先祖にあつきは榮を求むる爲にあらず。

夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。

その賓格に立てる例

恐れをのゝくさま雀の鷹の巣に近づけるが如し。
そはきく人のあしきなり。
是は人の見るべきにもあらず。
その補格に立てるものゝ例
吾はその時夜の更くるをも覺えざりき。
多くの人はおのが心の愚なるを知らず。
その困難は盲人の杖を失へるにおなじ。
譽あらむより毀なかれ。
準體句といふ名稱は著者がはじめて用ゐたるものなり。從來はこれを名詞句といへり。されど、名詞といへば、何かの名稱なるべく聞えて、實際とあはず、寧ろ體言句といふをまされりとす。されど、體言句といふ名目は語調落ちつかず。この故に著者はその意義と形との二方面よりしていづれよりするも都合よき準體句といふ名目をとれり。これその用法よりいへば體言と同じく或は主格賓格補格となりうるものにして、その形よりいへば準體言と同じく連體形をとれり。この故に準體句といふ名稱は意義用法、形及び記憶の便利よりいふも最も妥當なるものなりとす。

その形のまゝ述格に用ゐらるゝ附屬句はこれを陳述句といふ。これはその句が一の述格の如くなりて、上にそれに對する主格をうけ、それに對して說明叙述をなすものにして、もとの句をばその本來の形のまゝ用ゐるものなり。その例

この猫は何の能もなし。

昨日は雹ふりたり。

あの人は交際がうまい。

この庭は石燈籠の配置が巧みだ。

こゝにいふ陳述句を有する有屬文と上にいひたる副主格を有する單文とは往往混同し易し。單文の副主格はそれなくともその主格と述格とにて意は通ぜるなり。例へば、

唐の物は(藥の外は)なくとも事かゝず。

象は(體)大なり。

彼は(兩眼)盲せり。

この人は(年)老いたり。

の如く括弧內の副主格はなくとも、意通じ、加ふれば、その點一層明かになるの差あるのみなり。この有屬文にありてはそれに準じて陳述句の主格を省くときは或

は意を異にし、或は語をなさぬこと次の如し。

この猫は(　)なし。

昨日は(　)ふりたり。

(これは必ず雨雪を豫想するによりて「ふりたり」にて意通ずるなり。若し、雨雪をいふにあらぬときは省くこと能はざること原文と對照してさとるべし。)

あの人は(　)うまい。

この庭は(　)巧みだ。

即ちこれらは下なる主格と述格とが一の句をなし、その句にて更に上なる主格に對して陳述せるものなれば、副主格のある單文とは形は殆ど同じくして意は異なるものなり。

述格の形を連體格になし、これを體言につゞけてそれを限定するに用ゐらるゝ附屬句を連體句といふ。その例

かの木の茂りたる所こそ神の鎭ります所なれ。

わが國人の公德に乏しきは識者の常に慨嘆する所なり。

君が植ゑおきし櫻の木かげもなつかし。

雪いとしろうおける朝やり水より煙のたつこそをかしけれ。
おぼしきこといはぬは腹ふくるゝわざなりかし。
佐渡の國には金ありける由を能登の國の者ども語りけり。

連體句の名目も亦著者のはじめたるものなり。從來これを形容詞句又は形容句などいひたれど、西洋文典の直譯にすぎずして、國語の實際に適せず。即ち今形容詞といへるものはかれの形容詞とは全く異なるものなるに、句法上の名目に至りて、にはかに、かれの形容詞の名目によるは甚だ不當なり。この故に著者は連體格の役目を有して、述語が連體形をとれる附屬句なるが故に連體句と稱せり。これも亦意義、用法、形及び記憶に便なる點より見て最も妥當なるものなりとす。

準體句は又時として連體格に用ゐらるゝことあり。この時には助詞「の」「が」にて助けて下の體言を限定す。その例

まさにこれ日闌なるの時。
金は色の黃なるが故に貴きか。
山高きが故に人之を貴ぶにあらず。

この場合のと前の連體句とは混同し易し。即ちいづれもその述格を連體形になして連體格をなすが故なり。されどこれはその連體形にて一旦準體句となり、さ

て體言所屬の助詞「の」「が」にて助けたるものなれば、區別あること明なり。修飾格に用ゐらるゝ附屬句を修飾句といふ。この句はその述格を連用形になして用ゐ、まゝその下に格助詞「に」を附くることあり。或は又その述格に副助詞を添ふるによりて成立することあり。その例

君は餘念なく文章を起草し居られたり。
聲たえず鳴けや鶯。
ゆく水の早くぞ人を思ひそめてし。
とはざりし人もとふべく、わが宿の花のさかりをすごさずもがな。
名汚れては武士の道立たず。
艫聲雁の如くに我れは澄潭を下る。
この男が尻鼻血あゆばかり蹴たまへ。
秋風膚寒きまでになりぬ。

修飾句の名目も亦著者のはじめて名づけたるものなり。從來はこれを副詞句と稱せり。しかれども、これは副詞の代表をなせるものにあらずして、修飾格に立てるものなれば、かく名づくるをよしとす。さてこれらはその述格が連用形をとれる場合にはその連用形は所謂修飾連用をなせるものなるが、複語尾にしてかく

用ゐらるゝものはこれも修飾連用をなすをうるず」て」「たく」「べく」まじくなりとす。かくて又その下に「に」助詞のつくをうる理由は修飾格を示す性質あるによる。又副助詞は一般に他の語句につきて修飾格に立たしむる性質あるによりてこゝにもその性質の發揮せられしなり。

有屬文は二以上多數の附屬句を有すること少からず。これらは一々枚擧すべきにあらねど、二三の例を次に示すべし。

風俗の惡しきに趣く樣水の下に就くが如し。

汝の行くは他人の行くよりもよし。

美しき花のさく香しき實のなる樹あり。

船人の島と見しは雲の海上に浮べるなりき。

士の世に處するは錐の嚢中にあるが如し。

雪いと白うおける朝やり水より煙のたつこそをかしけれ。

湯の湧き出づる響は雷のなりはためくが如し。

有屬文の複雜なるものには附屬句の中に更に附屬句のあるあり。又重文を以て附屬句とせるあり。その他種々ありて一々枚擧すべからず。その附屬句の中に更に附屬句あるものゝ例

君が住む里の霞に隱さるゝまで我は行く行く顧みたり。
富士の山を白扇の倒に懸れるに譬ふるは丈山の詩に見ゆ。
身體虛弱なる人の過度に勉强するはよろしからず。

重文を以て附屬句とせるものゝ例

規模の雄大にして、建築の宏壯なる實に天下に冠たり。
わが國には山紫に、水明なる佳景多し。
花のさき、實のなる樹。

有屬文にありてはその主たる文が、述體なるを普通とすれど、また喚體が主文たることあり。その例

雁のくる峰の秋ぎりはれずのみ思ひつきせぬ「世の中のうさ。」
夕さればねにゆく鴛のひとりして妻戀ひすなる「聲のかなしさ。」
花の木にあらざらめどもさきにけり。ふりにしこのみなる「時もがな。」

その主文が述體なるものは說明體なるが最も多し。それらは上に多く見えたれば、今例をあげずともあるべし。またその主文が疑問體なるあり。命令體なるあり。その疑問體なるものゝ例

わが賴みおきしものをもち來たりしか。

むなしき名のみたつは聞ききや。
金は色の黄なるが故に貴きか。
その命令體なるものゝ例
己れの欲せざる所を人に施すことなかれ。
今は心おきなく田舍に靜養せられよ。
かならずその日たかはずまかりつけ。
あさな〳〵わが見る柳鶯の來居てなくべき森にはやなれ。
附屬句の位置はそれが代表する位格の位置におなじ。而してそれらのうち主格、補格、修飾格に立てるものは時として顚倒して述格の下におかるゝことあり。
その例
あけぬるか、川瀨の霧のたえ〳〵にをち方人の袖のみゆるは。(主格)
いづくんぞ知らむ、この事あるを。(補格)
山風に櫻吹きまき亂れなむ、花の紛れに君とまるべく。(修飾格)(古今集)

第五十六章　引用の語句

他に存する語句文章又は他に存すべしと考へられたる語句をその本來の形の

まゝ或る文中に引き用ゐること少からず。今これらを總稱して、引用の語句といふ。これを有する文も亦一種の有屬文といふべし。

引用の語句はその文中に於いては體言と同等のものとして取扱はるゝものなるが、その取扱は大體準體句に準ぜらる。而して、準體句は主格、賓格、補格として用ゐられ、又時としては連體格として用ゐらるゝものなるが、引用の語句も亦主格、賓格、補格として用ゐられ、又往々連體格としても用ゐらるゝことあり。たとへば

「古池や蛙とびこむ水の音」は（主格）芭蕉の名句なり。

「花咲けり」は（主格）單文なり。

「君の御諚には如何でか異存を申すべき」（賓格）なれど。

乞ふ「その寶の何なるか」を（補格）語れ。

彼意を決して「否余の書せるものなり」と（補格）答ふ。

あゝ世上何ぞ「男でござる」の（連體格）人少きや。

これらはその代表せる語の位置についていへば、準體句と同じといひて可なるものなり。されど、そは他に存せるもの若くは他に存すべしと考へらるゝものをそのまゝ引き來れるものにして、その述格の形は元のまゝにして之を特に連體形になほして體言に準ずることをせざるものなり。さればかくの如きものをば、準體

句と區別するは當然の事なり。

引用の語句が引用せらるゝには二の方法あり。一はそのまゝ直ちに格助詞その他、その位格に相當するものとして或る助詞に接して、然るべき位格として用ゐらるゝものなり。その例

「新院の御心中なほぼつかなし」とぞ人申しける。

「違にまかれ」と仰す。

「くる人なし」の宿の庭にも。

「若菜つまむ」の心ならねど。

この外前條の例みな然り。かくの如きをば直接引用と稱す。他の一は「といふ」といふ語の補格として引用し、その「といふ」までを合せて體言の取扱をなしたるものに基づくものなり。たとへば

「古池や蛙とびこむ水の音」といふは芭蕉の名句なり。

の如し。この場合は嚴密にいへば「古池云々」は「と」といふ助詞に對していへば、勿論直接引用にして「いふ」といふ語の補格に立ち、その「いふ」は又準體言となれるものなるが故に、その準體言中に直接引用の句ありといふを理論的には正しとす。然れどもその說話の主點はその句にありて「いふ」はたゞ、語法上の形式として用ゐたる

にすぎざるなり。然るにその「といふは」といふ語遣は往々略せられて「とは」といふ形となることあり。この時には

「古池や蛙とびこむ水の音」とは芭蕉の名句なり。

といふ語の形をとる。これらは一種の省略として、論ずべきものなれど、かゝる時には吾人は便宜上、その引用の語句をば間接に引用せられたりと見なし、それを以て間接引用として主格に立てりと考ふ。かくの如くにして間接引用の場合にはその位格に附屬する助詞の上に「と」といふ助詞の存するを常とす。その例次の如し。

「ねよ」との鐘の音。

「諸國に洪水出でたり」との電報。

直接引用のものはそのまゝ、その位格に附すべき格助詞又はそれにかはるべき助詞に接せしめ、體言と同樣の位格に立たしむべきものなれば、これにつきて特別の約束なく、普通の位格と同じやうに取扱ふにて足れり。主格に立てるものゝ例

「古池や蛙とびこむ水の音」は芭蕉の名句なり。

賓格に立てるものゝ例

仰の旨にては誠に「さる事ならむなり。

「君の御諚にはいかでか異存を申すべき」なれど。

補格に立てるもの、例

「寶劍をばその人ぞもちたまへる」などいふをきゝて。

われは「かれがいつかへりたりしか」をしらず。

「三世の佛もいかにきゝ給ふらむ」とおもひやらる。

「扇もてこぬか」など、いひかはしつゝ、けさうしつくろふ。

影こほる霜夜の月ぞ「秋をおきて時こそあれ」とさやけかりける。

連體格に立てるものは常に「の」助詞の助をかる。

夕されば、思ひぞしげき「まつ人のこむやこじや」の定めなければ。

「うらみわび、またじ今は」の身なれども、思ひなれにし夕ぐれの空。

「訴訟をことにとり申さむ」の心なかりければ。

有明の月ばかりこそかよひけれ、「くる人なし」の宿の庭にも。

間接引用のものは、實は「といふ」といふ語の補格に立ち、その「といふ」までにてある位格をなすものなるが、慣用上「いふ」を省きたる爲に起れる現象なることは既に說ける所なり。その故に、これには必ず「と」といふ助詞ありて、その「と」までが、一の位格として取扱はれ、それより下に相當の助詞を伴ふものなり。而してこの場合のものは、主格に立てるものと賓格に立てるものと連體格に立てるものとの三樣を見るの

みなり。その主格に立てるものゝ例

「會者定離」とはこゝをさすなり。

「世に思ひなし」とはかゝる境遇にやあらむ。

「にくし」とはよのつね、いとあいきやうなし。　（枕　二）

「まことにあさましうけしようなり」ともよのつねなり。（枕　十　二）

その賓格に立てるものゝ例

「露の命惜し」とにはあらず。　（拾　遺　集）

連體格に立てるものは「の」助詞にて示さる。

「ねよ」とのかねの音。

「君子は危きに近づかず」との本文あり。

但しこゝに一の注意すべきあり。上の主格を示すものは多く「とは」の形にて示されたるが「とは」にて示されたるものは必ず、間接引用なりとはいふべからざることなり。たとへば、

「今日雪ふらむ」とは誰しも思はざりしならむ。

の如きは引用の語句には相違なけれど、その「と」は「思ふ」に關係せる補格を示せるものにして「は」はたゞその思想上の關係を修飾せしに止まれば「とは」にて主格を示す

間接引用のものとは性質を異にせるものなるを思ふべきなり。

引用の語句はそれが代表する位格の位置におなじきこと、附屬句に異ならず。而して時としてその補格に立てるものは顚倒して述格の下に持ち來さるゝことあり。その例次の如し。

思ひきや「君なき宿をゆきてみむ」とは。

圖らざりき「再び君にめぐりあはむ」とは。

たよりあらばいかで都につげやらむ「けふ白河の關はこえぬ」と。

第五十七章　複雜なる文及び文法學の極限

前章までに於いて複文の根本方式を說き終へたり。而してその根本方式を基礎にして進めば、その上に種々の現象の起るべく、それらの場合は一々說きつくすべからず、又具體的のものを一々說くが如きことはこの學問の任務にあらず。然れどもそれらの實地の運用の千狀萬態なるべきものなるが如きうちに於いて、文法學上、一往心得おくべきもの少からざるべきによりこゝにそれらに言及し、併せて文法學の極限を明かにせむとす。

文法學の文の開展の實際上の極限は複文にあり。その複文の根本方式は重文、

合文、有屬文の三種につき、それらの方式を基礎にして、これを複雜にして進めば、種々の現象の起るものなるべく、それらは一々說くを要せざるものなることは先に論じたる所なり。然れど、それらのうちにても模型的のものなきにあらねばここに少しくあげむ。先づ合文を重ねたる重文あり。その例

形病めば心も病み、形つくれば心も盡く。

有屬文を重ねて重文の形にしたるあり。その例

慾深き人はその心いつも貧しく、慾なき人はその心常にとめり。

重文を以て合文の前句の如くにしたるあり。この例

內外の智人にすぐれ、和漢の才身に備りしかば、此處彼處に寄り合ひ歌をよみ、詩を作りて互になごりを惜みけり。

重文を合文の後句の形にしたるものあり。その例

出でゝ川邊に佇めば、月清く、風涼し。

有屬文を合文の前句の形にしたるものあり。その例

炊煙の空高く上るも見ゆれば、人家は近かるべし。

有屬文を合文の後句の形にしたるものあり。その例

夜は更けたれば、車夫の客待ちするだに見えず。

重文を附屬句の如く用ゐたるものあり。その例

たとへば德高く、心淸き人の如し。

五常の道廢れて風俗日に下り行くこそ嘆かはしけれ。

合文を附屬句の如く用ゐたるものあり。その例

牛は力强けれど歩むこと遲し。

かくの如くその複合は複雜にあらはれて、一々之を說くこと難く、又一々之を說く必要を認めず。要は上の三類を模範形式として、それが、種々の狀態にて結合せらるといへば足れり。世にはこれら複雜なる組織のものを混合文などいふ名目にてよべるあり。されど、模範形式にこそ研究上名目は必要なれ。さもなきものにことごとしく名目を設くること不必要なりといふべし。

複文のうちには、修辭上の必要よりして、類似の語又は語法を用ゐてつくれる句を律動的に排列するものあり、かくの如きを對句と稱することあれど、そは修辭上の必要より來れるものにして文法上の問題にあらず。文法上にてはたゞそれらの句が、多數にあらはるゝことをいへば足れりとす。

文法學の開展の極限は理論上この文法學上の複文に存するものにして、それより外はもはや文法學の關すべき所にあらざるなり。隨つて文法學は理論上複文

の研究に至りて終りを告ぐべきものなり。然るに、こゝに形體上の結合はなけれども意義上の結合頗る强くて複文に紛れ易きものあるが故に、次に一往それを說明せむ。

或る文は、いつも孤立して用ゐらるゝものにはあらずして、形の上にては無關係に見えて、しかも意義の上より上下の文と關係深く用ゐらるゝ場合少からず。これらは文法學上には複文といふことを得ぬものなるが、修辭學上よりは、それらの集合體が一章をなすものなり。而してそれらの關係は重文、合文、有屬文の三に並行してあらはる。

その重文的の關係にあるものは次にあぐる如きものなり。

(一)是を是とするは諂へるに近し。非を非とするは謗るに近し。

(二)秋はきぬ。紅葉は宿にふりしきぬ。道ふみわけてとふ人はなし。

これらは上下の二三の文が重文的の關係に立つ所の集團なるが、もとより文法學上の重文にはあらず。

合文的の關係にあるものは二文の結合を主として說く。これには二樣あり。その一は上にある文が下に來る文に對して前提條件としての關係に立つものなり。たとへば

(一)今こそあれ。我も昔は男山、さかゆく時もありこしものを。
蓋しこれあらむ。われ未だこれを見ざるなり。
君の話は最もの樣だ。しかし、それにも多少疑問の餘地がある。
(二)果して君の言の如くならむか。これ一大事なり。
猪はどつと倒れる。倒れるが早いか。忠常は直に側の伏木の上へ飛びつきました。
(三)何はともあれ。先づこの事をなさゞるべからず。
どんな言譯があるにしろ。私は決してそのまゝにしてはすまさない。
これらの例の初の單文を見よ。一の例は說明體、二の例は疑問體、三の例は命令體にして、いづれも形の上にては下なる文と關係なきものなれど、意義の上にては下の文に對して條件たる關係に立ち、前後相待ちて合文の如き關係を示すものなり。この前後相待ちて合文的の關係を示すものは上の一、二、三に各示すが如く述體の句の三體がいづれもあらはるゝものなるが、それらのうち特に頻繁に用ゐらるるものは「こそ」の係を有する說明體の文と命令體の文との二なり。この二者はそれぞれ特別の現象と意義とを有するものなり。その「こそ」の係を有するものは下の文との意義上の關係に於いて背戾を示すこと多し。たとへば

形こそみやまがくれの朽木なれ。心は花になさばなりなむ。

春の夜のやみはあやなし。梅の花。色こそみえね。香やはかくるゝ。

その說こそ陳腐なれ。文章は頗る見るに足る。

これらは上の文と下の文との中間に「然れども」などいふ語を加へて見ればよく心得らるゝによりて、上下の文の關係をさとるべし。而して「こそ」の係の強き力を有する爲めに述格が反撥的に有力になるが爲ならむか。次に命令體の形をとれるものにも亦時としてとりのけを示す意義を呈し假設して反撥する場合などの意を以て一種の條件として用ゐらるゝことあり。これには次の如く

時しもあれ。秋しも人のわかるればいとゞ袂ぞ露けかりける。

君しもあれ。道のゆきゝを定むらむ。過ぬる人をかつわすれつゝ。

命令體の文中に「しも」といふ助詞の存する時には多くこの用をなすを見る。然れども「しも」のなきものにももとよりこの用法存するなり。その例

とまれ、かくまれ。(「まれ」は「もあれ」の約)とくやりてむ。

たとひ千騎もあれ萬騎もあれ。一方は射拂はんずるなり。

何はともあれ。尋ねみばや。

たとひその志はよきにせよ。その行ひはよみすべきにあらず。

以上の場合もまた、すべて一種の條件となりて、下の文と意義上合文の如き資格にて合體せるものなりとす。

他の文と相關係して用ゐらるゝ單文の第三の場合は、上の如く條件を示す爲に又は注解をなす爲に、他の文の中間に挿入することあるものなり。たとへば

今日わかれ、明日は近江と思へども、夜やふけぬらん、袖のつゆけき。

をみなへし、おほかる野邊にけふしさへあれ、うしろめたくも思ひやるかな。

ありとあるかぎり、みこにもおはせよ、上﨟にもあれ、おもてやは見えたまへる。

余は昨日君を尋ねて行きしが、道たがひしか、終に君にあはざりき。

余がにはかに歸國せしは、君や知らざりし、弟の病を訪はむとなりき。

明後日即ち四月廿九日なりは天長節なり、

このうち、條件を示すものは、合文の關係にあるものにして、注解をなす爲のものは、有屬文の附屬句の關係にあるものなり。而してこれらの單文の用法に似たるものは複文に於いても存するならむが、それは一々例示するまでもあるまじ。

以上の文の用法上の實際は意義に於いて複文に甚だ近きものありとしても、もとより複文にはあらず、隨つて文法上の研究問題にはあらず。されど一往知りおくことは文法學の爲に必要なりと思はる。

以上にて複雜なる形を呈する文章の組織の大綱を說き終へたれば、こゝに文法學の極限につきて一言せむ。先に、句論の極限は文法學の極限なりといひ、その句論の極限の實地の問題は複文にして、その複文の研究卽ち文法學の極限たることをいへるが、今之を約していはゞ、文法學といふものは

先づ語といふものを硏究の基礎として、それの性質と運用とを研究して以て思想發表の材料としての研究を遂げ、次いで、その語を材料として使役して發表する文の研究にうつるものなるが、文の研究に於いては句といふものを研究の基礎として、それの性質と運用とを研究して、言語上に制約ある限りの文の結合方式を研究の極限とす。

卽ちこの極限を超えては文法學は存在せぬものなりとす。

さて上に言語上に制約ある文の結合方式といへることあるにつきて一言附加すべきことあり。そは他にあらず。修辭的の文結合といふものなり。この修辭的文結合と名づくべきものには二の場合あり。一は互に獨立なる二の文の中間に介在する語がその二文のいづれにも屬することによりて、その二の文が文法上離すべからざる關係を生ずるものなり。これは歌に多く見る所なり。たとへば

一、君ならで誰にかみせむ。

梅の花(ア)
色をも香をも知る人ぞしる。

二、折り取らば惜げにもあるか。
櫻花(イ)
いざ宿かりてちるまでは見む。

三、夜や暗き。
道やまどへる。
時鳥(ウ)
わがやどをしもすぎがてになく。

これらの例に於ける「梅の花」「櫻花」「時鳥」の如きこれなり。これらは文法上、上下の二文は元來各獨立せるものなるが、その中間の「梅花」「櫻花」「時鳥」等は上の文の一部分としても立ち、同時に下の文の一部分としても用ゐられたるものにして、上下の各文は本來相互の文法上の關係なき筈のものなれど、この介在せる語が、兩文に共通するが爲に上下の二文が相離るべからざる關係を生じ連結せられたるなり。かくの如きことはわが國の歌文に稀ならず。かくの如きを修辭的文結合といひ、その介在する語をば假に兩屬連鎖語と稱す。修辭的文結合の他の一はかの掛詞と稱

せらるゝものにしてそれ亦互に獨立せる文をその文中の要素の音の類似よりして一語を二義に兼ねしめ、それによりて、もと文法上關係なき二文を形體上一に結合したるものなり。たとへば、

いつか我が身の終なる(以上一文)(尾張なる)熱田の八劍伏し拜み汐干に今やなる(以上一文)(なる)海潟傾く月に道見えて明けぬくれぬと行く道の末はいづくと問ふ(以上一文)(とほ)たふみ濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれといふ(以上一文)(夕)暮の入相なれば今はとて池田の宿に着き給ふ。(以上一文)

これも亦修辭的文結合の一にして、この掛詞と上の兩屬連鎖語とは意義と職能とに差はあれど修辭的に文を結合する用をなすことは一なり。かくの如きは嚴密にいへば文法學上の問題にあらずといへども、その實際は文法學といふもの丶正當の認識をなす上には一往心得おくことを必要とすべき事なり。そは何故かといふに、これは正しく論ずればもとより文法學上の對象にあらず。されど、文の形

式的結合をなす點は文法上の複文と混雜を起し易きものなるが故に、これが複文と似而非なるものなりといふことを明かにすることは亦文法學研究の上に必要なることなればなり。

第五十八章　未開展の句と略體の文

吾人の談話文章はいつも正式の形をとりて發表せらるゝに限らずして多くの場合に於いては其の思想の發表の急迫せる爲或はその文句に活氣をそへむが爲などの事情によりて本來必要なる形式なりとも、思想の發表に障碍を來さゞる限りは其の成分を具足せしめずして發表することあり。かくて脱略せしめられたる言文は簡短にして、便利なるのみならず、又實に文の活動を助け、情熱を含め、直截に思想を發表しうる勢力を有す。

さて、これらの句はその成立の本源に溯れば、二樣あるを見る。一は未開展の句と稱すべきものにして、原始的の思考發表の方法によりたるものなり。一は略體の句と稱すべきものにして、理論上存すべき部分が慣用上省かれて簡單の形にせられたるものなり。然れども、この二者は嚴密に區別せられうべきにあらずして二者のいづれなるか判定しがたきものも亦存すべし。さりとはいへども研究上、

その源より考ふれば二者の區別あるべきものとす。

未開展の句とは既に第十三章に論じたる、一語にて一の文となる如きものにして、小兒の言語に多くあらはるゝなり。成人といへども、その感情の高まり、慾求の逼りてある際又は急遽に思想を發表せむとするときは往々かくの如き、未開展のまゝの發表をなすことあり。この種のものにては、その心理現象の主たるものを發表するか、若くは最も容易に發表しえらるゝ言語を以てするものなるが故に、これが法則を規定すること難し。されども大體は之を二に分ちて見ることをうべし。

即ち一は對象をさすもの、一は屬性を叫ぶものなり。

對象をさすものに二樣あり。一はその實體の名詞を以てさすものにして、たとへば

犬

といふが如し。この時の「犬」といふ句は之を開展せしむれば、

犬あり。　　犬走る。　　犬叫ぶ。

犬は我を吠ゆ。　　我は犬を恐る。

などの思想となることをうべきものなり。

對象をさすものゝ第二は代名詞を用ゐてさすものにして、この時はこの實體の名をだに示す遑なきものにして、たとへば

あれ〱　　これ〱

などいふが如きこれなり。この時の「あれ〱」といふ句は之を開展せしむれば、

あれを見よ。　　あれは何ぞ。

あれのさまは云々の如し。

あれは云々の事をなせり。

など種々の意をあらはす爲に用ゐらるゝなり。

屬性を叫ぶものとはたとへば自家の感情をあらはすに

あいた。

愉快々々。

などいふが如きこれなり。

以上未開展の句の例を古代の文にて求むれば、

あなたまはや。　（古事記、上）

あなはら〱。　（源、空蟬）

などは對象をさせるものにして屬性を叫ぶものは

「あはれあなう」とすごしつるかな。（古、雜上）

あなたふと。（催馬樂）

あなめでたや。（源、御幸）

あなかま。（源、御法）

あなかしこ。（源、竹川）

あなうたて。（源、寄木）

など例多し。

これら未開展の句は、その句として形式の完備せざるものにして心理學者が所謂幼蟲狀の句といひ、又論理學者が直感的判定といへるものに該當するものなるが（第四十三章參照）もとより完全なる句としての取扱をうくべきものにあらず。さりとて、吾人の研究の範圍外に全く放棄しおくべきものにもあらず。

前々說き來れる如く、吾人の日常用ゐる談話文章には文法上の正式なるもののみにあらずして理論上よりいへば、存在せざるべからざる部分を慣用上省略し去りたる、形の簡易なる體式を以て思想を發表してあること少からざるものにして、こゝに互に熟知せる場合に於いては往々極端なる省略體の行はるゝを見る。而してこれは聽く方受くる方にてもその略體なるものを受け入れて相應に理解し

て別に甚だしき不都合も無く見ゆ。否、これはたゞ不都合無しといふに止まらず、かゝる形にて互に思想の發表とそれの受け入れとを濟す方かへりて便利なりとするを見る。これは抑も如何なる理由によりてかゝる事の行はるゝなるか。

この略體は理論上よりいへばあるべき筈の語句の省略なりといふべきなるが、かゝる省略は慣用上のものなるが故に、慣例によるべきものなることといふまでもなし。さりとて、我等は既に行はれたる實例以外に略體をつくり得ずといふ理由なく、各自の發意にて時に應じたる略體を用ゐて用を辨じてあるなり。然らばかくの如き事實は如何なる理由によりて可能なるべきなるか。その略體の生ずる根原たる語句の省略については一定の規律若くは法則といふべきもののあるべきものなるか。若し或は又全く法則などいふもの無しとせば、人々がそれによりて以て思想を交換し得る道理無き筈なり。されば、なほその間に一定の法則若くは規律といふべきもの無くばあらずと思はるゝなり。

さても考ふるに、この省略の行はれたる談話文章はその形甚だ簡單なるが故に外形のみを見れば、未開展の句に似てはあれど、本質は未開展の句とは異なるものにして、本來、形式の完備すべき筈のものに省略を行ひたるものなり。更に又考ふるに、この省略は述體の句の中にのみ行はれて、喚體の句には行はれたるを見ず。

こは如何なる理由ぞといふに喚體の句は元來緊縮したる形のものにして、それ以上に省略すべき餘地無く、若しそれ以上に省略する時には句の組織の破壞せらるるが爲ならむ。

この省略の起る動機はその形體を簡潔にして印象を强からしめむと欲するにありと考へらるゝが、それには著しき觀念をあらはす語を存して他を脫却し以て形を簡單にすることを目的とせりと考へらる。

この省略の行はるゝには一定の機緣の存すべき筈なりと考へらるゝが、その機緣には內外の二方面ありて、その內外二方面が合一してはじめて省略といふことの可能となるものなりと思はる。その機緣は何なるか。惟ふに、その說話者の省略を行へることが、聽者の主觀に默契を以てむかへ入れらるといふ事なしとせばこの省略といふ事は無效なりといふ事明かなり。卽ち說く者と聽く者とに共通したる省略の默認が、社會の慣例上、冥々の間に行はれてあるにあらずば、かゝる事は行はるべきものにあらず。これを語句の省略の行はるゝ內面の理由とす。次に外面上の機緣はその省略の行はれたる痕跡が形の上に顯著ならざるべからずといふことなり。この省略せられたる痕跡が形の上に顯著ならざるべからずといふことは如何なる事情を意味するかといふに、その省略せられたる部分が、文法

上比較的に重要なるものたるべきことをも意味せり。その省略せられたる部分が比較的に重要なる部分にして、その省略せられたる痕跡が形式上顯著なるべしといふことは、一見省略といふことゝ矛盾する如くに見ゆるならむが、實はさにあらず。その省略せられたる部分が比較的に重要なる部分にあらざる時には省略するも省略せぬも大差無き事なるが故に、さやうの場合には吾人に省略せられたる部分ありといふ認識を起さしむる事を得ざるべく、その省略の痕跡顯著ならずば、本來無かりしものか、省略を行ひしものかといふことの區別を認むることを得ざるものなれば、その省略せし痕跡は必ず文法上より見て顯著なるものにあらざるべからずといふ事となる。次にその省略のあとの顯著なりといふことが如何にして認めらるゝかと云ふに、その要件として外形上に著しく認めらるゝ點はその省略せられたる事の爲に、その文の組織の或る點が不合理に見ゆることとなり。何故に不合理に見えざるべからざるかといふに、その形が合理的にてあるときは何處に省略の行はれしか、誰人もこれを外形的には認むること能はざるが故なり。

要するに、語句の省略の行はるゝは內面的には觀念上、內容上の主要部分を存して、文法的形式的の重要なる部分を省略すといふことにして、その省略の外形上の要件はその組織が外形上、不合理に見ゆといふことなり。この內外二方面の機緣

が相待ちて、こゝに語句の省略といふ現象を可能ならしむるなり。隨つてこの省略についての認識はその不合理に見ゆる省略の痕跡を合理的に理解せむとする爲に生ずるものなり。

こゝに文法上の問題にうつるべきが、文法は主として語句の上の現象を論ずるものなるが故に、その內面の機縁はこゝに直接の問題とすべきにあらず。語句の省略につきて文法學の論ずべき部分は如何なる文法上の重要部分が省略せらるるか、又その省略の痕跡が如何に文法上不合理の形を呈してあるかといふ二の要點にありと思ふ。卽ち文法學にて論ずべき語句省略の要諦はこの二點にあるなり。しかもなほ考へ見るに、この語句の省略についてはたゞ主觀的に理窟をつけて、省略あり、若くは無しといふのみにては水掛論に終るべきものなれば、上にいひたる如く、その語句の外形上よりしてその不合理の痕跡を認めたるものにあらずば、省略の行はれてあるものとは明かに云ひ得べからざるなり。かくてその不合理に見ゆるものとは如何なることとなるかをこゝに一往說かむに、こゝに或る談話文章にありて、文法上主要なるものなりとせらるゝ、主格又は述格があらはれずとせば、その文は如何にも不合理の姿を呈す。而してこの不合理の姿の爲に、殘存せる部分に對比してその省略せられたる部分如何は容易に認めうべき筈のものな

り。又その中間に省略の行はれたる場合にはその上なる語とそれにつゞきたる語との間には直接に連絡すべき文法上の關係なきものたるを要す。卽ちその連絡の不合理に見ゆることが、これの外見上省略を認むべき原理の一と認めらる。たとへば

これは鄕里からの手紙である。

の如き場合を見よ。格助詞は二個相重ね用ゐらるゝことなきを根本原則とせり。然るに、こゝに格助詞「から」より格助詞「の」につゞけり。かくの如きは文法上不合理の事なることは明かなり。然れども、この不合理の破綻よりして容易に、そこに省略の存することを推知しうべく、その上下二者の間に或る語の省略せられてあることを示すこと極めて顯著なりとす。かくて文法上の形式よりしてその省略の行はるゝ機會を見れば、

一、文法上重要なるものを省くこと。

二、その上下のつゞき方の不合理に見ゆること。

の二點にありとす。かくの如く文法上の形よりして省略の行はれたる痕迹の顯著なるものに於いて、はじめてその內面の機會も有效となるなり。これら內外二面の機會相合致して、こゝに語句の省略といふ事の行はれたるを示すものとす。

かくてその省略の行はれてある事の認識よりしてその省略せられたるものが何なるかを考ふることは文法學としての研究上必要の態度なりといはざるべからず。

次に、この省略といふことが、それらの文章若くは談話の如何なる部位にあるものに行はるゝかといふに、これには別に一定の規律は無きものと思はる。然れども大體それらをその位置より區別を加へて見れば、その上部卽ち先づあらはるべきものを省略し去りたるものと、下部卽ち最後にあらはるべきものを省略し去りたるものと、中間にあるべきものを省略し去りたるものとの三種に分つことをうべし。されど、それらは、實は、單文に於ける場合と複文に於ける場合とによりて、その省略の狀態は必ずしも同一樣にあらはれず。それ故に、ここには單文にあらはるる省略と複文にあらはるゝ省略とに分ちて說明せむ。

先づ單文の內部に行はるゝ省略より說くこととゝすべきが、最初に一の問題あり。それは上略、中略、下略といふ如き事を以てわけて、それが文法上合理的の研究となるか、如何といふ事なり。この事は、わが國語國文に於いては余は合理的の研究たるべしと思ふ。それは何故かといふに、わが語句文章の排列には一定の規則あり。ことに、既に述べたる如く、語の順序の上に於いて、それらの性質に基づいての上行

下行の二元性ありて、或る種類の語はその性質上必ず、この邊に在らざるべからずといふ本質的の豫想、寧ろ期待を伴ひてあるものなり。然るにその豫想若くは期待に相應する語句がそこに形を呈して存在することなき時には何人もこゝに省略の行はれてありといふ事を意識的か若くは無意識的ならば、一種の感じとして漠然ながらこれを感ずるものなり。この理由により、上略、中略下略といふ事も文法上必ずしも不合理のものにあらずと思はる。即ち上略といふは、語の排列上、その上位に在るべき筈のものが形の上にあらはれてあらぬことにして、下略といふは、語の排列上、その下位にあるべき筈のものが形の上にあらはれてあらぬことにして、中略といふは、いふまでもなく、或る語と或る語との中間にあるべき筈のものが形の上にあらはれてあらぬことなり。從つてこの語句の省略といふことは、語句の排列の上の一定の法則を認識したる上ならでは、正しく認識すること能はざるものなり。こゝにこの三種の省略といふものと、その省略の上にあらはるゝ語句の形式上の不合理との關係を見るに、上略と下略とは、あるべき筈のもの〻無しといふのみの事にて、その不合理は文法上の不合理といふよりは論理上の不合理と云はむ方寧ろ當れりと思はるゝが、中略の場合には、その語の接合上、明かに文法上の形式として不合理のあとを示せり。而して、語句省略を研究する學問上の興

味はこの中略に存するものなり。次下、上略、下略、中略の順序によりてこの省略の事を述べむ。

上略とは上にあるべき語句を略すといふ意味なり。上若くは下といふはもとより相對的の語なるが故に何に對しての上を略するものなるかを知らずば意味通ぜざるなり。元來、この省略の行はるゝものは上にいへる如く述體の句なり。而して述體の句は述格を中心として成立するものなるが、その主格はこの種の構造上、最初にあらはるゝものなり。それ故に、この上略なるものは述格の語に對してその上位にあるべき性質の語句を省略することをさすといふことは明かに考へらるべきなり。

述格の語を基としてその上に位すべき著しき觀念をあらはすものは主格と補格となり。然るに補格は主格の下に位すべきものなればこれが省略は中略ともいふをうべし。こゝに先づ主格の省略につきて述べむ。主格を省略する場合にはそれに對する賓格述格は殘り存すべきものとす。通常主格の省略せられたるものと認むるものは第一人稱の句、第二人稱の句に多しとせらる。その第一人稱の句に於ける例

(わが)南山の頂に立ちしはまさに午後七時半。

(我は)乞ふ。(我等は)これを歴史に見む。

第二人稱の句の主格を省きたる例

(汝等)人の惡をいふことなかれ。

あるじなしとて(汝)春を忘るな。

(汝等)余をして少しく語らしめよ。

第三人稱の句にありても、それが、一般の人、又は不定不明のものを主格とする時は、多くは之をあらはさゞるなり。その例

(我等は)之を以てたゞちにその起點とはいふべからざらむ。

(人々)出品に手を觸るべからず。

(世人)之を富士山といふ。

(世人)その人の名をば讃岐の造麿となむいひける。

この末二例は所謂稱謂をあらはすものなるが、かゝる句にありてはその主格が特定の人たる場合の外は、主格をあらはさゞることを普通とす。以上はみな普通に主格の省略といはるゝものなり。さりながらこれを果して省略といひて可なりや如何。國語に於いては上の如き第一稱の文の主格、第二人稱の文の主格、第三人稱の文の主格はこれをあらはさぬことを普通の姿として行はれ、さやうなる文に

於いて主格をあらはすことは特に必要なる場合に限るものなれば、かゝる場合に主格のあらはれざるを省略といひて可なるか如何は一の問題なり。もとより論理的にいへばそれらはすべて主格の省略といひて可なるべけれど、國民的言語習慣よりすれば、これは特別に必要ありて省略したりといふ事實に基づきたる現象にあらざる故に、これを果して文法上の省略といひうるか、否かは一の問題なり。第三人稱の文に在りてその主格が一般的のものにあらずして、限定的のものなる時には之を略することを得ぬ筈なり。然れども實際には往々これを略することあり。たとへば

集れ。（主格は「その全體」）

といひ、又

石清水に行幸あり。（主格は「天皇」）

の如きものなり。かゝる時は明かに省略を行ひたるものと認めらる。

次には下略なり。これは、主として述格を省くことをさすなり。されど述格を省き、同時に主格をも補格をも省くとせば談話文章は形を存せぬ事となるべきが故に、こゝにはなほ相對的の意味にていふものにして、主格又は補格が存して、それに對する述格を省くことを主としてさすことゝなる。その例

福は内(に在れ鬼は外(に出でよ)。

口は禍の門(なり)。

千里の道も足もとより(始まる)。

二階から目藥(をさす)。

かくの如き例は一々あげつくし難きほど多きものにして、日常の談話にも少からざるのみならず歌謠文諺にはことに多く見る現象なり。さて又その極端のものは修飾格のみを存して他の語をすべて省略することもあり。これらは日常の語にては「お早う」「お靜かに」などいふ挨拶にあらはるゝものにて見らるゝが、文章中にも主として應答の語としてあらはす時に見るものなり。古文にて、かゝる例として著しきは平治物語卷一の光賴卿參內の條の光賴とその弟、惟方との問答の語なり。そは

(問)「さて主上はいづくにおはしますぞ」　(答)「黑戶の御所に……」

(問)「上皇は……」　(答)「一本御書所に……」

(問)「內侍所は……」　(答)「溫明殿に……」

(問)「劍璽はいづくに……」　(答)「夜のおとゞに……」

(以上はいづれも「おはします」若くは「いづくにおはしますぞ」といふべきを省略

したるなり)

中略は上略又は下略の如く簡單には說明すべからず。これには上に述べたる如く、その省略せられたる痕迹の明かに見ゆるものにあらずば省略の存するものとはいひ得べからず、又その痕迹が形式的に不合理に見えずばあるべからざるものなり。ここに先づ最も形式的に不合理に見ゆるものを例として說明を試みむ。先づ次の如き例ありとせよ。

さりとてあるべきならねば、この藏主ひじりの許によりて申すやう。

(宇治拾遺、八)

この場合の「とて」といふ語を見よ。この「と」は格助詞にして「て」は複語尾なり。複語尾は本質上、如何なる場合にても用言の或る活用形につくべきものなり。然るにこゝにては「と」といふ格助詞を受けてあり。これは明かに不合理なる形なり。而してこの「て」の方面より考ふれば、その上には用言(ことにその連用形)の存すべきことを示せり。又上の格助詞「と」より直ちに「て」に接すべきことは正式の語法には全然見られぬものにして「と」の下には必ず或る用言の來るべきことを示せり。即ち

と→(用言=用言の連用形)←て

上の「と」の方面下の「て」の方面と上下二方面よりしてその中間に或る用言の存すべ

き道理なることを示してあるなり。然るに、その存すべき筈の用言がこゝに形をあらはしてあることなし。之によりて、或る用言の省略せられてありといふことは明かに考へしめらるゝなり。かくの如き「とて」の例は盛んに用ゐらる。

人知るまじと（　）て欺くは妄なり。

昔上人の信者に四條金吾と（　）て江島遠江守の老臣ありき。

翁の侍る夜しもかゝう病み給ふがわびしきと（　）ては又ねいりぬ。（落　窪　二）

おぼろげにや見えさせ給はざりしと（　）てもなかせ給ふ。（榮花、玉の飾）

これらみな「と」と「て」との間に省略あることを示せる適例なり。

又次の如き例ありとせよ。

春の夜は曇がちにて朧月多し。

この場合の「にて」といふ語も「とて」と趣似たり。即ち「に」は格助詞にして「て」は複語尾なり。随つて用言の複語尾たる「て」の直ちに格助詞を受けてあることは明かに不合理なる形なり。而して「て」の方面より考ふれば「とて」の場合と同じく「て」の上には連用形をとれる用言のあるべきことを示し、上の格助詞「に」の方より考ふれば、下に用言の來るべき道理のものなり。即ち上の「に」下の「て」の二方面よりして、その中間

に或る用言の存すべき道理なることを示してあるものなり。然るに、そのあるべき筈の用言が形をあらはしてはあらず。この上の「に」下の「て」の兩方面より見て、その中間に存すべき用言の省略せられてあることを示せるにて、省略といふことが端的に認識せらるゝなり。かやうなる「にて」は古今に盛んに用ゐらる。その一二の例を次にあぐべし。

　雜色男を使に(　)て西國へ遣しけり。　(延慶本平家、四)

　昔博士に(　)て藤原明衡といふ人ありき。　(宇治拾遺、二)

　月かげを色に(　)てさける卯の花はあけばありあけの心ちこそせめ。　(後拾遺、夏)

　又次の如き例ありとせよ。

　壁代は白く(　)てあたらし。　(宇都保、藏開下)

この場合に「白く」は形容詞にして「て」は複語尾なり。さて「て」は連用形所屬の複語尾にして、上の「白く」は形容詞の連用形なるが故に、その連用形に「て」のつくは不合理にもあるまじと思ふ人あらむも知られず。然れども複語尾は一切の用言に關係あるものにあらずして、動詞、存在詞より分出すれど、一切形容詞に無關係のものたるは上に既に屢說ける所なり。なほ明かにいはゞ形容詞には複語尾の分出の無き

ものにして、その複語尾の分出の行はれぬことが形容詞の一の特質なり。然るに、こゝに形容詞の下に直ちに「て」のあらはれてあるは、そのつゞき方明かに不合理なり。即ち「て」の方面より考ふれば、その上に或る動詞か存在詞かの存すべきことを示せるものにして上の形容詞の方面より見れば、それが連用形なる故に、その下に或る用言の存すべき筈なりといふことを示してあるなり。即ちこれも上下の兩方面よりその「く」と「て」との中間に或る動詞か存在詞かの連用形の省略せられてあるものなりといふことを告ぐるものなり。かくの如き例も盛んに用ゐらる。

　倫敦の冬は日が短く(　)て霧が多く(　)て誠に鬱陶しう御座います。

　猫は上の限り黒く(　)てことは皆白からむ。　（枕草子、二）

　御ぐし御裳に少し足らぬほどに(　)てやうじかけたるごとく(　)て白き御ぞにひまなくゆりかけられたり。　（宇都保、藏開上）

上の如き現象は形容詞の如き形を有せる複語尾「たし」「べし」「まじ」、及び口語の「ない」、「たい」の場合にも行はる。即ち

　見たく(　)て見たく(　)てたまらないのだ。

といふ如きこれなり。これも一般に形容詞の形をもつ複語尾は、その本質としてそれ以下に複語尾のあらはれずといふ嚴密なる法則の存在してあるなるに、こゝ

に「たく」の下に「て」の來れるあり。即ちこれはその連用形「く」の下には(それが、連用形なるにより)或る用言のあるべきにて、そのあるべき用言より「て」につゞくべき道理なるに、そこに用言全く無くて「たく」と「て」とが、つゞくべき道理の無きにつゞきてあるなり。こゝにその不合理の形によりてその間に省略の行はれてあるに相違なしといふことの示されてあるなり。これらの形の口語の姿のものにあらはれてある例をなほあぐべし。

實戰に役に立たなく(　)ては何にもならぬ。

そんな事は言はなく(　)ても分つてゐる。

それらのものゝ文語にあらはれたる例

いたづらになりぬべく(　)てなむ。　(宇都保、俊蔭)

おなじくは御らんじ所もまさりぬべく(　)ていとわざと集めまゐらせたまへり。　(源、繪合)

御子達なむなほあくかぎり人にてむつかるまじく(　)て世をのどかにすぐしたまはむにうしろめたかるまじき心ばせつけまほしきわざなりける。　(源、若菜下)

又「かくて」「さて」「とて」「などて」といふ語あるが、これは普通には一の語と認められ

あり。されど、これらとてもよく見れば、その「かく」「さ」「と」「など」といふは副詞にして「て」は複語尾なり。即ち副詞を「て」にて受けたる形のものなり。然るに、上にも屢述べたる如く、「て」は用言の複語尾なるが故に、その上に副詞が直に接してあるは不合理のものなり。かくてこゝにもその副詞の下と「て」の上との間に省略の存すべきものなりといふことを示してあり。然らばその省略せられてあるべきものは如何なるものかと考ふるに、上の副詞の方面より見ればそれはその下に或る用言の存すべきものなることを示し、下の「て」の方面より見れば、その上に連用形をとりたる或る動詞又は存在詞の存すべき筈なるを示せり。かくて上下二方面より推して、その中間に動詞又は存在詞の連用形なるものが省かれてあるならむと考へずばあるべからず。それらの例

かく（　）ても經ぬる世にこそありけれ。　（古、戀、五）

かく（　）てはえすぐさじ。　（源、薄雲）

さ（　）てこそとらしめたまはめ。　（竹取）

久しとはおぼつかなしや、から衣うちきてなれんさ（　）ておくらせよ。　（蜻蛉日記）

と（　）てやかく（　）てやとよろづによからんあらましごとを思ひつゞくるに。

（源、東屋）

と（　）てもかく（　）ても今はいふかひなきすくせなりければ。

（源、帚木）

と（　）てもかく、かく（　）てもよそになげく身の果はいかゞはならんとすらん。

（和泉式部集）

など（　）てのりそひてゆかざりつらん。　（源、夕顔）

など（　）てかふかくかくし聞え給ふことは侍らん。　（源、夕顔）

以上あげたる種々の場合は多少その趣は違ひてあれど、上にある語がその下に用言の存すべきことを示し、下なる「て」がその上に或る用言の存すべきことを示し、上下二方面より、その中間に、在るべき用言の省かれてあることを形式の上に明かに示してあるは確實なりとす。

以上は中略の行はれてあるべきことの痕迹の認め方のその著しき例として「て」といふ複語尾の上に往々行はれたるものをあげたるが、こゝに一般に中略の行はれてあるものを概括してみむに、こゝにはその中間にあるべき主要なる格助詞を省略せる場合と、その中間にあるべき體言（又その體言に附隨するものをも）を省略する場合と、その中間にあるべき用言（又その用言に附隨するものをも）を省略する

場合との三樣に分ちて說くべし。

主要なる格助詞を省略すとは格助詞「ヲ」を略するなり。例へば

昨日こそさなへ(ヲ)とりしか。

筆(ヲ)とりて字(ヲ)かく。

これらの例の「ヲ」といふ助詞は文法上重要なるものなるが故に、若しこれらを省略せばそのあと顯著にして誰人もその省略の行はれたるを認めうべければなり。

中間にあるべき體言(その體言に附屬するものをも含む)を省略するものには二樣の現象あり。第一は「ヲ」「ニ」に伴はるゝ補格の語を省略せるものにして次の如し。

余は少しも(それを)知らざりき。

人は(我を)誹るとも我は(人を)咎めず。

君は五郎を見しか。我昨日五郎に(あひたり。

これらはその補格は用言の性質よりして當然伴はれずばあるべからざるものにして、之を伴はぬ場合を見るときに、そこに必ず省略ありと端的に認識せらるべきものなるが故なり。こゝにも不合理とその痕迹との明かなるを見る。かゝる省略は日常の語には頻繁に行はるゝものなり。第二は連體格の語の存する場合にその連體格の語によりて裝定せらるべき體言を省略し去るものなり。その例

この歌は柿本人麿が（　）なり。（古今集）

前の守も今の（　）ももろともに下りて今のあるじも前の（　）も手とりかはしてゑひごとに心よげなることとして出でにけり。（土佐日記）

唐の（　）もやまとの（　）もかきけがし云々。（源、葵）

これらはその連體格の語が下に必ず、それに裝定せらるべき體言の存在を暗示するによる。こゝにもその形式の不合理と省略の痕迹との明かに示されてあるを見るべし。

中間にあるべき用言を省略するものには種々の現象あり。第一は格助詞の下に、用言を基としたる語のあるべきに、それが連體格に立つときその格助詞の下なる用言を省きて格助詞「の」につゞけて連體格とするものなり。例へば

東京への道。

といふ語ありとせよ。この場合の「へ」と「の」とはいづれも格助詞にして、しかも二者が相つゞきてあり。こゝに考ふるに、先づこの格助詞といふものは極めて嚴密なるものにして相犯すことはゆるされず、又重ねて用ゐるといふことも許されぬものなり。（「見てゐるのがよい」といふ如き「の」「甲と乙とが戰ふ」といふ如き「と」は別の場合なり。）然るに、こゝには相重ぬることの許されざる格助詞の相重なりてあるを

見る。これは明かに不合理なりと認めざるべからず。この不合理に見ゆる點が、こゝに省略の行はれてあるぞといふことを示す外形上の表象なり。即ち上の例を合理的なる形になほして見れば、

東京へ(行くべき)道。

といふやうなる語遣になるべきならむ。然るにこゝには上の例にいへる「の」が下にあらはれてはあらず。この場合は、その省略せられたるものが連體格の語なるが故に、それが連體格に立てるものなることを示す爲に「の」を以てそれを表示したるなり。即ちこれは上の格助詞「へ」といふものが、その下に「へ」に對應すべき動詞の存すべきことを示し、下の格助詞「の」はその上にある語が連體格に立ちてあるものなりといふことを示せるなり。かくてその省かれたる語は動詞にして、しかも連體格の語なるべきことを「へ」と「の」とによりて示してある道理なり、一般にかやうに上に格助詞あり、下に直ちに「の」の來れるものは上述の道理によりて、その中間に連體格の語の省略ありといふことをその不合理なる外形によりて示してあるものなり。その例次の如し。

子供へ(　)のみやげ。

支那と(　)の戰爭。

ねよと(　)の鐘。
友より(　)の贈物。
何より(　)の頂戴物。
長崎から(　)の手紙。
明日から(　)の爲事。
銀座で(　)の出來事。

第二は第一に似たる形のものにして、それら格助詞を「で」にて受けたるものなり。これは勿論口語のみの現象なるが、その關係は第一に似たるものなり。その例

これを(　)でございます。
これを私に(　)でございますか。
また京都の方へ(　)ですか。
それは何より(　)である。
雨の降るのは朝から(　)である。

これらの「で」はもとより格助詞の「で」なり。而してその上に又格助詞の直ちに接してあることは不合理の姿を呈せる道理なり。こゝに上の格助詞を受けてそれに相當する意味をあらはすべき用言が、その格助詞と「で」との間に存在すべき道理の

ものなりといふ事を示してあるなり。即ちこゝにも省略の行はれてあることは明かなり。第三は格助詞の下に或る用言を基としたる語のあるべきに、それをあらはさず、その格助詞を直ちに格助詞「と」にて受けたるものなり。たとへば、

東京へと出で立つ。

といふ語ありとせよ。こゝにも格助詞「へ」と「と」との二が重りてあるにより、不合理の形を見せてあるによりて、「へ」の下「と」の上に、或る語の省略せられてあるものなりといふことは考へらるゝものなるが、「と」が下にある場合は上の諸例に比べて、頗る廣汎に亙れるものなり。それはいかなる理由かといふに、「と」といふ助詞は種々の意義と用法とに立つが、そのうち省略上の問題になるべきものには二樣の意義と用法とあり。一は思想上の對象を示すものにして、上の例もそれなり。即ちそれは「出で立つ」所の目的を「と」にて示したるものなるが、それには

東京へ(行かむ)と出で立つ。

といふやうに、「へ」の下には相當の用言のあるべきなるが、それが省かれて、こゝに「へ」「と」の二が直ちに接して不合理の姿を見せてあるなり。この種類の省略の例は

有用の爲に(　)と貯蓄するなり。

私はこの品を(　)と思ひます。

山雀目白など聲高く鳴きて奥山より野邊へ（　）と出づ。
多分京都から（　）と考へます。
委しいことはあとで（　）といふことです。
などの如きものなり。他の一は引用の語句を示す場合にその「と」の上に或る種の省略の行はるゝ場合なり。その委しき說明は次に讓れり。第四は複語尾「て」を作ふ用言はその上なる語との關係よりしてそれの省略の明かに認めらるゝときはこれを省くこと多し。これにつきては上に既に委しくいへるが、それらの場合の
「とて」
「にて」
「くて」（形容詞を受くるもの）
（複語尾を受くるもの）
「かくて」（副詞を受くるもの）
「さて」（同上）
「とて」（同上）
「などて」（同上）
の如きみなこれなり。

さて又、上に述べたる種々の場合が、同時にあらはるゝことも往々あり。たとへば

この品を（　）と（　）の仰せでございます。

さらば（　）と（　）て立ちわかれゆく。

あすいり給はんと（　）て（　）の日は　（源氏、椎本）

の如きものその例なり。

次に又次の如き例あるを見る。

機關砲とは如何なる砲なるか。

この場合には「と」は格助詞「は」は係助詞なるが故に「と」と「は」とのつゞきは不合理には見えざる如し。されどその用法を見れば、この「機關砲と」といふ語は、主格に立ちてあり、かくてこれが主格の語なりといふこととなれば、こゝに不合理なるものなりといふことを示すことゝなるべし。これは

機關砲と（いふもの）は如何なる砲なるか。

といふ如く「と」の下に或る語が在りて、それが體言化すべき形をとりてある筈なることを示せり。かやうなる例は「とは」といふ形のみにあらずして「とも」の形の場合にもあらはる。その例

君いとわびしと思ひ給へりと（　）はおろかなり。（落窪）
まことにあさましうけしようなりと（　）もよのつねなり。（枕草子）
なほ上に既に第四十七章に述べたる希望喚體の句の中の省略せるものも亦こゝにいふ種類に屬すべきものなりとす。それは卽ち
かの君達を（　）がな。
かひがねをねこし山こしふく風を人にも（　）がもや、ことづてやらん。
世の中は常にも（　）がもな。
我宿の尾花がうへの白露をけたずて玉にぬくものにも（　）が。
もゝしきの人の心を枕とも（　）がな。
飛ぶが如くに都へも（　）がな。
の如く上の格助詞と下の終助詞との間に用言（及びそれに附隨するもの）の省略の行はれてあるものなりとす。
複文の中にありては中間にあるべき語を省略する場合あり、又ある句を省略する場合あり。先づ、その文中に數回繰り返して用ゐらるべき語は上下いづれかの句に一二をのこして他を省略することとあり。その重文に於ける例。
一重の櫻は散り、八重（の櫻）はうつろひぬ。

繪は巨勢のあふみ（かき）手は紀の貫之かけり。　（源氏繪合）

あし引の山時鳥（の聲もきこえざる）のみならず、大方鳥の聲もきこえず。

（後拾遺集）

その合文に於ける例。

馬は必ず人に乘らるべきものにて候へば、いかに猛き（馬）も人に從はぬ事や候ふべき。

正成兵庫に著きければ、新田左中將（正成に）對面し給ふ。

（鸚鵡に）他所の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。

その有屬文に於ける例。

げすの家に雪のふりたる、又（げすの家に）月のさし入りたるもいと口をし。

佐久間盛政柳が瀨にて中川清秀を討取りける時、秀吉長濱より一騎がけにて（柳が瀨に）來り、（佐久間盛政を）攻められたり。

複文の一種としての引用の語句を有する文に於いては、その引用せられたる句の述格の語の省略せらるゝこと少からず。

「和泉の國まで平かに（　）」と願ひ立つ。　（土佐日記）

鶯の「宿は（　）」ととはばいかゞこたへむ。　（拾遺集）

これらは「と」といふ格助詞にて受けたるものにして、その「と」助詞の上が格助詞、係助詞なるものなるが故になほ單文の場合の中略のものと略同じ現象を呈せり。嚴密に論ずれば「と」の上、「で」の上にある省略は大部分この種のものといふべきなり。而してこの類の中略は副助詞「など」の上にも往々行はる。さるは「など」が「と」と同じやうに引用の語句を導く性質を有するによる。

合文が引用せられたるときは、往々その後句を省き去ることあり。

「悲しといはずして讀者が內に自ら悲を起せば、（　）」なり。

「世の中にあらましかば（　）」と思ふ人なきが多くもなりにけるかな。

「いつしかいでさせ給はゞ（　）」などきこえさするに。

これらの例も亦「ば」といふ接續助詞にて後句の存すべきを示し、且つその下に「なり」「と」「など」といふ語の來れるにてその不合理のさまを明かに示せるを見るべし。

以上、略體につきての一般の現象を說きたるが、この現象の行はるべきその基礎たるものは實に、各の語の有する本性と用法とに存することいふまでもなく、而してそれを可能ならしめ、同時に又その省略の認識を確かならしむるものは實に語句の排列の方式にあり。この方式の上に一般の語の存立すべき正常の位置の認識あり、而してその語と語との連續の上にその本質よりして直ちに連續すべきか、

連續すべからざるかの認識の存するによりてこゝにこの省略の認識が正確に基礎を與へらるゝものなりとす。

最後にこの略體といふことにつきて注意すべきことあり。吾人がこれを說明せむが爲に語句の省略といふことをいへるはそれを文法學上合理的に說明せむとするよりいひ出でたることにして、事實上必ずしもかゝる手續を實際に行ひたりといふことにあらず。世には近視論者ありて一旦完全なる形の文をつくりて後省略せるものゝ如くに論ぜりとして語句の省略などいふことあるべきにあらずといふものあり。吾人のいふ所の語句の省略とは文法學上の理論上の事にして、實際上省略を行ひたりや如何といふこととの問題にあらず。たゞこれは理論上正しき道理にあてはむれば、存すべきものゝあらはれてあらぬときにこれを省略せりといふ。その省略は必ずしも一旦談話文章としてあらはしたるものを省略せりといふ義にあらず。もとより一旦談話文章としてあらはして後省略することも存すべし。文章の改删の場合の如きこれなり。されど、普通はその省略は談話文章としてあらはさゞる以前に既に心內に行はれたるものにして、談話文章としてははじめよりその省略ある形としてあらはるゝことを普通とす。なほ深く立ち入りていはゞ、この省略が心內に意識的に行はるゝことなく心にあらはれた

る時に既にさる省略したる形にて思惟せられそのまゝのものが談話文章となりたるものとしても、文法學上これを省略の行はれたりと論ずるに何の差支なき筈なり。或は又或る人がかくいひはじめたるものを後の人がそのまゝ學びていひたりとしても、之を省略として論ずるに妨なき筈なり。要するに、すべて理論上の問題にして道理上あらはるべき筈のものがあらはれぬときにそれを省略せられたる形なりといふに何の妨げあらざるべし。而して日常の談話文章は殆どすべて多少なりともこの省略の行はれたるものといふべきなれば、實地の談話文章を正しく理解せむには先づこの省略の原理と實際とに熟達せざるべからず。これに通ぜずしては文法學の知識は過半效力をあらはさゞるべし。世に文法學の不融通をかこつものは實にこゝにまで到達せざるによるものたること少からず。これ余が最後にこの省略を說き、しかもこれに多くの紙數を費せる所以なり。なほ又この省略が言語の變遷を促す著しき楔子となるものなれど、そは文法學の直接の問題にあらざるが故にこゝに筆を擱く。

日本文法學概論索引

ア

「あしし」 216
「あそこ」 130
「あそばず」 721
「あち」 130 131
「あちら」 131
「あなた」 130 636
「あの」 759 812
「あは」 814
「あひ」(相) 621 861—862
あゆひ 49 90 1023
あゆひ抄 49 292 940
「あり」(在) 150 185—189 199 213—214 270—272 721—722
形状(アリカタ)の詞 51 185
在状 185 186
孔(アリナ) 185 186
「ある」(口語) 271 272
「あるらう」 363
「あれ」 130

イ

「い」(終助詞) 514
「い」(接頭辭) 574
有属文 1061—1062 1065 1067—1068 1089—1099
——中の省略 1145
イ音便 220 266 359
意義を添ふる接頭辭 574—582
已然形 174—175 178 532 533 872
——(形容詞) 218
——(複語尾) 879
已然言 175 180
已然段 175
一元性の句 935 936 948
一段活用 162 163
一致關係(合同) 610—612
「いづかた」 132
「いづこ」 132
「いづち」 132
「いづら」 132
「いづれ」 130 132—133
「いで」(打消) 631
「犬」(文たる) 20—22 898 912

「往ぬ」 251 252
「いますかり」 273
「いまそかり」 272—273
印歐語 396
——族 123
引用の語句 428 462 639—641 1099—1105
引用せられたる句中の省略 1145

ウ

「う」(複語尾) 334—337
ウ音便 220 266 359
受　身 242—244 311 312 317 746—749
「うち」 621 861
打消(否說) 313 314 316 327—332
「うてる」 321
「うひ」 579
ウラルアルタイ語族 123 124 396
ヴント 918 927—929

エ

「え」(終助詞) 513
詠嘆の「なり」 710
詠嘆文 926
幼蟲狀の句(未開展の句) 915 918 1118
「えせ」 580
「得せしむ」 820—823
「焉」 382 384 385

オ

「お」(接頭辭) 576
「お靜かに」(句) 1129
落合直澄 236
「同じ如く」 704
「おのれ」 121 122 635
「おはさうず」 650
「おはす」 257—261
「お早う」(句) 1129
「おほ」 575
多くの語よりなる述格 1003—1004 1008—1009
——副詞よりなる修飾格 1005
——用言よりなる準體言 1001
————連體格 1002
大槻文彦(大槻博士) 49 57 293 900 942 943
「おほみ」 575
「おほん」 575
「おまへ」 130
「おみ」 576
「おみお」 576
「おん」 575
音便(形容詞) 219—220
——(動詞) 265—268

――(存在詞) 289
――(複語尾) 340 359 365
音調を添ふる接頭辭 572―574
和蘭語法解 53

カ

「か」(副助詞) 465―467
か(係助詞) 499
――の係 473
「か」(感動の終助詞) 510
「か」疑問の終助詞) 512
「か」(接頭辭) 573
「か」、接尾辭) 592
「が」(格助詞) 411―413 695 696
「が」(接續助詞) 537―539
「が」終助詞) 509
概念語 88―91
「號」 585
下行性の排列 1027―1028 1033―1035
「かゝり」(かくあり) 286―289 629
かゝり(係) 286―289 472―476 492
係詞 473 474 475
係助詞 401―403 404 472―508 697 713―715 803―804 974
係結 474―476
「かき」(掻) 621 861
カ行三段活用 155 164 255―256
カ行變格 165
下句(重文) 1069―1070 1077―1078
「かく」(副詞) 380 703 720
格 103 405
格助詞 103 403 404 405―438 446 447 665―666
――「ヲ」「ニ」の省略 1137
――と――との間の省略 1138―1142
「かくて」 795 796 1134―1135
掛詞 1133―1134
かざし 49 90 369 1023
かざし抄 49
「かし」 510―511
「かしこ」 130
「がた」 584
歌道秘藏錄 475 492
合體語 43―45 626―633
「かてる」 321
「かな」 510
「がな」(終) 509
――(間投) 530
「かなた」 130
「かの」 812
可能(能力) 311 312 318 320
「川」(文たる) 20―22

「がはし」 587—588
合成語 39—43 593—626
合同(關係、組織)(一致關係) 849—850 856 999—1001 1003 1014—1015 1061 1065
合文 1061—1064 1065—1067 1080—1089
——が引用せられたる時の省略 1146
——中の省略 1145
——の後句の省略 1146
——の副成分たる呼格 1088
合文的の關係にある文の集團 1108
代名言(カヘコトバ) 53
返狀(カヘン) 185
「がまし」 588
上一段活用 155 160 162 163 254—255
上二段活用 155 160—162 254—255

漢語 129 382—385 514 563 567 568 585
——より借用せる情態副詞 382
感詞(田中) 55
漢籍の訓讀 漢文の訓讀ヲミヨ)
間接引用 640—641 1102 1103—1104
間接作用 311 316
感嘆詞(中根) 56
間投詞 60 67—68
感動詞 48 54 57 67—70 367
間投助詞 400 404 517—530
感動體 928 931 955
感動の喚體 948 950—952 955—963
感動の喚體句 983 991—994
感動の對象 675—676 799
感動の副詞 370 374 391—392 561 1039
感動文 926
漢文の訓讀(漢籍の訓讀) 129 224 327

361 753 830
「から」(格助詞) 436—437
「から」(接續助詞) 544
「からし」 837
「がる」(接尾辭) 590
「彼」 127 130

(キ)

「き」(複語尾) 345—347 348—351 844
「き」(接頭辭) 577
希求段 178
幾活 157
記述の句 9.9
「著せしむ」 821—822
既然段 175
希望體 952
希望の喚體 948—950 952—954 962
希望の喚體句 983—984

――の中の省略　1144
希望の對象　676 799
希望の複語尾　313 338
「きみ」　130
近稱　130 131
禁制　873―874 885
――をあらはす方法　977
義門（東條義門ヲミヨ）
疑問句　927
疑問體　927 928 930―931 971 974―977 981 982 983 1018 1109
――の有屬文　1098
――の單文　1056 1058―1059
疑問文　925
客語　319 324 753―754
共通語　13
許容案（文法許容案ヲミヨ）

居體言　560

ク

句　26 902―904 907―924 933―935 1052 1055
一の―　916―917
―の運用　1051―1055
―の完備と不完備　919―924
―の修飾格　779 793 814 1046
―の類別　924
―の複雜なる構成　995―1019
「くいけれ」活用　220
久活　157
草野清民　900
鎖（繫辭）　71
「くしき」活用　56 155 156 209 214―215
屈折語　396
「くて」　1132―1134
句讀　904

「くは」（こは）　814
「くん」（君）　583
「くらゐ」（ぐらゐ）（副助詞）　470―472
黑川眞賴　181
黑澤翁滿　161 166
句論　24―26 548―550 892―896
――の範圍　892 907
回想をあらはす複語尾　313 314 338 345 351
廣日本文典　57 64 940 941―942
――別記　62 941 942
活語指南　180
活語斷續譜　180 182
活用　150―155
――（形容詞）　214―216
――（動詞）　226 244
――（存在詞）　271―272 275 277 279 280 286 288

——(複語尾) 297 299—302
——の種類 155—158
活用形 151 169 171 178—183
——(形容詞) 218—219
——(動詞) 248
——(存在詞)(活用ノ條ヲミヨ)
——(複語尾) 297 302—305
關係語 84—86 89 90 666—667 669
關係詞 62
關係代名詞 123 124 134
冠詞 59 60
喚體の有屬文 1098
喚體の下句 1077
喚體の句 688 936—963 983—994
——を前句とする合文 1080—1082
——を後句とする合文 1082

喚體の單文 1056
觀念語 84—86 89 90 666—668 669
觀念部の上行性 1034

ケ

「け」(接頭辭) 573
「け」(接尾辭) 587
「げ」(接尾辭、名) 587
「げ」(——、副) 594
敬語 114—118 206—207
——(形容詞) 221
——(動詞) 268—269
——(存在詞) 290—291
——(複語尾) 318—319 320 323—324
——動詞 701 721
——の複語尾 326
——の用言の轉用 659—662
繫辭(鎖) 71 91 677 678

係辭 677
形式體言 103—105
形式のみの副詞 406 409 411—412 701—702
形式用言 187—189 699—701 713 722 723—724
形狀言 71 207 208
敬稱 115—118 206—207
——(形容詞) 221
——(動詞) 268—269
——(存在詞) 290
形容言 53—54
形容詞 48 54 57 71 72 144 185 188 189—200 207—224 273 677
——(口語) 220 221
——(西洋流の) 55 56 60 70 71 72 144
——の語幹 770 874
——+「さ」 940 942 957 962
——に轉成するもの 561—565

——に命令形なきこと　218 219
——の形の複語尾　827 838
——の資格を有する熟語　619—620
——の資格を與ふる接尾辭　587—589
——の補格　730 734—737
——より複語尾の分出なきこと　296
形容詞句　1095
形容存在詞　273—275 289
——の命令形　274 275 872
形容代名詞　128
形容動詞　274
叫喚句　927
希求言　178 180
「けし」(接尾辭)　587

「けむ」　351
言語　1—14 19
言語學　14 15
言語四種論　50 185
謙稱　115 116 206 268—269 290—291
言文一致　9
「けらし」　837
「けり」　347—350 844
下略　1124 1125 1128—1129
「けれど」「けれども」　545—546

(コ)

「こ」(接頭辭)　578
「乎」　382 384 385
語　20—23 26
—の運用　670
——の方式　663—668 670
——論　546—553

—の單位　26—33
—の轉成　553—570
—の轉用　554 634—662
—の排列　1019—1050
——の一延長性　1021 1025—1026 1027—1035
—の叢り　31 45
—の類別　48—90
—の論　24 25 892—896
—の位置　1019—1020 1023
「ご」(接頭辭)　576—577
故意の排列　1020—1021
後句(合文)　1080
—に對する修飾格　1088
口語　9 12—14
——(形容詞)　220—221
——(動詞)　251 252 253 254—262

——（存在詞）　271—272　274—275　280—286
口語體の文　9
後詞（中根）　56　62
後置詞　62
呼格　102　669　671—677　685　798　935　936　937　978—980　981　982　983　1018—1019
——の位置　1047
語學階梯　52
語學自在　53　230—234
語學新書　53
語幹　35—36　40—42　152　152　153　154　156　557—558　561—564　566—568　570　958
——（形容詞の）　216—217
國語　5
國語學　14　15
語句引用の方式　640—641
語句の省略　1119　1147—1148

語句の排列　1125
——の方式　1146
國文　8
「こゝ」　130　637
「こゝの」（ニアル）　760
語根　34—37　153
「ございます」　291
「ごさんなれ」　632
「ござります」　290
「ござる」　290—291　701　715
「こし」「こしか」　346
語辭　51
「こそ」　473　497—498
——（希望）　498
——の特別の結　484—486
「こち」　130　131　637
「こちら」　131

言（コト）　52
「ごと」　224
「如し」　150　188　198　199—203　222—224　274　699　700　701　702—704
——の賓格　1035
言靈のしるべ　161　166
詞（コトバ）　52　185
詞通路　205　229—236
詞の玉緒　472　940
詞の玉橋　52　181
詞の八衢　158
詞の緒環　163
「こなた」　130　636
「この」　128　759　812
「こは」　814
語法指南　57
語尾　152　153　156　205

混合文 1107
權田直助 53 230 236
孤立語 396
「これ」 130
「これあり」 704
音雜活(コエマジリ) 157

(サ)

「さ」(副詞) 380 703 720
「さ」(終助詞) 516—517
「さ」(接頭辭) 572
「さ」(接尾辭) 586
再歸的提示語 1048—1049
再歸法の代名詞 1048—1050
「さう」(接尾辭) 593
雙聲 382—383
サ行三段活用 155 164 256—257 273
サ行變格 165

「さし」(差) 621 861
指示言(サシコトバ) 53—54
「さす」(複語尾) 322—324
「させる」(複語尾) 324—326
「させる」(動詞) 325
「ざつた」 328
「さて」 795 796 1134—1135
「さては」 796
「さぶ」(接尾辭) 591
挿入する文(他の文の中に) 1111
候文 117
「さへ」(副助詞) 450—452
――(係助詞) 502—504
狀 185
「さま」 582
形容言(サマコトバ) 53—54
「さん」 582

三段活用 164—166 316 320 322
三段落 906
「ざめり」 837
作用言 144 224—225
「ざらまし」 632
「さり」 286—289 629
「ざり」 327—328 629 824 825 828—829 835 840 841 844 845
「ざりき」 331
「ざりけむ」 831
「ざりける」(ぞありける) 632
「ざりけり」 831
「ざりけれ」 835
「ざりつ」 835
「ざるべからず」 835
「ざるべき」 835
「ざるらし」 835

「ざるらん」 835
「される」 322

し

「し」(複語尾) 345―346
「し」(間投助詞) 525―527
「し」(接續助詞) 542
「し」(接尾辭) 589
「爾」 382 384 385
「じ」(複語尾) 332
「じ」(接尾辭) 589
使役 311 312 323 326 746 750―753
「しか」(複語尾) 345―346
「しか」(副詞) 380 720
「しか」(係助詞) 506―508
「しが」「しがな」 986―987
詞考筆錄 236
「しかして」 795 796
「しかり」 286―289 629
志幾活 157
鋪狀 185
志久活 157
「しくしき」活用 155 156 209 214―216
思想 1 5 15 17
芝狀 185
指示代名詞 127 128
自稱(第一稱格) 125 127 129
自然勢 317―318
自他 229―245
實質體言 103 104
實質用言 187 189―200 677 698 727―730
「して」 629 655―658 753
自動詞 238―244 744―745
――の受身 748―749
支那語 396
「じみる」 591
「しむ」 326―327 753 820―823 841 844 845
人代名詞 127 128
「しも」 624 1110
下一段活用 155 162 163 252 253
下二段活用 155 159 160 252―253
上行性の排列 1027―1028 1029―1033 1034―1035 1037
上句(重文) 1069―1077
――の中の係助詞 1079
將然言 177 180
將然段 177
狀態性間接作用 312 315 317―319
情態の修飾格 777―779 781―788 1031
――の位置 1039―1040 1045
情態の副詞 373―374 378―386 702 706 710 711 712 718 720 730 731 781 782

——の補格 737—739
上略 1124 1125 1126—1128
「若」 382 384 385
修辭學 888—889
終止形 168—171 178 181 532 558 845
——(形容詞) 218 220
——(動詞) 248 249 251—252 253 254 256
——(複語尾) 302—304 833—834 876
——+「なり」 708—710
——より分出する複語尾 298 314—315 355—367
終止言 171 181
終止段 171
終助詞 401—403 404 508—517
終辭的の文結合 1112—1115
修飾格 669 773—794 810 813—814 815 862—870 884 1030—1031

——をつくる副助詞 444—446
——を介む連體格 1038
修飾句 1096
修飾語 774
修飾連用 785 848 857 858—862 884 1096
從屬組織(主從關係) 849 856
主格 433 669 688—697 698 700 799 811 908—912 914 925—927 931 933 935 957 963—964 966 968 980—983 1011 1012 1030—1031
——(受身の) 747
——の多く並び存するもの 1009
——の省略 981 982 1126—1128
——の位置 1041 1042—1043
主從關係(從屬組織) 610—612 1061 1067
主從組織の位格 1010—1012
主從複合 609—612 613 1089
熟語 594 595 608—626 627

——として見るべき助詞 622
述格 669 677—688 698—700 742 802—803 845—848 870—872 873—874 875 876 878 879 881—882 910—912 927 931 932 935 958 963—967 969 972—976 977 1035
——の省略(省略終止) 803 1128—1129
——の位置 1041 1042—1043
——の代りをなす賓格 724—726
述語 677 908—910 914
述體の句 935 937 963—994
——を感動喚體の句に轉換すること 991—993
——を希望喚體の句に轉換すること 984—989
——を後句とする合文 1081 1082 1083
——を前句とする合文 1080

1082—1084
述體の有屬文 1098
――の下句 1077—1078
――の單文 1056 1057—1060
準體句 1091—1092 1095
準體言 643—647 694 696 702 703 706 707 712 718 737 740 741 756 877 961
――(連體格) 768—770
――となりたる用言の補格 1043
主位 678—680 689
「如」 382 384 385
稱格 113—118 124
稱格指示 121 122 124
自用語 86—90
助詞 48 61 84—86 89 90 95 394—405
――の分類 398 404
――の位置 1030 1035
助辭 53 73—75
敍述句 927
敍述體 928 930—932
――の句 969 970 971
敍述文 925
助動詞 48 57 58 61 183 201—203 293—296
作用(シワザ)の詞 51 185

ス

「す」(動詞) 149 188 194 256—257 648—658 718—721
――(ありに通ずる) 652
――の賓格 1036
「す」(複語尾) 322—324
「す」(接頭辭) 578
「ず」 327
「ず」(とす) 649—651
數詞 48 105 133—143
――(連體格) 760
――の用法 815—817
――の性質を有する熟語 618—619
「ずけり」 832
「ずして」 657 1075
鈴木朗 49 50 180 185
「ずて」 630 832
「すは」 814
「ずもがな」 987
「すら」 450
「ずらむ」 653
推量の複語尾 313 314 355—367

セ

「ぜ」(終助詞) 515—516
聲音 1—6 8 15
靜辭 293

省略 1102
——の行はるゝ機緣 1120―1122
——機會 1123
——の行はれたる希望喚體 989―991 1144
——の痕跡の認識 1120―1121 1122―1124
——の動機 1120
——の認識 1122
省略終止(述格の省略) 803
小學日本文典 54
「せし」「せしか」 347
接辭 35 36 37 571―593
接續格 571―593 780 793―797 857 997 1000 1002 1004 1005 1019 1079
——を介む連體格 1038
接續言 53―54
接續詞 48 54 56 57 59 64―67 70 288 367 392 531
接續助詞 367 392 399 404 481―482 531―546 879―881 1065―1066 1069 1082
接續の述格 685
接續副詞 369 374 392―394 795 1039
——(西洋の) 66 367
截斷言 171 180
接頭語 571 572
接頭辭 36 572―582
說動用詞 185
接尾語 571 582
接尾辭 36 572 582―593
說明語 677
說明存在詞 278―286 385
——の命令形 279 873
說明體 971 972―974 981 983 1018 1109―1110
——の單文 1056―1058
說明文 935
說容體詞 185
「然」 383 384
先行の副詞 369 370―374
前句(合文) 1080
——と後句との關係 1084
——に對する修飾格 1087―1088
——の下に附する係助詞 481―483 1086
——の中にある係助詞 1086―1087
前置詞 50 59 61 63 67
全部と一部との同格 1010―1013
「せる」(複語尾) 324

ソ

「そ」(接頭辭) 573
「ぞ」(係助詞) 494―496
「ぞ」(口語、間投助詞) 527―528
總主 1012

「ぞかし」 511
促音の音便 267—268 577
屬性 91—94 146—148 184 187 189 191—193 211 378 387
——の運用を助くる複語尾 310—312 646 824—825 830 837 883 885
——の裝定をなす副詞 372 373—374
——の修飾格 774 776—777
續體段 172
「そこ」 130 637
「そち」 130 131 636
「そちら」 131
「そなた」 630 636
「その」 128 759 760 812
「ぞのや何」 473
存在詞 199—200 270—291 296 319 322 679 701 820
——の敬語 661—662
——を以てする疊語 601
「そも」「そも〳〵」 814
「それ」 130

(た)

「た」(複語尾) 352—355
「た」(接頭辭) 573
「だ」 189 283—284 289 701 716 726
體(義門) 51
體 87 98
「たい」(希望) 339—340
「第」 581
第一稱格(第一人稱、自稱) 113 114 115 120 124 125 126 127 129
第一人稱(第一稱格ニオナジ)
——の句 968 978 979 981
體言 49 53 73—75 88 89 91 92 93 95 97—105 562 566—567 673—674 694 696 702 706 711 712 718 725 726 740 756 1031—1032
——(連體格) 756 761—762
——の省略 1137—1138
——の用法 797—817
——の位置 1024—1025
——を以てする疊語 597—598
——を以てする位格の中に語の數多きもの 996—1001
——の裝定をなす副詞 370—371
——の取扱をうくるもの 637—647
第三稱格(第三人稱、他稱) 113 114 118 120 124 125 126 127 130 675—676
第三人稱(第三稱格ニオナジ)
——の句 968 979 982—983
對稱(第二稱格) 125 127 129
——の敬稱 116—118
(文語口語)對照語法 197

第二稱格（第二人稱、對稱） 113 114 117 120 124 125 126 127 129 675
第二人稱（第二稱格ニオナジ）
——の句 968 978 980—982
體の詞 51
代名詞 48 54 55 56 57 59 105 119—135 811—814
——（連體格） 757—760
——の資格を有する熟語 617—618
——の稱格の轉換 635—637
——の數 134
——の性 134
代名言 53
對話の句 979
當然の排列 1020—1021 1031
「たかつた」 340
「たからう」 340

「たかり」 339 340
「だけ」 467—470
「たし」 338—339
他稱（第三稱格） 125 127 130
「徒（ダ）」 473—474 475
「たち」（立） 861
「たち」（接尾辭） 584
「たつ」（接尾辭） 590
他動詞 238—244 744—745
田中義廉 49 54
「だに」 448—450
玉の緒延約 940
玉の緒繰分 51
段 158 168
單語 19 22 26 27 29—40 46—48
——の分類法 48—75 78—83
單文 905 908 909 910 1051—1052 1055—1060

——にあらはるゝ省略 1124—1144
——の集合體 905—906 916 918
——の用法 1056—1060
——を多く集めたる文 1051 1053—1054
單位 29
「ためり」 837
「だも」 633
「たり」（說明存在詞） 202 278—280 386 701 711—712 841 843 844
——の賓格 1036
「たり」（複語尾） 344—345 348
「たるべし」 835
「たるまじき」 836
「たるらむ」 835
「誰」 137 130 132—133

㋠

中止の述格 685 686 846—847

抽出的提示語 1049—1050
中稱 130 131
重文 1051 1061—1063 1064 1067 1069—1080 1097—1098
——中の省略 1144
——の修飾格 1078—1079
重文的の關係にある文の集團 1108
中略 1124 1125 1130—1144
陳述 677—681
——の作用 148—150
——のし方の複語尾 310 313—315
——の力 95 184 200—201
——の修飾 774—776
——の修飾格 788—790 1031 1041
——を確むる複語尾 313—314 338 340—345
陳述句 1093—1094

陳述語 88—91
陳述の副詞 372—374 388—391 788—790
陳述部の下行性 1034
「ぢや」 284 289
定稱 130
チュラニアン語族 123
直感的の判定 915 918 1118
直接引用 640 1101 1102—1103

㋡

「つ」 340—342 343—344 348
虚體言(ツキコトバ)(鶴峯の) 53—54
「つきせず」 724
「つつ」 602—607
連體言(ツヾキコトバ)(鶴峯の) 53
接續言(ツヾケコトバ)(鶴峯の) 53—54
鶴峯戊申 49 53
對句 1107

㋢

「て」 341—342 351—352 1076—1077 1079
——の上の省略 1130—1136 1142
「で」 437—438 712 715 832 1073
——の上の省略 1140
「で」(ずして) 630 1075
「である」 712—713 726
提示語 1047—1050
程度の修飾格 777—779 790—793 1033
——の位置 1040 1045
程度の副詞 374 386—388 790
「てき」 832
「てけむ」 832
「てけり」 832
「でして」 1073
「です」 198 285—286 701 716—718 726
「でない」 713—714

辭(テニハ)(富樫の) 52
弖爾乎波 49 57 63 67 70 84 395
テニヲハ(鈴木の) 51
でにをは係辭辨 473 940 941
疊語 594 595—608 611 627
疊字 382 383 384
疊韻 382 383
「でも」係助詞 504—505
「でも」(接頭辭) 580
轉音 612 613
顚倒(位置の顚倒ヲミヨ)
——(重文の句の) 1079
點例 904

と

「と」(副詞) 380 720
「と」、格助詞) 374—379 381 382 423—431 720
——の上の省略 1141—1142 1146
「と」(接續助詞) 534—536 542—543
「ど」接續助詞) 536—537
「等」 585
統一(統覺)作用 94—95
統覺作用 901 916—918
統覺の運用を助くる複語尾 824—825 837 884
同格語 1013—1014
同格複言 609—612 613
同格連用 785 794 848—858 883 884 1001 1002 1003 1008
動作存在詞 275—278 818
——の命令形 277 873
動詞 48 55 56 57 59 71 72 144 145 185 188 189—200 224—269 296 315—319 322 565—569 677
——に轉成するもの 560—569
——の敬語 659—661
——の資格を與ふる接尾辭 589—591
——の性質を有する熟語 620—621
——の補格 732—733
——を以てする疊語 599—602
動辭 292 293
東條義門 51 180 292
同位格 1009—1015
富樫廣蔭 49 52 73 181 185 293
特別の形の複語尾 828 838
獨立提示語 1048—1049
「どこ」 132—133
「ところが」 538—539
「として」 657 1073
「とす」 653—655
「どちら」 132—133
「どつち」 132
「とて」 342 1130—1131 1134—1136

「どなた」 132
「どの」(代) 812
「どの」(殿) 583
「とは」 1104
「とは」(といふは) 1102 1104 1143—1144
「どん」 583
「とも」(と＋も) 430
「とも」(接續助詞) 534—536
「とも」(終助詞) 515
「とも」(省略ある) 1143—1144
「ども」(接續助詞) 536—537
「ども」(接尾辭) 584
「ともがな」 990—991 1144
「とり」(取) 861
「どれ」 132

（ナ）

名（ナ） 49
「な」(說明存在詞) 282—283
「な」(係助詞) 500—502
「な」(終助詞、感動) 511—512
「な」(終助詞、希望) 513—514
「ない」(非) 330—332 701
「ない」(複語尾) 328—332
「なかつた」(複語尾) 329
中二段 161
中根淑 49 56
「ながら」 593
「なからう」(複語尾) 329
奈行變格活用 155 166 167 179—180 248 251—252
奈行四段 252
感動言（ナゲキコトバ）(鶴峯) 53—54
「無し」 210 211 213—214 721 722
「なぞ」の格 500
「なだけです」 717
「など」(副助詞) 458—463
——の上の省略 1146
「などて」 1134—1136
「なに」 130 132—133
「何しに」 645 647
「何せむに」 647
「何」の係 473
「なふ」(接尾辭) 590
「なむ」(係助詞) 496—497
——(希望) 496
「なんだ」(複語尾) 330
「汝」 129
「ならし」 837
奈良朝以前の語法 224
「なり」 150 202 271 278—283 386 652 679 699 700 701 706—711 725

——（口語） 280—283
——の賓格 1036
——（ニ在ル） 286 629

㊁

「に」（格助詞） 374—378 379 381 382 398 415—423 430—431 432
——（上句の述格） 1072
——に通ふ「を」 415
「に」（接續助詞） 539—540
「にき」 832
「にけむ」 832
二元性の句 935 964
「にけり」 832
「にして」 657 1072
「似せしむ」 821—822
二段 316 322
二段落 906
「にたり」 832
「にて」 342 658—659 1072 1131—1132
「にて」（複語尾） 832
「にひ」 579
日本文典（中根） 56
人稱 113 125 127
人稱代名詞 124
「にもが」 1144
「にもがな」 990—991 1144

㋦

「ぬ」 342—344 348

㋧

「ね」 529—530
粘着語 396
「殆る」 253

㋨

「の」 370—371 374 375 379 380 406—411 695—696
——（體言を代表する） 407—408
——（の如き） 408
——の上の省略 1138—1140
能力（可能） 311 312 318 320
「のに」 542
「のみ」 452—453

㋩

「は」 486—492 691—692 697 713
「ば」（接續助詞） 533—534
——の下の省略 1146
——の下に附する係助詞 481—483 1086
排列の終 1026 1033
方言 12
芳賀矢一 909
「ばかり」 453—455
萩原廣道 473—474

「ばこそ」 625
「ばし」 622
「はたらき」 95 150
働き掛 242—244 744
活用言(ハタラキコトバ)(鶴峯) 53—54
はたらき詞 95
はたらくてにをは 292
八品詞(西洋) 58—61
「はつ」 579
撥音便(「ン」の音便) 266—267 579
發動性間接作用 312 315 323—327
「侍り」 272—273
「ばや」 625
林圀雄 163
「ばむ」(接尾辭) 590
「番」 585
反語 1059
反射指示 121
「はも徒」 473
「ばら」(接尾辭) 584

ヒ

「ひ」(接頭辭) 574
否說(打消) 313 314 316 327—332
必然の排列 1020—1021
賓格 386 669 678—680 682 689—694 698—727 731—732 800—803 812 815 910—911 933 935 963—964 969 970 973 976 1008—1009 1030—1031
——につく「は」 484
——の位置 1035—1036
——のみにての上句の述格 1073

フ

「ふ」(接頭辭、打消) 580
「ふ」(接頭辭、不可) 581
「ぶ」(接頭辭、打消) 581
「ぶ」(接頭辭、不可) 581
「ぶ」(上二段活用接尾辭) 591
副格 1010—1012
複合の方式 609—612
複語尾 183 202—205 227 230 262—265 289 291—315 316—367 818—845 875—886
——運用の根本原則 825
——に於ける疊語 602—607
——の分類 298 308
——の本質 293 296 297 305
——の連結 837—845
——の位置 1023 1033—1034
——より複語尾の分出 306—308
823—837
複雜なる合文 1085
副詞 48 55 56 57 59 70 89 90 92 93 95 278 283 367—394 562 565 567 569 756 780—782

――（連體格） 771―773
――に轉成するもの 569―570
――の資格を與ふる接辭 591―593
――の性質を有する熟語 621―622
――の用法 886―887
――の位置 1023
――を以てする疊語 607―608
副詞句 1065―1066 1096
副主格 1093 1010―1012
――を有する句の重文 1078
――の合文 1087
副助詞 403―404 439―472 483―484 697 706 708 712 714 715 716 717 761 785―786 800 804
複文 905 906―907 1051 1052 1053 1054―1055 1060―1069
――にあらはるゝ省略 1144―1145
――の複雜なるもの 1105―1107
副補格 1010―1012

副用語 86―90
不完全なる副詞 406 409 411―412 701―702
附屬句 1067―1068 1089―1098
――の位置 1099
――の關係にある單文 1111
富士谷成章 49 180 185 292 368 456 1023
富士谷御杖 415
藤林泰介 85
不定稱 130―134
物主代名詞 128
文 19―23 899―902 904―907 912―914 1051―1055
文語 9 11
分詞 59 60 72
文章 8
文章論 548―550
文法 17 299
文法學 15―18 19 23―26 888―891 907

――の極根 1112
文法許容案 770 820
「ぶる」 590

（へ）

「へ」 432―433
「べい」 359―360
並立（列）關係 610―612 1061 1064
並立（列）組織（前ニオナジ） 844―850
――の位格 1012
標準語 13
「べかめり」 837
「べから」 841
「べからざらしめたり」 845
「べからず」 360―361
「べかり」 360 840 843 844 845
「べかりき」 833

「べかりける」 833
「べかるらむ」 837
「べけむ」 829—830
「べし」 358—359
變格 187
變格の活用 166 167 316 322
「へもがな」 990—991 1144
「綜る」 253

ホ

「ほか」(係助詞) 506—508
補格 669 727—743 767 803 848 857 1011 1012 1030—1031
——(形容詞の) 734—737
——(副詞の) 737—739
——の省略 1137
——の多く並び存するもの 1010
——の位置 1037—1038 1042 1043 1044
「僕」 129

補語 728
發語 574
堀秀成 52

マ

「ま」(接頭辭) 577
「まい」(複語尾) 366—367
枚擧 998—1001 1004
「まからず」 651
「まし」 337
「まじ」 365—367
「まじかめり」 837
「まじかり」 366
「まじかりし」 833
「まします」 721
「まで」 456—458
「まま」 726
「まれ」(もあれ) 631

「申す」 721

ミ

「み」(接頭辭、音調の) 573
「み」(接頭辭、意義の) 574
「み」(接尾辭) 586
未開展の句(幼蟲狀の句ヲモミヨ) 1115 1116—1118
「見せしむ」 821—822
未然形 175—177 178 532 845
——(形容詞) 218 219
——(動詞) 248 249 251 252 254 256 261
——(複語尾) 829 880
——より分出する複語尾 298 312 315 316—337
未然段 177
「みづから」 121
民族心理學 918 927

ム

「む」(複語尾) 332—334
「む」(接頭辭) 580—581
結 476 492
「ン」の音便(撥音便) 266—267 579

メ

「め」(接尾辭、卑め) 583
「め」(接尾辭、順序) 585
名詞 48 55 56 57 59 60 65 104 106—108 278—282 563 568 569—570 800—810
——(連體格) 756—757
——に轉成するもの 556—561
——の資格を與ふる接尾辭 586—557
——の資格を有する熟語 614—617
——の數 112
——の性 108—112
名詞句 1092
命題 933 935 963
明治文典 909
命令形 177—178 248—250 872—873
——(複語尾) 302—303 885
——なきこと(形容詞) 218—219
命令體 931—932
——の有屬文 1099
——の句 969—971 977—978 981 982 1018
——の單文 1056 1059—1060 1109—1110
命令文 926
「めかし」 587
「めかす」 589
「めく」 589
「めり」 361
「めりき」 833
「めりつ」 833

モ

「も」(係助詞) 493—494 697 1009 1010
「も」(接續助詞) 544—545
「もが」「もがな」 985 987
目的格 242—244
目的準體言 645—646 740 741 742 848
——の補格 1044
「もこそ」 623
「もしは」 796—797
「もぞ」 623
本居宣長 472—474
本居春庭 158 205 229 292
「ものす」 648
「ものの」 410 1072
「ものはあれ」 705
「ものを」 541—542 1082

文字 6—8 15

ヤ

「や」(係助詞) 498
「や」(間投助詞) 522—525
「やか」 592
約結命題 1062 1066
「やら」 463—465 726

ユ

融合語 43—45 48 629

ヨ

「よ」(間投助詞) 518—521
用(義門) 51
用 97 145—146
「よう」(複語尾) 334—337
用言 49 53 73—75 88—95 143—207 681 682 719 1030—1031 1033
——(連體格) 756 761 762—768
——が體言の資格を得る段階 641—643
——に於ける轉用 647—662
——の稱格 206
——の數 206
——の省略 1130—1136 1138—1144
——の分類 183—201
——の用法 817—886
——の位置 1024—1025
——を以てする疊語 598—602
——を以てする位格の中に語の數多きもの 1001—1004
豫想 313 314 316
餘情終止 871
餘情の述格 687
吉岡郷甫 107
裝 49 185
裝圖 180
四段活用 155 157 158 249—251 278 316 319 320 322
「より」 433—436
「より外」 435

ラ

「ら」(等) 583—584
「ら」(接尾辭、副詞) 592
「らう」 362—363
ラ行變格活用 155 166 167
——の形の複語尾 826 838
「らし」(複語尾) 363
「らし」(接尾辭) 588
「らしい」(複語尾) 363—364
「らしい」(接尾辭) 364 588—589
「らしかつた」(複語尾) 365
「らむ」 362
「らる」 316—320

「られる」 320―322

(リ)

離接 999―1001 1004 1008
兩處連鎖語 1112―1113
略體の文 1115 1118―1148

(ル)

「る」 316―320

(レ)

了解作用 910―912 930 933
連歌 97
連語 45―46 897―898
連體格 669 753―773 804―810 811 813 815 816 870 875 877 937―940 941 943 944 947―950 952 954 956―960 1031―1032
――に立てる準體句 1095
――に用ゐられたる用言の補格 1043
――の並存 1015―1017
――の位置 1038―1039 1046
連體句 1094―1095
連體形 171―172 178 181 532 533 834―836 870―871
――(形容詞の) 218 221
――(複語尾) 877
――より分出する複語尾 298 314―315 355―367
連體言(鶴峯の) 53
連體言 172 180
連體語 754
連體段 172
連濁音 594―595 612 613 650
連用形 172―174 178 533 558―561 564 570 846―870 1064 1069
――(形容詞) 218
――(複語尾) 829―833 881―885
――より分出する複語尾 298 313 314―315 337―355
連用言 174 180 784―785 848―862 881 882―885
連用段 174
連絡提示語 1049―1050
「れる」 320―321

(ロ)

「ろ」(終助詞) 514―515
論理學 889―891

(ワ)

倭訓栞 145
事(ワザ) 185
和字正濫鈔 145
「わたくし」 129
「われ」 129

(ヰ)

位格 62 668―671

――一のうちに語の數多きもの 996―1009
――(同一の)の數多きもの 996
實體言(キコトバ)(鶴峯の) 53
位置(引用の語句の) 1105
――(合文の句の) 1089
――(重文の句の) 1079

――(附屬句の) 1099
――の顚倒 1042―1043 1045 1046 1047 1049 1089 1099 1105

㋓

遠稱 130 131
遠心性 排列上の) 1034

㋾

「を」(格助詞) 398 413―415
「を」(接續助詞) 540―541
「を」(接頭辭) 578
岡田正美 900
「をがな」 990―991 1141
「をば」 633
「をや」 626
「をり」 272

日本文法學概論奥付

定價 金七圓五拾錢

昭和十一年五月一日印刷
昭和十一年五月五日發行

不許複製

著作者 山田孝雄

發行者 東京市日本橋區室町四丁目五番地八
株式會社 寶文館
代表者 大葉久治

印刷者 東京市麹町區紀尾井町三番地
濱野英太郎

發行所 東京市日本橋區室町四丁目
振替口座東京二八〇番
株式會社 寶文館

關西專賣 大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番
株式會社 大阪寶文館

東京印刷株式會社麹町出張所印刷